

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書XVI

山口遺跡Ⅱ 第2・3次調査

2020

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道 49 号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 XVI

^{やま} ^{ぐち}
山口遺跡Ⅱ 第2・3次調査

2020

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路です。また、同路線は沿線市町村と新潟市を結び、日常生活や地域経済を支える重要な基盤道路としての役割を果たしています。

しかし、現道は阿賀野市街地での幅員減少等の問題を抱え、近年の著しい交通量の増加に十分対応できておりません。その結果、交通混雑、交通騒音、交通事故の増加等、生活環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長 13.7km の阿賀野バイパスの建設が計画されました。同バイパスは、安全で円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと大いに期待されています。

本書は、阿賀野バイパスの建設に先立ち、平成 22・25 年度に実施した山口遺跡の第 2・3 次発掘調査報告書です。調査の結果、古代（9 世紀前半）と中世（13 世紀後半から 14 世紀前半）を中心とした遺跡であることがわかりました。古代の頃は、地方の有力者や官人の関与が想定され、短期間ではありますが穀類に關係した倉庫群を有していた可能性があります。また県内で初めて出土した唐三彩は、遣唐使に關係する人物によってもたらされた可能性が高く、貴重な資料として注目されます。中世の頃は一般の集落と考えられますが、集落の境を把握することができ、居住域を中心とした低地における土地利用のあり方をうかがうことができます。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、そして、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2020（令和 2）年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 稲 荷 善 之

例 言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する山口遺跡の第2・3次発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委の依頼を受けた公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が2010・2013年度に実施した。発掘作業、整理作業及び関連諸工事等の一部業務は株式会社帆刈組（2010年度）・株式会社ノガミ（2013年度）に委託した。発掘調査面積は延べ16,652m²である。
- 4 出土品及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 出土遺物には、原則として調査年度と遺跡の略称を合わせた「10（13）ヤマグ」に続けて通し番号を付した。
- 6 遺構図版に付した方位記号の北は、国家座標体系の座標北を示す。
- 7 遺跡の土層及び出土遺物の色調は、『新版標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所2004〕に基づき記述した。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、VI章を除き巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』、広報誌『埋文にいがた』、遺跡調査報告会、現地説明会等で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボ、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を第VI章に掲載した。
- 12 唐三彩の鑑定は、巽淳一郎氏（京都橋大学、平成22年度）に依頼した。また森川実氏・城倉正祥氏（以上、奈良文化財研究所、平成22年度）から御教示を、亀井明徳氏（専修大学名誉教授、平成25年度）からコメントをいただいた。
- 13 和説については、浅井勝利氏、山本哲也氏、前嶋敏氏（以上、新潟県立歴史博物館）、戸根与八郎氏（株式会社ノガミ）から御教示を賜った。
- 14 本書の執筆は、石川智紀・荒川隆史（以上、埋文事業団）、村上章久（株式会社帆刈組）、金内 元・秋山泰利（以上、株式会社ノガミ）、伊藤 茂・尾等大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久・小林克也・竹原弘展・森 将志・米田恭子（以上、株式会社パレオ・ラボ）、千葉博俊・齊藤崇人・芝口 怜・高橋 敦（以上、バリノ・サーヴェイ株式会社）があたり、編集は石川智紀が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第I章：石川・村上
第II章：既刊報告書から抜粋。執筆分担は第II章冒頭に記載。
第III章：村上
第IV章1：石川、2A～C：村上、2D～F：石川・村上・金内・秋山、2G：金内、3A：荒川、3B：石川・金内・秋山、3C：荒川、3D：石川・荒川・金内・秋山、3E～I：石川・村上・金内・秋山、4A：荒川、4B：石川
第V章1A～D・F：村上、1E：石川、2A～E：石川、2F：荒川、3A：荒川、3B：石川・荒川、3C：石川・村上
第VI章：本文中の各分析項目に記載。
第VII章：石川
- 15 遺構・遺物図（一部）のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 16 図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう。）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 17 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）
阿賀野市教育委員会 阿賀野市土地改良区 伊藤武士 小林昌二 坂井秀弥 笹沢正史

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 試掘調査(2007年度)	2
B 本発掘調査(第2次調査、2010年度)	2
C 確認調査(2011年度)	4
D 確認調査(2012年度)	5
E 本発掘調査(第3次調査、2013年度)	5
F 整理作業(2018年度)	7
G 調査・整理の体制	8
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10
A 古代	10
B 中世	14
1) 略 史	14
2) 白河荘の中世遺跡	15
第Ⅲ章 調査の概要	20
1 グリッドの設定	20
2 基本層序	20
第Ⅳ章 遺 構	24
1 記述の方法と遺構の分類	24
A 基本方針	24
B 遺構の表記方法	24
C 遺構の記述	24
D 掘立柱建物	24
2 中世の遺構	25
A 概 要	25
B 掘立柱建物	26
C 井 戸	28
D 土 坑	31
E 性格不明遺構	32
F 溝	32
G 溜池状遺構	36
3 古代の遺構	37
A 竪穴建物	37
B 掘立柱建物	37

C	櫛・材木列塚	45
D	井戸	46
E	土坑	50
F	焼土遺構	58
G	性格不明遺構	59
H	溝	61
I	ピット	65
4	縄文・弥生時代の遺構	65
A	弥生時代の竪穴建物	65
B	縄文時代の土器集中範囲	65
第V章 遺物 66		
1	中世の遺物	66
A	概要	66
B	土器・陶磁器	66
C	土製品	67
D	石製品	67
E	金属製品・鍛冶滓	67
F	木製品	68
2	古代の遺物	68
A	概要	68
B	土器類	68
1)	竪穴建物	72
2)	掘立柱建物	73
3)	井戸	73
4)	土坑	73
5)	焼土遺構	76
6)	溝	76
7)	性格不明遺構	77
8)	ピット	77
9)	古代以外の遺構出土及び包含層等出土遺物	77
B	唐三彩	79
C	土製品	80
D	石製品	80
E	金属製品・鍛冶滓	80
F	木製品	81
3	その他の時代	81
A	弥生土器	81
B	縄文土器	82
C	石器	82
第VI章 自然科学分析 83		
1	2010年度の自然科学分析	83
A	山口遺跡のAMS法による放射性炭素年代測定	83
1)	はじめに	83
2)	試料と方法	83
3)	結果	84
4)	考察	86
B	山口遺跡出土木材の樹種同定	86
1)	はじめに	86
2)	試料と方法	87
3)	結果	87
4)	考察	88

C	茶臼の石材分析	90
1)	はじめに	90
2)	試料と分析方法	90
3)	結 果	90
4)	おわりに	91
D	山口遺跡出土和鏡の蛍光 X 線分析	92
1)	はじめに	92
2)	試料と方法	92
3)	結 果	92
4)	考 察	92
5)	おわりに	95
E	山口遺跡の花粉分析と微粒炭分析	95
1)	はじめに	95
2)	試料と方法	95
3)	結 果	97
4)	考 察	97
F	山口遺跡の植物珪酸体	98
1)	はじめに	98
2)	試料と方法	98
3)	観察の結果	99
4)	考 察	100
2	2013 年度の自然科学分析	101
A	放射性炭素年代測定	101
1)	試 料	101
2)	分析 方法	102
3)	結果及び考察	102
B	樹 種 同 定	103
1)	試 料	103
2)	分析 方法	103
3)	結 果	103
4)	考 察	104
C	土壌理化学分析	104
1)	分析目的及び試料	104
2)	分析 方法	105
3)	結 果	107
4)	考 察	109

第Ⅶ章 ま と め

1	中世の様相	111
2	古代の様相	113
A	唐三彩について	113
B	材木列塚の調査について	115
C	掘立柱建物群を中心とした古代の様相	119

《引用・参考文献》 122

《観 察 表》 125

挿 図 目 次

第 1 図	阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	1	第 24 図	山口遺跡出土木製品の光顕微鏡写真	88
第 2 図	試掘トレンチ位置図	3	第 25 図	P2347 から出土した茶臼と表面の 実体顕微鏡写真	91
第 3 図	覚書に基づく本発掘調査対象範囲	3	第 26 図	和鏡の蛍光 X 線分析結果 (鏡背)	93
第 4 図	周辺の自然地形と古代の遺跡分布図	12	第 27 図	和鏡の蛍光 X 線分析結果 (鏡面)	94
第 5 図	周辺の中世遺跡分布	16	第 28 図	試料 1g 中の微粒炭数 (個)	97
第 6 図	白河荘の区分	17	第 29 図	山口遺跡から産出した花粉化石及び プレハラートの産出状況	97
第 7 図	グリッド設定図	20	第 30 図	山口遺跡の植物珪酸体分布図	99
第 8 図	下層試掘調査の位置図	22	第 31 図	山口遺跡の植物珪酸体	100
第 9 図	下層試掘調査の柱状図	22	第 32 図	炭化材	104
第 10 図	基本層序と柱状図	23	第 33 図	試料採取位置	106
第 11 図	遺構の平面・断面形態の分類	25	第 34 図	基本土層における土壌密度と全炭素量	109
第 12 図	遺構埋土の堆積形状の分類	25	第 35 図	柱穴及び柱痕埋土における土壌密度と 全炭素量	109
第 13 図	掘立柱建物の計測位置	25	第 36 図	SD2-6 トレンチ西面における土壌密度と 全炭素量	110
第 14 図	井戸の規模	28	第 37 図	山口遺跡の中世集落構造	112
第 15 図	山口遺跡出土和鏡の部位名称と意匠	67	第 38 図	本調査範囲と 2011・2012 年度 確認調査検出遺構	117
第 16 図	須恵器・土師器の重量分布図	69	第 39 図	古代の遺構と材木列層 (推定) の 位置関係	118
第 17 図	古代の土器の分類と調整痕跡など	70	第 40 図	掘立柱建物の軸方向 (長軸・短軸)	119
第 18 図	須恵器有台杯の口径及び器高指数	71	第 41 図	掘立柱建物の変遷	120
第 19 図	須恵器無台杯の口径及び底径指数	71			
第 20 図	年代測定を行った木材試料と測定位置	83			
第 21 図	井戸 SE2510 の構築材 (240) の ウィグルマッチング結果	85			
第 22 図	井戸 SE2292 から出土した自然木 (65) の ウィグルマッチング結果	85			
第 23 図	井戸 SE2510 内から出土した自然木 (報告外) の暦年校正結果	85			

表 目 次

第 1 表	周辺の古代遺跡一覧表	13	付第 9 表	山口遺跡出土木材の樹種同定結果一覧	87
第 2 表	周辺の中世遺跡一覧	17	第 10 表	山口遺跡出土木材と木取り	88
第 3 表	中世の柱穴埋土の分類	26	第 11 表	茶臼とその詳細	90
第 4 表	ウィグルマッチング測定試料及び処理	83	第 12 表	岩石表面の蛍光 X 線分析結果	91
第 5 表	SE2510 内自然木の詳細と処理	83	第 13 表	半定量分析結果	92
第 6 表	SE2510 内北横機 (240) の 放射性炭素年代測定、暦年校正、 ウィグルマッチングの結果	84	第 14 表	分析試料の層位、土質一覧表	96
第 7 表	SE2292 内自然木 (65) の 放射性炭素年代測定、暦年校正、 ウィグルマッチングの結果	84	第 15 表	産出花粉化石一覧表	96
第 8 表	SE2510 内自然木 (報告外) の 放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果	84	第 16 表	各試料の計量値と 1g 中の微粒炭数	97
第 9 表	山口遺跡出土木材の樹種同定結果	87	第 17 表	試料 1g あたりの植物珪酸体個数	99
			第 18 表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	103
			第 19 表	樹種同定結果	103
			第 20 表	土壌理化学分析結果	108
			第 21 表	彩釉陶器出土遺跡一覧 (1)	113
			第 21 表	彩釉陶器出土遺跡一覧 (2)	114
			第 22 表	掘立柱建物の形態と掘形形状	119

図版目次

【図面図版】

- 図版 1 中世遺構全体図 (1)
 図版 2 中世遺構全体図 (2)
 図版 3 中世遺構分割図 (1)
 図版 4 中世遺構分割図 (2)
 図版 5 中世遺構分割図 (3)
 図版 6 中世遺構分割図 (4)
 図版 7 中世遺構分割図 (5)
 図版 8 中世遺構分割図 (6)
 図版 9 中世遺構分割図 (7)
 図版 10 中世遺構分割図 (8)
 図版 11 中世遺構個別図 (1) SB1 ~ 3
 図版 12 中世遺構個別図 (2) SB4 ~ 9
 図版 13 中世遺構個別図 (3) SB10 ~ 15
 図版 14 中世遺構個別図 (4) 井戸 (1) SE1701・1703・1704・1934・2044
 図版 15 中世遺構個別図 (5) 井戸 (2) SE1976・2064・2065・2173・2176
 図版 16 中世遺構個別図 (6) 井戸 (3) SE2174・2256・2268・2270・2301
 図版 17 中世遺構個別図 (7) 井戸 (4) SE2292・2348
 図版 18 中世遺構個別図 (8) 井戸 (5) SE2389・2390・2391・2444・2523
 図版 19 中世遺構個別図 (9) 井戸 (6)・土坑
 SE2535・2555, SK1700・1717・1810・1966・2043・2089・2254・2262・2276・2291・2529, P2286
 図版 20 中世遺構個別図 (10) 溝 (1) SD1031・1702・1763・1764・2063・2066・2067・2075・2144・2210・2299, SK1811
 図版 21 中世遺構個別図 (11) 溝 (2) SD1763・2066・2067・2075・2210・2241・2242・2288・2299・4027, P2255
 図版 22 中世遺構個別図 (12) 溝 (3) SD2075・2210・2512・2531・2679・2695・4049・4063・4137・4308・4367
 図版 23 中世遺構個別図 (13) 溝 (4) SD2075・4132・4302, SK4420
 図版 24 中世遺構個別図 (14) 溝 (5) SD2075・4252・4269 ~ 4273・4785・4788, SE4253, P4796
 図版 25 中世遺構個別図 (15) 溝 (6) SD2075・4126・4127・4255・4259・4260・4262・4263・4788, P4297
 図版 26 中世遺構個別図 (16) SK4257, SG5080, SX4135・4224
 図版 27 古代以前遺構全体図
 図版 28 古代以前遺構分割図 (1)
 図版 29 古代以前遺構分割図 (2)
 図版 30 古代以前遺構分割図 (3)
 図版 31 古代以前遺構分割図 (4)
 図版 32 古代以前遺構分割図 (5)
 図版 33 古代以前遺構分割図 (6)
 図版 34 古代以前遺構分割図 (7)
 図版 35 古代遺構個別図 (1) SI2368・3048
 図版 36 古代遺構個別図 (2) SB16 ~ 18, SD2496・2675
 図版 37 古代遺構個別図 (3) SB19 ~ 22, SD2959・2960
 図版 38 古代遺構個別図 (4) SB23, SE2510
 図版 39 古代遺構個別図 (5) SK1901・2175・2191・2192・2339・2388・2469・2498・2499・2506・2530・2600
 図版 40 古代遺構個別図 (6) SK2686・2765・2770・2793・2795・2807・2937・2941・2965・3083, SF2189・2287・2522・2939, P3069
 図版 41 古代遺構個別図 (7) SD1948・2289・2290・2496・2497・2604・2607・2675・2682・2685・2695・2704・2788・2849・2866・2959・2960・2966, SAI, P2651
 図版 42 古代遺構個別図 (8) SA2704, 弥生時代の遺構 SI3005
 図版 43 古代遺構個別図 (9) 13SB1・3・5
 図版 44 古代遺構個別図 (10) 13SB2・4
 図版 45 古代遺構個別図 (11) 13SB6 ~ 8
 図版 46 古代遺構個別図 (12) 13SB9・10
 図版 47 古代遺構個別図 (13) 13SB11・12
 図版 48 古代遺構個別図 (14) 13SB13・14
 図版 49 古代遺構個別図 (15) 13SB15・16
 図版 50 古代遺構個別図 (16) 13SB17・18
 図版 51 古代遺構個別図 (17) 13SB20
 図版 52 古代遺構個別図 (18) 13SB19・21・22
 図版 53 古代遺構個別図 (19) 13SB23・24
 図版 54 古代遺構個別図 (20) SE4002・4130・4253・4254・4275, SK4003
 図版 55 古代遺構個別図 (21) SE4274・4277 ~ 4279・4301・4315・4450

図版 56 古代遺構個別図 (22) SE4502・4643・4760・4860・4998・5001

図版 57 古代遺構個別図 (23) SK4060・4048・4058・4074・4113・4131・4142・4146・4156・4163・4165

図版 58 古代遺構個別図 (24) SK4214・4266・4267・4304・4313・4349・4363・4390

図版 59 古代遺構個別図 (25) SK4414・4425・4430・4449・4451・4455・4480・4501・4503・4511・4605・P4444

図版 60 古代遺構個別図 (26) SK4607・4628・4629・4637・4640・P4919

図版 61 古代遺構個別図 (27) SK4770・4921, SF4261・4410・4800, SX4265・4864

図版 62 古代遺構個別図 (28) SX4001・4264・4999

図版 63 古代遺構個別図 (29) SX4999, SK5000, P5035・5036

図版 64 古代遺構個別図 (30) SD4004・4055・4112・4129・4132・4228・4236・4367・4388・4389・4446・4447・4453・4456・4506・4507・4635・4642・4772・4779, SK4732, P4818・4846

図版 65 2010年度調査 中世の土器・陶磁器 (1)

図版 66 2010年度調査 中世の土器・陶磁器 (2), 土製品・石製品・金属製品・鍛冶滓

図版 67 2010年度調査 中世の金属製品・木製品

図版 68 2010年度調査 古代の土器 (1)

図版 69 2010年度調査 古代の土器 (2)

図版 70 2010年度調査 古代の土器 (3)

図版 71 2010年度調査 古代の土器 (4)

図版 72 2010年度調査 古代の土器 (5)

図版 73 2010年度調査 古代の石製品・金属製品・鍛冶滓, 木製品 (1)

図版 74 2010年度調査 古代の木製品 (2)

図版 75 2010年度調査 古代の木製品 (3), 弥生・縄文時代遺物

図版 76 2013年度調査 中世の土器・陶磁器, 古代の土器 (1)

図版 77 2013年度調査 古代の土器 (2)

図版 78 2013年度調査 古代の土器 (3)

図版 79 2013年度調査 古代の土器 (4)

図版 80 2013年度調査 古代の土器 (5)

図版 81 2013年度調査 古代の土器 (6)

図版 82 2013年度調査 古代の土器 (7)

図版 83 2013年度調査 土製品, 石器・石製品, 金属製品・鍛冶滓, 縄文時代の土器・石器

図版 84 古代の竪立柱建物配置図

【写真図版】

図版 85 2010年度調査 中世の遺構 (1) 調査区近景・完掘

図版 86 2010年度調査 中世の遺構 (2) SB1・3～12・14

図版 87 2010年度調査 中世の遺構 (3)・遺物 SE

図版 88 2010年度調査 中世の遺構 (4) 調査区, SB2・9・13・15

図版 89 2010年度調査 中世の遺構 (5) 調査区, SE

図版 90 2010年度調査 中世の遺構 (6) SE

図版 91 2010年度調査 中世の遺構 (7) SE

図版 92 2010年度調査 中世の遺構 (8) SE

図版 93 2010年度調査 中世の遺構 (9) SE

図版 94 2010年度調査 中世の遺構 (10) SK

図版 95 2010年度調査 中世の遺構 (11) SD

図版 96 2010年度調査 中世の遺構 (12) SD

図版 97 2010年度調査 古代の遺構 (1) 調査区遠景・完掘

図版 98 2010年度調査 古代の遺構 (2) 調査区完掘

図版 99 2010年度調査 古代の遺構 (3) 材木列塚 (SA2704), SI3048, SB16・17

図版 100 2010年度調査 古代の遺構 (4)・唐三彩 SI2368・3048, 材木列塚 (SA2704)

図版 101 2010年度調査 古代の遺構 (5) 調査区完掘

図版 102 2010年度調査 古代の遺構 (6) 調査区完掘

図版 103 2010年度調査 古代の遺構 (7) SI2368

図版 104 2010年度調査 古代の遺構 (8) SI3048

図版 105 2010年度調査 古代の遺構 (9) SB16～19

図版 106 2010年度調査 古代の遺構 (10) SB18, SD2676

図版 107 2010年度調査 古代の遺構 (11) SB19

図版 108 2010年度調査 古代の遺構 (12) SB22, SD2959

図版 109 2010年度調査 古代の遺構 (13) SB20・21・23, SE2510

図版 110 2010年度調査 古代の遺構 (14) SE2510

図版 111 2010年度調査 古代の遺構 (15) SK

図版 112 2010年度調査 古代の遺構 (16) SK

図版 113 2010年度調査 古代の遺構 (17) SK

図版 114 2010年度調査 古代の遺構 (18) SK, SF, P3069

図版 115 2010年度調査 古代の遺構 (19) SD

- 図版 116 2010 年度調査 古代の遺構 (20) SD、
 材木列解 (SA2704)
 図版 117 2010 年度調査 古代の遺構 (21)・弥生時
 代の遺構 材木列解 (SA2704)、SI3005
 図版 118 2013 年度調査 農道下調査区・21H 区
 図版 119 2013 年度調査区 完掘
 図版 120 2013 年度調査区 SB10・13・14・15・
 17・20
 図版 121 2013 年度調査区 SK4629、SF4410・
 4800、SX4001
 図版 122 2013 年度調査区 SX4999、SD4228
 図版 123 2013 年度調査区 基本層序、材木列解検討
 調査状況
 図版 124 2013 年度調査 中世の遺構 (1) SD
 図版 125 2013 年度調査 中世の遺構 (2) SD
 図版 126 2013 年度調査 中世の遺構 (3) SD
 図版 127 2013 年度調査 中世の遺構 (4) SD
 図版 128 2013 年度調査 中世の遺構 (5) SD
 図版 129 2013 年度調査 中世の遺構 (6) SD・SX・
 SK
 図版 130 2013 年度調査 古代の遺構 (1)
 13SB1・2・3
 図版 131 2013 年度調査 古代の遺構 (2)
 13SB4・5・6
 図版 132 2013 年度調査 古代の遺構 (3)
 13SB7・8・9・10
 図版 133 2013 年度調査 古代の遺構 (4)
 13SB10・11・12・14・15
 図版 134 2013 年度調査 古代の遺構 (5)
 13SB13・16・17
 図版 135 2013 年度調査 古代の遺構 (6)
 13SB18・19・20
 図版 136 2013 年度調査 古代の遺構 (7)
 13SB21・22・23・24
 図版 137 2013 年度調査 古代の遺構 (8) SE
 図版 138 2013 年度調査 古代の遺構 (9) SE
 図版 139 2013 年度調査 古代の遺構 (10) SE
 図版 140 2013 年度調査 古代の遺構 (11) SE・SK
 図版 141 2013 年度調査 古代の遺構 (12) SK
 図版 142 2013 年度調査 古代の遺構 (13) SK
 図版 143 2013 年度調査 古代の遺構 (14) SK
 図版 144 2013 年度調査 古代の遺構 (15) SK
 図版 145 2013 年度調査 古代の遺構 (16) SK
 図版 146 2013 年度調査 古代の遺構 (17) SK・SF
 図版 147 2013 年度調査 古代の遺構 (18) SX
 図版 148 2013 年度調査 古代の遺構 (19) SD
 図版 149 2013 年度調査 古代の遺構 (20) SD
 図版 150 2013 年度調査 古代の遺構 (21) SD・
 SK・P、縄文土器出土状況
 図版 151 2010 年度調査 中世の土器・陶磁器
 図版 152 2010 年度調査 中世の土製品・石製品・
 金属製品・鍛冶滓・木製品
 図版 153 2010 年度調査 古代の土器 (1)
 図版 154 2010 年度調査 古代の土器 (2)
 図版 155 2010 年度調査 古代の土器 (3)
 図版 156 2010 年度調査 古代の土器 (4)、唐三彩・
 石製品・金属製品・鍛冶滓
 図版 157 2010 年度調査 古代の木製品 (1)
 図版 158 2010 年度調査 古代の木製品 (2)、
 弥生土器・縄文土器・石器
 図版 159 2013 年度調査 中世の土器・陶磁器、
 古代の土器 (1)
 図版 160 2013 年度調査 古代の土器 (2)
 図版 161 2013 年度調査 古代の土器 (3)
 図版 162 2013 年度調査 古代の土器 (4)、土製品・
 石製品 (1)
 図版 163 2013 年度調査 古代の石製品 (2)、金属製
 品・鍛冶滓・縄文土器・石器

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道49号(福島県いわき市～新潟市)は、太平洋側と日本海側を結ぶ重要な幹線道路である。県内では、沿線の阿賀町・阿賀野市と新潟市を結ぶ主要幹線道路として重要な役割を果たしている。道路は阿賀野市の市街地(旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村)を通過しており、幅員が狭小なため、その交通量に対応できず、交通混雑、交通騒音、交通事故等都市機能や生活環境に与える影響が問題となっている。これらの問題を解消し、安全かつ円滑に交通を処理することを目的に、「一般国道49号安田バイパス」(阿賀野市六野瀬～同市寺社間5.6km)と「一般国道49号水原バイパス」(阿賀野市寺社～同市下黒瀬間8.1km)が計画された。これら二つのバイパスは、平成16年の市町村合併に伴う阿賀野市の誕生を機に、「阿賀野バイパス」と呼称することとなった(第1図)。

阿賀野バイパスのうち、安田バイパス区間は1985(昭和60)年の一部暫定供用を経て、2006(平成18)年に暫定2車線が開通している。水原バイパス区間は、1999(平成11)年3月に都市計画が決定し、2000(平成12)年度に事業化が決定した。2003(平成15)年度に用地取得に着手したことを受けて、国土交通省(以下、「国交省」と新潟県教育委員会(以下、「県教委」との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。水原バイパス区間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(当時、以下、「埋文事業団)が2003(平成15)年12月に実施した。分布調査の結果、周知遺跡(石船戸遺跡)以外でも広範囲で古代・中世の遺物が採取されたことから、全域に対して試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

2005(平成17)年4月以降、阿賀野バイパスの試掘確認調査が本格化した。国交省から試掘調査の依頼を受けた県教委は、阿賀野バイパス17工区の調査を2007(平成19)年度に埋文事業団に委託した。この結果、山口遺跡は新発見され、延べ面積約42,300m²に対して本発掘調査が必要であることを報告した。このうち、2008(平成20)年度に古代・中世面、古代面、弥生時代の延べ8,850m²の調査を行



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置
(国土地理院発行「新潟」「新津」1:50,000原因)

い、2010（平成22）年度に古代・中世面の延べ7,906m²の調査を実施した。この2010年度調査の結果、山口遺跡の重要性が認識され、遺跡の性格解明や取扱い方針を決定するために、保存も視野に入れた確認調査が必要となった。県教委は国交省にその方針及び必要性を伝え、了承を得た。確認調査は2011・2012（平成23・24）年度に実施した。2か年の調査結果と「山口遺跡調査指導委員会」の意見をもとに、県教委と埋文事業団で協議した結果、以降は記録保存調査の中で残された課題の解明に取り組むことに決定した。

山口遺跡の確認調査と並行して、水原バイパス全域の試掘確認調査も終了したことから、国交省と県教委は2012（平成24）年12月10日に「水原バイパスの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」（以下、覚書）を締結し、完成4車線施工時と暫定2車線施工時の本発掘調査対象範囲を確定した。バイパスの早期開通のため、当面は暫定2車線施工範囲を対象に調査を実施することとした（第3図）。

その後、国交省・県教委・埋文事業団の三者で協議し、国交省から山口遺跡の本発掘調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。2013（平成25）年度当初の依頼面積は8,726m²である。4月から事前準備などに着手したが、調査期間中の数度の協議により、最終的な調査範囲が確定した。

2 調査経過

A 試掘調査（2007年度）

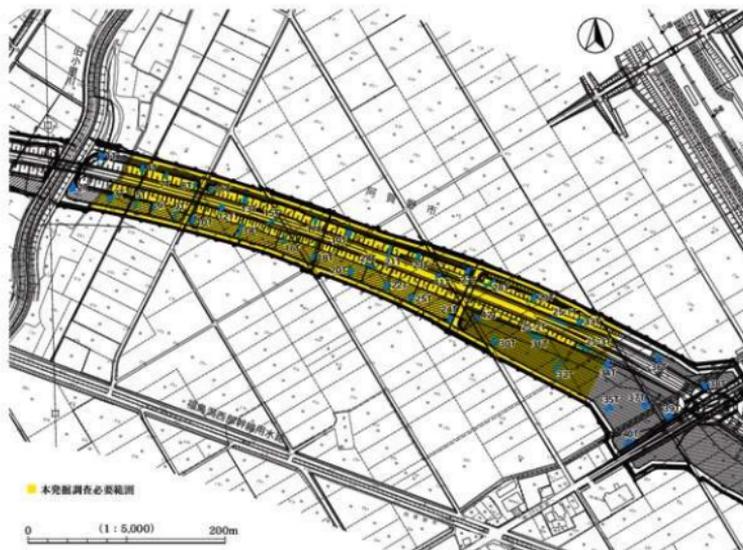
試掘調査は、2007（平成19）年10月10日から30日までの15日間に行った〔加藤2008〕。調査範囲は阿賀野川右岸の自然堤防上、阿賀野バイパス路線内の旧小里川から国道460号間の50,000m²を対象に、重機及び人力によるトレンチ（試掘坑）掘削と精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。設定したトレンチは42か所、実質調査面積は796m²、試掘率は1.6%である。

調査の結果、弥生時代の遺物包含層と古代・中世の遺物包含層が複数のトレンチから確認された。遺構も6トレンチで弥生時代の竪穴状の掘り込みが、古代の遺構も5トレンチから32トレンチの範囲内で溝、土坑、ピットが確認された（第2図）。

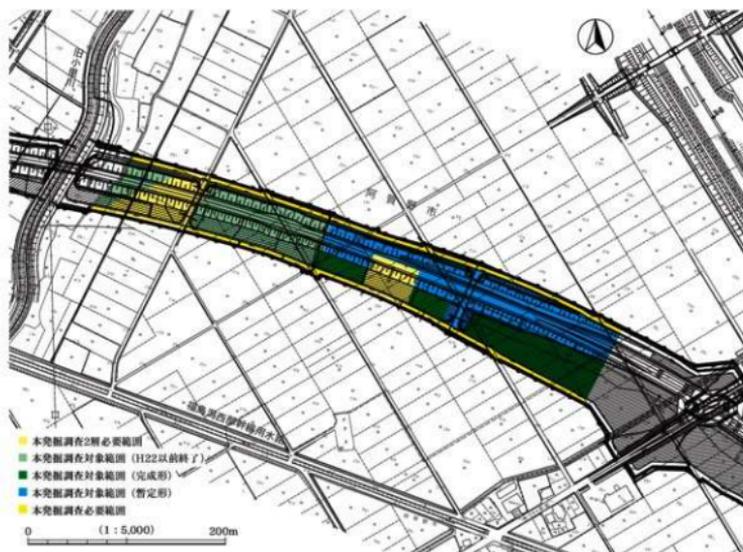
この結果を踏まえ、新遺跡の存在が明らかとなり、字名から「山口遺跡」として周知化された。これに伴い古代・中世遺跡36,900m²の範囲に、重複する弥生時代の遺跡3,500m²と古代の遺構が2層確認された範囲1,900m²を加えた、延べ42,300m²について本発掘調査が必要であると判断した。

B 本発掘調査（第2次調査、2010年度：図版1）

本発掘調査は2010（平成22）年4月13日から11月16日の期間で行った。4月13日から調査区内に存在する工事用道路撤去などの準備工に入り、4月15日から表土掘削を開始した。5月11日から遺物包含層であるIV層の発掘を開始し、遺物包含層の掘削終了後は、VI層上面まで掘り下げて遺構の有無を確認した。中世の遺構は、IV層・VI層上面で検出した。また、中世の井戸については、崩落の危険があったため、最初は上半部の調査を行った。井戸の下半部は、すべての遺構調査が終了した後、重機を併用し、安全を確保してから調査を実施した。古代の遺構は、地山であるVI層と遺構の覆土が極めて類似しており、その検出は困難であった。このため、中世の遺構調査が終了した後、VI層を重機により約15cmの深度で平面的に掘削し、遺構の検出に努めた。この結果、材木列塚や掘立柱建物をはじめとする古代の遺構が調査区東側で多く検出され、分布域がさらに東側へ延びることが予想された。したがって、調査区東端で



第2図 試掘トレンチ位置図



第3図 覚書に基づく本発掘調査対象範囲

検出した遺構については、板・ブルーシート等で養生した後、埋め戻した。調査は11月16日に終了した。航空撮影は、中世の遺構調査が終了した8月24日、古代の遺構調査が終了に近づいた10月14日の2度行った。現地説明会は2度開催し、8月21日は74名、10月16日は152名の見学者が訪れた。

下層の試掘調査（第8・9図）

本発掘調査ではⅥ層上面までの調査を行った。これより下位に堆積する層については、任意にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無の確認を目的とした確認調査を実施した。設定したトレンチは17か所、トレンチ番号は試掘調査のものとは区別するため、2010-1T、2010-2T…2010-17T（以下、1T・2T…17T）とした。調査対象面積は3,500m²、実質調査面積は421m²、試掘率は12%である。

調査結果は以下のとおりである。

Ⅵ層は均質なシルトが2m前後と厚く堆積する。部分的に炭化した木材や炭化物が認められたが、遺構・遺物は検出されず、土層の堆積状況からも人為的な痕跡を見出すことはできなかった。

Ⅶ層は標高約2.3～4.5mの間で起伏をもって堆積し、1T・2T・3Tラインから西側は落ち込んで堆積し、5T～7T・8Tの南北方向にかけては微高地状に高まる。この東側の9TではⅦ層は再び落ち込み、10T以東では、やや凹凸をもつものの、徐々に標高を上げて平坦面を形成している状況がうかがわれる。

遺物は7Tにおいて、標高3.85m～3.99mの範囲で縄文時代晩期に属する土器が4点出土した。このことから、縄文時代晩期には南北方向に延びる狭長な微高地上での活動も推定される。また、西側の10・17Tの範囲はⅦ層の堆積も安定していることがうかがえ、この平坦面は土層の堆積状況から東側へ広がるのが推定される。したがって、今後の調査で当該期の生活の痕跡が検出される可能性も十分に考えられる。

C 確認調査（2011年度）

保存目的の確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、2011（平成23）年9月12日から11月11日までの37日間に行った。調査の概要については、『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成23年度』において報告した〔朝岡2012〕。第2次調査で県内初例となる唐三彩が出土したこと、材木列塀が検出されたことなどから重要性が考慮され、遺跡の内容や性格を把握し、遺跡の取扱いについての協議資料を得ることになった。

保存目的の確認調査の実施にあたっては、全般（調査前後も含めて）を通じて外部の有識者の意見を聞く必要があると考え、「山口遺跡調査指導委員会」（以下、「指導委員会」）を県教委は設置した。指導委員会は「山口遺跡の性格把握に係る調査手法の検討及び調査結果の評価」を所掌事項の一つとして、「(1)考古学を専門とする人、(2)文献史学（古代史）を専門とする人、(3)その他県教育庁文化行政課が必要と認める人」で組織された。外部の有識者として小林昌二氏（帝京大学教授）、坂井秀弥氏（奈良大学教授）、伊藤武士氏（秋田市教育委員会主席主査）に委員を依頼し、2011年度は計3回の委員会（検討会）を開催した。この3名には2012年度確認調査、2013年度本発掘調査の時も引き続き指導を受けた。

調査で設定したトレンチは6か所（A～Fトレンチ）で、さらに材木列塀が検出された25H区の一部も拡張して調査した（第Ⅶ章2B参照）。その結果、古代の遺構として、溝（材木列塀）2条、掘立柱建物3棟、焼土遺構6基などを検出した。溝は、第2次調査時の材木列塀の延長をSD2、新規検出溝をSD1と仮称した。両溝の識別は非常に困難であるとしながらも、検出した掘立柱建物群との重複関係（SD1<SD2

く掘立柱建物群（東西棟）も確認した。しかし、遺跡内容や性格に関する情報が十分に把握されたという状況でないことから、2012年度も引き続き確認調査を実施することにした。

D 確認調査（2012年度）

保存目的の確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、2012（平成24）年9月3日から9月26日までの14日間に行った。調査の概要については、『財団法人新潟県埋文文化財調査事業団年報 平成24年度』において報告した〔渡邊2013〕。調査の目的は、①2011年度に新規に確認された材木列塼（SD1）の広がりとその性格の解明、②新旧2条の溝が掘立柱建物群と同時期ではない可能性が高まったことから、より多くの遺物を検出して遺跡の存続期間の再検証をすることとした。

調査トレンチは2か所（G・Hトレンチ）で、GトレンチはSD1の北側延長方向に設定し、Hトレンチは2007（平成19）年度試掘調査で多くの遺物が出土した22トレンチの再調査とした（第Ⅷ章2B参照）。その結果、溝（SD1）の延長は確認されたが、想定された方向からずれていること、遺構精査のたびにプランの変更が生じたこと、断面観察でも溝及び材木痕の識別は困難であるなどの課題も示された。遺構の存続期間については、従来の見解どおり、9世紀第2四半期に取まとされた。また2007年度試掘調査で、古代の2層調査が必要とされた上層1,900m²の範囲にある遺構が、近現代に帰属する可能性があることも示された。調査中の9月18日に4回日の指導委員会を開催し、多くの御教示を得た。

その後の調査でも狭小な調査範囲では遺跡の全体像を把握することが困難であることが明らかとなり、県教委と埋文事業団は今後の取扱いについて協議した。その結果は、平成25年3月29日付け教文第1475号で国交省等に通知した。通知文には、「今回の調査結果からは本遺跡を官衙関連遺跡と判断することはできず、「材木列塼」や唐三彩を除く遺構・遺物のあり方は一般的な古代集落のイメージを逸脱するものではないことから、保存目的の確認調査は今回で終了し、今後は記録保存調査に移行する。」と記されている。

E 本発掘調査（第3次調査、2013年度）

記録保存調査に移行するという方針を受け、国交省は本発掘調査を県教委に依頼した。第3次調査は県教委から委託を受けた埋文事業団が、2013（平成25）年4月22日から12月27日の期間で行った。年度当初の依頼面積は8,726m²であるが、工事内容や工事の影響範囲を考慮し、最終的な調査範囲を確定した。

調査区は東西に長いことから、便宜的に3分割し、西からA～C区と仮称した。A区は19E～23F区にかけての範囲で、2010年度調査時に調査不可であった農道下である。B区は25～35ラインにかけての範囲で、古代・中世の遺構・遺物の多数検出が見込まれる範囲である。C区は35ライン以東の範囲で、集落に近接した古代の水田跡が想定されていた。4月当初は、A区の南西隅や、C区を斜行する水路の切り直し作業から着手した。事前準備・環境整備を進め、4月17日に国交省と現地協議を行い、当面の調査範囲や農道の移設の時期を決定し、工事用道路下については調査状況を考慮して取扱いを協議することなどが確認された。以下、調査経過に沿ってA区、C区、B区の順で記述する。なお材木列塼に関する調査については、第Ⅶ章で記述した。

A区は2010年度調査で未調査区であったが、24ライン以西は既に2m以上の工事用盛土が存在した。よって盛土の除去を4月23日から開始し、5月7日までに盛土をほぼ除去し、次いで旧農道表面まで露

出させた。農道部は試掘時も未調査であったことから、堆積状況を把握するために人力によるトレンチ掘削を行った。その結果、古代の遺物包含層（IV層）が既に削平されていることが判明したので、遺構検出面まで重機で掘削するようにした。5月20日から人力による掘削作業を開始したが、周辺の盛土からの差し水が予想以上に多く、一晩経つと掘削面まで水没する状況であった。よって、調査区周辺に排水溝（開渠）を設け、常時排水するようにした。農道は同じ場所でも何回か造り替えられており、調査区の長軸方向に沿った攪乱（近・現代の用水跡）が数条認められた。攪乱埋土に遺物が含まれること、攪乱底面に遺構が検出される可能性が高いことなどから、攪乱埋土はすべて人力で除去した。その後、本格的な遺構検出に移行し、検出順に通し番号（2013年度は4001から）を付して、略図を作成した。竪穴状遺構（SX4001）や5条の溝（SD2066・2067・2210・2288・4027）の合流部などが検出され、精査と並行して、遺構掘削も開始した。遺構掘削及び平面測量が終了したことから、6月24日に全体の完掘写真を高所作業車で撮影した。その後、遺物が比較的多く出土した範囲や、過去の調査で掘立柱建物検出される可能性が高い範囲を中心に、面的に人力による段下げを行い、遺構・遺物の有無を確認した。同時期の遺構・遺物が検出され、遺構検出の困難を再認識し、改めて重機により調査範囲全域を約20cm掘り下げた。その過程で縄文時代晩期中葉の遺物集中範囲（SX4100）も検出した。すべての掘削作業を終了し、7月19日に2回目の全体完掘写真を撮影し、測量作業も含めて7月22日にすべての作業を終了した。

B・C区は調査範囲を設定後、重機による開渠工事と表土掘削を並行して行い、遺構検出面までの深度や遺物の分布状況を把握するようにした。4月23日に南西側から着手した。作業員を数名配置し、掘削後の調査区壁面を清掃して、基本層序の把握に努めた。表土掘削は、古代の遺物包含層または水田耕作土とされたIV層の上面までを目途としたが、31～34区の南半は、古代の上層と認識されていたことから、当該範囲は試掘で示された遺構検出面まで掘削した。数条の溝を検出し、遺構掘削・図面作成したが、複数の溝から近世に属する遺物が出土した。2012年度確認調査で近現代の可能性が指摘されていたが、その時代の遺物は検出できなかった。必要な記録を作成し、6月26日に完掘写真を撮影した後、他の遺構と同様の確認面まで掘り下げを行った。C区の水田予想範囲は、層境の起伏が著しいことから人為的な影響を受けている可能性はあったが、面的な精査や土層ベルトの観察でも明確な耕作痕跡（溝・畦畔など）を検出できなかった。6月11日に県教委に現状説明し、調査方針について協議した。幅約4mのトレンチをC区全体に交互に設定し、重機及び人力で再度慎重に掘り下げて耕作痕跡の検出に努めたが、古代に属する遺構はピット等も含めて検出できなかった。41・42Q区で検出したSD4126・4127は耕作痕跡の可能性もあったが、堆積状況から中世遺構と判断した。完掘写真は航空撮影の時に撮影することとし、C区の作業を終了した。なお、C区から東側は次年度以降の本発掘調査対象となっていたが、C区と同様の状況が想定されたことから、取扱いを判断するために確認調査を実施することにした。調査終了の目途がついた12月に実施した。10m以上の長いトレンチを3か所設定し、遺構・遺物の検出に努めたが、同様の堆積状況が広がっていることを確認し、本発掘調査は不要と判断した。

B区は2010年度調査区と接する西側から重機による表土掘削を開始した。耕地整理で旧地形は大きく削平されており、水田耕作土（I層）直下が古代・中世の遺構検出面であることから、鉄板を敷いて地下への影響を防いだ。北東-南西方向の農道は、事前に人力により堆積状況を確認したところ、古代の遺物包含層（IV層）が良好に残っていた。遺物も多く含まれていたことから、農道部分の重機掘削はIV層上面までとした。農道部分の遺構確認面は周囲より高所であったが、そのため漸移層的な部分も多く、遺構を十分に認識できない可能性があった。最終的には完掘写真撮影後、周辺の遺構検出面と同じ高さまで掘削

を行った。中世と古代の遺構を同一面で検出する必要があったが、遺構埋土からは所属時期を判別することはできなかった。ただし2013年度調査区での中世の遺物は極めて少なく、2010年度調査区と同様の溝を除いては、大半が古代に属する遺構と考えて調査を進めた。2011年度確認調査で検出された遺構との整合をとりながら調査し、方形の掘形をもつ総柱建物など、多くの掘立柱建物を検出した。出土遺物から古代の存続時期が9世紀第2四半期にほぼ限定されるが、中世遺構も含めて遺構の重複が多くあり、記録作成（図面作成・写真撮影など）に時間を要した。また、2010～2012年度の調査で示されていたように、平面プランの識別が困難な遺構が多かったことも時間を要する要因となった。10月中旬以降は天候不良時でも調査が可能なように、テントや移動式ビニールハウスを使用して対応した。すべての遺構を完掘したと判断した時点で、ラジコンヘリによる空撮を実施することにした。天候不良の日が続いたため最低限の全体清掃に留め、12月3日に撮影した。A区の調査では遺構検出面掘り下げ後に検出できた遺構があったことから、材木列想定ライン以外の24～26I・J区を中心に、重機による面的な掘削を開始した。掘削した遺構との境界が判断できるように完掘遺構は砂で埋め戻し、また地下に影響が及ばないように鉄板を敷設して作業を実施した。その結果、新規に検出した遺構は少なかったが、当遺跡では大型の掘立柱建物13SB20の検出につながった。すべての掘削・記録作業は12月27日に終了した。なお、調査途中ではあったが、掘立柱建物群を良好に観察できる時期に合わせて現地説明会を開催した。10月26日に開催し、55名の見学者が訪れた。

F 整理作業（2018年度）

2010年度は本発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を現場事務所で行った。本発掘調査終了後は、図面・写真の記録類、遺物を株式会社帆苜組の整理室に搬入し、遺構図面整理と遺物の接合・実測・撮影を行い、併せて原稿執筆を進めた。この際、唐三彩の破片があることがわかり、巽淳一郎氏に鑑定を依頼した。また図版編集の一部を有限会社不二出版に委託し、報告書作成作業を可能な限り進めた。この時点までの成果は、3月に埋文事業団に納品した。

2013年度は、本発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を現場事務所で行い、一部の遺物については接合・実測を株式会社ノガミの整理室で行った。調査は12月末で終了したが、遺物の洗浄・注記は1月中旬まで継続した。1月以降は図面・写真の記録類と遺物を株式会社ノガミの整理室に搬入し、遺構図面修正・写真整理・遺構台帳などの基礎整理を中心に行った。また遺構の原稿も可能な限り執筆した。遺物は接合・実測と並行して遺物観察表の作成などを行った。現地調査終了後の整理期間が短く、作業途中で終了するものが多かったが、この時点までの成果は、3月に埋文事業団に納品した。

2018年度は報告書刊行に向けての整理作業である。まず各年度整理の進捗の把握に努め、作業済み、作業途中のものは、可能な限り利用することにした。特に2010年度調査関係の図版類は編集作業を経ていることから、2013年度調査分も体裁を合わせるように努めた。各種図面図版及び挿図を含む本文の編集作業は、2010年度同様に、有限会社不二出版に委託して作業の効率化を図った。遺構測量データ・遺構原図・遺物実測図・写真データ・挿図原図とそれらのレイアウト図を、整理作業当初から順次入稿し、校正を進めた。原稿執筆（支援組織調査員分の加除・訂正含む）や観察表作成に係る作業は、随時行い、2019年3月まで実施した。

G 調査・整理の体制

新潟県教育委員会が主体となり、以下の体制で行った。

試掘調査（2007年度）

調査期間	2007（平成19）年10月10日～10月30日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村正昭（事務局長）
管理	斉藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川靖（総務課班長）
調査総括	藤巻正信（調査課長）
調査指導	田海義正（調査課試掘確認担当課長代理）
調査担当	加藤 学（調査課班長）
調査職員	斉藤 準（調査課嘱託員）

確認調査（保存目的）（2011・2012年度）

調査期間	2011（平成23）年9月12日～11月11日	2012（平成24）年9月3日～9月26日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村正昭（事務局長）	木村正昭（事務局長）
管理	今井 亘（総務課長）	熊倉宏二（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課班長）	伊藤 忍（総務課班長）
調査総括	北村 亮（調査課長）	北村 亮（調査課長）
調査担当	鈴木俊成（調査課試掘確認担当課長代理）	渡邊裕之（調査課試掘確認担当課長代理）
調査職員	朝岡政康（調査課主任調査員）	朝岡政康（調査課主任調査員）

本発掘調査（2010・2013年度）

調査回数	第2次調査	第3次調査
調査期間	2010（平成22）年4月13日～11月17日	2013（平成25）年4月22日～12月27日
整理期間	2010年11月17日～2011（平成23）年3月31日	2014（平成26）年1月6日～3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村正昭（事務局長）	木村正昭（事務局長）
管理	今井 亘（総務課長）	熊倉宏二（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課班長）	仲川国博（総務課班長）
調査総括	藤巻正信（調査課長）	高橋 保（調査課長）
調査指導	鈴木俊成（調査課本調査1担当課長代理）	田海義正（調査課本調査担当課長代理）
調査担当	荒川隆史（調査課班長）	石川智紀（調査課班長）
支援組織	株式会社帆荷組	株式会社ノファミ
	現場代理人：伊藤 聡	現場代理人：戸田哲雄（4～12月）、島倉恭彦（4月）
	調査員：村上草久	調査員：金内 元、秋山泰利
	補助員：井井奈奈子、大瀧明美、佐藤直美、 佐藤由紀、長谷川弥生、貞壁鈴子	補助員：井越真紀、加藤雅丈、津野里美、 樋浦香理

整理作業（2018年度）

整理期間	2018（平成30）年4月2日～2019年3月29日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 池田幸博）
整理	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	清野一善（事務局長）
管理	松田 祐（総務課長）
庶務	星野美奈（総務課班長）
整理総括	沢田 敦（調査課長）
整理担当	石川智紀（調査課整理担当課長代理）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第Ⅱ章は阿賀野バイパス関連の既刊報告書から抜粋した。地理的環境は『第215集 山口遺跡』[石垣2010]、歴史的環境の古代は『第277集 蕪木遺跡』[石橋2018]、中世は『第262集 境塚遺跡Ⅱ』[荒川2016]から本文・図表を、当遺跡に合わせて引用・加除した。

1 地理的環境

山口遺跡は、新潟県の北東部に位置する阿賀野市に所在する。阿賀野市は平成16年4月に安田町、水原町、笹神村、京ヶ瀬村が合併して誕生した市で、本遺跡は旧水原町に位置する。

本遺跡の西方には一級河川の阿賀野川が流れる。阿賀野川は山間部を蛇行し、阿賀野市(旧安田町)草水、五泉市馬下付近から平野に流れ出し扇状地を形成する。この扇状地にほぼ重なる阿賀野市草水から轉河原場付近に至る12km程の間では、川の流れは比較的急で、砂礫の広い河原を枝分かれしながら流れている。これより下流では流れを大きく蛇行させながらも、緩やかになり流路も安定する。阿賀野川は広大な沖積地である新潟平野を形成する。

新潟平野は、海岸線に沿って砂丘列が発達し、河川の流れの海への流出口を狭くしている。このような地形のため、洪水時になると河川の水が海に流出しづらく氾濫をおこしやすい。阿賀野川は氾濫を繰り返すことによって流路を変え、自然堤防、三日月湖(河跡湖)を作り、河道の痕跡を残してきた。

本遺跡の東方には五頭連峰が連なる。五頭連峰は菱ヶ岳断層に沿って南北に延び、北から南へ向い、金鉢山(888.4m)、松平山(953.9m)、五頭山(912.5m)、菱ヶ岳(973.5m)、宝珠山(559m)などの山々からなる。五頭連峰の周辺には熊野神社が多く分布することから、中世には熊野信仰(熊野系修験)の対象となる場所であったという意見もある[中野1988]。現在は登山道が整備され、地域の人々が利用し、また山麓の西側には出湯、今板、村杉などの古くからの温泉もあり、観光地として賑わいをみせる。五頭連峰の西側には、標高約100m前後の山々からなる笹神丘陵が約18kmにわたって延びている。丘陵地の西側、北端の旧豊浦町の真木山丘陵から南端の旧安田町の赤坂山丘陵には、古代から中世の窯業遺跡や製鉄関連遺跡が多数分布する。丘陵は第三紀層の上に堆積した第四紀洪積層によって形成されたと考えられる[荒木1970]。

本遺跡の現況は水田で、その周囲には田園風景が広がる。水田以前は桑畑として利用されていたことが明治44年の測量地形図から見てとれる。遺跡の西側には人工河川として改修された旧小里川が流れる。小里川は旧水原町上江端付近に源を発する。現在は旧京ヶ瀬村小里付近で人工河川として改修された安野川へ合流するが、かつては駒林川へと合流していた。この駒林川はさらに北上して人工河川の新井郷川へ合流するが、かつては福島潟へと注ぎ込んでいた。また、正保4(1645)年に成立した「正保越後国絵図」をみると、かつての安野川も福島潟に流れ込んでいたことが認められる。改修以前の小里川は、勾配が緩やかで流路は大きく屈曲していた。そのため豪雨のたびに氾濫し、駒林川とともに沿岸耕地に浸水、冠水の多大な被害をもたらしていた[京ヶ瀬村1969]。これを防ぐために行われた小里川・安野川の改修では多くの蛇行部分をカットし、現在の直線的な流れへと変える工事が行われた。

2 歴史的環境

A 古代

律令制により定められた地方行政組織は、国一郡一里という単位で組織され、740(天平12)年には里が廃止され、郷と呼ばれるようになった。当地域は越後国沼垂郡に含まれる。10世紀前半に編纂された「和名類聚抄」によれば、沼垂郡は足羽郷・賀地郷・沼垂郷からなり、郷数から小郡に分類される。沼垂郡は現在の阿賀北地域とする説が一般的だが、その郷配置は足羽郷が北蒲原郡中条町周辺(胎内市)、賀地郷は北蒲原郡の内陸部と加治川流域、沼垂郷は北蒲原郡の海岸部とする説[小林1999]や、中世白河荘、すなわち現阿賀野市域(旧笹神村・旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村)を足羽郷に比定する説[吉田1902]があり、郷の比定については、いまだに決着がつかない。なお、郡境についても、北限を荒川とする説[田中2005]や旧中条町とする説[平川2005]などがある。

第1節で述べたように、当地域の地形は近世以降の治水・利水工事により、大きく改変されている。改変前の状況を知るため、以下の資料を基に第4図を合成した。ベースの地図と小河川については、大日本帝國陸地測量部1911(明治44)年測図、地形区分については[大矢・加藤1984]や[国土交通省北陸地方整備局・国土地理院2004]、阿賀野川・早出川など大河川については、国土地理院1999(平成11)年発行図を用いた。資料の詳細については、第4図脚注を参照して頂きたい。

遺跡は丘陵と平野部のそれぞれに分布するが、平野部では阿賀野川に近い西側には分布しない。これは古代の河道が現河道より東側にあった傍証となる。遺跡の分布する範囲が当時の河道を考える手がかりとなるであろう。また、平野部の遺跡は阿賀野川とそれ以外の中小河川の自然堤防が発達する場所に集中し、旧地形と合わせて考えることにより、いくつかの集中域を捉えることが可能である。各集中域単位で古代沼垂郡に属する阿賀野川右岸の地域について、発掘調査が実施された遺跡を中心に概観する。

笹神丘陵

笹神丘陵に点在する遺跡は、ほとんどが窯業や製鉄関連の生産遺跡である。特に須恵器生産において、県内最大級の規模を誇る。丘陵は北から真木山・陣ヶ峰(通称本田山)・真光寺山・陣ヶ峰・鳥屋ヶ峰・福永山・久保山・赤坂山と呼ばれるが、窯は北側の真木山・本田山・真光寺山に集中し、空白地帯を挟み久保山に1基存在する(以下、笹神窯)。発掘調査が行われているのは志村山窯跡(25)[川上1999b]・高山寺窯跡(35)[笹神村2003]・岡屋敷窯跡(36)・清見寺窯跡A(73)[中川・倉田1962]・狼沢2号窯跡(76)[中川^{ほか}1973]など、すべて北側に位置する窯である。製鉄遺跡は窯の分布に類似するが、鳥屋ヶ峰にも若干分布する点が異なる。

窯の時期は志村山窯跡が8世紀前半、高山寺窯跡が8世紀後半～9世紀初頭、岡屋敷窯跡が8世紀後半、清見寺窯跡Aが8世紀末、狼沢2号窯跡が9世紀前半とされる[小林2004、笹沢2004]。また、久保山の五輪敷窯跡(138)は8世紀後半～9世紀初頭とされる[春日2004c・2006]。笹神丘陵の須恵器生産は8世紀前半に操業が開始され、8世紀後半に最盛期を迎え、9世紀に入ると佐渡の小泊窯跡群(以下、小泊窯)の台頭により、次第に生産は縮小していくと理解されている。製鉄関連遺跡は窯跡の分布に類似するが、鳥屋ヶ峰にも若干分布する。製鉄遺跡は一般的に土器の出土に乏しく、古代と中世どちらに所属するのか判断が困難である場合が多い。赤坂山の不動院遺跡(141)では安田中学校による発掘調査が行われ、詳細な時期は不明だが須恵器杯蓋・杯などが出土したとされる[古澤2012]。

上野林段丘

笹神丘陵の西側にある独立丘は、上野林段丘と呼ばれている。古代の遺跡が複数存在しており、横峯B遺跡(126)〔石川^{ほか}1981〕において発掘調査が行われている。

横峯B遺跡では、時期の異なる竪穴住居2軒が検出されている。1号住居は9世紀後半、2号住居は9世紀末～10世紀末とされる〔春日2004b〕。1号住居からは転用硯が出土している。また、上野林J遺跡(127)では少量の土師器が出土している〔渡辺^{ほか}2004〕。

荒川川以北域(旧福島島東側)

旧福島島の東側、荒川川以北の一带は最も遺跡が集中する場所である。また、分布図(第4図)外となる北側にも多く分布する。曾根遺跡(23)〔家田^{ほか}1981・1982、川上1997〕で発掘調査が行われている。

曾根遺跡では、掘立柱建物25棟と井戸9基が検出され、多様な木製品(木簡・畜串・人形・櫛扉・舟形・木骨)や円面硯、「郡」「上殿」などの文字を含む墨書土器約240点等が出土した。時期は8世紀前半～9世紀後半である。郡庁や正倉を推定できる建物こそ検出されなかったが、官衙関連遺跡であると考えられる。また、中小河川を集める福島島の汀線に立地し、背後には生産遺跡が多数存在する笹神丘陵があり、出土遺物には焼き歪みなどがある須臾器が多数含まれていたことなどから、不良品の選別などを行う流通拠点だったと評価されている〔坂井1996〕。

折居川・大荒川流域(旧福島島南側)

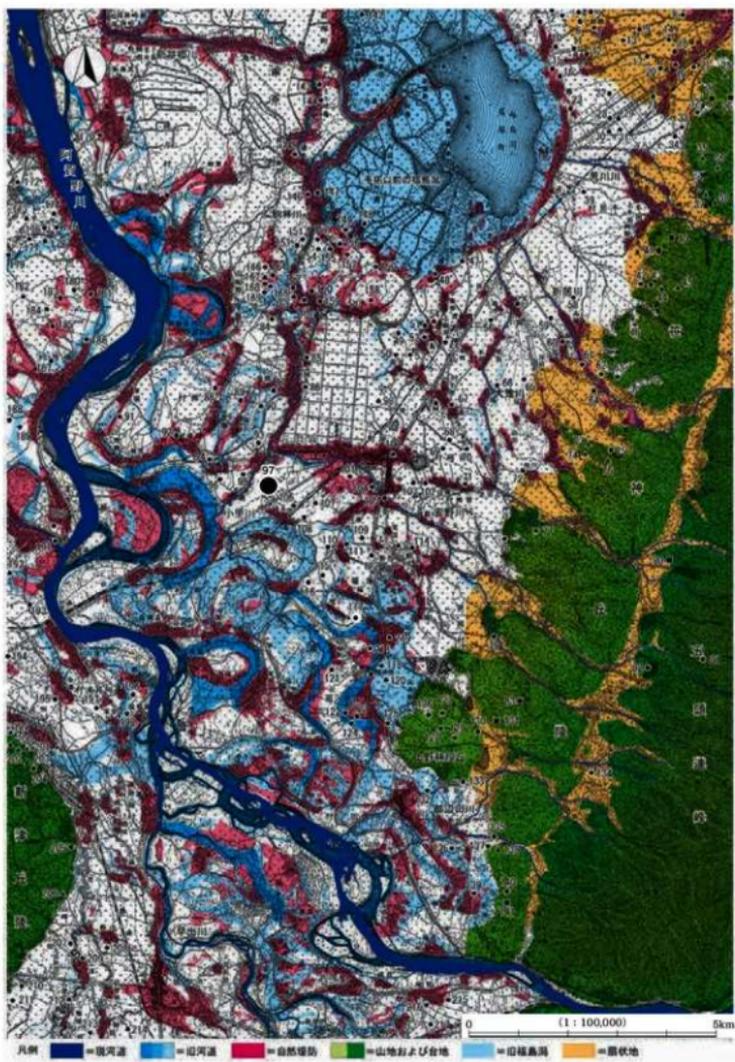
旧福島島の南側は折居川と大荒川の氾濫原であり、小規模な自然堤防が複雑に発達している。この一帯には遺跡が多数存在し、発掘調査された遺跡も多い。免久遺跡(65)・下福岡遺跡(66)・前田遺跡(60)・壱本杉遺跡(61)・腰廻遺跡(57)・小曾根遺跡(48)で発掘調査が行われている。

免久遺跡は、須臾器の四足横瓶が出土したことで早くから知られていた遺跡である。調査では柱穴列が検出され、掘立柱建物の存在を示唆する。出土遺物には多量の墨書土器、健児木簡や厩様木簡など、官衙を想起させる資料が多数出土している〔川上^{ほか}1991〕。下福岡遺跡は免久遺跡の西約200mに位置し、数棟の掘立柱建物が出検されている。時期は9世紀前葉～中葉である。また、隣接する免久遺跡との関連性も指摘されている〔古澤^{ほか}2014、笹神村2003〕。前田遺跡・壱本杉遺跡はともに1996年度にほ場整備に伴う発掘調査が行われた。前田遺跡では古代の遺物は少量出土したのみだが、壱本杉遺跡では柱根が残る総柱建物が1棟検出され、官衙的性格が強いものと指摘されている。遺跡の時期は9世紀後半である〔川上1999a〕。腰廻遺跡は古墳～中世にかけての複合遺跡であり、古代と思われる掘立柱建物が2棟検出され、木簡なども出土している。「腰廻西遺跡」として報告された地点の時期は8世紀後半～9世紀後半とされ、この地点では古代に属する建物の検出はないが、少量ながら墨書土器が出土している〔川上2002・渡辺^{ほか}2002〕。小曾根遺跡は、旧福島島の南側汀線である自然堤防上に立地する。建物は検出されなかったが、出土遺物から8世紀後葉～9世紀初頭とされる〔川上1989・春日2004〕。

駒林川流域(旧福島島南西側)

旧福島島の西側、安野川と小里川が合流して北上する駒林川流域に集中城が見られる。集中城の中心からは少し外れるが、北側の上土地亀遺跡(143・144)と南側の土居内西遺跡(86)で発掘調査が行われている。

上土地亀遺跡では建物は検出されていないが、溝状遺構と竪状遺構が検出されている。時期は8世紀後葉～9世紀中葉である〔関^{ほか}1993、相田2004〕。土居内西遺跡では建物は検出されなかったが、時期は9世紀前葉～中葉である〔古澤2005〕。



第4図 周辺の自然地形と古代の遺跡分布図

(大日本帝国陸地測量部発行 大正3年「津川」大正8年「新発田」「新潟」「新津」1:50,000原図に国土交通省北陸地方整備局国土交通省国土地理院 2004『古地理に関する調査 古地理で探る越後の変遷 荒川・阿賀野川・信濃川・関川・荒川』と大矢雅彦・加藤泰彦 1984『阿賀野川水害地形分類図 説明書』より地形分類を合成・改定。河川については大日本帝国陸地測量部発行 大正3年「出湯」「松ヶ瀬」大正15年「水原」「新津」1:25,000、地理調査所発行 昭和23年「天王」1:25,000、国土地理院発行 平成11年「新潟」「新津」「新発田」「津川」1:50,000を参考にした。)

阿賀野川右岸流域西部（小里川以西）

阿賀野川右岸流域と安野川流域では、自然堤防上に多くの遺跡が分布している。一般国道 49 号阿賀野バイパスはこの沿岸に建設されるため、多くの遺跡で発掘調査が行われている。山口遺跡もその一つである。また、県営湛水防除事業関連での発掘調査も複数回行われている。

ここでは小里川を境に東西に分けて記述する。小里川以西では村下遺跡(88)・村前東 A 遺跡(96)・柄目木遺跡(95)で発掘調査が行われている。

村下遺跡では方形の区画溝の中に掘立柱建物(15棟)検出され、蒲原津との位置関係から何らかの川港的な施設が存在した可能性が指摘されている〔古澤^{ほか}2004〕。時期は 8 世紀第 2 四半期～9 世紀第 1 四半期と報告されている。村前東 A 遺跡では、竪穴状遺構 1 基が検出され、時期は 8 世紀中頃～9 世紀前半と報告されている〔加藤^{ほか}2010〕。柄目木遺跡では複数回の調査が行われているが、各報告書を総合すると、掘立柱建物 3 棟、竪穴建物 8 軒が検出されている。時期は 8 世紀後半～9 世紀前半である〔佐藤^{ほか}2010、加藤^{ほか}2013、古澤 2014〕。また、町道上遺跡(94)・堀越館跡(219)では古代の遺物のみが出土している〔古澤 2002、小田^{ほか}2001〕。

阿賀野川右岸流域及び安野川流域（小里川以东）

小里川以东では山口遺跡(97)・山口野中遺跡(106)・境塚遺跡(108)・三辺稲荷遺跡(107)・塚塚遺跡(119)・鶴深甲遺跡(120)・大坪遺跡(125)等で発掘調査が行われている。

山口遺跡は弥生～中世までの時期幅を持ち、古代は 8 世紀中頃～9 世紀中葉の時期とされる。また、2011 年度の発掘調査で、全国的にも希少な唐三彩が出土している。なお、前述した柄目木遺跡と山口遺跡は旧小里川の対岸に位置しており、発掘調査では旧小里川と同じ方向の河道が検出されている。この河道の下層上には弥生～古代の包含層が流れ込んでいることから、古代にも存在した河道といえる。山口野

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	吹切	33	フケ	64	砂子	96	村前東 A	128	上野林 L	160	里敷野	192	熊直								
2	中谷内	34	杉林	65	変久	97	山口	129	上野林 M	161	上瀬田	193	中野久保								
3	六反谷内 C	35	高山寺宮跡	66	下福間	98	水宮	130	上野林 C	162	池田 B	194	大野中								
4	六反谷内 B	36	岡原敷宮跡	67	普善	99	宮前	131	平代山製鉄跡	163	池田 A	195	西江浦								
5	六反谷内主	37	寺山堀	68	六反田	100	水原宮跡	132	宮ノ腰	164	山崎野神田 A	196	下久保								
6	広面	38	瀬沼の平庭跡	69	堤下	101	庚野 A	133	宮野 A	165	板倉根 A	197	村道寺道上								
7	藤田 B	39	熊の嶋	70	諏訪田	102	四ツ穂長者屋敷	134	ツバタ B	166	大谷根	198	道上								
8	松ノ木	40	一本松	71	部ノ堀	103	中島	135	蔵敷林	167	山崎野神田 B	199	杖堂 2丁目家跡								
9	早瀬	41	宮前	72	上山原	104	養師島	136	八石岡	168	並御	200	七本松家跡群								
10	上野根	42	堤下 B	73	池見寺宮跡 A・B	105	下全田	137	山下 B	169	板倉根 B	201	早水寺 1丁目家跡								
11	福島	43	堤上	74	中ノ沢家跡	106	山口野中	138	五輪敷沢家跡	170	高森	202	滝宮跡								
12	大坪	44	堤上家跡	75	女空屋原	107	1辺福間	139	北郷	171	純内	203	早水寺 2丁目家跡								
13	ひくびく	45	碓石沢家跡	76	狭沢家跡群	108	塚塚	140	新宮	172	直り山 A	204	度古澤								
14	明井	46	渡母家跡	77	倉屋中道	109	大坪南	141	本郷院	173	鶴山山内	205	小茨山								
15	八幡野	47	未明	78	河向	110	新野	142	法花鳥屋 A	174	中山	206	山下家跡								
16	柳崎	48	小舟根	79	山王田	111	十橋	143	上土地亀 B	175	城山	207	鶴崎								
17	板橋	49	谷田	80	多田田製鉄関連	112	志野山大坪	144	上土地亀 A	176	神明社裏	208	中野								
18	瀬田	50	中谷内	81	津沢	113	久津部	145	浦本	177	山	209	村付								
19	古瀬原ノ裏	51	塚田	82	岩崎	114	新田家跡	146	村下	178	望山前	210	丸田								
20	古瀬原ノ横	52	押ノ根	83	滝沢砂子	115	石部川東	147	内田浦	179	上の山	211	越寺								
21	大原	53	押ノ根	84	山島屋敷	116	石部江	148	長部取合	180	河原	212	萩表								
22	馬場	54	佛橋	85	千町	117	藤木	149	一本瀬	181	松園寺	213	江中								
23	舟屋	55	塚田 B	86	土崎内西	118	鶴元北	150	原田院	182	江尻	214	福島								
24	苗代	56	元原家	87	森	119	庚野	151	中野 A	183	山のハヤバ	215	六十道南								
25	志村山宮跡	57	高畑	88	村下	120	鶴深甲	152	川東	184	小杉 上野	216	宮ノ浦								
26	金堀	57	鹿野	89	南田部谷内	121	熊直	153	中道 B	185	宮沢	217	小山北								
27	中江上	58	浅木野	90	菅田部谷内 C	122	花田	154	成道の南	186	下野	218	伊田								
28	十町田	59	上高田	91	曾根	123	家浦 A	155	青津	187	菅原池	219	堀越館跡								
29	加賀万代寺天幕	60	前田	92	城田跡	124	穴 A	156	五木瀬	188	上野 A										
30	切替	61	志本杉	93	大由川	125	大坪	157	五木瀬 A	189	上野 B										
31	加賀万代寺下	62	宮前	94	町道上	126	板倉根 B	158	上土月	190	宮原家										
32	本倉下	63	下一部	95	柄目木	127	上野林 J	159	岡原田	191	寺島										

第 1 表 周辺の古代遺跡一覧表

中遺跡では建物の検出はないが、時期は9世紀前葉～中葉とされる〔村上^{ほか}2013〕。塚遺跡は中世を主体とする遺跡であり、古代に属する建物は掘立柱建物1棟のみである。出土土器は少量だが須恵器の年代は9世紀前半である〔荒川^{ほか}2012〕。前述した灰塚遺跡では阿賀野川の旧河道が検出されている。9世紀後半～10世紀初頭の土器が河底から出土したため、平安時代に存在した河道と報告されている〔佐藤^{ほか}2009〕。鴨深甲遺跡では古代の建物跡は検出されていないが、遺物の時期は9世紀～10世紀初頭である〔高橋^{ほか}2006〕。大坪遺跡では9世紀末～10世紀前葉の土器器焼成遺構が検出されている〔荒川^{ほか}2006〕。三辺稲荷遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・区画溝・井戸・小殿治跡・炭窯が検出され、時期は9世紀後半～10世紀初頭とされる。50点以上の墨書土器が出土していることが注目される〔古澤^{ほか}2014〕。また、水原館跡(100)・下金田遺跡(105)では発掘調査が実施されており、古代の遺物も少量出土している〔川上^{ほか}1977、本間^{ほか}1973〕。

以上、当地域における古代の遺跡を概観した。前述のように坂井秀弥は、福島潟が沼重郡の中央に位置し、中小河川を集めて阿賀野川とも繋がり、さらに外海へと出られることを重要視した。福島潟の湖岸に立地する曽根遺跡が官衙的な内容を持ち、背後の笹神丘陵に存在する生産遺跡と河川で結ばれることを踏まえ、これらが有機的に関連したものと評価した。この研究成果が当地域の古代史を研究する上での基礎となっており、その後に積み重ねられた発掘調査の成果とも矛盾は生じていない。今回提示した各集地域には官衙関連遺跡が点在し、いずれも笹神丘陵から福島潟へ繋がる河川の流域に立地する。

B 中世

1) 略史

山口遺跡は1134(長承3)年に皇嘉門院領として立荘された白河荘に位置する。皇嘉門院は藤原忠通の娘であったことから、白河荘は九条家が領家職を持つ九条家領として代々伝領されていった。この白河荘の立荘には阿賀北に大きな勢力をもつ城氏が関わっていたと推測され、「白河御館」と呼ばれた城助職は白河荘に本拠を持ち荘園の在り地管理にも関わっていたとされる〔樋口2004〕。阿賀野市寺社には城氏の拠点と推定される大坪遺跡〔荒川^{ほか}2006〕や平安時代末期から鎌倉時代初頭の経塚である横峯経塚〔川上1979〕が存在した。城氏は治承・寿永の内乱期(1180～1185年)に勢力を衰退させ、1201(建仁元)年の鳥坂山の戦いで滅亡する。

13世紀になると越後の荘園には地頭職を得た関東御家人が入部する。白河荘は伊豆の御家人である大見家秀が地頭職を得たと推測される〔樋口2004〕。白河荘の地頭職は家秀の息子である大見実景に譲られた。白河荘は上条と下条に大きく二区分されており、大見実景は白河荘の下条に含まれる山浦四箇条・水原条・船江条の地頭職を嫡子である行定に、上条に含まれる安田条の地頭職を庶子の時実譲り渡す。1283(弘安6)年、大見行定は白河荘の地頭職を七郎家綱と次男家政に譲り渡す。嫡子である大見家政は山浦四箇条の地頭職、庶子の大見家綱は水原条地頭職を得た。このように山浦四箇条の地頭職は惣領である家政の系統に伝領され、安田条地頭職は庶子である時実とその嫡子頼資の系統、水原条地頭職は家綱の系統が伝領していく。大見氏は鎌倉末期に安達時頼に白河荘地頭職を奪われる。この地頭職は鎌倉幕府滅亡後、建武新政権の成立と南北朝の対立、観応の擾乱といった中央政治の変動によって保持者が佐々木貞氏、細川頼和などに変わり、大見氏に戻った史料は確認されていない。大見氏は白河荘地頭職を失ったものの、白河荘に一分地頭職ともいふべき下級の地頭職を保持していた可能性があり、これを根拠として国

人領主として成長していった〔樋口 2004〕。

山浦四箇条や安田条、水原条などの地頭職を得た大見氏一族は、領域支配を強め 1394～1427（応永年間）年には山浦氏、安田氏、水原氏を名乗り国人領主へと転化する。なお、大見氏嫡流は大見家経に子がなく、1398（応永 5）年に水原氏から初犬丸を養子として迎えた後に水原氏に統合されたとされている〔樋口 2004〕。白河荘には安田氏、水原氏以外にも 1504～1521（永正年間）年に作製された『蒲原段銭帳』に現れる堀越氏や下条氏が存在しており、大見氏一族を含め「白河之面々」と呼ばれる集団をなしていた。白河荘を含む阿賀北地方は府中の守護・守護代の勢力に対して強い独立性を保持していた。これに対し 14 世紀末、上杉房定が越後守護になると守護勢力の地方扶植が図られ、下条山浦には上杉重恵が入部し、山浦上杉氏となった。越後守護上杉頼方と守護代長尾邦景の争いで生じた応永の大乱は阿賀北でも国人層を二分した争乱となった。1423（応永 30）年には大見氏一族を含む白河荘の国人領主「白河之面々」や加地氏、新発田氏が守護代側に寝返り山浦の守護勢力や中条氏と敵対している。この際、堀越氏の拠点である堀越館と思われる「堀越之要害」が陥落している。応永の大乱は守護上杉房方の敗北によって終結するが、その後も大見氏一族は阿賀北地方に勢力をのぼす守護・守護代勢力からの強い影響を受けつつ戦国期をむかえる。

2) 白河荘の中世遺跡

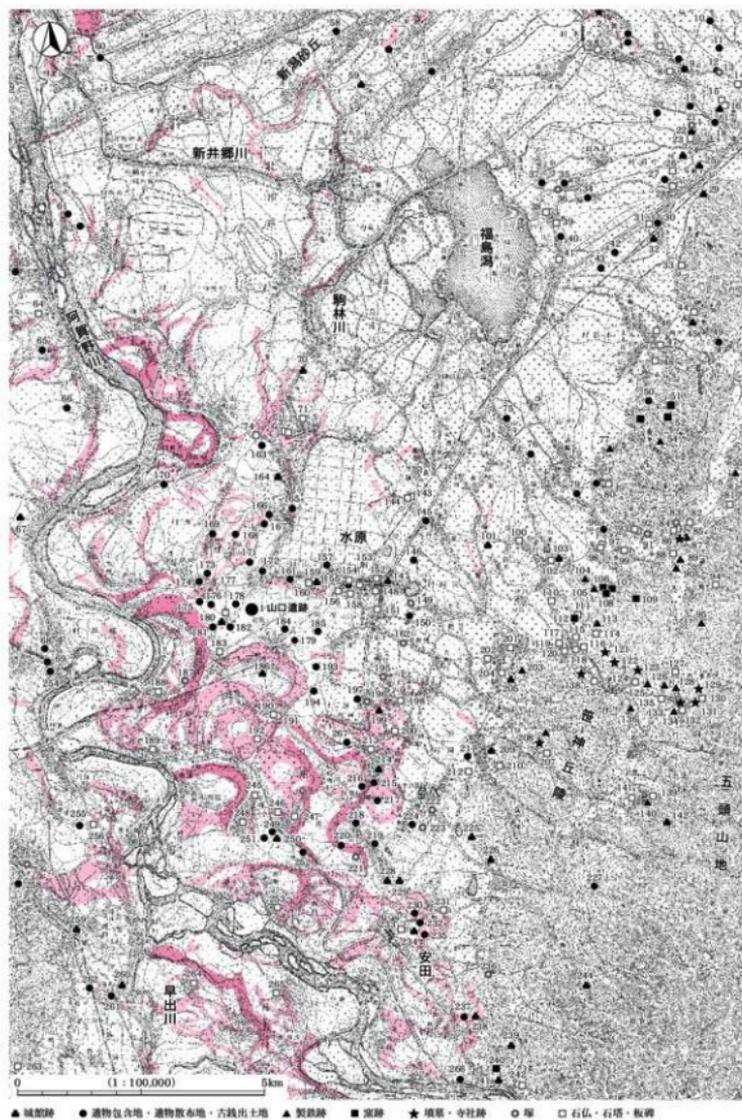
阿賀野川右岸における中世遺跡は、福島潟以南の平野部と笹神丘陵、福島潟以東の平野部、新潟砂丘に分布する（第 5 図）。その多くが近代の集落近くに位置し、当地域においても中世から近世にかけての集村化の動き〔坂井 1997〕があったものと考えられる。大坪遺跡〔219〕では、12 世紀の水路が明治期まで維持・利用されており〔荒川 2006〕、当地域には中世の景観が色濃く残されている。当地域における中世遺跡の概要については、大坪遺跡〔荒川 2006〕や山口遺跡〔荒谷 2010〕などで詳細が記されていることから、ここでは白河荘の区分と遺跡分布について述べることにする。

白河荘の区分を検討した中野尙任〔1976〕は、山浦四箇条を阿賀野市折居から大室にかけての地域とし、折居川流域を A 地域（山間部を A I 区、平野部を A II 区）、白川（大荒川）流域を B 区、安野川流域を C 区とした。また、安田条は旧安田町周辺とされた。水原条・船江条については、北限を飯野一舟居-飯塚-榎舟渡を結ぶ線、東限を榎舟渡-千原-天神堂を結ぶ線、西限を阿賀野川と推定した。そして、安田条との境界に当たる南限は「境塚が一直線上に点在して南境を形成している」として、六日野の南側を通るラインを推定した（第 6 図）。同論文にその根拠として写真に示された「下条の境塚」は、境塚遺跡の北東約 300m にある三辺稲荷神社のことであり¹⁾。この神社は明治ころに水原の豪農の旧佐藤家（本泉屋）が私邸内の祠をこの地に移したのが始まりで、それ以前は畑だけの土地であった²⁾。したがって、中野の言う塚はなかったと判断される。しかし、昭和初期の土地更正図を見ると、この周囲には 1955（昭和 30）年の町村合併以前の白河町大字下条・堀越村大字百津・京ヶ瀬村大字前山の 3 か所に「境塚」の小字があり、しかも 3 町村が接する境界に位置する。「境塚」の字名はこれら町村の境界を指し示し、更に中世白河荘の水原条と安田条の境界に由来する可能性はあろう。

中野〔1976〕によって推定されたこれらの区域には、いくつかの遺跡集中域を見いだすことができる（第

1) 新潟県立歴史博物館に寄贈された中野尙任の写真に同一のものがあり、この前後の写真を含めて現況と照合し、確認した。

2) 阿賀野市教育委員会の遠藤慎之介による神社を管理していた宮尾氏からの聞き取りに基づく。三辺稲荷神社周辺はかつて旧佐藤家の所有地であり、宮尾氏は祠の移設にあたりその管理を任せられたという。



第5図 周辺の中世遺跡分布

（大日本帝國陸地測量部発行 大正3年「津川」大正8年「新瀨」「新発田」「新津」 1:50,000 原図、旧河道は大矢・加藤[1984]を参照。）

5図)。

水原条・船江条の範囲では、阿賀野川旧河道右岸、駒林川流域、そして水原市街に集中城が認められる。阿賀野川旧河道②右岸には下ノ橋館跡(180)を中心として、町道上遺跡(174)・柄目木遺跡(178)・村前東A遺跡(176)などの集落遺跡が集中する。町道上遺跡は13～15世紀の方形竪穴状遺構や井戸などがあり〔古澤2002〕、村前東A遺跡では13世紀中葉～14世紀前半の掘立柱建物を中心とする集落である〔加藤2010〕。また、町道上遺跡・柄目木遺跡・村前東A遺跡・山口遺跡〔荒谷2010〕(179)で道が見つまっていることは陸上交通を知る上で注目される。駒林川流域には、駒林要害跡(164)を中心に土居内西遺跡(165)や石仏(71～74)がある。土居内西遺跡は14世紀を中心とし、方形縦板組井戸が検出されている〔古澤2005〕。旧水原町の中心である水原市街には水原氏の居館と推定される水原館跡(147)と下条氏の居城とされる下条館跡(159)を核とし、遺物散布地や石仏が数多く残る。水原館跡は壕、溝、柵列、掘立柱建物、ピットが検出され、13～15世紀の珠洲焼、甕器系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃焼、茶白などが出土した〔川上1977〕。

水原条・船江条と安田条との境界に位置する境塚遺跡の周辺には、ほぼ同時期の山口野中遺跡(184)や三辺稲荷遺跡(185)、15世紀後半を主体とする新町遺跡(193)のほか、百津湯を挟んだ西側に七島館跡(186)がある。山口野中遺跡では境塚遺跡D区で見つかった道1の続きが確認され〔古澤2011〕、境塚遺跡を中心に少なくとも500m四方に及ぶ遺跡群が存在していた可能性が高い。

安田条の範囲では、野地城跡(199)・堀越館跡(214)・大坪遺跡(219)を南北に結ぶに範囲に遺跡が集中する。現代の国道49号に沿うが、その西側に蛇行する旧河道で結ばれていたことが読み取れる。大坪遺跡は11世紀後半～12世紀を中心とし、四面廂付総柱建物や屋敷墓と見られる木棺墓など多数の遺構が検出された〔荒川2006〕。遺跡と城氏の盛衰と一致することや、同時期の横峯経塚(223)との位置関係などから城氏に関係した遺跡と推定される〔荒川2007〕。遺跡の南地区では13世紀後半～14世紀の竪穴状遺構も見つまっている。堀越館跡は1423(応永30)年に陥落した「堀越之要害」に比定され、堀跡・区画溝・鹿棄土坑・土坑墓とともに、白磁・青磁・中国天目茶碗などの舶載品や茶入れ・茶壺・香炉・水注・茶白などの茶道具が出土した〔小田2001〕。近接する鴨深甲遺跡も堀越館跡と同時期の集落である〔高橋2006〕。西側の阿賀野川右岸には分田館跡(250)を中心とする集中城があり、玉泉寺の石仏(248)など多くの石仏もある。江戸期には三国街道中通りが通り、新津方面から阿賀野川を渡る分田の渡しがあつた場所である〔小松1995〕。旧安田町の中心街には安田氏の居城とされる安田城跡(234)を中心とする集中城が認められる。更に南側には、六野瀬館跡(238)や赤坂山砦跡(241)を中心とする集中城があり、笹神古窯の一つで13世紀中ころ～後半に操業した瓷器系窯の赤坂山中世窯跡(240)〔小田2002〕とその製品の積み出し場と推定される六野瀬遺跡(266)〔石川1992〕を含む。

山浦四箇条の範囲のうち折居川流域のAⅠ区には、女堂館跡(87)や上の山塚群(83)を中心に石仏や製鉄跡が分布する。一方、AⅡ区には北側の北沢窯(51)に代表される一群と南側の狼沢中世窯跡(106)をはじめとする一群の窯跡があり、笹神古窯の大半が集中すると言ってよい。これらのうち、北沢窯・背中炙窯跡は須恵器系窯、狼沢1号窯・兎沢中世窯跡(108)・堤上窯跡(107)は瓷器系窯である。また、これらの周囲には製鉄跡も多数分布しており、この地区が大規模な生産域であったことがわかる。山浦四箇条の中心とされるB区は、寺社・墓・石仏といった宗教関連遺跡が多数集中する。華報寺はその中心的な寺院であり、境内には多数の石仏や1299(永仁7)年銘時宗板碑、鎌倉期の大見行定の塔と推定される法雲印塔などの石造物(130)がある。華報寺背後の急斜面には目洗沢中世墓群(131)や経沢中世窯

城(129)、前面には蓮台野中世墓域(133)が営まれた。1283(弘安6)年の大見行定談状では笹神丘陵での殺生禁断が記されているが、この背景にはこの地が霊場であることが考えられる。蓮台野では戦後の開墾の際に多数の石仏が出土しており、石仏の生産地と推定されている[中川1959]。また、阿賀野市内にある207基のうち203基が出湯華報寺周辺にある120基と同一型式であり、華報寺周辺で作られた石仏が白河荘や周辺に広がっていた可能性がある[水澤2002]。本地域には製鉄跡も数多くあるが、窯跡は瓷器系窯である権兵衛沢窯跡(112)のみが確認できる。C区では平野部側の大室城跡(209)及び五頭山麓の村杉城跡(142)の周辺に製鉄跡や石仏が分布するが、窯跡は確認できない。

以上のように各地域で認められた多数の遺跡集中域は、中世白河荘の代表的な村落を表しているものと考えられ、城館・集落遺跡・石仏等で構成され、地域によって窯跡・製鉄跡・石仏・塚が集中するなどの特徴がある。そして、こうした遺跡集中域は、境塚遺跡と山口野中遺跡とを結ぶ幹線道路に代表される陸上交通と、河川や潟を利用した内水面交通で有機的に結びついていたものと推測される。

第三章 調査の概要

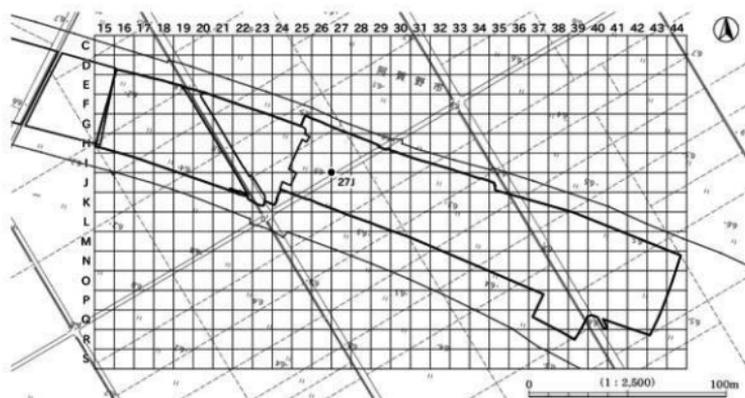
1 グリッドの設定

2010（平成22）・2013（平成25）年度の調査区は、2008（平成20）年度の調査区東側に隣接するため、グリッドの設定にあたっては、2008年度のものに踏襲した。グリッドの方向は真北を基準に設定し、国家座標¹⁾のX座標=203820.000、Y座標=61400.000を基点（1A杭）とし、南北・東西それぞれ10mの方眼を組み、大グリッドとした（第7図）。大グリッドの呼称は、遺跡を覆う方眼を西から東へ向けて算用数字（1・2・3…）、北から南へ向けてアルファベット（A・B・C…）を付し、これを組み合わせた。両者の組み合わせにより「27J」のように表示した。

小グリッドは大グリッドの中を2m四方に25分割した。小グリッドには1～25の番号を付し、北西隅を1、南東隅を25となるように配列した。グリッドは、大・小グリッドを組み合わせて、「16G11」、「32L15」のように表記した。遺構の検出位置及び、包含層出土遺物の地点などは、基本的にこの組み合わせで記録した。また、この小グリッドの北西隅交点を「〇〇杭」と呼称した。今回の調査区内で、古代の遺構の中心に位置する27J1杭の座標値¹⁾は、X座標=203730.000、Y座標=61660.000である。

2 基本層序

遺跡は阿賀野川右岸の自然堤防上に立地し、標高は約6mを測る。現況は水田である。遺跡西側には人工河川として改修された旧小里川が流れている。2008年度の調査では、弥生時代から古代までの地形



第7図 グリッド設定図

1) 「平成23（2011）年、東北地方太平洋沖地震（気象庁）」以前の数値

が旧小里川へ向かって斜面を形成していることが明らかとなり、河川が現在の流路と近接して流れていたことが推定されている〔荒谷ほか2010〕。

基本土層は2008年度調査の所見を参考に、Ⅰ～Ⅷ層に分層した。このうち、Ⅲ層(2008年度調査のⅢa層)が中世、Ⅳa・Ⅳb層(2008年度調査のⅣ層)が古代、Ⅴ層が弥生時代、Ⅶ層が縄文時代の遺物包含層である。遺構検出面は、中世についてはⅣ層、古代はⅤ層、弥生時代はⅥ層であるが、全時期を通じての最終検出面はⅥ層面とした。

土層を観察すると、遺跡西側(第10図柱状図⑥以西)では前述のようにⅣ・Ⅴ層が河川へ向かって急激に落ち込む斜面となる。弥生時代の遺構は、この斜面への落ち際に構築されている。遺物は遺構付近から出土するほか、斜面に捨場を形成する〔荒谷ほか前掲〕。2010年度は高位の平坦面である221グリッドでSI3005のⅠ基を検出したのみで、遺物もⅤ層上面で極めて少量出土しすぎない。このような状況から、遺構は旧小里川の流路によって造られた自然堤防状の微高地に沿って構築されていることが推定され、遺構は流路に沿うかたちで北東-南西方向に延伸するものと考えられる。

古代の遺構は弥生時代の遺構分布とは異なる。2010年度調査区西端から東側(柱状図⑦以东)は、近代の耕地整理により大部分が削平されている。しかし、Ⅳ層の検出範囲や、Ⅴ・Ⅵ層の堆積状況から、おおよそその地形が類推できる。まず、斜面と平坦面の変換点(柱状図⑦付近)で微高地が形成され、これより東側へ向かって平坦な低位面が続く(柱状図⑦～⑩)。この範囲での遺構は、土坑・溝・ピットなどが検出されたが数は少ない。それ以东の柱状図⑪～⑬間で、また微高地が形成されていたと考える。柱状図⑬は北東-南西方向の農道部に位置し、古代の遺物包含層(Ⅳ層)が残存していた。地形的に高所であったことを示すように、古代の遺構もこの付近で多く検出されている。ただし標高が高かったため、農道以外は耕地整理で大きく削平を受ける結果となった。それ以东は、柱状図⑬付近で一旦大きく落ち込むが、また上がって平坦地(柱状図⑭～⑯)を形成している。この範囲の平坦地は水はけが良くなかったのか、Ⅳ層の層境は安定しない。水田等の利用も考えられるが、痕跡を確認することはできなかった。この範囲では砂質を多く含むⅥ層がⅥ層下位に存在し、透水しやすい環境であったと考える。

この後、遺跡西側でⅢa・Ⅲb層が堆積し、斜面部を埋没させる(柱状図①・②)。また、対岸の柄目木遺跡においても斜面部にⅢ層が厚く堆積し、Ⅲ層上位には中世の遺物包含層のⅡ層(当遺跡Ⅲa層)が堆積し、当遺跡と同様の堆積過程を示している〔佐藤ほか2010〕。したがって、河川は中世の段階に川幅が縮小したものと推定される。斜面部の埋没により平坦面が西側へと広がり、中世の遺構が調査区の全面で検出されるようになる。遺構が古代のような分布の偏りを見せないことから、周辺一帯がおおむね平坦な地形であったものと推定する。

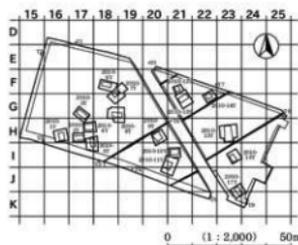
このほか、下層の試掘調査では縄文時代晩期の遺物がⅦ層から出土した。遺物出土の7TのみⅦ層をa～d層に細分したが、遺物はⅦd層から出土した。柱状図⑪と⑫間の農道でも縄文時代晩期の遺物が出土したが、その出土標高は7Tと比較して約2m上位であり、堆積状況は一様ではない。

基本層序は以下のとおりである。

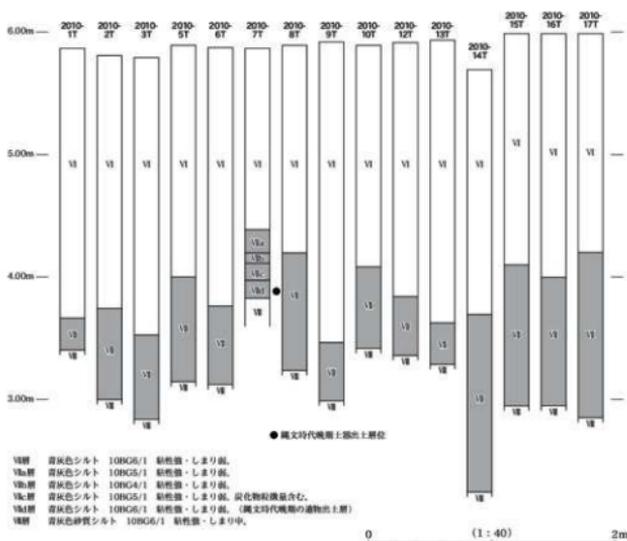
- Ⅰa層 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。表土・耕作土。
- Ⅰb層 10Y5/1 灰色土 粘性弱・しまり中。水田床土。鉄分を多量に含む。古代・中世・近世以降の遺物が混在して出土する。
- Ⅱ層 10YR4/4 褐色シルト 耕地整理以前の旧表土。旧地形が斜面となる遺跡西側(2008年度調査区)において堆積が認められる。今回の調査区では堆積が認められなかった。

2 基本層序

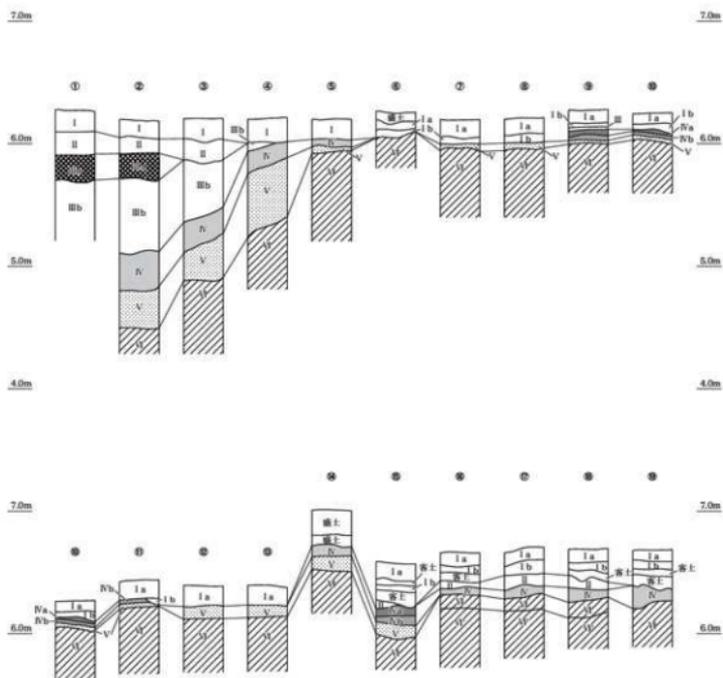
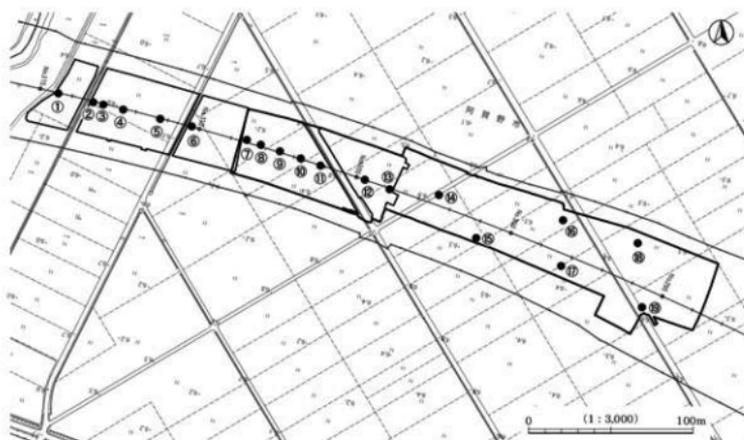
- Ⅲ層 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。中世の遺物包含層。2008年度調査区のⅢa層に相当する。斜面部を埋積させたⅢb層は、今回の調査区では堆積が認められなかった。
- Ⅳa層 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱・しまり中。黄褐色シルト粒微量含む。古代の遺物包含層。
- Ⅳb層 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱・しまり中。黄褐色シルト粒多量含む。古代の遺物包含層。
- V層 10YR5/6 黄褐色土 粘性弱・しまり中。部分的に炭化物粒含む。暗褐色シルト粒微量含む。弥生時代の遺物包含層。
- Ⅵ層 10YR5/6 黄褐色土 粘性弱・しまり中。無遺物層。下層の試掘調査の結果では、層厚は約2mと厚く堆積するが、遺跡東側では砂質を多く含む層が存在するので、これをⅥ'層とした。
- Ⅶ層 10BG6/1 青灰色シルト 粘性強・しまり弱。下層試掘調査の7Tのみ、Ⅶa～Ⅶdに細分した。
- Ⅶa層 10BG5/1 青灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- Ⅶb層 10BG4/1 青灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- Ⅶc層 10BG5/1 青灰色シルト 粘性強・しまり弱。炭化物粒微量含む。
- Ⅶd層 10BG6/1 青灰色シルト 粘性強・しまり弱。縄文時代の遺物包含層。
- Ⅷ層 10BG6/1 青灰色砂質シルト 粘性強・しまり中。無遺物層。



第8図 下層試掘調査の位置図



第9図 下層試掘調査の柱状図



第10図 基本層序と柱状図

第IV章 遺 構

1 記述の方法と遺構の分類

A 基本方針

遺構の説明は、本文(遺構各説)・観察表・図面図版・写真図版を用いた。すべての遺構について種別・グリッド・出土遺物を記載した表を作成し、主要遺構や掲載遺物出土遺構について、規模等を記載した観察表を作成した。遺構の平面形態及び計測値は、遺構検出面での数値である。特に重要と思われる遺構について、本文・図面図版・写真図版での解説を加えた。写真図版は選択して掲載した。遺構各説は、基本的に下記の種別(SI→SB→SA→SE→SK→SF→SX→SD→SG→P)、遺構番号(小→大)の順で行い、グリッドは「〇〇区」と記述した。土層の色調は『新版 標準土色帖』[小山・竹原 1995]に拠った。

B 遺構の表記方法

遺構名は、遺構種別の略号と数字の組み合わせとした。遺構種別の略号は、竪穴建物を「SI」、掘立柱建物を「SB」(2013年度調査は「13SB」)、柵・材木列塙を「SA」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、焼土を主体に含む土坑を「SF」、炭化物集中範囲を「SC」、溝を「SD」、ピットを「P」、性格不明遺構を「SX」とした。溜池の機能が想定されるものを、別途に「SG」とした。

遺構番号(算用数字)は、時代・グリッド・種別に関係なくすべて検出順の通し番号とし、遺構種別の後ろに番号を付した。2010年度調査は1700番～3090番まで、2013年度調査は4001番から5080番を使用した。ただし、掘立柱建物・柵に関しては、別途に1番から番号を付した。なお、発掘調査の進行過程で、通し番号に欠番が生じたものもある。

C 遺構の記述

遺構の平面形態及び断面形態は[加藤 1999]の分類基準、埋土の堆積状況の分類基準は[荒川 2004]に準拠した(第11・12図)。平面形の規模は長軸(最大長・径)を計っているが、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状を考慮して、残存率が高い位置で計測している。短軸は基本的に長軸と直交する方向の最長部で計測した。深度(深さ)は遺構検出面からの最深部を計測した。井戸と土坑の分類については、深度が長軸より大きいものを基本的に井戸としたが、埋土の堆積状況や遺物出土状況を考慮して井戸に分類したものもある。主軸方向は遺構の長軸を基準に真北から東西に傾く角度を測定し、「N-10°-E」のように表記した。

重複関係は「<」「>」「=」「≠」の記号を用いた。記号の内容は「<P1」とは、P1に切られ、「>P1」とはP1を切っていることを示し、「=P1」はP1と同時期、「≠P1」はP1と重複関係にあるが、新旧が不明なことを示す。

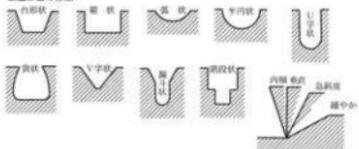
D 掘立柱建物

柱穴(ピット)が方形または長方形で、一定の間隔で並ぶものを掘立柱建物とした。方位や柱穴の深さ

平面形態の分類

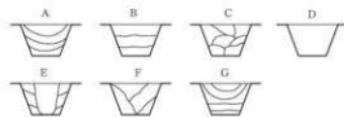


断面形態の分類



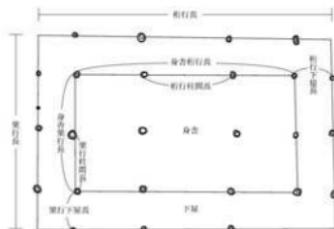
自然状	底面に平斜面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底面に平斜面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
溝状	底面に平斜面を持たない溝状で、緩やかに立ち上がるもの。
平円状	底面に平斜面を持たない溝状で、急斜度で立ち上がるもの。
U字状	横断面のほぼまわりを覆う溝が深くて、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
V字状	横断面のほぼまわりを覆う溝が深くて、内傾した後に垂直でない、外傾して立ち上がるもの。
楕円状	横断面のほぼまわりを覆う溝が深くて、急斜度で立ち上がるもの。
V字状	高的な底面を持ち、急斜度で立ち上がるもの。
扇状	下屋がU字状、上屋がV字状の一段高さからなるもの。
扇状状	扇状状の立ち上がりを持つもの。

第 11 図 遺構の平面・断面形態の分類 [加藤 1999]



A レンズ状	敷層がレンズ状に堆積する。
B 水平	敷層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	層上が単一層のもの。
E 柱状	柱状と思われる土層が堆積するもの。
F 傾斜	斜めに堆積するもの。
G 水平・レンズ	層上水位は水平に、土位はレンズ状に堆積するもの。

第 12 図 遺構埋土の堆積形状の分類 [荒川 2004]



第 13 図 掘立柱建物の計測位置 [荒川ほか 2006 を改変]

を検討した上で、現地で復元したものと整理作業時に図上復元したものがある。柱間の多い方向を「桁行」(長軸)、少ない方向を「梁行・梁間」(短軸)とした。中世の建物型式は [宮本 2001] の分類に従い、梁間一間型建物と総柱建物に分類する。古代の建物型式については、側柱建物と総柱建物に分類した。各掘立柱建物の計測値については観察表に示した。規模及び面積の計測基点は、第 13 図 [荒川ほか 2006] に基づくが、柱位置 (推定含む) を判断する基準の優先順位は「柱当たり→柱痕下端→土層断面→柱痕上端→遺構下端中央」とした。梁行柱間長及び桁行柱間長は、隅柱同士を結ぶ柱間寸法 (距離) の長い方で示した。計測か所を示す場合は、「平・妻」ではなく、「方位+面」で表記した。主軸方位は、主軸長の方向について真北を基準として東西に傾く角度を計測した。面積 (床面積) は上記桁行長・梁行長の乗算値とし、現代の規模と比較しやすくするため、畳数 (1.8 × 0.9 = 1.62m²) にも換算して記述した。廂がある建物の場合は、廂長のほか、身舎と下屋を合わせた全体の面積を計測した。

2 中世の遺構

A 概 要

中世に所属する遺構は、2010 年度調査で掘立柱建物 15 棟、井戸 24 基、土坑 12 基、溝 18 条、ピット 753 基を検出した。これらは、IV層 (古代の遺物包含層) の堆積が認められる調査区南西部ではIV層上面、これ以外ではVI層上面で確認した。埋土は田層起源の褐色土・黄褐色土が堆積するもののほか、暗褐色土が堆積するものも見られる。暗褐色土を埋土にもつ遺構は、基本土層部分でIV層を切って構築されていることを確認している。2013 年度調査では掘立柱建物・井戸は検出できず、土坑 1 基、溜池状遺構 1 基、

性格不明遺構4基、溝23条、ピット39基を検出した。中世に属する遺物の出土も希薄で、溝も規格性のある区画溝がほぼ認められないことから、集落等の縁辺部であったと考える。

B 掘立柱建物

建物は19ラインより西側に13棟、21・22ラインに2棟存在する。また、建物の分布と重なるように井戸も集中して検出されている。このことから、当該期に一般的に認められる建物・井戸がセットとなる集落形態と考えられる。建物の分布が希薄な調査区東側においても、井戸が検出されていることから建物の存在が想定されるが、後世の削平の影響により確認できなかった。

分布が密な区域では、15・16G・H区と17～19F・G・H区の大きく2つのまとまりが認められる。このうち、後者は区画溝(SD2075)の内側に分布する。検出した建物は、配置から建物同士の重複関係が認められ、また、井戸と重複するものも存在することから、複数の時期にわたって集落が営まれていたことが推定される。

主軸方向は、南北棟が8棟、東西棟が7棟である。東西棟は、東偏87～90°とほぼ東西を向くもの(SB1～6)、東偏82°のやや軸が北に振れるもの(SB7)がある。南北棟は、東偏1～3°(SB8・15)・西偏3°(SB13)でほぼ真北を向くもの、東偏7°(SB9)・西偏5～7°(SB10～13)とわずかに軸が振れるもの、西偏23°と大きく軸が振れるもの(SB14)がある。

構造は、SB14・15の2棟は総柱建物、これ以外の13棟は側柱建物である。側柱建物は1×3間が6棟、1×2間が7棟となり、この2種が主体となる。規模は、1×3間のものは10～40m²、1×2間のものは7～25m²となる。

柱穴の埋土は、色調からA～Eに分類した(第3表)。検出層位・埋土の特徴から、A～Dが中世、F・Gが古代と認識した。中世に所属する建物は、埋土Aで構成されるもの1棟(SB13)、埋土A・Bで構成されるもの6棟(SB2～5・9・11)、埋土Bで構成されるもの6棟(SB1・6～8・10・12)、埋土Dで構成されるもの2棟(SB14・15)となる。このうち、SB1・8に重複関係が認められること、建物のほとんどが埋土A・Bで構成されることから、埋土により明確な時期差を見いだすことはできなかった。

埋土層位	主体土
A	灰黄褐色土
B	褐灰色土(灰黄褐色土粒多量含)
C	黄褐色土
D	黒色～黒褐色土
E	黄灰色土

第3表 中世の柱穴埋土の分類

SB1 (図版11・86)

17・18F・G区に位置する梁行1間、桁行3間の建物で、SB8と重複し、これより古い。柱穴の掘形は円形・楕円形で、上端長径24～32cm、深度は15～40cmである。このうち、P2339・2347では柱痕が認められ、径は15～18cmと推定される。また、P2159・2339・2347からは礫が出土しており、P2347からは茶臼(41)が出土した。P2339・2347は1層からの出土で、土層断面の観察から柱を抜き取った後、茶臼・礫などを入れたことが推定される。P2159では礫が底面にまとまって出土しており、柱の根固めに用いられた可能性も考えられるが、上記した柱穴の遺物出土状況から、建物の廃棄に伴って埋設されたものと推定される。

SB2 (図版11・88)

21・22F区に位置する梁行1間、桁行3間の建物である。柱穴の掘形は円形・方形で、上端長径30～36cm、深度は21～52cmである。このうち、P2418・2442では柱痕が認められ、径は10～22cmと推定される。また、P2442からは礫が出土しており、出土状況はSB1の柱穴と類似する。

SB3 (図版11・86)

15・16G区に位置する梁行1間、桁行3間の北面に廂をもつ建物で、建物範囲がSB4・5と重複する。柱穴の掘形は方形・長方形を呈し、旧小里川を挟んで西側に所在する柵目木遺跡I〔佐藤^{ほか}2010〕で検出されたSB98に類似する。上端長径22～30cm、深度は13～41cmである。このうち、P1723・1786では柱痕が認められ、径は10～13cmと推定される。

SB4 (図版12・86)

15G区に位置する梁行1間、桁行2間の建物である。建物範囲がSB5と重複し、南側に隣接するSB4と主軸が平行する。柱穴の掘形は円形・方形で、上端長径はP1728が14cmとやや小型であるが、そのほかは24～30cmを測る。深度は12～22cmである。

SB5 (図版12・86)

15・16G区に位置する梁行1間、桁行2間の建物である。建物範囲がSB3と重複する。柱穴の掘形は円形・楕円形・方形で、上端長径20～36cm、深度は10～32cmである。

SB6 (図版12・86)

18・19H区に位置する梁行1間、桁行2間の建物で、建物範囲がSB9・SD2210と重複する。また、主軸方向は北側に近接するSB1と平行、SB8とは直交する。柱穴の掘形は円形で、上端長径22～30m、深度は11～38cmである。

SB7 (図版12・86)

18G・H区に位置する梁行1間、桁行2間の建物で、SE2176と重複し、これより新しい。また、建物範囲がSB10・SD2210と重複する。柱穴の掘形は円形・楕円形で、上端長径18～32m、深度は14～51cmである。

SB8 (図版12・86)

18F・G区に位置する梁行1間、桁行3間の建物で、SD2299と重複し、これより新しい。また、位置関係からSB1・12・SD2144と重複する。柱穴の掘形は円形・楕円形・長方形・不整形で、上端長径26～54cm、深度は27～47cmである。

SB9 (図版12・86・88)

18・19G・H区に位置する梁行1間、桁行3間の建物で、SD2066・2067より新しく、SD2210より古い。また、建物範囲がSB10と重複する。柱穴の掘形は円形・楕円形・長方形・不整形で、上端長径24～76cm、深度は11～38cmである。このうち、P2304では柱痕が認められ、径は16cmと推定される。

SB10 (図版13・86)

18・19G・H区に位置する梁行1間、桁行3間の建物で、SD2144・2210より新しい。柱穴の掘形は円形・楕円形・方形で、上端長径18～42cm、深度は26～51cmである。このうち、P2096では柱痕が認められ、径は17cmと推定される。また、P2096の検出面では銭貨(61)が出土した。

SB11 (図版13・86)

16H区に位置する梁行1間、桁行2間の建物で、SE1704より新しい。東側にSK1700が隣接する。柱穴の掘形は円形・楕円形・方形で、上端長径24～36cm、深度は6～20cmである。このうち、P1833では柱痕が認められ、径は14cmと推定される。

SB12 (図版 13・86)

18F・G区に位置する梁行1間、桁行2間の建物で、建物範囲がSD2299と重複する。また、主軸方向は南側に近接するSB15と平行する。柱穴の掘形は円形・楕円形で、上端長径18～26cm、深度は13～33cmである。

SB13 (図版 13・88)

21I・J区に位置する梁行1間、桁行2間の建物で、建物範囲がSE1976と重複する。また、北側に蓬萊鏡ほうらいきようが出土したSE2268が近接する。柱穴の掘形は円形・方形で、上端長径22～34cm、深度は15～38cmである。

SB14 (図版 13・86)

16F区に位置する。北東隅の柱穴を確認できなかったが、梁行3間、桁行3間の総柱建物と考えられる。主軸方向はN-23°-Wを測り、他の南北棟建物に比べて北西側へと大きく軸が振れる。柱間寸法は1m前後と狭い間隔で構築されている。柱穴の掘形は円形・楕円形で、上端長径16～28cm、深度は11～41cmである。

SB15 (図版 13・88)

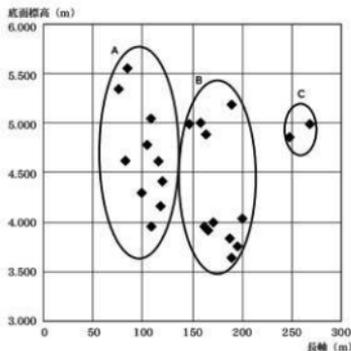
17・18E・F区に位置する梁行2間、桁行3間の総柱建物である。柱穴の掘形は円形で、上端長径20～30cm、深度は32～74cmである。また、埋土はいずれも黒褐色土が堆積しており、近接するSK2043・2089の埋土に近似する。

C 井 戸

井戸は、曲物が掘えられていたSE2292を除くとすべて素掘りで、24ライン以西で検出した。規模は、長軸A:0.76～1.20m(10基)、B:1.48～2.00m(11基)、C:2.50m前後(2基)の3種が認められる。深度は、底面標高3.760～5.550mである。平面規模と深度の関係を見てみると、Aは3.956～5.550mの範囲に分布し、Bは3.640～4.040mと4.880～5.190mの2つに規模が分かれる。Cはいずれも4.866・4.994mを測る(第14図)。このことから、開口部の大きいCは浅く構築される傾向を示すが、このほかのものは、平面規模と深度の増大に相関は認められない。こうした傾向は、2008年度の調査で検出された井戸と同様の状況にあり、形態の相違は機能差或いは時期差によるものと考えられる〔荒谷あらい前掲〕。

分布は、A・Bともに区画溝(SD2075)の内側に多く(A:7基・B:9基)、Aは21ラインより東側、Bは21ラインより西側に偏って分布する状況がうかがえる(図版2)。

埋土には炭化物層の堆積が認められるものがある。これらは埋土中～下位で検出されるもの(3基)、埋土下位で検出されるもの(1基)、埋土中位・下位の2か所で検出されるもの(1基)がある。また、埋土上位に焼土層が認められるもの(1基)もある。このほか、鏝あるいは被熱礫が出土



第14図 井戸の規模

するもの(9基)が存在する。このような出土状況は、井戸の廃棄に伴う祭祀行為を示すと見られる[駒見1992]。こうした出土例は、阿賀野市では町道上遺跡においても認められ、祭祀行為に伴うものと考察されている[古澤2002]。

遺物は珠洲焼、瀬戸・美濃焼、青磁などが出土することから、検出された井戸は中世に属するものと考えられる。

SE1701 (図版14)

16H24・25、16I4・5区に位置する。埋土は14層に識別され、1層にはⅢ層起源の土が堆積し、6層より下位は粘性が強くなる。中位の9層は、約20cmの厚さで土層説明から炭化物が検出された。炭化物に混じって焦げた木片が出土しており、出土状況から、この場で火を焚いたものと推定される。遺物は埋土から珠洲焼壺(18)、12層から被熱礫1点が出土した。

SE1703 (図版14・89)

15H20区に位置し、SD1031の底面で検出された。遺構上部がSD1031との重複により欠失するが、これを考慮に入れても、深さ1m以下と浅く構築されている。3・4層は、鉄分を含むにぶい黄褐色シルトが堆積し、調査時には3層から湧水が認められた。

SE1704 (図版14・89)

15H5・10、16H1・6区に位置し、埋土は10層に識別され、1層にはⅢ層起源の土が堆積する。5・7層はにぶい黄色シルト・灰オリーブ色シルトがブロック状に堆積し、土層断面から壁面が崩落したものと考えられる。遺物は陶磁器・礫が出土しているが、土器は埋土中位の2・3・5層、礫は埋土下位の7・8・9層からの出土が多く、両者の出土層位には差異が認められる。礫はいずれも被熱しているが、埋土は焼土などを含まない。したがって、他の場所で加熱された礫が、井戸に廃棄された可能性も考えられる。遺物は、瀬戸天目茶碗(8)、珠洲焼壺・片口鉢(15・25・29・35)が出土しており、このうち、瀬戸・美濃焼碗(10)は、SE2389出土のものとの接合関係が認められた。

SE1934 (図版14・89)

17G17・18・23区に位置し、埋土は8層に識別され、上位の1・2層にはⅢ層起源の土が堆積する。下位の6層には炭化物粒が少量含まれ、被熱した小礫が1点出土した。底面付近の6・8層は、やや砂質の強い黄灰色・黄褐色シルトが堆積する。

SE1976 (図版15・89)

21I16・21区に位置し、井戸の中位～底面にかけては調査中に崩落したため、土層の堆積は不明である。上～中位は10層に識別され、ブロック状に堆積する。崩落のため図示できなかったが、これより下層で炭化物の集積範囲を確認している。遺物は底面から珠洲焼壺・壺(22・27)、埋土から被熱礫が3点出土した。

SE2044 (図版14・90)

19E17区に位置し、深さが78cmと浅く構築されている。埋土は9層に識別され、上部は部分的に攪乱を受けている。1～4層は褐色・灰黄褐色シルト、5～9層はにぶい黄色・緑灰色・黄褐色シルトが堆積する。上層は黒味が強く、下層はⅤ・Ⅵ層起源の土が主体で色調は上下で明確に分かれる。

SE2064 (図版15・90)

17H17・22区に位置し、埋土は9層に識別される。上位の1～4層は、黄褐色・オリーブ褐色・黄灰色シルトが堆積し、1・4層は炭化物を含む。5層は砂質の強い黄灰色シルトで、壁面が崩落したものと考えられる。また、底面はオーバーハングする。遺物は埋土3・7層から被熱礫が出土した。

SE2065 (図版 15・90)

17H9・10・14・15区に位置する。埋土は11層に識別され、1・2層はIII層起源の土が堆積する。埋土下位から底面の8～10層は、黄灰色・青灰色シルトがレンズ状に堆積する。2層は約70cmと厚く、3～5層はブロック状の堆積形状を示す。また、埋土から礫が出土した。

SE2173 (図版 15・90)

17I10・18I6区に位置する。埋土は18層に識別され、1～5層は水平堆積、6～10層は斜位に堆積する。特に上～中位の1～3・5・6層は、ブロック状のシルトが混じる。遺物は1層から珠洲焼甕(24)、4層から瀬戸・美濃焼椀(13)が出土した。

SE2174 (図版 16)

18I1・2・6・7区に位置する。埋土は10層に識別される。1・2層はIII層起源の土、3～5層は暗灰黄色土、7～9層は浅黄色シルトが堆積し、底面の10層は色調の暗い黄灰色シルトが堆積する。

SE2176 (図版 15・91)

18G20・24・25区に位置する。埋土は12層に識別され、下位の10層は炭化物層で、約2cmの厚さで堆積する。炭化物とともに、微細な木片も出土している。また、1・7・11層から礫11点、1層から砥石(39)が出土した。砥石と7層出土の礫には被熱の痕跡が認められる。

SE2256 (図版 16・91)

22K2区に位置する。規模・形状はSE1703と類似し、本遺跡の井戸の中では小型の部類に属する。埋土は3層に識別され、1層には炭化物をまばらに少量含む。また、2層から須恵器甕片が出土した。

SE2268 (図版 16・91)

21I8区に位置する。埋土は10層に識別され、上中位には炭化物粒が比較的多く含まれる。遺物は7層から珠洲焼甕(26)、9層から和鏡(60)が出土した。鏡は井戸の中央部に、文様のある背面を上にして水平な状態で出土したことから、埋設された状況を示すと見られる。このほか、8・10層から被熱した礫も出土した。

SE2270 (図版 16・91)

20H13区に位置する。埋土は9層に識別され、1層は炭化物を含む。上位の2～4層はにぶい黄褐色、中～下位の5～8層は灰黄褐色シルトが水平に堆積する。

SE2292 (図版 17)

18F19・20区に位置し、検出時には方形のプランの中央に青灰色シルトが円形に堆積する状況が認められた。土層断面の観察から、円形部分の土はほぼ垂直に堆積しており(1～12層)、最下層の13～17層で2つの曲物が縦に組まれて設置されていた。このことから、井戸側は曲物を積み上げて構築されたものと推定される。残存する井戸側は、下部の曲物(63)の上に幅40cm、長さ40～50cmの板状の木製品(64)を「井」型に組み合わせて、この上に次の曲物(62)を置き、積み上げている。曲物内からは多量の木片が出土した。このほか、3・7・16・18層から珠洲焼片口鉢、18層から珠洲焼の破片を使用した転用研磨具(36)が出土しており、掘り方の16層の片口鉢(30)はV期に比定されることから、構築時期はおおむねこの時期と考えられる。

SE2301 (図版 16・91)

19F16・21区に位置する。埋土は16層に識別され、上位の1～4層は、青灰色シルトや黄褐色シルトが堆積し、中位はにぶい黄色・にぶい黄褐色シルト、下位は青灰色シルトが堆積する。また、3・4層

に炭化物、3層に焼土が含まれる。遺物は2層から青磁碗(5)、10層から被熱した礫が出土した。

SE2348 (図版17・91)

19F25、20F21区に位置する。埋土は19層に識別され、埋土中位の10層、下位の16層は炭化物層である。また、3層には焼土塊が混入する。炭化物は2・3・9・14層にも含まれる。遺物は1層から瀬戸・美濃焼碗、16層から珠洲焼壺、17層から曲物底板(66)が出土した。このほか、14・16層から砥石、礫が出土し、いずれも被熱している。

SE2389 (図版18・92)

21G7・8区に位置する。埋土は6層に識別され、1層はII層に類似する緑灰色シルトが堆積する。したがって、上部は攪乱された可能性が高い。遺物は3層から瀬戸・美濃焼碗が出土し、SE1704-4・5層出土のものに接合した。また、1層から土師質土器皿、4層から珠洲焼壺、礫が出土している。

SE2390 (図版18・92)

21G13区に位置する。埋土は9層に識別され、1層はII層に類似する緑灰色シルトが堆積する。底面付近の6～9層は、灰白色シルトとオリーブ褐色シルトの互層となる。

SE2391 (図版18・93)

21F22区に位置する。埋土は5層に識別され、1層はII層土が堆積することから、部分的に攪乱を受けているものと推定される。2・3層は、ともに層厚50cm以上と厚く堆積する。遺物は3層から珠洲焼片口鉢、礫が出土した。

SE2444 (図版18・93)

22G10区に位置する。埋土は7層に識別され、褐灰色・灰黄色・灰色シルトがレンズ状に堆積する。1・3・6層は部分的に炭化物粒を含むが、底面付近の7層は層厚約10cmの炭化物層である。遺物は埋土から珠洲焼甕が出土した。

SE2523 (図版18・93)

21H14・15区に位置し、遺構南西側に農道が走るため、底面は確認できなかった。しかし、遺構の下位で両側壁が内湾する形状となることから、底面付近までは掘削し、調査できたものと考えられる。埋土は褐灰色・浅黄色・ぶい黄色・黄灰色シルトが堆積し、これらがブロック状に混じる。

SE2535 (図版19・93)

23I19・20区に位置する。埋土は11層に識別され、1～3層はIII層起源の土がレンズ状に堆積する。埋土中位の4層は層厚約4cmの炭化物層で、底面付近の10層は約12cmの炭化物層である。

SE2555 (図版19・93)

23K5・10、24K1・6区に位置する。埋土は10層に識別され、1～3層はIII層起源の土がレンズ状に堆積し、SE2535と類似する堆積形状を示す。埋土上～中位の2～7層は焼土粒・炭化物粒を含み、5層は焼土を多量に含む。また、6層から礫が出土した。

D 土 坑

土坑の大半は23ライン以西で検出した。掘立柱建物に近接するもの6基は、建物と主軸方向を合わせるSK1700の存在から、建物と同時期に機能していた可能性が考えられる。これ以外の6基は、調査区に散在する。埋土の特徴から、灰黄褐色土・褐色土が主体となるもの(SK1700・2254・2262・2276・2291)、暗褐色土が主体となるもの(SK1717・1810・1811・1966・2043・2089・2529)がある。これら

の土坑は、古代の遺構と比べ、埋土の粘性が弱く、色調も異なるため、検出状況から中世に属すると推定される。また、埋土が灰黄褐色土・褐色土のもの（SK2254・2262）は、重複する他の遺構を切ることから中世の中でも新しい時期に構築された可能性が考えられる。以下、特徴的なものについて記述する。

SK1700（図版 19・94）

16H4・9区に位置し、SB11に近接する。主軸方向はSB11と平行で、SB3・4と直交する。西辺はやや湾曲するが、平面形は長方形である。埋土は4層に識別され、上位には灰黄褐色土、下位には暗褐色土が堆積し、1層は近接するSE2704の埋土1層に近似する。底面はやや凹凸がある。遺物は2層から瀬戸・美濃焼椀（12）、3層から釘（46・47）が出土した。

SK2089（図版 19・94）

17E13区に位置する。SB15に近接し、主軸方向は建物と異なるが、埋土は建物柱穴と近似する黒褐色土が堆積する。また、約10m南にあるSK2043の埋土も同様である。底面直上から、自然礫が出土した。

SK2254（図版 19・94）

18H15区に位置し、SD2210を切って構築されている。埋土はⅢ層起源の土が堆積し、3～5層は褐色土・黄褐色土・暗褐色土がブロック状に混じることから、埋め戻されたものと推定される。底面は平坦で、側壁はやや段をもちながら立ち上がる。

SK2262（図版 19）

18I14区に位置し、埋土はⅢ層起源の土が堆積しており、SK2254と近似する。また、焼土ブロックを含み、灰黄褐色土・黄褐色土がブロック状に混じることから、埋め戻されたものと推定される。

SK4257（図版 26・129）

2013年度調査区で検出した土坑で、30K5、31K1区に位置する。長軸方向はN-60°-Eを示す。埋土は2層に識別され、斜位に堆積している。遺物は出土していない。SD4785の北脇に併走するSD4252の延長方向に位置することから、溝の残存である可能性もある。

E 性格不明遺構

SX4135（図版 26・129）

26・27G、25～27H区に位置し、東西に約15m、南北に10m以上の範囲で浅い窪地のような状態で存在する。本遺構の南西隅に風倒木痕と推定されるSX4224が位置する。底面は起伏が激しく、断面形は不整形を呈するものの、埋土は灰白色シルトの単層である。掘込田の可能性も考えられるが、1基のみの検出であり、自然科学分析も実施していない。古代の遺物が出土しているが、埋土の特徴や検出標高から、中世に構築された遺構と考える。また、南側側壁の緩く湾曲するラインは、SD2210・SD2512の延長方向と一致していることから、一連の遺構であった可能性が高い。

SX4224（図版 26・129）

25H10・26H6区に位置する。埋土は灰白色シルトの単層である。遺物は出土していない。平面・断面ともに不整形で、地山との識別も明瞭ではない。SD2210・SD2512・SD4137の延長方向に位置し、溝の残存部の可能性もあるが、自然の落ち込みや風倒木痕の可能性もある。

F 溝

溝は調査区の全域から検出した。2010年度調査では、平面形がa：直線状となるもの（SD1763・1764・

2066・2067・2299)、b: 蛇行しながら延びるもの (SD1031・2144)、c: ほぼ直角に屈曲するもの (SD2075・2210) などがある。埋土は (a) 暗褐色土が堆積するもの (SD2067・2241・2242・2299)、(b) 下位に暗褐色土・上位に褐灰色土が堆積するもの (SD2075の17～19グリッド部分・SD2144)、(c) 暗褐色土を含まず褐灰色・灰黄褐色土が堆積するもの (SD1031・1764・2210) などがある。これらは、SD2066・2067<SD2210、SD2075<SD1031・2210・1764の重複関係を示すことから、(a)・(b)→(c)の新旧関係を捉えることができる。また、埋土は中世の建物柱穴・土坑のものに類似し、検出層位から中世に属すると推定される。

2013年度調査では、農道下の21H区で5条の溝の重複部を検出した。新旧関係をSD2067<SD2288・SD4027<SD2210<SD2066と判断したが、SD2066とSD2210の新旧関係が2010年度調査と異なる結果となった。重複部で溝の走向が屈折していたことから、近似する埋土を認識した可能性はあるが、同一遺構内における構築時期の差や部分的な掘り返し等も考慮する必要がある。25ライン付近 (SD2531他) 以東では、東西方向の溝 (SD4367) 以外に規格性がある区画溝は認められない。26I区でSD2075とSD4302がほぼ直角に合流するが、付近に中世と判断できる遺構が検出できなかったため性格は不明である。30I・J区に位置する溜池状遺構 (SG5080) につながることから排水路としての機能も考えられる。また北東-南西方向で平行する溝 (SD4785・SD4788) 間は、道としての機能が想定できる。

SD1031 (図版20・95)

西側の2008年度調査区から続く蛇行する溝である。13D・E区では南北方向、13F～15H区では北西-南東方向に延び、16・17J区は東西方向、18J区では再び北西-南東方向となり蛇行する。埋土はⅢ層起源の灰黄褐色土が堆積する。底面は凹凸が認められ、底面幅も30～90cmとばらつきがある。

SD1763 (図版20・21)

18H19・20区から18I14区に位置する直線状の南北溝で、南側は調査区外に延びる。北端はSD2067・SD2210と重複し、それぞれに切られる (SD1763<SD2067<SD2210)。SD2288が東側約30m離れた位置に平行しており、同様の性格をもつ区画溝の一つと考える。

SD2066・SD2067 (図版20・21・95)

17H10・15区から東側にほぼ直線状に延びる東西方向の溝で、東端はSD2210と重複することから不明である。両溝に新旧 (SD2067<SD2066) はあるが、SD2066内でも17H区で側壁が階段状となることから、掘り直されたと推定される。遺物は19H14区の1層から椀形滓 (59) が出土した。両溝とも21H区で南北溝のSD2288と掘られるように交差する。北側に約16m離れた東西方向の溝SD2299とともに区画溝として機能していたと考える。

SD2075 (図版20～25・95・125・126)

西側にほぼ直角に屈曲する部分をもつ溝で、今回の調査区では最も規模が大きい。17G・H区は南北方向に延び、17F区で約90度東に屈曲して東西方向へ向きを変え、21F区から調査区外へ延びる。また、24G区以東では北北西-南南東へ延びる溝を検出した。規模・形状・埋土の堆積状況から、SD2705と同一のものと判断した。したがって、平面形態は東辺と西辺が平行せず、ややいびつな形となる。この溝の内側には建物・井戸が存在することから、屋敷地を区画した溝と推定される。便宜上、21F区以西をSD2075A、24G区以東をSD2075Bと呼称する。埋土は地点によってやや異なるが、SD2075Aは下位に暗褐色土、上位には褐灰色土が堆積する。これに対し、SD2075Bでは褐灰色土の堆積する割合が高くなる。

SD2075Aの17F区では、3b～d層が6～8層を切る堆積形状を示すことから、溝は掘り直された可能性がある(遺構分割図(2)のee')。このほか、20F区では底面に炭化物を集中して検出した。底面・側壁に被熱の痕跡が認められないことから、炭化物は廃棄されたものと推定され、付近の埋土がブロック状に混じる堆積形状を示すことから、埋め戻されたものと推定する(図版21、a-a')。遺物は1層から白磁皿(7)、珠洲焼片を転用した研磨具(37)が出土した。

SD2075Bは24G1区から南東方向へ延び、25H11・12区でSD2210・SD2512と重複(SD2512<SD2075<SD2210)する。以後は、緩く湾曲しながら東方向へ延び、30J1区で溜池遺構と考えるSG5080へと至る。SG5080より東側は緩やかに蛇行しながら東へ延び、33J5区で調査区外に出る。26H1・6区でSD4302がT字状に接続し、下半の埋土が共通することから、同時期に機能していたことがうかがえる。またその付近の底面標高が、周囲と比べて約30cm深くなる。埋土は褐色土～灰白色シルトを基調とし、場所によって水平・単層・レンズ状に堆積するが、基本は自然堆積と考える。溝が深く残る区間(26～28I区)の断面形状は、漏斗状または階段状を呈する。2013年度調査区で出土した遺物は古代の遺物が最も多いが、30J4区で青磁(260)が1点出土した。

SD2144 (図版20・96)

蛇行する溝である。18G・H区では北北東-南南西方向、18G7区で東北東-西南西方向に湾曲し、蛇行しながら延びる。幅は20～30cmを測り、当遺跡においては細い部類に属する。埋土は2層に識別され、暗褐色土が堆積する。

SD2210 (図版20～22・96・124)

ほぼ直角に屈曲する部分をもつ溝である。18E～G区では南北方向に延び、18H区で約90度東に屈曲して東西方向へ延び、平面形態はL字状となる。部分的に大きな攪乱を受けており、Ib層の堆積が認められる。埋土はIII層起源の褐色土が堆積し、暗褐色土の堆積が認められないことは、SD1031と類似する。

SD2288・SD4027 (図版21・96・124)

SD4027は21H3～21H13区付近に位置する南北方向の溝で、深度15cm前後と浅い。北側は底面が徐々に浅くなり、明確な端部を検出できなかった。またSD2288は21H19区から21J14区まで直線的に延びてから東側に屈折し、22J21区に至る南北方向の溝である。両溝の長軸は2m程東西にずれ、接続部分も他の溝に切られているため明確ではないが、埋土の特徴や検出時の状況から同一溝の可能性が高い。接続する部分は複数の溝の重複部で、SD2066とSD2210より古い。SD2288の西側約30m離れた位置にSD1763が平行しており、同様の性格をもった区画溝の一つと考える。ただしSD2067との重複関係は、SD1763<SD2067<SD2288であり、同時期に存在したかは不明である。

SD2299 (図版20・21・96・126)

直線状の溝で東西方向に延びる。17F25区から23G4区にかけて位置する。深度12～26cmと浅いが、区画溝と考える。南側に約16m離れた東西方向の溝群(SD2066・2067・2210・2512)と平行して走行し、西端の掘り込み位置はSD2066と揃う。また両溝は埋土の状況も類似する。

SD2531・SD2695・SD4308 (図版22・126)

同一の溝で、25H25区から南へ延び、25J6区で緩やかに屈曲し、24J20区に至る南北方向の溝である。底面には起伏があるものの北に向かって緩やかに傾斜し、幅も狭くなる。北端はSD2075とSD2210の重複地点に近い。走行が同じようにほぼ南北方向を示すSD2288とSD1763との間隔は、SD1763-

SD2288 間が約 30m、SD2288-SD2531 間が約 33m と大差は無く、区画溝としての性格が想定できる。

SD4049 (図版 22・126)

22K10 区から 23K8 区に至る東西方向の溝で、長軸方向は N-85°-W を示す。延長方向から東側に位置する SD2679 と同一の溝と考える。北側に約 25m 離れた SD2210 と平行して走行する。

SD4063 (図版 22)

22J20 区で検出した東西方向の溝で、底面の一部が残存していたものとする。西側 12m 程先の延長方向には SD2288 の屈折部が位置する。平行する東西方向の溝との距離は、北側の SD2210 で約 20m、南側の SD4049 と約 5m の位置になる。現状は浅いが、区画溝の一つであったと考える。

SD4126・SD4127 (図版 25・127)

41・42Q 区に位置する。基本層序IV層上面で検出した平行の浅い溝で、構築時期は古代以降と考えられる。長軸方向は N-85°-E を示す。溝間に畦畔は検出できなかったが、畦畔を盛る行為の結果でできた溝の可能性はある。明治の更生図では、この溝の南側に掘込田が位置している。

SD4137 (図版 22・126)

25H8 区から 25H10 区に至る東西方向の溝で、長軸方向は N-86°-E を示す。SD2512 または SD2210 の東側延長方向に位置することから、同一の溝で、深い部分が結果的に残った可能性がある。

SD4252 (図版 24)

30K8・11・12 区に位置する。長軸方向は N-60°-E を示し、南側に平行して存在する SD4785 の一部である可能性が高い。掘り直しや断面階段状の一部であったことが想定できる。

SD4255 (図版 25・127)

32K12・13・18・19 区に位置する。北西側で SD4788、西側で SD4260 とそれぞれ重複しているが、切り合い関係は確認できず、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。長軸方向は N-74°-W を示す。遺物は須恵器が出土したが、混入である。

SD4259 (図版 25)

32K6・7 区に位置する。長軸方向は N-79°-E を示し、SD4788 の北側に平行して存在する。SD4252 と SD4785 の関係と同じものとする。

SD4260 (図版 25)

32K11・12・17 区に位置する。西側で SD4788、東側で SD4255 とそれぞれ重複するが、切り合い関係は確認できず、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。長軸方向は N-70°-W を示す。

SD4262 (図版 25・127)

SD4785 の延長方向に位置し、31J24 区から 35J22 区に至る東西方向の溝である。32J15 区、34J22 区で蛇行するように屈折する。34J22-35J22 区間は SD4788 の延長方向に位置する。SD2075 と重複する範囲があり、これに切られているが、両者の埋土は近似しており構築時期は近いものと考えられる。長軸方向は N-80°~102°-E を示し、深さは 20cm 弱である。遺物は須恵器が出土した。

SD4263 (図版 25)

33J17・18 区に位置する。長軸方向は N-81°-E を示す。SD4788 と約 4m 離れて平行関係にあり、西側にほぼ同じ間隔で並行する SD4785 と同じ性格を有していた可能性がある。

SD4269・SD4270・SD4272 (図版 24・127)

29H・I、30H・I 区に位置し、中軸が 2.5~2.7m 間隔で平行して走行する溝である。長軸方向は N-9°~

10°-Wを示す。SD4272の両脇に同規模で平行する溝、SD4271・SD4273を検出したが、埋土が異なること、近世遺物を出土する遺構との位置関係などから、別時期の遺構と判断した。溝間の広さから道の機能が想定できる。SD4270はSG5080に切られているが、SG5080を越えた先には検出できない。また、SD4272はSD2075と重複するが、新旧関係は不明で、近い時期に構築されたものと考えられる。

SD4302 (図版 23・125・127)

25K8から26I1区にかけて位置する南北方向の溝である。長軸方向はN-22°-Eを示す。北側でSD2075と重複し、これに切られているが、両者の埋土は近似しており構築時期は近いものと考えられる。南側調査区外で東西方向の溝(SD4367)と交差すると考えるが、新旧関係は不明である。底面は起伏があるが、全体的には北側のSD2075方面へと緩やかに傾斜している。南側の農道下にあたる部分に古代の遺物包含層(IV層)が残存しており、その層を切っていることが確認できた。

SD4367 (図版 22・64・128・150)

25K10区から28K5区にかけて位置する東西方向の溝で、直線的な範囲の長軸はN-8°-Eである。検出面からの深さは、最大32cm、底面標高の高低差の最大は16cmである。底面は起伏があるが、全体的に東側に傾斜する。断面は、おおむね台形状である。北東延長方向にSD4717、SG5080の突出部分が存在し、本来はこの位置までつながっていた可能性がある。また西側は2011年度の試掘調査結果などから、SD2679及びSD4049と同一の遺構であった可能性が高い。

SD4785・SD4788 (図版 24・25・128・129)

SD4785が28L9区から30K10区にかけて、SD4788が29L11区から33J25区にかけて位置する。長軸方向は平均でN-65°-Eを示し、SD4788とは約3mの間隔を開けて平行する。SD4788の方が途切れずに長く検出できた。両溝の29K・L区の形状は断面階段状で、互いの溝側に一段平坦面を設けていることから、ほぼ同時期に構築された遺構と考える。29L区でSD4788が古代の遺物包含層(IV層)を切つて構築していることを確認した。両溝はともに30グリッドライン以東の約10mが深度50～80cmと深くなり、断面箱状またはU字状を呈する。その範囲以外では、深さは15～30cm前後と浅い。埋土は水平またはレンズ状に堆積し、ブロック的な堆積を含まないことから自然堆積と考える。両溝は道の側溝としての機能が想定できるが、路面に相当する溝間には盛土や硬化面は確認できなかった。

G 溜池状遺構

SG5080 (図版 26・129)

30I・J区に位置する。東西両側にSD2075が接続するが、切り合い関係は確認できなかった。大型井戸の掘り方である可能性も考えたが、底面は固くしまり、堆積にも井戸側の痕跡は認められなかった。SD2075とは同時期に構築されたものと考えられ、両側から流れてくる水を溜める溜池として機能していたものと考えられる。水の流れ込みにより削られたものか、溝と接合する範囲の側壁は複数の段をもつ。埋土は上から褐灰色～灰黄褐色シルトを基調とする上層(埋土1～2層)、灰白色粘質土～シルトを基調とする中層(埋土3～5層)、褐灰色シルトを基調とする下層(埋土6～7層)に識別され、レンズ状に堆積している。古代の遺物が出土しているが、SD2075同様構築時期に属するものではない。

3 古代の遺構

A 竪穴建物

地面を掘りこんだ床面をもつ建物であり、2棟を検出した。

SI2368 (図版35・100・103)

22G3・4区に位置する。平面形は長方形を呈し、北側の長辺がやや外側に膨らむ。規模は上端長軸3.54m、深さ0.58mを測る。柱穴は確認できず、北西角にテラス状の平坦面を有する。覆土は1～11層に分かれる。11層は貼り床で、その範囲は底面全体で確認できる。11層上面でSC1～3を検出した。SC1は径約1mの円形を呈し、濃密な炭化物が厚さ5cm程度堆積する。しかし、周堤崩落土の可能性がある9・10層より上に位置することから、本遺構の廃絶後に堆積したものと判断される。したがって、SC1上面から出土した須恵器等も建物廃絶後に遺棄された可能性が高い。SC2・3は長さ50cm前後の楕円形を呈し、11層直上に位置し、一部は11層中に食い込むように堆積する。断面を観察したが、赤化等は確認できなかった。建物に伴うものかは不明である。2～7層は地山由来の土層で、短期間で堆積した可能性が高い。1層は半埋没状態で自然堆積したものであり、SI3048の1層と同じである。遺物は須恵器・土師器(67～84)が出土した。須恵器はすべて後述する胎土B群である点が特徴的である。

SI3048 (図版35・100・104)

24J9区を中心に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は上端長軸4.14m、深さ0.62mを測る。柱穴は壁際にP1・2を確認したのみである。覆土は1～6層に分かれる。6層は貼り床で、その範囲は北側に偏る。床面でSF1～3を検出した。SF1は東壁近くで盛り上がるように堆積していたが、周堤崩落土の可能性のある5層の上に流れ込むように堆積することや、焼土がブロック状になっていることからカマドではないと判断した。SF2・3は炭化物を多く含み、ほぼ水平に堆積する。建物に伴うものかは不明である。2・3層は地山由来の土層で、短期間で堆積した可能性が高い。1層は半埋没状態で自然堆積したものであり、SI2368の1層と同じである。遺物は須恵器・土師器が出土した(85～109)。須恵器は胎土A群を主体としており、SI2368とは対照的である。

B 掘立柱建物

2010年度調査区で8棟(SB16～23)、2013年度調査区で24棟(13SB1～24)を認定した。古代の同時期の遺跡と比較して、総柱建物が多いことが特徴である。また柱の掘形の平面形は、方形を基調とするものと、円形を基調とするものと大きく分けられる。時期差によるものか建物の性格によるものか不明だが、方形掘形の方が柱痕が太い傾向にある。建物規模等については観察表と重複する部分もあるが、重要と考える項目は各説でも記述した。

SB16 (図版36・99・105)

25I区周辺に位置する南北棟の総柱建物で、桁行2間(西面3.98m)、梁行2間(北面3.60m)である。桁行方向は4°西偏し、面積14.33m²(約8.8畳)である。柱間寸法は桁行1.90～2.02m、梁行1.60～1.97mで桁行がやや長い、ほぼ等間隔に構築される。柱筋に歪みは少ない。

SB17 (図版36・105)

22・23I区に位置する総柱建物で、桁行3間(北東面4.95m)、梁行2間(南東面5.04m)である。一部

の柱穴は農業用水パイプにかかり、完掘していない。桁行方向は40°西偏し、面積24.95m²(約15.4畳)である。柱間寸法は桁行1.40～1.99m、梁行2.19～2.57mであり、梁行の方が広い。柱筋は内側と南西面以外は通りが良い。柱穴掘形は方形が基本だが、南隅のP2972は掘形を検出できなかった。北西面のP2738がSB18のP2676と重複し、新旧関係はP2676(SB18)<P2738(SB17)となる。

SB18 (図版36・105・106)

22H区南東付近に位置する東西棟の総柱建物で、桁行2間(北面6.20m)、梁行2間(東面4.76m)である。東面と西面の柱穴位置が外へ膨らむ形状であることから、棟持柱の可能性がある。桁行方向は85°東偏し、面積29.51m²(約18.2畳)である。柱間寸法は桁行2.39～3.82m、梁行2.16～2.65mだが、北面以外は寸法差が少ない。また棟持柱と考えるP2671とP2745の柱間寸法は6.80mである。北面にSD2496、南面にSD2675が平行して近接しており、雨落溝と考える。南面のP2676がSB17のP2738と重複し、新旧関係はP2676(SB18)<P2738(SB17)となる。

SB19 (図版37・105・107)

23I区南東付近に位置する建物で、桁行方向が43°西偏する。身舎は桁行2間(北東面3.86m)、梁行2間(北西面3.42m)の総柱建物で、面積13.20m²(約8.1畳)となる。柱間寸法は桁行1.61～2.26m、梁行1.64～1.77mで、桁行がわずかに広い。この身舎の南西面以外に「外周柱穴列」[文化庁文化財部記念物課編2010]が存在するが、建物本体と柱筋を描えるものとそうでないものがある。北と東の隅に相当する柱穴は検出できなかった。身舎と外周柱穴列の柱間寸法は、北西面1.73～1.85m、南東面1.67～1.78mとほぼ等しく、身舎の柱間寸法とも共通する。北東面は1.90～2.08mとわずかに広い。これを廂と推定すれば三廂建物となり、桁行4間(南西面7.35m)、梁行3間(北西面推定5.42m)、全体面積39.84m²(約24.6畳)となる。身舎と下屋の面積比は、ほぼ1:2である。

SB20 (図版37・105・109)

22G・H区に位置する南北棟の側柱建物で、桁行2間(東面4.69m)、梁行2間(南面3.75m)である。北面と南面の柱穴位置が外へわずかに膨らみ、他の柱穴より小規模であることから、棟持柱の可能性が高い。棟持柱は中軸よりわずかに東側に寄る。桁行方向は1°西偏し、面積17.59m²(約10.9畳)である。柱間寸法は桁行2.07～2.62m、梁行1.51～2.24mで、桁行が広い。棟持柱と考えるP2619とP3039の柱間寸法は4.76mであるが、北面の棟持柱を北側に隣接するP2644とした場合は4.97mとなる。北側に約1.8m離れて、桁行方向と梁行寸法がほぼ同じSB21が存在する。

SB21 (図版37・109)

22G区に位置する南北棟の側柱建物で、桁行2間(西面4.13m)、梁行1間(北面3.52m)である。南側に約1.8m離れて、桁行方向と梁行寸法がほぼ同じSB20が存在し、北側にはSI2368等が隣接する。柱穴規模は北面以外が小規模で、南東隅は検出できなかった。桁行方向は1°西偏し、面積14.54m²(約9.0畳)である。柱間寸法は桁行1.74～2.39mで、梁行が広い。

SB22 (図版37・108)

21H・I区に位置する東西棟の総柱建物で、桁行3間(南面3.56m)、梁行2間(西面4.36m)である。桁行よりも梁行の寸法が大きい。東側に2m前後離れて、桁行方向と梁行寸法がほぼ同じ13SB4が存在する。建物全体のほぼ中央にP2915が存在し、中軸の柱筋にもあたることから構成柱穴と考えた。桁行方向は87°東偏し、面積15.52m²(約9.6畳)である。柱間寸法は桁行1.17～1.27m、梁行2.00～2.32mで、梁行の方が広いというよりは桁行が狭い。

梁行方向と一致するSD2959とSD2960が建物内側に存在するが、関係は不明である。溝の形状・規模は雨落溝と似る。この建物の柱穴が同時期のものでないと仮定すれば、東側に隣接する13SB4の廂や付属施設等の拡張または縮小に伴う痕跡の可能性を考慮する必要がある。この解釈は、桁行の柱間が他の建物と比べて狭いことも符合する。

SB23 (図版 38・109)

20J区で検出した建物である。調査区外にかかるので桁行方向や構造は不明であるが、他の建物との位置関係から東西棟の可能性が高い。東西棟の場合は桁行方向が89°東偏しており、現状では北面2間(3.58m)、東面1間(1.93m)、柱間寸法は北面1.68～1.92m、東面1.93mとほぼ同じである。

13SB1 (図版 43・130)

25I区に位置する総柱建物で、桁行2間(北面5.60m)、梁間2間(西面3.42m)の東西棟である。桁行方向は85°東偏し、面積19.15m²(約11.8畳)となる。近似した桁行方向をもつ建物が東側(13SB2)と南側(13SB20)に存在する。また南東側に存在する13SB8の柱穴P4203・P4201に、本遺構の柱穴P4196・P4197がそれぞれ切られることから、新旧関係は13SB1<13SB8となる。柱間寸法は桁行2.55～2.8m、梁間1.57～1.85mの範囲内にあり、ばらつきは比較的少なく、柱並びもほぼ一直線である。柱穴ではすべて柱痕が確認された。柱痕埋土は掘形埋土と比べて鉄分の沈着が多いのが特徴で、柱の径は16～24cm程と考えられる。各柱穴から遺物は出土していない。

13SB2 (図版 44・130)

26・27I区に位置する総柱建物で、桁行4間(北面9.84m)、梁間2間(東面5.06m)の東西棟である。桁行方向は東方位と一致し、面積49.79m²(約30.7畳)となる。近似した桁行方向をもつ建物が西側(13SB1)と東側(13SB3)に近接してそれぞれ存在する。13SB17の身舎と重複しているが、新旧関係は不明である。柱間寸法は桁行1.98～2.84m、梁間2.16～2.68mの範囲内にあり、ばらつきが認められるが、柱並びはほぼ一直線である。柱穴ではすべて柱痕が確認された。柱痕の埋土は褐色～灰白色シルトを呈し、径は18～24cmと考えられる。遺物はP4172の柱痕埋土から須恵器の杯片が出土した。

13SB3 (図版 43・130)

27H・I区に位置する桁行2間(西面4.15m)、梁間2間(南面3.65m)の総柱建物と推測する。北東側の柱穴2基が相当する範囲は、試掘19Tによって削平されていた。桁行方向は8°東偏し、面積15.15m²(約9.4畳)となる。同様の柱構成、桁行方向、規模をもつ建物(SB16)が、西側に20m程離れて存在する。柱間寸法は桁行2.07～2.08m、梁間1.8～2.0mの範囲内にあり、ばらつきは少ない。柱穴ではすべて柱痕が確認された。柱の径は25～30cmと考えられる。遺物は出土していない。

13SB4 (図版 44・131)

21H区南東付近に位置する。東西棟の総柱建物と考えるが、中柱の1基が検出できなかった。桁行4間(南面5.62m)、梁行2間(西面4.31m)で、桁行方向は87°東偏し、面積24.22m²(約15.0畳)である。柱間寸法は桁行1.13～2.34m、梁行1.88～2.38mで、桁行の中柱の間隔が全体に比べて狭い。柱当りにはほぼ掘形の底面に形成され、推定される柱根の径は20cm前後である。

桁行方向と梁行寸法がほぼ同じ建物が、東側(SB18)と西側(SB22)に隣接する。この3棟の建物の前後関係や同時性については、柱穴同士が切り合っていないことから不明である。互いの建物の柱穴配置は検討する余地を残すが、SB18は雨落溝の規模・位置から、SB22は柱穴の規模の違いから現段階の建物構成を考えた。

13SB5 (図版 43・131)

20G区北東付近に位置する東西棟の側柱建物で、桁行3間(南面4.34m)、梁行1間(東面1.44m)である。桁行方向は東西方位に一致し、面積6.25m²(約3.9畳)、柱間寸法は桁行1.28～1.66m、梁行1.44～1.51mで柱筋の歪みは少ない。小規模な建物で、居住以外の用途が推測できるが、建物の南側に同規模の柱穴(P4091・P4092)が存在するので、その範囲まで建物が広がっていた可能性がある。

13SB6 (図版 45・131)

26・27H区に位置する側柱建物で、桁行3間(北面6.07m)、梁間3間(東面5.68m)である。桁行方向は58°西偏し、面積34.48m²(約21.3畳)となる。柱間寸法は桁行1.75～2.23m、梁間1.36～2.31mの範囲内にあり、ばらつきが認められるが、柱並びはほぼ一直線である。柱穴にはすべて柱痕が確認された。柱痕の埋土は掘形内より粘性が強いのが特徴で、柱の径は径22～26cmと考えられる。遺物は出土していない。

13SB7 (図版 45・132)

24I・J・25J区に位置し、71°東偏する北東-南西棟である。

遺存する柱穴が少なく明確でないが、桁行と梁間の延長方向で柱穴を検出できなかったことから2×3間の側柱建物とした。SI3048との重複で明確ではないが、梁間長と桁行長の長幅比は0.79と小さいことから総柱建物の可能性もある。柱筋の通りが良く、P4618とP4549の梁間が長いのが特徴である。梁が北側に寄っていることから、梁間の長い南面に荷重が掛かることで底面標高が低いと想定していたが、南面ほど標高が高い状況であった。柱痕はすべての柱穴で確認でき、底面標高が最も低いP4512の柱痕の最大径が24cmで最も大きく、底面標高が最も高いP4551の柱痕の最大径が16cmと最小である。柱痕は非常に見づらく、土質(特に粘性)や色調で分層した。粘性が強い白色粘質シルトと、褐色粘質シルトのそれぞれの掘形埋土との層境が確認でき、且つ柱状になるものを柱痕として認識することとした。桁の柱間寸法は、1.85～1.98mにおさまる。断面形状はすべて台形を呈する。SI3048の構築時に根切りされたのだろうか、柱根の抜き取り痕跡は認められない。柱痕径の最大は24cm、平均は19.7cmである。遺物は出土していない。

13SB8 (図版 45・132)

25I区南西側に位置する総柱建物で、桁行4間(南東面6.40m)、梁間2間(北東面4.27m)の建物である。桁行方向は36°東偏し、身舎面積27.33m²(約16.9畳)となる。北西側の13SB1及び南東側の13SB20の柱穴を切って構築しているので、新旧関係は13SB1・13SB20<13SB8となる。各柱穴の詳細は、P4196(13SB1)<P4203、P4197(13SB1)<P4201、P4187(13SB20)<P4207、P5051(13SB20)<P4209である。柱間寸法は桁行1.57～2.32m、梁間1.95～2.25mの範囲内にあり、ばらつきが認められるが、柱並びはほぼ一直線である。柱穴にはすべて柱痕が確認された。柱痕の埋土は掘形より粘性が若干強いことが特徴で、柱の径は15～20cmと考えられる。遺物は出土していない。

13SB9 (図版 46・132)

25I・J区に位置し、61°西偏する北西南東棟である。

南平のP4630とP4625の芯々を直線で結ぶとP4529とP4611が建物の内側に、P4544が外側に偏る。また、北平も同様にP4517とP4608を結ぶとP4537が外側へ、P4612が内側に偏り、千鳥型となる。建物中央に位置するP4619-P4546間、P4537-P4544間でも柱穴の存在を想定したが、排水のために掘削した開渠壁の断面でも掘形が見られず、さらに1.5m四方で遺構検出を試みたが中柱は検出できなかった。

た。柱間寸法は、中柱がないことによる2間分の値を除くと、桁行が1.48～2.4m、梁間は1.91～2.31mである。掘形の断面形状はおおむね台形である。P4615がU字を呈し、P4611はセクション観察位置では緩やかな段を有し、観察表ではU字を呈するとしたが、部分的に明確な段差がある。検出面からの深さは平均で39cm、底面標高の標準偏差は0.05mである。柱痕はすべての柱穴で確認した。柱抜き取り痕跡は確認できず、すべての柱穴が立ち腐れなしいし根切りされたものと思われる。柱痕の径は15～23cmである。遺物は、P4517埋土3層(堀形)から土師器片1点、P4609埋土4層(堀形)から須恵器杯口縁部片1点、P4544埋土3層(堀形)から須恵器片1点の計3点が出土している。

13SB10 (図版46・59・60・132・133・145)

27・28I・J区に位置し、9°東偏する南北棟で、13SB1・13・17・19・20の軸方向と直交する。13SB15と長軸が平行するが、P4914とP4915がP4937とP4935をそれぞれ切っており、13SB15よりも新しい。また、13SB14と建物範囲が重複関係にあるが、柱穴は直接的に切り合っていないため新旧不明である。東側でSD4456を、西側でSD4642を検出したが、切り合い関係にない。前者は、東面と平行するが、P4911とP4654の柱痕を切るSD4132と同一遺構の可能性のあることから本遺構には伴わないと判断した。後者も、西面の柱筋との傾きにおよそ10°の差があり、その北延長方向にP4913が位置することから本遺構には伴わないと判断した。柱筋の通りはおおむね良いが、西面のP4914はやや内側、P4916はやや外側へ、東面のP4654は外側へ芯がずれる。柱間寸法は、桁行が1.83～2.69m、梁間は2.36～2.97mである。断面は分類に基づき階段状・弧状としたものもあるが、掘形はおおむね方形を呈する。柱痕の径は、25～39cmである。柱痕の規模は13SB13に次ぐが、柱根は遺存しない。柱の抜き取り痕は認められず、立ち腐れなしいし根切りされたものとする。また、掘形埋土が水平に堆積し、層境が明確な柱穴もある。しかし、これらの埋土には白色ないし灰白色粘質シルトのブロックが明確に含まれるものもあり、これに着目して観察したが、扁平しているブロックはなく、叩きしめられた痕跡は認められない。遺物はP4759埋土1層で須恵器有台杯(354)、P4915埋土1層で鉄製品(468)が出土している。

13SB11 (図版47・133)

26I・J区に位置し、83°西偏する東西棟で梁間1間型である。南面の1基が検出できず、東面の2基がSE4502に切られ遺存しないが、桁行は4間と推定する。柱間寸法は、桁行が1.31～1.57m、梁間は1.4～1.61mである。北面の柱筋の通りが悪く、13SB9のように千鳥型の配列である。柱穴の形態や規模に差がある。掘形の断面形状は、台形・U字・漏斗を呈する。P4318埋土1層は黒褐色シルトと黄褐色シルトのブロック土の柱痕で、埋土2層は灰白色粘質シルトではあるが、自重によるたわみと変色による可能性を考慮し、柱痕と考えている。埋土1層底部からの深さは31cmにもなる。壁面の外周には酸化帯を確認した。この外周する酸化帯は13SB14のP4698・4310でも認められ、おおむね白色ないし灰白色粘質シルトの場合において見られる。柱痕はP4631を除く8基で認められるが、埋土には黒褐色シルト、黒褐色シルトと黄褐色シルトのブロック、黄褐色シルトで掘形よりも粘性が強いもの、炭化物が掘形を縦断するように分布するものの4パターンがある。また、底面標高にもばらつきが見られ、その差は最大で44cmにもなる。検出面からの深さは平均で25.8cm、底面標高の標準偏差は±0.11mである。長さの異なる柱材を使用し、その長短に合わせて掘形を構築したのだろうか。柱材は出土していないが、柱穴が相対する位置関係にあり、黒褐色シルトの埋土タイプを含む柱穴で構成される13SB8・16・20と軸方向が近似する状況から建物とした。遺物は出土していない。

13SB12 (図版 47・59・133)

28・29I 区に位置する建物で、桁行方向が78°東偏する。身舎は桁行3間(南面9.74m)、梁行2間(西面5.55m)の総柱建物で、面積54.06m²(約33.4畳)となる。柱間寸法は桁行2.80～3.49m、梁行2.68～2.86mで、桁行が広い。北面と南面の桁行に併行して「外周柱穴列」が存在するが、北西・南西隅の柱穴は検出できなかった。身舎と外周柱穴列の柱間寸法は、北面1.14～1.32m、南面1.12mとほぼ等しく、身舎の寸法より狭いことから廂の可能性が高い。これを廂と推定すれば両面廂建物となり、桁行3間、梁行4間(東面7.81m)、全体面積76.07m²(約47.0畳)となる。山口遺跡では最も大きい建物であるが、柱穴が方形・長方形の掘形を有しないので、互いの建物の機能差や時期差を考慮する必要がある。

13SB13 (図版 48・64・120・134・150)

28・29K 区に位置する。東西棟の総柱建物で、桁行4間(北面9.39m)、梁行2間(東面4.44m)で、桁行方向は87°東偏し、身舎面積41.69m²(約25.7畳)である。P4490・P4773・P4774は柱筋に近い位置で検出されたが、桁行の柱間寸法が他と異なるので構成柱穴から除外した。柱間寸法は桁行1.52～2.92m(平均2.34m)、梁行2.03～2.29mで、特に東半の2×2間はほぼ同じ寸法である。

柱穴掘形は1辺約70～100cmの方形を基本とし、構成柱穴15基中11基で柱当たり(橙色系の円環)を検出した。検出面での柱痕はわずかに黒色を呈しており、その時点で位置把握、断面位置の決定を行ったが、変更を生じるものも多かった。柱当たりは必ずしも掘形の底面で確認されるわけではなく、底面からやや浮いた位置で最大径を示すものが多い。検出した底面柱痕は径30cm前後のものが多かった。掘形埋土は水平に分層できるものもあるが、基本的には単層であり、ブロック状堆積や版築なども認められなかった。掘形埋土が地山に近似しているため、認識できなかった可能性もある。南面中央のP4750で土壌分析を行った結果(第六章参照)、同じ柱痕部でも柱の中心部と外側では、炭素含有量に差が生じた。また掘形埋土と周辺の地山では明確な差が認められなかった。

13SB14 (図版 48・133)

27I 区に位置し、82°西偏する東西棟である。SB10・SB15と重複関係にあるが、柱穴同士は切り合っており、新旧は不明である。北西隅の柱穴は13SB2のP4183の可能性はあるが不明で、2×4間の総柱建物と判断した。柱筋の通りが悪く、南面のP4691とP4689の芯々を直線で結ぶと、P4690とP4680が外側へずれる。北面は北西隅の柱穴は確実ではないが、P4684とP4686が外側へずれる。平側の柱穴は13SB9と同様に千鳥型に配列されている。柱間寸法は、桁行が1.53～2.15m、梁間が1.75～2.05mである。P4696は、掘形の断面は台形状を呈するが、平面形は不整形である。当初はプランが明確でなかったことから5cm程度面下げをした後に平面プランを確定した。柱材の抜き取り後に堆積したのだろうか、埋土上半がレンズ状に堆積している。埋土5層上面と底面でも柱痕は確認できていない。P4695は、遺存が無く掘形底面付近のみを検出し、分類に基づき弧状とした。断面形は明確でないが、台形ないし箱状と推測する。P4692は、掘形中腹に段を有し、階段状としたが、平面形はおおむね方形を呈する。掘形埋土は単層と2層のものがある。P4698埋土2層は、炭化物の混入はなく灰白色粘質シルトである。底部と壁面に酸化帯が認められる。検出面からの深さは、11～33cm、底面標高は5.90～6.07mにおさまる。柱痕の径は10～27cmである。遺物は出土していない。

13SB15 (図版 49・133)

27I・J 区に位置し、1°西偏する南北棟である。梁間側の柱穴4基は検出できず、そのうち、北東隅と南東隅はSD2075・SD4642とSE4805にそれぞれ切られている。13SB10・13SB14と重複関係に

あり、13SB10を構成する柱穴に切られる。13SB14とは柱穴同士の切り合いはないため新旧は不明である。P4901・P4904・P4936は、掘形の形状・埋土が近似しており、柱痕が認められることから本遺構を構成する柱穴の可能性がある。しかし、P4906・P4934・P4935の方が柱筋の通りが良いこと、P4936・P4937とした場合に相対する桁行側の柱間寸法に差が大きいことからP4935を優位と判断した。なお、P4904はSD4388に切られ、P4936は、SD4388とSD4642に切られる。P4936・P4937の芯々距離は2.61mである。P4905は、13SB14のP4690に切られるビットで、当初、P4700とP4937に対応する束柱と考えたが、相対する柱穴の位置関係から検討した結果、本遺構を構成する柱穴の可能性は低いと判断した。従って、13SB14との新旧関係は不明である。検出した柱穴が少なく明確でないが、P4700とP4906の芯がやや内側にずれるが、西面の柱筋の通りはおおむね良い。掘形の断面はおおむね方形を呈し、埋土は単層である。検出面からの深さは、21～41cm、底面標高は5.80～6.02mにおさまる。P4906は、埋土3層が凸状に堆積し、1層よりも明度が低くやや暗いが土質に差はない。柱の抜き取り痕は認められず、1から3層までを柱痕と考える。柱痕の径は17.0～24.5cmである。遺物は出土していない。

13SB16 (図版49・134)

26・27K区に位置し、82°西偏する東西棟である。南側から南西側にかけて調査区外に延び明確ではないが、2×4間の梁間2間型と推定する。東面の中央はサブトレンチ掘削及びび平面精査を行ったが柱穴は検出できなかった。柱間寸法は、桁行が2.58～3.26m、梁間は2間分の値を除外すると2.25～2.32mである。P4665の芯は北側にずれるが、北側の桁行の柱筋の通りはおおむね良い。梁間はP4645からP4648のラインでしか確認できないが、P4649の芯は東側にずれる。柱痕は、P4648を除くすべてに認められ、黒褐色を基調とする黄褐色ブロック混じりのシルト質である。掘形の断面形は、階段状・台形状・箱状があり、台形状としたものの掘形の埋土はすべて単層である。検出面からの深さは、19～40cm、底面標高は5.90～6.12mである。柱痕の径は8基中6基が18.5～22cmにおさまる。遺物は出土していない。

13SB17 (図版50・120・134)

26I区に位置し、84°西偏する東西棟で、総柱建物である。本遺構は柱筋の通りが悪く、13SB9と同様に柱痕の検出位置から見て、柱材が千鳥型に配列されていると考える。しかし、他の建物の長軸方向や位置関係から13SB9と同時期に併存したとは考えにくい。南面のP4957とP4962の芯々を直線で結ぶと、P4955とP4958がそれぞれ北側と南側とにずれる。北面の2基・西面の1基が中世の溝に切られており不明で、確認できるのは東面のP4961だけである。掘形の断面形状はすべて台形状を呈し、検出面からの深さは28～43cmである。底面標高は6.22～6.33mとばらつきが小さい。柱痕はすべての柱穴で確認し、P4958・4960・4961・4955の底面で柱当たりを検出した。P4958では、長径約20cm・①・約10cm・②の2つの柱当たりを検出した。①は、粘性がやや強くマンガンの沈着が顕著である。これに対し、②は粘性がやや強い点では共通しているものの、マンガンの沈着がなく、白色である。また、発掘時、断面で確認した柱痕と①との径が近似することからこれらに対応するのではないかと推測したが、のちの整理作業時に検討した結果、柱痕検出面の芯と柱当たりの芯とがおよそ10°傾いており、その評価については課題である。柱痕径16～26cmである。遺物はP4955掘形3層で土師器甕胴部片1点、P4964掘形床直で土師器甕口縁部片1点が出土している。P4955では自然科学分析試料を採取した。第VI章を参照されたい。

13SB18 (図版 50・60・135・144)

26・27J・K区に位置し、46°西偏する北西-南東棟である。P4965・P4969・P4966は包含層が断続的に遺存していた農道部の調査を終了させ、周辺の遺構確認面と標高を合わせる目的で平面的に掘削・精査を繰り返した結果検出したものである。初め、P4965とP4966を掘形をもつ柱穴として検出したが、対応する柱穴が見つからなかったため、さらに平面精査を行い、P4967・P4968・P4969を検出した。従って、同じ農道部であっても検出標高に10cm以上の高低差がある。南東梁行側の柱穴は検出できなかった。桁行は、柱筋の通りが悪く、P4970とP4973が北東へずれる。掘形の断面は、台形状と箱状である。検出面からの深さは16～53cm、底面標高は5.46mのP4638を除くと5.87～6.18mにおさまる。柱痕はP4638を除くすべての柱穴で認められる。柱痕径は16～23cmである。P4638は、灰白色粘質シルトが斜めに堆積し4層に分層できる(図版60)。埋土1～3層には最大で35mm角程度の炭化物が含まれる。4層は酸化が著しく、北側以外の壁面に沈着している。遺物は出土していない。

13SB19 (図版 52・135)

26・27K区に位置し、85°東偏する東西棟である。南西側は調査区外に延び、南東隅はSD4389に切られており明確ではないが、2×4間の総柱建物と推定される。SB16と重複関係にあるが、柱穴に直接的な切り合いがなく新旧は不明である。北面のP4986とP4974を直線で結ぶと、P4977は直線上に位置し、P4656とP4982の芯がわずかに南側にずれるが、おおむね柱筋の通りが良い。柱間寸法は、桁行はP4974-P4656の2.77mを除くと1.97～2.36mにおさまり、梁間2.23～2.55mである。掘形の断面は、箱状・台形状を呈し、平断面はいずれも方形である。掘形埋土は、色調と粘性の違いから2層に分けたものもあるが、大半が単層である。検出面からの深さは21～31cm、底面標高は5.96～6.08mである。柱痕は、13SB9・13SB18と同様に腐植の状態から2層に分けたものがある(P4656・P4986・P4979)。P4977埋土2層とP4986埋土5層は、灰白色を基調とする粘質シルトで、外周する酸化帯が認められる柱当たりである。P4977は柱の自重によってたわんだかのように、4cmの層厚で弧状に堆積する。柱当たりは柱痕を検出した遺構すべてに認められる。柱痕の径は17～23cmにおさまる。遺物はP4986埋土4層から須恵器杯口縁部片が1点出土している。

13SB20 (図版 51・120・135)

25I・J区に位置する総柱建物で、桁行4間(北面9.13m)、梁間2間(東面5.76m)の東西棟である。桁行方向は85°東偏し、面積52.59m²(約32.5畳)となる。近似した桁行方向をもつ建物が北側(13SB1)と北東側(13SB2)にそれぞれ存在する。北西側で13SB8の柱穴に切られているので、新旧関係は13SB20<13SB8となる。柱間寸法は桁行2.2～2.37m、梁間2.64～3.1mの範囲内にあり、若干のばらつきが認められるが、柱並びはほぼ一直線である。柱穴にはほぼ柱痕が確認された。柱痕の埋土は掘形より粘性が強いのが特徴で、P5052・P5057・P5059にそれが顕著に認められた。柱の径は24～30cmと考えられる。遺物はP4187・P4188・P4189・P5060の掘形埋土から土師器片が、P4188・P4189の掘形埋土から須恵器(355～357)が出土した。

13SB21 (図版 52・136)

30I区に位置する建物で、北東側及び中央の柱穴3基を確認できなかったものの、桁行2間以上、梁間2間(南面2.97m)の南北棟と推測する。桁行方向は2°東偏し、近似した桁行方向をもつ13SB22が東側に存在する。柱間寸法は桁行1.4～1.8m、梁間1.33～1.64mの範囲内にあり、若干のばらつきは認められるが、柱並びはほぼ一直線である。柱穴にはすべて柱痕が確認された。柱痕の埋土は鉄分の沈着

を含む褐灰色シルトを基調とし、柱の径は20cm程と考えられる。遺物はP4282・P4284から土師器・須恵器が出土した。

13SB22 (図版 52・136)

30・31J区に位置する建物で、南東隅の柱穴が近世のSX4268によって削平されているが、桁行1間以上、梁間2間(南面推測4.10m)の南北棟と考えられる。桁行方向は9°東偏し、近似した桁行方向をもつ13SB21が西側に存在する。柱穴にはすべて柱痕が確認された。柱痕の埋土は褐灰色シルトで、柱の径は18～25cm程と考えられる。遺物はP4290から須恵器が出土した。

13SB23 (図版 53・136)

31J・K区に位置し、13°西偏する面積24.2m²の小型の建物である。中柱の想定される位置にSX4251が存在したため、柱穴を検出できず総柱建物かどうかは不明である。梁行と桁行の比は1で、方形を呈する。柱筋の通りは悪い。柱穴の平面形は円形・楕円形・長楕円形を呈し、概して円い掘形である。掘形の断面形は、階段状・半円状・U字状・弧状となるが、共通しているのは底部に平坦面をもたないことである。柱痕はP5024・P5026・P5028・P5031の4基に認められるが、グライ化が著しく、灰色を基調とした粘質シルトである。P5028の柱痕は黄褐色シルトがブロック状に含まれ、埋土1層下半に黒褐色粘質シルトがわずかに見られる。本遺構も位置する30・31Jグリッド以南から30・31Lグリッド以北にかけて、そして32グリッドライン以東はグライ化が著しい。柱穴の形態や規模が貧弱なことから小屋風の建物を想定している。検出面からの深さは19～30cm、底面標高は6.24～6.23mにおさまる。柱痕の径は14～19cmである。遺物は出土していない。

13SB24 (図版 53・136)

27・28K区に位置する側柱建物で、桁行2間(南面4.46m)、梁行1間(東面5.57m)である。ただし東側に1間延長した場合は、桁行3間(南面6.82m)、梁行1間となる。南面はSK4779が柱穴の可能性があるが、北面の対向位置で遺構は検出できなかった。桁行方向は86°東偏し、面積24.84m²(約15.3畳)である。柱間寸法は桁行2.02～2.29mとばらつきは少なく、柱筋も直線的である。北西隅柱穴以外は柱当たりを検出した。断面及び柱当たりから推定される柱径は25～30cmである。

C 柵・材木列扉

SA1 (図版 41)

23G15区から24G17区にかけて位置する4基の直線的なビット列で、現状では周辺に軸方向の同じビット列が検出できなかったことから、柵と考えた。軸方向は69°西偏し、3間(5.10m)の柱間寸法は、1.45～1.87mである。ビットの平面は径20～30cmのほぼ円形で、深さも20cm前後である。

SA2704 (図版 41・42・99・100・116・117)

24～25H～J区に位置する。幅約15cmの布掘りの溝に直径15～20cmの材木を打ち並べて柵としたものと考えられる。材木ビットは合計174基を確認した。南側の深さは最大40cmである。長さ約30mにわたり弧状に延び、2か所で途切れる。南側の範囲は直線距離で22.4mであり、ほぼ直線的だが南端で東方に湾曲する。溝底面からビット140基を確認した。一方、北側で確認できた範囲は直線距離6.3mであり、ビットは34基である。東側延長に位置した調査区壁面でP175を確認し、この延長上の遺構表面を精査した結果、東側に屈曲して延びることがわかった。南側と北側の途切れたか所の長さは3.58mである。

最も残りの良いP175のe-e'セクションでは、基本層序1層下で埋土1～3層に分かれる。1層は灰黄

色土で地山VI層との区別が比較的容易であったが、2・3層は浅黄色土・にぶい黄色土でVI層との区別はかなり困難であった。しかし、SA2704は遺構検出のために上部約10cmを掘削したのちに検出したものであるため、残存していたのはP175の1層下部より下の部分となる。このため、調査当初は埋土1層のみと考え、検出面から深さ10cm程度まで掘削を行った。その後、溝底面に円形の掘形があることを確認し、P51・55・58・64・164を横断方向に断ち割って断面を精査した結果、ピットであると判断した。また、縦断方向でも確認するために、北側範囲から東側に延びる延長線上でピット内を掘削せずに断ち割ったところ、d-d'セクションで4基のピットの立ち上がりを確認することができた。なお、このセクションに本来ならばピット同士の間に布掘り溝の底面ラインが入るべきであるが、間隔が狭いため明確に認識することができなかった。このため、布掘り溝底面の確認は2011年度以降の調査に委ねることとした。

ピットの断面形はU字状やV字状のものが混在する。また、m-m'セクションやn-n'セクションが示すように柱を根入れしたのちに脇を埋め戻したのも確認できる。したがって、布掘り溝を構築したのちに底面に穴をあけ、柱を立て並べてから埋め戻した可能性が高いと考えられる。なお、柱を抜き取った痕跡は確認できない。

SK3083と重複するが、平面視察でこの埋土2層をSA2704が掘り込んでいることを確認したことから、SA2704の方が新しいと考えられる(図版42)。また、重複範囲の24I22区及び24J2区から遺物が比較的多く出土したのは、埋土にSK3083に含まれる遺物が混入した結果と考えられる。前述したように、2010年度調査区で確認した古代の遺構は、中世の遺構調査終了後に地山VI層上面からさらに約10cm掘削して確認できたものである。したがって、古代遺構の調査時に出土した遺物はすべて遺構埋土に所属するものである。SA2704からは24I22・24J2・7・11・25H2区の各区において古代の土師器碗・長甕・小甕の破片19点、須恵器杯の破片2点が出土した。このうち、SA2704に含まれるピット出土遺物の標高は、P42の土師器片が5.952m、P51の土師器長甕破片が5.902m、P164の土師器碗破片が6.011mであり、いずれも遺構掘形内に含まれる。以上のことは、本遺構が古代に構築されたことを証明するものである。

D 井戸

2010年度調査で、平面形が方形の井戸1基を検出した。井戸側の分類は[宇野1982]を参考にした。また2013年度調査では古代の可能性のある井戸を18基検出したが、平面形は基本的に円形で、すべて素掘りの井戸であった。

SE2510 (図版38・110)

23H18・23区に位置する。掘形の平面形は方形で、方位に軸を合わせている。規模は上端長軸2.0m、深さ2.32mを測る。断面形はU字状である。覆土は1～14層に分層した。1～3層は埋積の最終段階のくぼみに溜まった自然堆積層であるが、当初は中世の土坑として調査を行ったため、4層との間に空隙が生じている。4～12層は井戸側の内部に溜まった堆積土であり、8～12層から植物遺体や井戸側上部から崩落した木材が出土した。13・14層は構築時に井戸側の周囲に詰めた埋め土である。井戸側底面に砂等は敷かれていない。

井戸側は幅90cm四方の方形で、下半のみ遺存する。最下部は板材を縦方向に組み、横棧で保持した縦板組横棧留である。縦板は幅8～20cmの板目材が使われ、四隅の外側に幅8cmほどの角材が打ち込まれている。横棧は近接して2段確認された。下段は幅2.6cmの細い角材を相欠きで組み、交点を木釘で結合していた可能性が高い。上段は幅8cmほどの角材を目違ひ柄で組んでいる。この上は横板組となり、

相欠きで組んでいる。横板は4段目まで遺存する。

出土遺物は、井戸側部材(222～246)が出土した。

SE4002 (図版 54・137)

20F18・19区に位置する素掘りの井戸で、東側にSK4003が隣接(SK4003<)する。7層より上位の4～6・8・9層は急角度の斜位堆積で、各層に含まれる遺物片も斜位の状態で出土した。人為的に埋め戻された埋土と考える。6層の黒色粘質シルトが特徴的だが、炭化物は少量含むのみである。遺物は1～3・7・8層から須恵器が計72g、土師器が計137gが出土した(266～268)。上半からの出土が多い。

SE4130 (図版 54・137)

26I21・22区に位置する素掘りの井戸である。西側に13SB17の柱穴(P4962)と重複し、これを切つて構築している。また北側に13SB1・13SB2、東側に13SB10・13SB15、西側に13SB20が存在する。埋土は上から、にぶい黄褐色～灰白色砂質シルトを基調とする上層(埋土1～6層)、褐灰色シルト～粘質土を基調とする中層(埋土7～10層)、黒色～灰色粘質土を基調とする下層(埋土11～15層)に識別され、レンズ状に堆積している。なお埋土14・15層周辺の地山は灰白色砂質土層で、透水層と考えられる。埋土14・15層に地山の砂質土が混入していないことと埋土11～16層の堆積状況から、下層は井戸廃棄直後の人為的な堆積、上・中層はその後の自然堆積と推定できる。遺物は主に中層から土師器片・須恵器片・鉄滓が出土した。

SE4253 (図版 24・54・137)

30K12・13・17・18区に位置する素掘りの井戸である。北西側で中世の溝SD4785と重複し、これに切られている。埋土は上から黒色～褐灰色シルト層(埋土1～3層)、灰白色砂質シルト層(埋土4層)、黒褐色シルト層(埋土5層)、灰白色砂質シルト層(埋土6層)がそれぞれレンズ状に堆積している。遺物は4層から自然礫2点が出土した。

SE4254 (図版 54・137)

31K23、31L3区に位置する素掘りの井戸である。埋土は上から褐灰色～灰白色シルトを基調とする上層(埋土1～3層)、明青灰色シルト～青灰色粘質土を基調とする下層(埋土4～5層)に識別され、1層を除いて水平に堆積する。また上層周辺20～25cmの範囲で炭化物を含む明褐灰色シルト層(埋土6層)が堆積している。堆積状況から埋土6層は井戸構築時、埋土2～5層は井戸廃棄直後の人為的な堆積と推定できる。遺物は埋土2・6層から土師器・須恵器・鉄滓が出土した。

SE4274 (図版 55・138)

30I25、31I21区を中心に位置する素掘りの井戸である。埋土は浅黄褐色～灰白色シルトを基調とし、レンズ状に堆積しているが、中～下層の中央部は粘性が強い(埋土7・12層)。底面標高は5.23mと同規模の井戸(SE4130等)と比べて浅いが、底面周辺の地山が透水層と考えられる灰白色砂質土層であり、溜井戸ではないと考えられる。遺物は上半から土師器・須恵器が出土した。

SE4275 (図版 54・138)

30I11・12区に位置する素掘りの井戸である。SD4270と重複し、これに切られている。また東側には13SB21が存在する。埋土は上から明青灰色砂質土(埋土1層)と黒褐色～褐灰色シルト(埋土2～3層)に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は土師器・須恵器(273)などが出土した。

SE4277 (図版 55・138)

30I16・17区に位置する素掘りの井戸である。南東側で中世の溜池SG5080と重複し、これに切られ

ている。埋土は上層がSG5080によって削平されているために不明であるが、中～下層は黒色～褐灰色シルトを基調とし、斜位に堆積する。また底面の西側には灰白色粘土層(埋土4層)が約6cm堆積していた。遺物は4層上面に自然礫2点、下面に須恵器甕片(327の一部)が出土した。

SE4278 (図版55・138)

33J5・10区に位置する。他の井戸と比べて規模・深さともに小さいが、形状・立地等が類似している点から井戸と推定した。埋土は炭化物を含む褐灰色シルトを基調としており、水平に堆積する。遺物は出土していない。

SE4279 (図版55・138)

34J14・15区に位置する。他の井戸と比べて規模・深さともに小さいが、形状・立地等が類似している点から井戸と推定した。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトを基調としており、水平に堆積する。遺物は出土していない。

SE4301 (図版55・138)

25J21・22区に位置する素掘りの井戸である。1～5層は、黄褐色シルトと黒褐色粘質シルトのブロック土が充填され、レンズ状に堆積する。6・8層も同様のブロック土が充填されるが、土のしまり具合やブロックの大きさから、1～5層との層境は明確で水平である。7層は、黄褐色粘質シルトブロックとφ10mm以下の炭化物を少量含んだ黒褐色粘質シルトで、6層とは明確に分層でき、側板が設置されていたと推測するが、木質は遺存しない。本層は裏込め土の可能性もある。標高5.4mで透水層に達し、これを掘り込んでいる。8層は、ブロック土や腐植土を多量に含み、しまりが無い。人為的な堆積の可能性はある。6層は、拳大のブロック土が充填されており、人為的に埋められている。ある程度の深さまで埋められた後に、ゴミ穴として機能したと考えられる1～5層が堆積する。5層底部の検出面からの深さは32cmである。2・3層は炭化物を多量に含む。底面は平坦で、形状は隅丸方形を呈する。底面に近い下部は透水層が崩落し、オーバーハングする。遺物は6層から土師器片が出土したが、洗浄時に溶けるくらい脆いものである。

SE4315 (図版55・138)

28I4・5・9・10区に位置する素掘りの井戸で、農道下に残存したIV層(古代の遺物包含層)下位で検出した。径約150cmのほぼ円形で、最大深度138cmと浅いが、湧水の状況から井戸と判断した。最下層の14層は壁際から底部にかけて堆積し、崩落等の自然堆積と考える。黒色系の13層は炭化物を多く含む埋土で、14層表面を均等に覆うような形で検出した。被熱痕跡や焼土は認められないが、井戸廃絶に伴う祭祀行為が想定できる。その上位の5～12層も全体的にはブロック状を呈することから、祭祀の一連で埋め戻された可能性がある。遺物は1・2・4・6・14層から須恵器・土師器が出土したが、すべて細片である。また底面付近で長さ10cm程の自然礫が1点出土した。

SE4450 (図版55・139)

28J16区に位置する素掘りの井戸で、平面形状はやや崩れているが、長方形を意識している。染み出すような湧水だが、4層上位までは湛水する。遺物は1・3層から土師器片が、5層の南壁際から須恵器蓋(274)が1点出土した。

SE4502 (図版56・139)

26J5区を中心に位置する。1～12層までは、黄褐色を基調とする灰白色粘質シルトブロックを含み、レンズ状に堆積する。12層は、酸化鉄を多量に含む黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロックが含まれる。

最下層の13層はグライ化した粘質シルトである。8層底面で段を有し、平面形は不整形円形だが、検出面から30cmのあたりで方形となり、底面では円形を呈する。約35cmの層厚でグライ化していることから、曲物を設置していた可能性がある。14～16層は、裏込め土であると推測される。14～16層から遺物は出土していない。井戸としての機能を終えた後、井戸側等を取り外し、人為的に埋められ(11～13層)たと考える。1～10層からは須恵器や土師器の破片が散在して出土し、井戸廃絶後は廃棄土坑として機能していたと考える。

SE4643 (図版 56・139)

27I20・25区に位置する素掘りの井戸である。1～6層までは、黄褐色シルトと灰白色粘質シルトのブロック充填土で、2層以外はレンズ状に堆積する。2層はφ10mm以下の炭化物を微量に含み、投げ込まれたように凸状に堆積する。5層を含む下位の層は、水の影響を受けグライ化し、酸化鉄を多量に含む。9層は、8層のブロック土が少量含まれる。標高約5.5mで透水層に達し、これを掘り込んでいる。7～9層は水平に堆積し、ブロック土が含まれることから、人為的に埋められたと考えられる。底面は平坦で、形状は円形を呈する。1～6層は、井戸としての機能を終えた後に、幾度か投棄が繰り返される廃棄土坑として利用されたと考えられる。6層底部の検出面からの深さは46cmである。遺物は、1層から須恵器杯が出土している。

SE4760 (図版 56・139)

27J13・14区に位置する素掘りの井戸で、埋土は水平堆積を示す。北西で13SB10-P4759 (P4759<)と重複する。遺物は須恵器(275)・土師器が1・2層を中心に出土した。須恵器破片の一つは、SK4629の一括遺物(327)と同一個体である。また土師器が3層から2点、5層から1点出土し、加工痕のある木片が5層から2点出土した。

SE4860 (図版 56・139)

27K15区に位置する素掘りの井戸である。13SB24内だが、屋外井戸の可能性が高いことから、西側に近接する13SB19または13SB16に伴う井戸と考える。遺物は検出できなかった。

SE4998 (図版 56・139)

30L22・23区に位置する。1～4層は、黄褐色シルトブロック土を含む褐色シルトを主体とし、水平に堆積する。5層は、黄褐色シルトブロックが主体でブロック土が充填され、箱状に堆積して見える特殊な状況である。検出面から深さ30～35cm 辺りで分層できる可能性もあるが、明確に識別できない。6層も5層と同様の堆積を示すが、黄褐色ブロック土は少なく、埋土の色調・粘性・しまりから層境は明瞭である。井戸側の木質は遺存しない。8層は炭化物を多量に含む黒褐色シルトで、しまりが無い。標高約5.3mで透水層に達し、これを掘り込んでいる。遺物は2層から須恵器壺(276)が出土している。

SE5001 (図版 56・140)

31L5・10区に位置する。連日の降雨により観察用の断面を崩落させてしまい、埋土の堆積状況を確認できるのは一部に止まった。崩落前の所見を記述する。おおむね8層に分層でき、遺物は須恵器杯(277・278)が出土した。1～6層までは、黄褐色粘質シルトが主体で黒褐色シルトブロックと炭化物が微量含まれる。7層は、黒褐色粘質シルトを主体とし、青灰色粘質土、黄褐色粘質シルトが帯状に水平堆積する。層厚約30cmで、10枚以上に互層をなして堆積しており、人為的に埋められたと考える。細かい分層は避け、7層として包括した。検出面から約40cmの深さで湧水が見られるが、透水層は検出面から124cmの深さで認められ、これを掘り込んでいる。透水層以下は7・8層にあたる。

E 土 坑

SK1901 (図版 39・111)

16G4・9区に位置する土坑で、埋土は2層に分層され、いずれも炭化物粒を含む。遺物は確認面及び1層から出土しており、中央部の確認面で土師器・須恵器の小破片が集中して出土した。

SK2175 (図版 39・111)

18H16区に位置する土坑で、埋土は5層に分層され、いずれも焼土・炭化物粒を含む。3層は焼土を多量に含むが、側壁は被熱しておらず、土坑内で火を焚いた可能性は低いと考えられる。したがって、廃棄されたものと推定される。遺物は上層からの出土が多く、土師器・須恵器の破片が比較的集中して出土した。

SK2191 (図版 39・111)

17H25区に位置する土坑で、埋土は5層に分層され、地山に近い黄褐色～褐色土が堆積する。土坑中央の1層では、38×18cmの範囲に焼土ブロックがやや集中する。このほかにも焼土粒・炭化物粒が含まれる。埋土の堆積状況から、埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器の小破片が出土した。

SK2192 (図版 39・111)

18I8・9区に位置する土坑で、埋土は4層に分層された。3層は焼土粒・炭化物粒を多量に含み、約30cmと厚く堆積する。側壁・底面に被熱の痕跡が認められないことから、土坑内で火を焚いた可能性は低く、焼土などが廃棄されたものと考えられる。

SK2239 (図版 39・111)

19I1・6区に位置する土坑で、埋土は6層に分層され、いずれも焼土か炭化物を含む。特に埋土中位の4層は炭化物粒を多量に含むが、側壁などに被熱の痕跡は認められなかった。また、底面付近の5・6層は粘性の強い暗褐色・にぶい黄褐色土が堆積する。埋土の堆積状況から、埋め戻された可能性が高いものと考えられる。

SK2388 (図版 39・112)

20F19・20区に位置する土坑で、埋土は3層に分層され、底面付近の2層は8～10cmの厚さで炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積する。底面・側壁に被熱の痕跡が認められないことから土坑内で火を焚いた可能性は低いと考えられる。遺物は2層上面から出土しており、土師器・須恵器が出土した。

SK2469 (図版 39・112)

23G2区に位置する土坑で、埋土は3層に分層される。いずれも炭化物粒を含み、特に底面付近の3層に多く含まれる。1層のオリブ灰色土はSK2388の1層に類似する。

SK2498・2499 (図版 39・112)

23H13・14区に位置する土坑で、重複しているが、両遺構とも埋土に炭化物を含み、特に底面付近で炭化物が多くなるなど、堆積状況は共通する部分が多い。底面・側壁に被熱の痕跡が認められないため、土坑内で火を焚いた可能性は低いものと考えられる。

SK2506 (図版 39・112)

24H3・4・8・9区に位置する土坑で、埋土は焼土・炭化物を多量に含み、単層だが土質と堆積状況はSK2191に類似する。

SK2530 (図版 39・112)

22G3区に位置する土坑で、埋土は2層に識別され、いずれも炭化物を微量含む。遺物は2層上～中位で多く出土しており、底面からやや浮いた状態である。また、土師器甕・須恵器杯の破片が土坑南側で集中し、これらは一括して土坑内に入れられたものと考えられる。

SK2600 (図版 39・113)

21G14・15・19・20区に位置する。東西方向に長軸をもつ土坑で、長軸226cm、短軸123cm前後と比較的大きい土坑だが、深度は14cm程度である。平面形が隅丸の長方形を呈し、埋土2層に焼土粒、4層に炭化物を多く含む。後述するSK3083と長軸方向や幅は異なるが、遺構の性格は似ている。遺物も多く出土し、須恵器杯類・盤(124～128)、土師器小甕・長甕(129～132)、刀子(215)を図化した。須恵器の胎土は盤がC群だが、他はB群で占められる。

SK2686 (図版 40・113)

19F14区に位置する土坑で、埋土は6層に分層される。3層は焼土を多量に含むが、底面・側壁に被熱の痕跡が認められないことから、土坑内で火を焚いた可能性は低いと考えられる。東側の底面は40×32cmの範囲で落ち込み、粘性の強い灰白色土が堆積する。

SK2765 (図版 40・113)

19F4区に位置する土坑で、埋土は4層に分層され、褐色土が主体である。いずれの層にも焼土粒がわずかに含まれる。土坑中央部の底面は60×58cmの範囲でくぼむ。

SK2770 (図版 40・113)

19E23・24区に位置する土坑で、埋土は焼土・炭化物を微量に含む。規模・形状はSK2506に類似する。

SK2793 (図版 40・113)

21F18区に位置する土坑で、埋土は地山に近い色調のぶい黄褐色・明黄褐色土が堆積し、埋土と地山の判別が難しいが、埋土に炭化物粒が微量に含まれることから立ち上がりを認識できた。

SK2795 (図版 40)

22G3区に位置する土坑で、SK2530の底面で検出された。埋土は灰白色土を含むことが特徴である。2層は粘性の強いオリブ褐色土が堆積する。

SK2807 (図版 40)

24I1杭周辺に位置する土坑で、長軸107cm、短軸82cm、深度16cmである。SB17・19から10m以内の離れた位置で、平面楕円形の軸方向が同じことから、同時期の可能性がある

SK2937 (図版 40・113)

19G5、20G1区に位置する土坑で、埋土は地山に近い色調の褐色土が堆積する。堆積状況はSK2793に類似する。

SK2941 (図版 40・114)

19F15・20区に位置する土坑で、埋土はSK2965の1層に類似し、炭化物を微量含む。遺物は検出面で土師器が出土した。

SK2965 (図版 40・114)

19F20区に位置する土坑で、埋土は3層に分層した。2層は焼土粒を多量に含み、褐色土と混在して堆積する。埋土の堆積状況、底面・側壁に被熱の痕跡が認められないことから、土坑内で火を焚いた可能

性は低い。したがって、焼土は一括して廃棄されたものと考えられる。遺物は1～2層上面にかけて多く出土し、土師器・須恵器のほか、鉄製品が出土した。

SK3083 (図版40・114)

24J1・2区に位置する。南北方向に長軸をもつ土坑で、長軸220cm、短軸90cm、深度は18cmである。平面形が楕円形または長方形を呈し、埋土2層に焼土・炭化物を多く含む。SK2600と長軸方向や幅は異なるが、遺構の性格は似ている。材木列塚(SA2704)と重複する唯一の遺構で、材木列塚より古い。調査所見では埋土2層からの掘り込みを確認している。遺物は少量で、須恵器、土師器長甕(134)などが出土しているが、埋土3層からは出土していない。

SK4003 (図版54・137)

20F19区に位置し、西側にSE4002が隣接(-SE4002)する。南北方向に長軸をもつ平面長方形の土坑で、底面中央部がわずかに盛り上がっている。形態や規模から土壇墓の可能性も考えたが、他の遺構の埋土と特別な違いは認められない。

SK4046 (図版57・140)

22K5、23K1区に位置する。東側に小平坦面をもち、階段状を呈する。埋土1層と2層の色調は大きく異なり、2層から土師器片が出土した。

SK4048 (図版57・140)

SK4046から東側へ2m程離れた23K2区に位置する。SK4046に近接し、規模も同程度だが、埋土に共通性は認められない。1層から土師器片、2層から鉄滓(477)が出土した。

SK4058 (図版57・140)

20F1区に位置し、長軸方向が同じSD4004と重複(SD4004<)する形で検出した。同規模のSK4057が西側へ2m程離れて位置する。底面は北側に傾斜し、北側で浅いすり鉢状を呈する。1層に焼土塊を2割程含むので、水洗選別したが遺物は出土せず、被熱痕跡も認められなかった。

SK4074 (図版57・140)

20F17区に位置し、遺構検出面(VI層上面)全体を下げた段階で検出した。平面形が隅丸の長方形を呈し、長軸156cm、短軸58cm前後である。最大深度は46cmあるが、さらに深かった可能性が高い。埋土は水平堆積で4層に分層したが、各層の色調・粒度差はわずかである。1層から土師器、2・3層から須恵器が出土した。口縁部の大部分が欠けるが、残存率が高い須恵器有台杯(294)は、底面に近い3層から逆位で出土した。遺構の形態や規模的に土壇墓であることも想定され、副葬品であった可能性もある。

SK4113 (図版57・141)

21G17区に位置する。地山に近似する埋土であるが、焼土粒・炭粒を少量含むことで検出できた。遺物は出土しなかった。

SK4131 (図版57・140)

2519・10・14・15区に位置する。13SB1の内部に位置しており、東側には13SB2・13SB17、南側には13SB20が存在する。埋土は上から褐灰色シルトを基調とする上層(埋土1・2層)、炭化物を含む黄褐色～浅黄褐色シルトを基調とする中層(埋土3～5層)、黄褐色～灰白色シルトを基調とする下層(埋土6～8層)に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は中層を中心に土師器碗・甕片が多く出土したが、須恵器の出土は見られなかった。土師器甕は完形近くまで復元できるものは見られなかった。

SK4142 (図版 57・141)

25I18 区に位置する。13SB8 の内部に位置しているが、長軸方向は N-60°-E を示し、13SB8 の桁行方向とは異なることと、標高にして 5～23cm 高い地点で検出していることから、両者の関連性は低いものと考えられる。埋土は上から浅黄褐色シルトと焼土粒を含む褐色シルトの 2 層に分層され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SK4145 (図版 50・134)

26I7 区に位置し、13SB17 の構成ピットと重複している可能性がある。埋土は浅黄褐色シルトと褐色シルトの混合土である。遺物は出土していない。

SK4146 (図版 57・141)

26I20、26J16 区に位置する。北側約 130cm 先に 13SB2 が位置しているが、本土坑の長軸は N-72°-E であり、13SB2 の桁行方向とは異なる。埋土は浅黄褐色シルトの単層である。遺物は土師器が出土した。

SK4156 (図版 57・141)

27I1 区に位置する。13SB2 の内部に位置する。長軸方向は N-5°-E を示し、13SB2 の梁間方向及び 13SB3 の桁行方向に近い。埋土は炭化物・焼土粒を含むにぶい黄褐色シルト及び灰黄褐色シルトを基調とし、5 層に分層され、レンズ状に堆積している。遺物は埋土 4・5 層から須恵器杯・土師器が出土した。

SK4162 (図版 50・134)

26I13 区に位置し、長軸方向は N-10°-E を示す。13SB17 の構成ピットと重複している可能性がある。埋土は上から炭化物を含む浅黄褐色シルトを基調とする上層と褐色シルトを基調とする下層に分けられ、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK4163 (図版 57・141)

26I14 区に位置する。北側で 13SB2 の柱穴 (P4181) と重複し、これを切って構築している。長軸方向は N-72°-W である。埋土は黄褐色～浅黄褐色シルトを基調とし、4 層に分層され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SK4165 (図版 57・141)

27H16 区に位置する。西側で 13SB6 の柱穴 (P4155) と重複し、これを切って構築している。長軸方向は N-19°-W である。埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色～浅黄褐色シルトを基調とし、2 層に分層され、レンズ状に堆積している。遺物は埋土 2 層から土師器・須恵器が出土した。

SK4214 (図版 58・141)

25I9 区に位置する。13SB1 の内部に位置しており、東側には 13SB2、南側には 13SB8・13SB20 が存在する。埋土は地山に近似した黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK4266 (図版 58・141)

35K14・15 区に位置する。埋土は炭化物を含む褐色シルトの単層である。深さが 7cm と浅く、自然のくぼみの可能性も検討したが、検出時の平面形が明瞭な円形を呈していたため、人為的な遺構と判断した。遺物は土師器が出土した。

SK4267 (図版 58・142・150)

31I18・19・23・24 区に位置する。西側には約 4m 離れて 13SB22、約 9m 離れて 13SB21、約 43m はなれて 13SB6 が存在する。長軸方向は N-58°-W であり、近接する 13SB21・13SB22 の桁行方向とは異なり、一定の距離がある 13SB6 の桁行方向と一致する。埋土は上から黒褐色シルトを基調と

する上層(埋土1層)、灰黄褐色～浅黄褐色シルトを基調とする中層(埋土2～6層)、炭化物を含む浅黄褐色～灰白色シルトを基調とする下層(埋土7～13層)に分けられ、レンズ状に堆積している。遺物は底面付近の埋土8層から円面硯1点が出土したほか、下層を中心に土師器碗・須恵器杯片が多く出土した。

SK4304 (図版 58・142)

25J22・23区に位置する。埋土は5層に分層し、レンズ状に堆積する。1～5層で土師器碗・甕・須恵器杯の破片が出土し、2層が最も多い。廃棄土坑と考える。また、1～5層は、15mm角前後の炭化物を多量に含むブロック土が充填されている。被熱の痕跡は認められない。明瞭に5層に分層でき、遺物に時期差が見られないことから、短期間に繰り返し廃棄された状況がうかがえる。

SK4313 (図版 58・142)

26J1・2区に位置する。本遺構を含む周辺は、現況の水田の影響を受けてグライ化し、マンガンの沈着が顕著であるが、遺構の検出は可能であった。やや凹凸があり、斜位に堆積する層があるもののおおむね水平に堆積する。量の多少はあるもののすべての層に焼土・被熱土ブロック・炭化物が含まれる。埋土は、彩度の明暗・ブロック土の密度と扁平具合・水平に堆積する混入物・粘性としまりなどを相対的に考慮し、6層に分層できるが、各層の中でも様相が一律ということではなく、分層の基準が明確でないものもある。長径が240cm、短径が143.5cm、面積が2.68cmと本遺跡では大きい部類の土坑で、極めて短かい期間に廃棄を繰り返したと想定され、一様な堆積とは判断しがたい。6層は焼土・被熱土が少量ではあるが、黄褐色シルトとのブロックが充填しており、掘形埋土と考えられる。須恵器無台杯(299・300・302)が出土した地点で焼土と被熱土を検出したが、底面地山(VI層)に被熱痕や硬化面は認められない。遺物の出土状況からも、廃棄を目的とした土坑であると考えられる。遺物は、1～6層まで須恵器杯片・土師器甕片が散在して出土している。このほか、羽口・軽石が1点ずつ出土している。

SK4349 (図版 58・143)

25J20、26J16区に位置する。平面プランはわかりにくいだが、掘削を進めるにつれて色調が暗くなり、地山(VI層)との境が徐々に明瞭になる。現代の農業用水路に切られるが、全体の平面形は楕円形と推測する。埋土は3層に分層し、地山(VI層)に比して色調が暗く、炭化物を少量含む。遺物が散在する状況であることから、廃棄土坑と考える。遺物は、2層から須恵器横瓶(303)などが出土している。

SK4363 (図版 58・142)

26J8・13区に位置する。埋土は7層に分層し、レンズ状に堆積する。現代の農業用水路に切られ、一部立ち上がりは明確でないが、遺存する平面・底面形状から隅丸方形と推測する。1層底面と3層中から出土した須恵器無台杯(305)が接合し、2層底面から折縁杯(304)、3層中から須恵器無台杯(306・307)・土師器小甕(308)が出土しているが、完形品はない。その他、土師器甕の胴部片・口縁部片が出土している。出土状況から本遺構は廃棄土坑と考えられる。底面に平坦面がなく、一部にビット状のくぼみがある。出土した遺物は同時期の所産と考えられ、構築から埋没までに大きな時期差はなく、短期間に廃棄が繰り返されたものと考えられる。

SK4390 (図版 58)

27K14杭周辺に位置する。4層は、褐灰色シルトブロックを含む黄褐色シルトを基調としたブロック充填土で、上面に硬化面は認められない。焼土ブロックの充填土である3層土は、焼き火等の排土を投棄したものであろう。本遺構は2回の機能面が存在したと考えられる。1回目は、遺構底面で、排土を投棄した廃棄土坑としての機能であり、2回目は、1層底面で、窪地を利用した何かを焼く目的をもつ機能

である。1層と2層には両機能の時期差を示す層が見られないことから、短期間で使用され埋没したと考えられる。

SK4414 (図版 59)

28I21区に位置する。北側を中世のSD2075に切られているため全体形状は不明で、溝の対岸に位置するSD4132と同一遺構の可能性もある。埋土掘削後に13SB10の構成柱穴であるP4933が検出された。よって、当遺構は13SD10より新しい。遺物は出土しなかった。

SK4425 (図版 59・143)

29I11・16区に位置する。検出時に1遺構と認識したが、2基に分離できる可能性がある。南側の深い範囲をSK4425A、北側の浅い範囲をSK4425Bと仮称する。新旧関係はB<Aとなる。SK4425Bは深さ15cm程で、底面の起伏は少ない。埋土は基本単層で、部分的に2層となるが、SK4425Aに特徴的な細かい炭粒や灰状のものは含まれない。SK4425Aは平面形が楕円形に近く、炭粒や灰状の物体を上位層ほど多く含む。平均深度は25cm程で、底面の起伏は少ないが、南側隅が一部落ち込む。焼土や比熱痕跡は認められず、埋土も自然堆積のようなレンズ状を示す。遺物は須恵器・土師器が各層から出土し、SK4425Aからは鉄滓も2点出土した。この内、SK4425Aの中位から出土した須恵器無台杯(314)を図示した。

SK4430 (図版 59・143)

28I17・18区に位置する。南側を中世のSD2075、西側を古代のSK4420に切られる。全体形状は不明だが、残存部分の最大長で180cmを超えることから、規模の大きい土坑であったと考える。1層から須恵器(315)が出土した。

SK4449 (図版 59・143)

28J17区に位置し、埋土1・2層が、平面帯状の噴砂を切る形で検出した。ただし埋土3層は噴砂に切られていたので、地山が変質した部分の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SK4451 (図版 59・143)

27J20区に位置する。底面はほぼ平坦で、埋土が地山と近似する。遺物は出土しなかった。

SK4455 (図版 59・143)

27J15、28J11区に位置する。深度66cm程だが、水が染み出すので井戸の可能性もある。底面中央付近の最下層4層から須恵器杯片が2点出土した。

SK4480 (図版 59・143)

28J5区に位置する。中央部が柱穴状に落ち込むが、一連の遺構と判断した。2011年度確認調査のSK149で、鉄滓等の微細遺物を含むことから焼土遺構の可能性が指摘されていたが、埋土に焼土は認められず、壁面にも被熱痕跡は認められなかった。1層から須恵器1点と鉄滓が出土し、すべての埋土の水洗選別の結果、1～3cm程の鉄滓が数点出土した。

SK4501 (図版 59・144)

26I25、26J5区に位置する。埋土は4層に分層し、水平に堆積する。1～4層まで、炭化粒を含む。中でも2層は、25mm前後の炭化物を少量、焼土ブロックを多量に含む。3層も同様ではあるが、炭化物や焼土ブロックは小さく、含まれる量も2層ほどではない。4層は、炭化粒を微量含み、2・3層に見られるような焼土粒と褐色シルトブロックを含む範囲を層として捉え、埋土4層としたものである。従って、掘形は明瞭でない。検出時に炭化粒・ブロック状の焼土が微量含まれ、地山(VI層)よりもややしま

る感じがあったため硬化面の可能性を考えたが、半裁時と完掘時に4層上面を確認したところ、被熱は認められなかった。焼き火等の排土を廃棄した土坑であると考え、遺物は4層から土師器片・須恵器片が出土している。

SK4503 (図版 59・144)

26J9・10区に位置する。埋土は3層に分層し、レンズ状に堆積する。1層は、灰褐色を基調とし、炭化物を微量に含むシルトからなる。遺物は、土師器片(279)と礫が1点出土している。2層は、炭化物を少量含む褐色シルトブロックと黄褐色シルトブロックである。遺物は、土師器片(280)が出土している。遺物のほとんどは1・2層中から出土している。3層は、2層よりも色調が明るく炭化物が含まれないことから分層したものである。遺物は、土師器片が1点出土している。出土遺物から、1～3層には時期差がほとんどなく、土坑は廃棄土坑であろう。断面は、底にわずかながら平坦面があるが、おおむね半円状を呈する。

SK4511 (図版 59・144)

25J3・4区に位置する。埋土は2層に分層し、レンズ状に堆積する。2層は、15mm角前後の炭化物を微量に含む、焼土ブロック・被熱土ブロックが充填した土層である。1層には、焼土ブロック・被熱土ブロックは極めて少なく、黄褐色シルトがブロック状に混ざる。本遺構には被熱痕や硬化面が認められず、各層の埋土の状況から投棄されたものと考えられる。遺物は、1層から土師器片、2層から土師器細片が出土している。

SK4605 (図版 59・144)

27J8区に位置する。1～6・7層は黄褐色シルトブロックからなり、炭化粒を微量に、5層には焼土ブロックが微量に含まれる。遺構検出時に平面プラン内の27J8区の一部で焼土ブロックが微量に含まれていたため、半裁時に掘り飛ばしてしまうことを回避するために、スライスするようにまず3分の1を掘った。その結果、焼土・被熱土ブロック・炭化物を主体とする7層では短期間に幾度も投棄された状況がうかがえた。遺構内が被熱した痕跡は認められない。底面は、北側から南側にかけてわずかに傾斜し、やや凹凸はあるが、おおむね平坦である。透水層まで掘り込まれていないことから、平面の分類も考慮して土坑とした。少なくとも、最終埋没直前は廃棄土坑としての機能を有していたと考える。遺物は2・4層のほぼ同一レベルから接合できる須恵器杯片、床直で須恵器壺口縁部片が出土している。

SK4607 (図版 60・144)

27J12区に位置する。北側は、基本土層確認トレンチにより欠落する。平面は南西側がやや張り出すものの、底面形状が楕円を呈することなどから、おおむね隅丸長方形を呈すると推測する。廃棄された可能性のある土師器片が浮いた状態で出土している。遺物の出土量は少なく遺構の性格は不明だが、平面形状の分類に基づき土坑とした。

SK4628 (図版 60・144)

26J19・20区に位置する。SK4629に隣接するが、重複か所が現代の農業用水路に伴う杭の攪乱を受けており、新旧関係を判断できなかった。攪乱を掘削して新旧関係の把握に努めたが、明らかにできなかった。東西方向の埋土は6層に分層でき、おおむね水平に堆積する。1・2層は、少量の土師器片と炭化物が含まれる。1層は水平に堆積し、マンガンが沈着する。2・3層は南側から断面観察位置(SPA-A'ライン)にかけて水平に堆積するが、北側で急斜度で落ち込む。20mm角前後の炭化物を含み黄褐色シルト・灰白色粘質シルト・褐色粘質シルトのブロック充填土で、しまりが無い。遺物は、3層から最も多く出土

しており、須恵器有台杯片・土師器甕片が4層直上、鉄滓が底部で出土している。出土状況から廃棄されたものと考えられる。4・5層は、15mm角以下の炭化物を微量に含む。6層は遺構肩部崩落土の可能性があり、ブロック状の黄褐色シルト土でよくしまる。埋土に焼土・被熱土は含まれず、硬化面も認められない。炭化物・マンガン以外の混入物もない。

SK4629 (図版 60・121・145)

26J20、27J16区に位置する。SK4628に隣接するが、重複か所が現代の農業用水路に伴う杭の攪乱を受け、新旧関係を判断できなかった。攪乱を掘削し新旧関係の把握に努めたが、不明のままである。東西断面の埋土は8層に分層した。堆積形状は、1・2層は水平で、5・8層を除く3層以下の層は底面に凹凸はあるもののおおむねレンズ状堆積である。8層はブロック状に堆積する。1・2層は、黄色系シルトを基調とするが、酸化作用のせいか色調が暗い。3層は須恵器甕(327)出土層で、層厚は最大14cmである。灰褐色シルトブロックを微量に含む黄褐色シルトを基調とする。須恵器甕片の外面に被熱による剥離が見られることから、構内で2次焼成を受けたと推測し、祭祀に関わる行為を想定したが、観察の結果、10mm角以下の炭化物が微量に含まれるものの、焼土は検出されなかった。また、破片の重なりを見ると、内面が上を向いている破片の上に内面が上を向いている破片が重なり、さらに外面同士が接して重なっているものもある。口縁部片ないし頸部片が離れて出土し、突き刺さるように垂直になっているなど、煩雑とした状況である。このことから、本遺構の外で破損したものを投棄したものと判断した。外面の剥離は、被熱によるものであるが、直接火に掛けられた2次焼成の痕跡が認められないため、製作過程における焼成と判断する。従って、当初想定していた祭祀に関わるものではなく、本遺構は廃棄土坑であると考え。1層は土師器鍋口縁部片1点、土師器甕胴部片2点が出土し、4・6・7層からも須恵器甕片が出土している。最下層は、地山(VI層)と色調に差がなく、VI層に比して粘性がやや強く、しまらないことから分層した。混入物はないが、須恵器無台杯が1点出土している。

SK4637 (図版 60・145)

26I23、26J3区に位置する。埋土は2層に分層した。2層は地山(VI層)に比べて色調が暗く、褐灰色シルトブロックを微量に含むことから埋土としたが、遺構底面の一部から壁面にかけて見られ、遺物が含まれないことから、地山の漸移部の可能性がある。1層は検出面から底面にまで確認することができる。褐灰色シルトと黄褐色シルトのブロック土からなり、人為的に堆積したものと考える。遺物は、土師器片・須恵器片が散在して出土している。廃棄土坑と考える。

SK4640 (図版 60・145)

27I23～25区に位置する。検出時の遺構内には平面が円形や隅丸方形のビット状のプランがあったが、サブレンチで確認したところ、人為的な掘り込みは認められず、本遺構の埋土であることが判明した。重複する遺構で本遺構よりも新しいものはSD2075>SF4410である。平面は、SD2075に切れ明確でないが、やや不整な長楕円形を呈するものと推測する。底面には、やや凹凸があり、北側かつ東側に緩やかに傾斜する。断面は半円状を呈し、埋土は斜位に堆積する。北側の立ち上がりは遺存しない。埋土は、12層に分層した。1～11層は焼土ブロック・炭化物を少量含む。2・3・7・11層は、焼土ブロックが散在するような状況で多く含まれる。12層にはφ3mm以下の炭化粒が少量含まれる。遺物は、土師器片・須恵器片などが出土している。焼土ブロックや炭化物の出土状況から排土を廃棄した土坑であると考え。噴砂の痕跡を確認でき、9層中で止まる。

SK4732 (図版 64・150)

28K3 区に位置し、中世の SD4367 と古代の P4818 (13SB13) と重複 (P4818<SK4732<SD4367) する。埋土は 4 層に分層でき、上半は水平、下半が斜位堆積を示す。遺物は出土しなかった。

SK4770 (図版 61・146)

27K10 区に位置し、長軸方向が周囲の掘立柱建物の方向とほぼ一致する。平面楕円形だが、西側がやや狭く、底面も浅い段をもつ。最下層の 2 層全体が、柱の当たりのように白色系に粘土化している。遺物は出土しなかった。

SK4921 (図版 61・146)

27J4・9 区に位置する。埋土は粘性としまりから 6 層に分層した。1～3 層は、粘性がやや強く、よくしまる。4・5 層は、粘性がやや強く、しまらない。6 層は、細砂を多量に含み黄褐色粘質シルトが 5mm 程度の厚さで帯状に堆積するが分層していない。構築時の掘削面として判断し、埋土 6 層とした。底面はテラス状の段を有しており、平面図の下端と 6 層の分布範囲が一致する。遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明であるが、平面形状の分類に基づいて土坑とした。

SK5000 (図版 63)

30L18・19 区に位置する。埋土は 3 層に分層し、レンズ状に堆積する。1 層は褐灰色シルトを主体とする。2 層は、1 層に比して色調が暗い。3 層は炭化物を多量に含むシルトで、灰褐色シルトブロックが扁平して少量含まれる。遺物は、土師器片・須恵器片が散在しており、埋土に土師器細片が微量に含まれるが、洗浄すると溶けるように脆く、形をとどめていない。堆積状況から廃棄を目的としたと考えられる。

F 焼土遺構

SF2189 (図版 40・114)

17I13 区に位置し、焼土面はにぶい黄褐色土が広がり、中央部がやや黒く変色する。焼土・炭化物が微量認められるが、あまり良く焼けていない。

SF2287 (図版 40・114)

17F20 区に位置し、焼土面は褐色土が広がり、炭化物が少量、焼土粒が極微量認められる。あまり良く焼けていない。

SF2522 (図版 40・114)

24H12 区に位置し、焼土面は灰黄色土が広がり、よくしまっている。中央部には炭化物が集中する。規模は小さいが比較的良好に焼けている。

SF2939 (図版 40)

19F9 区に位置し、焼土面はオリーブ褐色土が広がり、焼土粒が多量に認められる。著しく赤化はしていないが、比較的良好に焼けている。

SF4261 (図版 61・146)

32K14 区に位置し、長軸方向は N-13°-E を示す。埋土は上から焼土層である橙色シルトと炭化物・焼土粒を含む灰褐色シルトの 2 層に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SF4410 (図版 61・121・146)

27I23・24 区に位置する。西側を現代の溝、北側を中世の SD2075 に切られるため、全体形状は不明であるが、残存状況や底面の形状から東西方向に長軸をもつ楕円形の可能性が高い。規模を推定すると、

長さ 235cm、幅 130cm 程である。西側に段をもち、底面は起伏がある。均質な焼土や炭化物をもつ埋土は 4・5 層と 8 層で、最低 2 回の焼成行為があったものと考えられる。また 2・3 層は焼土ブロックを多く含み、遺構全面に広がっていた。1 層で須恵器が 1 点出土したほかは、水洗選別でも土器類・磁滓類は出土しなかった。

SF4800 (図版 61・121・146)

28K20 区に位置する。長軸 N-8°-E の平面方形の遺構で、下部の別遺構(長軸 N-74°-W のピット)を切る。埋土は 1～3 層で、最大深度 14cm である。1 層が焼土主体で、2 層が硬化した被熱面であることから、この場で火を使用したものと考えられる。鍛冶遺構の可能性もあることから、水洗選別した土器類・磁滓類は出土しなかった。

G 性格不明遺構

SX4001 (図版 62・121)

21G6・11 区ほかに位置する。長軸方向は N-9°-E を示し、長軸 298cm、短軸 254cm、最大深度 54cm である。3・4 層が色調・土質ともに地山に近似していたことから、調査当初は遺構全体の形状を認識できなかった。隅丸方形に近い形で検出し、規模も 3m 弱であることから竪穴住居の可能性を考慮したが、1～3 層を調査した結果、断面弧状の浅い落ち込みであると判断した。調査区(2013 年度 A 区)全体写真撮影後、最終確認のために周囲を約 25cm 掘り下げたところ、1～3 層と異なる灰白色を主体とした方形のプランを検出し、測量図と照合して、未調査部分(4 層)と判断した。下部の掘り込みは南北方向が上部とほぼ規模は同じだが、西側方向が狭くなるので、長方形を呈する。西側に一段高い平坦面が存在したものと考えられる。遺構の底面はほぼ平坦であるが、床面のように硬化した面や柱穴等は検出できなかった。古代の遺物は出土したが、底面付近からの出土はなく、竪穴建物 SI2368・SI3048 と比較しても量が少ないため、性格不明遺構とした。

SX4264 (図版 62・147)

35K18～20・23～25 区に位置する。長軸方向は N-83°-W を示す。埋土は上から黒褐色シルトと浅黄褐色シルトの 2 層に分層され、レンズ状に堆積する。遺物は黒褐色シルト層を中心に土師器・須恵器片が多く出土した。本遺構周辺では径 10～30cm 程の黒褐色シルトが堆積する自然のくぼみを多数検出した。したがって、本遺構は人為的に構築されたものではなく、自然の落ち込みの可能性もある。

SX4265 (図版 61・147)

35K12・13・17・18 区に位置する。埋土は炭化物を含む灰白色シルトの単層で、上面に IV 層由来の炭化物を多量に含んだ明褐色シルト層が堆積する。遺物は土師器・須恵器・軽石が出土した。埋土は炭化物の有無を除けば地山と近似しており、平面・断面形も明瞭ではない。人為的に構築されたものではなく風倒木痕の可能性もある。

SX4864 (図版 61・147)

27J12・13 区に位置し、重複する古代の SD4642 を切る。底面は緩い斜面の段をもち、南側が最低面となる。平面形・断面形ともに不整形で、2 層から自然礫が 1 点出土した。

SX4999・P5035・P5036 (図版 62・63・122・147)

30・31L 区に位置する遺構である。中央部で SK5000 に切られ、南側で SE4998 に切られる。平面は後述する 29 層の立ち上がりの位置からほぼ方形と推測する。緩斜面の上位を浅く掘り込んで、平坦面を

作りだした可能性がある。北西寄りの範囲で、被熱して赤化した粘土帯が紡錘状に検出された。県内の平安時代の類例としては、新潟市細池寺道遺跡の第44次調査で検出された「カマド状遺構」が挙げられる。5基検出されており、主要となる部分の紡錘形の燃焼部、連結する竪穴状の作業場など共通性がうかがえる。報文〔安達2017〕によると、カマド状遺構の性格について「継続的に使用される燃焼施設であること、製鉄炉や鍛冶炉とするには、関連遺物が非常に少ないこと、穀類、魚骨などが出土していること、居住施設である掘立柱建物や井戸とセット関係を示していることから、現状では調理に関わる施設であることを推定しておきたい。」としている。山口遺跡で検出できたのは1基のみであるが、掘立柱建物群とは離れた位置に存在している点が異なる。カマド状遺構自体の性格の違い、掘立柱建物の性格の違いなどが想定できる。

燃焼部は推定される北辺のほぼ中央に位置し、真北に向かって張り出している。燃焼部の両外側で柱穴2基（P5035・5036）を検出した。焼成部は、長径155cm、短径115cmの平面三角形で、断面台形状を呈する。竪穴部は、掘形の形状から推測すると平面は方形を呈するものと考えられ、長辺（南北）5.9m、短辺（東西）5.45mである。堆積状況から、加工面、機能面、廃絶後の崩落及び自然堆積、2次堆積の状況をうかがいしることができた。以下、構築から廃絶までの堆積について順を追って記述する。28～30層底面は加工面である。30層は、焚口前の一部分にのみ確認できるもので、黄褐色シルトを主体とし、灰白色粘質土・黒褐色粘質シルトのブロックが充填する。微量の細砂が含まれるが、埋土中に満遍に含まれるものではなく、砂の塊が斑状に見られる。粘土を貼り付けたようなしまりは認められない。粘質土が主体でなくしまらないことから確たる証拠は得られなかったが、焚口を堅固なものとするための基礎と推定した。貼床と考えられる29層下位に構築される。29層との層境は明瞭である。29層は、30L18区以南では、底面には凹凸があり、地山（VI層）との層境が色調と粘質ブロックの有無から明瞭に識別できる。30L18区では、北側は急斜度で落ち込み、南側の落ち込み際から底面にかけてはなだらかに傾斜するように構築されている。焚口前の作業スペースだろうか、平面形がやや不整な円形で、断面は台形状を呈する。南側の落ち込み際を境に北側と南側で色調が異なるが明確に分層できなかった。本層上面は、おおむね平坦ではあるもののやや凹凸があり、硬化面も認められず貼床にしては軟弱ではあるが、本層とその上位の層との境に扁平したブロックがわずかながら認められることから床貼りがなされたものとみなした。明確な掘形は認められず、緩やかに立ち上がる。28～31層上面が機能面である。28層以下は、細砂が多量に含まれ、26層とした地山被熱痕よりも下位の層であることから機能以前に形成されていたと判断する。焼土ブロック・炭化物が微量に含まれ、機能時に多少の攪拌があったものと推測する。31層は焼土で、地山（VI層）被熱範囲は、これ以外に硬化面が認められることから便宜的に32層とした。約10cm幅で地山（VI層）が硬化している。焚口の東側で底面が円形を呈するくぼみを検出したが用途は不明である。

27層は、地山（VI層）直上の層で、底面に焼土ブロック・被熱土ブロック・炭化物を微量、細砂を多量に含む。26層は廃絶直前に掻き出されたか、もしくは流出したののだろうか、焚口前の土坑状の落ち込みに流れ込むように堆積する。焼土ブロック・被熱土ブロックが充填し、炭化物が少量含まれる。25層は薪として使われた材の炭化物層と考える。18～21・23・24層は、廃絶後に自然堆積したと考えられる層である。貼床直上の22層は、灰白色粘質シルトブロックを少量・炭化物を微量に含み、広範囲に広がる。30L12・14～17・21、31L区での明確な掘形は認められず、炭化物の分布範囲を抑えた。分布は、方形の掘形の周囲60m²に確認される。地形が低くなる東側に寄っている。平面図上は破線で表記した。17層は、27層に類似するがしまりが強く、細砂は目視で確認できないが、鎌で削ると砂気を感じる。上部にはスサの痕跡と推測される繊維質の灰が斑状に見られる。現地調査時には分層できなかった。4～

16・17層上部は、壁面上半部と天井部の崩落土と考えられる。12～15層は、少量～多量の細砂・焼土ブロック・炭化物からなり、4～11層の混入物は微量～少量である。6層には被熱土ブロックが多量に含まれ、焼土ブロックと被熱土ブロックの堆積状況から天井が構築されていたと判断した。1～3層には、微量の混入物が確認できるが、黄褐色シルトが主体であることから、廃絶後に自然堆積したものとする。廃絶後に、窪地を利用して形成されたのがSK5000と考える。燃焼部の被熱は、天井部～壁面で認められ、底面には確認できなかった。また、燃焼部から遺物は出土しておらず、焚口付近でも硬化は認められるものの、構築材に土器や石が用いられた痕跡は見つからなかった。21層の落ち込み際(29層床直)から須恵器無台杯(346～348)が3点、20層から折縁杯(345)1点、蓋(344)、甕(351)が出土している。本遺構は、加工面である28～30層、機能時の痕跡をうかがわせる22・25～27・31・32層、廃絶後の堆積を示す1～23・24層に識別される。P5035・5036の柱穴は燃焼部の両外側に位置する。形状はいずれも、平面が隅丸方形で、断面が台形状を呈する。検出面からの深さは約30cmである。柱痕が認められ、長径15cm前後である。P5035挿形から縄文土器片が出土しているが混入したものである。これ以外の柱穴は遺構内外で検出されていないことから、竪穴外柱穴と考える。焼成部の覆屋を想定しているが、SX4999の南側は調査区外に延び明確ではない。伏屋式の上屋の可能性もある。

H 溝

大小の溝があり、2010年度調査と2013年度調査を合わせて36条検出した。

SD1948 (図版41・115)

21J7・12区に位置する南北方向の溝である。調査区外に延びるため全体形は不明だが、北側延長方向にSD2289が近接する。

SD2289 (図版41)

21J6・7区に位置する東西方向の短い溝で、SD1948・2290と近接する。SD1948とは直交、SD2290とは主軸をほぼ同じくする。遺物は1～3層から出土しているが、中央部付近の1層下位に集中する。平面長方形の土坑の可能性もある。

SD2290 (図版35・41)

20J5・21J1区に位置し、東西方向に短く延びる。近接するSD2289と主軸はほぼ同じだが、遺物の出土状況は異なり、土師器の小破片が溝の全体に散在する。主軸方向が直交関係にあるSD1948と堆積状況が似ており、一連の遺構の可能性もある。

SD2496・2675 (図版36・105・106)

22H・I区に位置する。SB18に近接し、桁行に平行して東西方向に延びる。建物を挟んで北側にSD2496、南側にSD2675が存在するが、長さはSD2675が桁行1間分短い。これらは同時期に機能していたものと推定され、建物との位置関係から雨落ち溝と考える。

SD2497 (図版41・115)

23H8・9・13・14区に位置する。SK2498・2499に近接する。東西方向に短く延び、西側延長にはSD2496が存在する。平面形は東側が緩やかに南側へ湾曲する。埋土は3層に識別され、灰黄色から黄灰色土が堆積する。いずれも炭化物を微量に含む。

SD2604 (図版41・115)

21G4から22G2区にかけて位置する東西方向に軸をもつ溝で、長さ648cm、幅約44cmの短い溝

である。SI2368、SK2530・2795の西側に隣接する。軸方向はSB21の北面と同じ方向で、また南側に位置するSK2600の西端と溝の西端が一致することから、互いに関係性をもった遺構の可能性はある。埋土1・2層から須恵器無台杯・甕(141～143)、土師器長甕(144)などが出土し、須恵器の胎土がB群主体であることもSK2600と共通する。

SD2607 (図版41・115)

23G・H・24H区に位置する。北北西-南南西に短く延びる。幅広で浅く構築されている。埋土は2層に識別され、いずれも炭化物粒を微量に含む。遺物は土師器の小破片が点在して出土した。

SD2682 (図版41・115)

16E2・3区に位置する。西北西-東南東へ直線状に延び、3mの間隔を開け、東南東延長にはSD2788が存在する。位置関係から両者は同時期に機能していた可能性が考えられる。埋土は2層に識別され、いずれも炭化物粒を極微量含む。

SD2685 (図版41)

19E17・18区に位置する。西北西-東南東に延び、西端は削平の影響により不明瞭となる。埋土はにぶい黄褐色土が堆積し、焼土粒・炭化物粒を微量に含む。遺物は埋土上位から土師器・須恵器の小破片が出土した。

SD2788 (図版41・116)

16E5・10・17E1区に位置する。埋土は褐色土が堆積し、炭化物粒を極微量含み、SD2682の2層に類似する。

SD2849 (図版41・116)

16G5区から17G6区にかけて位置する。ピットなど遺構が比較的集中する15・16F・G区で検出された。西北西-東南東に短く延び、19mとやや離れているが北側に存在するSD2682・2788と主軸はおおむね平行する。埋土は褐色土が堆積し、炭化物粒を極微量含み、SD2682・2788と類似する。また、埋土の堆積状況は異なるが、6m南に所在するSD2866とも主軸がおおむね一致する。したがって、調査区西側の溝は同一の方向に構築されていることがうかがえる。

SD2866 (図版41・94・116)

17G22・23・17H3区に位置する。埋土は褐色土が堆積するが、西側では焼土・炭化物粒が多量に含まれる。側壁・底面に被熱の痕跡が認められないことから、廃棄されたものと考えられる。

SD2959・2960 (図版37・100)

21H・I区に位置する。SB22内に存在し、約1mの距離を開けて南北方向に平行して延びる。両溝は建物の柱穴と重複しないこと、建物の外に延びないことから、建物に伴う可能性もある。東側に隣接する13SB4の拡張に伴う雨落ち溝の可能性も考えたが、建物の埋土に違いはなく、時期差は認められない。

SD2966 (図版41・116)

19F13～15区に位置する。東西方向に延び、7m北に所在するSD2685とおおむね平行する。SD2685とは埋土に炭化物粒を含む点で共通するが、埋土の色調・焼土を含まないことなど、若干の相違がある。埋土の色調は南側に近接するSK2941に類似する。

SD4004 (図版64・148)

20E21区から20F11区にかけて位置する。13'東偏する南北溝で、南端はSD2966の東端とほぼ位置を同じくする。調査年度が違うので明確ではないが、ほぼ直角を有する同一溝の可能性が高い。また北

側は調査区外に延びるが、西側に位置するSD2685の東側延長方向と、直交関係にある。この溝も同一溝と仮定すれば、SD2685、SD4004、SD2966でU字状またはJ字状を呈する可能性がある。

SD4055 (図版 64・148)

20F2・7区に位置し、西側にSD4004が平行する。両者の溝間は1.2～1.5mである。

SD4112 (図版 64・148)

21G12区から21H2区にかけて位置する。3°東偏する南北溝で、底面は南側から北側に向かって徐々に深くなり、21G17区北寄りでも最深となる。埋土は3層に分層したが、いずれも地山に近似する。平面方形のSX4001に近接し、東辺と平行関係にあるが、関係は不明である。

SD4132 (図版 23・64・148・149)

27I14区から28I16区にかけて位置する。長軸方向は西側でN-40°-Eを示し、27I9・10区で南東方向に90°屈曲し、N-50°-Wを示す。28I16区で中世のSD2075に切られるが、その延長方向の溝を越えた地点に位置するSK4414は同一遺構の可能性はある。埋土はレンズ状堆積で2～5層に分層が可能であるが、一定していない。上からいぶい黄橙色シルトを基調とする上層、褐色～灰白色シルトを基調とした中層、褐色シルトを基調とした下層に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は土師器・須恵器が各1点出土している。

SD4228 (図版 64・122)

25H3～5区に位置し、長軸はN-66°-Eを示す。埋土はいぶい黄橙色シルトの単層で、遺物は出土していない。西端は材木列脚と推定されるSA2704と重複するが、本溝調査に先行して完掘されていたため、新旧関係や関連性を確認することはできなかった。

SD4236 (図版 64)

27H4・9・14区に位置する。長軸方向はN-8°-Eを示す。埋土は褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD4388 (図版 64・149)

27J1区から27J4区に位置する東西溝で、長軸は83°東偏する。遺構検出面が高い農道部を横断するように走るので、構築時はさらに延びていた可能性がある。およそ6m南に古代のSD4446、さらに6m南に中世のSD4367が平行して走るが、関係は不明である。また、西側延長方向にSE4502が存在し、その中央部に向かって延びている様相であるが、それとの関連も不明である。遺物は出土していない。

SD4642と平面的に重複するが、検出標高は異なるのでSD4642<SD4388と想定する。同様に13SB10の構成柱穴P4915よりも新しく構築された遺構と考える。

SD4446 (図版 64・149)

27J16区から28J15区に位置する東西溝である。やや蛇行するが直線状で、長軸は87°東偏する。およそ6m北に古代のSD4388が平行して走る。また、西側延長方向にSK4629が存在し、その中央部に向かって延びている様相であるが、それとの関連は不明である。SD4388より検出面は低く、埋土は地山に近似する。28J16区で須恵器片が1点出土した。

SD4447 (図版 64・149)

27J25区から28J23区に位置する東西溝で、長軸は87°西偏する。同じ東西溝のSD4446と近く、埋土も近似するが、平行関係にはない。むしろ重複や接点はないが、北西側に位置する南北溝のSD4642とは直交関係にある。遺物は出土しなかった。

SD4453 (図版 64・149)

27K4区から28J22区にかけて位置する東西溝で、長軸は84°東偏する。北側4m程離れて位置するSD4446と平行関係にあるが、南側に近接する13SB24の北面とも同様の関係にある。13SB24の雨落溝の可能性が高いが、東側にほぼ1間分の余裕(長さ)があるので、建物の規模も含めて検討課題である。27K5区の1層から土師器片が1点出土している。

SD4456 (図版 64・148)

28I25区から28J6区にかけて位置する南北溝で、北側を中世のSD2075に切られる。13SB10の東面に隣接し、溝の南端も13SB10の南面柱筋の延長ラインと一致する。しかし、北側のSD4132と同一遺構の可能性が高く、13SB10の建物範囲と重複することから雨落溝ではないと判断した。遺物は出土しなかった。

SD4506 (図版 64・148)

26・27J区に位置し、長軸は12°東偏する。本遺構の北側と南側とは30cmの間隔があることから、当初、北側の遺構を平面形状の分類に基づき土坑とした。しかし、平面プランは断続するものの、断面の形状と断面観察の結果から同一遺構であると判断し、SK4505は欠番とした。隣接するSD4507と形態・規模が近似しており、同時期のものと判断できる。検出長は、1.74mであるが、遺構検出面の高い農道部を横断するように走ることから、構築時はさらに延びていた可能性がある。また、SD4302と平行するが、本遺構の底面標高は最低でも6.38mであり、SD4302の底面標高の最高(6.14m)よりも24cm高い。北方へ向かって緩やかに傾斜することがわかる。検出面からの深さは、最大で19cm、底面標高の高低差は最大で10cmである。遺物は出土していない。

SD4507 (図版 64・148)

26J10・15区に位置し、長軸は12°東偏する。隣接するSD4506と形態・規模が近似しており、同時期のものと判断できる。検出長は、2.8mであるが、遺構検出面の高い農道部を横断するように走ることから、構築時はさらに延びていた可能性がある。また、SD4302と平行するが、本遺構の底面標高は最低でも6.41mであり、SD4302の底面標高の最高(6.14m)よりも27cm高い。遺構調査時はSE4502との関連も考慮し、底面の勾配を意識したが、高低差は認められず、SE4502との関連はないと判断した。検出面からの深さは、最大15cm、底面標高の高低差は最大で6cmである。26J10区底面直上で石礫が1点出土しているが、混入である。

SD4635 (図版 64・148)

24J18・23・24に位置する。長軸は36°西偏し、26H区のSD2にほぼ平行する。検出長は1.29m程度で全容は不明だが、北西に向かって傾斜する。遺物は出土していないが、埋土から平安時代と推測する。ほぼ同時期と考えられるSB7が近接するが、関係は不明である。セクションB-B'は、P4636との新旧関係を確認するために設定した。

SD4642 (図版 64・149)

27I・J区に位置し、長軸は2°東偏する。検出時には、SB10とほぼ平行し適当な幅であったことから、SB10に伴う雨落溝と想定していた。しかし、直接的な切り合い関係にはないものの、SB10P4913と重複する可能性があり、軸向きも11°の差があること、本遺構と同規模の溝が検出できなかったことなどからSB10に伴わないと判断した。27J18区では、SD4446とほぼ垂直にぶつかる。27I18区では、SD2075に切られ、その以北からは検出できなかったが、27H区にはSD4237が存在し、同一遺構の可

能性もある。検出面からの深さは、最大で41.8cm、底面標高の高低差の最大は21.6cmである。検出長は9.06mである。遺物は埋土1層から土師器が出土している。

SD4772 (図版64・149)

27K23区から28K12区にかけて位置する東西溝で、やや蛇行する長軸は62～80°東偏している。東端付近はSK4779及び13SB13の構成柱穴P4765と重複するが、いずれも切っている。27K23区の2層から須恵器片が1点出土した。

I ビ ッ ト

P3069 (図版40)

23I25区に位置し、三面廂建物SB19の建物範囲と重複するビットである。平面円形、断面箱状を呈し、長軸26cm、短軸18cm、深度は20cmである。構築方法、埋土堆積状況ともに他のビットと変わりはないが、埋土1層から唐三彩の琴を模した破片(209)が出土した。同一層からの共存遺物は土師器小甕片のみで、詳細な時期は不明である。

4 縄文・弥生時代の遺構

A 弥生時代の竪穴建物

SI3005 (図版42)

22I24・25区に位置する。平面形は方形を呈し、規模は上端長軸2.52m、深さ0.34mを測る。床は水平で、貼り床や柱穴は検出していない。覆土は1～5層に分かれる。1・2層は炭化物を含み、1層から深鉢形土器(250)がまとまって出土した。3～5層は地山土と近似するものの、微細な炭化物の混入と色調の違いから区別した。5層からは深鉢形土器の口縁部片(247)が出土した。時期は弥生時代前期か縄文時代晩期末葉の可能性がある。

B 縄文時代の土器集中範囲

SX4100 (図版150)

2013年度調査で検出したもので、農道下の20G10区に位置する。古代の遺構検出面であるVI層を掘り下げている段階で検出した。近接地に土層観察用のベルトを残しながら掘削し、遺物の広がりや遺構の掘り込み面等を精査したが、遺構の掘り込みを検出することができなかった。遺物出土範囲をSX4100として調査したが、遺構や攪乱等ではなく、VI層中に当該時期の遺物が含まれていたものと考えられる。同一個体の破片で、復元が可能であった(479)。縄文時代晩期中葉に属する。同じ農道では、40m北西の23J16区でも縄文土器(480)が出土している(図版150)。いずれも検出標高は、周辺の2010年度調査区の遺構検出面より10cm以上高く、遺物が周辺に分布していたとしても、耕地整理で削平されていた可能性がある。一方、2010年度調査では縄文時代層の検出を目的としての下層の試掘調査を実施している(第三章参照)。1か所(7T)で縄文時代晩期の土器が出土したが、その標高はSX4100より約2m低く、距離も18m程しか離れていないので、両者の埋没課程に検討が必要である。

第V章 遺物

1 中世の遺物

A 概 要

中世の遺物には、土師質土器、瀬戸焼・美濃焼（以下、「瀬戸・美濃焼」とする。）、珠洲焼、白磁、青磁、瓦器、石製品、金属製品、木製品などがある。遺物点数は極めて少なく、ほとんどが井戸・溝からの出土である。陶磁器は、13世紀後半～15世紀に属する。

陶磁器の器種分類や年代観については、貿易陶磁器は〔森田1982・山本2000〕、珠洲焼は〔吉岡1994〕、瀬戸・美濃焼は〔藤澤2008〕を参考にした。

B 土器・陶磁器（図版65・76・151・159-1～37・259～265）

1～37が2010年度調査区から、259～265が2013年度調査区から出土した。

1・2は土師質土器皿で、1の底部切り離しは回転系切りである。3～6は青磁である。3～5は椀で、3・5には蓮弁文が見られる。4の口縁部は外反する。6は杯の体部片と考えられ、「く」の字状に屈曲する。7は白磁皿で、軸はやや厚かかる。8～13は瀬戸・美濃焼である。8・9は天目茶碗で、8の施軸は漬かけかけによる。8・9の豊付部分には糸切り痕が残る。また、高台は削り出され、高台脇には段が形成される。古瀬戸後期様式に属すると考えられる。10～13は椀で、10の口縁部はやや外反する。11は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。12の豊付部分には糸切り痕が残る。14は瓦器の播鉢で、口縁端部は内傾する。15～35は珠洲焼で、15・16は甕、20は壺の口縁部片である。15の口縁部は短く外側へ屈曲する。16の口縁内面には稜が形成される。20の頸部は横ナデにより、微隆起が生じる。いずれも珠洲焼Ⅳ期〔吉岡1994〕に比定される。21は壺の体部で、膨らみは弱い。外面上半は鎌杉状の叩打痕が認められる。28～35は片口鉢で、28の口縁部は横方向の強いナデにより、凹状にくぼむ。珠洲焼Ⅳ期〔吉岡1994〕に比定される。29の口縁は内傾し、端部の稜は明瞭である。30・31の口縁部には篩目波状文が施される。いずれも珠洲焼Ⅴ期〔吉岡1994〕に比定される。33～35は底部片で、35は内外面にスズ状の付着物が認められる。36・37は珠洲焼の破片を利用した研磨具である。36は外面、37は外面のほか、割れ口の断面に研磨痕が観察される。

259は推定口径14.0cmの白磁皿である。口縁がわずかに外反する端反りの皿で、内面に1条の沈線が巡る。山本〔2000〕分類の白磁皿Ⅲ類に比定でき、12世紀中頃の所産と考える。260は青磁の椀で、高台径4.8cm程と推定する。体部に縦方向の稜をもつことから蓮弁文椀と考えられる。山本〔2000〕分類の龍泉窯系青磁椀Ⅲ類に比定でき、13世紀中頃～14世紀初頭前後の所産と考える。261は推定口径13.0cmの青磁の杯で、口縁部は受け口状に屈曲する。割れ口を観察すると、外面の口縁部下に、断面方形の幅3mm弱の沈線が認められる。口縁部を屈曲させる際の製作痕の可能性が、山本〔2000〕分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類に比定でき、260と同時期の所産と考える。262～264は珠洲焼である。262は珠洲Ⅳ期の甕の口縁部で、内側に面をもちながら外側に短く屈曲する。263は甕の体部を砥石に転用したもので、外面下3分の2が磨りにより滑らかである。特に中央は横位に幅1.3cmが溝状にくぼむ。

縦5.0cm、横6.2cm、厚2.3cmで、内面の形状から意図的に打ち欠いてサイズを整えたものとする。264の甕の体部片は、外面平行タタキ、内面は小ぶりの無文当て具である。265は産地不明で即日も認められないが、中世陶器の描鉢の可能性はある。

C 土製品 (図版 66・73・152・156-51・220)

51・220は羽口で、SE2256の3層と1層から出土した。51は推定外径9.4cmとやや大きいのが、厚みが1.3cm程度と薄いため、内面も剝離した可能性がある。220は推定外径8.5cmで、先端部分である。

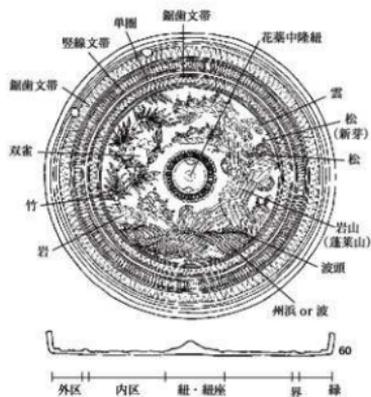
D 石製品 (図版 66・152-38~41)

38~40は砥石で、38・40は両端部、39は下端部を欠損する。38の裏面は凹状のくぼみが多数認められることから、被熱したものと考えられる。39は正裏面が使用されており、線状痕が観察される。40の器面にはスズ状の付着物が認められる。41は茶臼の下臼と考える。摺り面が中央部に向かってわずかに下がっており、上臼の要素も認められるが、受け部の痕跡が巡ることから下臼と判断した。SB1の柱穴P2347の柱痕上部から出土し、周縁を柱痕の大きさに打ち欠いて、埋設したものと推定される。残存する白径は約20cm、厚さ8.6cm、中心穴径は約1.5cm、摺り合わせ幅は約3.0cmである。目立ては残存形状から8分割と見られ、副溝は8~9条ある。石材分析の結果、酸性安山岩〜デイサイトと同定された(第VI章1C参照)。

E 金属製品・鍛冶滓 (図版 66・67・152-42~50・52~61)

42~48は釘である。いずれも断面は方形で、42・44・48の頭部は折り曲げられている。49・50は不明鉄製品である。49は先端部側を欠損する。断面は長方形で、厚さは7mm程度と推定される。50の断面は扁平な長方形であり、厚さは4mmと考えられる。52はガラス質滓、53・54は鉄滓である。55~59は楕円形滓で、いずれも断面形は緩やかな弧状となる。

60はSE2268の埋土9層から出土した青銅製の和鏡で、鏡背の外区に施される文様から「擬漢式鏡」とも呼称される〔青木1997〕。法量は直径10.8cm、中心厚0.5cm、外側厚0.7cm、重量93.0gである。内区の意匠から「蓬萊双雀鏡」に該当する。紐は花葉中隆紐を置き、「太線単圓で内外区を分割し、界圈に沿って内区には鋸歯文帯を一条巡らし、外区には縦線文帯と鋸歯文帯を二条の平行細線を挟んで設けている」。内区の意匠は、下辺に州浜(または波+波頭)、左右に岩・岩山(蓬萊山)、左側に竹、右側に松(上部に新芽)・雲があり、紐の左上に相対する双雀が描かれている。青木〔1997〕に掲載されている紀年銘のある資料と比較すると、文和



第15図 山口遺跡出土和鏡の部位名称と意匠

2 古代の遺物

4 (1355) 年銘資料が最も構成が似ていることから、当資料も 14 世紀中頃のものとして推測する。出土時に白色物質の付着が認められたことから、蛍光 X 線分析を行った。その結果、鏡面、鏡背から水銀が検出され、全面に鍍銀が施されていることが推定された (第 VI 章 1D 参照)。左上には懸垂目的の小孔が 2 か所認められる。

61 は銭貨で、SB10 の柱穴 P2096 から出土した。開元通宝 (唐: 初鑄 621 年) で、これと重なっても一枚銭貨 (天聖元寶か・北宋: 初鑄 1023 年) が出土している。検出面付近の出土で、埋納か自然落ち込みかは不明である。

F 木 製 品 (図版 67・152-62-66)

62 ~ 65 は SE2292 出土である。62・63 は水溜に使用された曲物で、径の大きい 62 が上、小さい 63 を下に 2 段重ねにして据えられていた。いずれも側板二重構造で、63 の下端には掻が巻かれる。また、側板の内側には、側板の上下軸に対して縦平行線のケビキが入られる。63 の側板の内側には、側板の上下軸に対して縦平行線、斜平行線のケビキが入られる。64 は曲物底板で、端部には木釘孔が見られる。これらは、板状に分割されて 62 と 63 の間に挟めた状態で出土しており、表面には 62・63 の当たり痕が認められる。65 は芯持丸木の自然木で、62 の曲物内から出土した。66 は SE2348 出土の曲物底板で、表面には黒色の付着物が認められる。

2 古代の遺物

A 概 要

古代の遺物は当該期の遺構が多く検出された範囲を中心に、調査区全体から出土した。出土傾向については遺物量の多い、須恵器・土師器の重量分布図 (第 16 図) からうかがうことができる。須恵器は重量約 56,033g、土師器は重量約 44,463g 出土した。調査区南西側は古代・中世の遺構が希薄な低地であり、遺物包含層は厚く残るが、遺物出土は散漫である。その範囲以外は、遺物包含層が後世の耕地整理等の影響を受けているので、必然と遺構が集中する範囲での出土が多くなる。現状では東北東-西南西方向の列状にいくつかの集中域が認められる。

記述は、土器類 (須恵器・土師器・灰軸陶器)、唐三彩、土製品、石製品、金属製品、木製品に分けて行う。また遺構出土遺物の各説は、第四章の遺構種別順とし、古代以外の遺構や遺物包含層などからの出土遺物はその後に記述した。

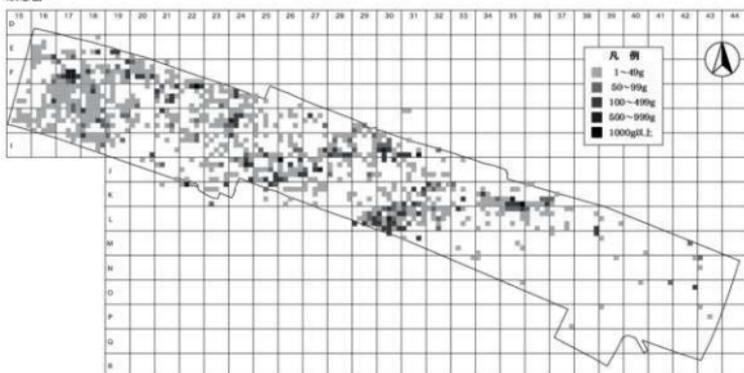
B 土 器 類

2010・2013 年度調査で出土した土器類は、灰軸陶器 1 点以外は須恵器・土師器である。

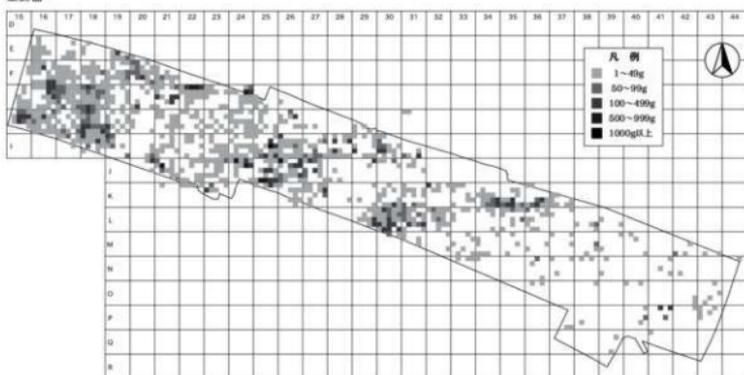
須恵器 須恵器の器種は、杯蓋・有台杯・折縁杯・無台杯・盤・短頸壺蓋・短頸壺・長頸壺・広口壺・横瓶・甕・円面硯が出土した (第 17 図)。円面硯は陶製品であるが、杯類にも硯として転用されたものがあることから、この項で記述する。遺跡全体では食膳具の杯類が大半で、壺・甕などの貯蔵具類は少量である。数量の多い無台杯・有台杯・杯蓋については、法量や形態により細分類を行った。

杯蓋は単純に口径 (1 ~ 3 類) のみで分類した。口径は 12.0cm 以下を 1 類、12.1 ~ 13.9cm を 2 類、14.0cm 以上を 3 類とした。有台杯は、器高指数 (1 ~ III 類) と口径 (1 ~ 3 類) の組み合わせで分類した (第

須恵器



土師器

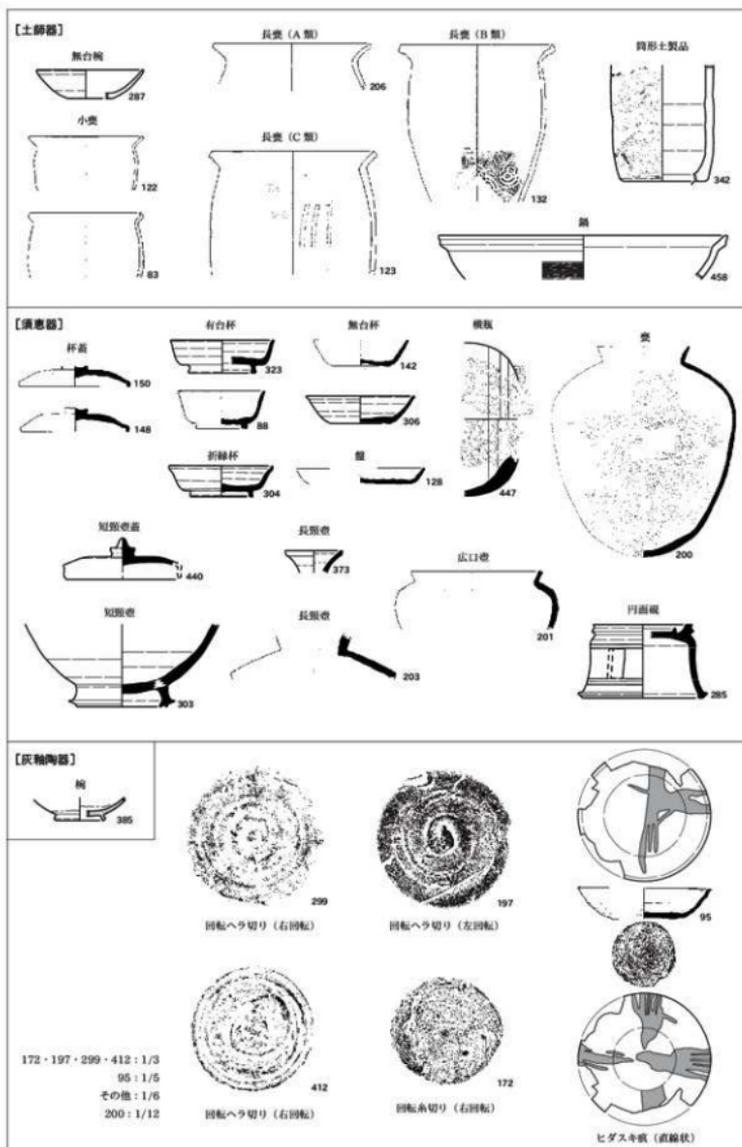


第16図 須恵器・土師器の重量分布図

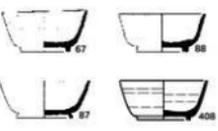
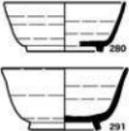
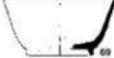
0 (1:2,000) 50m

18図)。器高指数は35以下をⅠ類、36～50をⅡ類、51以上をⅢ類とした。無台杯は、底径指数(Ⅰ～Ⅳ類)と口径(1～3類)の組み合わせで分類した(第19図)。底径指数は75以上をⅠ類、74～65をⅡ類、64～55をⅢ類、54以下をⅣ類とした。有台杯と無台杯の口径の分類は、杯蓋と合わせた。

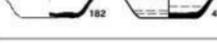
須恵器の胎土はこれまでの研究成果[坂井ほか1989、春日2004など]を参考に、A～Cの3群に分類した。A群の特徴は、「胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・金雲母を多く含む。器面はざらついたものが一般的で、含まれる鉱物の粒子は金雲母を除くと比較的大きい。豊浦町・笹神村五頭山麓窯跡群のほか、荒川町元山窯跡群・黒川村松山窯跡群・加治川村下小中山・貝屋窯跡群・新発田市ホーロック沢窯跡群で生産された須恵器に一般的に見られる」[春日2004]としている。すべて含めて「阿賀北産」とも呼称される。今回観察した胎土の中には、見た目の色調が赤褐色を呈して硬質なもの、白色を呈して軟質なものがあり、一様ではない。複数の窯跡のものがあると想定できるが、分類することはできなかった。前者の胎



第17図 古代の土器の分類と調整痕跡など

		口径		
		1類 (12.0cm以下)	2類 (12.1cm以上13.9cm以下)	3類 (14.0cm以上)
器 高 指 数	I類 (35以下)			
	II類 (36~50)			
	III類 (51以上)			

第18図 須恵器有台杯の口径及び器高指数

		口径		
		1類 (12.0cm以下)	2類 (12.1cm以上13.9cm以下)	3類 (14.0cm以上)
底 径 指 数	I類 (78以上)			
	II類 (74~66)			
				
				
IV類 (64以下)				

第19図 須恵器無台杯の口径及び底径指数

土の杯類は器厚が相対的に薄手である。B群の特徴は、「胎土そのものが精良で、白色小粒子を多く含む。器面に黒色の斑点、吹き出しが見られるものが多い。器種によって胎土が異なり、無台杯と小型の有台杯は胎土が特に精良で器面は滑らかであるが、その他の器種は砂っぽいややざらついた胎土である。佐渡小泊窟跡群（やや離れた地点の大本戸窟跡も含む）で生産された須恵器と考えられる」〔春日 2004〕としている。今回 A・B 群以外は少量であったことから、まとめて C 群とした。前述の参考文献の C 群とは異なる。

底部の切り離し技法には、ロクロ回転によるヘラ切りと糸切りが見られる。回転方向が判別できる個体は、観察表に「回ヘラ（左）」・「回糸（右）」のように記した。観察した中では、胎土 A 群は回転ヘラ切りも回転糸切りもすべて右回転であった。胎土 B 群はすべて回転ヘラ切り左回転である。胎土 C 群は判別できる個体は少なかったが、回転ヘラ切り右回転であった。1 点だけ出土した盤（128）も同様である。ただし壺・瓶類の 444 では、ケズリ残された底部外面中央部に回転糸切りが認められた。ほかに無台杯に認められる痕跡として、重ね焼き時の焼成痕跡がある。胎土 A 群に多くあり、観察表に「ヒダスキ痕」と記述した。位置（外面・内面）、形状（直線・曲線）が判別できる場合は、合わせて記述した。

土師器 土師器の器種は、無台碗・小甕・長甕・鍋・筒形土製品が出土している（第 17 図）。土師器は細片が多く、器形全体を復元できる個体がなく、相対的に凶化が少なくなった。無台碗以外は口縁部で分類が可能であるが、今回は長甕のみを細分類した。小甕と長甕は口径 16.0cm を境とした。阿賀野市熊木遺跡の分類〔石橋 2018〕を参考に、A 類「端部を上方につまみあげるもの」、B 類「端部を内側へ折り返すもの」、C 類「端部の外側に面を作りだすもの」、それ以外のものを D 類として細分類した。

灰釉陶器 碗と考える底部が 1 点（385）出土した。

1) 竪穴建物

SI2368（図版 68・153-67~84）

67～77・79 は須恵器で、すべて胎土 B 群である。67～69 は有台杯で、68 がⅠ類、67 がⅡ類、69 がⅢ類に分類できる。ただし 67 の器高指数は 50 を示すので、69 と同じにⅢ類に近い。70～77 は無台杯で、70～72 がⅡ類、75 がⅢ類、他がⅡ類に分類できるが、口径は最大でも 77 の 12.4cm であり、小型の部類が多い。79 は壺の体部で、胴部最大径は 12.4cm である。78・80～84 は土師器で、84 が長甕 B 類である。他は小甕で、口縁部の形状は 81 を除いて長甕と共通する。78 は底径 8.7cm の小甕の底部で、回転糸切り痕が残る。

SI3048（図版 68・69・153-85~109）

85～98 は須恵器である。86・96・97 が胎土 B 群、98 が胎土 C 群、他 10 点は胎土 A 群である。胎土 B 群の多い SI2368 とは傾向が異なる。杯蓋は 85 が 2 類、86 が 3 類である。85 の摘みは中央部が突出する。87～90・96 は有台杯で 87・88 はⅡ類である。88 は黒書土器の可能性があるが、判別できなかった。91～95・97・98 は無台杯で、87・88・91・98 がⅡ類、92・93・97 がⅡ類、94・95 がⅣ類である。95 は底部の切り離し技法が回転糸切りの一群で、当遺跡で多く出土している。器厚は薄く、体部は湾曲して立ち上がり、口縁部で外方へ引き出される。口縁部は強くロクロナデされることにより、端部が丸くおさまる場合がある。またヒダスキ痕が明瞭に残る。同じ胎土 A 群でも回転ヘラ切りの一群は、91・93 のように底部は厚く、丸底気味になっている。胎土 B 群の 97 とは対照的である。

99～109 は土師器で、99～105 が小甕、106～109 は長甕である。小甕の口縁部は端部が上方へ引き出され、緩い受け口状になっている。長甕 A 類と B 類の中間のような形状である。長甕は 107 を B

類、108をC類に分類した。109は底部で丸底となる。

2) 掘立柱建物

13SB9-P4544 (図版 80・161-353)

353は須恵器無台杯で、口径からすると2類である。胎土A群の薄手での作りで、内面にヒダスキ痕が認められることから、底部回転糸切りの一群の可能性はある。

13SB10-P4759 (図版 80・161-354)

354は須恵器有台杯で、胎土A群である。高台接地面が凹状を呈する。

13SB20-P4188 (図版 80・161-355-357)

355・356は須恵器無台杯で、ともに胎土B群である。口径の大ききからⅡ1類(356)とⅡ2類(355)に分かれるが、その差は0.4cmでほぼ同サイズの杯である。357は土師器長甕で、外面平行タタキ、内面円形当て具痕があることから体部下半の破片と考える。

3) 井 戸

SE4002 (図版 76・159-266-268)

266は胎土B群の無台杯である。267・268は土師器の小甕で、268の体部内面にハケメと口縁部の幅1cm程に炭化物が認められる。

SE4254 (図版 76・159、269-272)

269～272は須恵器有台杯で、胎土は269がA群、270がB群、271・272がC群である。高台の取り付け位置を見ると、270は体部の立ち上がりに近い、底部外周側である。

SE4275 (図版 76・159-273)

273は胎土A群の須恵器有台杯で、高台部は器厚3mm程と薄く、端部が外側に開いている。

SE4450 (図版 76・159-274)

274は須恵器杯蓋で、胎土A群である。摘みはボタン状に近い。

SE4760 (図版 76・159-275)

275は須恵器短頸壺と考える体部片である。20m程南西に離れた確認調査の23SK420から同一個体の可能性がある破片が出土している。また23SK420では短頸壺蓋(352)も出土しているが、組み合わせとなるものか不明である。

SE4998 (図版 76・159-276)

276は胎土C群の壺・瓶類の体部で、胴部最大径は20.2cmである。

SE5001 (図版 76・159-277・278)

277・278は須恵器無台杯の底部で、底径はほぼ同じだが、胎土が277はA群、278はB群と異なる。

4) 土 坑

SK2191 (図版 69・154-110)

110は口径12.0cmの土師器小甕で、口縁部は緩く内側に湾曲して受け口状になる。

SK2239 (図版 69・154-111・113・114)

111・113は須恵器無台杯で、胎土は111がA群、113がB群である。111は中世の溝SD2209、

SD2067、19H16区IV層出土遺物と接合した。溝出土遺物が10m以上離れている。114は口径19.6cmの土師器長甕C類である。

SK2388 (図版69・154-115~118)

115~118は須恵器無台杯で、すべて胎土B群である。115~117がⅡ1類、118がⅡ2類である。

SK2498 (図版69・154-112・119・120)

112は須恵器有台杯のⅠ1類で、胎土A群である。高台が外端で接地する。119・120は胎土B群の須恵器無台杯で、口径の大ききからⅠ類に属する。

SK2530 (図版69・154-121~123)

121は胎土B群の須恵器無台杯で、Ⅰ2類に分類できる。体部は直線的に立ち上がる。

SK2600 (図版69・154-124~132)

124~128は須恵器である。124は有台杯、125~127は無台杯で、125・126はⅡ2類に分類できる。いずれも胎土B群である。128は盤で、今回1点だけ出土した。口径15.6cm、底径12.5cm、器高2.0cmで、器高指数は13となる。胎土C群で、回転ヘラ切り方向は右回転である。129~132は土師器で、129~131は小甕、132は長甕である。132は長甕B類で、体部下位はタタキにより成形される。SB18の雨落溝SD2496の出土遺物と接合した。

SK2965 (図版70・154-133)

133は胎土B群の須恵器無台杯で、Ⅱ1類に分類できる。体部に比べて底部の器厚が厚い。

SK3083 (図版70・154-134)

134は土師器長甕B類で、口径は20.0cmである。

SK4074 (図版77・159-291)

291は胎土A群の須恵器有台杯で、Ⅱ3類に分類できる。口径15.3cmで、ロクロナデの凹凸は少なく、長めの高台の端面は凹状を呈し、内端接地する。底部外面に右回転の回転ヘラ切り痕が残る。

SK4131 (図版77・159-292)

292は土師器長甕B類である。口径は16.0cmで、小甕に近い。

SK4156 (図版77・159-293・294)

293・294は胎土A群の須恵器無台杯で、293はⅡ3類に分類できる。293は回転ヘラ切りだが、294はヒダスキ痕が認められるので、回転糸切りの可能性がある。

SK4267 (図版76・159-279~290)

279~286は須恵器で、甕の286が胎土C群、他はB群である。279は杯蓋3類で、口縁端部は内側に曲げて丸くおさまる。280は有台杯Ⅱ3類で、体部は直線的に立ち上がり、垂下する高台は外端接地となる。281~284は無台杯で、281がⅢ2類、282がⅡ2類に分類できる。285は須恵器の円面碗である。破片であるが、推定される法量は、口径12.0cm、底径14.6cm、高さ9.0cmとなる。体部中位には縦3.5cm、横2.0cm程の長方形の透かし孔の痕跡がわずかに認められる。その透かし孔上位に沈線2条、下位に沈線3条が巡る。墨を溜める部分は径7.8cm程の突起によって囲まれ、その内側に墨痕が認められる。墨痕の付着する面は非常に平滑で、頻繁に使用されていたことがうかがえる。286は甕の体部片で、外面は浅めの平行タタキである。内面の当て具は、上部が円形、下部が細かい目の格子の可能性はある。

287~290は土師器椀で、287~289の口径値はほぼ等しい。287は口径13.0cmで、底径指数

43. 器高指数 27 を示す。290 は 287 の底径と比較すると、一回り小型である。

SK4304 (図版 77・159-295~298)

295 は胎土 B 群の須恵器無台杯Ⅱ1 類で、体部は緩く湾曲する。296 ~ 298 は土師器長甕で、296 は A 類と考える。297・298 は体部片で、調整痕は共通するが色調から別個体である。

SK4313 (図版 77・159-299~302)

299 ~ 302 は須恵器無台杯で、299・301 がⅡ2 類、300 がⅢ1 類に分類できる。また胎土は 299 が C 群、300 が A 群、301・302 が B 群と異なる。299 は内面口縁端部に幅 1.5cm 程の黒色付着物が認められ、灯明具としても使用されていた可能性がある。また 301 の底部外面は良く磨れて平滑になっている。

SK4349 (図版 77・159-303)

303 は須恵器短頸壺の底部から体部である。隣接する小グリッドから出土した同一個体の可能性が有る底面部分を図上で合成した。底径 11.0cm で、体部に黒斑が認められる。

SK4363 (図版 77・159-304~308)

304 ~ 307 は胎土 A 群の須恵器である。307 は高台がないが、形状から有台杯と考えられる。304 は折縁杯で、外反する口縁部は端部が直上方向に屈曲し、先細りにおさまる。305・306 は無台杯で、305 がⅡ2 類、306 がⅢ2 類に分類できる。底部切り離し技法は、折縁杯が回転ヘラ切り、無台杯が回転糸切りでどちらも右回転である。時期や製作窯が異なるのか、器種による選択の違いか不明である。308 は口径 13.6cm の土師器小甕である。口縁端部がやや肥厚するが、体部の器厚が使用による摩滅で薄くなった結果と考える。口縁の内外にかけて炭化物が認められる。

SK4420 (図版 77・159-309~313)

309・310 は胎土 B 群の須恵器無台杯で、309 はⅡ2 類に分類でき、底面周縁が使用によるものか平滑である。311・312 は土師器碗で、311 の体部は丸みをもつ。313 は口径 14.0cm の土師器小甕で、口縁端部は角をもって内側に屈曲する。

SK4425 (図版 77・159-314)

314 は遺構の南側 SK4425A の 4・5 層から出土した。胎土 B 群の須恵器無台杯である。

SK4430 (図版 77・159-315)

315 は胎土 B 群の須恵器有台杯で、Ⅲ1 類に分類できる。口径 9.2cm と杯類では最も小型である。

SK4503 (図版 77・159-316・317)

316・317 は土師器長甕の体部片で、同一個体の可能性もある。317 は内面に炭化物が付着する。

SK4605 (図版 78・160-318・319)

318・319 は胎土 A 群の須恵器である。318 は有台杯で口径 15.0cm と大きく、291 とほぼ同じ器形と考える。319 は折縁杯の一種で、口縁部を水平に折り曲げてから、端部を鋭角的に直上に曲げている。内面には直線状のヒダスキ痕が認められる。

SK4607 (図版 78・160-320・321)

320 は土師器長甕体部片で、内面は摩滅で調整痕が判別しがたいが、円形当て具痕と思われる。321 は受け口状の口縁で、器厚は薄いが推定口径約 30cm なので、鍋の可能性が有る。

SK4628 (図版 78・160-322~324)

322 ~ 324 は須恵器で、322・323 が胎土 A 群、324 が胎土 B 群である。322 は杯蓋で、ボタン状の握みが付く。323 は有台杯Ⅰ2 類で、体部が垂直気味に立ち上がり、今回の出土遺物では数が少ない形

状である。高台内側に墨痕のような黒色が認められるので、転用視の可能性がある。324は無台杯である。

SK4629 (図版 78・160-325~327)

325は胎土B群の須恵器無台杯である。326・327は胎土A群の須恵器甕で、327の大半は割れて重なっていたことから、意図的に廃棄されたものと考えられる。327は他遺構(SE4760・SE4277・P4368)出土遺物と接合した。焼成は堅緻だが、二次被熱を受けたものか器面が剥落しやすい状況であった。また甕としては全体的に器厚が薄く、接合・復元が困難であったため、分別して図化を行った。口径63.0cm、器高95.0cm、胴部最大径90.6cmである。体部外面は縦方向の平行タタキで、底部付近は方向を変えて複数叩かれるので、斜格子または格子状になる。内面は円形当て具と楕円形の当て具が認められる。底部付近はハケメで最終調整される。口縁部は外反し、端部は折り返され外側に面をもつ。外面には5条1組の波状文が2段施される。

SK420-2011年度確認調査 (図版 79・161-352)

352は須恵器短頸壺の蓋で、口径は10.0cmである。口縁端部は屈曲し、下方に細く引きだされている。口縁端部の形状はやや異なるが、440・441は同一個体のような法量・色調などを呈する。

5) 焼土遺構

SF2287 (図版 70・155-151)

151は胎土A群の須恵器無台杯で、IV2類に分類できる。中世の溝SD2075と17G2区IV層の出土遺物が接合した。体部は緩く湾曲して外反しない。内外面に交差したヒダスキ痕が明瞭に認められる。

6) 溝

SD2289 (図版 70・154-135~138)

135~137は土師器長甕で、136をB類、135・137をC類に分類した。C類の口縁部端面には、意図的に施したと考える沈線が1条巡る。138は底径4.5cmの土師器碗で、回転糸切り痕が認められる。

SD2290 (図版 70・154-139)

139は口径13.8cmの土師器碗で、体部は丸みを帯び、口縁端部は先細りとなる。

SD2496 (図版 70・154-140)

140は胎土A群の須恵器無台杯で、II2類に分類できる。回転糸切りで、内外面に直線状のヒダスキ痕が認められる。

SD2604 (図版 70・154-141~144)

141~143は胎土B群の須恵器である。141・142は無台杯で、142はIII1類に分類できる。143は口径16.4cmの甕または壺で、器厚は全体的に薄い。垂直気味の口縁部は、端部が凹状になる。外面は格子タタキで、内面円形当て具痕である。

SD2685 (図版 70・154-145~148)

145~148は胎土B群の須恵器である。145~147は無台杯で、145がII1類、147がII2類に分類できるが、ほぼ同じ法量である。145は中世の井戸SE2044出土遺物と接合した。148は杯蓋2類である。

SD2966 (図版 70・154-149)

149は胎土B群の須恵器有台杯で、口径は3類に属する。中世の溝SD2075出土遺物と接合した。

7) 性格不明遺構

SX4001 (図版79・160・328~330)

328・329は須恵器である。328は埋土5層から出土した胎土B群の無台杯で、Ⅱ2類に分類できる。329は胎土A群の甕の口縁部で、推定口径は58.0cmである。17m程離れた19F5区I層の出土遺物と接合した。330は土師器小甕で、底径7.8cmである。底部外面に線状の痕跡が認められ、曲線状の痕跡は静止糸切り痕、直線状の痕跡は板目圧痕の可能性がある。

SX4264 (図版79・160・161・331~342)

331~341は須恵器で、332~334が胎土A群、341がC群、他がB群である。331の有台杯は高台の断面が三角形を呈する。332は折縁杯で、口縁部を内側に折り曲げない形状である。高台端部は凹状で外端接地し、底部外面に十字のヘラ記号が認められる。333~338は無台杯で、333・334がⅢ2類、335・336がⅡ2類、337がⅡ1類に分類できる。339・340は甕の体部片で、肩部に近い。いずれも外面平行タタキ、内面格子目当て具痕である。341も甕の体部片で、外面平行タタキ、内面円形当て具痕であるが、凹凸は少ない。距離は離れているが、SK4267出土の286と特徴が似ている。

342は土師器の筒形土製品で、外面に平行タタキ目、内面は輪積み痕の凹凸が観察できる。底面に7cm前後の穴があるが、破損面は荒れている。製作の基となる円盤が破損で抜けた可能性もあるが、穴の周縁がすべて下方(外面)に向かう形状を示すことから、筒を成形後に意図的に抜いた可能性がある。

SX4265 (図版79・161・343)

343は胎土A群の須恵器無台杯で、Ⅳ2類に分類できる。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

SX4999 (図版79・161・344~351)

344~351は須恵器で、344・349・350が胎土B群、他はA群である。344は杯蓋の摘みで、摘みの高さは低い。345は折縁杯で、SX4999の燃焼部の西脇にあるP5035出土遺物と接合した。346~350は無台杯で、346がⅡ2類、347・349がⅢ2類に分類できる。351は甕の体部片で、外面平行タタキ、内面円形当て具痕である。

8) ビ ッ ト

P2908 (図版70・154・150)

150は胎土A群の須恵器杯蓋2類である。摘みは中央がくぼんだ擬宝珠を呈する。

P4071 (図版80・161・358)

358は胎土B群の須恵器無台杯で、Ⅲ2類に分類できる。

9) 古代以外の遺構出土及び包含層等出土遺物

(図版70~72・80~82・155・156・161・162~152~208・359~458)

152~208は2010年度調査出土遺物で、152~203が須恵器、204~208が土師器である。

152~156は杯蓋で、155が胎土B群、他がA群である。A群の製品はB群よりも天井部の器厚が厚く、全体的に器高も高い傾向にある。口径から152が1類、154・155が2類に分類できる。157~168は有台杯で、166は折縁杯とも似る。157~161・166・168が胎土A群、162~165・167が胎土B群で、158が12類、159が13類、167がⅢ3類に分類できる。切り離し技法が観察できる個

体は、すべてヘラ切りである。胎土B群は遺構出土遺物と比較して身の深い個体が多い。162・167の口縁部直下と体部中位には、ロクロ回転による各1条の沈線が巡る。また160の体部内面にも沈線が1条認められるが、これはロクロ回転によるものではない。169～199は無台杯で、169が胎土C群、170～181がA群、182～199がB群である。173は口縁部が内側に屈曲しないが、折縁杯の可能性はある。胎土A群は回転ヘラ切りのものと回転糸切りのものが認められ、170・171のようにヘラ切りのものは器厚が厚い。胎土B群は法量・形状が似ており、Ⅱ1類・Ⅱ2類が多い。194は体部中位で屈曲または湾曲し、特徴的な器形を呈する。197は底部外面に突き刺しのような痕跡が認められる。200は口径22.4cm、器高51.6cmの胎土A群の甕である。外面平行タタキで、内面は上位から下位まで円形当て具痕が認められる。201～203は胎土C群で、201が広口壺、202・203が長頸瓶の頸部～体部である。201はやや軟質な胎土で、口径は17.0cm、体部の頸部に近い位置に2条の沈線が巡るが、意図的なものか調整によるものか不明である。202・203は体部が屈曲する長頸瓶で、肩付近に沈線的な凹凸が目立つ。外面と頸部内面に灰被りがあり、内面に軸が垂れたと思える線痕が、頸部から放射状に数条延びている。204は底径4.4cmの碗で、回転糸切り痕が明瞭に残る。205は口径15.4cmの受け口状の小甕で、口縁端部が広がって内側に面をもつ。206～208は長甕で、206がA類、207がC類に分類できる。

359～458は2013年度調査出土遺物である。359～384が古代以外の遺構出土で、385～458が包含層及びそれ以外の層から出土した遺物である。

359～374は中世の溝SD2075から出土した。359～373が須恵器で、374が土師器である。359～361は杯蓋で、359・360が胎土A群、361がB群である。362～369は有台杯の体部～底部で、362～367が胎土A群、368・369がB群である。高台は胎土A群がB群より長い傾向にある。362は口縁部を欠損するが、形状等から折縁杯の可能性もある。366は底面に「×」状のヘラ記号が認められる。370～372は無台杯で、370が胎土A群のⅡ2類、371・372がB群のⅢ2類に分類できる。373は胎土C群の小型の長頸壺で、口径は7.0cmである。374は底径5.5cmの土師器の碗である。375は中世の溝SD4049から出土した土師器長甕の体部片で、外面平行タタキである。376は中世の溝SD4270から出土した、胎土B群の須恵器無台杯である。377は中世の溝SD4302から出土した、胎土B群の須恵器無台杯で、Ⅱ2類に分類できる。378は中世の溝SD4367から出土した、胎土A群の須恵器無台杯である。379は中世の溝SD4788から出土した、胎土A群の須恵器長頸壺・瓶類の口縁部である。380は近世の溝SD4128から出土した土師器長甕の体部片で、外面平行タタキである。

381は近世以降の溝SD4273から出土した胎土A群の須恵器有台杯で、高台内側に沿って墨痕のような黒色が認められるので、転用碗の可能性はある。

382～384は近世の遺構SX4268から出土した須恵器である。382は胎土C群の杯蓋2類で、上面に1条沈線が巡る。383は有台杯で、高台内側の一部に墨痕のような黒色が認められる。381同様に転用碗の可能性はある。384は胎土B群の無台杯で、Ⅱ1類に分類できる。

385は43N25区のⅣ層から出土した灰軸陶器碗の底部で、底径は5.6cmである。断面方形に近い高台は内端設置し、外側に緩やかな稜をもつ。灰軸の色調は7.5Y7/2の灰白色である。焼成は硬質であるが、胎土はぎつくりとしており、狼投窯産の可能性はある。386～400は須恵器杯蓋で、386～391が胎土A群、392～398がB群、399・400がC群である。胎土による縮みの形状の差異が認められる。395の縮みには板目圧痕が認められる。399・400は非常に硬質な焼成で、天井部の周縁に沈線が巡る。

401～411は須恵器有台杯で、401～407が胎土A群、408～411がB群である。今回分類できるのは408のみでⅡ1類となる。杯身の切り離し技法が確認できるのは405・407・410で、405が回転糸切り、他が回転ヘラ切りである。

401は器厚が約8mmと厚く、重量感がある。402は口縁部が欠損するが、外方へ緩く湾曲する部分認められることから、折縁杯の可能性もある。

405は底部のみだが、略円形となるように意図的に口縁を打ち欠いたものとする。皿としての再利用、または別目的での転用品の可能性もある。

410の高台は径9.0cm前後と大きく、左回転のヘラ切り痕が明瞭に認められる。高台内側の一部に墨痕のような黒色が認められ、転用視の可能性もある。412～415は胎土A群の折縁杯で、口縁部の形状が412・413の一群と414・415の一群の2種が認められる。しかし412・413は杯身の形状は同じだが、高台形状が異なるなど細部の違いがある。412には右回転のヘラ切り痕と板目圧痕が認められ、410同様に高台内側に墨痕のような黒色が認められるので、転用視の可能性もある。416～436は須恵器無台杯で、416～425が胎土A群、426～436がB群である。胎土A群では416～418のようなⅣ2類、胎土B群では427～429のようなⅢ2類が多い。

417の形状は本来器厚が薄い、底部が火影れのため厚くなっている。424は体部の器厚が約2mmと非常に薄手の作りであるが、焼成は硬質である。437～439は須恵器甕の口縁部で、437・438が胎土A群、439がB群である。

438は口径25.2cmで、端部は外方へ引き出され、内面にカキメが顕著に認められる。440・441は須恵器短頸壺の蓋で、同一個体の可能性もある。442は須恵器長頸壺の頸部で、最小径でも10.4cmあることから大型の部類と考える。体部との境の内面が焼け弾けたようになっており、意図的に打ち欠かれた可能性もある。443～445は壺・瓶類で、444の底部外面中央には糸切り痕が認められる。445の体部外面には割れ口に沿った黒色付着物があるが、材質は不明である。

446は須恵器の無台の壺または甕で、底径5.6cmである。外面にミガキと縦方向のケズリ、内面に横方向のカキメが認められる。カキメが認められることから袋状の形態である可能性は低い。447・448は須恵器の横瓶で、閉塞部に近い部分である。448の外面に板状のものが融着しており、焼台の可能性もある。

449は285の上部と形状が似ており、また墨痕も認められることから須恵器の凹面視と考える。ただし胎土は285がB群、449がA群と違いがある。推定口径9.0cm、墨を溜める部分の径5.6cm程と285より一回り小型である。しかし磨ったような平滑な面は認められず、墨痕も外縁の内側に付着するなどの違いがある。墨痕の付着のあり方は、有台杯を硯として転用した高台部の付着痕と共通する。450は底径5.1cmの土師器椀で、底面の調整は判別できない。451～454は土師器小甕で、底径は10.0cm以下である。455～457は土師器長甕で、455はA類に分類できる。457は外面にカキメが認められる。458は推定口径35.0cmの土師器鍋で、口縁部外面に面をもつ。内面無文、外面カキメである。

B 唐 三 彩 (図版72・100・156-209・210)

唐三彩は、2010年度本発掘調査で1点、2008年度試掘調査で1点出土した。唐三彩の類例・解釈などについては第VII章2Aでも記述している。

唐三彩は中国唐代の7世紀中頃に完成したとされる彩釉陶器で、灰白色の素地に軸薬を単色または複数かけて焼くことを特徴とする。盛唐期は貴族の葬礼及び副葬品として使うのが主な目的で、人物形象俑、

動物形象俑、生活用具や玩具などの器物に分けられる。

209 は三面廂建物 SB19 の建物範囲と重なる。直径 26cm、深さ 20cm の小型の柱穴 (P3069) から出土した。現存長 2.5cm、幅 3.5cm、厚 0.5cm の破片で、弦楽器 (琴) を模した玩具 (龔氏 御教示) または加彩弾琴女子俑 (亀井氏御教示) の一部と考えられる。琴頭 (図右、陸帯部分) に弦を付ける 7 本の刻み目があり、古琴 (七弦琴) に類似する。写実的な作りで、琴面は緩く湾曲し、両側 (図上下) に 1 条ずつの溝を付けている。施軸は、基礎となる白鉛軸が塗られ、両側に沿って藍軸、琴頭に褐軸と丁寧に塗り分けられる。図右側面に緑軸の斑点も認められるが、加彩俑であった場合、本体からの飛び軸の可能性もある。裏面に長 1.0cm、幅 1.8cm 程の剥落痕があるが、玩具であれば台、俑の一部であれば座位状態の膝と接していた部分と推測される。図版 72 には玩具としての復元図を掲載した。

210 は、2008 年度試掘調査の 42 トレンチから出土した。現存長 0.9cm、横 1.3cm の小型破片で、口径 2.5cm の容器形を呈する。龔氏からは玩具としての壺の口縁部、または何かの裝飾部と考えられると御教示いただいた。外面に縦位の沈線が刻まれ、内外面ともに緑軸が施される。胎土は 209 と比べて軟質である。

C 土 製 品 (図版 83・162-459~462)

459 は土師製の円柱状の支脚で、径約 4.6cm、現存高 3.9cm である。底面に認められる痕跡から、延べ棒状の粘土塊を巻いて成形したようにも見られる。460 は古代の土坑 SK4313 の 6 層から出土した円柱状の紡錘車で、半分を欠損する。中央の孔径は約 1.0cm で、完形品であれば重量 100g 前後と推測する。461 は羽口の先端部付近で、推定外径 5.0cm である。図の下が先端で、幅 2.0cm 程にガラス質の黒色物質が融着する。欠けた部分にもガラス質が認められるので、使用中に破損したものと考える。462 は古代の井戸 SE4502 の 6 層から出土した粘土塊で、いびつな球状を呈する。

D 石 製 品 (図版 73・83・156・162・163-211・212・463~467)

211 は SI2368 出土の軽石製の石製品で、面取りされている。擦痕は認められないが、砥石の可能性も考えられる。212 は砥石で、下半部を欠損する。正裏面が使用されており、基軸に平行する線状痕が認められる。463 は凝灰岩製の砥石である。464 は材質不明だが、溝状の滑らかな面をもつ。

465~467 は磨石類である。465 は凝灰岩製で、全体に磨面と正面ほぼ中央に凹状の敲打痕が認められる。466・467 は軽石製で滑らかな面があるので、磨石として利用されたものと判断した。467 は正面に径 3cm 以上の敲打痕が認められる。

E 金属製品・鍛冶滓 (図版 73・83・156・163-213~219・221・468~478)

213~215 は刀子で、215 は基部側を欠損する。216 は不明鉄製品で、刃部の幅が広い。刀子の可能性もある。217・218 は鉄滓、219 はガラス質滓である。221 は椀形滓で、断面は弧状に湾曲する。468~478 は 2013 年度調査で出土した遺物で、古代か中世か所屬時期が不明なため、一括して掲載した。468~474 は鉄製品である。ほかにも十数点出土しているが、錆が多量に付着しているものがあり、種別不明なものが多い。本来の形状を判断するため、X線写真を併用し図化した。468・469 は横断面の片側 (図右) が鋭角を呈することから、刀子の可能性もある。469 は割れて屈曲している。470~473 は鉄釘で、釘身の断面がほぼ方形を呈する。それぞれのサイズは 470 が約 8mm、471 が約 6mm、472

が約3mm、473が約5mmである。472はほぼ中央で直角に曲がっていることから、半分程打ち込んでから曲げたものとする。474・475は種別不明の鉄製品である。474の地金は厚さ7mm弱の板状を呈する。475は中茎状に狭まる部分(図上)があることから刀子の可能性も考慮したが、断面長方形で角をもつため468・469とは異なる。また中身が空洞化している。476～478は鉄滓で、476・477は塊形滓である。476がSE4502、477がSK4048の出土で、遺構間距離も38m離れているが、分量はほぼ同じである。478は発泡が多く、炉内滓と考える。

F 木製品 (図版73～75・157・158-222～246)

222～246はSE2510の井戸側の部材である。222～234・244～246は縦板組に使われたものである。227は2枚の板目板の木口同士で接合したもので、接合部には表裏に新による斜めの切断痕が認められる。長い1枚板を再利用したものと考えられる。222・223の下端木口にも斜めの切断痕があり、227と同様に1枚板を切断したものであろう。さらに、223は打ち割りによって上下2枚に分割されている。224～226・228・232・234・244・246は板目材で、上下に複数の板が接合したものである。木口面は斧で側面方向から加工が施されており、227のような斜めの切断痕とは異なる。したがって、それぞれの幅の角材として製材され、建築材等に利用されたものを打ち割りに分割したものと考えられる。244は、本来は幅26cmほどの角材で、両側面にV字状の抉りが施されたものを縦に2分割したものに上下に分割したものである。245も側面に抉りがあることから、再利用材であることが明らかである。229・230は縦板組の四隅に打ち込まれていた角材で、下端が先鋭に加工されている。246は細い角材であるが、柱目側に楔痕の可能性があるくぼみが認められる。235～238は横板組に使われたものである。いずれも板目材であり、左右に相欠きのための加工が施される。239～241は上段(1段目)の横棧に使われていたものである。目違ひ柄で組むために凹凸に加工される。241には蔓状の植物が付着していたが、縛り付けたものかは不明である。242・243は下段の横棧に使われたものである。相欠きのための加工が施され、組み合わせの際に打ち込んだと見られる木釘が残る。

SE2510の井戸側部材は、もとは建築材の可能性が高い様々なサイズの角材や板材を上下や前後に分割して再利用したものと考えられる。なお、240は年代測定によって5世紀中頃～6世紀前半のものとなった(第VI章参照)。遺跡成立期より300年ほど古い材が使われていたことになる。阿賀野市境塚遺跡の中世の井戸側部材にも200年以上古い材が転用されていたことが指摘されており[木村・荒木2012]、良質な木材を長く活用することが行われていたと考えられる。

3 その他の時代

A 弥生土器 (図版75・158-247～250)

247は深鉢形土器の口縁部で、網目状懸糸文が施される。248～250は深鉢形土器ないし甕形土器である。248・249は縄文LRが施される。250は条痕文が縦位に施され、底部外面に網代痕が認められる。この条痕文は底部下端まで達するほか、底部から胴部の立ち上がりは屈曲せず直線的である。こうした特徴は縄文時代晩期末葉よりも弥生時代前期に多い特徴であり、当該期の可能性がある。

B 縄文土器 (図版 75・83・158・163-256~258・479~482)

256~258は地表下2m以上から出土した縄文土器の深鉢形土器で、いずれも縄文LRが施される。時期は晩期の可能性があるが、詳細は不明である。479~480は縄文土器である。479は古代の遺構検出面であるV層を30cm程下げた位置で、約1個体がまとまって出土したため、その範囲をSX4001として調査した。口径14.5 晩期中葉の雲形文や台付鉢であることから、大洞C1式と考える。細かなLR縄文を地文とし、沈線と磨り消しにより文様が描かれる。2個1対の斜方向の刻みをもつ小突起が複数口唇部を巡り、口縁部文様帯と体部文様体の境にも同様の突起が2単位付けられている。内面上半にコゲが、体部上半にススの付着が認められる。480は底径8.9cmの深鉢の底部で、底部外面には網代圧痕またはもじり編み圧痕が認められる。体部の条痕は細く、弥生土器と考える250とは原体が異なる。481は深鉢の体部片で、LR縄文が施される。482も深鉢の体部片で、器面が荒れて明瞭でないが条痕文の可能性はある。

C 石器 (図版 75・83・158・163-251~255・483・484)

2010年度調査区から5点(251~255)、2013年度調査区から2点(483・484)を図示した。

251~253・483は石鏃で、いずれも凸基有茎鏃である。253の基部、483の先端部を欠損する。483は玉髓製で、裏面に剥離面を大きく残す。254は剥片を素材とし、左側縁に急角度の刃部を作りだす。また、上端に剥離調整を施し、打縮の厚みを減じている。255は自然面を残す縦長剥片を素材とする。右側縁~下端部にかけて微細な剥離による刃部調整が施される。484は玉髓製の石核で、打点は一定していない。球状の礫素材で、自然面を残す。

第VI章 自然科学分析

1 2010年度の自然科学分析

A 山口遺跡のAMS法による放射性炭素年代測定

伊藤 茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林誌一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久(パレオ・ラボAMS年代測定グループ)

1) はじめに

山口遺跡は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する遺跡である。遺跡は、阿賀野川右岸及び旧小里川右岸に形成された自然堤防上の遺跡であり、古代(平安時代/9世紀前半)と中世(鎌倉～室町時代/13世紀後半～14世紀)の2時期の遺構・遺物からなる。

ここでは、中世の井戸内から出土した自然木、9世紀代の井戸の構築材と出土した自然木について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。中世の井戸内から出土した自然木と9世紀代の井戸構築材については、複数試料を採取してウィグルマッチングを行った。なお、同一遺構から出土した木材について樹種同定も行っている(樹種同定を参照)。

2) 試料と方法

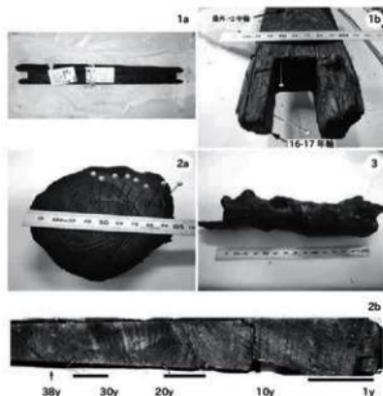
試料は、9世紀代の井戸SE2510の構築材から2点(ウィグルマッチング法)、同井戸内から出土した自然木1点、中世の井戸SE2292から出土した自然木から3点(ウィグルマッチング法)、をそれぞれ採取した(第4表、第5表、第20図)。

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理データ
PLD-17460	遺構: SE2510 試料: 240 製品名: 北横桧	採取位置: 層外-2年輪	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-17461	種類: 生材 (スギ)	採取位置: 16-17年輪	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-17457	遺構: SE2292 試料: 65 (動物内自然木)	採取位置: 1-5年輪	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-17458	種類: 生材 (クリ)	採取位置: 16-20年輪	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-17459	形状: 丸木, 38年輪, 105mmφ, 節外欠落が その他: 樹皮側 に近い年輪部分 を採取	採取位置: 31-35年輪	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

第4表 ウィグルマッチング測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17462	遺構: SE2510 試料: 掘外 自然木	種類: 生材 (モモ)	超音波洗浄 酸: アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

第5表 SE2510内自然木の詳細と処理



- 1a SE2510構築部材北横桧 (No. 仮37; スギ)
1b 同木材の測定試料の採取位置 (ピンは5と10年輪目)
2a SE2292出土自然木 (No. 仮85; クリ)
2b 同木材の年輪計測と測定試料の採取位置 (ピンは5年輪目)
3 SE2510出土自然木 (No. 仮142; モモ)

第20図 年代測定を行った木材試料と測定位置

各試料の詳細と調製データを第4表及び第5表に示す。試料は調製した後、加速器質量分析計(コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3) 結果

第6～8表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第6・7表にはさらにウィグルマッチング結果を、第21・22図にウィグルマッチング結果を、第23図に単体試料の暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年較正、ウィグルマッチングの詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: Intcal09)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-17460	-26.66 ± 0.20	1573 ± 19	1575 ± 20	435AD (50.4%) 432AD	429AD (95.4%) 540AD
				508AD (11.0%) 520AD	
				528AD (6.8%) 535AD	
PLD-17461	-25.87 ± 0.20	1545 ± 19	1545 ± 20	440AD (42.3%) 486AD	432AD (95.4%) 568AD
				532AD (25.9%) 555AD	
				453AD (68.2%) 501AD	
最終試料年代				446AD (95.4%) 539AD	

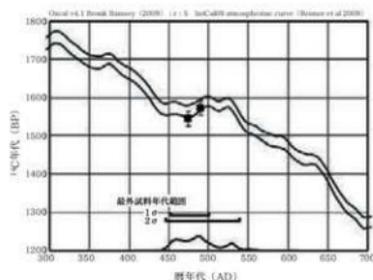
第6表 SE2510内北横機(240)の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-17457	-26.97 ± 0.20	590 ± 18	590 ± 20	1318AD (53.8%) 1353AD	1306AD (70.5%) 1364AD
				1390AD (14.4%) 1400AD	
				1307AD (27.6%) 1329AD	
PLD-17458	-26.12 ± 0.21	605 ± 18	605 ± 20	1341AD (28.4%) 1363AD	1299AD (75.5%) 1370AD
				1385AD (12.2%) 1396AD	
				1281AD (51.3%) 1299AD	
PLD-17459	-25.69 ± 0.19	678 ± 18	680 ± 20	1370AD (16.7%) 1380AD	1276AD (66.2%) 1306AD
				1363AD (29.2%) 1385AD	
				1316AD (68.2%) 1331AD	
最終試料年代				1312AD (76.0%) 1338AD	1396AD (19.4%) 1410AD

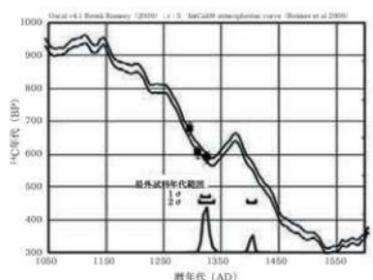
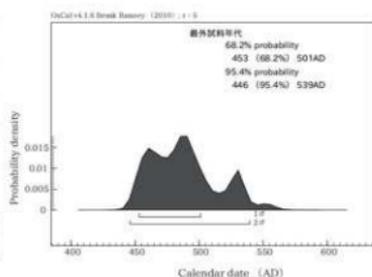
第7表 SE2292内自然木(65)の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-17462 試料No.版142	-26.44 ± 0.20	1240 ± 19	1240 ± 20	694AD (44.7%) 748AD	687AD (95.4%) 869AD
				765AD (14.6%) 780AD	
				792AD (8.9%) 805AD	

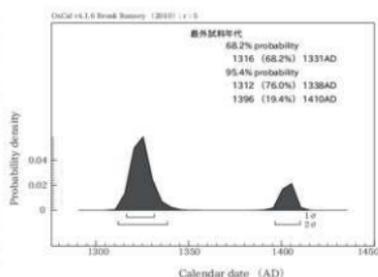
第8表 SE2510内自然木(報告外)の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果



第 21 図 井戸 SE2510 の構築材 (240) のウィグルマッピング結果

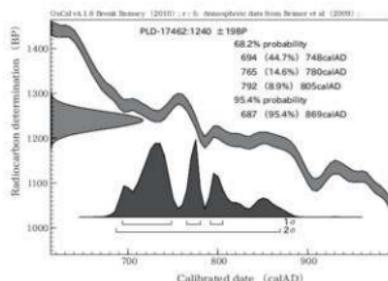


第 22 図 井戸 SE2292 から出土した自然木 (65) のウィグルマッピング結果



【ウィグルマッピング法】

ウィグルマッピング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと校正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で信頼性のある年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年校正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該



第 23 図 井戸 SE2510 内から出土した自然木 (報告外) の暦年校正結果

試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることで最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心値の年代を表している。そのため試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料としてまとめた年輪数と、さらにその外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4) 考 察

井戸 SE2510 から出土した自然木については、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。また、井戸 SE2510 の構築材と井戸 SE2292 から出土した自然木についてはウィグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

ウィグルマッチングの結果、SE2510 の構築部材である北横桱 (240) の最外試料年代は、1 σ 暦年代範囲において 453-501 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において 446-539 cal AD (95.4%) の年代範囲を示した。確率の高い 2 σ 暦年代範囲においては 5 世紀中頃～6 世紀前半である。この木材は、調査知見において転用材の可能性が高かったことから、構築部材の測定結果は遺構の成立時期を示すものではなく、転用する以前の部材の伐採年代を示している。同遺構は、遺物から廃絶時期が 9 世紀代と考えられており、転用材とその他の出土遺物の間には少なくとも 300 年強の開きがある。一般的にも、転用材の履歴についての詳細な検討はなされていないため、今後の興味ある課題である。

SE2510 から出土した自然木 (報告外) は、1 σ 暦年代範囲において 694-748 cal AD (44.7%)、765-780 cal AD (14.6%)、792-805 cal AD (8.9%)、2 σ 暦年代範囲において 687-869 cal AD (95.4%) の年代範囲を示した。確率の高い 2 σ の年代範囲では、7 世紀後半～9 世紀後半であり、9 世紀代との調査知見を支持する結果であった。

SE2292 から出土した自然木 (65) の最外試料年代は、ウィグルマッチングの結果、1 σ 暦年代範囲において 1316-1331 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において 1312-1338 cal AD (76.0%) 及び 1396-1410 cal AD (19.4%) であった。2 σ 暦年代範囲のうち確率の高い方の年代では、14 世紀前半を示している。なお、調査知見では 14 世紀代と推定されており、調和的な年代と考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43 (2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

B 山口遺跡出土木材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1) はじめに

山口遺跡は新潟県阿賀野市山口に所在し、旧阿賀野川や旧小里川によって形成された自然堤防上に立地する、古代と中世を主体とする複合遺跡である。山口遺跡の中世の遺構としては掘立柱建物跡や井戸跡などが検出され、井戸跡からは木製品や井戸側、自然木などが出土した。ここでは出土した木材の樹種同定

を行った。また同定試料の一部を用いて、放射性炭素年代測定とウィグルマツチング法による放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2) 試料と方法

試料は井戸である SE2292 で 4 点、SE2348 で 1 点、SE2510 で 22 点の、計 28 点の出土生材である。各遺構の時期は、放射性炭素年代測定の結果、SE2292 は 14 世紀前半、SE2510 は 7 世紀後半～9 世紀後半の年代値が得られた（放射性炭素年代測定の項参照）。また SE2348 は、中世の遺構であると考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの観察を行った。

生材の樹種同定は、横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柀目）についてカメラで切片を採取し、ガムコロラールに封入して永久プレパラートを作成した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行った。なお作成したプレパラートは、新潟県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3) 結果

同定の結果、針葉樹のスギ 1 分類群と、広葉樹のクリとモモ 2 分類群の、計 3 分類群が産出した。スギが最も多く 26 点で、クリとモモが各 1 点産出した。同定結果を第 9 表に、一覧を付第 9 表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、1 分類群 1 点の光学顕微鏡写真を示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don

スギ科 第 24 図 1a-1c (版 No.18)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2～7 列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

(2) クリ *Castanea crenata* Siebold, et Zucc.

ブナ科 第 24 図 2a-2c (版 No.85)

年輪の始めに大型の道管が 1～2 列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火変状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の

遺構	SE2292		SE2348		SE2510					合計	
	動物標板	板材	自然木	板材	井戸側						
樹種/遺構	動物標板	板材	自然木	板材	板材	板材	柀材	柀材	自然木		
スギ	2	1			1	1	3	2	1	1	26
クリ			1								1
モモ											1
合計	2	1	1	1	1	1	3	2	1	1	28

第 9 表 山口遺跡出土木材の樹種同定結果

報告 No.	遺構 No.	層位	取上 No.	樹種	樹高	本取	備考	年代測定番号
62	SE2292			動物標板(水部)	スギ	柀目	動物(水部)上部	
63	SE2292			動物標板(水部)	スギ	柀目	動物(水部)下部	
64	SE2292		13	板材	スギ	柀目	上下遺物の間に挟まっていた板	
65	SE2292		10	自然木	クス	芯持丸木	動物内	PLD-17457 ~ 17459
66	SE2348	17	1	板材	スギ	柀目	円形板	
222	SE2510		37	井戸側板	スギ	柀目	南板板1枚目	
223	SE2510		41	井戸側板	スギ	柀目	西板板1枚目	
224	SE2510		11	井戸側板	スギ	柀目	北板板1枚目	
225	SE2510		33	井戸側板	スギ	柀目	南板板1枚目	
226	SE2510		30	井戸側板	スギ	柀目	南板板	
227	SE2510		38	井戸側板	スギ	柀目	西板板1枚目	
228	SE2510		34	井戸側板	スギ	柀目	南板板2枚目	
230	SE2510		51	井戸側板	スギ	柀目	南西板	
231	SE2510		15	井戸側板	スギ	柀目	北板板2枚目	
232	SE2510		47	井戸側板	スギ	柀目	東板板2枚目	
233	SE2510		40	井戸側板	スギ	柀目	西板板2枚目	
234	SE2510		13	井戸側板	スギ	柀目	北板板2枚目	
235	SE2510		2	板材	スギ	柀目	北板板	
236	SE2510		3	井戸側板	スギ	柀目	南板板	
237	SE2510		4	井戸側板	スギ	柀目	東板板	
238	SE2510		3	井戸側板	スギ	柀目	東板板	
240	SE2510		15	井戸側板	スギ	柀目	北板板1枚目	PLD-17460 ~ 17461
243	SE2510		54	井戸側板	スギ	柀目	南北板	
244	SE2510		22	井戸側板	スギ	柀目	東板板1枚目	
244	SE2510		9	井戸側板	スギ	柀目	東板板1枚目	
245	SE2510		19	井戸側板	スギ	柀目	東板板1枚目	
報告外	SE2510		14	井戸側板	スギ	柀目	北板板2枚目	
報告外	SE2510	6	34	自然木	モモ	芯持丸木	自然木 他1	PLD-17462

付第 9 表 山口遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(3) モモ *Prunus persica* (L.) Batsch バラ科 第24図 3a-3c (版No.142)

年輪の始めに中型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし2~3個、放射~斜線方向に複合してやや密に散在する半環孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は直立、立方、平伏細胞が混在する異性で、幅1~6列となる。

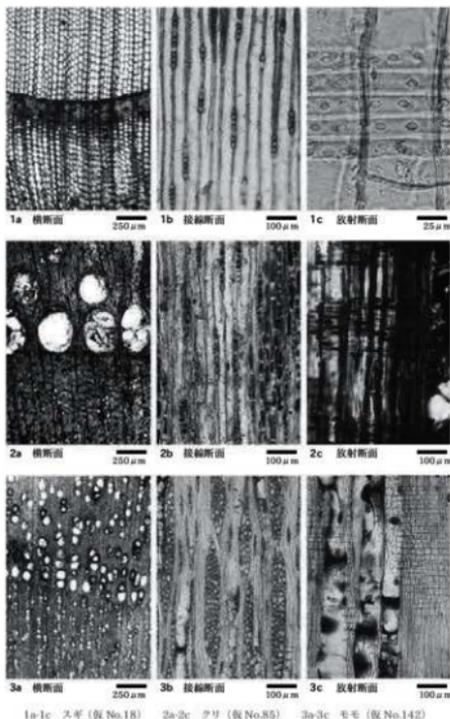
原産地は中国北部で、平安時代には果実を食用や薬用として利用するため日本列島でも栽培されていた樹木である。材は重硬で、切削加工等は困難である。

4) 考 察

最も同定試料の多いSE2510の木材では、井戸側21点と板材1点の樹種はいずれもスギであった。また井戸跡内で出土した自然木1点の樹種は、モモであった。次に同定数の多いSE2292では、井戸内の水溜であった曲物の側板2点と板材1点がスギ、井戸跡内で出土した自然木1点がクリであった。そしてSE2348の板材1点はスギであった。

放射性炭素年代測定の結果では、SE2510で出土したNo.240の井戸側横棧のスギは2σで446-539AD (95.4%)、報告外の自然木のモモでは687-869AD (95.4%)の暦年代範囲が得られ、時期差がみられた。自然木は井戸跡の廃棄後に井戸跡内に堆積したと考えられており、井戸跡廃棄時に近い年代値である可能性が高い。そのためモモの自然木よりも古い暦年代範囲を示したNo.240の井戸側横棧のスギは、転用材が用いられている可能性が高い(放射性炭素年代測定の項参照)。

各試料の木取りをみると(第10表)、SE2510の井戸側では、縦板と横板、横棧はいずれも板目であったが、隅柱は柾目であった。また板材は板目、自然木は芯持丸木であった。SE2292では、曲物側板と板材はいずれも柾目、



1a-1c スギ(版No.18) 2a-2c クリ(版No.85) 3a-3c モモ(版No.142)

第24図 山口遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

遺構 部材 木取り	SE2292		SE2348		SE2510					合計	
	曲物 側板	板材	自然木	板材	井戸側						
板目					縦板	横板	横棧	隅柱	板材	自然木	
板目				1	15	3	2		1		21
柾目	2	1							1		5
芯持丸木			1							1	2
芯持丸木				1	15	3	2	1	1	1	28
合計	2	1	1	1	15	3	2	1	1	1	28

第10表 山口遺跡出土木材と木取り

自然木は芯持丸木であった。SE2348の板材は、柾目であった。

スギは大径木に育ちやすく木理通直であり、その材質は比較的軽軟で加工性が良い。柾目材の場合は年輪と直交して材を切り出すため、歩留まり（製材効率）は悪いが収縮や変形が少なく、板目材の場合は、年輪に沿って材を切り出すため、歩留まりは良いが長い年月を経ると収縮・変形し易い性質があり、木材には反りが生じやすい。

出土した木材で用途が明確な試料について木取りと樹種の関係を見る。SE2510の井戸側の縦板と横板、横板では、板目のスギが多く産出した。加工性の良いスギから多くの板材を得るために、反りが生じやすいが歩留まりの良い板目取りで部材を得ていたためと考えられる。また、隅柱では柾目のスギが産出した。隅柱は井戸側の角に配置される部材で、歩留まりは悪いが変形の少ない柾目取りの材を用いたと考えられる。SE2292の曲物側板は、2点とも柾目のスギであった。いずれも井戸跡の水溜りに用いられており、変形の少ない柾目取りが用いられていたと考えられる。

SE2292とSE2510で出土した自然木は、SE2292はクリ、SE2510はモモであった。いずれも井戸跡の周辺に生育し、遺構の機能時または廃棄時に井戸跡内に堆積したと考えられる。特にモモは中国原産であり、日本では自生していない。山口遺跡では、遺跡内または遺跡周辺でモモの栽培が行われていた可能性がある。山口遺跡では花粉分析も行われているが、本遺跡では花粉はあまり検出されず植生の復元は行えなかった（花粉分析の項参照）。

新発田市内に所在する荒神裏B遺跡では、奈良・平安時代の井戸側と井戸杭の樹種同定が行われている〔吉川純子2006〕。その結果、井戸側ではスギが3点、井戸杭ではスギが3点産出している。また三島郡和島村の奈良崎遺跡では、中世の井戸側と曲物の樹種同定が行われている〔植田2002〕。奈良崎遺跡の中世の井戸跡であるSE813では、井戸側の側板でスギが5点とサワラが1点、角材支柱でスギが4点、角材材木でネズコが2点、曲物側板でスギが1点産出し、スギが多くみられた。

そして新潟平野の北部沖積地に立地する青田遺跡では、縄文時代晩期以降の花粉分析が行われ、弥生時代以降にスギ林が拡大したことが示唆されている〔吉川昌伸2004〕。

山口遺跡でも井戸側や曲物、板材にはスギが利用されていた。また井戸側では、部材ごとに異なる木取りを用いていたことが確認できた。花粉分析の結果では遺跡周辺の植生は不明であるが、遺跡周辺に生育していたスギを用材選択していた可能性が考えられる。

引用文献

- 植田弥生（2002）木器及び炭化材の樹種同定。新潟県埋蔵文化財調査事業団編「奈良崎遺跡（本文編）」：116-135、新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- 吉川純子（2006）加工材の樹種。新発田市教育委員会編「荒神裏B遺跡発掘調査報告書」：161-163、図版30、新発田市教育委員会。
- 吉川昌伸（2004）青田遺跡における縄文時代晩期以降の花粉化石群。新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編「青田遺跡 関連諸科学・写真図版編」：35-42、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団。

C 茶臼の石材分析

藤根 久・竹原弘展（パレオ・ラボ）

1) はじめに

山口遺跡は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する遺跡である。遺跡は、阿賀野川右岸及び旧小里川右岸に形成された自然堤防上に立地し、古代（平安時代/9世紀前半）と中世（鎌倉～室町時代/13世紀後半～14世紀）の2時期の遺構・遺物からなる。調査では、中世のピットP2347から茶臼の下臼が出土した。ここでは、この茶臼の石材について実体顕微鏡観察及び非破壊による蛍光X線分析を行い、岩石学的特徴と岩石種について検討した。なお、蛍光X線分析は竹原が担当し、岩石の特徴記載は藤根が担当し、全体をまとめた。

2) 試料と分析方法

試料は、中世のピットP2347から出土した茶臼の下臼1点である（第11表）。この茶臼の大きさは、直径20cm、厚さ8.6cmである。始めに、実体顕微鏡を用いて岩石組織の特徴を観察記載し、特徴的な部分について写真撮影を行った。

点No.	遺物名	調査区	遺構	時期	グリッド	色調
1	茶臼、 上臼	1区	P2347	中世	18G6	白色陶状、オリーブ灰色 (25GY6/1)

第11表 茶臼とその詳細

次に、典型的な部分と特徴的な部分（白色結晶）を選定してエネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて分析した。使用した装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー㈱製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VX（Rh管球）である。測定条件は、典型的な部分の測定はコリメータφ8.0mm、白色結晶の測定はコリメータφ1.0mm、大気中で測定した。分析結果は、付属ソフトを用い、標準試料を使用しないファンダメンタルパラメーター法（FP法）で計算した。

3) 結果

茶臼の下臼表面の実体顕微鏡による観察では、斑晶構造を呈し、短冊状微斑晶が幾重にも重なった組織が見られた（第25図-3～5）。

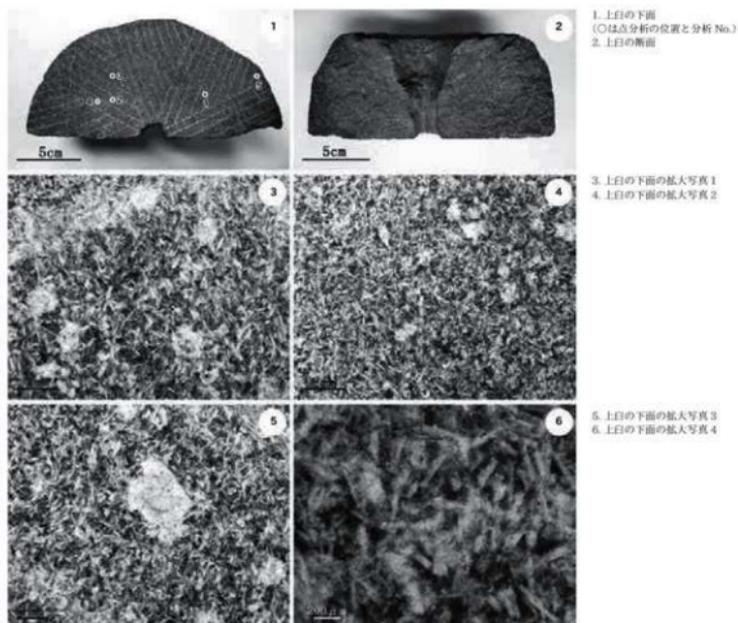
エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いた分析では、大型結晶を含まない典型的な部分の点分析では、酸化ケイ素（SiO₂）が平均64.03%、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が平均18.59%、酸化鉄（Fe₂O₃）が平均8.44%、酸化カルシウム（CaO）が平均6.19%、酸化カリウム（K₂O）が平均1.45%などであった。

この茶臼は、厚さが8.6cmあり、真空での測定が不可能であったため、酸化ナトリウム（Na₂O）を感度良く測定できなかつた。このため、ナトリウム含有量は不明である。

岩石は、組織の特徴と酸化ケイ素の含有量から酸性安山岩（フェルシク安山岩）～デイサイトと考えられる。なお、ナトリウム含有量は不明であるが、カルクアルカリ系列の岩石と考えられることから〔都城・久城1975〕、日本において極普通に見られる岩石と考えられる。

白色結晶の点分析では、酸化ケイ素（SiO₂）が平均72.59%、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が平均14.63%、酸化鉄（Fe₂O₃）が平均4.21%、酸化カルシウム（CaO）が平均4.59%、酸化カリウム（K₂O）が平均3.42%などであった。

白色の大型結晶や短冊状結晶（微斑晶）は、化学組成の特徴から斜長石と考えられる。なお、斑晶や微



第 25 図 P2347 から出土した茶臼と表面の实体顕微鏡写真

特徴	点No.	Al ₂ O ₃	SiO ₂	S	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO	PbO	Total
典型的な部分	1	17.53	64.81	0.00	1.58	5.89	1.12	0.16	8.76	0.02	0.00	0.06	0.00	0.02	0.03	0.00	100.00
	2	19.14	63.69	0.00	1.40	6.19	1.05	0.15	8.25	0.01	0.00	0.06	0.00	0.02	0.03	0.00	100.00
	3	19.10	63.60	0.00	1.36	6.49	0.85	0.15	8.31	0.02	0.00	0.06	0.00	0.02	0.03	0.00	100.00
	平均値	18.59	64.03	0.00	1.45	6.19	1.01	0.16	8.44	0.02	0.00	0.06	0.00	0.02	0.03	0.00	
白色結晶	4	23.40	64.56	0.05	1.56	5.61	0.24	0.08	4.30	0.02	0.00	0.09	0.00	0.02	0.04	0.02	100.00
	5	5.85	80.61	0.05	5.28	3.57	0.20	0.08	4.13	0.01	0.01	0.07	0.01	0.06	0.06	0.00	100.00
	平均値	14.63	72.59	0.05	3.42	4.59	0.22	0.08	4.21	0.02	0.01	0.08	0.01	0.04	0.05	0.01	

第 12 表 岩石表面の蛍光 X 線分析結果 (単位%)

斑晶の隙間を埋める暗い部分は、輝石などの有色鉱物や磁鉄鉱などの不透明鉱物が充填するものと考えられる (第 25 図-6)。

4) お わ り に

中世のピット P2347 から茶臼の下臼が出土した。ここでは、この茶臼の石材について实体顕微鏡観察及び非破壊による蛍光 X 線分析を行い、岩石学的特徴と岩石種について検討した。

その結果、岩石組織及び酸化ケイ素の含有量から酸性安山岩 (フェルシク安山岩) ~ デイサイトと同定された。

引用文献

都城秋徳・久城育夫 (1975) 岩石学 II. 共立出版, 171p.

D 山口遺跡出土和鏡の蛍光 X 線分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1) はじめに

阿賀野市山口字城ヶ窪に所在する山口遺跡より出土した和鏡について、蛍光 X 線分析を行い、その材質を検討した。

2) 試料と方法

分析対象資料は、山口遺跡の SE2268 より出土した和鏡で、中世のものと考えられている。

分析装置はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム (Rh) ターゲット、X 線ビーム径が 100 μm または 10 μm 、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、検出可能元素はナトリウム (Na) ~ ウラン (U) である。また、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

分析に先立って予め元素マッピング分析を行い、特徴的な箇所を 5ヶ所選びポイント分析を行った。測定条件は、50kV、0.08 ~ 0.32mA (自動設定)、ビーム径 100 μm 、測定時間 3000s に設定し、非破壊で行った。定量分析は、MBH Analytical 社の 32X LB14 (batch A) を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法 (以下 FP 法) による半定量分析を装置付属ソフトで行った。定量値の解釈については大まかな参考値程度にとどめておくべきである。

3) 結果

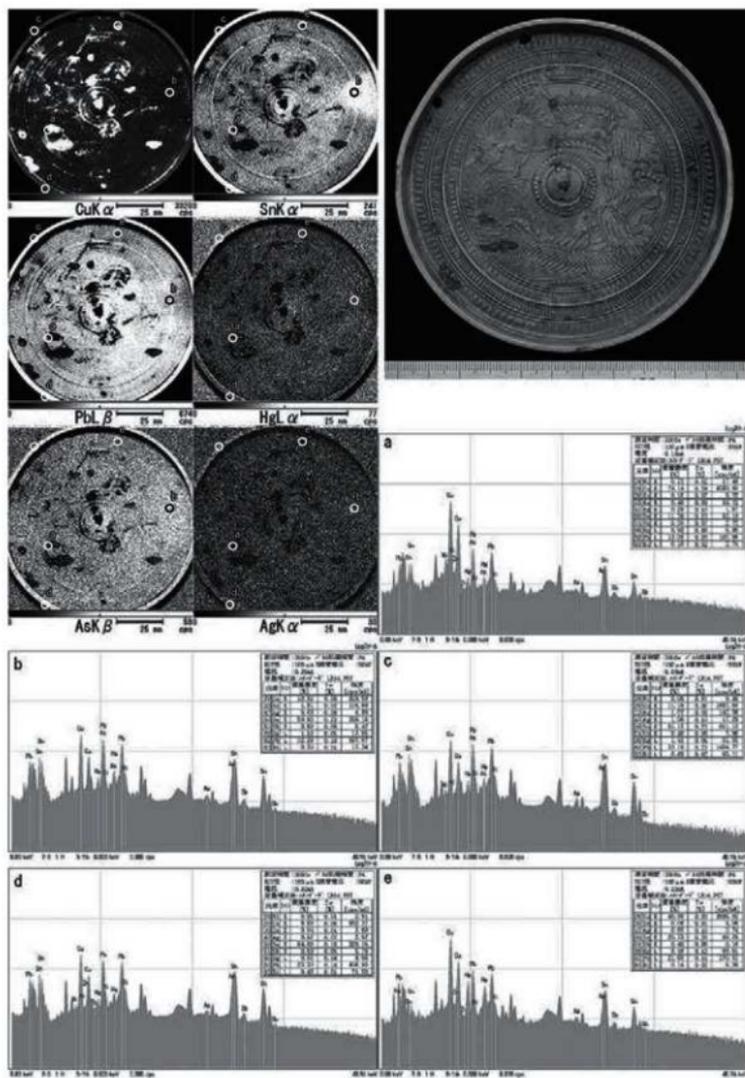
第 26 図、第 27 図に 10ヶ所 (a ~ j) の分析ポイントを示した元素マッピング図、ポイント分析のスペクトル図、第 1 表にポイント分析により得られた FP 法による半定量分析結果を示す。ケイ素、鉄等土砂に多く含まれる元素を除くと、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が主に検出され、他にニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が検出された。また、水銀 (Hg) も検出された。

4) 考察

分析の結果、銅、スズ、鉛を中心とした組成であることが判明した。また、ニッケル、亜鉛、ヒ素、銀、アンチモン、ビスマスといった元素については、微量であり、鉱石から分離しきれなかった不純物と捉えるのが妥当であろう。今回は半定量分析であり、かつ非破壊分析で錆、及び後述の鍍金の上からの測定であるため、今回の分析結果からは鏡本体の厳密な組成比について検討すべきではない。

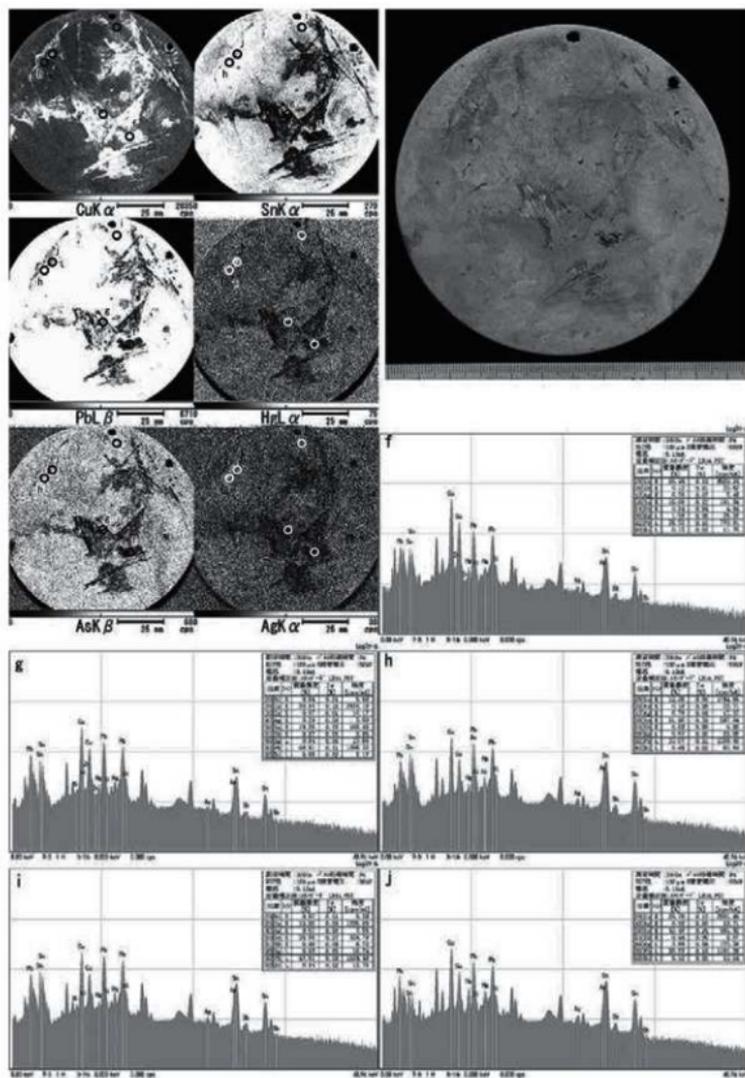
ポイント	Cu	Sn	Pb	Ni	Zn	As	Ag	Sb	Bi	Hg	
鏡片	a	74.14	11.36	12.05	0.23	0.15	0.40	0.29	0.35	0.10	0.93
	b	12.33	50.83	32.29	-	-	1.81	0.68	0.63	0.30	1.13
	c	11.19	51.17	33.15	0.06	-	1.07	1.06	0.40	0.49	1.41
	d	9.59	64.83	23.33	0.05	0.04	-	0.52	0.69	0.46	0.55
	e	46.89	20.73	21.65	-	0.06	-	0.65	0.40	0.14	9.48
鏡面	f	55.44	16.08	26.52	-	0.12	-	0.39	0.24	0.13	1.08
	g	30.14	19.26	48.91	0.04	0.07	-	0.29	0.27	0.08	0.94
	h	12.36	51.90	33.07	-	-	0.18	0.79	0.53	0.49	0.67
	i	13.92	36.56	47.61	0.07	-	-	0.67	0.46	0.14	0.58
	j	20.76	43.49	30.37	-	-	-	0.93	0.44	0.12	3.89

第 13 表 半定量分析結果 (mass%)



上段左：元素マッピング図 上段右：分析面写真 下段：ポイント分析スペクトル図

第26図 和銀の蛍光X線分析結果（鏡背）



上段左：元素マッピング図 上段右：分析面写真 下段：ポイント分析スペクトル図

第 27 図 和鏡の蛍光 X 線分析結果 (鏡面)

表面が錆びて曇る金属鏡は、定期的な手入れが必要である。まず研磨した後、錫アマルガム（水銀とスズの合金）を塗布、加熱して水銀を除去し（鍍錫、錫めっき）、鏡面を仕上げる。鏡面を磨く作業及び職人は鏡磨と呼ばれる〔五十川 1999〕。鏡面の仕上げに錫アマルガムが使用され始めたのがいつ頃からははっきりしないが、鏡磨の職人については鶴岡放生会職人歌合に見られることから、少なくとも鎌倉時代には存在していたことがわかる。また、七十一番職人歌合（室町時代成立）の鏡磨の項を見ると、水かね、すなわち水銀の語が見える。

今回分析した和鏡から水銀が検出されたことから、鏡表面への鍍錫が推定された。見掛け上高いスズの含有量は表面の鍍錫によるものであり、鏡本体はそこまでスズ含有量が高くないと考えられる。なお、鏡としての機能を考えると、鍍錫は鏡面だけで十分と思われるが、実際には鏡面だけでなく鏡背からも検出されている。これは、鍍錫により銀白色の外観となることから、装飾的な意味合いなどが推測される。

5) お わ り に

山口遺跡より出土した和鏡について非破壊蛍光X線分析を行った結果、定性的にはCu-Sn-Pbの銅合金、すなわち青銅に属するものと判断された。また、鏡面、鏡背ともに水銀が検出されており、全面に鍍錫が施されていたと推定される。

引用・参考文献

- 五十川伸矢（1999）越中水見の鏡磨道具と鏡磨の歴史、五十川伸矢編「鑄造遺跡出土物による日本歴史時代の鏡製作技術の復原研究」：21-32、京都橘女子大学。
- 岩崎佳枝・網野善彦・高橋喜一・塩村耕校注（1993）七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集、新日本古典文学大系、61、621p、岩波書店。
- 鈴木堂三編（1998）新装版日本職人辞典、359p、東京堂出版。
- 内田俊秀（1999）鏡製作技術と合金組成、五十川伸矢編「鑄造遺跡出土物による日本歴史時代の鏡製作技術の復原研究」：33-36、京都橘女子大学。

E 山口遺跡の花粉分析と微粒炭分析

森 将志（バレオ・ラボ）

1) は じ め に

山口遺跡は新潟県北東部、阿賀野川右岸及び旧小里川右岸に形成された自然堤防上に立地する遺跡である。遺跡の主な時期は古代（9世紀前半）と中世（13世紀後半～14世紀）と考えられている。この遺跡の古植生を調べるために、基本土層と竪穴建物であるSI3048のセクションから花粉分析用の試料が採取された。この試料の花粉分析を行ったところ、花粉化石の保存状態が悪く、すべての試料において花粉化石が十分に含まれていなかった。しかし、微粒炭を多く含む試料があったため、基本土層の試料について微粒炭の含有量を求めた。以下では、試料について行った花粉分析結果と微粒炭分析結果、及びその考察について記す。

2) 試料と方法

(1) 花 粉 分 析

試料は基本土層から4試料、竪穴建物であるSI3048セクションから4試料の計8試料が採取された。

セクション	試料No.	時期	土質	特徴
基本土層	Ⅱ	中世～近世	黒褐色 (2.SY3/2) シルト	
	Ⅳa	古代	黒褐色 (2.SY3/2) シルト	炭化物含む
	Ⅳb	古代	オリーブ褐色 (2.SY4/3) シルト	
	V	弥生前期～古代以前	オリーブ褐色 (2.SY4/6) シルト	
	1	古代	黒褐色 (10VR2/2) 土	粘性中 しまり中
SI3048	2	古代	灰褐色 (10VR4/2) 土	粘性中 しまり中
	3	古代	浅褐色 (2.SY7/4) シルト	粘性中 しまり中 炭化物含む
	4	古代	灰褐色 (2.SY5/3) シルト	粘性強 しまり中 炭化物含む

第14表 分析試料の層位、土質一覧表

試料一覧を第14表にまとめた。これらの試料から次の手順で花粉化石を抽出した。

試料(湿重量約3～4g)を遠濾管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混液を加え10分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子をすべて数えた。なお、図版に示した各分類群の単体標本(PLC.223～227)はパレオラボに保管されている。

(2) 微粒炭分析

基本土層堆積物から採取された4試料について、微粒炭(10～100 μ m)含有量を求めた。試料は乾燥機で乾燥させ、花粉化石を抽出する作業と同様の処理を行った。また、試料1g中の微粒炭含有量は、山野井(1995)を参考にして次式による方法で求めた。

$$X=BD/AC$$

X: 試料1g中の微粒炭含有数, A: 分析に用いた試料の重量, B: 濃縮試料+グリセリンの重量,

C: 濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量, D: プレパラート中の微粒炭数

学名	和名	SI3048 -1層	SI3048 -2層	SI3048 -3層	SI3048 -4層	基本層序 Ⅱ層	基本層序 Ⅳa層	基本層序 Ⅳb層	基本層序 V層
樹木									
<i>Taxus</i>	ツガ属	—	—	—	—	—	1	—	—
<i>Pinus subgen. Diploxyon</i>	マツ属種様葉松属	—	—	—	—	—	—	—	2
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	—	1	—	—	—	5	1	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	2	1	2	—	5	—	2
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Quercus subgen. Lepidobolus</i>	コナラ属コナラ亜属	—	1	—	—	—	2	—	—
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属～ケヤキ属	2	—	—	1	—	—	2	—
草本									
Gramineae	イネ科	22	6	6	26	3	14	1	20
Moraceae	クワ科	—	—	—	5	1	—	—	—
<i>Rumex</i>	ボシゴシ属	—	—	—	—	—	1	—	—
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザミ科～ヒユ科	5	3	—	20	1	5	2	1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	—	2	—	—	—	—	—	—
Brassicaceae	アブラナ科	2	2	—	—	—	1	—	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	13	1	—	1	—	4	—	—
Liguliflorae	タンポポ科	—	1	1	—	—	1	—	—
シダ植物									
<i>Osmunda</i>	ゼンマイ属	2	—	—	—	—	5	—	—
Monolete type spore	単葉溝胞子	96	20	33	47	9	27	9	12
Trilete type spore	三葉溝胞子	4	2	2	5	—	7	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉	6	4	1	3	—	13	3	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	42	15	7	52	5	26	3	22
Spores	シダ植物胞子	102	22	35	52	9	39	10	14
Total Pollen&Spores	花粉+胞子総数	150	41	43	107	14	78	16	41
Unknown pollen	不明花粉	1	4	—	—	—	—	—	—

第15表 産出花粉化石一覧表

3) 結 果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉7、草本花粉8、シダ植物胞子3の総計18である。これらの花粉・胞子の一覧を第2表に示した。プレバート全面を鏡検した結果、今回の試料にはほとんど花粉化石が保存されておらず、産出数が非常に少ないため、分布図は示していない。また、試料1g中の微粒炭含有量を計量した結果を第16表に、試料1g中の微粒炭含有量のグラフを第28図に記した。微粒炭分析を行った結果、微粒炭数は上位層に向かって増加傾向にあった。

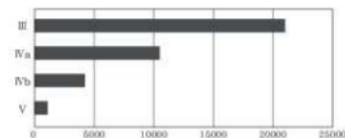
4) 考 察

一般的に花粉粒は陸域や水域に落下した場合、泥などの細粒な粒子と同じような挙動を示すと思われる。今回の分析試料はシルトなど細粒堆積物を主体とするもので、花粉粒も含まれている可能性が高いと思われたが、いずれの試料にも十分な量の花粉化石が含まれていなかった。また、花粉は丈夫な外膜を持っているが、乾燥や紫外線、土壌バクテリアなどに弱く、これらの要因が強く働く環境にさらされると分解、消失してしまうことが多い。図版で示したように、試料中には花粉粒と同じ様な大きさの微粒炭が多数含まれることや、プラント・オパールが含まれていた（プラント・オパール分析の項参照）ことを考えると、花粉も堆積物中に含まれていた可能性はあるが、保存環境において、何らかの要因で分解消失してしまったと思われる。よって、今回の分析結果から当時の植生について言及することは難しい。

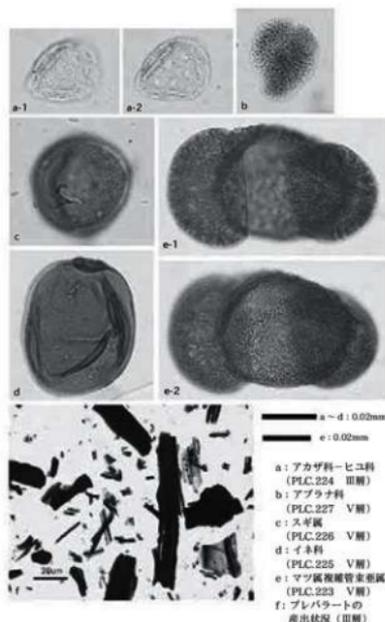
一方、今回は微粒炭の数をカウントする方法で微粒炭分析を行った。微粒炭は100 μm前後を境に、それ以上を粗粒微粒炭、それ以下を細粒微粒炭として区分されており、一般的に花粉分析法の際に検出される微粒炭は細粒微粒炭

試料No.	試料乾燥重量 (g)	炭酸試料+グリセリンの重量 (g)	封入に用いた炭酸試料+グリセリンの重量 (g)	プレバート中の微粒炭数	1g中の微粒炭数
III	2.2454	0.4885	0.0044	425	21,014
IVa	2.823	0.5929	0.0058	290	10,501
IVb	1.5779	0.4806	0.007	97	4,221
V	2.2043	0.4196	0.0061	35	1,092

第16表 各試料の計量値と1g中の微粒炭数



第28図 試料1g中の微粒炭数(個)



第29図 山口通跡から産出した花粉化石及びプレバートの産出状況

とされる(井上2007)。また、微粒炭は、過去の火災や火入れなどによる植物燃焼を示すもので、細粒微粒炭は一般的に広域内の火災によって供給されると考えられている[井上2007]。

本遺跡基本土層の微粒炭含有量は、弥生時代前期～古代以前から時代を経るに従って増加し、中世～近世の時期が最も多いという結果であった。微粒炭の増加の要因は、山火事などの自然現象や、焼畑などの人為的活動などが考えられるが、花粉分析などの分析法とあわせて検討される場合がある。例えば、微粒炭の増加した時期に、花粉分析で栽培植物の増加が認められた場合には、火入れや焼畑の可能性が考えられるし、木本花粉の減少が認められた場合には、山火事などによる森林化など、何らかの関連性が疑われる。しかし、今回の花粉分析では十分な量の花粉化石を得られず、花粉化石から微粒炭の増加要因を特定することはできなかった。また、プラント・オパール分析の結果では、IVb層の時期には遺跡周辺で稲作が行われていたなど、人為的活動の可能性が指摘されているが(プラント・オパール分析の項参照)、微粒炭の増減と同調するものではない。よって、今回の分析結果からいえるのは、微粒炭の増加の要因を特定するのは難しいが、弥生時代以降、中世～近世に至るまでの間に、遺跡周辺の広範囲において、植物燃焼に関わる事象が確実に増加していたということである。

引用文献

井上 淳(2007) 過去の植物燃焼を示す堆積物中の微粒炭。人類紀自然科学編集委員会編「人類紀自然科学—地層に記録された人間と環境の歴史—」:126-136, 共立出版。

山野井 徹(1995) 山形市西部山地琵琶沼の花粉化石と微粒炭。山形県立博物館編「平成6年度琵琶沼緊急調査報告書—地学・動物—」:17-26, 山形県立博物館。

F 山口遺跡の植物珪酸体

米田恭子(パレオ・ラゴ)

1) はじめに

山口遺跡は、新潟県阿賀野市山口字城ヶ窪に所在し、阿賀野川右岸及び旧小里川右岸に形成された自然堤防に立地する。遺跡の主な時期は、古代(平安時代/9世紀前半)と中世(鎌倉～室町時代/13世紀後半～14世紀)の2時期である。古代では官衙関連の倉庫の可能性のある掘立柱建物、中世では区画溝を持つ屋敷から掘立柱建物や井戸などの遺構が検出されている。ここでは、基本土層及び古代の竪穴建物より採取された土壌試料について、古環境や古植生を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。以下に、分析の結果及び考察を記す。

2) 試料と方法

試料は基本土層(19I2)の試料 No.1 (III層)、No.2 (IVa層)、No.3 (IVb層)、No.4 (V層)と、竪穴建物(S13048)の試料 No.5 (1層)、No.6 (2層)、No.7 (3層)、No.8 (4層)より採取された計8試料である。各試料の土質は、試料 No.1 が黒褐色シルト、No.2 が炭化物を含む暗褐色シルト、No.3 が褐色シルト、No.4 が黄褐色シルト、No.5 が黒褐色土、No.6 が灰褐色土、No.7 が炭化物を含む浅黄色シルト、No.8 が炭化物を含む黄褐色シルトである。各試料の時期は、基本土層(19I2)の試料 No.1 が中世～近世、No.2, 3 が古代、No.4 が弥生時代前期～古代以前である。竪穴建物(S13048)の試料 No.5～8 はすべて古代である。

植物珪酸体分析は上記した8試料について、下記に示した手順にしたがって行った。

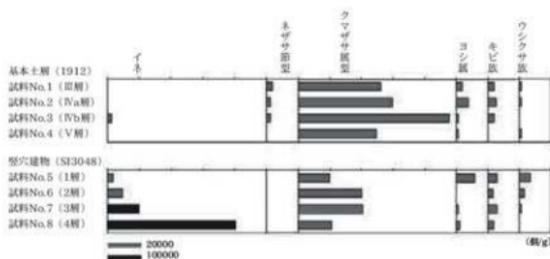
秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30ccに加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

3) 観察の結果

同定・計数された各植物の植物珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1gあたりの各植物珪酸体個数を求め(第17表)、これらの分布を第30図に示した。以下に示す各分類群の植物珪酸体数は試料1gあたりの検出個数である。

試料番号	遺構	層位	時期	イネ (個/g)	ネザザ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	基本土層 (1912)	Ⅱa層 Ⅱb層	中世~近世 古代	0 2,600	3,700 2,500	52,500 59,700	3,700 7,600	3,700 5,100	1,200 1,300	14,600 21,600
4		V層	弥生前期~古代以前	0	0	49,600	1,200	0	1,200	7,400
5		1層		3,500	0	19,800	11,600	5,800	7,000	17,500
6	竪穴建物 (SI3048)	2層	古代	9,800	0	40,300	0	3,300	3,300	12,000
7		3層		101,300	0	40,800	1,200	5,800	1,200	50,100
8		4層		401,900	0	21,100	2,500	3,500	0	208,600

第17表 試料1gあたりの植物珪酸体個数



第30図 山口遺跡の植物珪酸体分布図

(1) 基本土層(1912)

検鏡の結果、試料No.3からイネが2,600個体検出された。最も多く検出されたクマザサ属型は、試料No.3では約100,000個体が得られた。ヨシ属は、試料No.2で7,600個体が観察された。その他にネザザ節型とキビ族、ウシクサ族、不明の植物珪酸体が観察された。

(2) 竪穴建物(SI3048)

検鏡の結果、すべての試料からイネが検出された。個数的には試料No.8が最も多く400,000個体を越えており、試料No.7では約100,000個体が得られた。イネ以外ではクマザサ属型が試料No.6、7で約40,000個体が検出された。ヨシ属は試料No.5で10,000個体を越えて観察された。その他にキビ族とウシクサ族、不明の植物珪酸体が観察された。

4) 考 察

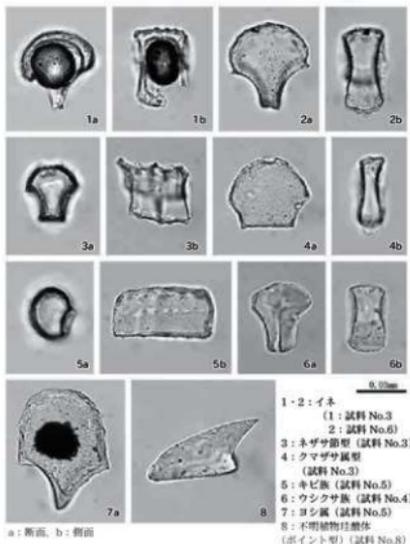
基本土層(1912)の分析結果を時期ごとに見ていく。弥生時代前期～古代以前(V層)の遺跡周辺は、主にスズタケやミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類が生育しやすい環境であったと推察される。クマザサ属型のササ類は、森林の下の草的存在として生育する植物であり、遺跡周辺には森林が広がっていたとみられる。

古代(IVb, IVa層)では、IVb層からイネが検出された。イネについては、機動細胞珪酸体が試料1gあたり5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査成果とがよく対応する結果が得られており[藤原1984]、稲作の検証に際しては、この5,000個を目安に、さらに機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断がなされている。IVb層では2,600個体と個数的には検証の目安を下回る結果であった。試料採取地における稲作の可

能性は低いとみられるが、遺跡の周辺で稲作が行われていた場所から流れ込んだ可能性があるとと思われる。また、IVa層でクマザサ属型が増している点については、イネと同様に周辺から流されてきた可能性や、付近には倉庫の可能性のある掘立柱建物もあり、遺跡内において何らかの目的で利用されていた可能性もあると思われる。IVa層からは、湿地を好むヨシ、ツルヨシなどのヨシ属が多く検出された。遺跡周辺に湿地化した場所が存在したと推測される。

中世～近世(III層)では、クマザサ属型がやや減り、アズマネザサとみられるネザサ節型のササ類の増加がみられた。森林の林縁部などに日当たりの良い場所が広がり、そこにこれらのネザサ節型のササ類が分布していたとみられる。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族も同様の場所に生育していたとみられる。キビ族については、栽培植物(アワ、ヒエ、キビなど)と雑草類(イヌビエ、エノコログサなど)の区別が難しく、今回分析観察されたキビ族が栽培植物かどうかは不明である。ただし今回の分析では、遺跡周辺で稲作が行われていた可能性があるため、検出されたキビ族は稲作にともなう雑草類(タイヌビエなど)ではないかと思われる。

竪穴建物(SI3048)の分析結果については、下位の4層からイネの機動細胞珪酸体が非常に多く検出された。4層は貼床とされる6層の直上にあたることから、検出されたイネは竪穴建物の床に敷かれていた藁あるいは藁製品由来である可能性が高いとみられる。竪穴建物(SI3048)は時期的にはイネが検出された基本土層のIVb層に相当するとみられており、この時期に遺跡周辺で稲作が行われ、収穫後のイネの茎や葉が竪穴建物内で藁の敷物として利用されたと推察される。一方、3層のイネの機動細胞珪酸体は、2,



第31図 山口遺跡の植物珪酸体

1層よりは圧倒的に多いものの、4層と比べると1/4の数である。3層は遺構が埋没し始めた初期段階の堆積土であり、多量のイネの機動細胞珪酸体を含むのは、下位の4層の敷物を巻き込んだ結果である可能性がある。また、2、1層でもイネは検出されているが、4、3層と比較すると大幅に減少している。2、1層のイネについては、遺構が埋没する後半の過程でイネや葉が廃棄された可能性や周辺から流れ込んだ可能性などが考えられる。特に1層ではヨンが多く検出されており、自然堤防上という遺跡の立地からも、河川の氾濫などによる影響を受けた可能性がある。

引用文献

藤原宏志(1984) プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—, 考古学ジャーナル, 227, 2-7.

2 2013年度の自然科学分析

千葉博俊・斉藤崇人・芝口 怜・高橋 敦(パリオ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

山口遺跡(新潟県阿賀野市山口地内)は、現在の阿賀野川の右岸の沖積地に立地する。周辺には、蛇行する旧河川跡の分布が確認でき、本遺跡はこれらの旧河川跡に面した箇所に位置している。山口遺跡は、これまでの発掘調査により、弥生時代及び古代、中世の遺構や遺物が確認されており、とくに主体となるのは平安時代及び中世頃であることが明らかとされている。2013年度の発掘調査では、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等の古代の主体とする遺構が確認されている。

本報告では、調査区南側より検出された焼成遺構の年代や出土炭化材の樹種、確認調査で検出された材料木屑列を伴う溝埋積物の土壌の理化学的の検討を目的として、自然科学分析を実施した。

A 放射性炭素年代測定

1) 試料

試料は、焼成遺構(SX4999)の掻き出し部(30L18)の炭化物層より採取された土壌1点、焼成部(30L13)の炭化物層上位の焼土より採取された土壌3点、及び焼成部の炭化物層より採取された土壌2点の、計6点がある。

これらの試料の観察では、掻き出し部の炭化物層は、焼土とみられる褐色シルトが混じる褐色シルト～粘土からなり、今回の6試料中で状態の良い炭化材が比較的多く認められる。焼成部の炭化物層上の焼土の3試料は、焼土とみられる褐～橙褐色シルトが混じる暗灰色シルト～粘土からなるが、混入する炭化物の程度や保存状況が異なり、炭化物がほとんど認められないものや炭化材が認められるものの細片かつ脆弱であったり、板～膜状に土壌中に挟材する、あるいは土塊表面に付着するものなど区々である。焼成部 炭化物層試料は、焼土とみられる褐～橙褐色シルトが混じる暗灰～黒灰色シルト～粘土からなり、保存の悪い炭化材が認められる。

測定試料は、試料の採取地点や上記した観察所見を踏まえ、それぞれ炭化材が認められる試料より、後述する樹種同定との併用が可能な比較的大型の炭化材3点を抽出した。これらの抽出した炭化材は、いずれも1～2cm角程度の破片であり、本来の最外年輪部を確認することができなかったため、観察範囲内の最外年輪部を含む数年輪分を測定に供している。

2) 分析 方 法

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセットや超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じり、500°C (30分) 850°C (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を使い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ、2σ (σ は統計的に真の値が 68%、2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3) 結果及び考察

放射性炭素年代測定結果を第 18 表に示す。SX4999 より出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、掻き出し部 炭化物層の炭化材が 1,530 ± 30yrBP、焼成部 炭化物層上 焼土の炭化材が 1,560 ± 30yrBP、焼成部 炭化物層の炭化材が 1,280 ± 20yrBP を示す。また、これらの測定結果に基づく暦年較正結果 (1σ) は、掻き出し部 炭化物層が calAD 434 - calAD 574、焼成部 炭化物層上 焼土が calAD 430 - calAD 543、焼成部 炭化物層が calAD 683 - calAD 766 である。

以上の炭化材が示した較正暦年代 (1σ) は、3 試料を通じて 5 世紀前半から 8 世紀中頃の範囲にある。詳細にみると、掻き出し部の炭化物層と焼成部の炭化物層上 焼土試料の暦年代は近似しており、5 世紀中頃から 6 世紀後半に相当する。一方、焼成部の炭化物層試料は 7 世紀後半から 8 世紀中頃に相当し、他の 2 試料よりも有意に新しい暦年代を示す。

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年校正用) (yrBP)	暦年校正結果			測定機関 CodeNo.	
15377-1 SX4999 炭化物層 抜き出し部	1,530 ± 30	-23.93 ± 0.42	1,529 ± 25	0	cal AD 434 - cal AD 453 cal AD 470 - cal AD 487 cal AD 534 - cal AD 574	cal BP 1,516 - 1,497 cal BP 1,480 - 1,463 cal BP 1,416 - 1,376	0.174 0.183 0.644	IAAA-133682
				2 σ	cal AD 429 - cal AD 495 cal AD 507 - cal AD 521 cal AD 527 - cal AD 598	cal BP 1,521 - 1,455 cal BP 1,443 - 1,429 cal BP 1,423 - 1,352	0.393 0.035 0.572	
				0	cal AD 430 - cal AD 492 cal AD 513 - cal AD 516 cal AD 529 - cal AD 543	cal BP 1,520 - 1,458 cal BP 1,437 - 1,434 cal BP 1,421 - 1,407	0.800 0.040 0.160	
				2 σ	cal AD 425 - cal AD 557 cal AD 683 - cal AD 716 cal AD 743 - cal AD 766	cal BP 1,525 - 1,393 cal BP 1,267 - 1,234 cal BP 1,207 - 1,184	1.090 0.575 0.425	
				2 σ	cal AD 671 - cal AD 732 cal AD 735 - cal AD 769	cal BP 1,279 - 1,218 cal BP 1,215 - 1,181	0.617 0.383	
15377-2 SX4999 炭化物層上 焼土 焼成部	1,560 ± 30	-26.46 ± 0.77	1,557 ± 25	0	cal AD 430 - cal AD 492 cal AD 513 - cal AD 516 cal AD 529 - cal AD 543	cal BP 1,520 - 1,458 cal BP 1,437 - 1,434 cal BP 1,421 - 1,407	0.800 0.040 0.160	IAAA-133683
				2 σ	cal AD 425 - cal AD 557 cal AD 683 - cal AD 716 cal AD 743 - cal AD 766	cal BP 1,525 - 1,393 cal BP 1,267 - 1,234 cal BP 1,207 - 1,184	1.090 0.575 0.425	
15377-3 SX4999 炭化物層 焼成部	1,280 ± 20	-25.26 ± 0.59	1,282 ± 23	0	cal AD 671 - cal AD 732 cal AD 735 - cal AD 769	cal BP 1,279 - 1,218 cal BP 1,215 - 1,181	0.617 0.383	IAAA-133684
				2 σ	cal AD 671 - cal AD 732 cal AD 735 - cal AD 769	cal BP 1,279 - 1,218 cal BP 1,215 - 1,181	0.617 0.383	

第 18 表 放射性炭素年代測定及び暦年校正結果

前述したように今回の測定に供した炭化材は本来の最外年輪部が認められなかったことから、本来の年代より古い年代を示している可能性がある。このような中で、同一の遺構の中では焼成部の炭化物層試料がより新しい暦年代を示した。調査所見では、古代及び中世の集落とされている点などを考慮すると、およそ古代頃の遺構の可能性がある。他の 2 試料については、試料の観察所見から、樹齢の古い年輪が形成された年代等を示していると考えられる。ただし、異なる地点から出土した炭化材が近似する暦年代を示していることから、本遺構が操業した近い年代を示している可能性もある。この点については、SX4999 や本遺跡における出土遺物等による評価が期待される。

B 樹種 同定

1) 試 料

試料は、第VI章 2A の放射性炭素年代測定に供した試料より分割した炭化材 3 点である。

2) 分 析 方 法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の剖断面を複製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982] や [Wheeler 等 1998] を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、[林 1991] や [伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

3) 結 果

同定結果を第 19 表に示す。SX4999 より出土した炭化材は、広葉樹 3 分類群（カツラ、トチノキ、トネリコ属近似種）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

遺構	地点・層位	種類（分類群）
炭化物層	抜き出し部	カツラ
SX4999 炭化物層上 焼土	焼成部	トチノキ
炭化物層	焼成部	トネリコ属近似種

第 19 表 樹種同定結果

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-30 細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界

に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列。内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・トネリコ属近似種 (cf. *Fraxinus*)

モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は破損が激しく、形態の詳細は不明であるが、観察した範囲ではそれほど大きくはなく、1-3細胞幅程度で大きくても20-30細胞高程度である。

4) 考 察

焼成遺構 (SX4999) の炭化材は、焼成部や掻き出し部等から出土していることから、遺構内で利用された燃料材に由来すると考えられる。各地点より抽出した炭化材3点には、広葉樹

のカツラ、トチノキ、トネリコ属 (近似種) が確認された。この3種類は、いずれも河畔や湿地等に生育する落葉高木で、トチノキとカツラの木材は軽軟で強度・保存性が低く、トネリコ属 (近似種) は重硬で強度が高い。

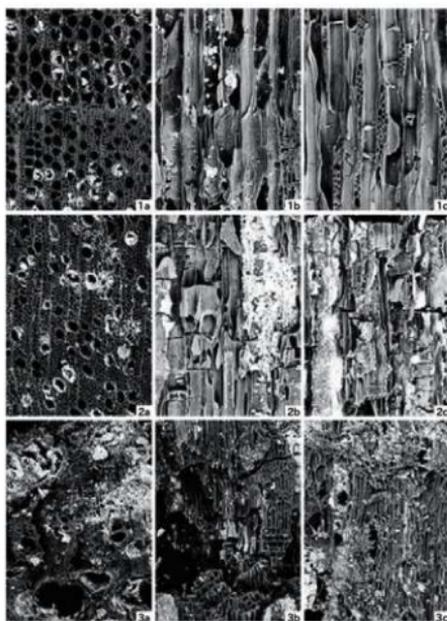
一般的に、軽い木材は可燃性が高く、火付きが良く高温が得られるが、火持ちは悪い。一方、重硬な木材は、火付きは悪いが火持ちは良いとされる。詳細な利用状況については、分析した数量が少ないため今後の課題であるが、今回の結果から可燃性の異なる木材の利用がうかがえる。また、これらの種類は、遺跡の立地等から、周辺に分布した林分より容易に入手できた可能性がある。

C 土壌理化学分析

1) 分析目的及び試料

山口遺跡では、2010年度調査区より材木列塚とされる布塚溝に丸太材を敷設する遺構 (SA2704) が検出されている。この遺構は2013年度調査区に続いているものの、遺構埋積物には炭化物等が認められず地山との判別が困難な状況から、遺構埋積物と地山との差異について分析調査による検討が課題とされた。

そこで、本分析では材木列塚を伴う遺構の埋積物と遺構検出面を構成する堆積層 (以下、地山) の土壌の理化学的比較により、その特性の検討を試みた。



1 カツラ (SX4999; 炭化物層 掻き出し部)
2 トチノキ (SX4999; 炭化物層上 焼土 燃焼部)
3 トネリコ属近似種 (SX4999; 炭化物層 燃焼部)
a: 本目, b: 経目, c: 板目

第32図 炭化材

溝跡には丸太材が敷設されたとされる柱穴が伴っていることから、柱材等に利用された木材の痕跡が残されている場合、とくに腐植や未分解の有機物の残存が期待されるため、腐植（炭素）や窒素含量について着目した。また、材木列棚を構築する際に溝の掘削や整地等の堆積層の改変も想定されることから、さらに土壤構造を構成する三相の固相重量を表す要素の比較として密度（仮比重）の調査も行った。

試料は、上記した材木列棚を伴う溝跡（確認調査呼称：SD1、SD2）の確認のために作製されたトレンチ3箇所と、掘立柱建物に伴う掘形を有する柱穴2基、さらに調査区南側の地山より上位の堆積層が確認できるベルトの計6箇所より採取した土壌である。以下に、土壌試料を採取した各地点の概要を記す。なお、各地点で採取した試料については、現地にて地点毎に「No.」を付したが、同一名称が重複し煩雑となるため、以下の報文では分析の際に付した検体番号として統一している。検体番号に欠番があるものは分析対象外とした試料に相当するので、留意されたい。

(1) SD1-1.2 トレンチ

SD1-1、1-2 トレンチでは、溝に対して縦断面（SD1-1）と横断面（1-2）とが作製されていたことから、SD1-1 より2点（検体12、13）、SD1-2 より3点（検体14～16）、さらにSD1-2の検出面より14点（検体32～45）を採取している。

(2) SD2-6 トレンチ

SD2-6 トレンチも、上記したトレンチと同様に溝の縦断面と横断面とが作製されている。本地点では、SD2の縦断面に相当する南面より4点（検体21～24）、横断面に相当する西面より24点（検体17～20、52～71）を採取している。また、本地点より東側にもSD2の横断面が作成されており、覆土及び遺構外と考えられる堆積層より土壌2点を採取している。

(3) 柱 穴

今回の調査では、掘形を有する柱穴も調査の対象とされた。分析対象とされた柱穴はP4750（13SB13）とP4955（13SB17）の2基である。試料は、それぞれ柱痕、掘形、地山の各箇所より採取している。その結果、P4750では土壌6点（検体1～6）、P4955では土壌5点（検体7～11）を採取している。

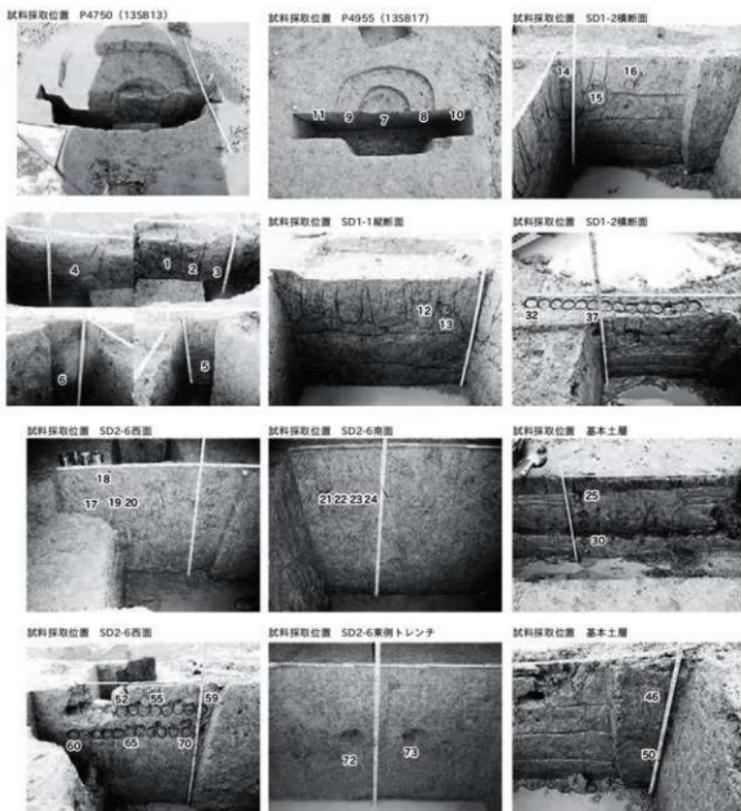
(4) 基本土層

基本土層は、調査区南側の遺構確認面より上位の堆積層が観察できるベルトと、上述したSD1-2の横断面に観察された遺構確認面より下位の堆積層に相当する。調査区南側のベルトの堆積層からは土壌7点（検体25～31）、SD1-2 トレンチの堆積層からは土壌6点（検体46～51）を採取している。

以上の(1)～(4)に記した試料のうち、本分析では担当者との協議に基づき、SD1-2の検体12～16、32、37（7点）、SD2-6 トレンチ西面の検体17～20、52～64、66、68、70（20点）、同トレンチ南面の検体21～24（4点）、SD2-6 東側トレンチの溝覆土（検体72）及び遺構外（検体73）の2点、P4750の検体1～6（6点）、P4955の検体7～11（5点）、調査区南側ベルトの堆積層のうち古代の包含層に相当する検体28～30（3点）と、SD1-2の遺構確認面より下位の堆積層に相当する検体46、48、50（3点）の、計50点を分析に供した。試料の詳細は結果とともに第3表に示す。また、各地点の試料採取位置及び検体番号を第3～36図に示す。

2) 分析 方 法

密度測定は、採土器法〔土壌物理性測定法1982〕、全炭素含量・全窒素含量は、乾式燃焼法〔土壤環境分析法編集委員会1997〕に従った。以下に各項目の操作工程を示す。



第 33 図 試料採取位置

(1) コア採取及び試料調製

一定容積のステンレスコアを土壤中に圧入し、試料を採取した。密度測定後の試料を軽く崩して粒径 2mm 篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、以下の分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm 篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。

(2) 密度測定

採取したコア試料の重量を測定した後、コア試料を乾燥 (105℃) し、乾土重量を求め、コアの容積より単位容積あたりの乾土重量すなわち仮比重を算出する。仮比重は、単位容積あたりの土壌の固相重量を示し、土壌の構造をよく反映するので、簡易な土壌構造の指標となりやすい。一般的に沖積土では 1.0Mg/m³、重粘土では 1.3Mg/m³ であり、圧密を受けた土壌では大きくなる。

(3) 全炭素・全窒素含量

粉碎土試料を0.5000g～2.0000gを石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素・全窒素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製CNコーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量・全窒素量を(T-C・T-N乾土%)求める。さらに、生木等の分解による差を見るために全炭素量を全窒素量で除し、炭素率(C/N)を求め、検討する。

3) 結 果

土壌化学分析結果を第20表に示す。以下、地点毎の試験結果を記す。

(1) SD1-1, SD1-2

野外土性〔ベドロジスト懇談会編1984〕は、検体12がHCと粘質な土壌であり、検体13～16がSiL、検体32, 37, 46, 48, 50はSiCL(シルト質堆積土)とシルト質土壌である。土色は、検体12～14が5Y6/4にぶい黄、検体15, 16が2.5Y6/4にぶい黄、検体32, 37, 48が2.5Y5/4黄褐、検体46, 50が2.5Y5/3黄褐である。

明瞭なMn斑が認められ、Mn反応が強い。密度は1.13Mg/m³から1.20Mg/m³である。全炭素は0.29%から0.42%と総じて低い。全窒素は0.05%から0.07%と一定して低い。C/N比は6から7である。

(2) SD2-6 トレンチ

西面 野外土性は、検体17から20がSiL、他の試料はSiCLとシルト質土壌である。土色は、検体17, 18が2.5Y6/3にぶい黄、検体19, 20が2.5Y6/4にぶい黄、検体52, 56, 57, 59が2.5Y5/3黄褐、検体58が2.5Y4/4オリーブ褐であり、この他は2.5Y5/4黄褐である。密度は1.11～1.20Mg/m³である。全炭素は0.35～0.60%と低く、全窒素は0.05～0.07%である。C/N比は7から8である。検体53で炭素がやや多い。

南面 野外土性は、全試料でSiLとシルト質土壌である。土色は、全試料で2.5Y5/4黄褐である。密度1.14～1.20Mg/m³である。全炭素は0.29～0.38%と総じて低く、全窒素は0.05%と一定である。C/N比は6から7である。

SD2-6 東側トレンチ 野外土性は、2試料ともにSiCLであり、土色は検体72が2.5Y5/4黄褐、検体73が2.5Y4/4オリーブ褐である。密度は検体72が1.19Mg/m³、検体73で1.16Mg/m³である。また、全炭素はともに0.46%、全窒素もともに0.06%、C/N比は8である。

(3) P4750 (135B13)

野外土性は、検体1～4がHC(重堆土)と粘質な土壌であり、検体5, 6がSiL(シルト質堆積土)とシルト質土壌である。土色は、検体1が10YR5/2灰黄褐、検体2, 3が2.5Y5/4灰黄褐、検体4, 5, 6が5Y6/3オリーブ黄である。いずれの試料もマンガン斑や酸化鉄が認められ、とくに検体1はその状況が顕著であり、この他に炭化物も認められる。密度は1.13～1.26Mg/m³である。全炭素は0.28%から0.84%と総じて低い。全窒素は0.04%から0.09%であり、C/N比は7から9であり、検体1がわずかに高い値を維持している。

(4) P4955 (135B17)

野外土性は、検体7, 8がHCと粘質な土壌であり、検体9がSiL、検体10, 11がSiC(シルト質堆積土)と粘土が混じるシルト質土壌である。土色は、検体7～9が5Y6/3にぶい黄、検体10は2.5Y5/3黄褐、検体11は2.5Y6/3にぶい黄である。検体7～9までは明瞭なマンガン斑が認められ、全試料に酸化鉄

通稱/地点名	試料情報				土性	土色	密度 (Mg/m ³)	全炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	備考 (Mn反応)	
	層名	備考	試料No.	検体番号								
28K15 P4750 (138B13)	1層	柱状理土	1	3	HC	10YR5/2 灰黄褐	1.14	0.84	0.09	9	+++	
	2層	柱状理土	2	2	HC	2.5Y5/4 灰黄褐	1.19	0.52	0.07	8	++	
	3層	盤方	3	3	HC	2.5Y5/4 灰黄褐	1.13	0.60	0.07	8	++	
	3層	盤方	4	4	HC	5Y6/3 オリーブ黄	1.19	0.44	0.06	8	++	
	3層	遺構外	5	5	SiL	5Y6/3 オリーブ黄	1.15	0.47	0.06	8	++	
	3層	遺構外	6	6	SiL	5Y6/3 オリーブ黄	1.26	0.28	0.04	7	++	
2023・24 P4955 (135B17)	1層	柱状理土	1	7	HC	5Y6/3 オリーブ黄	1.08	0.82	0.10	8	+++	
	3層	盤形理土	2	8	HC	5Y6/3 オリーブ黄	1.21	0.38	0.06	7	++	
	3層	盤形理土	3	9	SiL	5Y6/3 オリーブ黄	1.15	0.56	0.07	8	+++	
	3層	遺構外	4	10	SiC	2.5Y5/3 黄褐	1.26	0.36	0.05	7	++	
	3層	遺構外	5	11	SiC	2.5Y6/3 にぶい黄	1.26	0.67	0.08	9	++	
	3層	遺構外	1	12	HC	5Y6/4 にぶい黄	1.20	0.30	0.05	6	+++	
28H16 SD1-1 SD1-2	2層	盤形理土 (溝埋土)	2	13	SiL	5Y6/4 にぶい黄	1.16	0.34	0.05	7	++	
	1層	柱状理土	3	14	SiL	5Y6/4 にぶい黄	1.15	0.35	0.05	7	++	
	3層	盤形理土 (溝埋土)	4	15	SiL	2.5Y6/4 にぶい黄	1.15	0.33	0.05	7	++	
	3層	遺構外	5	16	SiL	2.5Y6/4 にぶい黄	1.19	0.28	0.05	7	++	
	遺構外		1	32	SiCL	2.5Y5/4 黄褐	1.18	0.42	0.07	6	+++	
	遺構内 (材木層相当)		6	37	SiCL	2.5Y5/4 黄褐	1.16	0.37	0.06	6	++	
		北面										
		基本土層										
SD2-6 (122調査 SD2074の 延長部分)												
	SD2-6東側											
基本土層												

*土性：土壌調査ハンドブック【プロジスト懇談会編 1984】の野外土性による。

SiL：シルト質壤土（粘土0～15%、シルト45～100%、砂0～55%）

SiC：シルト質粘土（粘土25～45%、シルト45～75%、砂0～30%）

SiCL：シルト質粘壤土（粘土15～25%、シルト45～85%、砂0～40%）

LiC：軽粘土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

HC：重粘土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

*土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色粘【農林省農林水産部会議録 1967】による。

*Mn反：テトラバース試験を用いて、土壌調査ハンドブックに準じて評価した。

第20表 土壌化学分析結果

が認められる。このうち検体7と9はMn反応が強い。密度は1.08～1.26Mg/m³である。全炭素は0.36～0.82%であり、全窒素は0.05～0.10%であり、C/N比は7から9である。

(5) 基本土層

野外土性は、全試料でSiCLであり、土色は、検体28が2.5Y4/3 オリーブ褐、検体29が10YR3/2 黒褐、検体30が2.5Y6/3 にぶい黄である。密度は、検体28が1.22Mg/m³、検体29が1.28Mg/m³、

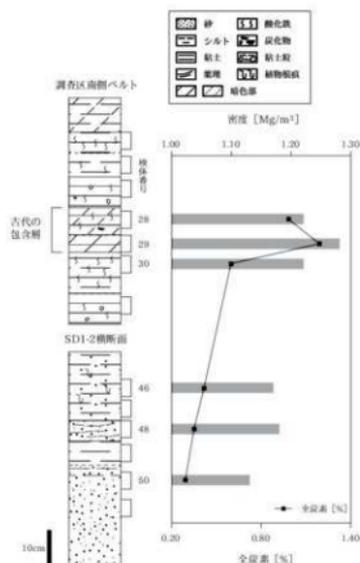
検体 30 で 1.22Mg/m^3 である。全炭素は検体 28 が 0.98% 、検体 29 が 1.19% 、検体 30 が 0.60% である。全窒素は全試料で 0.08% であり、C/N 比は検体 28 が 13、検体 29 が 14、検体 30 が 7 である。

4) 考 察

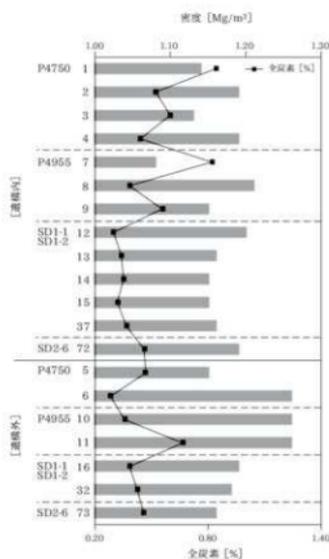
基本土層についてみると、古代の包含層に相当する検体 28、29 では、炭素量が多く、C/N 比や密度も高い。同じ基本土層として採取した検体 30、46、48、50 は、堆積層の低位ほど炭素量が減少する。また、密度においては他の遺構より採取した試料と概ね同様である (第 34 図)。

掘立柱建物の柱穴である P4750 と P4955 は、遺構内の柱痕埋土 (検体 1, 7) では、遺構外試料と比較して密度が低く、炭素量が多い (第 35 図)。このような特徴は、他の試料では認められないことから、柱痕埋土の特性を示している可能性がある。

一方の材木列所に伴う SD1, SD2 では、柱穴、掘形及び近接する遺構外試料との間では、各項目に大きな差がないことが特徴として挙げられる。密度は基本土層とほぼ同様の範囲内にあり、炭素・窒素量も総じて低いという値を示した。なお、SD2-6 トレンチ西面では、SD2 横断面 (遺構外と思われる堆積層を含む) より、上段 (検出面より 10cm) と下段 (検出面より 20cm) として、水平及び垂直方向の変化を検討した。その結果、第 36 図に示したように、上段・下段ともに密度や炭素量に若干変化が認められるものの、上記した柱痕埋土の検体 1, 7 のように、密度と炭素の変化が伴う状況は認められず、下段試料においては炭素量は低い値で推移するという状況を示す。なお、上段では、検体 52 ~ 55 において C/N 比が 8 ~ 9 であり、検体 53 では炭素量が 0.60% 存在するなど、本地点の検体中に限ってはやや異なる状況も



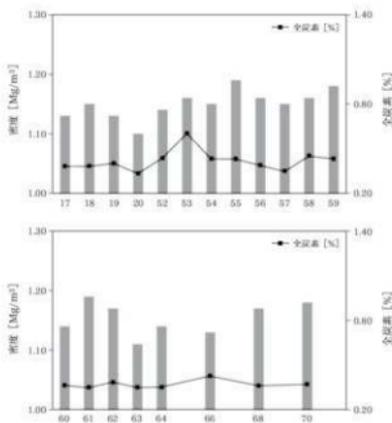
第 34 図 基本土層における土壌密度と全炭素量



第 35 図 柱穴及び柱痕埋土における土壌密度と全炭素量

かがえる。ただし、密度に有意な変化が認められないため、柱穴試料とは異なる特徴として捉えられる。

以上の基本土層における密度と全炭素量の推移を指標として、遺構土層とその周囲の堆積層とを比較した結果、P4750やP4955では柱痕土層において密度と炭素量の変化が捉えられ、とくにP4955ではその傾向が顕著に認められた。一方のSD1, SD2では、基本土層に対して密度が低い検体も散見されるものの、一定の範囲で推移するという特徴が認められた。また炭素量においては、SD2-6の下段試料は低率で推移し、上段ではやや高い値を示すものが含まれるものの、その変化に乏しいことが明らかとなった。



第36図 SD2-6 トレンチ西面における土壌密度と全炭素量

引用文献

- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法, 博友社, 427p.
 土壌物理性測定法委員会編, 1982, 土壌物理性測定法, 養賢堂, 505p.
 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京大木質科学研究所.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京大木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京大木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京大木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京大木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京大木質科学研究所, 47-216.
 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
 ベドロジスト懇談会, 1984, 野外土性の判定, ベドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック, 博友社, 39-40.
 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

第七章 ま と め

1 中世の様相

山口遺跡は2008・2010・2013年度の計3か年の本発掘調査を実施し、各年度のいずれの調査区でも中世の遺構・遺物を検出した。前述のとおり、遺跡は耕地整理により削平されている部分も多いが、中世における集落の東西方向の様相がほぼ把握できたことから、合わせてまとめとする。出土遺物の時期幅は13世紀～15世紀までであるが、中心の時期となるのが13世紀後半～14世紀前半なので、集落（検出遺構）の中心時期もその頃と考えたい。

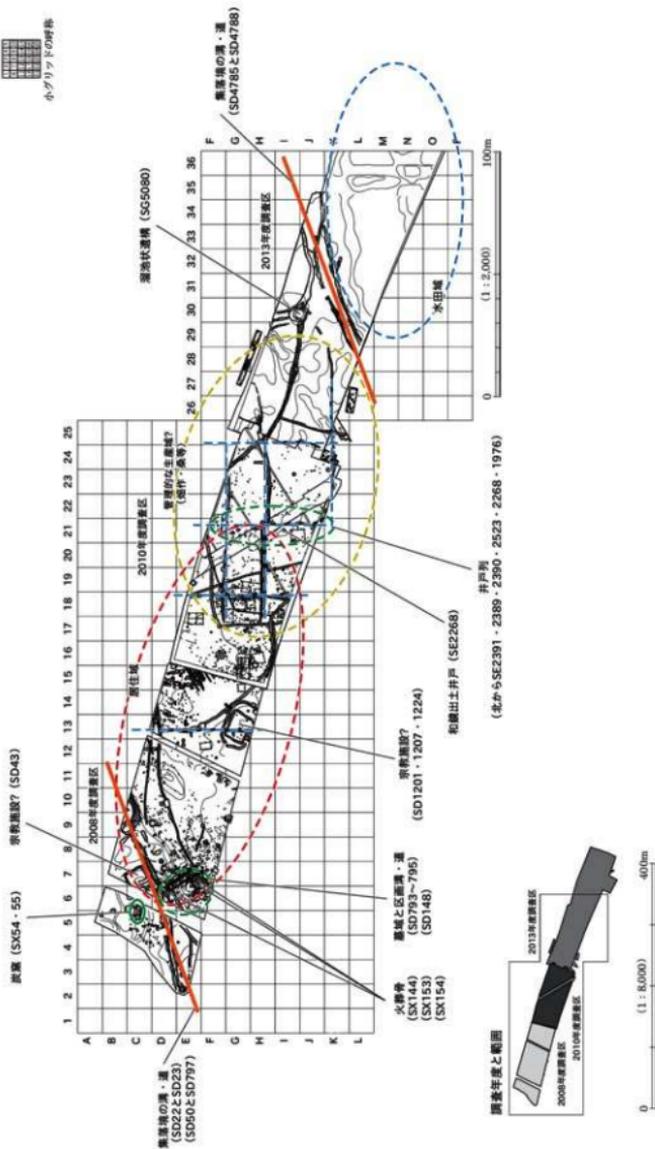
検出した中世遺構の位置関係から、集落の構造を第37図のように考えた。東西ともに比較的規模が大きめで、2条程の溝が平行して存在する。また東西の溝群はほぼ平行しており、自然堤防の軸方向とほぼ一致しているものと思われる。この東西の溝群に挟まれた空間と外側では遺構密度に差があることから、溝は集落の境としての機能と、道としての機能が想定できる。東側は比較的低地に向かう範囲で、溝群（SD4785とSD4788）を境に水田域が広がっていたものと考え、41・42Q区のSD4126・SD4127のほかは畦畔等の遺構を検出できなかった。ただし堆積する層の境が乱れていることから、水田耕作していた可能性は高いと思われる。西側の溝群（SD22とSD23、SD50とSD797）以西は、古代までは流路に面していた範囲で、西側に向かって傾斜している。居住域外に位置し、そのような緩斜面を利用して炭窯が構築されたものとする。この溝群と関係して、ほぼ垂直方向に接する溝群（SD148・SD793～795）がある。この溝群の南側の6D～F区では、火葬骨が混じる土坑が3基検出されている。ここを墓域と仮定すれば、溝群はその区画溝であった可能性がある。集落境の溝群と墓域を区画する溝群が接する付近の7C区に、方形に巡るSD43が存在する。この方形に巡る溝は、規模こそ違うが、近隣の境塚遺跡〔飯坂^{ほか}2018〕では宗教施設の可能性が指摘され、また「辻」付近に設けられる場合があるとのことなので、当遺跡の状況とも矛盾しない。7～9、D～F区にはピットや井戸もあることから、居住域の中心の一つでもあったが、上記のような墓域として利用された時期もあったものとする。

掘立柱建物の柱穴（ピット）や井戸が多い範囲、6～21区の約150mの範囲を居住域と考えた。特に15～19区の範囲で、梁間1間型の掘立柱建物が多く復元できた。建物本体の範囲や軒先の空間を考慮すると、最低2～3時期の遺構が重複していることが想定できる。建物の軸方向と走向が同じ溝が近接することから、区画溝も存在したものと思われる。居住域内には、15E区に畑作と考えられる小溝群が、またほぼ中央に宗教施設の可能性がある方形に巡る溝（SD1201・1207・1224）が存在する。また、居住域の東端の21・22区には、南北方向に井戸（SE1976・2268・2389・2390・2391・2523）が点在して存在する。後述する生産域に対する水の供給源とも考えられるが、場を区切る境のような役割を果たしていた可能性もある。この井戸列の内の1基、SE2268から和鏡が出土している。この井戸に近接する建物では南側にSB13があるが、柱穴は小規模で、宗教的な施設の可能性は低い。よって和鏡は、井戸祭祀または境の祭祀で意図的に埋められたものと思われる。

最後に居住域と一部重複するが、居住域の東側に存在する規則的な溝群について考えてみたい。溝の走向はほぼ方位に沿っており、地形の傾斜とは一致していない。明治の更正図と照合すると、一致しない



小グリッドの呼称



第 37 図 山口遺跡の中世集落構造

部分も多いが、同様に方位に沿った区画も認められるので、近世以降もある程度継続していた区画の可能性はある。南北方向の溝は約30m間隔で、19・22・25ライン付近に存在し、西へ約60m離れた13ライン付近にも存在する。東西方向の溝は、G・Kラインの約40mの間を約15mと25mに分割する。特に中央部は掘り直しのためSD2066・2067・2210の3条の溝が重複している。ほかの部分の溝では掘り直しの形跡が認められないことから、この東西方向の溝は主軸であったものと思われる。この規則的に構築された溝群は建物範囲と重複する部分も多く、居住域の区画溝であった可能性は低い。当範囲で水田的な痕跡は認められず、水田域よりも地形が低くないことから、集村化するなかで共同管理された生産(畑作等)の場であったと想定する。

2 古代の様相

A 唐三彩について

第Ⅴ章2Bで記述したとおり、山口遺跡からは唐三彩が2点出土した。第21表は2010年度に図録[愛知県陶磁資料館・五島美術館1998]及び[朝日新聞社・大広編2004]に掲載された表を基に、調査担当が追加集計した。山口遺跡を除く唐時代と考えられる彩釉陶器が出土した遺跡で、種別・数量が不明なものもあるが、全国で70遺跡から出土している¹⁾。その後も出土はしていると思われるが、出土傾向

番号	所在地	遺跡名	遺跡種類	種別	産地	数量
1	山形県	城輪輪跡	官衙跡	二彩陶枕片	中国・唐	1
2	群馬県	鏡ヶ谷戸遺跡	寺院跡	三彩陶枕	中国・唐	1
3	群馬県	多田山12号	古墳	三彩陶枕	中国・唐	1
4	埼玉県	熊野遺跡(5次)	集落跡	三彩陶枕	中国・唐	1
5	千葉県	向台遺跡	集落跡	三彩枕	中国・唐	1
6	千葉県	安房国分寺推定金堂跡	寺院跡	三彩象脚片	中国・唐	1
7	長野県	屋代遺跡群町浦遺跡	集落跡	三彩陶枕	中国・唐	1
8	長野県	前田遺跡	集落跡	三彩陶枕	中国・唐	1
9	静岡県	城山遺跡	集落	三彩陶枕	中国・唐	13
10	静岡県	上ノ段遺跡	集落跡	三彩陶枕	中国・唐	1
11	静岡県	日吉庵寺	寺院跡	三彩印花陶枕	中国・唐	1
12	神奈川県	諏訪前A遺跡	官衙跡	二彩小壺	中国・唐	1
13	三重県	観生庵寺跡	寺院	三彩壺(塔心礎納置品一括の内)	中国・唐	1
14	京都府	北白川庵寺跡	寺院跡	三彩壺	中国・唐	2
15	京都府	平安京右京一条三坊十三町	都城跡	三彩陶枕	中国・唐	
16	京都府	平安京右京一条四坊四町	都城跡	三彩陶枕	中国・唐	
17	京都府	平安京右京二条三坊二町	都城跡	黄釉絞胎陶枕 三彩壺	中国・唐	1 1
18	京都府	平安京右京三条一坊二町	都城跡	三彩陶片	中国・唐	
19	京都府	平安京右京三条三坊五町	都城跡	黒釉壺片	中国・唐	
20	京都府	平安京右京西条二坊六町	都城跡	三彩陶片 三彩壺?	中国・唐	1
21	京都府	平安京右京七条一坊二町・三町	都城跡	三彩枕・壺	中国・唐	2
22	京都府	平安京左京西条四坊五町	都城跡	緑釉絞胎陶枕	中国・唐	
23	京都府	平安京左京七条三坊七町	都城跡	三彩	中国・唐	
24	京都府	平安京左京七条三坊十五町	都城跡	褐釉絞胎壺	中国・唐	1
25	京都府	平安京左京八条三坊二町	寺院跡	三彩壺	中国・唐	1
26	京都府	平安京左京八条三坊七町	都城跡	黄釉絞胎陶枕片	中国・唐	1
27	京都府	平安京左京八条二坊十町	都城跡	褐釉絞胎壺	中国・唐	1
28	京都府	平安京左京九条三坊十六町	都城跡	三彩陶枕	中国・唐	2

第21表 彩釉陶器出土遺跡一覧(1)

1) 亀井[2003]に記載されている遺跡は第21表の番号にアミ掛けした。また種別表現・数量等も異なるので参照願いたい。

2 古代の様相

番号	所在地	遺跡名	遺跡種類	種別	産地	数量
29	京都府	大覚寺	寺院跡	三彩陶	中国・唐	
30	京都府	平安京内典跡	都城跡	緑釉印花棧花皿	中国・唐	1
31	京都府	平安京右京三条三坊十町	都城跡	黄釉陶	中国・唐	
32	京都府	平安京右京五条一坊皇嘉門大路東側溝	都城跡	緑釉印刷紋壺	中国・唐	
33	京都府	平安京左京西条三坊十三町	都城跡	緑釉絞胎陶枕	中国・唐	
34	京都府	小倉町別当町遺跡		三彩双鱼文曲杯	中国・唐	
35	大阪府	若江庚寺遺跡	寺院跡	絞胎陶	中国・唐	1
				三彩壺		1
36	大阪府	鳥飯座寺	寺院跡	二彩埴形火舎	中国・唐	1
				三彩陶枕		1
37	奈良県	大安寺跡	寺院跡	黄釉絞胎陶枕	中国・唐	3
				三彩陶枕		14
38	奈良県	平城宮跡仮祀池宮推定地	都城跡	三彩陶枕	中国・唐	1
39	奈良県	平城京右京五条一坊十五坪	都城跡	三彩押型文杯(2)外型作り三彩碗	中国・唐	1
40	奈良県	平城京右京二条三坊四坪	都城跡	絞胎陶枕、黄緑二彩絞胎陶枕	中国・唐	1
41	奈良県	平城京左京三条二坊八坪	都城跡	三彩碗片、三彩合子蓋	中国・唐	1
42	奈良県	平城京左京七条二坊六坪	都城跡	三彩印花押型文杯、外型作り三彩印花杯	中国・唐	1
43	奈良県	平城京左京二条二坊五坪	都城跡	三彩壺蓋	中国・唐	1
				黄釉絞胎陶枕		1
44	奈良県	平城京左京二条二坊十二坪	都城跡	三彩陶枕、三彩四弁花紋印花陶枕片	中国・唐	1
45	奈良県	平城京左京区五条二坊	都城跡		中国・唐	
46	奈良県	平城京	都城跡		中国・唐	
47	奈良県	藤原京右京五条四坊下ツ道東側溝	都城跡	(二彩)満足円面観	中国・唐	1
48	奈良県	藤原京右京二条三坊東南坪	都城跡	三彩碗片	中国・唐	1
49	奈良県	安倍寺跡	寺院跡	三彩三足壺狀脚	中国・唐	1
50	奈良県	御坊山3号墳	墳墓	三彩蓋付満足円面観	中国・唐	1
51	奈良県	法隆寺旧境内	寺院跡	三彩盤	中国・唐	1
52	奈良県	坂田寺跡	寺院跡	三彩輪花杯	中国・唐	1
				三彩陶枕		1
				三彩瓶脚		1
				三彩大盤	瀬海	1
				三彩(2)		1
53	兵庫県	英賀保駅周辺遺跡	官衙関連	弁口瓶	中国・唐	1
54	兵庫県	淡路国分寺跡	寺院跡		中国・唐	3
55	兵庫県	芦屋庚寺第62地点	寺院跡		中国・唐	1
56	鳥根県	福富1遺跡	集落跡	三彩壺か	中国・唐	1
57	広島県	備後寺町庚寺跡	寺院跡	三彩長頸瓶(2)	中国・唐	1
58	広島県	金龜寺東遺跡	官衙関連	三彩陶枕片	中国・唐	1
59	広島県	吉備津神社裏山遺跡		三彩陶枕	中国・唐	1
60	福岡県	瑞穂遺跡		緑釉印文把手	中国・唐	1
61	福岡県	鴻臚館跡	官衙跡	三彩		1
				三彩陶枕片		1
				白釉緑彩貼付文片	中国・唐	1
				白釉緑彩片		1
				白釉緑彩鉢片		1
				緑釉壺片		1
				緑釉龍鬚型碗片		1
62	福岡県	柏原M遺跡	官衙関連	三彩印文盤(11)	中国・唐	1
63	福岡県	千部川遺跡		三彩陶片	中国・唐	1
64	福岡県	大宰府跡	寺院跡	三彩貼付文壺	中国・唐	3
				三彩壺		1
			官衙跡	三彩陶枕		1
65	福岡県	大宰府跡・市ノ上遺跡	官衙跡	黄釉絞胎陶枕	中国・唐	1
66	福岡県	沖ノ島5号遺跡	祭祀跡	三彩長頸瓶(口縁5.他14)	中国・唐	1
67	福岡県	東入部遺跡群(10次)	集落跡	三彩壺蓋	中国・唐	1
68	福岡県	谷遺跡	集落跡	三彩陶枕	中国・唐	1
69	熊本県	二本木遺跡群	官衙	陶枕	中国・唐	1
70	長崎県	双六古墳	古墳	二彩碗	中国・唐	1
71	福岡県	多々良込田遺跡		三彩水注	中国・唐	1

第21表 彩釉陶器出土遺跡一覧(2)

は大きく異ならないものと思われる。京都府・奈良県等の関西地方が中心で、東日本からの出土は極めて少なく、山形県城輪柵跡出土例が北限となる。遺跡の種類を見ると、都城・寺院・官衙関連が大半であるが、山口遺跡のような集落跡からの出土も少なからずある。唐三彩は主に貴族の葬礼及び副葬品として使われるものであるが、墳墓随葬品だけではなく、実用器としても使用される。人物形象俑、動物形象俑、生活用具などの器物に大別される。国内出土の種別では、小型品の枕(陶枕)が最も多く、次に壺・碗・皿等の生活用具が大半を占める。前述(本書79・80頁)のとおり、山口遺跡の209は弦楽器(七弦琴)を模した玩具または加彩彈琴女子俑の一部と考えられ、玩具であれば国内初例となる。210の小型品も単品である可能性は低く、両者ともに類例が乏しい希少品といえる。210は不明な点も多いことから、209の琴が俑の一部である可能性について触れてみたい。

国内出土の三彩陶俑は、藤原京右京二条三坊東南坪の一例(第21表No.48)のみで、女性俑の衣服の一部と推定されている。209が俑の一部とすれば国内2例目となる。亀井氏のコメントによるとその可能性を示す部分が裏面の長1.0cm、幅1.8cm程の剥落痕で、座位の人物が、琴を膝の上に乗せた部分であることが想定されている。加彩彈琴女子俑の類例としては、洛陽元部墓(北魏)、河北邵晏墓(東魏)、洛陽市孟津西山頭唐墓(唐)、西安市取集品などがあり、琴を両膝の上に乗せた姿が共通する。手が琴に接していない例が多いのは、弾く際には弦に触れる方が多いためと推定され、非常に写実的である。ただしこれらの例の中に、山口遺跡のように彩釉を丁寧に塗り分けた三彩品は認められない。また俑に限らず、藍釉が使用された製品は非常に少ないことも考慮する必要がある。よって俑の一部である可能性はあるが、現段階では確定することはできない。

最後に日本から出土する唐三彩の入手については、生田[2004]が先行研究を簡潔にまとめている。そのうち、亀井氏の研究[亀井2003]を今回は参考にした。唐三彩は遣唐使に關係する人物によってもたらされた可能性が高いが、交流回数割に全国的な出土点数は少ない。この要因として、「これらが交易のルートに乗って、恒常的・継続的・組織的な構造で、わが国にもたらされたものでないことを示している」[亀井2003]としている。また官衙関連遺跡から出土した事例から、「官的な保有品とは到底認定できず、周辺集落住民の私物と考えられる」[亀井2003]とも推論している。よって公的よりも土産物のような私的な購入品の可能性が高い。遣唐使は総員数百名規模であるが、その半数以上は船舶の運航・修理関係者及び下級官人とされる。正・副使等以外の大多数の人々は滞在(揚州・楚州・蘇州など)に留まっていた場合もあるようで、帰国時に市で雑物を購入する記録が残っているとのことである¹⁾。山口遺跡の唐三彩を購入した人物が、遣唐使内でのどのような立場であったのかは不明だが、類例の少ない玩具または俑であること、釉の色彩や作りから優品であることを考慮すると、下級官人以上であった可能性が高いと考えられる。

B 材木列塀の調査について

材木列塀(SA2704)は2010年度調査時に24～25H～J区で検出された。第Ⅳ章3Cで述べたとおり、幅約15cmの布掘りの溝に直径15～20cmの材木を打ち並べて塀としたものである。長さ約30mにわたり弧状に延び、2か所で途切れる。南側と北側の途切れたか所の長さは3.58mである。材木ビットは合計174基が検出され、最大深度は約40cmとなる。2010年度調査区東側壁面でP175が検出された

1) 筑氏からも、唐代には唐三彩が中国長安城外でも売られていたと御教示いただいた。

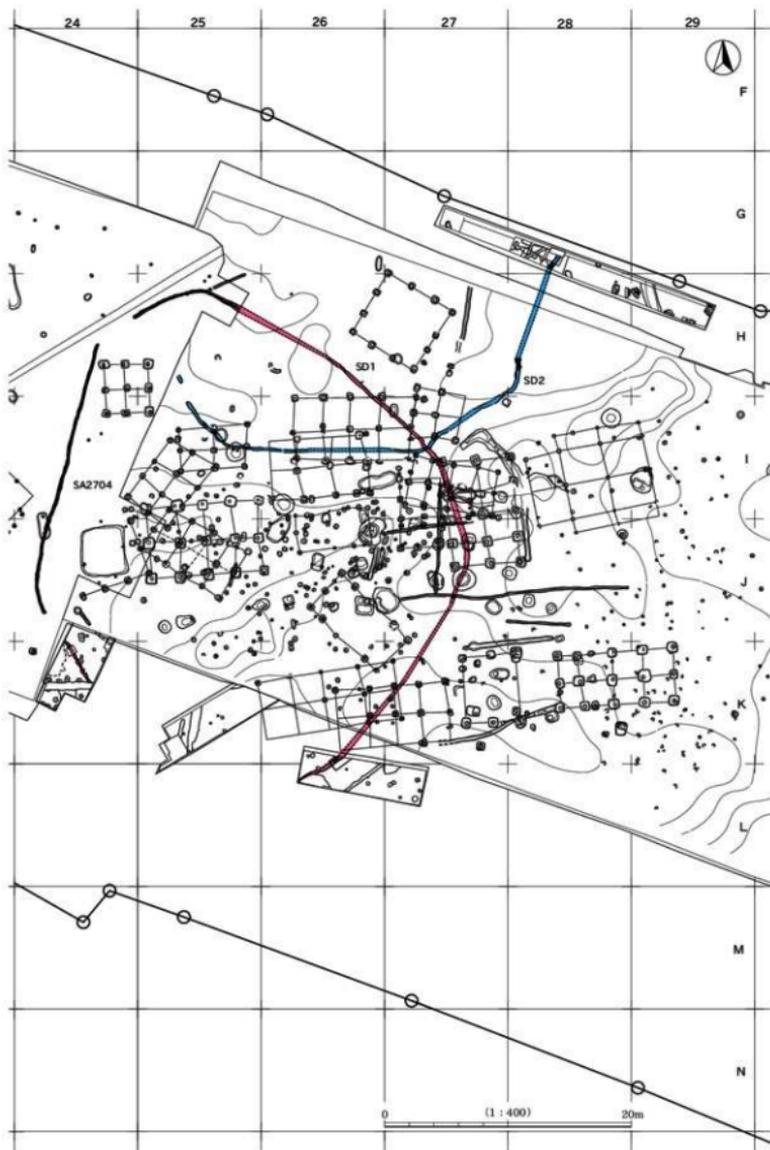
ことから、さらに東側に屈曲して延びることが想定された。古代の遺構は地山VI層上面が検出面であるが、色調・土質ともに複雑に混じっており、材木列層に限らず遺構埋土の識別は困難なものが多かった。そのため、遺構検出を繰り返して徐々に地山を下げるか、もしくは全体的に10～15cm掘り下げた段階で初めて認識できた遺構も存在する。材木列層も10cm程掘り下げた段階で検出できたもので、本来はもう少し深かったものと思われる。時間的には古代の土坑SK3083を切り、また数か所で出土した遺物の所属時期から、古代に構築されたものとする。

材木列は古代東北の城柵や官衙関連遺跡で検出されることが多い遺構で、県内では初例となる。遺跡の重要性を考慮し、内容や性格を把握するために、材木列層の延長方向の東側調査区に対して確認調査を2011・2012年度に実施した。確認調査は、「山口遺跡調査指導委員会」(第1章2C参照、以下「指導委員会」)を設置して、内容を検討しながら調査が進められた。2か年の確認調査で検出された遺構は第38図のとおりで、材木列層の可能性のある溝を2条検出した。SA2704から続く溝はSD1、新規に検出された溝はSD2(23SA52)と仮称され、271区の両溝の重複状況から、SD2<SD1の新旧関係が示された。またこの2条の溝は、他のどの検出遺構にも切られる重複状況で、古代よりも古い時期の可能性も示唆された。平面状況の確認後には、複数地点でトレンチ調査を実施し、断面状況の把握を試みた。確認調査の状況については、調査担当以外の複数の調査員で実見したが、平面形状・断面形状ともに非常に識別が困難であり、共通認識を得るまでには至らなかった。よって、本発掘調査で面的に全体を調査することで溝の存否、他の古代遺構群との関係について検討することにした。

2013年度調査では識別困難な溝に対して、下記のような方法で平面的・断面的な検出を試みた。確認調査で溝の大まかな方向・位置が推定されていたことから、まず表土掘削直後の新鮮な面で遺構精査を実施した。色調・土質・混入物(炭粒の有無、マンガンの量等)に留意して、特に25～27区にかけては何度も精査を実施したが、検出することはできなかった。調査期間中には、気象(晴れ・曇り・小雨)、時間(始業直後、日中、夕方)、検出道具(鋤、両刃鎌、鎌)等の条件を変えたり、局部的にシートをかけずに乾燥させる等で土質を変えての検出も試みたが、他の古代遺構と同一面で識別することはできなかった。指導委員会に調査状況を説明し、溝が推定される位置に対し、地山の土質が変わるまで何か所か面的に掘り下げて検出することを最終方針とした。遺構検出面から20～30cm下には砂質シルトを含む層があり、2010年度調査区で検出した材木列層の深度とほぼ同じと仮定すれば、その層まで木材が到達していることが予想された。掘り下げは深度5cm毎に精査を繰り返したが、結果的にどの地点でも平面で検出することはできなかった。また新規にトレンチを設定し、断面精査も実施したが検出できなかった。

自然科学分析(土壌理化学分析)による検出も検討した(第VI章2Cを参照)。検討の結果、遺構埋土と地山土壌の密度測定及び全炭素含有量・全窒素含有量を比較することにした。溝の埋土(断面)の分析採取地点は、確認調査で設定されたトレンチを使用した。また、木材が隣接して構築されているとの前提のもと、意図的な分析位置にならないように、連続採取した上でランダムに分析した部分もある。比較として掘立柱建物の柱穴の分析も行った。掘立柱建物の柱穴は、掘形埋土と地山間で密度・炭素量ともに特に差異は認められなかった。この傾向は、材木列層の掘形埋土部分を分析した場合も同様と思われる。ただし柱穴のうち、木材(柱)が存在した柱頭部分は、密度が低くかつ炭素量が多いという数値的な変化が認められた。一方、材木列層とされたSD1・2の推定埋土では、明確な数値の変化は認められなかった。分析した範囲の柱・杭がすべて抜き取られていたのであれば別だが、そのような痕跡は認められていない。

遺跡全体の出土遺物の時期幅から、掘立柱建物と材木列層の構築時期は大きく異なるものではなく、堆



第 39 図 古代の遺構と材木列陣（推定）の位置関係

積及び腐食過程はほぼ同一と想定できる。平面・断面の精査、自然科学分析の結果では、2013年度調査区内において材木列層の痕跡を認めることができず、存在した可能性は極めて低いと判断した。

第39図は材木列層の推定溝と検出遺構を重ねた図だが、溝の走向は掘立柱建物の軸方向と合わず、また特定の遺構を囲む状況にはないことが読み取れる。このような状況から、材木列層は2010年度調査区内のみに存在し、掘立柱建物群の中心に対して西側に構築されたものと思われる。西側のみであった場合、その機能としては第一に季節風（西風）に対する防風が考えられる。また古代の頃は西側に地形が下っており、その先に河川が存在した可能性がある。内水面交通の玄関口が西側とすれば、遺跡中心部の目隠し堀としての機能も考えることができる。2013年度調査区内では材木列層を検出できなかったが、推定方向の24～26K・L区は未調査区のため、溝の存否や全体構造については再検証することができ、今後の機会に判断が可能である。

C 掘立柱建物群を中心とした古代の様相

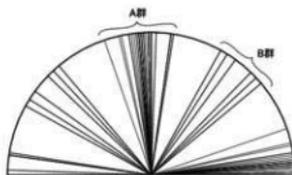
古代の遺物は当該期の遺構が多く検出された範囲を中心に、調査区全体から出土した。出土遺物の年代は、9世紀第2四半期が中心であり、古代Ⅴ期〔春日1999〕に相当する。須恵器の胎土は阿賀北産のA群と佐渡小泊産のB群がほぼ同量認められ、他の窯跡産は少ない。貯蔵具類の内、甕類は流通の関係か近隣のA群が多く認められる。第Ⅴ章でも述べたとおり、阿賀北産須恵器の詳細な産地は不明だが、時期や距離的に五頭山麓窯跡群の痕沢2号窯跡と道婦窯跡が考えられる〔春日編2004〕。特徴的な折縁杯や底面糸切りの無台杯が一定量出土しており、当遺跡が存在する沼重郡と阿賀野川対岸の蒲原郡の遺跡との器種構成比を比較する上で参考となる。遺物包含層は後世の耕地整理等の影響を受けているので、出土分布がそのまま遺跡の状況を示すわけではないが、調査区西側と南東側は遺構・遺物が希薄な低地であったことが想定される。ここでは地形的に高所で遺跡の中心と考える、掘立柱建物を多く検出した20～31区の状態（図版84・第81図参照）を中心にまとめてみたい。

古代の掘立柱建物としては、2010年度調査区で8棟（SB16～23）、2013年度調査区で24棟（13SB1～24）の計32棟を認定した。柱掘形の平面形状や規模、柱間寸法や柱筋などに多様性がある。前述したとおり、耕地整理等で中世・古代の遺物包含層は既に削平されている範囲が多く、両時期の遺構を同一面（基本層序Ⅵ層上面）で検出する状況であった。主に遺物の出土状況・分布状況等から古代の掘立柱建物と考えたが、柱掘形が円形・楕円形状を呈する建物は、中世に所属する可能性を残す。建物の長軸方向は東西棟が多く、短軸も含めた軸方向を比較するとほぼ方位に沿う建物A群と、50°前後東偏する建物B群に大きく分けることができる（第40図）。第41図は建物の軸方向と相互の位置関係や重複関係を考慮したもので、建物A群を1～3期に、建物B群を4期の計4つのまとまりに分類した。建物A群は東西方向におおむね3～4列の直線的な配置が認められる。柱穴（ピット）の重複関係から、おおむ

軸方向	総柱建物 (21棟)			側柱建物 (9棟)	
	方形	円・楕円形	円・楕円形	方形	円・楕円形
A群	SB16	13SB14	SB22	13SB22	SB20
	SB18	13SB15	13SB4	13SB24	SB21
	13SB1	13SB17	13SB12		13SB5
	13SB2	13SB13	13SB16		13SB11
	13SB3	13SB20			13SB23
	13SB10	13SB21			
	13SB12				
	SB17	13SB8		13SB6	
	SB19	13SB9		13SB18	
	B群				

※下線は建物面積40㎡以上。

第22表 掘立柱建物の形態と掘形形状



第40図 掘立柱建物の軸方向（長軸・短軸）



第41図 藤立社遺跡の発掘

ね数字順の変遷と考えるが、3期とした建物は柱穴の重複関係がないため不明である。ただし他の建物と比べて軸方向がやや東偏しているので、4期につながる過渡期的な様相を示す。そのほかにも1期には、時期の異なる可能性がある柱掘形が円形・楕円形状の建物を含むので注意が必要である。そして2期の内、20～22G～I区の建物群とそれ以外の建物群は離れているため、前者は1期と併存が可能であるなど検討の余地を多く残す。竪穴建物がどの段階で構築されていたのかも検討課題である。2期における20～22G～I区の建物群に近接するSI2368では須恵器胎土B群が主体で、その他の建物群に近接するSI3048は胎土A群が主体であるなどの違いが認められる。前者のエリア内にあるSK2530とSK2600から出土した須恵器も同様に胎土B群が主体なので、居住区域による集団差も考慮する必要がある。カマド状遺構としたSX4999は、距離的な面からも建物が多い2期に構築されたものと考えたい。

掘立柱建物の構造は、側柱のみの建物と、側柱と対応した位置に中柱をもつ総柱建物に分けることができ、分類可能な30棟の内訳は、総柱建物が21棟(70%)、側柱建物が9棟(30%)と総柱建物が多く、総柱建物は桁行4間×梁間2間のものが最も多い。古代の掘形は検出困難なものも多く、また他時期の遺構の重複で不明な部分が多い。13SB3は現状で桁行2間×梁間2間としたが、東側に位置するP4862も同規模の掘形であり、同一の建物の可能性がある。その場合、13SB3も桁行4間×梁間2間の建物となる。方形掘形の総柱建物のうち、建物面積が40m²を超えるものは5棟(13SB2・13SB10・13SB13・13SB19・13SB20)あり、柱径(柱底径)は30cm前後の太い材が使用されたことがうかがえる。総柱建物という構造的にも荷重に耐える設計であることから、居住目的以外にも倉庫的な施設としての利用も考えられる。

最後に2008年度調査成果も含めて、遺跡の性格について考えてみたい。遺物の面では、県内初例となる唐三彩2点が際立ち、遣唐使節に参加できる人物が関わっていたことが想定される。他に官人の関与を示す遺物としては、腰帯の黒色粘板岩製の石鈿(巡方)1点、墨書土器(「廣者」)1点、施軸陶器(灰軸)1点、円面硯2点、転用硯(報告個体5点)、刀子などがあるが、相対的に少なく、木簡も出土していない。石鈿と墨書土器は2008年度調査出土遺物で、前者は8C9区、後者は11F5区から出土した。今回報告した古代の建物群の中心からは西へ大きく離れている。建物群の西側は旧小里川へ下る斜面部が広がっていたと予想されることから、内水面交通の玄関口的な重要な場であった可能性もある。一方、円面硯は31I24区(SK4267)と34L18区から出土し、建物群の中心からは東側へ離れる。転用硯の分布も13SB18の位置する26J20区を西限に、それより東側寄りに散在する。このことから政務の場があったとすれば、13SB21や13SB22が位置する30・31I区の北東側の調査区外に展開する可能性を残す。規則的な建物配置が認められ、唐三彩や石鈿などの存在から官人が関わった遺跡である可能性は高いが、官衙関連遺跡と断定できるような政務の場であった可能性は低い。しかし一般的な集落の居住域と仮定した場合でも、規則的な建物配置や短期間での複数棟の建て替えが認められる等の問題が残る。次に主体となる総柱建物群を倉庫と仮定した場合、荷重の面から総柱建物は「食糧に充てる穀(こく)、中束柱がない建物は「翌年の種籾としての額籾(えいとう)」を積み上げる可能性があることを指導委員会から御教示いただいた。額籾とは稲穂が付いた状態の籾で、種籾としての保存に適するとされる。そのため、農民に種籾を貸し出す目的で行われていた出挙は額籾で貸付・返済が行われたとされている。遺構の検出状況や遺物から想定される官人の関与を考慮すると、倉庫群であった可能性は高く、領主またはそれに類する在地の有力者が関わった遺跡と思われる。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
- 愛知県陶磁資料館・五島美術館編 1998 『日本の三彩と緑釉 一天平に咲いた華』 愛知県
- 相田泰臣 2004 『第Ⅱ章 沼倉部(54) 上土地亀遺跡』『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 青木 豊 1997 『所謂擬漢式鏡に関する考察』『國學院大學 考古学資料館紀要』第13輯 國學院大學考古学資料館
- 朝岡政康 2012 『山口遺跡』『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成23年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 朝日新聞社・大広編 2004 『唐三彩展 洛陽の夢』
- 安達尊伸 2017 『第Ⅶ章 第1節 B カマド状遺構について』『細池寺道上遺跡Ⅵ 第44次調査』 新潟市教育委員会
- 荒川隆史 2004 『第Ⅳ章 遺構』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{20a} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2007 『阿賀北・大坪遺跡—中世初頭の居館跡—』『御館の時代—十二世紀の越後・公津・奥羽—』 高志書院
- 荒川隆史 2011 『山口遺跡Ⅱ』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成22年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{20a} 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第232集 地塚遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2016 『第Ⅱ章2 歴史的環境』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第262集 地塚遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{20a} 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第262集 地塚遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒木繁雄 1970 『別冊1、水原郷の地形・地質について』『新潟県文化財調査年報第十 水原郷』 新潟県教育委員会
- 荒谷伸郎^{20a} 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第215集 山口遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰^{20a} 2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第278集 地塚遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 家田順一郎^{20a} 1981 『豊浦町文化財報告三 曾根遺跡Ⅰ』 新潟県豊浦町教育委員会
- 家田順一郎^{20a} 1982 『豊浦町文化財報告四 曾根遺跡Ⅱ』 新潟県豊浦町教育委員会
- 石田和宏 2004 『日本出土の唐三彩』『唐三彩展 洛陽の夢』朝日新聞社・大広編
- 生垣義則 2010 『第Ⅱ章1 遺跡の位置と地理的環境』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第215集 山口遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志^{20a} 1981 『安田町文化財調査報告(5) 横峯A遺跡 横峯B遺跡』 新潟県安田町教育委員会
- 石川日出志^{20a} 1992 『新潟県安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡』 新潟県安田町教育委員会
- 石橋夏樹 2018 『第Ⅳ章3A 分類』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第277集 蕪木遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石橋夏樹 2018 『第Ⅱ章2 歴史的環境』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第277集 蕪木遺跡』 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 内川隆志編 2018 『中世和陶の基礎的研究 出土鏡編』 國學院大學博物館・國學院大學学術資料センター

- 遠藤恭彦・澤野慶子^{as} 2016 『沖ノ羽遺跡Ⅵ 第19・22・24次調査』新潟市教育委員会
- 大矢雅彦・加藤泰彦 1984 『阿賀野川水害地形分類図 説明書』建設省北陸地方建設局阿賀野川工事事務所
- 小田由美子^{as} 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第99集 堀越館跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 1999 「第5章 第3節 五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号
- 春日真実 2004a 「第Ⅱ章1 荒川右岸」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実 2004b 「第Ⅱ章 沼垂郡(58)横峯B遺跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実 2004c 「第Ⅱ章 沼垂郡(34)五輪敷沢窯跡」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 春日真実編 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 加藤 学 1999 「第V章1 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 相泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{as} 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第223集 村前東A遺跡 村前東B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{as} 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第237集 柄日本遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 亀井明徳 2003 「日本出土唐代鉛軸の研究」『日本考古学』第16号 日本考古学協会
- 川上貞雄 1977 『水原町文化財調査報告6 水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』新潟県水原町教育委員会
- 川上貞雄 1979 『安田町文化財調査報告(4) 横峯経塚群』新潟県安田町教育委員会
- 川上貞雄 1989 『箕神村文化財調査報告7 小曾根遺跡発掘調査報告書』新潟県箕神村教育委員会
- 川上貞雄 1991 『箕神村文化財調査報告8 免久遺跡』新潟県箕神村教育委員会
- 川上貞雄 1997 『豊浦町文化財調査報告六 曾根遺跡Ⅲ』新潟県豊浦町教育委員会
- 川上貞雄 1999a 『箕神村文化財調査報告9 前田遺跡 壱本杉遺跡』新潟県箕神村教育委員会
- 川上貞雄 1999b 『豊浦町文化財調査報告七 志村山須志窯址』新潟県豊浦町教育委員会
- 川上貞雄 2002 『箕神村文化財調査報告13 腰廻遺跡』新潟県箕神村教育委員会
- 京ヶ瀬村 1969 『村誌』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 小池邦明^{as} 1993 『新潟市の場遺跡』新潟市教育委員会
- 国土交通省北陸地方整備局・国土地理院 2004 『古地理で探る越後の変遷—荒川・阿賀野川・関川・粟川—』
- 小林昌二 1999 「3章1節 国郡制の施行」『村上市史 通史編1 原始・古代・中世』新潟県村上市
- 小林 弘 2004 「第Ⅲ章 沼垂郡の土器様相 3 五頭山麓古窯跡群」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 小松 彰・山田孝雄 山田裕二 1995 『新潟県歴史の道調査報告書第8集 三国街道中通り』新潟県教育委員会
- 駒見和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 坂井秀弥^{as} 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道事務所
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衙遺跡—越後平野の内水面・舟運・漁業—」『越と古代の北陸—古代王権と交流3—』名著出版
- 坂井秀弥 1997 「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 坂井秀弥 2004 「総括」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 箕神村 2003 『箕神村史 資料編一 原始・古代・中世』新潟県箕神村
- 笹沢正史 2004 「第Ⅳ章 各論1 須志器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 佐藤友子^{as} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第203集 庚塚遺跡 狐塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子^{as} 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第216集 柄日本遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵

- 文化財調査事業団
- 鈴木俊成¹³⁾ 2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第277集 蕪木遺跡』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之¹⁴⁾ 1993 『上土地亀遺跡』新潟県豊栄市教育委員会
- 高橋保雄¹⁵⁾ 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集 鶴深甲遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中一穂 2005 「古代の沼垂郡に関する一試論」『環日本海歴史民俗学叢書12 古代の越後と佐渡』高志書院
- 中川成夫・倉田芳郎 1962 『豊浦村文化財報告一 新潟県北蒲原郡における二宮塚の調査』新潟県豊浦村教育委員会
- 中川成夫 1970 「笹神村権兵衛沢宮塚の調査」『新潟県文化財調査年報第十 水原郷』新潟県教育委員会
- 中川成夫¹⁶⁾ 1973 『笹神村文化財調査報告4 狼沢宮址群の調査』新潟県笹神村教育委員会
- 中野登任 1976 「白河荘について」『社会科学研究』第12集 新潟県高等学校教育研究会社会科学部会
- 中野登任 1988 「三五頭山信仰と中世鉱業」『忘れられた霊場—中世心性史の試み—』平凡社選書123
- 橋崎彰一 1998 「日本における磁胎陶器の成立と展開」『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』愛知県陶磁資料館・五島美術館
- 橋崎彰一 2000 「日本出土の唐三彩とその性格」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第8輯
- 樋口真巳 2004 「中世 第1章 白河荘の成立と城氏の展開」『中世 第2章 鎌倉期の白河荘』『笹神村史 通史編』新潟県笹神村
- 平川 南 2005 「古代越後国の磐船郡と沼垂郡」『環日本海歴史民俗学叢書12 古代の越後と佐渡』高志書院
- 藤沢良祐 2008 『中世瀬戸宮の研究』高志書院
- 古澤安史 2002 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 町道上遺跡』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤安史 2004 『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 村下遺跡』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤安史 2005 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 土居内西遺跡』阿賀野市教育委員会
- 古澤安史¹⁷⁾ 2011 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 地塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稲荷遺跡』阿賀野市教育委員会
- 古澤安史 2012 「阿賀野市内の古代遺跡」『平成24年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』新潟県教育委員会
- 古澤安史¹⁸⁾ 2014 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 下福岡遺跡』阿賀野市教育委員会
- 古澤安史 2014 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 柄目木遺跡』阿賀野市教育委員会
- 本間信昭¹⁹⁾ 1973 『下金田遺跡』新潟県水原町立水原博物館
- 水澤幸一 2002 「阿賀北の中世石佛」『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
- 宮本長二郎 2001 「中世集落遺跡建築遺構のまとめ方」『掘立と竪穴』高志書院
- 村上章久²⁰⁾ 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第248集 山口野中遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 村上章久²¹⁾ 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第258集 山口野中遺跡II』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第49集 大宰府市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉田東伍編 1902 『北蒲原郡』『増補 大日本地名辞書』第五巻 北国・東国 富山房
- 渡辺達郎²²⁾ 2002 『笹神村文化財調査報告14 腹廻西遺跡』新潟県笹神村教育委員会
- 渡辺文男²³⁾ 2004 『新潟県安田町文化財調査報告14 上野林J遺跡・上野林E遺跡』新潟県安田町教育委員会
- 渡邊裕之 2013 「山口遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成24年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺ますみ²⁴⁾ 1993 『緒立C遺跡』新潟県黒埼町教育委員会

1) 古代・中世の掘立柱建物の規模

遺構番号	形式	梁間幅(m)	梁行(m)	身舎梁行(m)	梁間柱間(m)	梁行庇(m)	桁行(m)	身舎桁行(m)	桁行柱間(m)	桁行庇(m)	主軸方向	身舎(m)	全体(m)	建造所属時期	
SB1	梁間一開型建物	1	3	3.98	3.65~4.02		9.50	3.09~3.30			N90°E	37.81		中世	
SB2	梁間一開型建物	1	3	(3.29)	3.32~3.29		(6.78)	2.17~2.32			N87°W	(22.31)		中世	
SB3	一面庇付梁間一開型建物	1	3	(4.45)	(3.51)	3.50~3.51	0.95~1.36	(8.90)	(8.90)	2.88~3.10		N89°E	(31.24)	(39.61)	中世
SB4	梁間一開型建物	1	2	2.02	1.91~2.02		3.47	1.50~1.82			N87°E	7.01		中世	
SB5	梁間一開型建物	1	2	3.37	3.27~3.37		4.08	1.78~2.31			N88°W	13.75		中世	
SB6	梁間一開型建物	1	2	2.52	2.26~2.52		4.01	1.72~2.27			N90°E	10.11		中世	
SB7	梁間一開型建物	1	2	3.08	3.06~3.10		5.84	2.68~3.08			N82°E	17.99		中世	
SB8	梁間一開型建物	1	3	4.11	3.90~4.11		9.12	2.88~3.06			N3°E	37.48		中世	
SB9	梁間一開型建物	1	3	4.21	4.10~4.21		3.36	2.97~3.21			N7°E	14.15		中世	
SB10	梁間一開型建物	1	3	3.94	3.70~4.04		8.95	2.52~3.15			N4°W	35.26		中世	
SB11	梁間一開型建物	1	2	4.43	3.87~4.43		5.55	2.18~3.00			N7°W	24.59		中世	
SB12	梁間一開型建物	1	2	2.66	2.38~2.60		4.06	1.72~2.18			N7°E	10.56		中世	
SB13	梁間一開型建物	1	2	4.72	4.62~4.72		5.90	2.62~3.00			N3°W	27.85		中世	
SB14	竪柱建物	3	3	2.97	0.80~1.26		3.35	1.04~1.19			N23°W	0.95		中世	
SB15	竪柱建物	2	3	4.63	2.16~2.40		6.16	2.60~2.46			N1°E	28.83		中世	
SB16	竪柱建物	2	3	3.60	1.60~1.97		3.98	1.90~2.02			N4°W	14.33		古代	
SB17	竪柱建物	2	3	5.04	2.19~2.57		4.95	1.40~1.99			N40°W	24.95		古代	
SB18	竪柱建物?	2	2	4.76	2.16~2.65		6.20	2.39~3.82			N85°E	29.51		古代	
SB19	二面庇付竪柱建物	2	2	5.54	3.43	1.64~1.77	1.90~2.08	7.35	3.86	1.61~2.26	1.60~1.85	N43°W	13.24	40.50	古代
SB20	竪柱建物	2	2	3.75	1.51~2.46		4.69	2.07~2.62			N2°W	17.59		古代	
SB21	竪柱建物	1	2	3.52	3.41~3.52		4.13	1.74~2.39			N1°W	14.54		古代	
SB22	竪柱建物	2	3	4.36	2.00~2.32		3.56	1.17~1.27			N4°W	15.52		古代	
SB23	-	(1)	(2)	(1.93)	1.93		(3.58)	1.68~1.92			N89°E	(6.91)		古代	
13SB1	竪柱建物	2	2	5.60	1.57~1.85		3.42	2.55~2.80			N85°E	19.15		古代	
13SB2	竪柱建物	2	4	5.06	2.16~2.74		9.84	1.98~2.84			N90°E	49.79		古代	
13SB3	竪柱建物	2	2	3.65	1.80~2.00		4.15	2.07~2.08			N8°E	12.15		古代	
13SB4	竪柱建物	2	4	4.31	1.88~2.38		5.62	1.13~2.34			N87°E	24.22		古代	
13SB5	竪柱建物	1	3	1.44	1.44~1.51		4.34	1.28~1.66			N90°E	6.25		古代	
13SB6	竪柱建物	3	3	5.68	1.36~2.31		6.07	1.75~2.23			N58°W	34.48		古代	
13SB7	-	2	3	4.50	1.78~2.73		(5.72)	1.85~1.98			N71°E	(25.74)		古代	
13SB8	竪柱建物	2	4	4.27	1.95~2.25		6.40	1.57~2.32			N36°E	27.33		古代	
13SB9	竪柱建物	2	3	4.42	1.91~2.31		7.58	1.48~2.40			N61°W	33.50		古代	
13SB10	竪柱建物	2	4	5.62	2.36~2.97		8.67	1.83~2.69			N9°W	48.73		古代	
13SB11	竪柱建物	2	4	3.01	1.40~1.61		5.90	1.31~1.59			N83°E	17.76		古代	
13SB12	西面庇付竪柱建物	2	3	5.55	7.81	2.68~2.86	1.12~1.32	9.74	9.74	2.80~3.49	2.80~3.49	N78°E	54.06	76.07	古代
13SB13	竪柱建物	2	4	4.44	2.03~2.29		9.39	1.52~2.92			N87°E	41.69		古代	
13SB14	竪柱建物	2	4	4.09	1.75~2.05		3.58	1.63~2.15			N82°W	14.64		古代	
13SB15	竪柱建物?	2	3	3.43	1.55~1.88		5.61	1.65~2.32			N1°W	19.24		古代	
13SB16	竪柱建物	2	4	4.76	2.25~2.32		11.12	2.68~3.26			N82°E	52.93		古代	
13SB17	竪柱建物	2	3	4.78	2.27~2.54		7.90	2.57~2.75			N84°E	37.76		古代	
13SB18	竪柱建物	2	4	3.74	1.70~2.01		7.70	1.38~2.98			N46°W	28.80		古代	
13SB19	竪柱建物	2	4	4.73	2.20~2.41		8.86	1.98~2.80			N85°E	41.91		古代	
13SB20	竪柱建物	2	4	5.76	2.64~3.10		9.13	2.20~2.37			N85°E	52.59		古代	
13SB21	竪柱建物?	(2)	(2)	2.97	1.33~1.64		(3.17)	1.40~1.80			N2°E	(9.41)		古代	
13SB22	竪柱建物	2	(1)	(4.10)	2.03		(2.57)	2.57			N9°E	(10.54)		古代	
13SB23	竪柱建物	2	2	5.07	2.39~2.58		4.94	2.21~2.62			N13°W	25.04		古代	
13SB24	竪柱建物	1	2	5.57	5.38~5.57		4.46	2.02~2.29			N86°E	24.84		古代	

2) 中世の掘立柱建物の柱穴の観察表 (1)

遺構番号	遺構種類	建物	方位	掘立柱	方位	方位	遺物	グリッド	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主要な切り合い	備考
2149	P	SB1	3・4	11	86			17G9	円形	台形状	24	16	15		
								18F21	円形		30	18	26	>SD2299	
2159	P	SB1	4	11	86			18F22・23	円形		28	16	36		柱頭から横4点出土
2193	P	SB1	3・4	11	86			17F24	楕円形	台形状	26	18	33		
2330	P	SB1	4	11	86			18F24	(円形)		32	14	40	<P2323・2336	
2339	P	SB1	4	11	86			18G7	円形	台形状	32	16	34	>SD2144	

観 察 表

2) 中世の掘立柱建物の柱穴の観察表 (2)

遺跡 番号	遺跡 種類	建物	分層 深版	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2347	P	S81	3	4	11	86	18G6	円形	漏斗状	26	10	39		
2353	P	S81	4	11	86		18G9	円形	台形状	26	10	25		
2406	P	S82	5	11	88		21F23	円形	台形状	36	24	31		
2418	P	S82	5	11	88		21F13	円形	台形状	36	12	21		
2419	P	S82	5	11	88		21F14	方形		36	20	52		
2427	P	S82	5	11	88		21F25	方形	台形状	30	22	32		
2433	P	S82	5	11	88		22F21	円形	台形状	30	18	33		
2442	P	S82	5	11	88		21F24	方形	U字状	34	18	52		
1723	P	S83	3	11	86		16G12	方形	平円状	28	12	33		
1727	P	S83	3	11	86		16G11	長方形		24	14	16		
1730	P	S83	3	11	86		15G14・15	長方形		26	16	16		
1733	P	S83	3	11	86		15G14	長方形		28	12	41		
1753	P	S83	3	11	86		16G11・16	円形		30	12	32		
1778	P	S83	3	11	86		16G21	(長方形)	(32)	(12)	19	<P1779		
1779	P	S83	3	11	86		16G21	方形	台形状	30	16	19	>P1778	
1786	P	S83	3	11	86		15G24	方形	台形状	24	14	12		
1791	P	S83	3	11	86		15G23	方形	台形状	26	12	19		
1876	P	S83	3	11	86		16G22	円形	台形状	22	16	13		
1981	P	S83	3	11	86		16G12・17	方形	台形状	26	14	24		
1720	P	S84	3	12	86		15G15	円形	台形状	24	16	12		
1728	P	S84	3	12	86		15G14・15	円形		14	4	12		
1734	P	S84	3	12	86		15G19	円形	平円状	22	12	18		
1735	P	S84	3	12	86		15G19	方形		24	12	18		
1745	P	S84	3	12	86		15G20	方形	台形状	26	20	19		
1751	P	S84	3	12	86		15G20、 16G16	円形	U字状	26	16	22		
2760	P	S84	3	12	86		15G14	方形		30	19	21		
1746	P	S85	3	12	86		15G20	円形		22	18	11		
1755	P	S85	3	12	86		16G16	方形		28	18	32		
1769	P	S85	3	12	86		16G17	円形	台形状	20	12	10		
1776	P	S85	3	12	86		16G21	楕円形	台形状	36	24	14		
1784	P	S85	3	12	86		15G25	方形	台形状	25	16	14		
2194	P	S85	3	12	86		16G23	円形	弧状	30	14	14		
2150	P	S86	4	12	86		18H10・15	円形	扇状	22	10	16		
2151	P	S86	4	12	86		18H5	円形		22	16	28		
2155	P	S86	4	12	86		19H11	円形	台形状	30	10	38		
2171	P	S86	4	12	86		18H9	円形	台形状	26	12	24		
2532	P	S86	4	12	86		22F5	円形		22	10	21		
2914	P	S86	4	12	86		19H1	円形	U字状	20	9	11		
1766	P	S87	4	12	86		18G20	円形		22	12	17	>SE2176	
2059	P	S87	4	12	86		18H2・7	楕円形	U字状	30	6	51		
2081	P	S87	4	12	86		18G22	楕円形	平円状	32	18	28		
2101	P	S87	4	12	86		18G23	円形		28	20	29		
2113	P	S87	4	12	86		18H4	円形	台形状	18	10	15		
2154	P	S87	4	12	86		18H5	円形	U字状	22	16	14		
2084	P	S88	4	12	86		18G18・22	不整形	台形状	36	16	27	<P2085	
2085	P	S88	4	12	86		18G18	(楕円形)	台形状	28	16	20	>P2084	
2088	P	S88	4	12	86		18G12	長方形		54	22	28		
2105	P	S88	4	12	86		18G19・24	円形	台形状	32	20	29		
2185	P	S88	4	12	86		18F22	楕円形		26	20	32	>SD2299	
2323	P	S88	4	12	86		18F24	(円形) U字状		-26	16	46	>SD2299・P2330	
2333	P	S88	4	12	86		18G4・9	円形	台形状	32	8	47	>SD2144	
2357	P	S88	4	12	86		18G14	円形	台形状	30	20	30		
2361	P	S88	4	12	86		18G2	円形		26	14	41		
1818	P	S89	4	12	86・88		18H15	長方形	弧状	76	32	28	>SD2066・2067、 <SD2210	
2165	P	S89	4	12	86・88		18G25	円形		36	18	29		
2204	P	S89	4	12	86・88		19H7	円形	台形状	30	20	32		
2213	P	S89	4	12	86・88		19G22	円形	台形状	32	16	28		
2227	P	S89	4	12	86・88		19H13	楕円形	台形状	44	22	38		
2304	P	S89	4	12	86・88		19G16	方形		28	20	32		
2343	P	S89	4	12	86・88		19G18	方形	U字状	30	16	44		
2899	P	S89	4	12	86・88		18H10	方形		24	15	11		
1796	P	SB10	4	13	86		18G25	円形	台形状	20	10	45	>SD2210	
2096	P	SB10	4	13	86		18G19	方形		48	26	40		
2167	P	SB10	4	13	86		19H1・2、 19G21・22	円形	台形状	24	18	37		
2206	P	SB10	4	13	86		19C16	円形	台形状	22	8	51		
2306	P	SB10	4	13	86		18C4	円形		44	14	37	>SD2144	
2318	P	SB10	4	13	86		19C6	円形	台形状	20	8	29		
2324	P	SB10	4	13	86		19C1	円形	U字状	42	16	36		
2337	P	SB10	4	13	86		18C9	楕円形		36	22	26		
1797	P	SB11	3	13	86		16H1	方形	台形状	28	18	28	>SE1704	

2) 中世の掘立柱建物の柱穴の観察表 (3)

遺構 番号	遺構 種類	建物	分層 深版	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1814	P	SB11	3	13	86		16H11・16	方形	円形	28	10	28		
1816	P	SB11	3	13	86		16H6	円形	円形	26	14	25		
1833	P	SB11	3	13	86		16H13	円形	半円状	24	10	30		
1844	P	SB11	3	13	86		16H3・8	楕円形	台形状	36	20	12		
1852	P	SB11	3	13	86		16G23,16H3	楕円形	台形状	26	12	27	>P1853	
2183	P	SB12	4	13	86		18G3	円形	台形状	18	6	33		
2207	P	SB12	4	13	86		18F17	円形	台形状	20	10	16		
2229	P	SB12	4	13	86		18F14・18・19	楕円形		26	12	13		
2303	P	SB12	4	13	86		18F24,18G4	円形	半円状	20	10	18		
1998	P	SB13	5	13	88		21J6	方形	台形状	34	22	38		
2250	P	SB13	5	13	88		21J3	円形	台形状	34	20	30		
2269	P	SB13	5	13	88		21I21	円形		24	14	15		
2272	P	SB13	5	13	88		21H8	円形	半円状	30	12	26		
2279	P	SB13	5	13	88		21H6	円形		22	12	36		
2297	P	SB13	5	13	88		21I23	円形	台形状	24	16	18		
2015	P	SB14	3	13	86		16F24	円形	台形状	22	12	30		
2016	P	SB14	3	13	86		16F23	円形	台形状	18	10	21		
2017	P	SB14	3	13	86		16F17	楕円形		22	12	11		
2019	P	SB14	3	13	86		16F17・18	円形		22	16	16		
2020	P	SB14	3	13	86		16F18	円形		22	16	17		
2022	P	SB14	3	13	86		16F18	楕円形		28	16	37		
2157	P	SB14	3	13	86		16F17	楕円形	台形状	22	16	24		
2158	P	SB14	3	13	86		16F17	楕円形		20	8	30		
2179	P	SB14	3	13	86		16F23	円形	U字状	158	50	41		
2180	P	SB14	3	13	86		16F23	円形		190	58	26		
2181	P	SB14	3	13	86		16F23	円形		26	14	35		
2182	P	SB14	3	13	86		16F22	円形	U字状	28	18	34		
2184	P	SB14	3	13	86		16F17・22	円形	台形状	28	12	33		
2187	P	SB14	3	13	86		16F22・16G2	円形	台形状	26	12	38		
2207	P	SB14	3	13	86		16F18・23	円形		24	14	29		
1804	P	SB15	3-4	13	88		18F1	円形	V字状	35	14	64		
1910	P	SB15	3-4	13	88		17E20・25	円形		24	12	64		
1913	P	SB15	3-4	13	88		18E11	円形		30	12	64		
2007	P	SB15	3	13	88		17E14	円形	U字状	28	12	62		
2042	P	SB15	3-4	13	88		18E21	円形		28	12	60		
2087	P	SB15	3	13	88		17E14	円形	U字状	24	10	32		
2090	P	SB15	3	13	88		17E24	円形	台形状	24	14	74		
2114	P	SB15	3	13	88		17F4	円形	U字状	28	10	56		
2120	P	SB15	3-4	13	88		17F5	円形	半円状	20	14	33		
2293	P	SB15	3-4	13	88		17E15	円形		26	8	65		

3) 中世の井戸の観察表 (1)

遺構 番号	遺構 種類	建物	分層 深版	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1701	SE		3	14			16H24・25, 18A・5	楕円形	U字状	196	68	228	>SD1031・1702	
1703	SE		3	14	89		15H20	(円形)	U字状	84	48	152	<SD1031	
1704	SE		3	14	89		15H5・10, 16H1・6	円形	船状	248	208	151	<P1797・1965	
1934	SE		3-4	14	89		17G17・18・23	円形	U字状	100	78	178		
1976	SE		5	15	89		21H16・21	円形	台形状	162	100	212		
2044	SE		4	14	90	75・158	19E17	(円形)	台形状	190	156	78	>SD2685	
2064	SE		3-4	15	90		17H17・22	楕円形	U字状	118	124	186	<SD1031	
2065	SE		3-4	15	90		17H9・10・14・15	円形	U字状	120	100	162	>SD2066	
2173	SE		4	15	90		17H10, 1816	(円形)	U字状	166	92	194	>SD2209・SE2174	
2174	SE		4	16	91		18A1・2・6・7	(方形)	台形状	268	184	108	>SD1031・2209, <SE2173	
2176	SE		4	15	91		18G20・24・25	円形	U字状	172	88	200	>SD2210, <P1766・1767	
2256	SE		5-6	16	91		22K2	円形	U字状	76	32	84		
2268	SE		5	16	91		21H8	楕円形	U字状	116	74	154		
2270	SE		4-5	16	91		20H13	(楕円形)	U字状	158	48	112	>SD2066・2067, <SD2210	
2292	SE		4	17			18F19・20	円形	階段状	190	58	242	>SD2210	
2301	SE		4	16	91・92		19F16・21	楕円形	U字状	200	100	202	>SD2144・2299, <P2304	
2348	SE		4	17	91		19F25,20F21	円形	U字状	188	90	226	>SD2299	
2389	SE		5	18	92		21G7・8	円形	階段状	108	44	224		
2390	SE		5	18	92		21G13	円形	U字状	108	80	114		
2391	SE		5	18	93		21F22	方形	U字状	82	90	150		
2444	SE		5-6	18	93		22G10	(方形)	U字状	104	54	146		

観 察 表

3) 中世の井戸の観察表 (2)

遺構番号	遺構種類	建物	分期 深版	傾斜 版版	写真 版版	遺物 版版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2523	SE		5	18	93		21H14・15	(楕円形)	U字状	128	74	112		
2535	SE		6	19	93		23I19・20	円形	漏斗状	148	136	108		
2555	SE		6	19	93		23K5・10、 24K1・6	方形	台形状	164	44	134		

4) 中世の土坑の観察表

遺構番号	遺構種類	建物	分期 深版	傾斜 版版	写真 版版	遺物 版版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1700	SK		3	19	94		18I4・9	長方形	台形状	212	178	19		
1717	SK		3	19	94		15G10	楕円形	台形状	44	19	6		
1810	SK		4	19			18I4・5	(円形)	台形状	74	30	34	<SK1811	
1811	SK		4	20			18I4・5・9・ 10・14・15	(長方形)	不整形	452	440	18	>SK1810・SD2241、 <SD1763・P2146・ Z263	
1966	SK		3・4	19	94		17H11	不整形	台形状	48	40	14		
2043	SK		3	19			17F7・12	円形	台形状	68	40	12		
2089	SK		3	19	94		17E13	楕円形	台形状	76	40	11		
2254	SK		4	19	94		18H15	円形	台形状	118	38	73	>SD2210	
2262	SK		4	19			18I14	(円形)	漏斗状	66	42	52	>SD1031・1763	
2276	SK		4・5	19	94		19I4	(方形)	台形状	(68)	(58)	6	<P2286	
2291	SK		5・6	19	94		22K2	(不整形)	台形状	(92)	(60)	9		
2329	SK		5・6	19			23I20、 23I16	(円形)	台形状	(66)	(40)	27	<SD2210	
4257	SK		8・9	26	129		30K5.31K1	楕円形	台形状	103	73	15		

5) 中世の溝の観察表 (1)

遺構番号	遺構種類	建物	分期 深版	傾斜 版版	写真 版版	遺物 版版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1031	SD		3・4	20	95		15I17-18H14	-	階段状	(3760)	93	17~ 40	>SD1702・1763・ 2075・SE1703・ 2064・SG2191・ P2196、<SD1935・ 2063・SE1701・2174 ・SK2262・P2005、 # SD2144	
1702	SD		3	20	95		15H16- 17H24	-	台形状	(2180)	81	3~ 27	>P2195、<SD1031・ 2075・SE1701・ P1936、# P2859	
1763	SD		4	20・21			18I20-18I14	-	台形状	(920)	57	1~ 31	>P2255・SK1811、 <SD1031・2067・ SK2262	
1764	SD		4・5	20	95		18E15-20I1	-	台形状	4710	44	12~ 23	>SD2066・2067・ 2075・2144・2210・ 2299・P2274・2365・ Z282	
2066	SD		3・5	20・21	95		17H15- 23I22	-	台形状	(5580)	60	9~ 37	>SD2067・P2745、 <SE2065・2270・ SD1764・2063・2144 ・2210・2367・2494・ P1818・2248	
2067	SD		4・5	20・21	95		17H15- 22H17	-	弧状	(4310)	-	2~ 10	>SD1763・P1815、 <SE2270・SD1764・ 2063・2066・2210・ 2144・P1817・1818	
2075 (南)	SD		3・5	20・25	95・125・ 126	72・76・ 80・155 ・156・ 159・ 161	17I9-17F18- 21F6	-	台形状	(南北 2590、 東北 3600)	(南北 64、 東北 92)	23~ 46	>SD1702・2512・2704 ・P1807・2029・2661・ 2710・SK3086、SG2287、 <SD1031・1764・2063 ・2210・2490・2491・ P2077、# P2729・2809	
2073 (東)	SD						24G1-25H17- 33I4	-	台形状 漏斗状	-	119~ 306	16~ 63	13SB2・SD4128・ >SD2066・2067・ 2066・SK2175・ 2941・<SE2301・ SD1764・2063・2210 ・2299・P2306・2331 ・2333・2339、 # SD1031	
2144	SD		4	20	96	72・150	18I21- 18G12- 20F11	-	半円状	(3410)	14	5~ 15	>SE2270・2510・ SK2529・SD2066・ 2067・2075・2144・ 2299・2512・2704・ P1812・1818・2362・ 2511・2745・ 2761、<SD1764・2367 ・2490・2491・2494・ SE2176・2292・ SK2254・P1796、 # P2808	
2210	SD		4・7	20・21 ・22	96・124	72・150	18E14- 18H15- 25H11	-	台形状	(南北 3050、 東北 6340)	-	12~ 44	>SD1702・2512・2704 ・P1807・2029・2661・ 2710・SK3086、SG2287、 <SD1031・1764・2063 ・2210・2490・2491・ P2077、# P2729・2809	
2241	SD		4	21			18I10	-	半円状	(98)	27	11	<SK1811	
2242	SD		4	21	96		18I10・15	-	弧状	212	22	10		

5) 中世の溝の観察表 (2)

遺構 番号	遺構 種類	建物	分期 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考	
2288	SD		5・6	21	96・124	72・156	21H14-21J25	-	半円状	(2490)	55	17~ 19	<SD1983		
2299	SD		3-6	20・21	96・126	71・155	17F25-23G4	-	弧状	(5850)	58	9~ 28	>SE298・SD2144 >SK2409・2530・ P2617・SE2301・2348 ・SD1764・2210・2367 ・2494・P2149・2185・ 2323・2364・2650		
2612	SD		5-7	22	96		23H16-24H2・ 23H8	-	台形状	(410), 北西 (2510)	南北 64, 東西 195	1~ 12	<SD2075・2210・ 2490・2491・2492		
2631	SD		6・7	22	136		25H21-25J21	-	台形状	(1067)	41	6~ 15	SD2367・4128>・ >SD2695・>SD4308		
2679	SD		6	22	96		23K10,24K6	-	箱状	(450)	48	10~ 23			
2695	SD		6・7	22			25J1・6・11	-	箱状		380	33	7~ 10		
4027	SD		5	21	124		21H3-13	-	台形状		357	48	14		
4049	SD		6	22	136	80・161	22K10,23K8	-	台形状		508	54	32		
4063	SD		6	22			22J20	-	箱状		115	17	13		
4126	SD		10	25	127		41Q18・ 42Q12	-	弧状		821	50	4		
4127	SD		10	25	127		41Q11-14	-	弧状		566	48~ 53	3~4		
4137	SD		6・7	22	126		25H8-25H10	-	弧状		385	62	10		
4252	SD		8	24			30K8・11-13	-	弧状		665	37	8		
4255	SD		9	25	127		33K12・13・ 17-19	-	台形状		348	90	30		
4259	SD		9	25			33K6・7	-	弧状		321	69	8		
4260	SD		9	25			33K11・12・ 17	-	台形状		354	43	8		
4262	SD		9・10	25	127		31J24-32J10・ 35J22	-	弧状		(3627)	79~ 98	11~ 23		
4263	SD		9・10	25			33J17・18	-	弧状		251	60	13		
4269	SD		8	24			29H24-29H15	-	台形状		747	56	7	P4276>	
4270	SD		8	24	127	80・161	30H21-30H11	-	台形状		658	64	11	SE4275<	
4272	SD		8	24	127		30I2-30J5	-	弧状		(556)	67	17	P4282, 4283<	
4302	SD		7	23	125・127	80・161	26H1-25K8	-	台形状		2130	75	22	SD4128・P4309>・ >SD2075・>P4625 (S80)・P4632 (S80)・ P5055 (S820)・P4310 ・P5063・P4225	
4308	SD		6・7	22			25I6-24J25	-	台形状		568	40	54	SD2367・SD4128 ・P4549 (S87) ・P4615 (S89) >・SD2531・>SD2695 ・>P5052 (S820)・ P5051 (S820)	
4367	SD		7・8	22・64	128・150	80・161	25K10-28K5	-	台形状		3081	55	32	SD4389・P4848>・ ・P4667 (S816)・ P4665 (S816)・P4644 (S816)・P4972 (S818) ・P4982 (S810)・ P4986 (S810)・P4987 (S810)・P4770・P4819 ・P4829・P4768・ SK4732・P4734	
4785	SD		8・9	24	128		28L9-30K10	-	台形状		2436	77~ 119	14~ 80		
4788	SD		8・9	24・25	128・129	80・161	29L11-33J25	-	台形状		5078	85~ 170	24~ 81		

6) 中世の性格不明遺構・溜池状遺構・ピットの観察表

遺構 番号	遺構 種類	建物	分期 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4135	SX		6・7	26	129		25G・H 26G・H,27H	不整形	不整形	1525	930	15	13S86<・P4138>	
4224	SX		6	26	129		25H10,26H6	不整形	不整形	329	195	40	SX4135>	風倒木?
5080	SG		8	26	129		30I21-23, 30J1-3・6-8	不整形内凹	弧状	700	564	164		
2255	P		4	21			18H15	円形	U字状	24	16	16	<SD1763	
2286	P		4	19			19I4	円形	U字状	28	12	15	>SK2276	

7) 古代の竪穴建物の観察表 (1)

遺構 番号	遺構 種類	建物	分期 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2368	SI		30	35	100・103・ 153・ 156	68・73	22Q3-5, 22F23-25	方形	台形状	354	298	58	<SD2299・2367, >SK2530・2795	

観 察 表

7) 古代の竪穴建物の観察表 (2)

遺構番号	遺構種類	建物	分層 回数	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
3048	SI		30	35	100・104	68・69・ 73・153 ・156	23J4・5・9・ 10	方形	階状	414	384	62		

8) 古代の掘立柱建物の柱穴の観察表 (1)

遺構番号	遺構種類	建物	分層 回数	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
3049	P	SB16	30・31	36	99・105		24H19	方形	台形状	82	76	45		
3050	P	SB16	30・31	36	99・105		24H20	方形	平円状	80	52	37		
3051	P	SB16	30・31	36	99・105		25H16	方形	平円状	80	56	4		
3052	P	SB16	30・31	36	99・105		24H24	方形		60	54	10		
3053	P	SB16	30・31	36	99・105		24H25	方形		60	40	9		
3054	P	SB16	30・31	36	99・105		25H21	方形	台形状	72	48	36		
3055	P	SB16	30・31	36	99・105		244	方形		94	76	9		
3056	P	SB16	30・31	36	99・105		24E5	方形		54	40	7		
3057	P	SB16	30・31	36	99・105		25H1	方形	台形状	70	42	42		
2738	P	SB17	30	36	105		22B4・5	方形	U字状	58	42	41	>P2676	
2751	P	SB17	30	36	105		23H1	方形	台形状	60	44	43		
2902	P	SB17	30	36	105		22H9	方形		50	(32)	52		
2904	P	SB17	30	36	105		23E6	方形		54	32	38		
2910	P	SB17	30	36	105		22H9	方形		73	47	55		
2922	P	SB17	30	36	105		22H5	方形		48	(40)	9		
2972	P	SB17	30	36	105		22H20	円形	U字状	24	20	57	>P2971	
2974	P	SB17	30	36	105		23H11	円形	台形状	50	28	48		
2975	P	SB17	30	36	105		23H7	(方形)	台形状	60	52	23		
3008	P	SB17	30	36	105		23H1・2・6・ 7	方形	台形状	50	29	49		
3013	P	SB17	30	36	105		22H10	方形		50	36	53		
3015	P	SB17	30	36	105		22H25	方形	台形状	66	46	34		
2496	SD	SB18	30	36	105・106	70・73 154・ 156	22H13・15	-	平円状	638	36	24	<SD2367	
2633	P	SB18	30	36	105・106		22H14・19	方形	台形状	85	65	54		
2635	P	SB18	30	36	105・106		22H17	方形		58	42	56		
2671	P	SB18	30	36	105・106		22H22	方形	台形状	56	50	42		
2674	P	SB18	30	36	105・106		22E3	方形		67	42	58		
2675	SD	SB18	30	36	105・106		22E3・4・6	-	V字状	292	40	26		
2676	P	SB18	30	36	105・106		22E4	方形	台形状	90	70	47	<P2738	
2745	P	SB18	30	36	105・106		23H16・21, 23H20・25	方形	台形状	65	55	50	<SD2066・2210	
2750	P	SB18	30	36	105・106		22E5,23H1	方形	台形状	72	51	48		
3012	P	SB18	30	36	105・106		22H15	方形	平円状	90	66	32		
3020	P	SB18	30	36	105・106		23H19・20・ 24・25	方形	台形状	86	63	44		
3058	P	SB19	30	37	105・107		23H17・18・ 22・23	方形	台形状	52	38	41		
3059	P	SB19	30	37	105・107		23H18	方形	平円状	42	22	32		
3060	P	SB19	30	37	105・107		23H14・19	方形	階段状	56	36	40		
3061	P	SB19	30	37	105・107		23H4	楕円形	台形状	26	18	13		
3062	P	SB19	30	37	105・107		23E23	方形	台形状	40	28	28		
3064	P	SB19	30	37	105・107		23E24	方形		42	26	13		
3065	P	SB19	30	37	105・107		23H19	楕円形		46	30	32		
3066	P	SB19	30	37	105・107		23H15	楕円形		23	14	14		
3067	P	SB19	30	37	105・107		23J4	方形	U字状	46	26	49		
3068	P	SB19	30	37	105・107		23E24	方形		36	20	35		
3070	P	SB19	30	37	105・107		23E25	方形	U字状	52	46	22		
3071	P	SB19	30	37	105・107		24H16	円形		28	16	63		
3075	P	SB19	30	37	105・107		24E21	方形		28	10	29		
3077	P	SB19	30	37	105・107		23J4	方形		32	18	35		
3078	P	SB19	30	37	105・107		23H17	楕円形	台形状	36	28	4		
3080	P	SB19	30	37	105・107		23H13	楕円形		36	34	14		
3084	P	SB19	30	37	105・107		23E5	方形		46	22	28		
2619	P	SB20	30	37	105・109		22G23・24	円形		30	16	9	>P2644	
2627	P	SB20	30	37	105・109		22G24	楕円形	台形状	36	20	34		
2634	P	SB20	30	37	105・109		22H4	円形	台形状	32	18	13		
2647	P	SB20	30	37	105・109		23G17・18・ 2・23	方形	平円状	58	40	19		
2757	P	SB20	30	37	105・109		22H19・3	円形		42	30	16		
3025	P	SB20	30	37	105・109		22H9	方形	台形状	40	36	13		
3039	P	SB20	30	37	105・109		22H9	方形	台形状	28	14	24		
3042	P	SB20	30	37	105・109		22H8	方形	階段状	52	28	9		
2638	P	SB21	30	37			22G18	円形	台形状	28	14	21		
2648	P	SB21	30	37			22G14	楕円形	平円状	24	14	11		
2773	P	SB21	30	37			22G9	円形	台形状	44	30	23		

8) 古代の掘立柱建物の柱穴の観察表 (2)

遺跡 番号	遺跡 種別	建物	分層 深度	掘削 深度	Written 深度	遺物 深度	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2744	P	SB21	30	37	109		22G8	方形	台形状	42	22	17		
2746	P	SB21	30	37			22G13		楕円形	20	12	6		
2696	P	SB22	29	37	108		20H20, 21H16	円形	階段状	38	14	41		
2699	P	SB22	29	37	108		21H17	楕円形		48	30	33		
2711	P	SB22	29	37	108		21H16	方形	U字状	36	20	42		
2716	P	SB22	29	37	108		21H21	方形	U字状	34	24	49		
2731	P	SB22	29	37	108		21H22	円形	U字状	36	15	37		
2736	P	SB22	29	37	108		21H22	円形	U字状	38	26	28		
2741	P	SB22	29	37	108		21E2	方形		36	30	24		
2915	P	SB22	29	37	108		21H21	円形	弧状	28	14	13		
2959	SD	SB22	29	37	108		21H17-22	-	弧状	218	22	8		
2960	SD	SB22	29	37	108		21H16-21H11	-	台形状	308	23	12		
2961	P	SB22	29	37	108		21H21	円形	台形状	44	26	45		
2962	P	SB22	29	37	108		21H11	方形		36	20	15		
2963	P	SB22	29	37	108		21H11	方形	台形状	38	28	22		
2964	P	SB22	29	37	108		21E2	方形	扇斗状	52	18	51		
4061	P	SB22	29	37	108		21H17	円形	箱状	56	50	42		
2697	P	SB23	29	38			20J3	円形	台形状	32	18	21		
2700	P	SB23	29	38			20J4-8	方形	台形状	34	14	19		
2946	P	SB23	29	38			20J2	方形	台形状	34	20	43		
2947	P	SB23	29	38	109		20J2と20J2	円形	台形状	38	26	43		
4190	P	13S81	31	43	130		25I7	隅丸方形	箱状	37	36	34		
4191	P	13S81	31	43	130		25I9	隅丸方形	箱状	(50)	37	43		
4192	P	13S81	31	43	130		25I10	隅丸方形	箱状	46	41	38		
4193	P	13S81	31	43	130		25H12	隅丸方形	箱状	40	36	43		
4194	P	13S81	31	43	130		25H14	隅丸方形	箱状	47	42	35		
4195	P	13S81	31	43	130		25H10-15	円形	箱状	47	45	41		
4196	P	13S81	31	43	130		25H17	円形	箱状	45	41	42	P4203-	
4197	P	13S81	31	43	130		25H14	隅丸方形	箱状	52	36	36	P4301-	
4198	P	13S81	31	43	130		25H15	隅丸方形	箱状	44	43	56		
4169	P	13S82	31	44	130		26I2	隅丸方形	階段状	53	49	42		
4170	P	13S82	31	44	130		26I23,26I3	隅丸方形	階段状	66	56	42		
4171	P	13S82	31	44	130		26H24,26H4	隅丸方形	階段状	56	52	48		
4172	P	13S82	31	44	130		26H25,26H5	隅丸方形	階段状	60	56	34		
4173	P	13S82	31-32	44	130		27H22,27H2	隅丸方形	台形状	48	42	32		
4174	P	13S82	31	44	130		26H7	隅丸方形	扇斗状	46	(40)	30	SD2075-	
4175	P	13S82	31	44	130		26H8	楕円形	階段状	(40)	(30)	24	SD2075-	
4176	P	13S82	31	44	130		26H9	隅丸方形	階段状	50	46	32		
4177	P	13S82	31	44	130		26H10	隅丸方形	階段状	46	44	36		
4178	P	13S82	31-32	44	130		27H6-7	隅丸方形	扇斗状	(50)	(50)	30		
4179	P	13S82	31	44	130		26H12	円形	階段状	54	(50)	32	P4212-	
4180	P	13S82	31	44	130		26H13	隅丸方形	階段状	(58)	(54)	56	SD4128-	
4181	P	13S82	31	44	130		26H14	隅丸方形 ?	台形状	40	-	30	SK4163-	
4182	P	13S82	31	44	130		26H15	隅丸方形	階段状	(52)	(46)	34	SD2075-	
4183	P	13S82	31-32	44	130		27H11-12	楕円形	階段状	(52)	(40)	24	SD2075-	
4151	P	13S83	31-32	43	130		27H22	隅丸方形	箱状	62	47	36		
4152	P	13S83	31-32	43	130		27I2	円形	階段状	59	57	37		
4153	P	13S83	31-32	43	130		27I2-3	隅丸方形	階段状	57	46	35		
4154	P	13S83	31-32	43	130		27H23	隅丸方形	階段状	57	51	32		
4166	P	13S83	31-32	43	130		27H8	隅丸方形	階段状	55	51	31		
4167	P	13S83	31-32	43	130		27I7-8	隅丸方形	階段状	58	48	37		
4168	P	13S83	31-32	43	130		27H6-7	楕円形?	箱状	53	(30)	33	SD4128-	
2761	P	13S84	29-30	44			22H16	方形	半円状	44	40	12	<SD2120	
2764	P	13S84	29-30	44			22H21	方形	台形状	(64)	(40)	57		
4079	P	13S84	30	44	131		22H1	円形	台形状	48	42	46		
4080	P	13S84	29-30	44	131		21H5	方形	台形状	65	57	48		
4081	P	13S84	29-30	44	131		21H25	円形	箱状	63	61	58	P4081-SX4035	
4082	P	13S84	29-30	44	131		21E3-4	楕円形	台形状	66	48	44		
4083	P	13S84	29-30	44	131		21H23-24	楕円形	半円状	66	53	42		
4093	P	13S84	29-30	44	131		21H20	方形	台形状	66	54	53		
4094	P	13S84	29-30	44	131		21H18	楕円形	台形状	66	55	41		
4095	P	13S84	29-30	44	131		21H19	楕円形	台形状	65	48	50		
4096	P	13S84	29-30	44	131		21H4-5	楕円形	台形状	56	46	42		
4076	P	13S85	29	43	131		20G4	円形	台形状	41	35	19		
4084	P	13S85	29	43	131		20G5	円形	台形状	32	30	27		
4085	P	13S85	29	43	131		20G5	円形	台形状	36	31	32		
4086	P	13S85	29	43	131		20G4	円形	台形状	49	40	38		
4087	P	13S85	29	43	131		20G3	円形	U字状	32	30	33		
4088	P	13S85	29	43	131		20G4	円形	台形状	36	34	21		
4089	P	13S85	29	43	131		20G4-5	円形	階段状	37	30	24		

観 察 表

8) 古代の掘立柱建物の柱穴の観察表 (3)

遺跡 番号	遺跡 種類	建物	分層 深度	柱間 間隔	写式 間隔	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4090	P	13SB5	29	43	131		29G5	円形	台形状	37	35	36		
4139	P	13SB6	31	45	131		26H10	方形	箱状	49	47	37		
4140	P	13SB6	31	45	131		26H15	方形	箱状	58	52	33		
4148	P	13SB6	31・32	45	131		27H13	長方形	箱状	(52)	43	31		
4155	P	13SB6	31	45	131		27H16	隅丸方形	箱状	56	(54)	34	SK4165<	
4157	P	13SB6	31・32	45	131		27H17	方形	箱状	46	41	34		
4158	P	13SB6	31・32	45	131		27H17	隅丸方形	箱状	55	50	32		
4159	P	13SB6	31	45	131		26H14	方形	箱状	49	47	35		
4230	P	13SB6	31	45	131		26H5	隅丸方形	箱状	55	49	40		
4231	P	13SB6	31	45	131		27G21,27H1	隅丸方形	箱状	55	53	36		
4232	P	13SB6	31・32	45	131		27H2	隅丸方形	箱状	55	49	32		
4233	P	13SB6	31・32	45	131		27H2・3・7・8	隅丸方形	箱状	61	59	34		
4234	P	13SB6	31・32	45	131		27H8	隅丸方形	箱状	50	47	35		
4512	P	13SB7	30・31	45	132		24J5	隅丸方形	台形状	54.5	50	54		
4549	P	13SB7	30・31	45	132		25J11	隅丸方形	台形状	49.5	45.5	47		
4551	P	13SB7	30・31	45	132		24J18	楕円形	台形状	60	42	48		
4553	P	13SB7	30・31	45	132		24J14	円形	台形状	53	45	41		
4554	P	13SB7	30・31	45	132		24J15	円形	台形状	54	51.5	43		
4618	P	13SB7	30・31	45	132		24J5,25J1	円形	台形状	49	45	44		
4199	P	13SB8	31	45	132		25I7	隅丸方形	箱状	45	44	37		
4200	P	13SB8	31	45	132		25H13	円形	箱状	47	43	45		
4201	P	13SB8	31	45	132		25H14	隅丸方形	箱状	39	35	38	P4197<	
4202	P	13SB8	31	45	132		25H11	隅丸方形	箱状	39	31	37		
4203	P	13SB8	31	45	132		25H17	隅丸方形	箱状	53	45	46	P4196<	
4204	P	13SB8	31	45	132		25H18	長楕円形	箱状	50	32	34	SD4128<	
4205	P	13SB8	31	45	132		25H16	隅丸方形	箱状	46	38	39		
4206	P	13SB8	31	45	132		25H16・17・21・22	隅丸方形	階段状	45	39	47		
4207	P	13SB8	31	45	132		25I22	隅丸方形	箱状	44	41	37	P4187<	
4208	P	13SB8	31	45	132		24I25	隅丸方形	階段状	46	45	44		
4209	P	13SB8	31	45	132		25I21	隅丸方形	箱状	42	34	42	P5051<	
4210	P	13SB8	31	45	132		25J2	円形	階段状	49	47	46		
4517	P	13SB9	31	46	132		25I22	円形	台形状	51	45	49		
4529	P	13SB9	31	46	132		25J7	円形	台形状	57	54.5	50		
4531	P	13SB9	31	46	132		25J3	隅丸方形	台形状	49	42.5	36		
4537	P	13SB9	31	46	132		25J4	隅丸方形	台形状	50	43.5	44		
4544	P	13SB9	31	46	132	80・161	25J12	円形	台形状	60.5	60	54		
4546	P	13SB9	31	46	132		25J9	隅丸方形	台形状	56	50	40		
4608	P	13SB9	31	46	132		25J10	隅丸方形	台形状	52	49	33		
4609	P	13SB9	31	46	132		25J14・15	隅丸方形	台形状	63	60	53		
4611	P	13SB9	31	46	132		25J13	隅丸方形	U字状	43	39	40		
4612	P	13SB9	31	46	132		25J4・9	隅丸方形	台形状	48.5	43	41		
4615	P	13SB9	31	46	132		25J1	隅丸五角形	U字状	47.5	39	42		
4619	P	13SB9	31	46	132		25J2・7	隅丸五角形	台形状	52	41.5	39		
4625	P	13SB9	31	46	132		25J19	隅丸五角形	台形状	59	45	57		
4630	P	13SB9	30・31	46	132		25J6	隅丸五角形	台形状	48	40	36		
4461	P	13SB10	32	46	132		28J6	隅丸方形	箱状	83	79.5	16		
4462	P	13SB10	32	46	132		27J10	隅丸方形	箱状	80.5	71.5	11		
4654	P	13SB10	32	46	132		28H16	隅丸五角形	台形状	72	57	43		
4759	P	13SB10	31・32	46	132・133	80・161	27J8-13	隅丸方形	箱状	70.5	68	41		
4908	P	13SB10	32	46	132		28J1	隅丸方形	台形状	86.5	80	55		
4911	P	13SB10	32	46	132		27J15,28H11	隅丸五角形	台形状	73.5	61	34		
4912	P	13SB10	32	46	132		27J14	隅丸方形	台形状	80	73.5	42		
4913	P	13SB10	31・32	46	132		27H13	隅丸方形	台形状	79	75	27		
4914	P	13SB10	31・32	46	132		27H18・23	隅丸方形	箱状	88	77.5	90		
4915	P	13SB10	31・32	46	132・133		27J23,27J3	隅丸五角形	台形状	92	76	47		
4916	P	13SB10	31・32	46	132		27J3・8	隅丸方形	台形状	83.5	73.5	43		
4917	P	13SB10	32	46	132		27J5・10	隅丸方形	台形状	80.5	74.5	32		
4918	P	13SB10	32	46	132		27J24・25	隅丸方形	台形状	86.5	84	31		
4919	P	13SB10	32	46・60	132・145		27H19・20	隅丸五角形	箱状	89	57	56		
4933	P	13SB10	32	46・59	132		28J21	円形	弧状	31	27	14	P4933-SK4414	
4318	P	13SB11	31	47	133		26I22・23	隅丸方形	漏斗状	39.5	39	47		
4320	P	13SB11	31	47	133		26I22	円形	漏斗状	28	24	20		
4586	P	13SB11	31	47	133		26J2	隅丸方形	台形状	37	33	21		
4594	P	13SB11	31	47	133		26J8	楕円形	台形状	24.5	19.5	22		
4598	P	13SB11	31	47	133		26J7	円形	U字状	36	33.5	40		
4603	P	13SB11	31	47	133		26J9	隅丸方形	U字状	37.5	32	32		
4621	P	13SB11	31	47	133		26J24	円形	台形状	31	27.5	24		
4631	P	13SB11	31	47	133		26J23	円形	U字状	22	20	19		
4929	P	13SB11	31	47	133		26J25	円形	台形状	39	35	9		
4401	P	13SB12	32	47	133		28J9	円形	台形状	26	25	44		

8) 古代の掘立柱建物の柱穴の観察表 (4)

遺跡 番号	遺跡 種類	建物	分層 深版	掘削 回数	写真 回数	遺物 回数	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4403	P	13SB12	32	47	133		2819・14	円形	台形状	33	30	35		
4404	P	13SB12	32	47	133		2916	円形	台形状	29	23	22		
4405	P	13SB12	32	47	133		2818	円形	台形状	32	27	19		
4406	P	13SB12	32	47	133		2817	方形	台形状	30	26	42		
4407	P	13SB12	32	47	133		2813	楕円形	台形状	38	31	40		
4409	P	13SB12	32	47	133		2811	円形	台形状	35	33	51		
4418	P	13SB12	32	47	133		2916	円形	台形状	27	23	14		
4427	P	13SB12	32	47	133		29121・22	円形		26	20	34		
4439	P	13SB12	32	47	133		28120	楕円形	台形状	30	23	46		
4442	P	13SB12	32	47	133		2818	楕円形		35	30	61		
4444	P	13SB12	32	47・59	133		29111	楕円形		29	26	20		
4463	P	13SB12	32	47	133		2812	円形		29	24	35		
4472	P	13SB12	32	47	133		2813	楕円形		31	28	—		
4473	P	13SB12	32	47	133		2813	円形		24	23	—		
4718	P	13SB12	32	47	133		28125	楕円形	台形状	24	19	14		
4854	P	13SB12	32	47	133		2815	円形	台形状	20	19	9		
4485	P	13SB13	32	48	120・134		28K2・3	方形	台形状	72	68	28		
4490	P	13SB13	32	48	120・134		28K4	楕円形	台形状	56	37	23		
4726	P	13SB13	32	48	120・134		29K11	円形		22	21	46		
4730	P	13SB13	32	48	120・134		29K6	方形		103	109	25		
4733	P	13SB13	32	48	120・134		28K5	不整形	台形状	72	70	31		
4740	P	13SB13	32	48	120・134		29K2	方形	台形状	88	76	31		
4745	P	13SB13	32	48	120・134		29K7	方形	台形状	76	63	32		
4746	P	13SB13	32	48	120・134		29K12	方形	台形状	83	82	38		
4747	P	13SB13	32	48	120・134		29K1	方形	台形状	85	73	31		
4748	P	13SB13	32	48	120・134		29K11	方形	台形状	87	81	37		
4749	P	13SB13	32	48	120・134		28K13-14	方形	台形状	73	72	35		
4750	P	13SB13	32	48	120・134		28K15	方形	台形状	88	85	55		
4751	P	13SB13	32	48	120・134		28K10	方形		92	80	31		
4765	P	13SB13	32	48	120・134		28K12-13	方形	台形状	90	74	39		
4773	P	13SB13	32	48	120・134		28K9	楕円形		70	58	25		
4774	P	13SB13	32	48	120・134		28K14	方形	台形状	68	56	28		
4780	P	13SB13	32	48	120・134		28K7-8	方形	台形状	76	65	35		
4818	P	13SB13	32	48・64	120・134 ・150		28K3	方形	台形状	78	67	29		
4820	P	13SB13	32	48	120・134		28K8-9	方形		89	80	28		
4666	P	13SB14	31・32	49			27119	楕円方形	靴状	36.5	33	23		
4680	P	13SB14	31・32	48			27124	楕円方形	台形状	39	36.5	29		
4683	P	13SB14	31・32	48			27112	方形	台形状	42.5	36	21		
4684	P	13SB14	31・32	48			27112	楕円方形	台形状	43	42	22		
4685	P	13SB14	31・32	48			27113	楕円方形	台形状	47.5	42.5	34		
4686	P	13SB14	32	48			27114	円形	台形状	33	32.5	34		
4687	P	13SB14	32	48			21120	楕円方形	台形状	36	33	29		
4689	P	13SB14	32	48	133		27125	楕円方形	台形状	45	44.5	35		
4690	P	13SB14	31・32	48			27122	楕円方形	台形状	38.5	36	27		
4691	P	13SB14	31・32	48			27121	楕円方形	靴状	55	46	22		
4692	P	13SB14	31・32	48			27116・17	楕円方形	階段状	53	48.5	28		
4694	P	13SB14	31・32	48			27118	楕円方形	靴状	47.5	44.5	27		
4695	P	13SB14	32	48			27119	楕円方形	靴状	34	32	11		
4696	P	13SB14	31・32	48			27123	不整形	台形状	63	44	31		
4698	P	13SB14	31・32	48			27117	楕円方形	台形状	51	50	30		
4699	P	13SB15	31・32	49			27116	楕円方形	台形状	54	47	32		
4700	P	13SB15	31・32	49	133		27121	楕円方形	台形状	47	40.5	22		
4902	P	13SB15	31・32	49			27126	楕円方形	靴状	52	48	28		
4906	P	13SB15	31・32	49			27121・2711	楕円方形	台形状	50	43.5	26		
4934	P	13SB15	31・32	49			27122	円形	台形状	46.5	41	35		
4935	P	13SB15	31・32	49			27123	楕円方形	台形状	39	36	24		
4937	P	13SB15	31・32	49			27123	楕円方形	台形状	49	45	31		
4644	P	13SB16	31	49	134		26K8	円形	台形状	29.5	26	11		
4645	P	13SB16	31	49	134		26K9	円形	台形状	39	36.5	30		
4646	P	13SB16	31	49	134		27K1	円形	靴状	36	34.5	20		
4647	P	13SB16	31	49	134		27K16	円形	靴状	36	35.5	28		
4648	P	13SB16	31	49	134		26K20	円形	台形状	37.5	30.5	27		
4649	P	13SB16	31	49	134		26K15	円形	靴状	41	37.5	26		
4650	P	13SB16	31	49	134		26K13	円形	台形状	40	37	31		
4665	P	13SB16	31	49	134		26K7	円形	台形状	47	17	23		
4667	P	13SB16	31	49	134		25K10	円形	階段状	44	41	42		
4145	SK	13SB17	31	50	134		26I7	楕円形	半円状	(60)	46	27		
4162	SK	13SB17	31	50	134		26I3	楕円形	台形状	62	45	14		
4955	P	13SB17	31	50	120・134		26I18・19・ 23・24	楕円方形	台形状	48	48	42		
4957	P	13SB17	31	50	134		26I20・25	楕円方形	台形状	53	48	40		

観 察 表

8) 古代の掘立柱建物の柱穴の観察表 (5)

遺跡 番号	遺跡 種類	建物	分層 深度	柱間 間隔	写尺 間隔	遺物 深度	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4958	P	13SB17	31	50	134		26122	隅丸方形	台形状	59.5	56	107		
4960	P	13SB17	31	50	134		2619・10	隅丸方形	台形状	64.5	59	41		
4961	P	13SB17	31	50	134		26115	隅丸長方	台形状	70	58	36		
4962	P	13SB17	31	50	134		26121	隅丸方形	台形状	65	54	38		
4964	P	13SB17	31	50	134		26112・17	隅丸方形	台形状	57	48.5	34		
4638	P	13SB18	31	50	135		26120	円形	台形状	52	43	2		
4938	P	13SB18	31	50	135		26120	円形		42.5	40	19		
4941	P	13SB18	31	50	135		26123・24	方形	台形状	37.5	34	23		
4965	P	13SB18	31	50	135		26117・18	隅丸方形	台形状	56	50.5	43		
4966	P	13SB18	31	50	135		26114	隅丸方形	箱状	55.5	51	56		
4967	P	13SB18	31	50	135		2618・23	隅丸方形	台形状	55.5	54	38		
4968	P	13SB18	31	50	135		26114	隅丸方形	箱状	57	53	47		
4969	P	13SB18	31	50	135		26113・18	隅丸方形	箱状	51.5	42.5	36		
4970	P	13SB18	31・32	50	135		27121	隅丸方形	台形状	71	61	26		
4971	P	13SB18	31・32	50	135		27121・ 22.27K1・2	隅丸方形	箱状	59	56	22		
4972	P	13SB18	31	50	135		26K10	隅丸方形	台形状	45	37	16		
4973	P	13SB18	31	50	135		26K5	隅丸方形	台形状	58.5	53.5	27		
4656	P	13SB19	31	52	135		26K10・15	隅丸方形	箱状	45	42	30		
4974	P	13SB19	31	52	135		26K8・9・13 ・14	隅丸方形	箱状	49	49	29		
4975	P	13SB19	31	52	135		26K15・20	隅丸方形	台形状	49.5	48	24		
4976	P	13SB19	31・32	52	135		27K11・16	隅丸方形	台形状	48.5	48	28		
4977	P	13SB19	31・32	52	135		27K6	隅丸方形	箱状	48	47.5	24		
4979	P	13SB19	31・32	52	135		27K12・17	隅丸方形	台形状	53.5	51.5	30		
4982	P	13SB19	31・32	52	135		27K7	隅丸方形	台形状	52.5	48.5	32		
4984	P	13SB19	31・32	52	135		27K17・22	隅丸方形	台形状	60.5	49	29		
4985	P	13SB19	31・32	52	135		27K13・18	楕円形	台形状	51	41.5	28		
4986	P	13SB19	31・32	52	135		27K8	隅丸方形	箱状	51	42	68		
4187	P	13SB20	31	51	120・135		25122	隅丸方形	箱状	80	78	44	P4207>	
4188	P	13SB20	31	51	120・135	80・161	25123	隅丸方形	箱状	78	78	42		
4189	P	13SB20	31	51	120・135		25124	隅丸方形	階段状	94	84	46		
4223	P	13SB20	31	51	120・135		25121	楕円形	箱状	64	52	41	P5051>	
4634	P	13SB20	31	51	120・135		25113	方形		40	36	23		
5051	P	13SB20	31	51	120・135		25121	隅丸方形	箱状	86	84	30	P4209.P4223-P5051	
5052	P	13SB20	31	51	120・135		2511・6	方形	箱状	94	88	22		
5053	P	13SB20	31	51	120・135		2512・7	方形	箱状	80	80	16		
5054	P	13SB20	31	51	120・135		2513・8	方形	箱状	78	76	12		
5055	P	13SB20	31	51	120・135		2514・5	方形	箱状	74	72	16		
5056	P	13SB20	31	51	120・135		2515,26J1	方形	箱状	80	74	18		
5057	P	13SB20	31	51	120・135		25111	方形	階段状	88	86	34		
5058	P	13SB20	31	51	120・135		25112	方形	階段状	94	84	20		
5059	P	13SB20	31	51	120・135		25113・14	長方形	階段状	94	78	30		
5060	P	13SB20	31	51	120・135		25114・15	方形	箱状	86	80	22		
5061	P	13SB20	31	51	120・135		26J11	方形	箱状	72	66	16		
4281	P	13SB21	32・33	52	136		3013	隅丸方形	箱状	50	49	44	SD4273>	
4282	P	13SB21	32・33	52	136		3012	隅丸長方形	箱状	63	42	43	SD4272>	
4283	P	13SB21	32・33	52	136		3017	隅丸方形	箱状	55	50	38	SD4272>	
4284	P	13SB21	32・33	52	136		30112	隅丸方形	箱状	57	51	44		
4285	P	13SB21	32・33	52	136		30113	隅丸方形	箱状	50	49	39		
4286	P	13SB21	32・33	52	136		30114	隅丸方形	箱状	47	45	40		
4287	P	13SB22	33	52	136		30115	不整形長方形	箱状	70	54	40		
4288	P	13SB22	33	52	136		31111	隅丸方形	箱状	65	60	43		
4289	P	13SB22	33	52	136		31112	隅丸方形	箱状	85	85	49		
4290	P	13SB22	33	52	136		3117	不整形方形	箱状	65	57	28		
4291	P	13SB22	33	52	136		30110	隅丸方形	箱状	47	44	34		
5024	P	13SB23	33	53			31J21	円形	U字状	27.5	27	29		
5025	P	13SB23	33	53	136		31J16	円形	半円状	29	28.5	18		
5026	P	13SB23	33	53			31J12	長楕円形	階段状	45.5	27.5	30		
5027	P	13SB23	33	53			31J13	楕円形	半円状	41.5	34.5	23		
5028	P	13SB23	33	53			31J19	円形	U字状	35	30	34		
5029	P	13SB23	33	53			31K4	円形	弧状	32	29.5	12		
5030	P	13SB23	33	53			31K2・3	円形	U字状	32.5	28.5	26		
5031	P	13SB23	33	53			31K11	円形	U字状	29	25.5	23		
4775	P	13SB24	32	53			28K1	方形	台形状	90	57	42	P4775-P4830	
4778	P	13SB24	32	53	136		28K16	方形	台形状	97	88	39		
4830	P	13SB24	32	53	136		28K1	方形	台形状	67	61	40	P4775-P4830	
4838	P	13SB24	32	53			27K19	方形	台形状	86	71	31		
4847	P	13SB24	32	53	136		27K20	方形	台形状	77	74	35		
4850	P	13SB24	32	53			27K4	方形	台形状	63	56	42		
4852	P	13SB24	32	53			27K5	方形	台形状	68	65	34		

9) 古代の櫓の観察表

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2651	P	SA1	30	41			23G15	円形	U字状	28	12	25		
2662	P	SA1	30	41			24G16	円形	平円状	32	14	20		
2663	P	SA1	30・31	41			24G16	円形	竪状	20	12	10		
2708	P	SA1	30・31	41			24G17	円形	台形状	28	14	15		
2704	SA		30・31	42	100・116 ・117		24H14・24J17 24H10・25H3・ 25H10	-	U字状	2240 630	15	10-40	<SD2075・2210・ SK2083	小穴174 基

10) 古代の井戸の観察表

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2510	SE		30	38	110	73-75・ 167・ 158	23H18・23	方形	階段状	200	112	232	<SD2210・P2509	
4002	SE		29	54	137	76・159	20F18・19	方形	台形状	95	88	125		
4130	SE		31	54	137		26J21・22	円形	台形状	176	154	144		
4253	SE		32・33	24・54	137		30K12・13・ 17・18	円形	U字状	95	94	93	SD4785>	
4254	SE		33	54	137	76・159	31K23,31L3	円形	扇斗状	155	140	139		
4274	SE		33	55	138		30I20,25・ 31I16,21・ 30J5,31J1	円形	扇斗状	273	242	88		
4275	SE		32・33	54	138	76・159	30H11・12	円形	台形状	82	78	76	SD4270>	
4277	SE		32・33	55	138		30H16・17	円形	竪状	(127)	115	108	SG5080>	
4278	SE		34	55	138		33J5・10	隅丸方形	台形状	66	65	57		
4279	SE		34	55	138		34J14・15	円形	竪状	78	73	52		
4301	SE		31	55	138		25J21・22	方形	台形状	102	97.5	144		
4315	SE		32	55	138		28I4・5・9・ 10	円形	台形状	158	160	138		
4450	SE		32	55	139	76・159	28J16	方形	台形状	106	85	73		
4502	SE		31	56	139		26J5	本壘形	台形状	238	171	126		
4643	SE		32	56	139	76・159	27I20・25	方形	台形状	109	86	74		
4760	SE		31・32	56	139	76・159	27J13,14	円形	台形状	188	177	73		
4860	SE		32	56	139		27K15	方形	台形状	121	103	103		
4998	SE		33	56	139	76・159	30L22・23	方形	U字状	95	80.5	93		
5001	SE		33	56	140	76・159	31L5・10	方形	竪状	199.5	198.5	146		

11) 古代の土坑の観察表(1)

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1901	SK		28	39	111		16C4・9	楕円形	台形状	66	38	24	>P2830	
2175	SK		28	39	111	73・156	18H16	本壘形	台形状	80	50	40	<SD2144	
3191	SK		28	39	111	69・154	17H25	(楕円形)	台形状	230	102	22	<SD1031	
2192	SK		29	39	111		18I8・9	楕円形	階段状	114	84	36		
2239	SK		29	39	111	69・154	19H1・6	長方形	階段状	128	64	58	>P2240	
2288	SK		29	39	112	69・154	20F19・20	楕円形	台形状	116	88	20	>P2613	
2469	SK		30	39	112		23G2	長方形	台形状	82	64	25	<SD2299	
2498	SK		30	39	112	69・154	23H13	本壘形	台形状	182	130	28	>SK2499	
2499	SK		30	39			23H13・14	(本壘形)	台形状	(194)	(160)	16	<SK2498	
2506	SK		30	39	112		24H3・4・8・ 9	楕円形	台形状	62	54	10		
2530	SK		30	38	112	69・154	22G3	長方形	台形状	(138)	(77)	38	>SK2796・<SD2299, SE2368	
2600	SK		29・30	39	113	69・73 ・154・ 156	21G14・15・ 19・20	長方形	台形状	226	123	14		
2686	SK		29	41	113		19F14	楕円形	階段状	134	80	48	<SD2075	
2765	SK		29	40	113		19F4	本壘形	台形状	264	122	38		
2770	SK		30	40	113		19E23・24	(楕円形)	台形状	(120)	(118)	14		
2793	SK		29	40	113		21F18	楕円形	台形状	126	92	20		甌土に炭化物粒を微量含む。
2795	SK		30	40			22G3	円形	台形状	68	(44)	30	<SE2368・SK2530	
2807	SK		30	40			23H25,23I5, 24H21,24I1	楕円形	台形状	107	82	16		
2937	SK		29	40	113		19G5,20G1	円形	台形状	108	70	20		
2941	SK		29	40	114		19F15・20	長方形	台形状	96	90	6	<SD2144	
2965	SK		29	40	114	70・73 ・154・ 156	19F20	長方形	台形状	100	68	23		
3083	SK		30・31	40	114	70・154	24J1・2	楕円形	台形状	220	90	18	>P3090・<SA2704	
4003	SK		29	54	137		20F19	方形	台形状	110	82	28		
4046	SK		30	57	140		22K5,23K1	方形	台形状	68	39	23		
4048	SK		30	57	140		23K1・2	方形	台形状	81	63	36		
4058	SK		29	57	140		20F1	方形	台形状	102	57	18		
4074	SK		29	57	140	77・159	20F17	長方形	台形状	164	59	47		

観 察 表

11) 古代の土坑の観察表 (2)

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4113	SK		29	57	141		21G17	方形	台形状	105	86	30		
4131	SK		31	57	140	77・159	2519・10・14・15	円形	弧状	153	151	37	P4133・4134>	
4142	SK		31	57	141		25118	楕円形	台形状	58	44	33		
4146	SK		31	57	141		26120,26J16	長楕円形	台形状	321	60	21		
4156	SK		31	57	141	77・159	2711	長楕円形	台形状	105	65	31		
4163	SK		31	57	141		26114	長楕円形	平円状	87	49	25	13S82<	
4165	SK		31・32	57	141		27H16	楕円形	弧状	85	64	25	13S86<	
4214	SK		31	58	141		2519	円形	台形状	105	100	21		
4266	SK		34	58	141		35K14・15	円形	弧状	114	111	7		
4267	SK		33	58	142・150	76・159	31118・19・23・24	楕円方形	壘状	248	209	46		
4304	SK		31	58	142	77・159	25H17・18・22・23	楕円形	平円形	150	102.5	31		
4313	SK		31	58	142	77・159	26J21・22,26J1・2	長楕円形	壘状	240	143.5	11	P4314>・P4926	
4349	SK		31	58	143	77・159	25J20・26J16	不整形円形	台形状	145	93	39		
4363	SK		31	58	142	77・159	26J8・13	楕円方形	平円状	137.5	92.5	42	P4370・P4371>	
4390	SK		31・32	58			27K8・9・13・14	楕円方形	弧状	109	54	9	SD4389>	
4414	SK		32	59			28J21	方形	台形状	108	77	47	SK4414>・P4933	
4420	SK		32	23		77・159	28H17	方形	台形状	240	81	35	SK4430>・SK4420<・SD2075	
4425	SK		32	59	143	77・159	29H11・16	方形	台形状	210	156	34		
4430	SK		32	59	143	77・159	28H17・18	楕円形	台形状	179	59	27	SK4430>・SK4420<・P4441・P4442	
4449	SK		32	59	143		28J17	円形	平円状	87	82	32		
4451	SK		32	59	143		27J20	方形	台形状	124	107	24		
4455	SK		32	59	143		27J15,28J11	方形	台形状	113	101	66		
4480	SK		32	59	143		28J5	方形	扇状	84	78	38		
4501	SK		31	59	144		26J25・26J5	不整形円形	壘状	109.5	71	17		
4503	SK		31	59	144	77・159	26J9・10・14・15	楕円方形	平円状	102	100.5	23	P4365・P4504>	
4511	SK		31	59	144		25J3・4	不整形円形	平円状	55	39	13	>P4537<・SB9	
4605	SK		31・32	59	144	78・160	27J8	円形	台形状	105	90	57	P4382>	
4607	SK		31・32	60	144	78・160	27J12	楕円方形	弧状	100	67.5	14		
4628	SK		31	60	144	78・160	26J19・20	楕円方形	方形	157	146.5	57	>SK4629>・P4638<・SB18	
4629	SK		31	60	121・145	78・160	26J20・27J16	不整形円形	弧状	229	195	41	>SK4628	
4637	SK		31	60	145		26J23・26J3	不整形	壘状	73	65	8		
4640	SK		32	60	145		27J23・24・25	長楕円形	平円状	346	101	41	SD2075・SF4410>・>P4677・P4666・P4919・P4642・SE4643	
4732	SK		32	48・64	130・134・150		28K3	楕円形	平円状	81	68	42		
4770	SK		32	61	146		27K10	楕円形	台形状	157	86	51		
4779	SK		32	64	149		28K12・17	方形	壘状	104	86	19	SK4779>・SD4772	
4921	SK		31・32	61	146		27J4・9	円形	平円状	142.5	110.5	47		
5000	SK		32・33	63			30L18・19	円形	弧状	126	115	11	SX4999	

12) 古代の埴土主体土坑の観察表

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
2189	SF		28	40	114		17I3	楕円形	弧状	94	60	10		
2287	SF		28	40	114	70・155	17F20	楕円形	弧状 (82)	7(2)	6	<SD2075		
2522	SF		30	40	114		24H12	円形	弧状	44	32	7		
2939	SF		29	40			19F9	楕円形	弧状	50	36	5		
4261	SF		33	61	146		32K14	不整形円形	弧状	108	77	6		
4410	SF		32	61	121・146		27I23・24	楕円形	弧状			38		
4800	SF		32	61	121・146		28K20	方形	台形状	109	91	14		

13) 古代の性格不明遺構の観察表 (1)

遺構番号	遺構種類	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4001	SX		29	62	121	79・160	21G6・11他	方形	壘状	298	254	54		
4264	SX		34	62	147	79・160	35K18・20・23・25	不整形	弧状	610	212	22		
4265	SX		34	61	147	79・161	35K12・13・17・18	不整形円形	弧状	117	98	28		風倒木?
4864	SX		31・32	61	147		27J12・13	楕円形	台形状	167	115	64		

13) 古代の性格不明遺構の観察表 (2)

遺構番号	遺構種別	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考	
4999	SX		32・33	62・63	122・147	79・161	30L8・12・25, 30L1・5・9・ 10.31L8-17・ 21・22, 31M1・2・6・ 7・12	不整形	台形状				38		

14) 古代の溝の観察表

遺構番号	遺構種別	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
1948	SD		29	41	115		217・12	-	半円状	(188)	34	22		
2289	SD		29	41		70・154	2116・7	-	台形状	132	43	14		
2290	SD		29	35・41		70・154	2015, 21J1	-	台形状	206	34	19		
2497	SD		30	41	115		2318・9・13 ・14	-	半円状	278	34	16		
2604	SD		29・30	41	115	70・154	21G4-22G2	-	半円状	648	44	36		
2607	SD		30	41	115		23G25-24H6	-	弧状	374	98	18		
2682	SD		28	41	115		16E2・3	-	半円状	(376)	19	15		
2685	SD		29	41		70・154	19E17・18	-	台形状	(380)	45	11	<SE2044	
2788	SD		28	41	116		16F5-17E6	-	V字状	180	22	30		
2849	SD		28	41	116		16G5-17G6	-	弧状	118	14	8		
2866	SD		28	41	94・116		17G23-17H3	-	弧状	400	16	8		
2966	SD		29	41	116	70・154	19F13-15	-	弧状	(520)	30	9	<SD2144	
4004	SD		29	64	148		20E21・20F11	-	台形状	611	31	33		
4055	SD		29	64	148		20F2-20F7	-	弧状	271	27	9		
4112	SD		29	64	148		21G12-21H2	-	扇状	567	22	36		
4132	SD		31・32	23・64	148・149		27114-27110- 28116	-	台形状	643	112	36		
4228	SD		31	64	122		25H3-5	-	半円状	347	14 ~ 20	6~9		SA2704 風具か?
4236	SD		31・32	64			2714-14	-	弧状	432	35	10		
4288	SD		31・32	64	149		2711-4	-	半円状	697	20	30		
4446	SD		31・32	64	149		27116-28115	-	台形状	1823	14	31		
4447	SD		32	64	149		27125-28123	-	台形状	524	50	12		
4453	SD		32	64	149		27K4-28122	-	扇状	735	40	38		
4456	SD		32	64	148		28121-28126	-	U字状	427	37	24		
4506	SD		31	64	148		26J15-27111	-	弧状	279	33	21	P4385・、>P4943	
4507	SD		31	64	148		26J10・15	-	弧状	175	31	14	>P4942・P4946	
4635	SD		30・31	64	148		24J18-24J24	-	半円状	130	57	18	P4636-SD4635	
4642	SD		31・32	64	149		27118-27118	-	U字状	900	19	86	SD2075・SD4446・ SD4388・SK4605・ SK4864・、>P4937・ P4935・P4936	
4772	SD		31・32	64	149		27K23-28K12	-	弧状	1009	27	62	SD4772-SK4779	

15) 古代のピットの観察表

遺構番号	遺構種別	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4071	P		29		150	80・161	19F4・5	円形	弧状	63	57	23		
4651	P						26K8	円形	台形状	34	30	31		
4796	P		32	24			29K19	方形	半円状	41	20	18		
4846	P		31・32	64	150		27K9	方形	半円状	61	43	39		
4928	P		31		135		26I25	円形	台形状	27	26	9		
4987	P		31・32		135		27K8	円形	台形状	29.5	18	33		
5035	P		32・33	63			30L13	方形	扇状	45	35	35		
5036	P		32・33	63			30L14	方形	台形状	42	40	29		

16) 縄文時代・弥生時代の遺構の観察表

遺構番号	遺構種別	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な 切り合い	備考
3005	SI		30	42	117	75・158	22I19・24	方形	扇状	252	226	34		弥生時代の貯火建物
4100	SX		29		150		20G10	方形	弧状	123	91	-		縄文土器の集中産出

17) 近世以降の遺構の観察表

遺構番号	遺構種別	建物	分層 図版	傾斜 図版	写真 図版	遺物 図版	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	備考
4128	SD					80・161	25I6-25I22・ 28H23	-	台形状	-	39~ 82	11~ 41	SD2075.2531.4302c	-SD2491
4273	SD				127	80・161	30I3-30I14	-	台形状	-	71	16	P4281c	
2063	SD				71・155	17E7-18I14	-	半円状	(6300)	20-30	25			
4268	SX				76・159 ・161	30I17~20 ・31I11.12.16		扇状台形	台形状	1164	110	76	SD4272.4273.P4293 ~4296c	

観 察 表

土器・陶磁器類観察表 (2010・2013年度 中世の遺物) (1)

報告番号	種別	器種	分類	遺構番号	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部残存率	色調	胎土分類	底部処理	文様・調整など	備考
1	土師質土器	皿		-	19F7	Ⅱb	-	5.8	(1.4)	-	外: 浅黄 内: 浅黄		同赤	・ロクロナデ	
2	土師質土器	皿		-	18G23	Ⅳ	-	7.2	(1.8)	-	外: 灰白 内: 灰白			・ロクロナデ	
3	青磁	碗	Ⅱ型	-	20F15	Ⅱb	-	-	(1.4)	-	外: オリーブ灰 内: オリーブ灰			・鎌倉文 ・13世紀中頃～14世紀初頃前後	
4	青磁	碗	Ⅱb～Ⅳ型	-	20G7	Ⅱb	-	-	(1.5)	-	外: オリーブ灰 内: オリーブ灰			・鎌倉文 ・13～14世紀	
5	青磁	碗	Ⅱ型	SE2301	19F16	2	-	-	(2.7)	-	外: オリーブ灰 内: オリーブ灰			・鎌倉文	
6	青磁	杯	Ⅱ型	SD2367	23J2	1	-	-	(1.3)	-	外: 明緑灰 内: 明オリーブ灰			・鎌倉文	
7	白磁	飯 次皿	Ⅱ型	SD2075	23H17	1	-	5.6	(1.1)	-	外: 灰白 内: 灰白			・鎌倉文 ・13世紀後半～14世紀半	
8	瀬戸	天目茶碗	Ⅰ型	SE1704	16H1・6	2	-	4.1	(2.8)	-	外: 灰黄 内: 黒		同赤(右)	・(内外)鉄軸 ・煎り高台、登付に赤切り痕	・後日置 ・15世紀
9	瀬戸	天目茶碗	Ⅰ型	SD1764	19F1	1	-	3.2	(1.4)	-	外: 灰白 内: 黒		同赤(右)	・煎り高台、登付に赤切り痕	・後日置 ・16世紀
10	瀬戸	碗		SE1704 SE2389	16H1 21G8	2 3	15.2	-	(2.5)	4/36	外: 灰白 内: 灰白			・(内外)鉄軸	
11	瀬戸	碗		SE2348	19F25	1	8.8	-	(3.1)	5/36	外: 灰オリーブ 内: 灰オリーブ			・(内外)鉄軸	
12	瀬戸	碗		SKI700	16H9	2	-	4.0	(1.4)	-	外: 灰白 内: 灰黄		同赤(右)	・(内外)鉄軸 ・煎り高台、登付に赤切り痕	
13	瀬戸	碗		SE2173	18I6 17I10	4	-	-	(3.4)	-	外: 灰黄 内: 灰黄			・(内外)鉄軸	
14	瓦部	鉢鉢		SD1764	19F6	1	-	-	(3.9)	-	外: 褐灰 内: 褐灰			・ハラ切り	・中世後期
15	珠洲焼	甕		SE1704	16I36 16H1	2 5	-	-	(5.0)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸	・珠洲Ⅱ期
16	珠洲焼	甕		SD1764	19G18	1	-	-	(6.6)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸	・珠洲Ⅱ期
17	珠洲焼	甕		SD1764	19I25	1	-	-	(5.0)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸	
18	珠洲焼	壺		SE1701	16H24	2	-	-	(3.9)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸	
19	珠洲焼	壺		SE1976	21I16	断面	-	-	(8.5)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸 ・二次的に被焼→断面焼けはじけ	
20	珠洲焼	壺		SE2348	19F25	16	20.0	-	(7.9)	4/36	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ ・(内)無文で貝	・珠洲Ⅱ～Ⅲ期
21	珠洲焼	壺		SE2389	21G13	4	-	-	(22.8)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ ・縁板状 ・(内)無文で貝 ・ナデ、スス付着	・珠洲Ⅱ～Ⅲ期
22	珠洲焼	壺		SE1976	21I16	断面	-	-	(8.2)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ 自然軸 ・(内)無文で貝 ・ナデ、スス付着	
23	珠洲焼	甕		SE2444	22G10	6	-	-	(7.5)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ ・(内)スス付着	
24	珠洲焼	甕		SE2173	17I10 18I6	1	-	-	(6.6)	-	外: 灰 内: 灰黄			・(外)平行タタキ ・(内)無文で貝	・珠洲Ⅱ～Ⅲ期
25	珠洲焼	甕		SE1704	16H1	5	-	-	(11.8)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ ・(内)無文で貝 ・ナデ	
26	珠洲焼	壺		SE2268	21I8	7	-	14.4	(4.8)	-	外: 灰 内: 灰		同ヘラ?	・(外)ロクロナデ ・(内)自然軸 ・(底外)板目圧痕	
27	珠洲焼	壺		SE1976	21I16	断面	-	10.0	(5.4)	-	外: 灰 内: 灰			・(外)平行タタキ ・(底外)板目圧痕 ・(内)ロクロナデ ・二次的に被焼	
28	珠洲焼	片口鉢		SE2391	21F22	3	30.8	-	(9.5)	5/36	外: 灰 内: 灰			・ロクロナデ ・(内)脚目(幅2.2cm)11条	・珠洲Ⅳ期
29	珠洲焼	片口鉢		SE1704	16H1	2	30.4	-	(9.9)	5/36	外: 灰 内: 灰			・ロクロナデ ・(内)脚目(幅2.4cm)10条	・珠洲Ⅴ期
30	珠洲焼	片口鉢		SE2292	18F19	16	-	-	(1.7)	-	外: 灰 内: 灰			・ロクロナデ ・(口縁)縁状文	・珠洲Ⅴ期
31	珠洲焼	片口鉢		-	17F4	Ⅱb	22	-	(4.3)	3/36	外: 灰 内: 灰			・ロクロナデ、(外)縁状文 ・(内)脚目	・珠洲Ⅴ期
32	珠洲焼	片口鉢		-	21G18	Ⅱb	-	-	(1.7)	-	外: に近い濁 内: に近い濁			・(外)平行タタキ	
33	珠洲焼	片口鉢		SD2063	18H1	1	-	13.0	(4.2)	-	外: 灰オリーブ 内: 灰オリーブ			・(内)脚目 ・(底外)縁状文	
34	珠洲焼	片口鉢		SE2292 SD1764	18F19 19F6	7 1	-	18.6	(6.0)	-	外: 灰 内: 灰			・(内)脚目 ・(底外)板目圧痕	・珠洲Ⅴ期
35	珠洲焼	片口鉢		SE1704	16I36	3	-	12.0	(5.2)	-	外: 灰 内: 灰			・ロクロナデ ・(内)脚目(幅2.1cm)10条 ・二次的に被焼	・珠洲Ⅳ期

土器・陶磁器類観察表(2010・2013年度 中世の遺物)(2)

報告番号	種別	器種	分類	通稱番号	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部 残存率	色調	胎土 分類	底部 処理	文様・調整など	備考
36	珠洲焼	甕	SE2292	18F19	18	長:3.9 厚:1.6	幅:3.6	—	外:灰 内:灰	—	外:灰 内:灰	磨面	磨面・外面・右側 縁角	・転用研削具	
37	珠洲焼	甕	SD2075	24H5	1	長:5.5 厚:2.4	幅:7.3	—	外:灰 内:灰	—	外:灰 内:灰	磨面	磨面・外面石目・ 左側縁角・上面 ・口縁部反り	・転用研削具	
259	白磁	甕	SE4643	27I25	1	(14.0)	—	(1.7)	2/36	外:灰白 内:灰白	—	—	・内面に横位沈線 1条	・12世紀中頃	
260	青磁	碗	SD0275	30J4	—	—	—	—	—	外:オリーブ灰 内:オリーブ灰	—	—	・遺片文	・龍泉堂 ・13世紀中頃～ 14世紀初葉前後	
261	青磁	杯	即類	—	26I7	1b	13.0	—	1.8	6/36	外:オリーブ灰 内:オリーブ灰	—	・口縁部受け口状 ・内外面無文	・龍泉堂 ・13世紀中頃～ 14世紀初葉前後	
262	珠洲焼	甕	—	21H3	1	—	—	—	1/36	外:灰 内:灰	—	—	・(外)平行タタキ ・(内)無文当て具	・珠洲産	
263	珠洲焼	甕	SX4268	30I19	—	—	—	—	—	外:灰白 内:灰白	—	—	磨面	磨面・外面下側・ 中位に溝状	・転用研削具
264	珠洲焼	甕	—	20G20	攪乱	—	—	—	—	外:灰 内:灰	—	—	・(外)平行タタキ ・(内)無文当て具	—	
265	中世 陶器	磁鉢	—	27I10	IV	—	—	—	3/36	外:灰白 内:灰白	—	—	・口コナデ	—	

土器・陶磁器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(1)

報告番号	種別	器種	分類	通稱番号	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部 残存率	色調	胎土 分類	底部 処理	文様・調整など	備考
67	須恵系	有台杯	II 1類	SI2368	22G4	6・7	10.2	5.9	5.1	22/36	外:灰 内:灰	磨面	・口コナデ、ケズリ ・(内)灰被り	—	
68	須恵系	有台杯	II 1類	SI2368	22G4・5 22F23 22F24	4 1 1	11.6	8.0	3.9	1/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ ・口コナデ、ケズリ	—	
69	須恵系	有台杯	II 2類	SI2368	22G4・5	1・4	13.6	7.6	7.1	3/36	外:灰白 内:灰	磨面	・口コナデ、ケズリ	—	
70	須恵系	無台杯	II 1類	SI2368	22G4・5	1・6・7	11.5	8.2	3.0	36/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ ・口コナデ	—	
71	須恵系	無台杯	II 1類	SI2368	22G5	3・7	12.0	8.0	3.1	10/36	外:灰白 内:灰白	磨面	同へラ (左) ・口コナデ	—	
72	須恵系	無台杯	II 1類	SI2368	22G4	7	11.9	7.9	3.1	23/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ (左) ・口コナデ、(内)灰 被り ・(表外)飯目付焼	—	
73	須恵系	無台杯	II 2類	SI2368	22G5	7	12.0	8.2	2.9	9/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ ・口コナデ	—	
74	須恵系	無台杯	II 2類	SI2368	22G3・5	1・2・4 ～6	12.0	7.8	3.2	11/36	外:褐灰 内:褐灰	磨面	同へラ (左) ・口コナデ	—	
75	須恵系	無台杯	II 2類	SI2368	22G4	6・7	12.3	7.3	3.6	28/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ (左) ・口コナデ、ケズリ ・(内)灰被り	—	
76	須恵系	無台杯	II 2類	SI2368	22G5	7	12.0	8.4	3.0	31/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ (左) ・口コナデ ・(表外)飯目付焼	—	
77	須恵系	無台杯	II 2類	SI2368	22G4	5・7	12.4	8.8	3.3	22/36	外:灰 内:灰	磨面	同へラ (左) ・口コナデ ・(表外)飯目付焼	—	
78	土師系	小甕	SI2368	22G4	7	—	8.7	(1.5)	—	外:改良 内:無文	—	同高 (右)	・口コナデ	—	
79	須恵系	甕	SI2368	22G4	8	—	—	(5.9)	—	外:灰 内:灰白	磨面	・口コナデ	—		
80	土師系	小甕	SI2368	22G4	6	11.0	—	(5.1)	6/36	外:にぶい 内:浅褐色	—	—	・口コナデ	—	
81	土師系	小甕	SI2368	22G3	5	12.0	—	(5.3)	6/36	外:にぶい 内:灰被り	—	—	・口コナデ ・(内)去キメ	—	
82	土師系	小甕	SI2368	22G5	7	14.4	—	(3.9)	3/36	外:にぶい 内:浅褐色	—	—	・口コナデ、カキメ	—	
83	土師系	小甕	SI2368	22G4	7・8	13.5	—	(8.0)	3/36	外:にぶい 内:浅褐色	—	—	・口コナデ	—	
84	土師系	長甕	B 類	SI2368	22G4	5	20.0	—	(4.8)	1/36	外:灰 内:灰白	—	・口コナデ	—	
85	須恵系	杯蓋	B 類	SI3048	24J0	3	12.8	—	2.4	4/36	外:灰 内:灰	A磨	・口コナデ ・(外)上平口コナデ	—	
86	須恵系	杯蓋	C 類	SI3048	24J10	床土	14.0	—	(1.3)	4/36	外:灰 内:灰	B磨	・口コナデ ・(外)上平口コナデ	—	
87	須恵系	有台杯	II 1類	SI3048	22J10 24J9 24J10	3・4 3 4b	10.8	6.8	4.6	26/36	外:灰 内:灰	A磨	・口コナデ、ケズリ	—	
88	須恵系	有台杯	II 1類	SI3048	24J9	3・4	10.6	6.2	4.6	8/36	外:灰 内:灰	A磨	同へラ (右) ・口コナデ、ケズリ	・滑潤可能 性あり	
89	須恵系	有台杯	SI3048	24J9	3	—	8.0	(1.9)	—	外:灰 内:灰	A磨	同へラ ・口コナデ、ケズリ	—		
90	須恵系	有台杯	SI3048	24J9	4	15.4	—	(5.0)	4/36	外:灰 内:灰	A磨	・口コナデ	—		
91	須恵系	無台杯	II 1類	SI3048	24J9	6上	11.8	8.6	3.7	8/36	外:灰白 内:灰白	A磨	同へラ ・口コナデ	—	
92	須恵系	無台杯	II 2類	SI3048	24J9	4	12.8	8.4	3.4	10/36	外:灰白 内:灰白	A磨	同へラ (右) ・口コナデ	—	
93	須恵系	無台杯	II 2類	SI3048	24J9	4	12.3	8.2	3.8	31/36	外:灰白 内:灰白	A磨	同へラ (右) ・口コナデ ・(表外)飯目付焼	—	
94	須恵系	無台杯	IV 2類	SI3048	24J9	6上	13.0	7.0	3.0	11/36	外:灰白 内:灰	A磨	・口コナデ	—	

観 察 表

土器・陶器類観察表 (2010・2013年度 古代の遺物) (2)

報告番号	種類	別種	分類	通連番号	出土地点	層位	1径 (cm)	2径 (cm)	高さ (cm)	1径部残存率	色調	胎土分類	底面切磨し	文様・調整など	備考
95	須恵系	無台杯	IV2類	SI3048	24J4	3	13.3	6.5	3.2	18/36	外:灰白 内:灰白	A群	両面(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
96	須恵系	有台杯		SI3048	24J9	6	—	9.0	(4.8)	—	外:灰 内:灰	B群	両へう	・ロクロナデ、ケズリ	
97	須恵系	無台杯	II2類	SI3048	24J9 24J10	6上 床上	12.0	8.5	3.1	3/36	外:灰 内:灰	B群	両へう(左)	・ロクロナデ ・(底外)板目直線	
98	須恵系	無台杯	II1類	SI3048	24J10 24J14	4b・6 6上	11.5	7.5	3.5	3/36	外:灰 内:灰	C群	両へう	・ロクロナデ	
99	土師系	小壺		SI3048	24J9.10	4a・6 上	—	6.0	(3.7)	—	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
100	土師系	小壺		SI3048	24J9	4	—	7.0	(4.4)	—	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
101	土師系	小壺		SI3048	24J10	4a	12.0	—	(2.7)	3/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
102	土師系	小壺		SI3048	24J9	6上	11.4	—	(4.6)	3/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
103	土師系	小壺		SI3048	24J10	4	11.4	—	(4.8)	6/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
104	土師系	小壺		SI3048	24J9	4	14.8	—	(2.8)	3/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
105	土師系	小壺		SI3048	24J9	6上	15.6	—	(3.3)	2/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
106	土師系	小壺		SI3048	24J10	4a	13.8	—	(3.8)	9/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
107	土師系	長壺	B類	SI3048	24J4	4	19.7	—	(5.2)	4/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
108	土師系	長壺	C類	SI3048	24J4	6上	20.6	—	(6.3)	8/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
109	土師系	長壺		SI3048	24J9	6上	—	4.0	(5.3)	—	外:に灰い 内:に灰い			・(外)平行タタキ ・(内)内面竹葉・ナデ	
110	土師系	小壺		SK2191	17H25	4	12.0	—	(2.6)	4/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
111	須恵系	無台杯		SD2209 SD2067 SK2239	17H6 18H12 19H1 19H16	1 1 1 IV	—	7.2	(1.7)	—	外:灰白 内:灰白	A群	両面(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
112	須恵系	有台杯	II1類	SK2498	23H13	1	10.0	6.2	3.5	2/36	外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
113	須恵系	無台杯		SK2239	19H1	2	11.8	—	(2.8)	3/36	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ	
114	土師系	長壺	C類	SK2239	19H1	4	19.6	—	(5.1)	2/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ、カキメ	
115	須恵系	無台杯	II1類	SK2388	20F14 20F20	fb 1	11.0	7.2	3.1	12/36	外:灰 内:灰	B群	両へう	・ロクロナデ ・(底外)板目直線	
116	須恵系	無台杯	II1類	SK2388	20F20	1	11.4	8.4	3.2	8/36	外:灰白 内:灰白	B群	両へう	・ロクロナデ	
117	須恵系	無台杯	II1類	SK2388	20F20	1	11.8	8.6	3.1	9/36	外:灰 内:灰	B群	両へう	・ロクロナデ ・(底外)板目直線	
118	須恵系	無台杯	II2類	SK2388	20F15 20F20	Vb 5	12.4	9.0	2.9	5/36	外:灰白 内:灰白	B群	両へう(左)	・ロクロナデ	
119	須恵系	無台杯		SK2498	23H13	1	10.6	—	(2.2)	3/36	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ	
120	須恵系	無台杯		SK2498	23H5	2	11.4	—	(2.9)	4/36	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ	
121	須恵系	無台杯	I2類	SK2530	22G3	2	12.4	9.8	3.0	6/36	外:灰 内:灰	B群	両へう(左)	・ロクロナデ	
122	土師系	小壺		SK2530	22G3	2	13.8	—	(6.7)	1/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
123	土師系	長壺	C類	SK2530	22G3	2	19.8	—	(16.0)	12/36	外:に灰い 内:に灰い			・ナデ、ケズリ	
124	須恵系	有台杯		SK2600	21G14	3	—	8.0	(2.2)	—	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ、ケズリ	
125	須恵系	無台杯	II2類	SK2600	21G14	1・2	12.0	7.8	3.0	12/36	外:灰 内:灰	B群	両へう(左)	・ロクロナデ	
126	須恵系	無台杯	II2類	SK2600	21G14	4	12.0	7.8	2.8	2/36	外:灰 内:灰	B群	両へう	・ロクロナデ	
127	須恵系	無台杯		SK2600	21G15	3	12.6	—	(2.8)	3/36	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ	
128	須恵系	壺		SK2600	21G19	4	15.6	12.5	2.0	29/36	外:黒灰 内:黒灰	C群	両へう(右)	・ロクロナデ	
129	土師系	小壺		SK2600	21G15	2	11.6	—	(2.9)	5/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
130	土師系	小壺		SK2600	21G19	4	—	7.8	(4.9)	—	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
131	土師系	小壺		SK2600	21G14	2	13.0	—	(5.3)	4/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
132	土師系	長壺	B類	SK2600 SD2496	21G14・19 22H5	2 4	18.4	—	(19.3)	4/36	外:に灰い 内:に灰い			・ナデ ・(外)平行タタキ ・(内)内面竹葉・ナデ	
133	須恵系	無台杯	II1類	SK2965	19F20	1	11.6	8.0	3.1	6/36	外:灰 内:灰	B群	両へう	・ロクロナデ	
134	土師系	長壺	B類	SK3083	24J2	2	20.0	—	(4.2)	2/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ	
135	土師系	長壺	C類	SD2289	21J7	1	21.8	—	(5.3)	6/36	外:に灰い 内:に灰い			・ロクロナデ、カキメ	

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(3)

報告番号	種類	形種	分類	遺物番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1線部残存率	色調	胎土分類	底面処理	文様・調整など	備考
136	土師器	長巻	B類	SD2289	21J7	2・3	18.6	—	(10.8)	6/36	外:灰白 内:こぶしい黄緑			-ロクロナデ	
137	土師器	長巻	C類	SD2289	21J7	1	23.4	—	(11.0)	6/36	外:灰白 内:黄緑			-ロクロナデ、カキメ	
138	土師器	碗		SD2289	21J7	3	—	4.5	(2.1)	—	外:黄緑 内:橙		同色(右)	-ロクロナデ	
139	土師器	碗		SD2290	21J1	1	13.8	—	(6.4)	6/36	外:灰黄 内:浅黄			-ロクロナデ	
140	須恵器	無台杯	Ⅱ2類	SD2496	22H4 24H4	1	13.0	8.6	3.0	10/36	外:灰 内:灰	A群	同色(右)	-ロクロナデ ヒダスキ模(内外・直線)	
141	須恵器	無台杯	SD2604	21G5	2	11.6	—	(2.7)	5/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ		
142	須恵器	無台杯	Ⅲ1類	SD2604	22G2 21G4	1 2	11.4	7.3	3.2	15/36	外:灰 内:灰	B群	同ヘラ(左)	-ロクロナデ	
143	須恵器	甕		SD2604	21G4・5 21G5	1・2 1	16.4	—	(15.0)	13/36	外:灰オリーブ 内:灰			・(外)格子タタキ、ナデ ・(内)同心円当て具	薄手
144	土師器	長巻	B類	SD2604	22G1	2	17.2	—	(3.8)	3/36	外:浅黄 内:浅黄			-ロクロナデ	
145	須恵器	無台杯	Ⅱ1類	SD2685 SE2044	19E18 19E17	1 2	11.0	8.0	2.6	5/36	外:黄灰 内:黄灰	B群	同ヘラ	-ロクロナデ	
146	須恵器	無台杯		SD2685	19E18 19E23	1 V	11.6	—	(2.7)	10/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ	
147	須恵器	無台杯	Ⅱ2類	SD2685	19E18	1	12.2	8.8	2.8	13/36	外:灰 内:灰	B群	同ヘラ	-ロクロナデ	
148	須恵器	杯蓋	2類	SD2685	19E17	1	13.3	—	2.5	2/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
149	須恵器	有台杯		SD2075 SD2966	19F14 19F15	3	16.2	—	(5.6)	4/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ	
150	須恵器	杯蓋	2類	P2908	18I1	1	12.9	—	2.9	29/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
151	須恵器	無台杯	Ⅳ2類	SP2287 SD2075	17F19 17F20	8 1	12.5	6.3	3.2	15/36	外:灰 内:灰	A群	同色(右)	-ロクロナデ ヒダスキ模(内外・直線)	
152	須恵器	杯蓋	1類	—	4明	1a	12.0	—	(2.0)	4/36	外:灰白 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
153	須恵器	杯蓋		SD2075	24G7	3	—	(2.7)	—	—	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
154	須恵器	杯蓋	2類	—	17E3	Iva	13.0	—	(1.8)	1/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
155	須恵器	杯蓋	2類	P2483 —	24G15 24H11	1 Iva	12.2	—	1.7	2/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
156	須恵器	杯蓋	—	23G24	1b	—	—	(0.9)	—	—	外:赤灰 内:赤灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
157	須恵器	有台杯	—	19H10	Iva	—	7.2	(2.8)	—	—	外:灰 内:灰	A群	同ヘラ	-ロクロナデ、ケズリ	
158	須恵器	有台杯	12類	—	15H15	Iv	12.2	7.1	3.9	2/36	外:黄灰 内:黄灰	A群	同ヘラ	-ロクロナデ、ケズリ	
159	須恵器	有台杯	13類	—	16E25	Ib	14.1	7.2	5.0	4/36	外:灰白 内:灰	A群	同ヘラ	-ロクロナデ、ケズリ	
160	須恵器	有台杯	—	17H4 18H12	—	IV	14.4	—	(6.0)	13/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ	
161	須恵器	有台杯	—	4明	不明	—	7.0	(5.2)	—	—	外:灰 内:黄灰	A群		-ロクロナデ、ケズリ	
162	須恵器	有台杯	—	21J20 22I4	—	Ib, V	13.2	—	(7.8)	5/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ、ケズリ ・(外)浅線1条通る	
163	須恵器	有台杯	—	18G8	—	Iva	—	9.0	(3.3)	—	外:黄灰 内:灰	B群	同ヘラ	-ロクロナデ、ケズリ	
164	須恵器	有台杯	—	SD2063 — —	18H1 17H3 17G24	— IV IV	—	9.0	(4.6)	—	外:暗黄灰 内:灰	B群		-ロクロナデ、ケズリ	
165	須恵器	有台杯	—	SD2299	22G3	1	14.6	—	(6.1)	9/36	外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ	
166	須恵器	有台杯	—	—	15H9	Iva	12.8	—	(3.7)	5/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ	折縁杯?
167	須恵器	有台杯	Ⅲ3類	P2106 — — —	17G13・20 17H10 18G18 18G17	1 IV IV 1b	14.6	10.0	7.4	6/36	外:黄灰 内:黄灰	B群		-ロクロナデ、ケズリ ・(外)浅線1条通る	
168	須恵器	有台杯	—	21H16	Ib	1b	13.4	—	(4.4)	2/36	外:暗赤灰 内:黄灰	A群		-ロクロナデ	
169	須恵器	無台杯	—	19H9	Iva	—	8.8	(2.0)	—	—	外:灰白 内:灰	C群	同ヘラ	-ロクロナデ	
170	須恵器	無台杯	Ⅲ1類	—	23K22	V	11.6	7.0	3.5	4/36	外:灰白 内:灰	A群	同ヘラ	-ロクロナデ	
171	須恵器	無台杯	—	16F6	Ib	1b	13.6	—	(3.6)	5/36	外:黄灰 内:黄灰	A群		-ロクロナデ	
172	須恵器	無台杯	Ⅳ2類	—	24I1	V	13.3	6.9	3.5	14/36	外:灰 内:灰	A群	同色(右)	-ロクロナデ ヒダスキ模(内外・直線)	
173	須恵器	折縁杯	—	18I9	Iva	1a	12.0	—	(2.9)	2/36	外:黄灰 内:黄灰	A群		-ロクロナデ	
174	須恵器	無台杯	—	24H11	Va	1a	10.8	—	(3.2)	4/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ	

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(4)

報告番号	種類	別称	分類	連続番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1線部残存率	色調	出土分類	底部切通し	文様・調整など	備考
175	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	18G24 18G15 18G23	Ⅳ	13.0	8.4	3.0	4/36	外:灰 内:灰	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
176	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	22H13・ 14	Ⅱb	12.4	8.0	3.0	1/36	外:灰 内:灰	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
177	須恵器	無台杯	—	—	34H11	Va	10.0	—	(2.8)	5/36	外:灰 内:灰	A群	—	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
178	須恵器	無台杯	—	—	17F13	Ⅳ	—	72	(1.9)	—	外:灰白 内:灰白	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
179	須恵器	無台杯	—	—	22G3・25	Ⅱb	—	6.5	(1.5)	—	外:灰 内:灰	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
180	須恵器	無台杯	—	—	19E17	V	—	6.8	(1.6)	—	外:灰白 内:灰白	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
181	須恵器	無台杯	Ⅳ2型	—	19H.10	V	13.8	7.4	3.2	14/36	外:灰白 内:灰白	A群	同糸(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ織(内外・直織)	
182	須恵器	無台杯	Ⅲ1型	—	16F25 16G20	Ⅱb	11.0	6.8	2.9	5/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
183	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	17E23	Va	12.0	8.6	3.0	7/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
184	須恵器	無台杯	Ⅱ1型	—	19F8	Ⅱb	11.5	8.0	3.2	10/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
185	須恵器	無台杯	Ⅱ1型	—	19F11	Ⅱb	11.6	8.0	3.3	3/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
186	須恵器	無台杯	Ⅱ1型	—	18G3	ⅡVa	11.6	7.8	3.0	7/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
187	須恵器	無台杯	Ⅲ1型	—	24G23	Ⅱb	11.7	7.1	3.3	3/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
188	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	18G1	Ⅱb	12.0	8.0	2.8	4/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
189	須恵器	無台杯	Ⅲ2型	—	21H8	V	12.0	7.4	3.1	8/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
190	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	18F15 18G8・9 18G4・15 19F11	Ⅱb Ⅱb ⅡVa Ⅱb	12.0	8.2	2.7	4/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
191	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	19F15	Ⅱb	12.0	8.8	2.9	12/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ ・(底外)敷目直織	
192	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	17F21	Ⅱb	12.6	8.2	3.0	7/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
193	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	16H11・ 12	Ⅳ	13.2	9.4	3.8	2/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
194	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	SD2075	17H14	I	13.0	8.6	3.2	1/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	体取崩出
195	須恵器	無台杯	—	—	19F15	Ⅱb	11.6	—	(2.7)	12/36	外:灰 内:灰	B群	—	・ロクロナデ	
196	須恵器	無台杯	Ⅱ1型	—	22H4 22H10	V	11.8	8.6	2.7	5/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
197	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	16G20	V	12.0	8.2	3.2	28/36	外:灰 内:灰	B群	同へう(左)	・ロクロナデ	突き刺し 敷
198	須恵器	無台杯	Ⅱ1型	—	19G7.12	Ⅱb	11.8	8.4	2.7	7/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
199	須恵器	無台杯	Ⅱ2型	—	23H11	Ⅱb	13.0	9.8	2.8	1/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
200	須恵器	甕	—	—	18F12 17F20 18G8 17E24 17F16 17F13・14 17~20.24 18F16 18G2 17F19 17F13.14	1 5 1 Ⅱb Ⅳ Ⅱb V Va	22.4	—	51.6	5/36	外:灰 内:灰	A群	—	・(口縁)ナデ ・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具	
201	須恵器	壺	—	—	23J6 表土割差	Ⅱb Ⅱa	17.0	—	(7.2)	4/36	外:灰白 内:灰白	C群	—	・ロクロナデ	
202	須恵器	長頸壺	SD2210	18H15	2	—	—	(4.8)	—	—	外:灰白 内:灰	C群	—	・ロクロナデ	
203	須恵器	長頸壺	SD2210	18H14	1	—	—	(5.1)	—	—	外:灰白 内:灰	C群	—	・ロクロナデ	
204	土師器	甕	SD2288	21J9	2	—	4.4	(2.0)	—	—	外:灰白 内:灰	同糸(右)	—	・ロクロナデ	
205	土師器	小甕	—	20I25	V	15.4	—	(6.5)	4/36	—	外:浅黄 内:浅黄	—	—	・ロクロナデ	
206	土師器	長甕	A型	—	18H13	Ⅳ	19.0	—	(5.9)	3/36	外:浅黄 内:浅黄	—	—	・ナデ	
207	土師器	長甕	C型	—	17I3	Ⅱb	20.6	—	(4.4)	3/36	外:明黄 内:明黄	—	—	・ナデ	
208	土師器	長甕	—	16G15	V	—	9.6	(6.9)	—	—	外:にぎり黄緑 内:にぎり黄緑	—	—	・ロクロナデ	

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(5)

報告 番号	種別	器種	分類	連続番号	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部 残存率	色調	出土 状況	底部 切離し	文様・調整など	備考
266	須恵系	無台杯	SE4002	20F18・19	1	—	8.0	(2.9)			外:オリーブ灰 内:オリーブ灰	B群	同へラ	・ロクロナデ	
267	土師系	小壺	SE4002	20F18・19	7	15.2	—	(4.1)	8/36		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
268	土師系	小壺	SE4002	20F18・19	8	13.6	—	(7.2)	8/36		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・(内)ハケメ、スス付 着	
269	須恵系	有台杯	SE4254	31K23	6	12.0	—	(2.7)	5/36		外:灰 内:灰白	A群		・ロクロナデ	
270	須恵系	有台杯	SE4254	31K23	2	—	9.0	(2.7)			外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ	
271	須恵系	有台杯	SE4254	31K23	2	—	7.4	(1.8)			外:灰白 内:灰白	C群		・ロクロナデ、ケズリ	
272	須恵系	有台杯	SE4254	31K23	6	—	6.0	(1.8)			外:灰白 内:灰白	C群		・ロクロナデ、ケズリ	
273	須恵系	有台杯	SE4275	30I11・12	—	—	7.5	(1.0)			外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
274	須恵系	杯蓋	SE4450	28I16	5	—	—	(1.3)			外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
275	須恵系	壺・ 瓶類	SE4760	27I14	1	—	—	4.8			外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ	
276	須恵系	壺・ 瓶類	SE4998	30I23 30M3	2	—	—	—			外:灰 内:灰	C群		・(外)ロクロナデ、赤 キヌ ・(内)ナデ	
277	須恵系	無台杯	SE5001	31I10	—	—	7.8	(0.8)			外:灰 内:灰	A群	同赤	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・ 底縁)	
278	須恵系	無台杯	SE5001	31I10	—	—	8.0	(2.4)			外:灰 内:灰	B群	同へラ	・ロクロナデ	
279	須恵系	杯蓋	SK4267	31I24	—	14.0	—	(2.7)	4/36		外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
280	須恵系	有台杯	II3類	SK4267	31I24	—	14.8	9.0	6.0	6/36	外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ	
281	須恵系	無台杯	III2類	SK4267	31I24	—	13.0	7.6	3.1	7/36	外:灰 内:灰	B群	同へラ	・ロクロナデ	
282	須恵系	無台杯	II2類	SK4267	31I24	—	12.6	8.2	2.8	9/36	外:灰 内:灰	B群	同へラ	・ロクロナデ	
283	須恵系	無台杯	SK4267	31I24	8	12.6	—	(3.6)	5/36		外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ	
284	須恵系	無台杯	SK4267	31I24	—	—	8.4	(1.9)			外:灰 内:灰	B群	同へラ	・ロクロナデ	
285	須恵系	円面碗	SK4267	31I24	5 (底面)	12.0	14.0	9.0	10/36		外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ ・外面浅緑文、方形透 かし ・底縁あり	
286	須恵系	壺	SK4267	31I24	8	—	—	—			外:灰 内:灰	C群		・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具痕	
287	土師系	碗	SK4267	31I19	—	13.0	5.6	3.5	4/36		外:灰白 内:灰		同赤 (右)	・ロクロナデ	
288	土師系	碗	SK4267	31I24	—	13.0	—	(2.6)	7/36		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
289	土師系	碗	SK4267	31I24	—	12.0	—	(3.8)	6/36		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
290	土師系	碗	SK4267	31I24	—	—	3.2	(1.0)			外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
291	須恵系	有台杯	II3類	SK4074	20F17	3	15.3	8.7	7.6	1/36	外:灰 内:灰	A群	同へラ (右)	・ロクロナデ、ケズリ	
292	土師系	長壺	B類	SK4131	25I14	—	16.0	—	(5.6)	6/36	外:灰白 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
293	須恵系	無台杯	II3類	SK4156	27I1	—	14.1	9.2	3.1	6/36	外:灰 内:灰白	A群	同へラ (右)	・ロクロナデ	
294	須恵系	無台杯	SK4156	27I1	1	(12.8)	—	2.6	5/36		外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・ 底縁)	
295	須恵系	無台杯	II1類	SK4304	25I23	3・5	11.6	7.8	3.0	9/36	外:灰 内:灰	B群	同へラ (左)	・ロクロナデ ・(底縁)飯目付痕	
296	土師系	長壺	A類	SK4304	25I22	5	20.0	—	(3.3)	4/36	外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
297	土師系	長壺	SK4304	25I23	3	—	—	—			外:橙 内:二色(編)			・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具	
298	土師系	長壺	SK4304	25I23	4	—	—	—			外:浅黄緑 内:浅黄緑			・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具	
299	須恵系	無台杯	II2類	SK4313	26I1	4	12.1	8.3	3.6	29/36	外:灰白 内:灰白	C群	同へラ (右)	・ロクロナデ ・(口縁)黒色付着物	
300	須恵系	無台杯	III1類	SK4313	26I1	5	12.0	7.0	3.2	12/36	外:灰白 内:灰白	A群	同へラ	・ロクロナデ	
301	須恵系	無台杯	II2類	SK4313	26I1	1	(12.4)	(8.4)	3.0	2/36	外:灰白 内:灰白	B群	同へラ	・ロクロナデ ・(底縁)摩耗で平滑な 面あり	
302	須恵系	無台杯	SK4313	26I1	5	—	8.8	(1.6)			外:青白子一灰 内:灰白	B群	同へラ (左)	・ロクロナデ	
303	須恵系	短頸壺	SK4349	25I20 26I21	2 IV	—	11.0	(10.1)	11/36		外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ ・黒痕あり	
304	須恵系	折縁杯	SK4363	26I8	2	12.6	7.8	3.8	23/36		外:灰 内:灰白	A群	同へラ	・ロクロナデ、ケズリ	
305	須恵系	無台杯	IV2類	SK4363	26I8	1・3	13.4	6.6	3.2	29/36	外:灰 内:灰	A群	同赤 (右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・ 底縁)	

観察表

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(6)

報告番号	種類	形種	分類	遺構番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1径部残存率	色調	胎土	底面処理	文様・調整など	備考
306	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SK4363	2638	3	13.2	7.2	3.3	20/36	外:灰 内:灰	A群	同糸	・ロクロナデ ・ヒダス年痕(外・直線)	
307	須恵系	有台杯		SK4363	2638	3	12.0	-	(2.5)	5/36	外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ	
308	土師系	小壺		SK4363	2638	3	13.6	-	(5.4)	4/36	外:橙 内:浅黄緑			・(外)スス付着 ・(内)スス付着	
309	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SK4420	28117	2	12.7	8.2	3.0	12/36	外:灰白 内:灰白	B群	同へう (左)	・ロクロナデ	
310	須恵系	無台杯		SK4420	28117	-	13.0	-	(2.7)	5/36	外:明オリーブ灰 内:明オリーブ灰			・ロクロナデ	
311	土師系	椀		SK4420	28117	2	13.0	-	(4.0)	9/36	外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
312	土師系	椀		SK4420	28117	2	-	6.8	(0.7)		外:浅黄緑 内:灰白			・ロクロナデ	
313	土師系	小壺		SK4420	28117	2	14.0	-	(4.8)	8/36	外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
314	須恵系	無台杯		SK4425 A	29116	4・5	-	8.4	(1.8)		外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ ・(底外)飯目圧痕	
315	須恵系	有台杯	Ⅲ1類	SK4430	28117・18	1	9.2	6.2	5.4	7/36	外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ、ケズリ	
316	土師系	長壺		SK4503	2639	1	-	-	-		外:浅黄緑 内:橙			・(外)平行タタキ	
317	土師系	長壺		SK4503	2639	2	-	-	-		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・(外)平行タタキ、スス付着	
318	須恵系	有台杯		SK4605	2738	2・3	15.0	-	(5.0)	9/36	外:灰白 内:灰	A群		・ロクロナデ	
319	須恵系	折縁杯		SK4605	2738	9	12.6	-	(2.8)	10/36	外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ ・ヒダス年痕(内・直線)	
320	土師系	長壺		SK4607	2732	1	-	-	-		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・(外)平行タタキ	
321	土師系	鍋?		SK4607	2732	1	30.0	-	-	3/36	外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ	
322	須恵系	杯蓋		SK4628	26320	1	-	-	(1.6)		外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ ・(外)上半口ロケズリ	
323	須恵系	有台杯	Ⅱ2類	SK4628	26320	4	12.6	8.0	4.0	6/36	外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ	粘用磁
324	須恵系	無台杯		SK4628	26320	3	-	8.0	(1.0)		外:灰白 内:灰白	B群	同へう	・ロクロナデ	
325	須恵系	無台杯		SK4629	26315	9	-	8.0	2.2		外:灰白 内:灰白	B群	同へう	・ロクロナデ	
326	須恵系	壺		SK4629	26320	3	-	-	-		外:灰白 内:灰白	A群		・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具 ・(口縁)十字 磨輪状 工具による5条ノミ の痕状文が2段 ・(外)平行タタキ ・(内)同心円・横円当 て具、ハケメ	
327	須恵系	壺		SE4760 SE4760 SK4629 P4368 SE4277 30116 3031	27114 27113・14 26320,27316 2736 30116 3031	1 1 2 3 1 1	63.0	-	95.0	11/36	外:灰 内:灰	A群		・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具 ・(口縁)十字 磨輪状 工具による5条ノミ の痕状文が2段 ・(外)平行タタキ ・(内)同心円・横円当 て具、ハケメ	
328	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4001	21G11	5	12.2	8.6	3.5	6/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
329	須恵系	壺		SX4001 -	21G6 19F5	5 1	(58.0)	-	(7.2)	1/36	外:灰白 内:灰白	A群		・ロクロナデ	
330	土師系	小壺		SX4001	21G11	5	-	7.8	(3.9)		外:橙 内:橙			・(内)カキメ	
331	須恵系	有台杯		SX4264	35K25	-	-	8.0	(2.3)		外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ	
332	須恵系	折縁杯		SX4264 -	35K25 35L5	IV	14.0	6.0	4.2	12/36	外:灰白 内:灰	A群		・ロクロナデ、ケズリ ・(底外)へう状「文」	
333	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4264	35K24, 35K18	1	12.4	7.2	(2.9)		外:灰 内:灰	A群	同糸 (右)	・ヒダス年痕(内外・直線)	
334	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4264	35K23・24 ・25	1	12.3	7.4	2.7	6/36	外:灰 内:灰	A群	同糸 (右)	・ロクロナデ ・ヒダス年痕(内外・直線)	
335	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4264	35K23	1	12.7	8.8	3.2	31/36	外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	・ロクロナデ	
336	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4264	35K23	1	12.2	8.0	3.6		外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	・ロクロナデ	
337	須恵系	無台杯	Ⅱ1類	SX4264	35K25	-	10.8	7.6	3.0	2/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	・ロクロナデ	
338	須恵系	無台杯		SX4264	35K23	1	-	7.2	0.6		外:明オリーブ灰 内:オリーブ灰		同へう (左)	・ロクロナデ	
339	須恵系	壺		SX4264	35K24	1	-	-	-		外:灰 内:灰白	B群		・(外)平行タタキ ・(内)格子状の当て具	
340	須恵系	壺		SX4264	35K24	2	-	-	-		外:灰 内:灰白	B群		・(外)平行タタキ ・(内)格子状の当て具	
341	須恵系	壺		SX4264	35K25	-	-	-	-		外:オリーブ灰 内:灰	C群		・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具ほか	
342	土師系	陶器土製品		SX4264	35K24	1	-	10.8	(14.2)		外:浅黄緑 内:浅黄緑			・(外)タタキ ・(内)輪組み痕	
343	須恵系	無台杯	Ⅳ2類	SX4265	35K18	-	12.8	6.6	3.1	5/36	外:灰 内:灰	A群	同へう	・ロクロナデ	
344	須恵系	杯蓋		SX4999	30L18	20	-	-	(1.4)		外:灰白 内:灰白	B群		・ロクロナデ ・(外)上半口ロケズリ	
345	須恵系	折縁杯		SX4999 P5035	30L13 30L19	20 6	12.8	7.6	3.6	4/36	外:灰白 内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(7)

報告番号	種類	形種	分類	通観番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1線部残存率	色調	出土分類	底部処理	文様・調整など	備考
346	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SX4999	30L18	21	12.3	9.0	3.6	22/36	外:灰白 内:灰白	A群	同へう	-ロクロナデ	
347	須恵系	無台杯	Ⅲ2類	SX4999	30L18	21	12.8	7.6	3.4	4/36	外:灰白 内:灰白	A群	同へう	-ロクロナデ	
348	須恵系	無台杯		SX4999	30L18	21	-	7.4	(0.5)		外:に赤い燻 内:に赤い燻	A群	同へう	-ロクロナデ	
349	須恵系	無台杯	Ⅲ2類	SX4999	30L18	-	12.6	8.0	3.2	12/36	外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	-ロクロナデ	
350	須恵系	無台杯		SX4999	30L19	-	-	9.0	(1.3)		外:灰 内:灰	B群	同へう	-ロクロナデ	
351	須恵系	甕		SX4999	30L19	20	-	-	-		外:灰 内:灰	A群		・(外)平行タタキ・ホキ ・(内)同心円当て具	
352	須恵系	短瓶 壺蓋		SK420	26L2・3	-	10.0	-	2.3	7/36	外:灰黄 内:灰白	A群		-ロクロナデ	
353	須恵系	無台杯		P4544 (SB9)	25J12	3	13.4	-	(2.8)	5/36	外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・ヒダズ木肌(内)	
354	須恵系	有台杯		P4709 (SB10)	27J8	1	-	5.9	(1.2)		外:灰白 内:灰白	A群		-ロクロナデ	
355	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	P4188 (SB20)	25J23	-	12.2	8.0	3.2	8/36	外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	-ロクロナデ	
356	須恵系	無台杯	Ⅱ1類	P4188 (SB20)	25J23	-	11.8	7.8	3.1	15/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	-ロクロナデ ・(底外)板目仕肌	
357	土師系	長甕		P4188 (SB20)	25J23	-	-	-	-		外:に赤い燻 内:浅黄燻			・(外)平行タタキ ・(内)同心円当て具ほか	
358	須恵系	無台杯	Ⅲ2類	P4071	19J5	1	12.2	7.6	3.9	27/36	外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	-ロクロナデ	
359	須恵系	杯蓋		SD2075	28J23	-	-	-	(1.4)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
360	須恵系	杯蓋		SD2075	30J4	-	-	-	(1.3)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
361	須恵系	杯蓋		SD2075	30J17	-	-	-	(1.8)		外:灰 内:灰白	B群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
362	須恵系	有台杯		SD2075	27J20	-	-	8.2	(2.9)		外:灰白 内:灰白	A群		-ロクロナデ、ケズリ	折縁杯?
363	須恵系	有台杯		SD2075	30J17	-	-	8.0	(2.4)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ、ケズリ	
364	須恵系	有台杯		SD2075	30J17	-	-	6.4	(1.8)		外:青灰 内:青灰	A群		-ロクロナデ、ケズリ	
365	須恵系	有台杯		SD2075	31J13	-	-	6.1	(2.9)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ	
366	須恵系	有台杯		SD2075	30J22	-	-	6.4	(2.2)		外:灰白 内:灰白			-ロクロナデ、ケズリ ・(底外)へう型「K」	
367	須恵系	有台杯		SD2075	30J22	-	-	7.7	(0.6)		外:灰 内:灰	A群	同へう	-ロクロナデ、ケズリ ・高台割落	
368	須恵系	有台杯		SD2075	28J25	中期	-	9.1	(2.9)		外:灰 内:灰	B群		-ロクロナデ、ケズリ ・外面縦筋多	
369	須恵系	有台杯		SD2075	28J17	中期	-	9.4	(1.4)		外:灰 内:灰白	B群		-ロクロナデ、ケズリ ・外面縦筋多	
370	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SD2075	30J17	-	12.2	8.0	2.6	3/36	外:灰 内:灰	A群	同へう	-ロクロナデ	
371	須恵系	無台杯	Ⅲ2類	SD2075	28J22	-	13.2	7.8	3.2	14/36	外:灰白 内:灰白	B群	同へう	-ロクロナデ	
372	須恵系	無台杯	Ⅲ2類	SD2075	30J16	-	13.0	8.0	3.1	10/36	外:灰 内:灰	B群	同へう (左)	-ロクロナデ	
373	須恵系	長頸壺		SD2075	20F7	2	7.0	-	(2.7)	7/36	外:灰 内:灰	C群		-ロクロナデ	
374	土師系	瓶		SD2075	30J17	-	-	5.5	(1.2)		外:灰 内:灰		両面 (右)	-ロクロナデ	
375	土師系	長甕		SD4049	23K6	1・2	-	-	-		外:橙 内:橙			・(外)平行タタキ ・(内)当て具	
376	須恵系	無台杯		SD4270	-	-	13.6	-	(2.9)	4/36	外:灰白 内:灰白	B群		-ロクロナデ	
377	須恵系	無台杯	Ⅱ2類	SD4302	25K8	6	12.6	8.4	3.2	8/36	外:灰白 内:灰白	B群	同へう (左)	-ロクロナデ	
378	須恵系	無台杯		SD4367	26K8	4	-	8.6	(1.4)		外:灰 内:明オリーブ灰	A群	同へう	-ロクロナデ	
379	須恵系	壺・ 瓶蓋		SD4788	32K6	-	22.0	-	-	4/36	外:オリーブ灰 内:灰	A群	同へう	-ロクロナデ	
380	土師系	長甕		SD4128	27J6	底面	-	-	-		外:灰 内:灰白			・(外)平行タタキ	
381	須恵系	有台杯		SD4273	30J8	-	-	7.0	(2.2)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ、ケズリ	転用磁
382	須恵系	杯蓋	2類	SX4268	31J22	-	12.6	-	(1.5)	7/36	外:灰 内:灰	C群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ、 底縁	
383	須恵系	有台杯		SX4268	31J21	-	-	7.0	(2.6)		外:灰 内:灰	B群	同へう	-ロクロナデ、ケズリ	転用磁
384	須恵系	無台杯	Ⅱ1類	SX4268	31J22	-	10.8	8.0	2.7	9/36	外:灰 内:灰	B群	同へう	-ロクロナデ	
385	瓦輪 陶			-	43N25	IV	-	5.6	(2.5)		外:灰白 内:灰白			-ロクロナデ、ケズリ ・(内底)底縁に縦筋	輪腔蓋?
386	須恵系	杯蓋	2類	-	28J7	IV	12.4	-	2.4		外:灰白 内:灰白	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	
387	須恵系	杯蓋		-	27J20	-	-	-	(2.7)		外:灰 内:灰	A群		-ロクロナデ ・(外)上平ロクロナデ	

観 察 表

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(8)

報告番号	種別	形種	分類	遺跡番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1線部残存率	色調	出土段階	底面処理	文様・調整など	備考
388	須恵器	杯蓋	—	29L20	IV	—	—	(1.7)			外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
389	須恵器	杯蓋	—	29L8	IV	—	—	(1.7)			外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
390	須恵器	杯蓋	—	30L6	IV	—	—	(1.6)			外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
391	須恵器	杯蓋	—	30L22	IV	—	—	(1.2)			外:灰白内:灰白	A群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
392	須恵器	杯蓋	—	29I	—	—	—	—			外:灰内:灰	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
393	須恵器	杯蓋	—	31K10	IV	—	—	(2.1)			外:灰白内:灰白	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
394	須恵器	杯蓋	—	35L5	IV	—	—	(1.6)			外:灰内:灰	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
395	須恵器	杯蓋	—	35K18	IV	—	—	(2.0)			外:灰内:灰	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ ・胎内部に板目瓦痕	
396	須恵器	杯蓋	—	34K20	IV	—	—	(1.9)			外:灰白内:灰白	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
397	須恵器	杯蓋	3類	21H3	I	14.3	—	(1.6)	4/36		外:灰白内:灰白	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
398	須恵器	杯蓋	2類	34K20	IV	13.2	—	(1.4)	3/36		外:灰白内:灰白	B群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	
399	須恵器	杯蓋	3類	30L13	IV	14.0	—	(1.6)	3/36		外:灰内:灰	C群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ ・洗線	
400	須恵器	杯蓋	1類	33L3	IV	12.0	—	(1.2)	6/36		外:灰内:灰	C群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ ・洗線	
401	須恵器	有台杯	—	30L13	IV	—	8.4	(4.6)			外:灰内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
402	須恵器	有台杯	—	28I21	I	—	7.7	(3.7)			外:灰白内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
403	須恵器	有台杯	—	31L9	IV	—	7.6	(2.4)			外:灰内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
404	須恵器	有台杯	—	21H19	水踏 覆丸	—	7.0	(1.9)			外:灰内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
405	須恵器	有台杯	—	31K21	IV	—	7.8	(1.4)			外:灰内:灰	A群	回表	・ロクロナデ、ケズリ ・ヒダスキ(内外・直線) ・周縁打ち欠き	
406	須恵器	有台杯	—	30L23	IV	—	9.0	(1.6)			外:灰白内:灰白	A群		・ロクロナデ	
407	須恵器	有台杯	—	36K19	IV	—	6.6	(1.1)			外:灰白内:灰白	A群	回へう	・ロクロナデ、ケズリ ・高台直落	
408	須恵器	有台杯	II1類	30L25	IV	10.6	6.4	4.8	4/36		外:灰内:灰	B群		・ロクロナデ、ケズリ	
409	須恵器	有台杯	—	30L13	IV	15.0	—	(5.6)	4/36		外:灰白内:灰白	B群		・ロクロナデ	
410	須恵器	有台杯	—	29L18	IV	—	8.9	(1.9)			外:灰内:灰	B群	回へう(右)	・ロクロナデ、ケズリ ・外面被灰多	転用観
411	須恵器	有台杯	—	29I	IV	—	9.0	3.1			外:灰内:灰白	B群		・ロクロナデ、ケズリ ・外面被灰多	
412	須恵器	折縁杯	—	35K18 35K22	IV	12.2	7.5	3.7	8/36		外:灰白内:灰白	A群	回へう(右)	・ロクロナデ、ケズリ	転用観
413	須恵器	折縁杯	—	41O5	IV	13.8	8.0	3.6	12/36		外:灰白内:灰白	A群		・ロクロナデ、ケズリ	
414	須恵器	折縁杯	—	34K17	IV	14.0	—	(2.3)	2/36		外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ	
415	須恵器	折縁杯	—	35K18	IV	13.2	—	(3.0)	6/36		外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ	
416	須恵器	無台杯	IV2類	—	35K25	IV	13.0	6.4	2.9	22/36	外:灰内:灰	A群	回表(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
417	須恵器	無台杯	IV2類	—	35K18	IV	12.6	5.6	2.9	10/36	外:灰内:灰	A群	回表(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
418	須恵器	無台杯	IV2類	—	20P1	IV	12.8	6.0	3.2	1/36	外:灰内:灰	A群	回表(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
419	須恵器	無台杯	III1類	—	34K12	IV	11.4	7.0	3.2	1/36	外:灰内:灰	A群	回へう(右)	・ロクロナデ	
420	須恵器	無台杯	II1類	—	26J21	IV	11.5	7.6	3.0	6/36	外:南オリープ灰内:南オリープ灰	A群	回へう	・ロクロナデ	
421	須恵器	無台杯	—	27I1	Ib	(12.0)	—	2.6	4/36		外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内)	
422	須恵器	無台杯	—	25I9	Ib	(11.8)	—	(2.8)	2/36		外:灰内:灰	A群		・ロクロナデ	
423	須恵器	無台杯	—	30M3	IV	—	6.6	(1.2)			外:灰内:灰	A群	回表(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線)	
424	須恵器	無台杯	—	26K16	Ib	—	(8.0)	2.2			外:灰内:灰	A群	回表(右)	・ロクロナデ ・ヒダスキ痕(内外・直線) ・多数に湯子で体部器壁厚は約2mm	
425	須恵器	無台杯	—	30L22	IV	—	7.4	(1.4)			外:灰白内:灰白	A群	回へう	・ロクロナデ	

土器・陶器類観察表(2010・2013年度 古代の遺物)(9)

報告番号	種類	形種	分類	遺跡番号	出土地点	層位	1径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	1径部残存率	色調	出土部位	底部状態	文様・調整など	備考
426	須恵系	無台杯	Ⅱ2型	—	42010	Ⅳ	12.0	7.8	3.3	14/36	外:青灰 内:青灰	B群	凹へう	・ロクロナデ	
427	須恵系	無台杯	Ⅱ2型	—	28117	Ⅳ	12.0	7.6	3.0	9/36	外:灰 内:灰	B群	凹へう	・ロクロナデ ・(脱外)飯口圧痕	
428	須恵系	無台杯	Ⅱ2型	—	43N1	Ⅳ	12.0	6.6	2.9	7/36	外:灰 内:灰	B群	凹へう	・ロクロナデ	
429	須恵系	無台杯	Ⅱ2型	—	30116	Ⅳ	12.8	8.0	3.6	2/36	外:灰 内:灰	B群	凹へう	・ロクロナデ	
430	須恵系	無台杯	Ⅱ1型	—	26K4	Ⅳ	11.8	8.0	3.1	25/36	外:灰 内:灰	B群	凹へう	・ロクロナデ ・(脱外)飯口圧痕	
431	須恵系	無台杯	Ⅱ2型	—	20P1	Ⅳ	12.2	8.2	3.4	8/36	外:オリーブ灰 内:オリーブ灰	B群	凹へう	・ロクロナデ	
432	須恵系	無台杯	Ⅱ1型	—	31113	Ⅳ	10.4	7.0	3.3	2/36	外:灰白 内:灰白	B群	凹へう	・ロクロナデ	
433	須恵系	無台杯	—	3612	Ⅳ	—	6.8	(3.0)			B群	凹へう	・ロクロナデ		
434	須恵系	無台杯	—	19P5	—	—	8.2	(2.0)			B群	凹へう	・ロクロナデ		
435	須恵系	無台杯	—	34K20	Ⅳ	—	6.8	(1.4)			B群	凹へう	・ロクロナデ		
436	須恵系	無台杯	—	29115	Ⅳ	—	7.6	(1.3)			B群	凹へう	・ロクロナデ		
437	須恵系	甕	—	35K18	Ⅳ	36.8	—	(2.4)	2/36	外:灰 内:灰	A群		・ロクロナデ		
438	須恵系	甕	—	30116	Ⅳ	25.2	—	(4.1)	9/36	外:灰白 内:灰白	A群		・(外)ロクロナデ ・(内)カキメ		
439	須恵系	甕	—	28124	Ⅳ	25.2	—	(6.2)	8/36	外:灰 内:灰	B群		・ロクロナデ		
440	須恵系	短頸 壺	—	29L20	Ⅳ	—	—	(3.3)			A群		・ロクロナデ ・(外)上半ロクロナデ	441と 同一?	
441	須恵系	短頸 壺	—	2919	Ⅳ	(13.6)	—	(2.3)			A群		・ロクロナデ	440と 同一?	
442	須恵系	長頸壺	—	30L25	Ⅳ	—	—	(6.5)			B群		・ロクロナデ		
443	須恵系	壺・ 瓶型	—	38L25	Ⅳ	—	12.8	(6.1)			A群		・ロクロナデ		
444	須恵系	壺・ 瓶型	—	34J25	Ⅳ	トシチ 上層	—	8.8	(3.7)		C群	凹糸		・ロクロナデ、ケズリ	
445	須恵系	壺・ 瓶型	—	30L13	Ⅳ	—	—	(4.2)			C群		・瓶口に沿って黒色 付着物		
446	須恵系	壺 or 甕	—	25J14	I	—	5.6	(3.8)			C群		・(外)ヘラケズリ ・(内)カキメ		
447	須恵系	横瓶	—	21H2	水路 掘丸	—	—	—			C群		・(外)ロクロナデ、カ キメ ・(内)同心円当て具		
448	須恵系	横瓶	—	36.37L	Ⅳ	—	—	—			C群		・(外)ロクロナデ、カ キメ ・瓶口?付着		
449	須恵系	円筒碗	—	34L18	Ⅳ	9.0	—	(1.5)	8/36	外:灰白 内:灰白	A群		・ロクロナデ ・方形?透かし ・黒痕あり		
450	土師系	碗	—	43M22	Ⅳ	—	5.1	(0.6)					外:浅黄緑 内:浅黄緑	・ロクロナデ	
451	土師系	小壺	—	36N3	Ⅳ	—	10.0	(3.3)					外:浅黄緑 内:浅黄緑	・(内)カキメ	
452	土師系	小壺	—	26J21	Ⅳ	—	10.0	(1.8)					外:浅黄緑 内:浅黄緑	・ロクロナデ ・外面カキメ	
453	土師系	小壺	—	28H10	Ⅳ	—	8.8	(2.4)					外:にぶい黄緑 内:灰白	・ロクロナデ	
454	土師系	小壺	—	41P5	Ⅳ	—	6.6	(2.1)					外:黒灰 内:浅黄緑	・ロクロナデ	
455	土師系	長壺 A類	—	30L25	Ⅳ	22.0	—	(4.1)	3/36	外:浅黄緑 内:浅黄緑			・ロクロナデ		
456	土師系	長壺	—	34N1	Ⅳ	—	—	—					外:浅黄緑 内:灰白	・(外)平打タタキ ・(内)同心円当て具跡あり	
457	土師系	長壺	—	37M5	Ⅳ	—	—	—					外:明緑灰 内:灰白	・(外)カキメ	
458	土師系	罎	—	41P5	Ⅳ	35.0	—	(5.3)	4/36	外:にぶい黄緑 内:にぶい黄緑			・カキメ		

観 察 表

土器観察表 (2010・2013年度 弥生・縄文時代の遺物)

報告番号	種別	器種	分類	遺積番号	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部 残存率	色調	胎土 成分 分析	切磨し	文様・調柄など	備考
247	弥生土器	深鉢		SI3005	-	I	-	-	(2.4)	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色			・網目状凹凸文	
248	弥生土器	深鉢		-	25G21	IVb	-	-	(6.1)	-	外：黄褐色 内：灰青			・LR 縄文	
249	弥生土器	深鉢		-	1719	V	-	14.2	(7.2)	-	外：黄褐色 内：灰白			・LR 縄文	
250	弥生土器	深鉢		SI3005	22I23, 24 22J3, 4	I	-	16.2	(25.5)	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色			・(体) 縄文の朱痕文 ・(底) 網目状	弥生前期
256	縄文土器	深鉢		2010-7T	19F21	VIe	-	-	(3.9)	1/36	外：にぶい黄褐色 内：黒			・LR 縄文	晩期?
257	縄文土器	深鉢		2010-7T	19F21	VIe	-	-	(4.9)	-	外：にぶい黄褐色 内：黒			・LR 縄文	晩期?
258	縄文土器	深鉢		2010-7T	19F21	VIe	-	-	(3.5)	-	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色			・LR 縄文	晩期?
479	縄文土器	白村土器		SX4100	30G10	V 5	14.5	5.3	(12.8)	18/36	外：褐灰 内：褐灰			・LR 縄文→塩文沈 線文、斜交文、雲母文 ・(内) (赤) コゴ付着	大洞 C1 式
480	縄文土器?	甕		-	23J24	散乱	-	8.9	(6.9)	-	外：浅黄褐色 内：灰黄褐色			・(体) 朱痕文 ・(底) 網目またはほ じり編み正装	
481	縄文土器	深鉢		-	25I25	V	-	-	-	-	外：明褐色 内：灰褐色			・LR 縄文	
482	縄文土器	深鉢		P5035	30L13	6	-	-	-	-	外：にぶい褐色 内：褐色			・赤痕? ・(外) スズ付着	

土製品観察表 (2010・2013年度 古代・中世遺物)

報告番号	種別	出土地点	遺積番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	高厚 (cm)	重量 (g)	備考
51	羽口	22K2	SE2256	3	(3.5)	(4.0)	(1.3)	10.0	中伊、推定外径 9.4cm
220	羽口	22K2	SE2256	1	(3.2)	(3.6)	(2.5)	22.0	古代、推定外径 8.5cm
459	支脚?	32L13	-	IV	径: 4.6	-	(3.9)	58.0	
460	紡錘車	26J1	SK4313	6	径: 5.0	-	4.4	50.0	古代、1/2 残存、孔径 1.0cm
461	羽口	36K20	-	IV	(4.6)	(4.5)	(1.8)	30.0	先端残存、推定外径 5.0cm
462	粘土塊	26J5	SE4502	6	4.9	4.2	3.4	24.0	古代

石器・石製品観察表 (2010年度 中世遺物)

報告番号	種別	石材	出土地点	遺積番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
38	砥石	凝灰岩	16H1	SE1704	2	10.7	5.1	2.3	160.5	No.4, 被熱、砥面に線状痕有り
39	砥石	凝灰岩	18G25	SE2176	1	5.9	3.4	2.3	50.0	被熱、正裏面に砥面、砥面に線状痕有り
40	砥石	凝灰岩	19F25	SE2348	16	5.0	4.3	2.0	54.5	被熱、正面に砥面、砥面に線状痕有り
41	茶臼	安山岩	18G6	P2347	1	径: 22.4	-	高: 8.7	3000.0	SBI ビット

石器・石製品観察表 (2010年度 古代遺物)

報告番号	種別	石材	出土地点	遺積番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
211	砥石?	輝石	22G4	SI2368	9	2.8	2.5	1.2	4.8	
212	砥石	凝灰岩	16H5	-	IV	3.0	4.0	1.4	22.0	正裏面に砥面、砥面に線状痕有り

石器・石製品観察表 (2013年度 古代・中世遺物)

報告番号	種別	石材	出土地点	遺積番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
463	砥石	凝灰岩	28I2	-	IV	8.3	2.8	1.6	40.0	
464	磨砥石?	26J16	-	カクラン	8.9	6.0	3.3	130.0	アスファルトカ?	
465	磨石類	凝灰岩	30L23, 30M3	SE4998	8	12.1	6.2	5.5	490.0	磨痕・凹痕
466	磨石類	輝石	30K13・18	SE4253	-	10.6	8.8	4.6	270.0	磨痕
467	磨石類	輝石	26J1	SK4313	4	7.7	6.1	4.0	120.0	凹痕

石器・石製品観察表 (2010・2013年度 縄文・弥生遺物)

報告番号	種別	石材	出土地点	遺積番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
251	石鏃	玉髄	19I4	-	V	2.5	1.2	0.4	0.7	
252	石鏃	頁岩	19E17	SE2044	3	3.5	1.0	0.5	1.2	
253	石鏃	凝灰岩	19F	-	I	3.2	1.0	0.5	1.0	基部欠損
254	不定形石器	頁岩	19I18	-	IVa	6.8	5.8	1.2	32.0	
255	鈍片	凝灰岩	21J4	-	V	6.3	4.9	2.3	48.0	正面の一部に自然面を残す
483	石鏃	玉髄	26J10	SD4507	1層 (床直)	2.1	1.1	0.4	0.1	
484	石鏃	玉髄	28I23	SD2075	中伊	2.5	3.2	2.5	20.0	

金属製品関連遺物観察表 (2010年度 中世遺物)

報告番号	種別	出土地点	遺構番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
42	釘	16G12	P1723	I	4.1	1.1	1.2	10.0	
43	釘	16H1	SE1704	I	2.4	0.5	0.5	6.0	
44	釘	18G25	SE2176	I	3.5	1.1	0.9	4.0	
45	釘	21B	SE2268	6	3.9	0.7	0.6	6.0	
46	釘	16H9	SK1700	3	1.9	0.6	0.5	5.0	
47	釘	16H9	SK1700	3	5.1	0.6	0.5	2.0	
48	釘	調査区	-	Ib	5.6	0.7	0.5	3.0	
49	鉄製品	16H24	SE1701	層土	3.9	3.2	0.7	34.0	
50	鉄製品	17I10・18I6	SE2173	10	4.9	2.0	0.4	16.0	
52	ガラス質洋	15H5	SE1704	2	5.4	4.1	2.6	25.0	
53	鉄洋	23・24K	SE2555	4	6.2	5.3	2.9	14.0	
54	鉄洋	18I10	SK1811	1	4.0	3.7	2.9	54.0	
55	銅形洋	16H1	SE1704	3	7.1	8.0	4.2	343.0	
56	銅形洋	22K2	SE2256	2	6.0	5.1	3.5	94.0	
57	銅形洋	22G10	SE2444	7	8.3	6.1	4.0	236.0	
58	銅形洋	18H9	SD1763	1	7.8	5.3	3.3	106.0	
59	銅形洋	19H14	SD2066	1	6.5	6.0	3.0	93.0	
60	和鐘	21B	SE2268	9	直径:10.8	中心厚:0.5	外側厚:0.7	93.0	遺棄鐘
61	銭貨	18G19	P2096	1	直径:2.5		0.1	0.1	このほか、開元通寶と書かれて出土銭貨有。天聖元寶か。初鑄年:1023年。

金属製品関連遺物観察表 (2010年度 古代遺物)

報告番号	種別	出土地点	遺構番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
213	刀子	19F20	SK2965	I	16.4	1.1	0.4	34.0	
214	刀子	17E25	-	Ib	8.2	1.1	0.5	13.0	
215	刀子	21G14・15・19・20	SK2600	3	4.7	0.8	0.2	2.0	
216	刀子	16E14	-	I/a	6.2	2.4	0.3	12.0	
217	鉄洋	22F・G	SE2368	層土	2.2	1.8	1.7	4.0	
218	鉄洋	18H16	SK2175	3	2.7	2.3	2.4	3.0	
219	ガラス質洋	22H15	SD2406	4	4.4	3.0	2.0	7.0	
221	銅形洋	24J9	SI3048	4	7.4	6.5	4.2	181.0	

金属製品関連遺物観察表 (2013年度 古代・中世遺物)

報告番号	種別	出土地点	遺構番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
468	刀子?	27I23	P4915 (SB10)	I	4.5	2.8	0.9	18.0	
469	刀子?	27I19	-	IV	3.6	0.7	0.2	0.7	
470	釘	27J11	SK4629	I	7.2	1.8	1.3	23.0	釘身 0.8cm 方形
471	釘	29H1	-	I	8.9	2.4	1.0	31.0	
472	釘	25J5	SD4302	-	3.5	0.5	0.5	0.6	
473	釘	26K8	P4651	2	2.9	1.1	1.1	0.4	
474	不明	39L16	-	IV	10.7	5.3	1.5	70.0	
475	不明	21G6	SK4001	4	6.1	1.8	0.8	12.0	
476	銅形洋	26J5	SE4502	3	8.4	7.6	4.0	270.0	
477	銅形洋	23K2	SK4048	2	8.0	8.7	4.0	300.0	
478	鉄洋	26J19	SK4628	3	6.0	6.5	3.3	70.0	

観 察 表

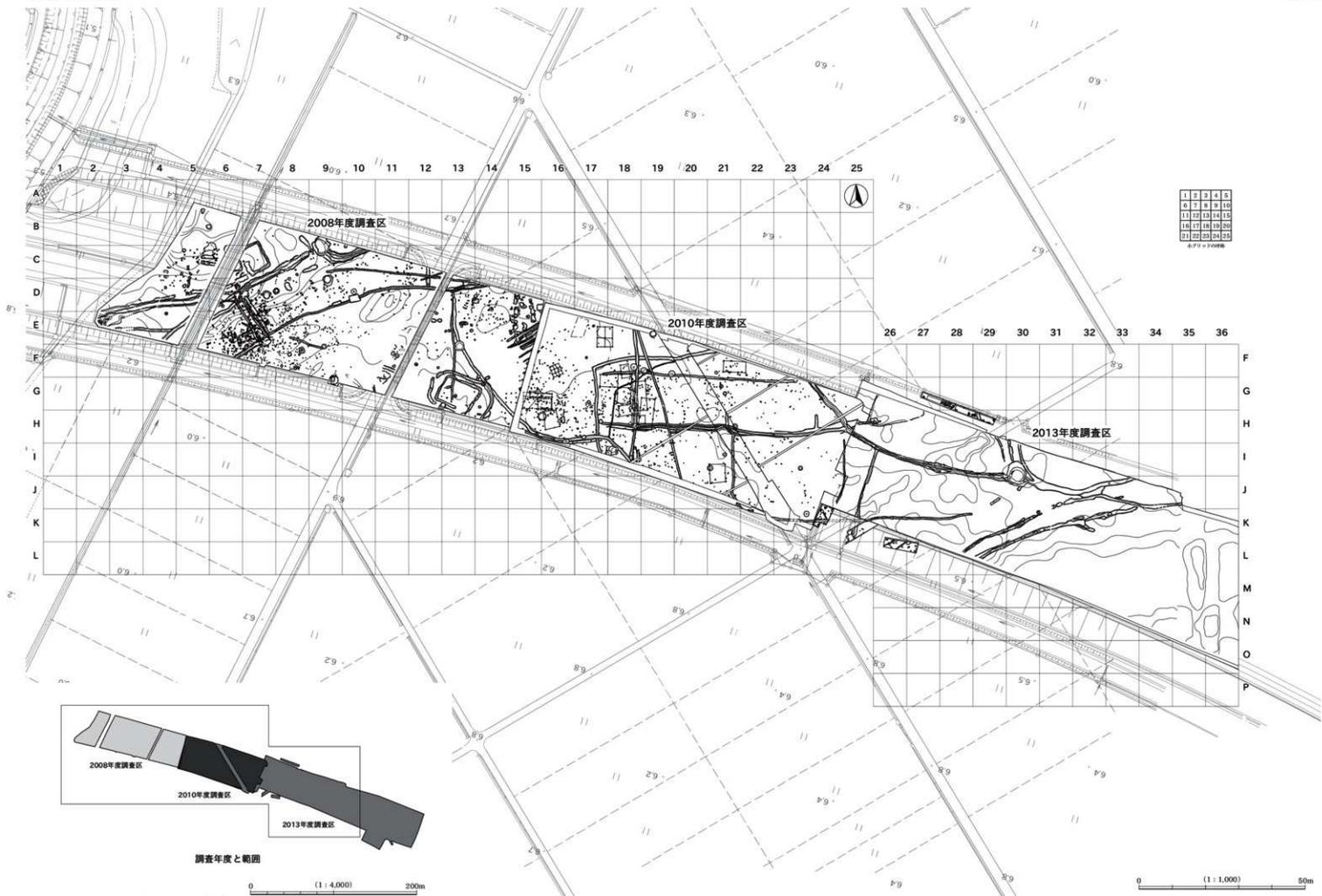
木製品観察表 (2010年度 中世遺物)

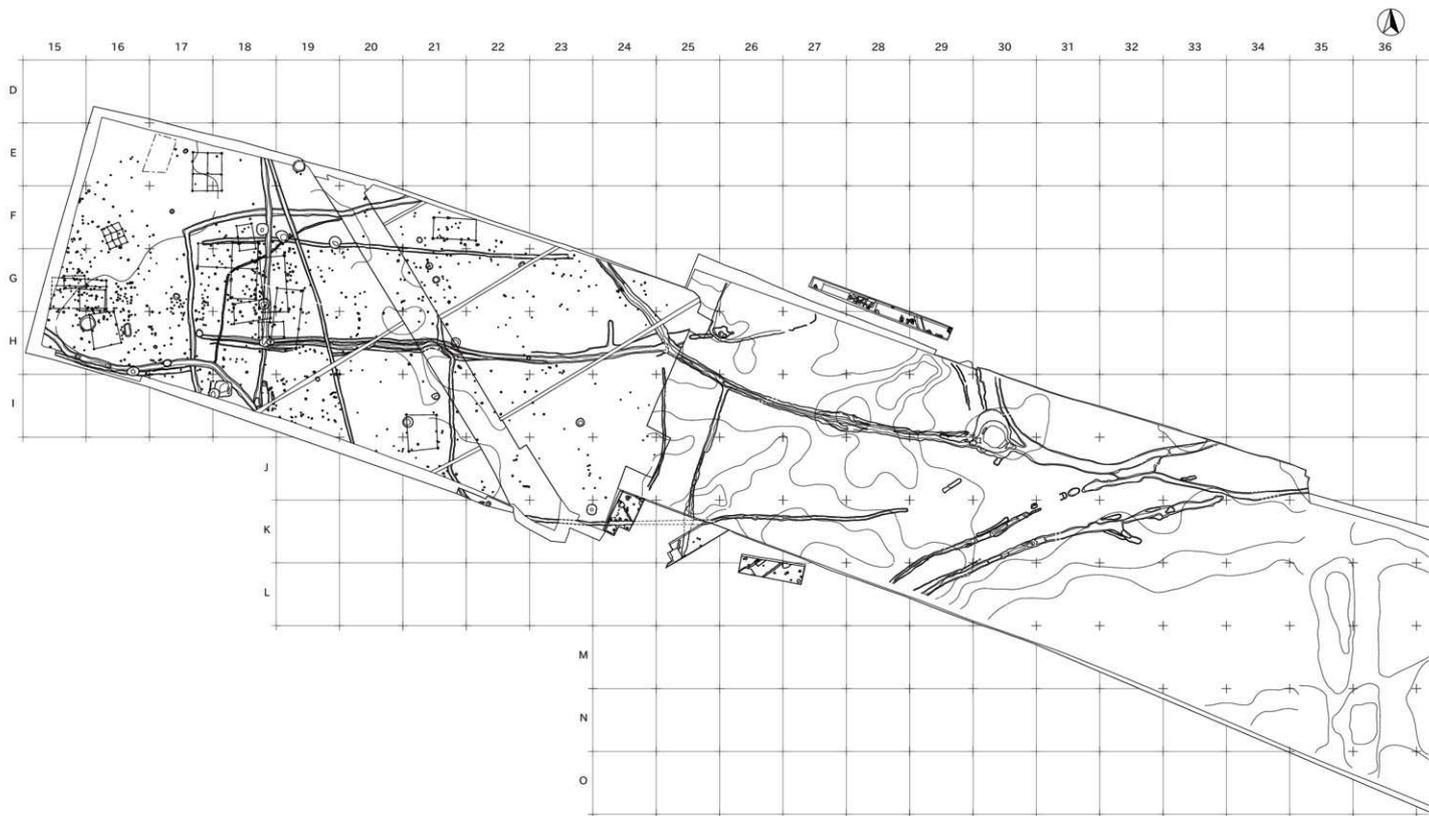
報告番号	種別	細目	出土地点	遺構番号	層位	未取り	樹種	樹種 判定	年代 測定	長・径 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	備考
62	大型曲物	側板	18F19・20	SE2292	14	スギ	○			56.1		19.0	
63	大型曲物	側板	18F19・20	SE2292	16	スギ	○			50.8		31.4	
64	大型曲物	底板	18F19・20	SE2292	15	スギ	○			47.7		1.8	7点接合。両端部に木釘孔有り
65	加工材		18F19・20	SE2292	13	心持材	ク	○	○	57.5		11.0	
66	曲物	底板	19F25, 20F21	SE2348	17	スギ	○			21.8		0.7	表面に黒色付着物有り

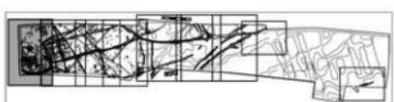
木製品観察表 (2010年度 古代遺物)

報告番号	品名	細目	出土地点	遺構 No.	層位	未取り	樹種	樹種 判定	年代 測定	長・径 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	備考
222	井戸側部材	南縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			52.4	10.1	1.6	取上 No.37
223	井戸側部材	西縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			65.2	14.0	0.9	取上 No.41
223	井戸側部材	西縦板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			49.3	9.9	1.0	
224	井戸側部材	東縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			53.6	10.3	1.1	取上 No.20
224	井戸側部材	北縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			56.2	10.3	1.4	取上 No.11
225	井戸側部材	東縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			69.6	10.0	1.9	取上 No.49
225	井戸側部材	南縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			55.5	10.0	0.8	取上 No.33
226	井戸側部材	南縦板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			56.6	2.8	1.0	取上 No.30
226	井戸側部材	東縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			60.5	12.5	1.0	取上 No.48
227	井戸側部材	西縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			60.2	11.1	1.6	取上 No.38
227	井戸側部材	北縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			61.0	11.0	1.2	取上 No.12
228	井戸側部材	南縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			59.1	19.8	1.90	取上 No.34
228	井戸側部材	南縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			69.4	18.0	2.5	取上 No.41
229	井戸側部材	東横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			72.0	13.5	2.0	取上 No.1
230	井戸側部材	南西隅柱	23H22・23	SE2510	扉目	スギ	○			79.9	2.8	2.7	取上 No.51
231	井戸側部材	北縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			86.0	16.4	2.9	取上 No.15
232	井戸側部材	東縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			69.6	12.4	1.5	取上 No.46
232	井戸側部材	東縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			71.4	12.3	2.1	取上 No.47
233	井戸側部材	西縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			68.0	20.3	2.0	取上 No.40
234	井戸側部材	北縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			55.4	8.1	1.2	取上 No.13
234	井戸側部材	扉板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			44.9	8.0	1.1	取上 No.52
235	井戸側部材	北横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			87.2	19.4	2.1	取上 No.20
236	井戸側部材	南横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			91.0	14.5	2.0	取上 No.3
237	井戸側部材	東横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			97.8	16.0	2.5	取上 No.4
238	井戸側部材	東横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			76.6	15.0	1.5	取上 No.3
239	井戸側部材	東横板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			62.2	6.7	4.2	取上 No.18
240	井戸側部材	北横板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○	○		61.2	7.6	4.5	取上 No.15
241	井戸側部材	南横板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			61.0	9.1	3.1	取上 No.17
242	井戸側部材	東西横板	23H22・23	SE2510		スギ				70.1	2.5	2.5	取上 No.53
243	井戸側部材	南北横板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			69.5	3.4	2.3	取上 No.54
244	井戸側部材	西縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			66.4	13.2	1.4	取上 No.42
244	井戸側部材	東縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			71.0	13.7	12.9	取上 No.27
244	井戸側部材	南縦板	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			71.4	13.1	2.4	取上 No.28
244	井戸側部材	西縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			60.7	12.7	1.5	取上 No.43
244	井戸側部材	東縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			71.0	13.1	1.1	取上 No.22
244	井戸側部材	北縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			50.6	13.5	1.2	取上 No.9
245	井戸側部材	東縦板1枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			67.5	12.6	1.8	取上 No.19
245	井戸側部材	東縦板2枚目	23H22・23	SE2510	板目	スギ	○			67.4	11.0	3.1	取上 No.21
246	井戸側部材	井戸枠内	23H22・23	SE2510		スギ				32.8	0.8	0.6	取上 No.55
報告外	自然木	井戸枠内	23H22・23	SE2510	6	心持材	毛	○	○	19.0	3.5	3.5	取上 No.34

圖 版

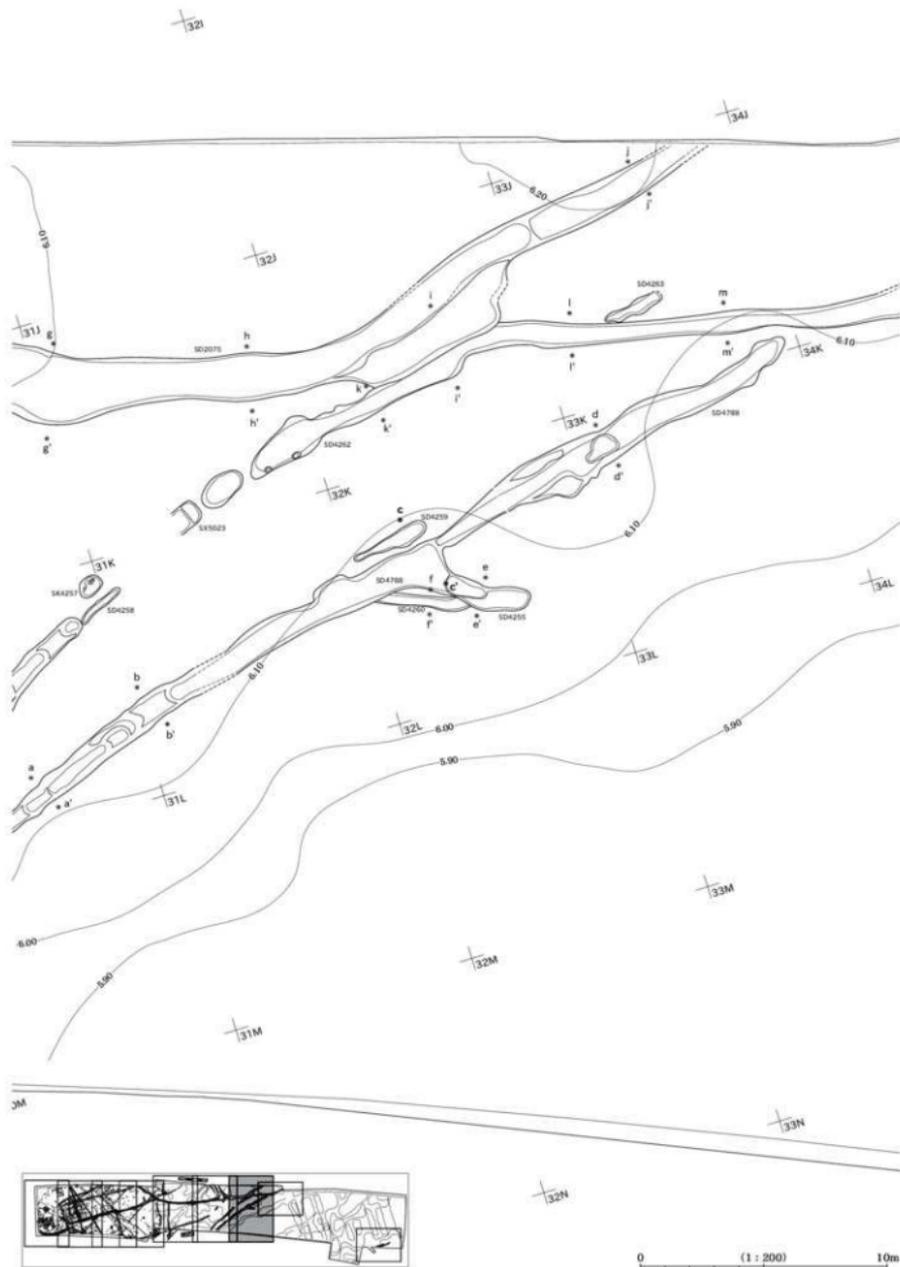


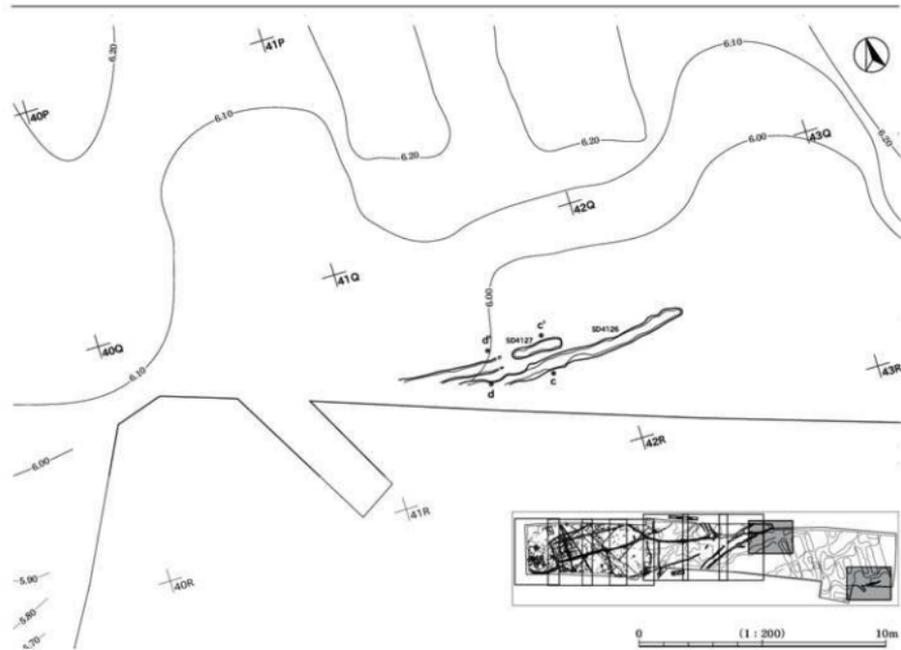
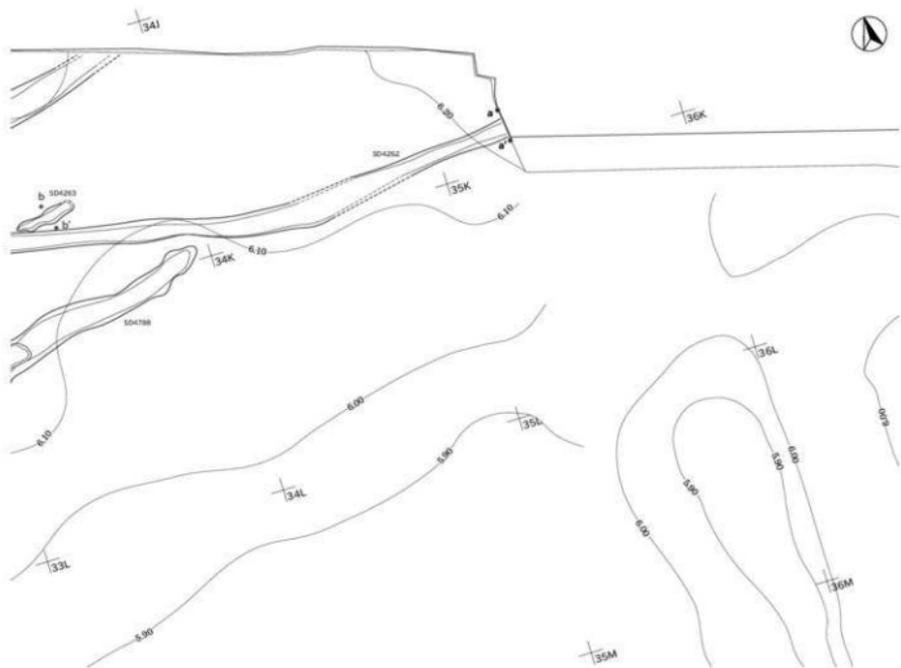


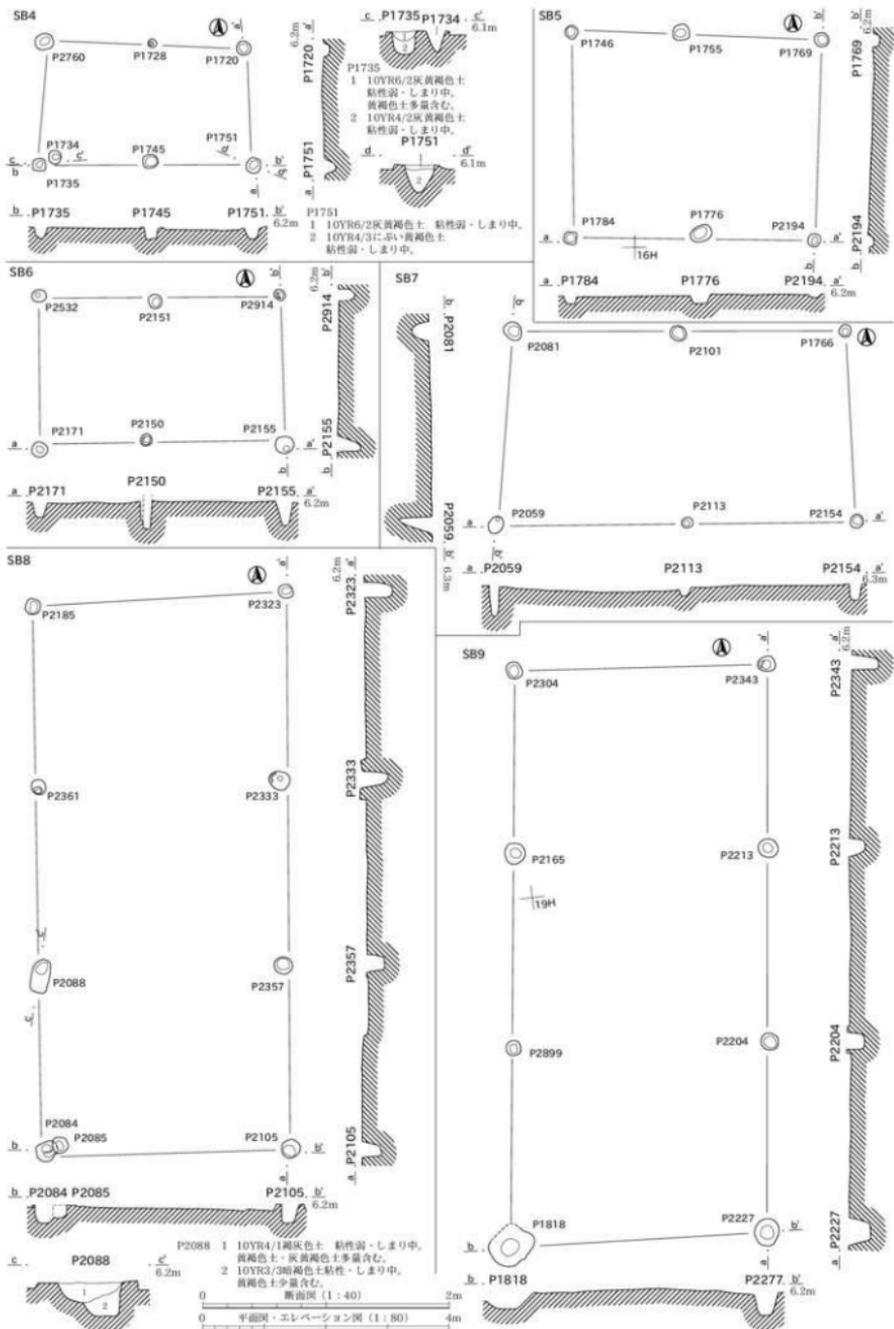


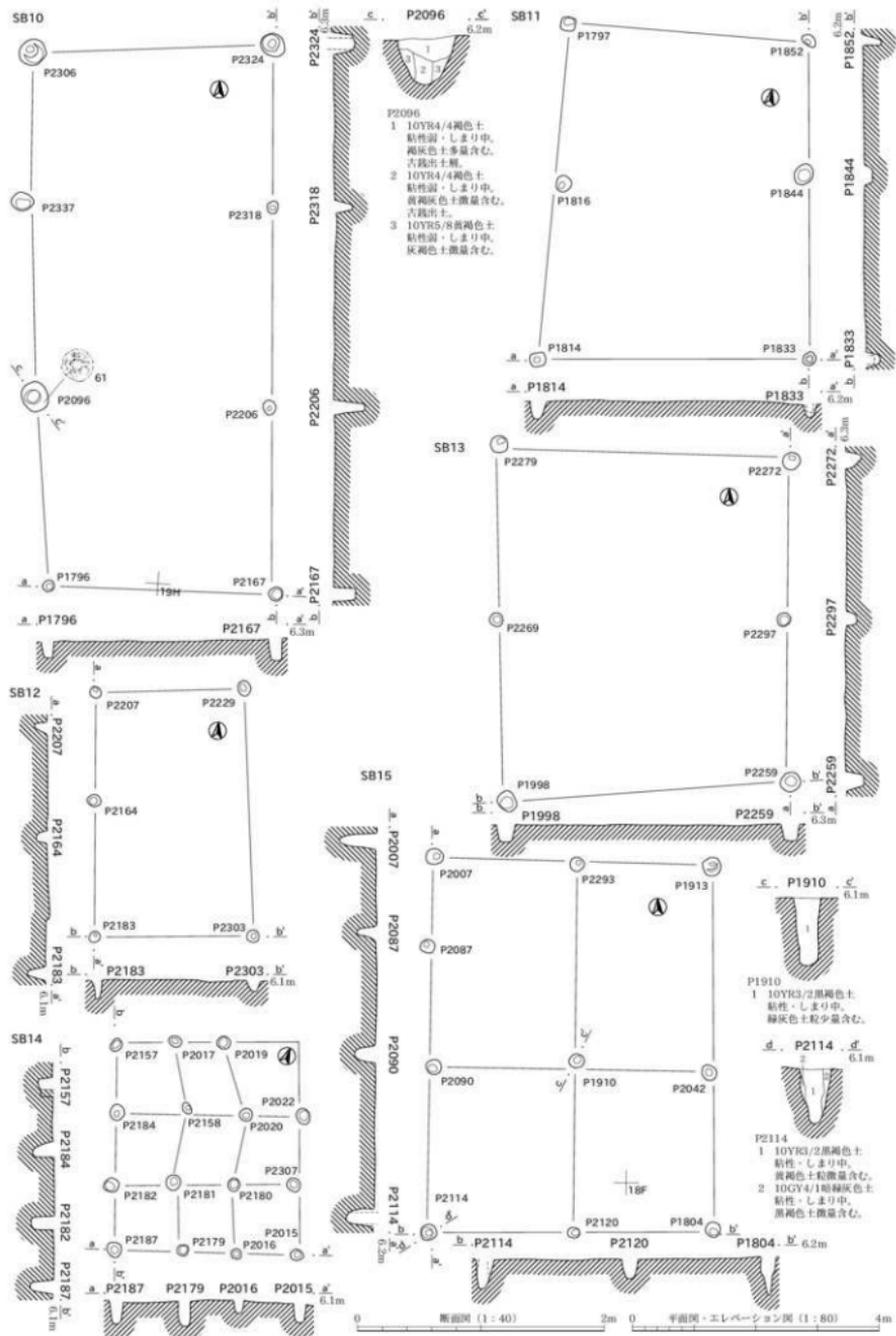


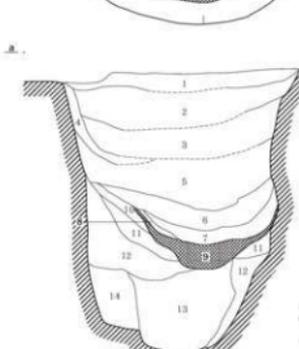
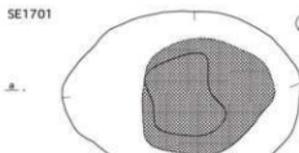




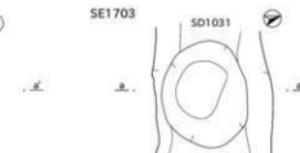




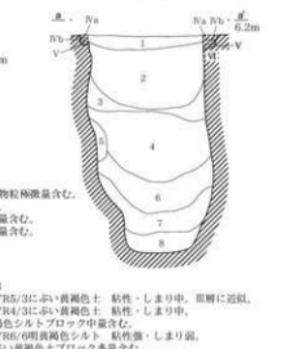
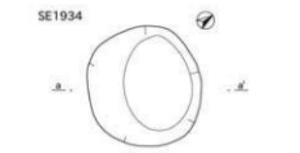




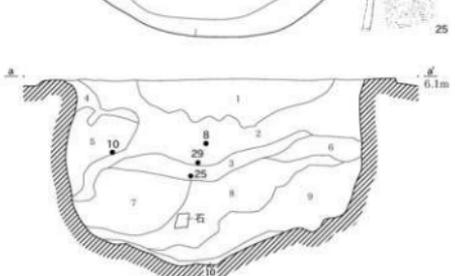
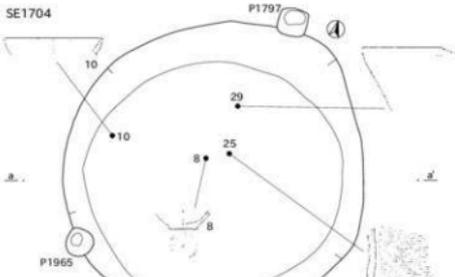
- SE1701
- 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中。灰黄褐色土粒多量含む。径5mmの炭化物粒微量含む。
 - 2 10YR2/4暗褐色土 粘性強・しまり中。黄褐色土粒少量含む。
 - 3 10YR4/6褐色土 粘性・しまり中。黄褐色土粒多量含む。
 - 4 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。黄褐色土粒微量含む。



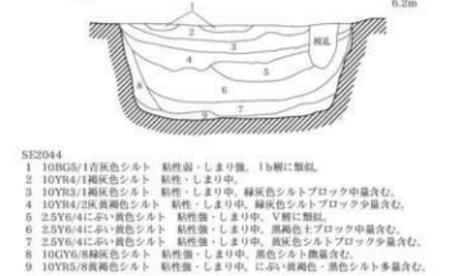
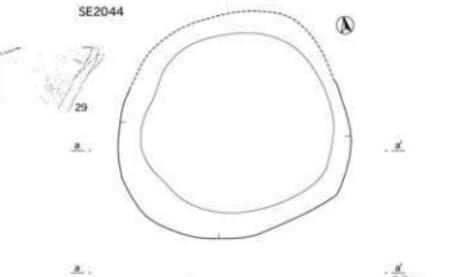
- SE1703
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。径5cmの炭化物粒微量含む。
 - 2 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり弱。炭分多量含む。
 - 3 10YR5/3に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。炭分少量含む。
 - 4 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。炭分微量含む。



- SE1934
- 1 10YR5/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。即期に近似。
 - 2 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。黄褐色シルトブロック中量含む。
 - 3 10YR5/6暗黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。に多い黄褐色シルトブロック多量含む。
 - 4 10YR5/1灰白色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 5 10YR5/6暗黄褐色シルト 粘性・しまり中。褐色土微塵量含む。
 - 6 10YR5/1灰白色シルト 粘性強・しまり中。炭化物粒少量含む。
 - 7 2.5Y/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。灰白色シルト多量含む。
 - 8 2.5Y5/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。黄褐色シルト微量含む。



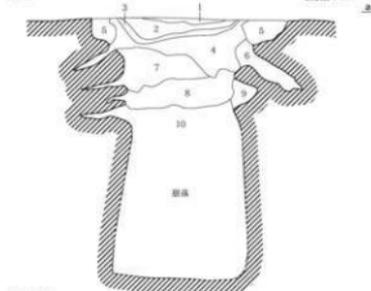
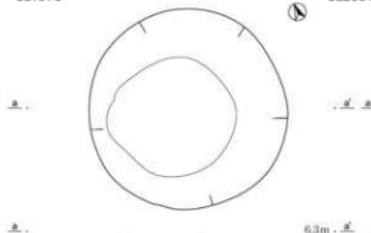
- SE1704
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性・しまり中。黄褐色シルト少量含む。
 - 2 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中。黄褐色シルトブロック多量含む。
 - 3 2.5Y6/1黄褐色シルト 粘性・しまり中。黄褐色シルトブロック中量含む。
 - 4 10YR5/1暗灰褐色シルト 粘性・しまり中。



- SE2044
- 1 10YR5/1青灰色シルト 粘性弱・しまり弱。1b層に類似。
 - 10YR4/1暗灰色シルト 粘性・しまり中。
 - 10YR3/1暗灰色シルト 粘性・しまり中。緑灰色シルトブロック中量含む。
 - 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中。緑灰色シルトブロック少量含む。
 - 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり中。V面に類似。
 - 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり中。褐色土ブロック中量含む。
 - 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり中。黄褐色シルトブロック多量含む。
 - 10GY6/8緑灰色シルト 粘性強・しまり中。黒色シルト微量含む。
 - 10YR5/8暗褐色シルト 粘性強・しまり中。に多い黄褐色・黒色シルト多量含む。



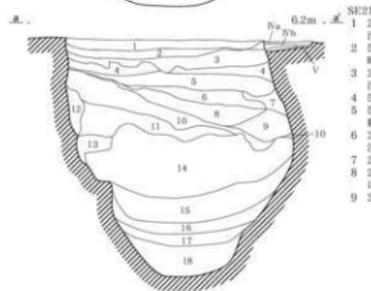
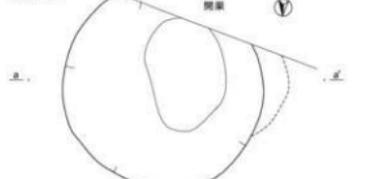
SE1976



SE1976

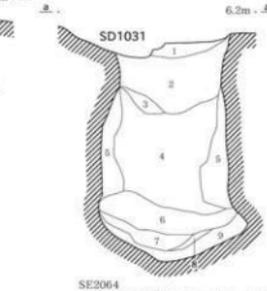
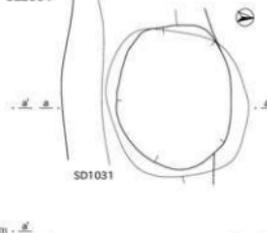
- 1 10YR4/1褐色シルト 粘性・しまり中、浅黄色シルトブロック多量含む。
- 2 2.5Y3/3黄褐色シルト 粘性・しまり中、径5mm炭化物粒少量含む。
- 3 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中、径1-5mm炭化物粒中量含む。
- 4 0Y5/1灰色シルト 粘性・しまり中、微細な炭化物粒少量含む。
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、古灰色シルトブロック中量含む。
- 6 0Y4/1灰色シルト 粘性強・しまり中、径1-3mm炭化物粒・古灰色シルトブロック中量含む。
- 7 5Y5/2灰オリーブ色シルト 粘性強・しまり中、浅黄色シルトブロック中量含む。
- 8 7.5GY5/1緑灰色シルト 粘性強、径5mm炭化物粒少量含む。
- 9 8BG5/1古灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 10 8BG5/1古灰色シルト 粘性強・しまり弱、径10mm炭化物粒中量含む。

SE2173



- 10 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性・しまり中、にんげん色シルトブロック多量含む。
- 11 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性・しまり中。
- 12 2.5Y6/1にんげん色シルト 粘性・しまり中。
- 13 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性・しまり中、にんげん色シルトブロック中量含む。
- 14 2.5Y6/4にんげん色シルト 粘性強・しまり弱。
- 15 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。黄灰色シルト少量含む。
- 16 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。
- 17 10BG5/1古灰色シルト 粘性強・しまり弱、黒褐色シルト少量含む。
- 18 10BG5/1古灰色砂質シルト 粘性強・しまり弱、黒褐色シルト微量含む。

SE2064



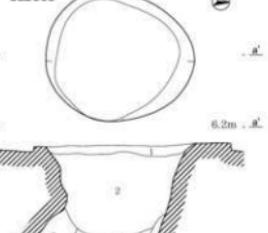
SE2064

- 1 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中、炭化物粒少量含む。
- 2 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰色シルト少量含む。
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性・しまり中、
- 4 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性・しまり中、黄褐色シルト少量含む。炭化物粒少量含む。
- 5 2.5Y6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中。
- 6 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性・しまり中、黄褐色シルト微量含む。
- 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 8 10BG7/1明古灰色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。
- 9 2.5Y8/3浅黄色シルト 粘性強・しまり弱。

SE2173

- 1 2.5Y5/2暗黄褐色土 粘性・しまり中、浅黄色シルトブロック多量含む。
- 2 5Y7/4浅黄色砂 粘性弱・しまり中、細灰土ブロック少量含む。
- 3 2.5Y5/2暗黄褐色土 粘性・しまり中、浅黄色シルトブロック中量含む。
- 4 5Y7/4浅黄色砂 粘性弱・しまり中。
- 5 5Y7/4浅黄色砂と2.5Y5/2暗黄褐色土の混在層。粘性・しまり中。
- 6 2.5Y5/2暗黄褐色土 粘性・しまり中、浅黄色砂ブロック多量含む。
- 7 2.5Y6/4にんげん色シルト 粘性強・しまり弱。
- 8 2.5Y6/3暗黄褐色土 粘性・しまり中、にんげん色シルトブロック多量含む。
- 9 2.5Y6/4にんげん色シルト 粘性強・しまり弱。

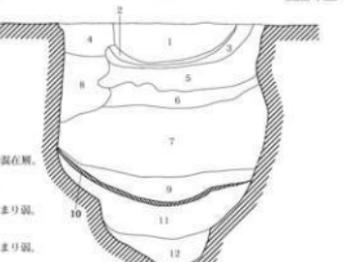
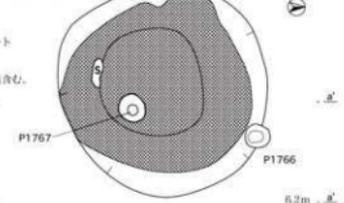
SE2065



SE2065

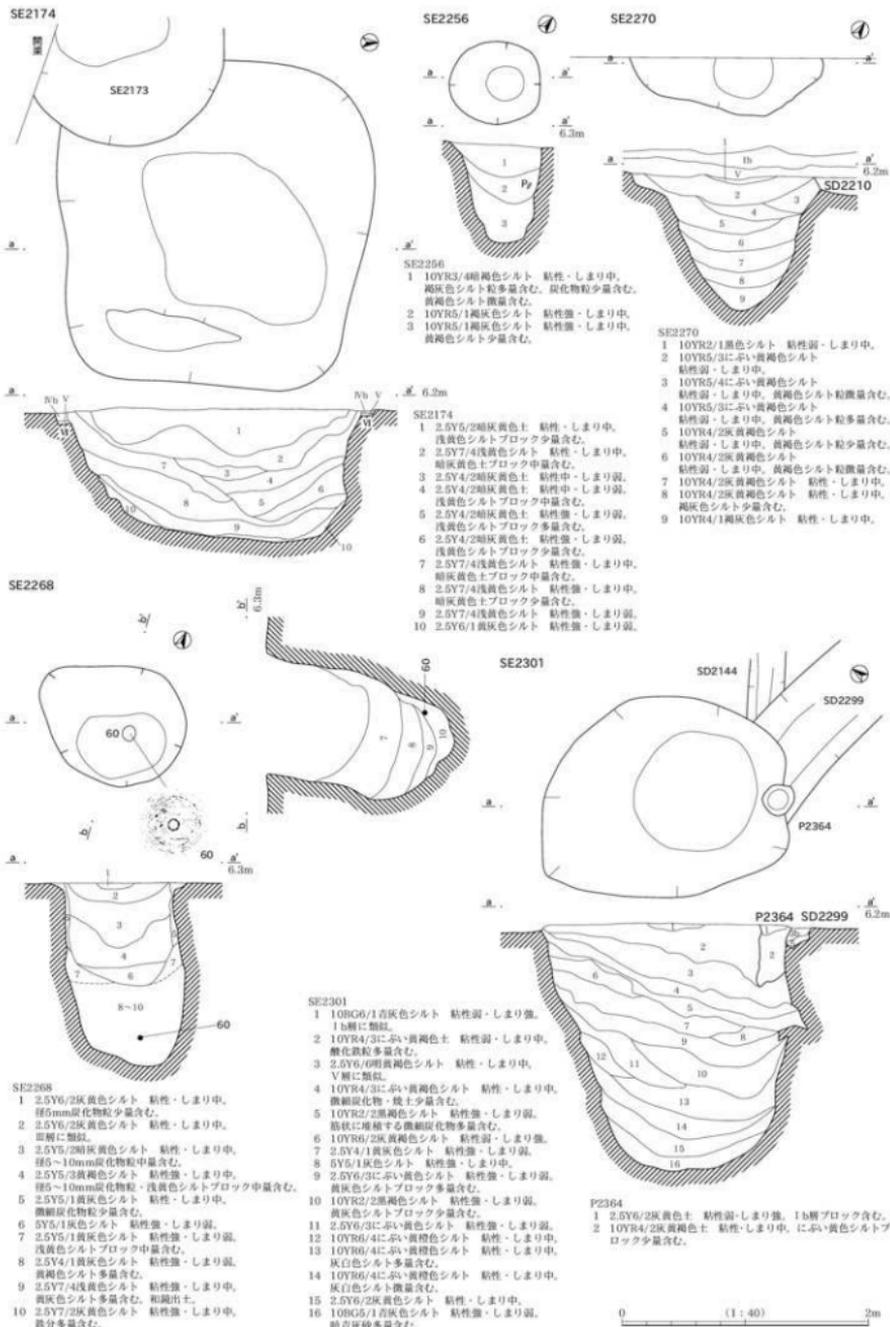
- 1 10YR5/3にんげん色土 粘性・しまり中、黒曜に近縁。
- 2 10YR4/3にんげん色土 粘性・しまり中、径5mm炭化物粒少量含む。
- 3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性・しまり中、黒褐色土ブロック少量含む。
- 4 10YR4/1黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 5 10YR5/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱、灰白色シルトブロック中量含む。
- 6 10YR4/1黄褐色シルト 粘性強・しまり弱、灰白色シルト粘性・しまり中、ブロック多量含む。
- 7 10YR5/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 8 2.5Y4/1黄褐色シルト 粘性強・しまり弱、黄褐色シルト少量含む。
- 9 2.5Y4/1黄褐色シルト 粘性強・しまり弱、黒褐色シルト少量含む。
- 10 10BG7/1明古灰色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。
- 11 10BG7/1明古灰色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。

SE2176

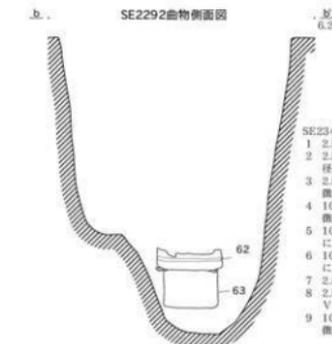
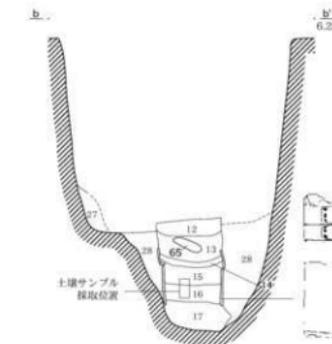
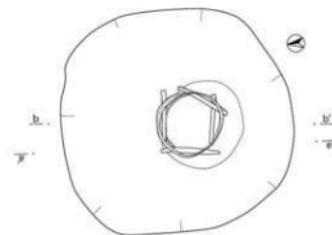
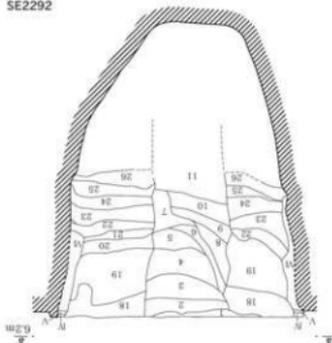


SE2176

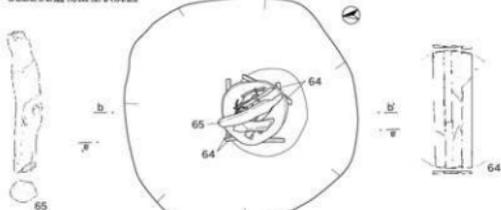
- 1 10YR5/3にんげん色土 粘性・しまり中、浅黄色シルトブロック少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色土 粘性・しまり中。
- 3 10YR5/3にんげん色土 粘性・しまり中。
- 4 10YR5/4にんげん色土 粘性・しまり中。
- 5 10YR4/2灰黄褐色土 粘性・しまり中。
- 6 10YR3/2暗褐色土 粘性・しまり中。
- 7 2.5Y5/2暗黄褐色シルト 粘性強・しまり中。
- 8 10YR5/3にんげん色土 粘性・しまり中、炭化物粒微量含む。
- 9 2.5Y2/1褐色シルト 粘性強・しまり弱、炭化物多量含む。
- 10 2.5Y2/1褐色シルト 粘性強・しまり弱、炭化物。
- 11 10BG5/1古灰色シルト 粘性強・しまり弱、鉄分多量含む。
- 12 10BG4/1古灰色シルト 粘性強・しまり弱、黒褐色シルト少量含む。



SE2292



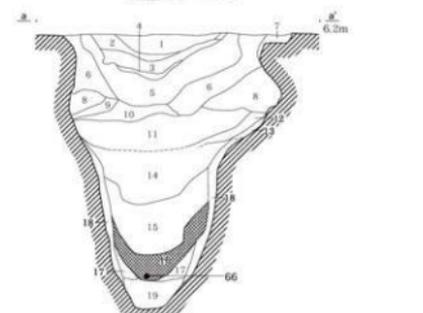
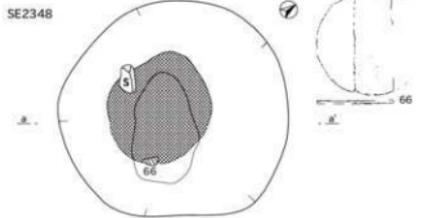
SE2292遺物出土状況図



SE2292

- | | |
|---|--|
| 1 10BG5/1青灰色シルト 粘性弱・しまり強。 | 15 7.5Y2/2 オリーブ黒色シルト 粘性強・しまり弱。 |
| 2 10YR4/3にふい黄褐色土 粘性・しまり中。
青灰色シルト少量含む。 | 16 5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。 |
| 3 10YR4/3にふい黄褐色土 粘性・しまり中。 | 17 5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。 |
| 4 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまり中。 | 18 10YR5/3にふい黄褐色土 粘性弱・しまり強。 |
| 5 10YR3/3暗褐色土 粘性強・しまり弱。 | 19 10YR5/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。
浅黄色シルトブロック多量含む。 |
| 6 10YR3/2暗褐色土 粘性・しまり中。 | 20 10YR4/4褐色土 粘性・しまり中。
浅黄色シルトブロック多量含む。 |
| 7 10YR4/3にふい黄褐色土 粘性強・しまり弱。 | 21 2.5Y6/4にふい黄褐色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック多量含む。 |
| 8 10YR2/3黒褐色土 粘性中・しまり弱。 | 22 10YR4/4褐色土 粘性・しまり中。
にふい黄褐色シルトブロック多量含む。 |
| 9 10YR4/4褐色土 粘性中・しまり弱。 | 23 2.5Y6/4にふい黄褐色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック多量含む。 |
| 10 10YR3/3暗褐色土 粘性強・しまり弱。 | 24 10YR4/4褐色土 粘性・しまり中。
にふい黄褐色シルトブロック多量含む。 |
| 11 10YR3/3暗褐色土 粘性強・しまり弱。
黄褐色シルトブロック多量含む。 | 25 2.5Y6/4にふい黄褐色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック多量含む。 |
| 12 2.5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。
炭化物多量含む。 | 26 2.5Y6/4にふい黄褐色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック多量含む。 |
| 13 2.5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。
炭化物微量含む。 | 27 2.5Y7/3浅褐色シルト 粘性強・しまり弱。
炭分多量含む。 |
| 14 7.5Y3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。
植物遺体多量含む。 | 28 10BG6/1青灰色砂 粘性弱・しまり強。
黒色シルト微量含む。 |

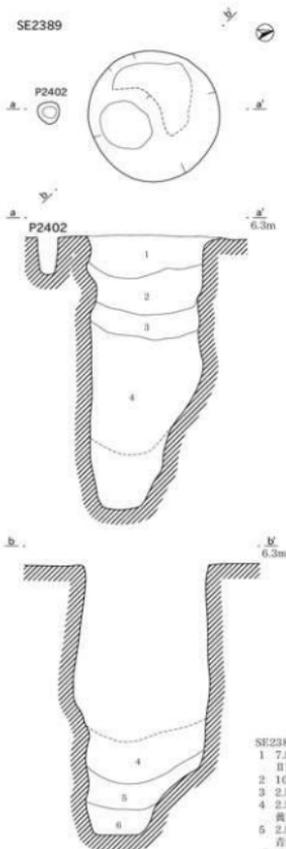
SE2348



SE2348

- | | |
|--|--|
| 1 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性・しまり中。 | 10 10YR2/1黒色シルト 粘性中・しまり弱。炭化物物。 |
| 2 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性・しまり中。
径5mm炭化物粒少量含む。 | 11 2.5Y5/2 暗灰褐色シルト 粘性強・しまり中。
にふい黄褐色シルトブロック多量含む。 |
| 3 2.5Y2/1黒色シルト 粘性・しまり中。
微細~5mm炭化物粒多量含む。炭土塊混入。 | 12 2.5Y5/4黄褐色シルト 粘性強・しまり中。V層崩落土。 |
| 4 10YR6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり中。
微細炭化物中量含む。 | 13 2.5Y5/2 暗灰褐色シルト 粘性強・しまり中。 |
| 5 10YR5/6暗褐色シルト 粘性強・しまり中。
にふい黄褐色シルトブロック少量含む。 | 14 2.5Y5/4黄褐色シルト 粘性・しまり中。 |
| 6 10YR3/3暗褐色シルト 粘性強・しまり中。
にふい黄褐色シルトブロック少量含む。 | 15 2.5Y5/1黒灰色シルト 粘性強・しまり中。
黄褐色砂多量含む。黒褐色シルト微量含む。 |
| 7 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中。 | 16 2.5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。炭化物物。 |
| 8 2.5Y5/4黄褐色シルト 粘性強・しまり中。
V層崩落土。 | 17 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。灰白色シルト多量含む。
曲状炭化土。 |
| 9 10YR3/3暗褐色シルト 粘性強・しまり中。
微細炭化物少量含む。 | 18 2.5Y4/6オリーブ褐色土 粘性弱・しまり中。酸化している。 |
| | 19 10BG6/1青灰色シルト 粘性強・しまり弱。黒褐色シルト微量含む。 |

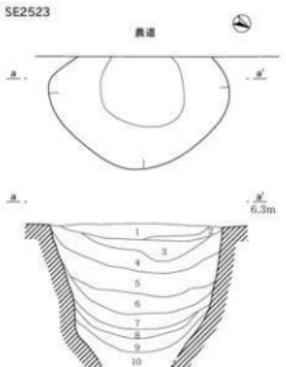
SE2389



SE2389

- 1 7.5Y6/1緑灰色シルト 粘性弱・しまり中、
II層に類似。
- 2 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
黄褐色土ブロック多量含む。
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性強・しまり弱。
古灰色砂質シルト少量含む。
- 6 10BG7/1明古灰色シルト 粘性強・しまり弱。
オリーブ褐色シルト微量含む。

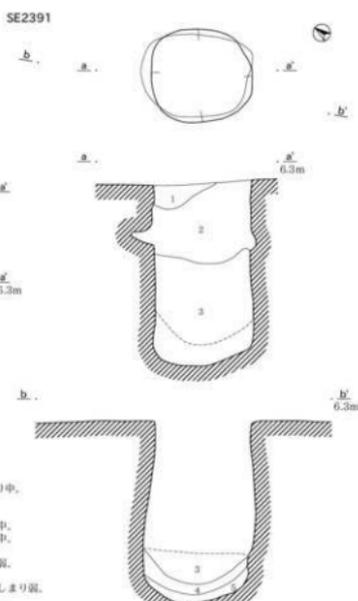
SE2523



SE2523

- 1 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり中。
褐色シルトブロック中量含む。
- 2 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック少量含む。
- 3 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック少量含む。
- 4 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック少量含む。
- 5 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性・しまり中。
黄灰色土ブロック中量含む。
- 6 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性・しまり中。
褐色土ブロック少量含む。
- 7 10YR5/1褐色シルト 粘性強・しまり弱。
浅黄色シルトブロック多量含む。
- 8 2.5Y6/4に多い黄色シルト 粘性強・しまり弱。
褐色シルトブロック多量含む。
- 9 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
浅黄色シルトブロック中量含む。
- 10 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
浅黄色シルトブロック中量含む。

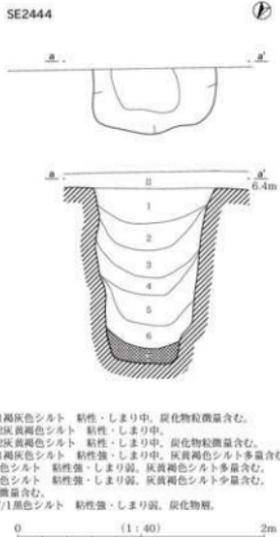
SE2391



SE2391

- 1 10GY5/1緑灰色シルト 粘性弱・しまり中、
II層に類似。
- 2 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまり中。
径10mm炭化物少量含む。
- 3 10YR3/4暗褐色土 粘性・しまり中。
浅黄色シルトブロック少量含む。
- 4 2.5Y5/3灰オリーブ褐色シルト 粘性強・しまり弱。
明古灰色シルト多量含む。
- 5 10BG7/1明古灰色シルト 粘性強・しまり弱。
炭分多量含む。

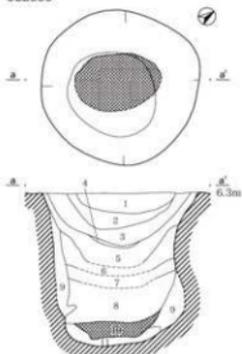
SE2444



SE2444

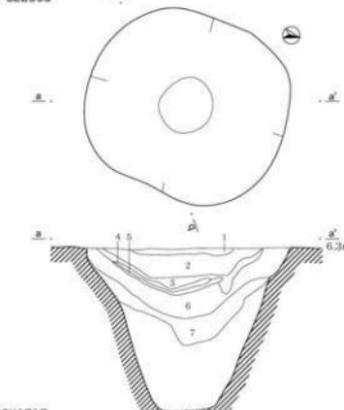
- 1 10YR5/1褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 2 10YR4/2灰褐色シルト 粘性・しまり中。
- 3 10YR4/2灰褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 4 10YR5/1褐色シルト 粘性強・しまり中。灰黄褐色シルト多量含む。
- 5 5Y5/1灰色シルト 粘性強・しまり弱。灰黄褐色シルト多量含む。
- 6 5Y5/1灰色シルト 粘性強・しまり弱。灰黄褐色シルト少量含む。
炭化物粒微量含む。
- 7 10YR1.7/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。炭化物粒。

SE2535



- SE2535
- 1 10YR5/4に多い黄褐色土 粘性・しまり中, 腐植土層なし。
 - 2 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。
 - 3 10YR4/2灰黄褐色土 粘性・しまり中, 黄褐色シルト粒多量含む。
 - 4 10YR3/1黒褐色土 粘性中・しまり弱, 炭化物層。
 - 5 10YR3/4暗褐色土 粘性中・しまり弱, 黄褐色シルト中量含む。
 - 6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱。
 - 7 10YR4/4褐色土 粘性強・しまり弱, 黄褐色シルトブロック多量含む。
 - 8 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱, 黄褐色シルトブロック多量含む。
 - 9 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 10 2.5Y5/2暗黄褐色シルト 粘性強・しまり弱, 炭化物多量含む。
 - 11 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。

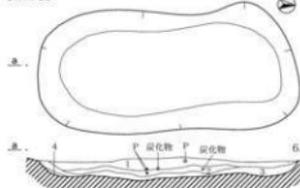
SE2555



SE2555

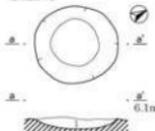
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり中, 黄褐色シルト粒少量含む。
- 2 10YR4/1黒灰色シルト 粘性弱・しまり中, 炭化物粒微量含む。
- 3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり中, 焼土粒・炭化物粒少量含む。
- 4 7.5YR5/8暗褐色シルト 粘性・しまり中, 焼土多量含む。
- 5 10YR2/1黒色シルト 粘性・しまり中, 炭化物粒・黄褐色シルト多量含む。
- 6 10YR4/1黒灰色シルト 粘性・しまり中, 焼土粒・炭化物粒・黄褐色シルト少量含む。
- 7 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中, 焼土粒・炭化物粒少量含む。
- 8 10YR4/1黒灰色シルト 粘性・しまり中, 黒色・灰白色シルト多量含む。
- 9 2.5Y7/1灰白色シルト 粘性強・しまり弱, 黄灰色シルト少量含む。
- 10 10Y5/5暗褐色シルト 粘性強・しまり弱, 黄灰色シルト少量含む。

SK1700



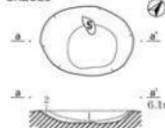
- SK1700
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中, 径5mm炭化物粒微量含む。
 - 2 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性弱・しまり中, 径5~10mmの炭化物粒微量含む。
 - 3 10YR3/4暗褐色土 粘性・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 - 4 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり中, 黄褐色土多量含む。

SK2043



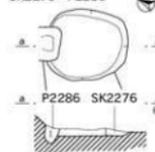
- SK2043
- 1 10YR3/2黒褐色土 粘性弱・しまり中, 緑灰色シルト多量含む。

SK2089



- SK2089
- 1 10YR3/2黒褐色土 粘性・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 - 2 10YR7/4に多い黄褐色土 粘性・しまり中, 黒褐色土粒少量含む。

SK2276・P2286



- SK2276
- 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
- P2286
- 1 10YR4/4褐色土 粘性・しまり中, 暗褐色土粒多量含む。

SK1717



- SK1717
- 1 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色・土粒少量含む。

SK1810



SK1810

- SK1810
- 1 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色・土粒少量含む。

SD1763



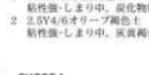
SK1811



SK1810

- SK1810
- 1 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒少量含む。

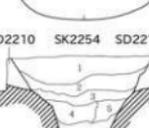
SK2291



SK2254



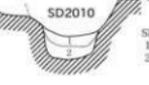
SD2210 SK2254 SD2210



SK2529



SD2066



SD2010



SK1966



SK1966

- SK1966
- 1 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 - 2 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。

SK2254

- SK2254
- 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土粒多量含む。
 - 2 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 - 3 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 - 4 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり中, 暗褐色土多量含む。
 - 5 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり中, 暗褐色土中量含む。
 - 6 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり中, 暗褐色土中量含む。

SK2262



SD1763



SK2262

- SK2262
- 1 10YR5/4に多い黄褐色土 粘性弱・しまり中, 2 10YR4/2灰黄褐色土 粘性強・しまり中, 黄褐色土多量, 焼土ブロック微量含む。

SK2529

- SK2529
- 1 N6/ 灰白色土 粘性強・しまり弱, 炭化物少量含む。
 - 2 10G6/1緑灰色土 粘性強・しまり弱, 灰白色中量含む。

SD1031



SD1031・1702

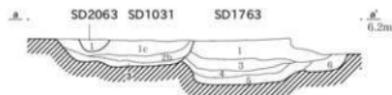


- SD1031
 1a 10YR5/1青灰色砂 粘性弱・しまり中, 灰白色砂多量含む。
 1b 2.5Y4/4オリーブ褐色土 粘性弱・しまり強, 黄褐色土粒多量含む。
 2a 10YR6/1褐色土 粘性弱・しまり強, 炭分多量含む。
 3 10YR5/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり強, 褐色土多量含む。
 4 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 5 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土多量含む。

- SD1702
 1 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。

分断面 (1) に対応

SD1031・1763・2063

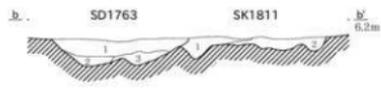


- SD1031
 1c 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 2b 10YR5/4にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 3 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。

- SD1763
 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 3 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 4 10YR5/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 5 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 6 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。

- SD2063
 1 5Y4/1灰白色土 粘性弱・しまり強, 現代の溝。

SD1763・SK1811



- SD1763
 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 褐色土多量含む。
 2 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 3 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土ブロック多量含む。

- SK1811
 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 2 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。

SD1764



- SD1764
 1 10YR6/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。
 2 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中。

SD2066・2067



- SD2066
 1a 10YR5/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。
 2a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 褐色土多量含む。
 3 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 4 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土粒微量含む。

- SD2067
 1a 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中。
 2 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。

SD2075



- SD2075
 3b 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 3c 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 3d 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 6b 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土粒微量含む。
 6c 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 7a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。

SD2075



- SD2075
 1a 10YR4/1褐灰色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 2a 10YR4/1褐灰色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 3a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 4a 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 5a 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 6a 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土粒微量含む。
 7a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。
 8 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。

SD2075



- SD2075
 3a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒多量含む。
 4b 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 6a 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 暗褐色土多量含む。
 8 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。

SD2144・2299



- SD2144
 1 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土微量含む。
 2 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。

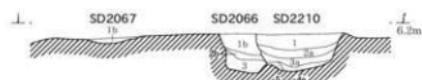
- SD2299
 3b 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 褐色土粒多量含む, 黄褐色土粒微量含む。
 5a 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。

SD2210



- SD2210
 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 褐色土多量含む。
 2a 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 3a 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 4a 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。
 5 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中, 褐色土多量含む。

SD2066・2067・2210



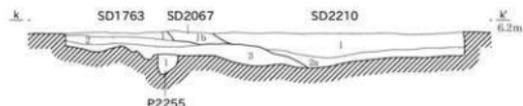
- SD2067
 1b 10YR4/6褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土多量含む。

- SD2066
 2b 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中, 3 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中, 黄褐色土粒微量含む。

分断面 (2) に対応



SD1763・SD2067・2210
P2255



SD1763

- 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中、褐色土多量含む。
- 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中、黄褐色土多量含む。
- 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまり中、黄褐色土ブロック多量含む。

P2255

- 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。

SD2067

- 10YR4/6褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。

SD2241



SD2242



SD2299



SD2241・2242

- 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土微量含む。
- 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中、黒褐色土微量含む。

SD2299

- 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中、褐色土粒多量含む。
- 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中、暗褐色土微量含む。
- 3a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土粒微量含む。
- 4 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土粒少量含む。
- 5a 10YR3/3暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土粒多量含む。

分割面(2)に対応

SD2075



SD2075

- 1c 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。
- 2a 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土微量含む。
- 2b 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土ブロック多量含む。
- 6d 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中、褐色土多量含む。
- 7b 10YR4/1褐色土 粘性・しまり中、黄褐色土粒少量含む。
- 8 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまり中、炭化物少量含む。部分的に多量含む。

SD2299



SD2299

- 7.5Y3/1黒褐色シルト主体 粘性弱・しまり強。地山の黄褐色土(10YR7/8)ブロックを20%含む。底面に近い層、含有多い。

SD4027



SD4027

- 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
- 2.5Y5/4黄褐色シルト 粘性無・しまり強。地山に非常に近似し、1層のブロック含む。

SD2288



SD2288

- 10YR3/2黒褐色土 粘性・しまり中、緑褐色シルト微量含む。
- 10YR3/2黒褐色土 粘性・しまり中、緑褐色シルト少量含む。
- 10GY6/1緑灰色土 粘性・しまり中、黒褐色土多量含む。

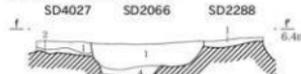
SD2288



SD2288

- 10YR3/1黒褐色シルト 粘性無・しまり強。径5mm前後の黄褐色土(10YR5/2)粒を多量。炭粒少量含む。
- 10YR5/4に多い黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。粘性弱。1層の漸移ブロックが、炭粒に混じる。ブロック堆積。炭粒少量含む。

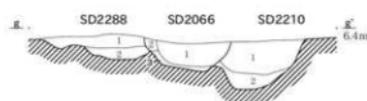
SD4027・SD2066・SD2288



SD2066

- 10YR4/4褐色シルト主体 粘性弱・しまり強。灰黄褐色(10YR5/2)の細粒のブロック少量混入。マンガソ少量。炭粒微量含む。
- 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱・しまり強。SD2288の1層と似る。マンガソ含む。
- 10YR5/4に多い黄褐色シルト主体 粘性弱・しまり中。地山に近似するが、色調は暗く、マンガソの沈着も多い。
- 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。1層と色調が近い程度。
- 10YR6/3に多い黄褐色粘質シルト 粘性中・しまり中。地山と似るが、4層のブロックが少量混入。炭粒微量含む。

SD2288・SD2066・SD2210



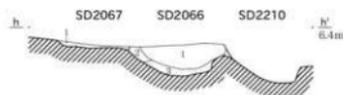
SD2067

- 10YR5/6明黄褐色土+10YR4/2灰黄褐色粘質シルトのブロック堆積 粘性弱・しまり強。炭粒・マンガソ少量含む。おそらく底面の埋土のみ残ったもの。

SD2288

- 10YR3/2黒褐色シルト 粘性無・しまり強。マンガソ含む。炭粒少量含む。
- 10YR6/6明黄褐色土+10YR4/3に多い黄褐色シルト 径1cm前後のブロックが均等に混じる。SD2067埋土の可能性もある。

SD2067・SD2066・SD2210



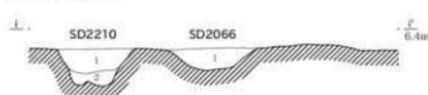
SD2210

- 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。SD2066 1層と非常に近似するが、色調はやや明るい。
- 10YR6/3に多い黄褐色粘質シルト 粘性中・しまり中。地山と似るが、灰黄褐色シルトのブロックが少量混入。炭粒微量含む。

SD4027

- 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
- 2.5Y5/4黄褐色シルト 粘性無・しまり強。地山に非常に近似し、1層のブロック含む。

SD2210・SD2066



SD2210

- 10YR5/4に多い黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。地山ブロック・マンガソ少量含む。炭粒微量含む。
- 10YR7/4に多い黄褐色粘質シルト主体 1層が3層ほど混入。

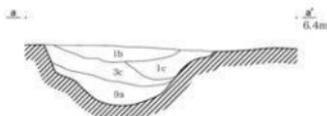
SD2066

- 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。マンガソ・炭粒微量含む。埋埋土の違いはほとんどないが、SD2210はややブロック的な混じりが多い。色調も暗め。

分割面(4)に対応

0 (1:40) 2m

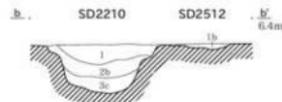
SD2075



SD2075

- 1b 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土少量含む。
- 1c 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。
- 3c 2.5Y4/2暗灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。
- 9a 2.5Y4/1黄灰色土 粘性・しまり中、黄褐色土多量含む。

SD2210・2512



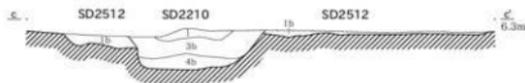
SD2210

- 1 10YR4/4褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土少量含む。
- 2b 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中、褐色土多量含む。
- 3c 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。

SD2512

- 1b 10YR3/4暗褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。

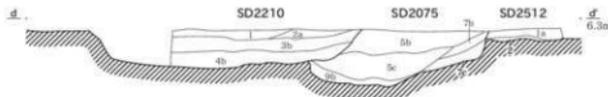
SD2210・2512



SD2210

- 1 10YR4/6褐色土 粘性弱・しまり強、鉄分多量含む。
- 2a 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性弱・しまり中、鉄分多量含む。
- 3b 10YR6/3に多い黄褐色土 粘性弱・しまり強。
- 4b 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中。

SD2075・2210・2512



SD4137



SD4137

- 1 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、マンガン含む。

SD2075

- 5b 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり強。
- 5c 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。
- 7b 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり強、黄褐色土少量含む。
- 7c 10YR4/1褐色土 粘性弱・しまり強、黄褐色土多量含む。
- 9b 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土多量含む。

SD2512

- 1a 10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり強。
- 2 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり強、灰黄褐色土少量含む。

SD2531



SD2531

- 1 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 2 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、マンガン少量含む。
- 3 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性中・しまり弱、マンガン少量含む。

SD2695



SD2695

- 1 2.5Y7/3浅黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。

SD4308



SD4308

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 2.5Y7/8黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

SD2531



SD2531

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 粘性弱・しまり中、黄褐色土少量含む。

SD2679



SD2679

- 1 10YR5/1褐色土 粘性弱・シルト中。
- 2 2.5Y6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり弱。

SD4049



SD4049

- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱・しまり中、径0.5~2cm大の明黄褐色 (10YR6/6) 地山ブロック少量含む。
- 2 10YR6/3に多い黄褐色粘質シルト主体 粘性弱・しまり中、1層のブロック含む、炭粒少量含む。
- 3 10YR5/3に多い黄褐色土 粘性弱・しまり中。

SD4063



SD4063

- 1 10YR3/4暗褐色+10YR7/4に多い黄褐色シルトのブロック堆積 粘性弱・しまり中。

分断面 (4) に対応

SD4367



SD4367 A-A'

- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y5/2暗灰黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y6/6暗黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

SD4367



SD4367 B-B'

- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y7/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 5 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 6 2.5Y7/4浅黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

SD4367



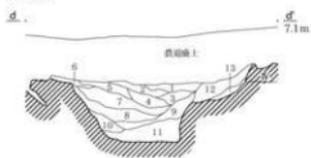
SD4367 C-C'

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y4/2暗灰黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 5 2.5Y5/2暗灰黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 6 2.5Y6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

分断面 (5) に対応

0 (1:40) 2m

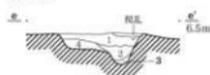
SD4302



SD4302

- 1 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 2 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 3 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 5 10YR5/3に多い黄褐色シルト 粘性弱・しまり弱。
- 6 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 8 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 9 10YR4/3に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 10 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 11 2.5Y6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 12 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 13 2.5Y6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり強。

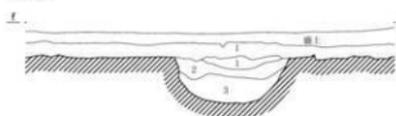
SD4302



SD4302

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり強。
- 2 2.5Y3/1黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 3 2.5Y6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 4 2.5Y7/3浅黄褐色シルト 粘性強・しまり強。

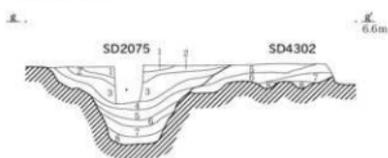
SD4302



SD4302

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり強。
- 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり強。
- 3 2.5Y7/3浅黄褐色シルト 粘性強・しまり強。

SD2075・SD4302



SD2075・SD4302

- 1 10YR8/1灰白色シルト 粘性・しまり中、炭分の沈着含む。
- 2 10YR8/2灰白色シルト 粘性・しまり中、炭分の沈着含む。
- 3 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、マンガン含む。
- 4 10YR8/2灰白色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、炭分の沈着含む。
- 5 10YR7/3に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 6 10YR7/3に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、黄褐色シルトブロック含む。
- 7 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 8 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、黄褐色シルトブロック多量含む。

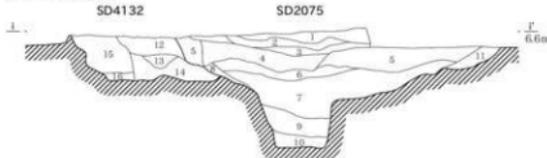
SD2075



SD2075

- 1 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック少量含む。
- 2 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、炭分の沈着含む。
- 3 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、炭分の沈着含む。
- 4 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック多量含む。炭分の沈着含む。
- 5 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、黄褐色シルトブロック含む。
- 6 10YR6/6黄褐色シルト 粘性中・しまり弱。灰白色シルトブロック、炭分の沈着含む。

SD4132・SD2075



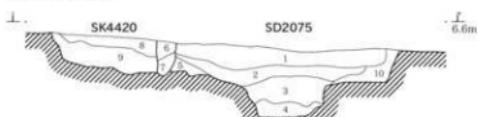
SD2075

- 1 10YR4/3に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
- 炭粒微量含む。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒少量。地山粒少量含む。
- 3 10YR4/4褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒少量含む。
- 4 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒少量含む。微量、マンガン微量含む。
- 5 10YR5/4黄褐色シルト 粘性無・しまり強。に多い黄褐色(10YR5/3)ブロック少量。炭粒微量含む。
- 6 10YR6/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒微量含む。
- 7 10YR6/3に多い黄褐色+10YR5/2灰黄褐色シルト 炭粒、焼土塊微量含む。
- 8 10YR7/2に多い黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、ブロック堆積。
- 9 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。地山ブロック少量。炭粒微量含む。
- 10 10YR6/3明黄褐色+10YR6/4に多い黄褐色+10YR4/2灰黄褐色粘質シルトのブロック堆積。粘性弱。しまり中。
- 11 10YR6/4に多い黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。に多い黄褐色(10YR5/4)ブロック混じる。

SD4132

- 12 10YR4/4褐色シルト 粘性無・しまり強。
- 13 10YR4/4褐色+10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒少量含む。
- 14 2.5Y6/4に多い黄褐色+10YR5/4に多い黄褐色+10YR6/6明黄褐色シルトのブロック堆積。炭粒少量含む。
- 15 10YR4/4褐色シルト 粘性無・しまりあり。13層より色調は濃い。
- 16 10YR5/3に多い黄褐色+10YR5/2灰黄褐色シルト。14層とはほぼ同様。

SK4420・SD2075



SD2075

- 1 10YR5/4に多い黄褐色シルト マンガン沈着。炭粒・焼土塊微量含む。7層に相当。
- 2 10YR6/3に多い黄褐色+10YR5/2灰黄褐色シルト。
- 3 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。
- 4 10層に相当。
- 5 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト主体 粘性弱・しまり強。地山に近似。に多い黄褐色(10YR4/3)+褐色(10YR4/4)粘質シルトのブロック堆積。炭粒微量。1層と1層と同等か不明。
- 6 2.5Y6/2灰黄褐色+10YR5/4に多い黄褐色+10YR6/6明黄褐色シルト 粘性無・しまり強。ブロック堆積。地山に近似。マンガン多量。炭粒微量含む。

ピット

- 6 10YR3/3暗褐色シルト 粘性無・しまり強。地山粒含む。
- 7 10YR4/3に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。

SK4420

- 8 10YR3/3暗褐色シルト 粘性無・しまり強。マンガン・地山粒含む。6層より暗い。
- 9 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。地山に近似。に多い黄褐色(10YR4/3)+褐色(10YR4/4)粘質シルトのブロック堆積。炭粒微量。1層1センチ以下の炭化物を含む。

分断図 (5) に対応

0 (1:40) 2m

南北ベルト 4層以下 SD2075

SD4269



北E 30ライン 南北ベルト
 1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり強。水田耕作土。(1a層)
 2 10YR5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。水田耕作土。(1b層)
 3 2.5YR6/3に黄褐色シルト 2層と同様。(1b層)

SD2075
 4 2.5Y5/3黄褐色+10YR5/4に黄褐色+2.5Y6/2灰黄色シルトのブロック堆積 粘性弱・しまり中。炭化物・マンガン微量含む。浅い溝状で、後継の用水の一部。
 5 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり中。マンガン・炭粒少量含む。
 6 10YR4/2灰黄褐色シルト主体 粘性弱・しまり中。マンガン・炭粒少量含む。
 7 2.5Y6/4に黄褐色+2.5Y6/3暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。堆土ではなく、変色部の可能性あり。
 8 2.5Y7/2灰黄色+2.5Y7/3浅灰色シルト 粘性弱・しまり強。固くしまり。地山のようなだが、ブロック堆積のような部分もある。

SD4269
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性中・しまり中。
 褐色シルトブロック含む。

SD4270・SD4271・SD4272・SD4273



SD4270・SD4272
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性中・しまり中。
 褐色シルトブロック含む。

SD4271・SD4273
 1 10YR5/1褐色黄色シルト 粘性中・しまり中。
 浅黄褐色シルトブロック含む。

SD4785

P4796・SD4785

SD4785



SD4785

1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。炭粒微量含む。
 2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
 3 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。
 4 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。

SD4785

1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性無・しまり強。
 マンガン中量。炭粒少量含む。
 2 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性無・しまり中。

P4796

1 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
 炭粒微量含む。
 2 10YR5/2暗灰黄色シルト 粘性無・しまり強。
 3 2.5Y7/2(白色)灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。

SD4785

1 10YR5/1褐色黄色シルト 粘性中・しまり中。
 灰白色シルトブロック含む。

SD4785



SD4785

1 10YR4/3に黄褐色シルト主体 粘性弱・しまり中。に黄褐色(2.5Y6/4)シルト質ブロック混入。
 2 10YR4/2灰黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。炭粒・マンガンを少量含む。
 3 2.5Y5/2暗灰黄色+10YR5/8黄褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒・マンガンを少量含む。砂質が入る。
 4 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
 5 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。地山が崩れて堆積した様子。砂質含む。

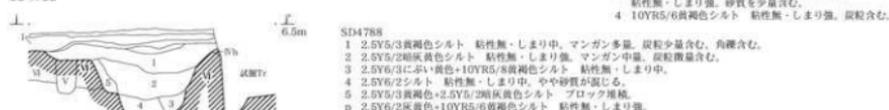
基本順序

a 10YR5/4に黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
 b 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性無・しまり中。セラセラしている。
 c 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性無・しまり中。
 d 2.5Y6/2に黄褐色シルト 粘性無・しまり強。砂質が混入。マンガン中量含む。

SD4788



SD4788



SD4788

1 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性無・しまり中。マンガン中量。炭粒少量含む。
 2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性無・しまり強。マンガン中量。炭粒微量含む。
 3 2.5Y6/3に黄褐色+10YR5/8黄褐色シルト 粘性無・しまり中。
 4 2.5Y6/2シルト 粘性無・しまり中。やや砂質が混入している。
 5 2.5Y5/3黄褐色+2.5Y5/2暗灰黄色シルト ブロック堆積。
 p 2.5Y6/2灰黄色+10YR5/6黄褐色シルト 粘性無・しまり強。

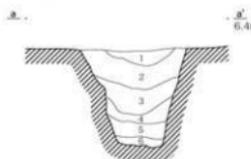
基本順序

III 2.5Y7/2暗黒褐色シルト 粘性無・しまり中。
 褐色IVa層ブロック少量含む。
 IVa 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり中。
 マンガン。炭粒少量含む。
 IVb 10YR8/2黒褐色シルト
 IVc 10YR3/2黒褐色+2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。
 VI 2.5Y6/4に黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。

SD4788

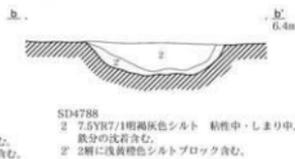
1 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり強。
 マンガン中量。炭粒少量含む。
 2 10YR5/3に黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。
 黄褐色(2.5Y5/3)ブロック混入。
 3 10YR5/3に黄褐色+2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。砂質を少量含む。
 4 10YR5/6黄褐色シルト 粘性無・しまり強。

SD4788



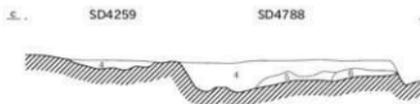
- SD4788
 1 7.5YR7/1明褐色シルト 粘性中・しまり中、
 2 7.5YR7/1明褐色シルト 粘性中・しまり中、
 鉄分の沈着含む。
 3 7.5YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、
 鉄分の沈着含む。
 4 7.5YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、
 灰色シルトブロック含む。
 5 N6/灰色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
 6 N7/灰白色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。

SD4788



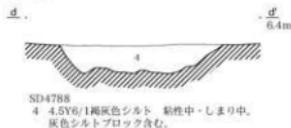
- SD4788
 2 7.5YR7/1明褐色シルト 粘性中・しまり中、
 鉄分の沈着含む。
 2' 2層に浅黄褐色シルトブロック含む。

SD4259・SD4788



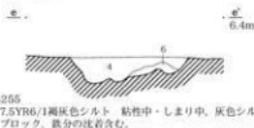
- SD4788
 4 7.5YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、灰色シルトブロック含む。
 5 N6/灰色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
 6 N7/灰白色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
- SD4259
 4 7.5YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、灰色シルトブロック、
 鉄分の沈着含む。

SD4788



- SD4788
 4 4.5Y6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、
 灰色シルトブロック含む。

SD4255



- SD4255
 4 7.5YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、灰色シルト
 ブロック、鉄分の沈着含む。
 6 N7/灰白色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。

SD4260



- SD4260
 4 7.5YR6/1褐色シルト
 粘性中・しまり中、灰色シルト
 ブロック、鉄分の沈着含む。

SD2075

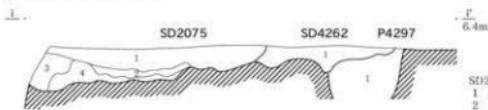


- SD2075 g-g'・h-h'・i-i'
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、浅黄褐色シルトブロック、
 鉄分の沈着含む。
 1' 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、浅黄褐色シルトブロック、
 鉄分の沈着含む。1層よりも浅黄褐色シルトブロックの割合高い。
 2 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、
 鉄分の沈着含む。
 3 10YR6/1褐色シルト 粘性・しまり中、浅黄褐色シルトブロック、
 鉄分の沈着含む。
 4 10YR7/2に赤い黄褐色シルト 粘性・しまり中、褐色シルト
 ブロック、鉄分の沈着含む。
 5 10YR5/1褐色シルト+10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中、
 鉄分の沈着含む。
 6 10YR6/1褐色シルト 粘性・しまり中、浅黄褐色シルトブロック含む。
 7 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中、褐色シルトブロック含む。

SD2075



SD2075・SD4262・P4297



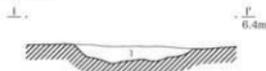
- SD2075
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、径3mm程度の炭化物、鉄分の沈着少量含む。
 2 10YR7/1灰白色+10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。

SD4262



- SD4262
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、
 浅黄褐色シルトブロック、鉄分の沈着含む。

SD4262



- SD4262
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、
 浅黄褐色シルトブロック、鉄分の沈着含む。

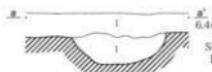
SD4262



- SD4262
 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、
 浅黄褐色シルトブロック含む。

分断面 (7) に対応

SD4262



- SD4262
 1 10BG7/1明青灰色シルト 粘性・しまり中、

SD4263



- SD4263
 1 10BG7/1明青灰色シルト 粘性・しまり中、
 浅黄褐色シルトブロック含む。

SD4126・SD4127



SD4127



SD4126

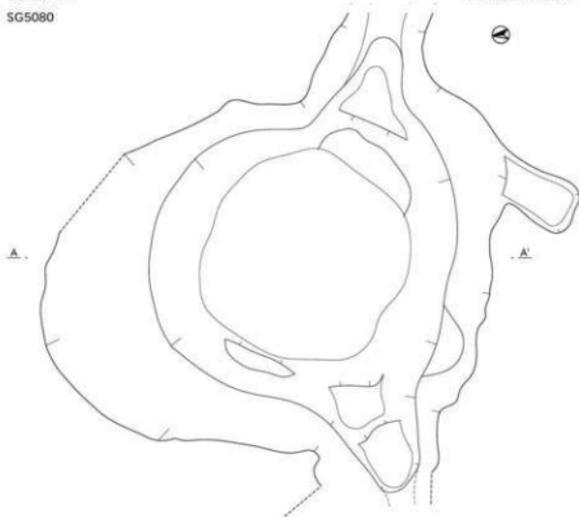
- SD4126
 1 10YR8/1灰白色砂質シルト 粘性弱・しまり中、

SD4127

- SD4127
 1 10YR8/1灰白色砂質シルト 粘性弱・しまり中、

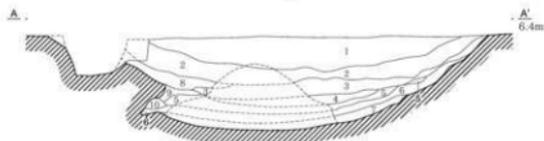
分断面 (8) に対応





SG5080

- 1 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性中・しまり中、浅黄褐色シルトブロック含む。
- 2 10YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 3 10YR7/1灰白色粘質土 粘性強・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 4 10YR7/1灰白色粘質土・10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 5 10YR7/1灰白色シルト 粘性中・しまり中、浅黄褐色シルトブロック含む。
- 6 10YR5/1褐色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 7 10BG6/1青灰色シルト 粘性中・しまり中、浅黄褐色シルトブロック、褐色シルトブロック含む。
- 8 10YR5/1褐色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
- 9 10YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
- 10 10YR8/1灰白色粘質土 粘性強・しまり中、褐色シルトブロック、鉄分の沈着含む。



SX4135



SX4135

- 1 10YR8/2灰白色シルト 粘性中・しまり中、マンガン・鉄分の沈着少量含む。

SX4224



SX4224

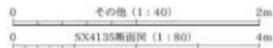
- 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性中・しまり中、鉄分の沈着、マンガン含む。

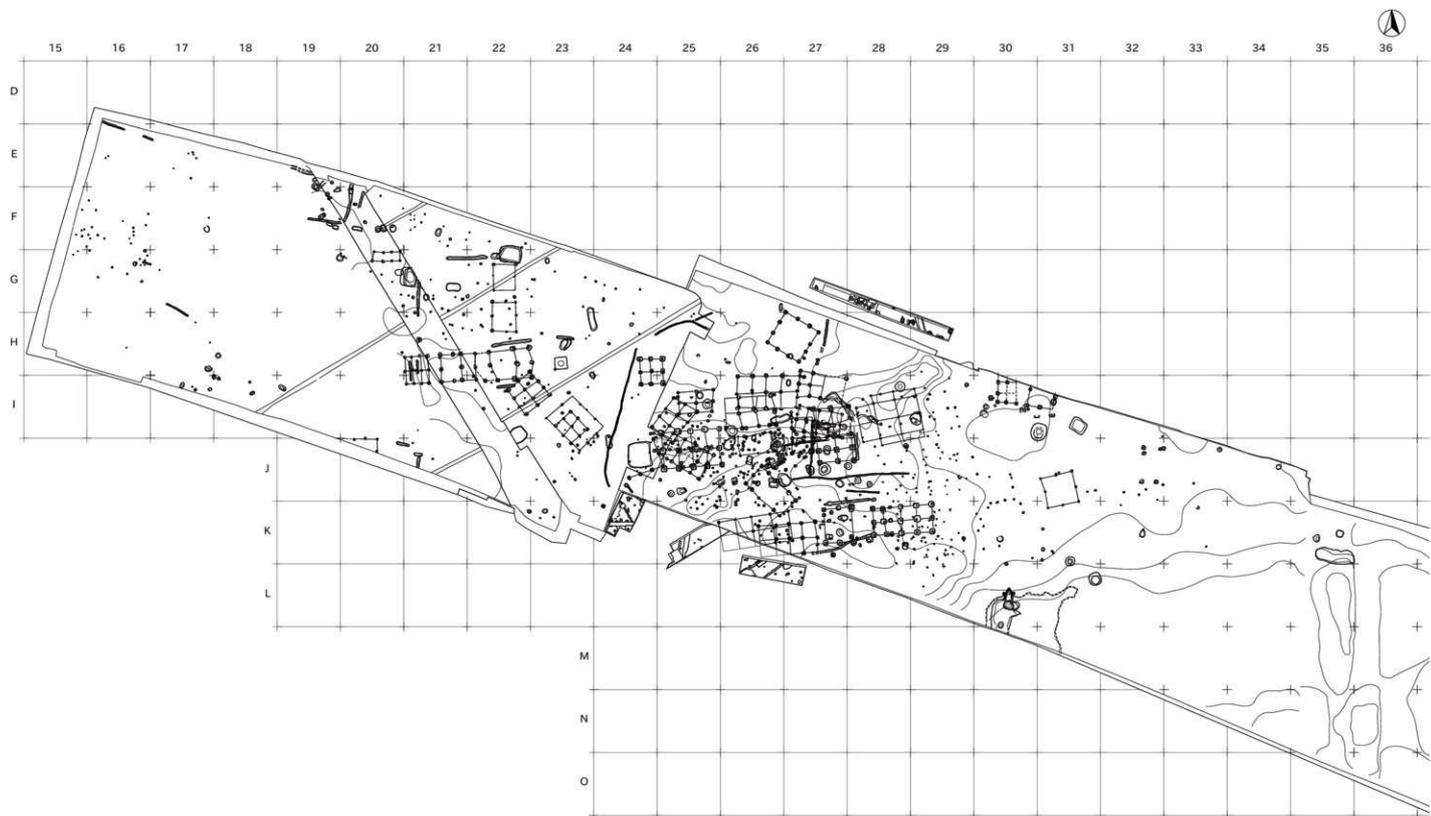
SK4257

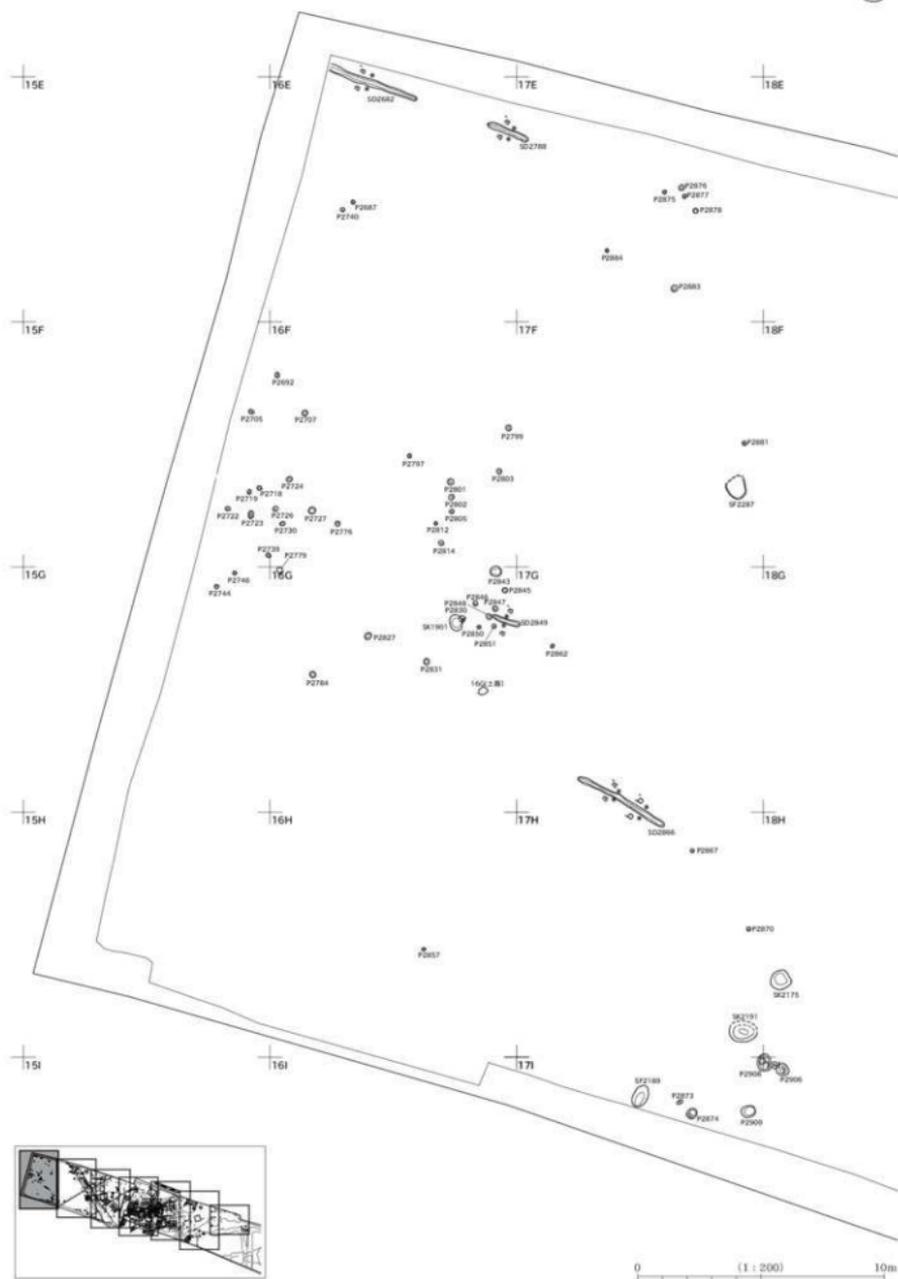


SK4257

- 1 10YR6/1褐色シルト 粘性中・しまり中。
- 2 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性中・しまり中、褐色シルトブロック含む。

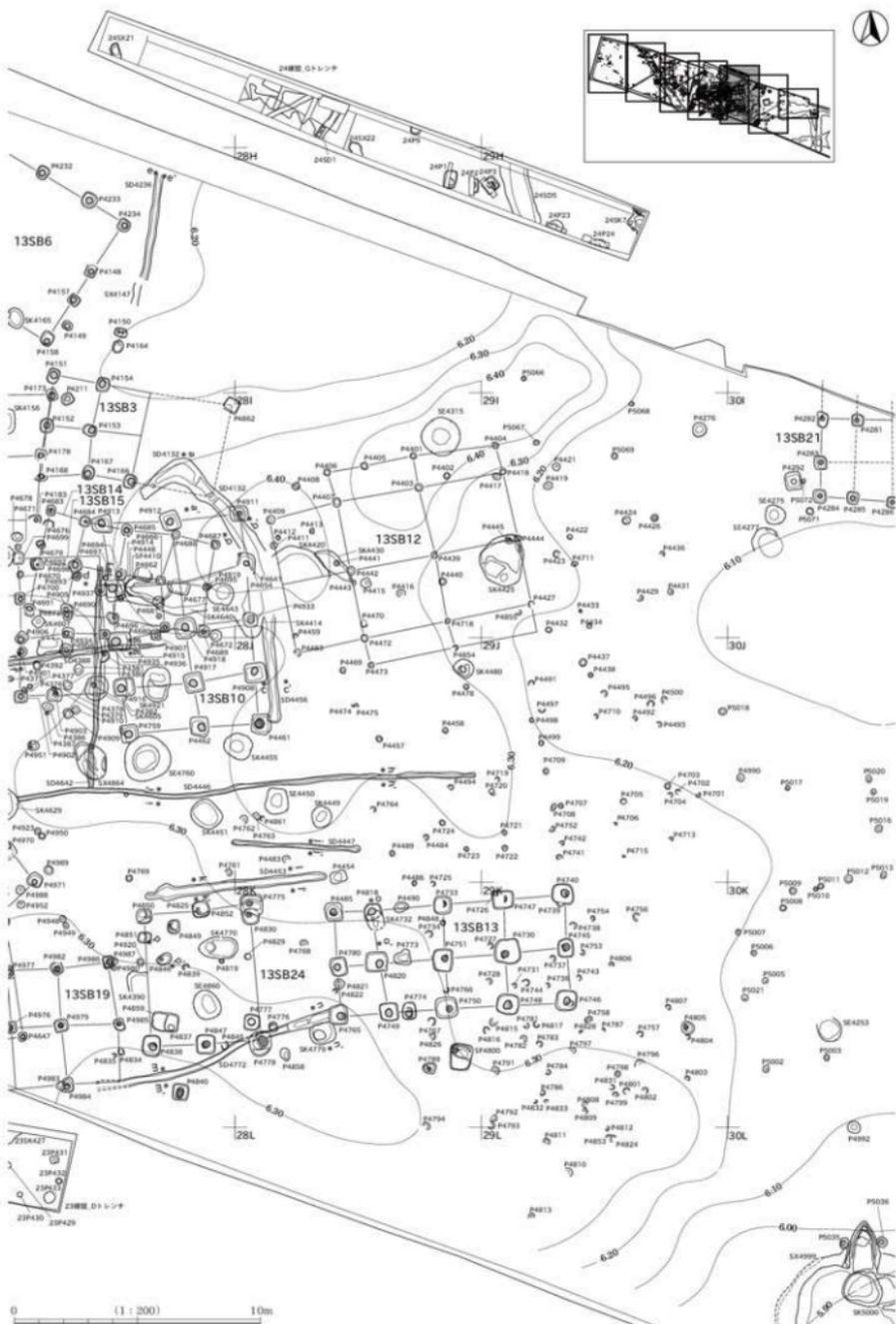


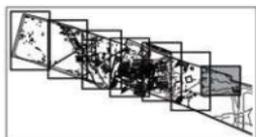
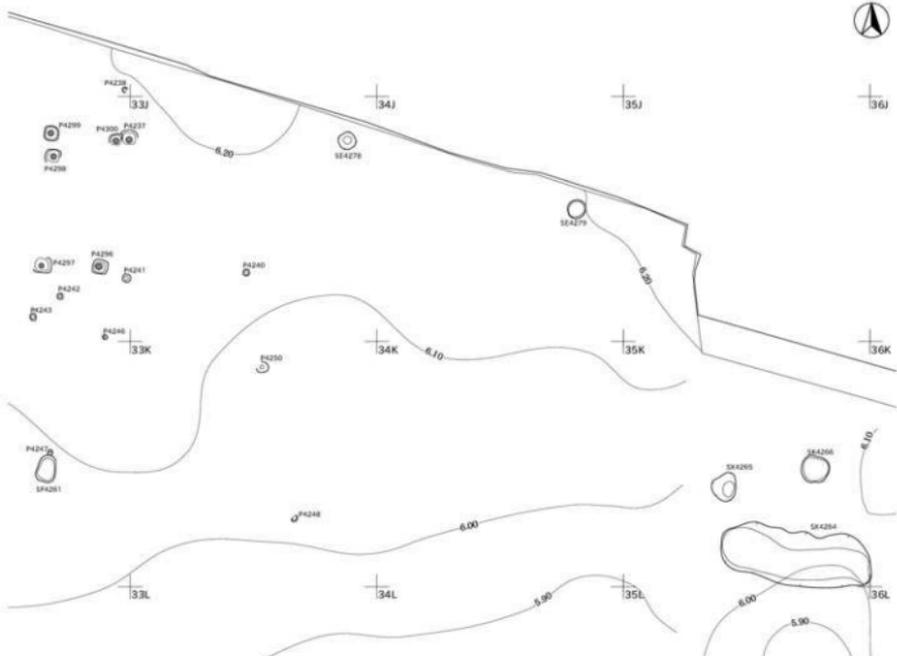




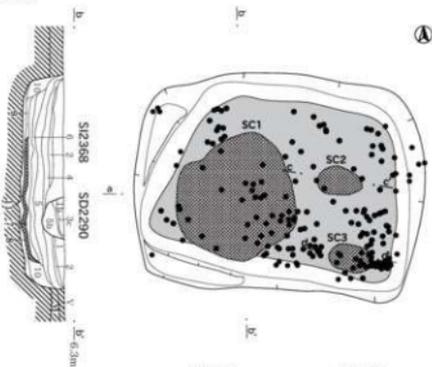








SI2368



SI2368

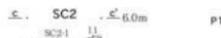
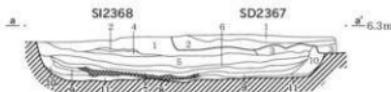
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。炭褐色シルト粒少量含む。
- 2 10YR4/3に多い黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。灰黄褐色シルト微量含む。
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 4 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 5 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 6 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。焼土粒少量含む。炭化物粒微量含む。
- 7 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物粒少量含む。焼土粒微量含む。
- 8 10YR2/1黒色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物粒。
- 9 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物微量含む。
- 10 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物微量含む。
- 11 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中。灰黄褐色土微量含む。陥床の可能性ある。

SD2299

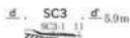
- 1b 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 3c 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。黄褐色シルト粒微量含む。
- 5b 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。黄褐色シルト粒少量含む。

SD2367 (近代以降の填)

- 1 5Y6/1 灰色シルト 粘性弱・しまり強。(目録起掘)
- 2 5Y4/1 灰色シルト 粘性弱・しまり強。(目録起掘)
- 3 10YR5/1 黄灰色シルト 粘性弱・しまり強。黄褐色土多量含む。

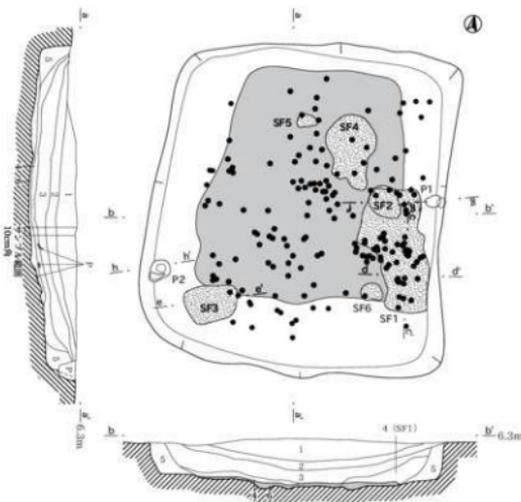


- SC2
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。炭化物多量含む。



- SC3
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。炭化物量含む。

SI3048



SF1

- 4a 5YR5/6明黄褐色土 粘性・しまり中。径1~3cmの焼土塊多量含む。炭化物少量含む。土層多量出土。SG1を4a層とする。
- 4b 10YR4/3に多い黄褐色土 粘性弱・しまり強。炭化物少量含む。4a層下のみ4b層とする。

SF2



SF2

- 1 5YR4/1黄灰色土 粘性・しまり中。床上で確認。径1cmの炭化物多量含む。

SF3



SF3

- 1 5YR5/3に多い赤褐色土 粘性・しまり中。床上で確認。径1~2cmの焼土塊と炭化物多量含む。

P1



P1

- 1 10YR5/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。
- 2 2.5Y5/4黄褐色土 粘性・しまり中。

P2



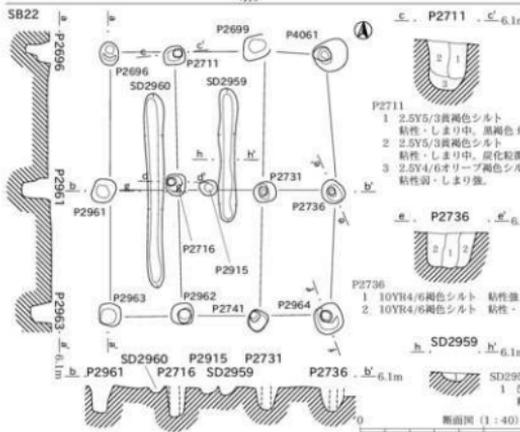
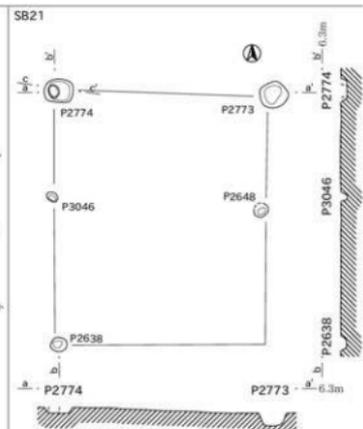
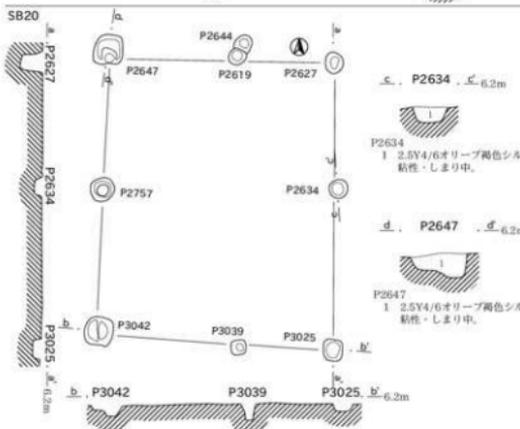
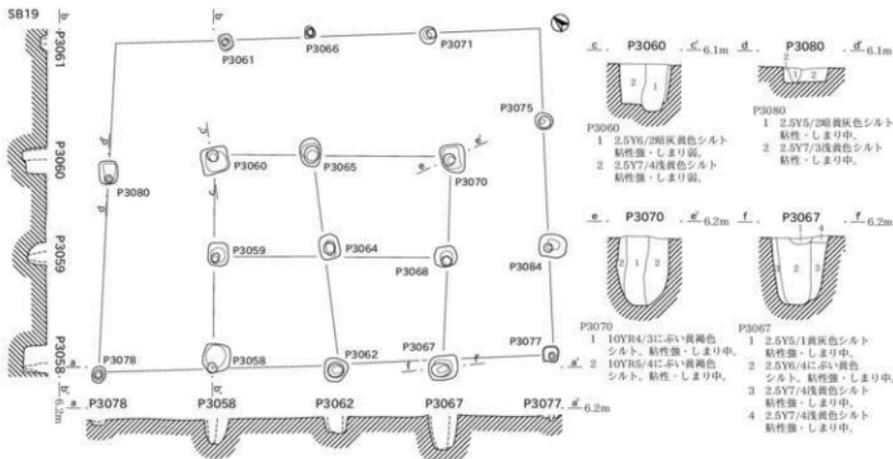
P2

- 1 10YR5/3に多い黄褐色土 粘性・しまり中。

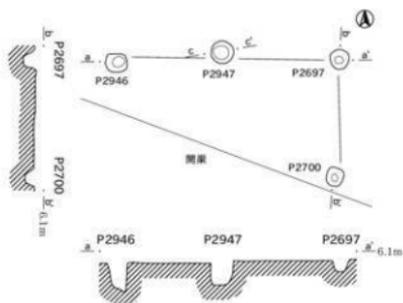
SE3048

- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり中。
- 2 10YR4/2灰黄褐色土 粘性・しまり中。
- 3 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物少量含む。瓦層上に近似。
- 4 2.5Y7/3黄褐色シルト 粘性強・しまり中。炭化物多量含む。卓越では炭化物・焼土を多量含む。
- 5 2.5Y7/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり中。瓦層土と区別が難しいが、空中陥床がある。
- 6 2.5Y7/2灰黄褐色粘土 粘性強・しまり弱。炭化物少量含む。陥床と考えられる。





SB23

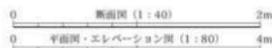


断面 P2947 高さ 6.1m

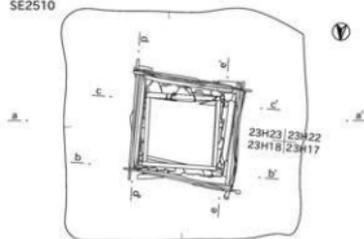


P2947

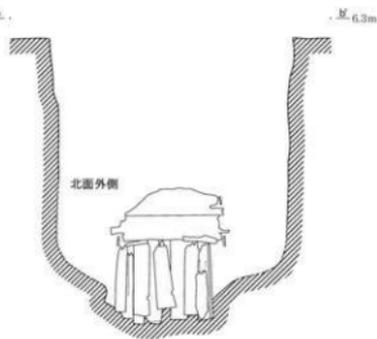
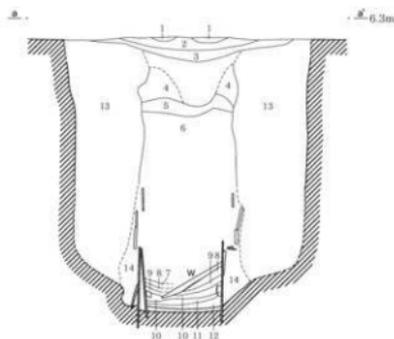
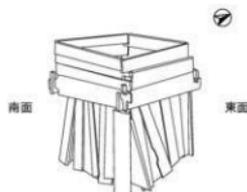
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘性・しまり中。炭化物粒微量含む。
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 粘性・しまり中。灰色シルト多量含む。



SE2510



側板模式図

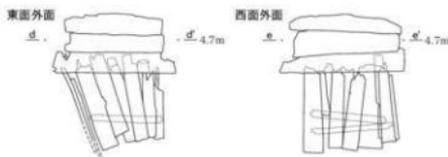


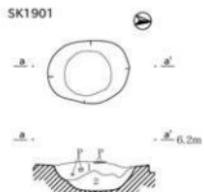
※図版 73～75 の実測図も参照のこと

SE2510

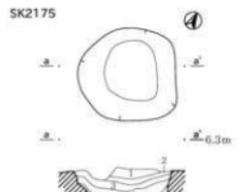
- 1 10YR4/1褐色シルト 粘性弱・しまり中。
- 2 10YR4/6灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり中。黄褐色シルト少量含む。
- 3 10YR4/1褐色シルト 粘性弱・しまり中。黄褐色シルト少量含む。
- 4 10YR6/3に灰黄褐色シルト 粘性・しまり中。土源出土。
- 5 2.5Y6/3に灰黄褐色シルト 粘性強・しまり中。炭化物少量含む。
- 6 2.5Y7/1暗灰白色シルト 粘性強・しまり中。
- 7 10G2/6/1緑灰色シルト 粘性強・しまり強。
- 8 5YR5/1暗灰色シルト 粘性強・しまり中。腐植土多量含む。
- 9 7.5YR4/2灰褐色シルト 粘性強・しまり中。腐植土多量含む。
- 10 7.5YR3/2黄褐色シルト 粘性強・しまり中。腐植土多量含む。
- 11 5YR3/1黄褐色腐植土 粘性中・しまり中。腐植や昆虫の殻等多量含む。
- 12 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性強・しまり中。植物や昆虫の殻等多量含む。腐植土中最含む。
- 13 2.5YR6/6明灰褐色シルト 粘性強・しまり中。砂質やや有。
- 14 5B6G/1青灰色シルト 粘性強・しまり弱。やや砂質含む。

断面内側 高さ 4.7m

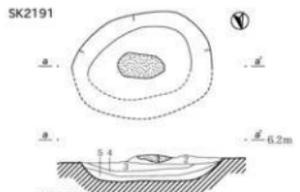




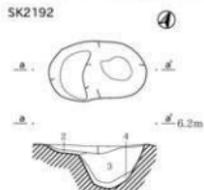
- SK1901
- 1 10YR5/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒(径3~10mm)多量含む。焼土粒少量含む。黄褐色シルト粘層を含む。
 - 2 10YR5/4に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒少量含む。



- SK2175
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土・炭化物粒微量含む。
 - 2 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土・炭化物粒微量含む。
 - 3 10YR4/4褐色シルト 微量含む(焼土層)。
 - 4 10YR5/6黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒微量含む。
 - 5 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土・炭化物粒微量含む。



- SK2191
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土ブロック微量含む。
 - 2 10YR5/6黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土ブロック・炭化物粒微量含む。
 - 3 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土粒・炭化物粒微量含む。
 - 4 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土粒・炭化物粒微量含む。
 - 5 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒微量含む。



- SK2192
- 1 10YR6/8暗褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土粒微量含む。
 - 2 10YR6/8暗褐色シルト 粘性弱・しまり中。
 - 3 7.5YR6/8暗褐色シルト 粘性・しまり強。焼土粒・炭化物粒多量含む。
 - 4 7.5YR6/3に黄褐色シルト 粘性・しまり強。



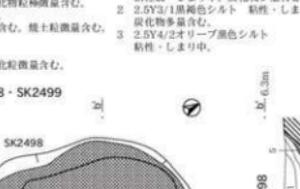
- SK2239
- 1 10YR5/4に黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、焼土粒・炭化物粒微量含む。
 - 2 10YR4/6褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒微量含む。
 - 3 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性・しまり中、炭化物粒少量含む。焼土粒微量含む。
 - 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり中、炭化物粒多量含む。
 - 5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性強・しまり中、焼土粒少量含む。
 - 6 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性強・しまり中、焼土粒・炭化物粒微量含む。



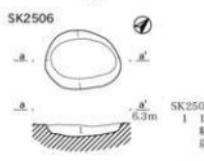
- SK2388
- 1 10YR6/2オリーブ灰色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物少量含む。
 - 2 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中、炭化物多量含む。
 - 3 2.5Y4/2オリーブ灰色シルト 粘性・しまり中。



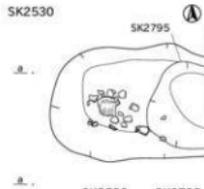
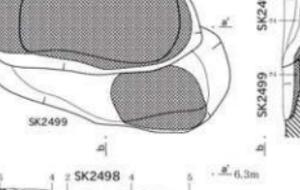
- SK2469
- 1 5Y4/2灰オリーブシルト 粘性弱・しまり中、炭化物少量含む。
 - 2 5Y3/2オリーブ灰色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物微量含む。
 - 3 5Y3/2オリーブ灰色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物多量含む。



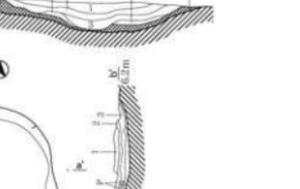
- SK2498
- 1 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物微量含む。
 - 2 2.5Y6/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物微量含む。
 - 3 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒微量含む。
 - 4 2.5Y4/1灰黄色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物粒微量含む。
 - 5 2.5Y2/1黒褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物多量含む。焼土粒微量含む。



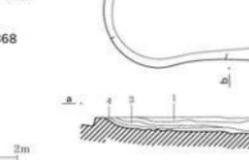
- SK2506
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭化物・焼土粒多量含む。



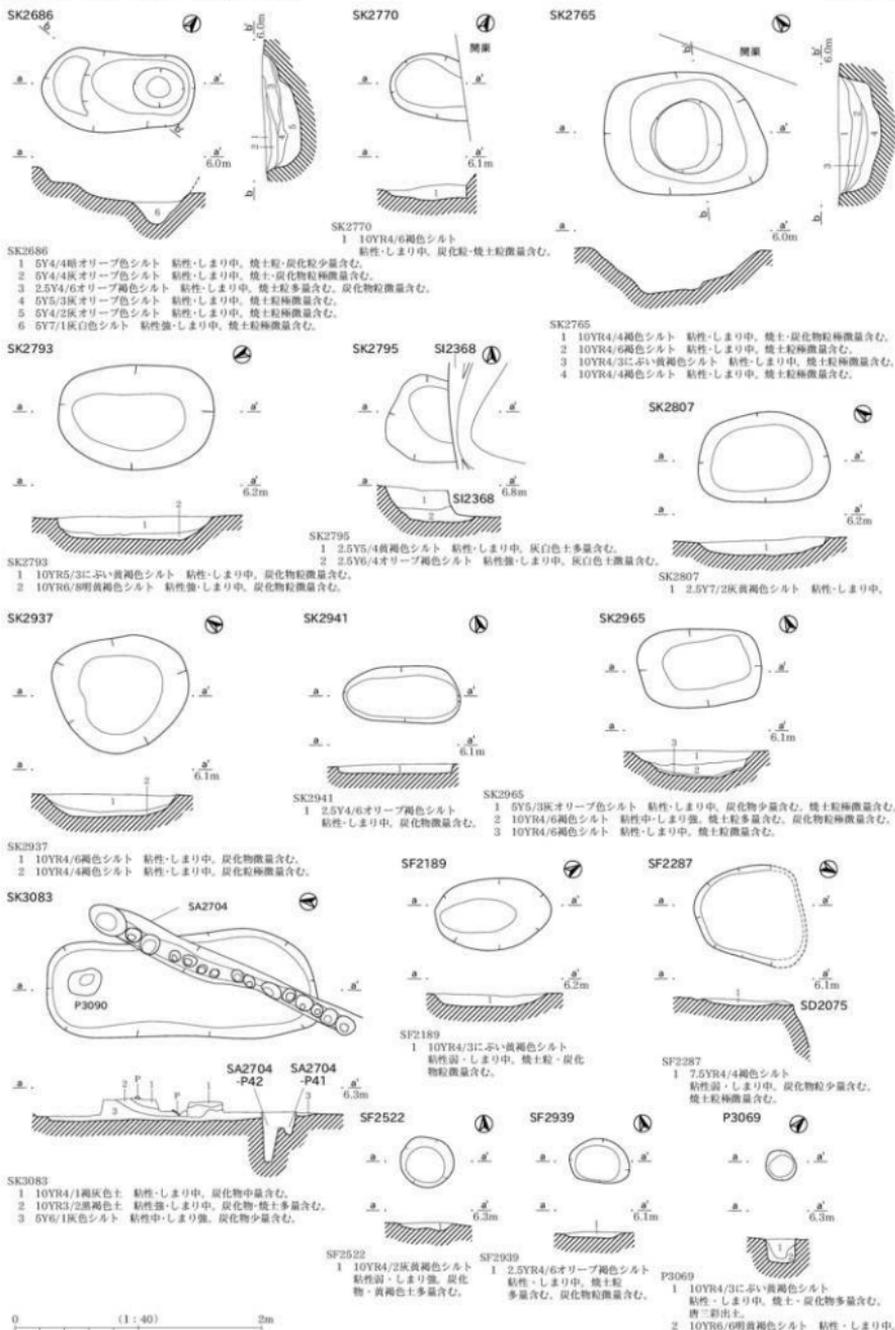
- SK2530
- 1 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性弱・しまり強、炭化物粒微量含む。土器出土。
 - 2 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強、炭化物粒微量含む。

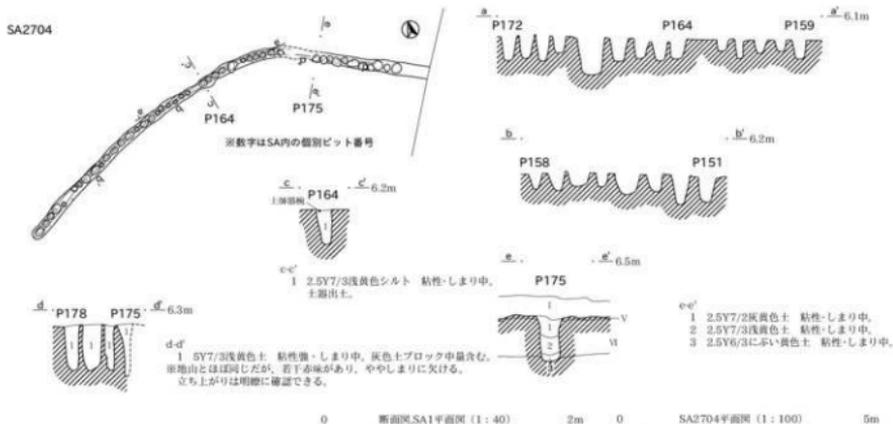
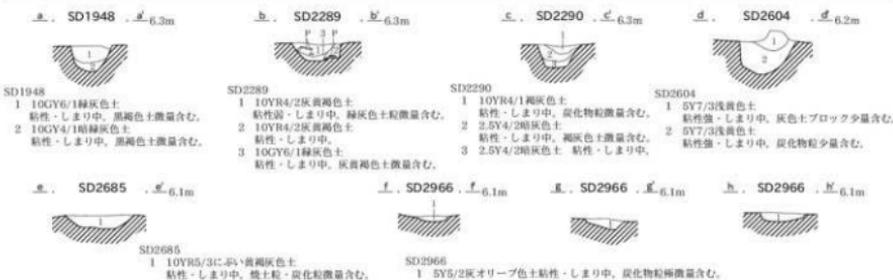


- SK2600
- 1 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性・しまり中、Rb層に類似。炭化物粒少量含む。
 - 2 7.5YR4/3褐色シルト 粘性・しまり中、径5~15mmの焼土粒多量含む。
 - 3 2.5Y6/3に黄褐色シルト 粘性・しまり中、炭化物粒少量含む。
 - 4 10YR4/3に黄褐色シルト 粘性・しまり中、径5~10mmの炭化物粒多量含む。

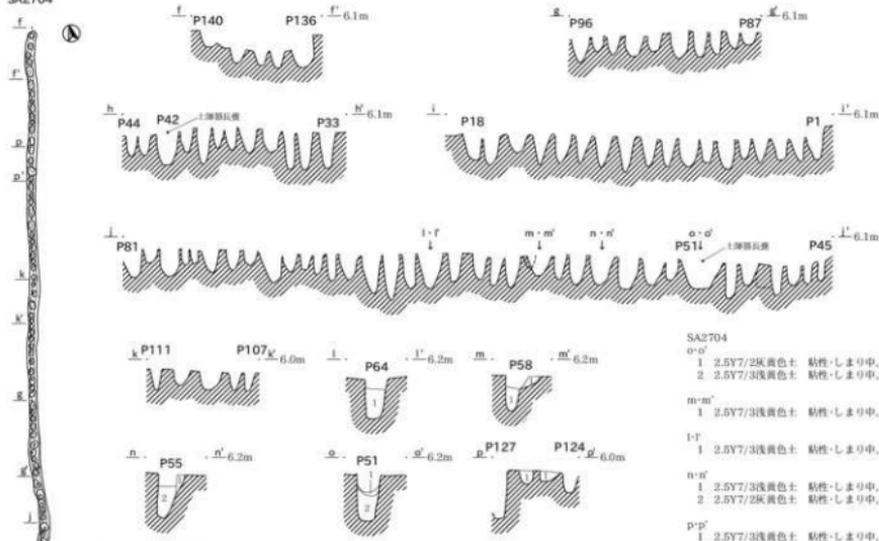


0 (1:40) 2m



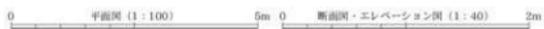


SA2704

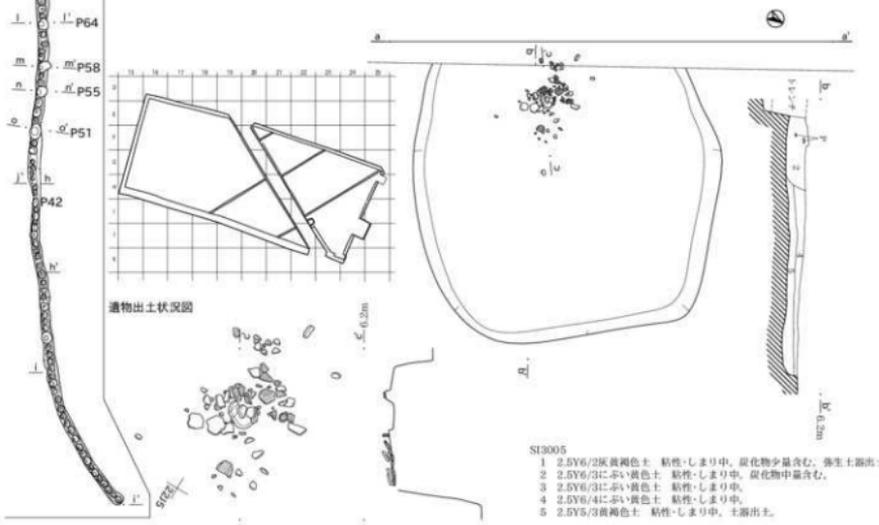


- SA2704
- o-o' 1 2.5V7/2灰黄色土 粘性・しまり中。
 - 2 2.5V7/3浅黄色土 粘性・しまり中。
 - m-m' 1 2.5V7/3浅黄色土 粘性・しまり中。
 - l-l' 1 2.5V7/3浅黄色土 粘性・しまり中。
 - n-n' 1 2.5V7/3浅黄色土 粘性・しまり中。
 - 2 2.5V7/2灰黄色土 粘性・しまり中。
 - p-p' 1 2.5V7/3浅黄色土 粘性・しまり中。

※数字はSA内の個別ピット番号



弥生時代の遺構 SI3005

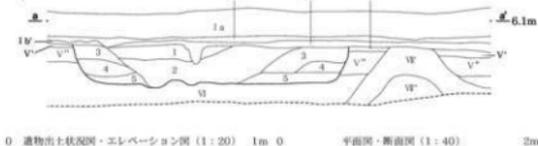


遺物出土状況図

- SI3005
- 1 2.5V6/2灰黄褐色土 粘性・しまり中。炭化物少量含む。弥生土層出土。
 - 2 2.5V6/3に赤い黄色土 粘性・しまり中。炭化物中量含む。
 - 3 2.5V6/3に赤い黄色土 粘性・しまり中。
 - 4 2.5V6/4に赤い黄色土 粘性・しまり中。
 - 5 2.5V5/3黄褐色土 粘性・しまり中。土層出土。

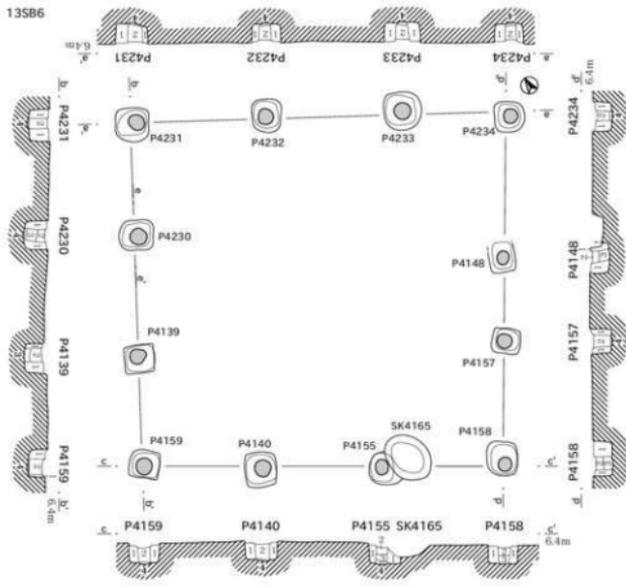
基本層序

- 1a 10YR3/2黒褐色土 粘性中・しまり弱。水田耕作土。
- 1b 5P5/1青灰色シルト 粘性強・しまり中。床土。
- 1b' 2.5V6/3に赤い黄色シルト 粘性強・しまり中。
- V' 10R6明灰色シルト 粘性強・しまり中。
- V'' 2.5V6/4に赤い黄色シルト 粘性強・しまり中。
- VI 2.5V5/3黄褐色シルト 粘性強・しまり中。
- VI' 10R7/1明灰色シルト 粘性中・しまり強。砂中量含む。
- VI'' 10R7/1明灰色シルト 粘性中・しまり強。砂多量含む。



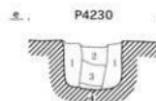
0 遺物出土状況図・エレベーション図 (1:20) 1m 0 平面図・断面図 (1:40) 2m

13SB6

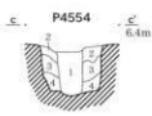


13SB6

- 1 10YR7/4に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、褐色シルトブロック含む。
- 2 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強・しまり中、褐色シルトブロック含む。
- 3 10YR8/1灰白色粘質シルト 粘性強・しまり中。
- 4 10YR8/1灰白色粘質シルト 粘性強・しまり中、炭分の沈着多量含む。

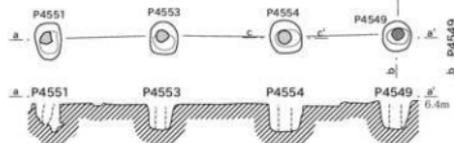


13SB7

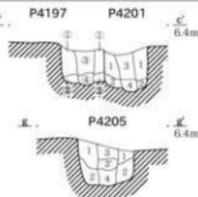
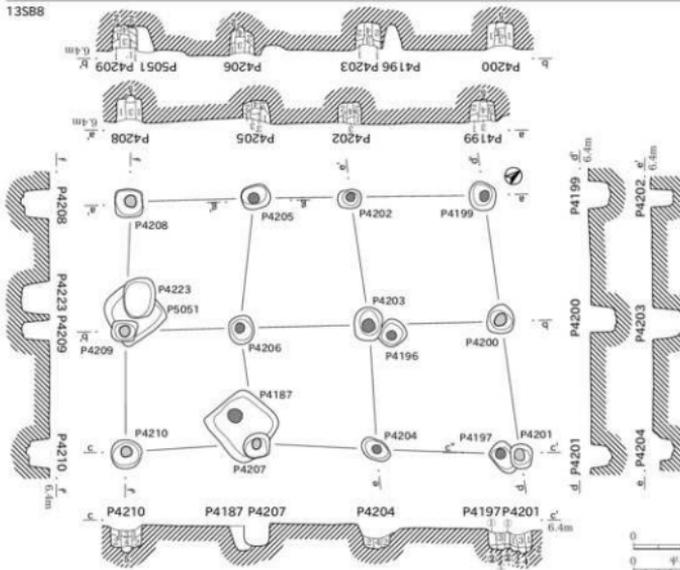


13SB7 P4554

- 1 2.5Y6/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 2.5Y8/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y8/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。



13SB8



13SB8

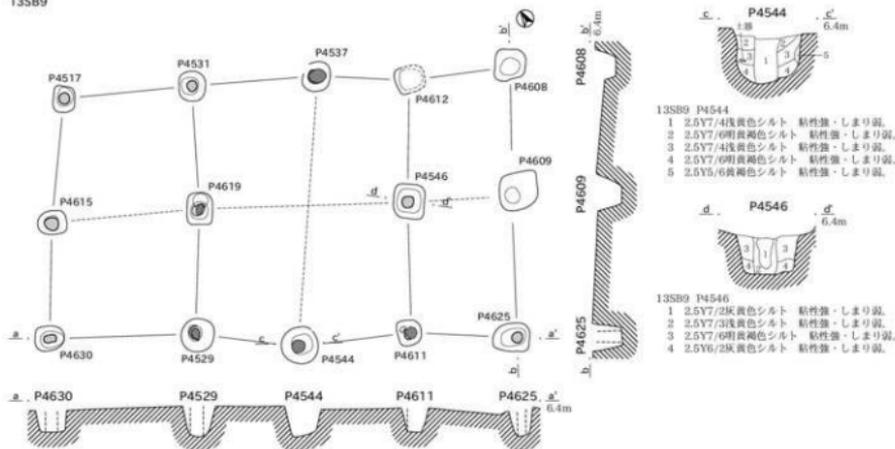
- 1 10YR8/4黄褐色シルト 粘性強・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 2 10YR7/4に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 3 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強・しまり中、褐色シルトブロック含む。
- 3' 3層より粘性弱。
- 4 10YR7/4に多い黄褐色シルト 粘性強・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 5 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強・しまり中、褐色シルトブロック含む。

P4197 (13SB1)

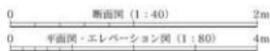
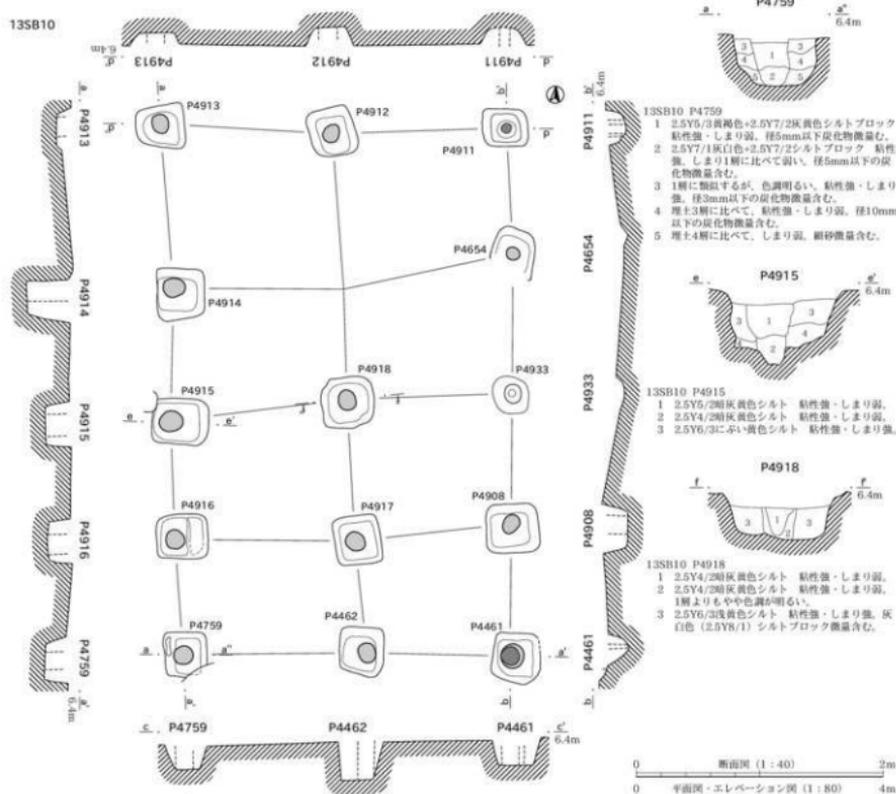
①~⑤ 図版43の13SB1と同じ。

断面図 (1:40) 2m
平面図・エレベーション図 (1:80) 4m

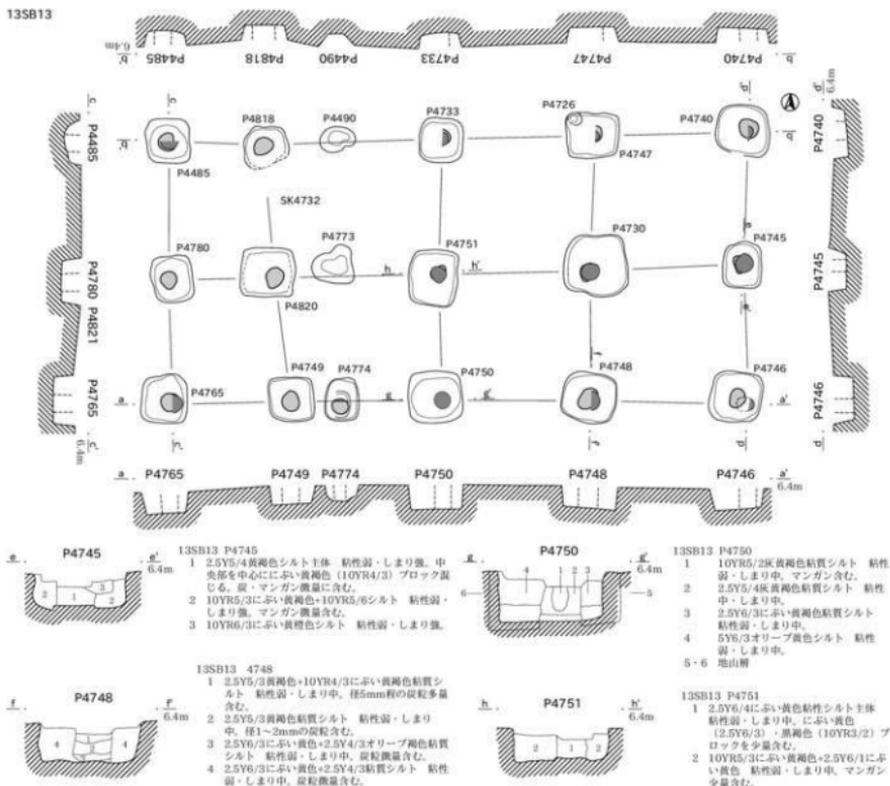
13SB9



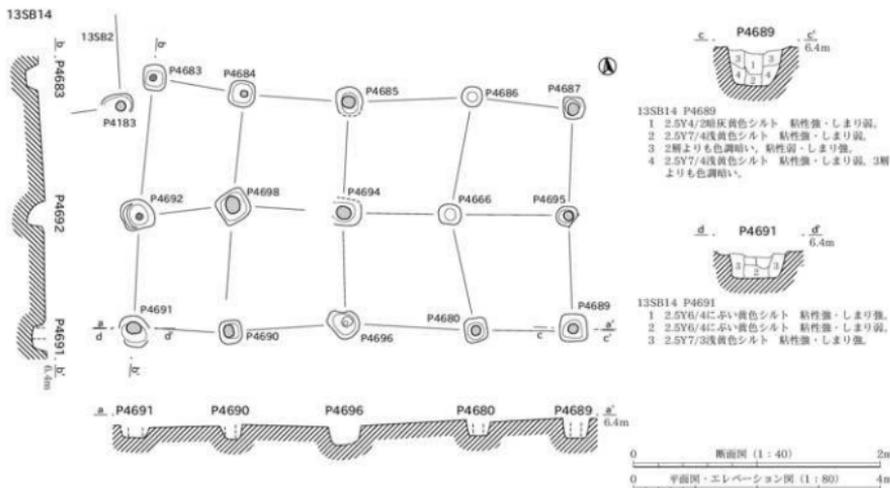
13SB10



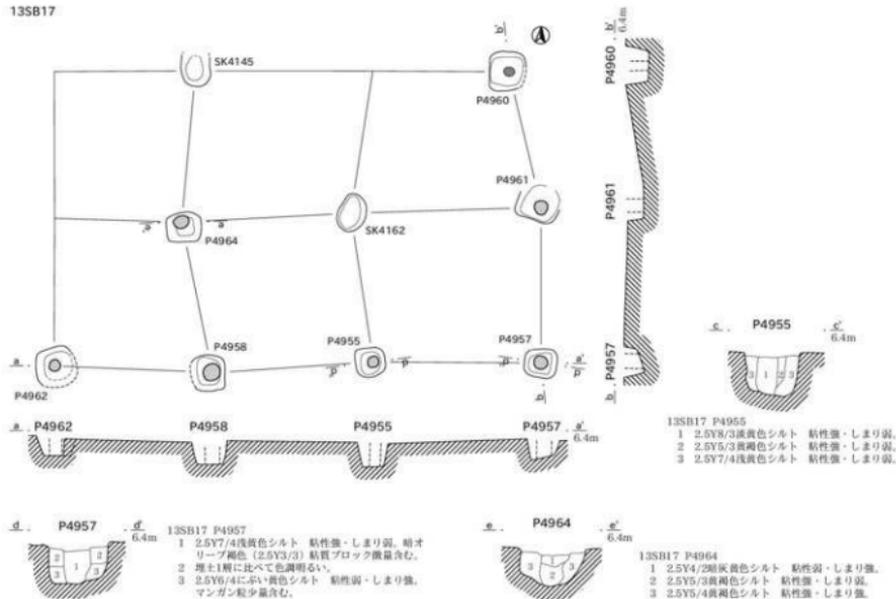
13SB13



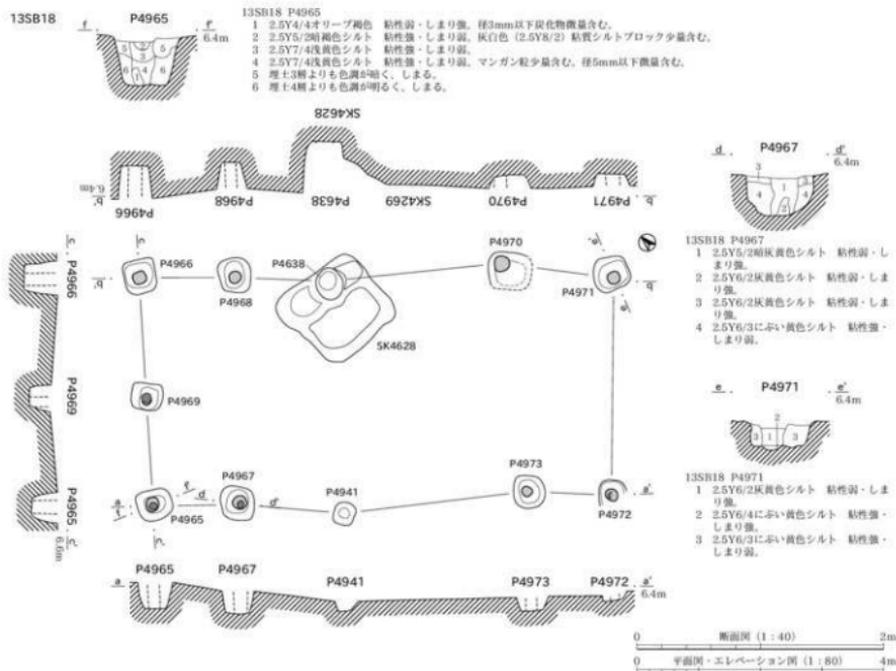
13SB14



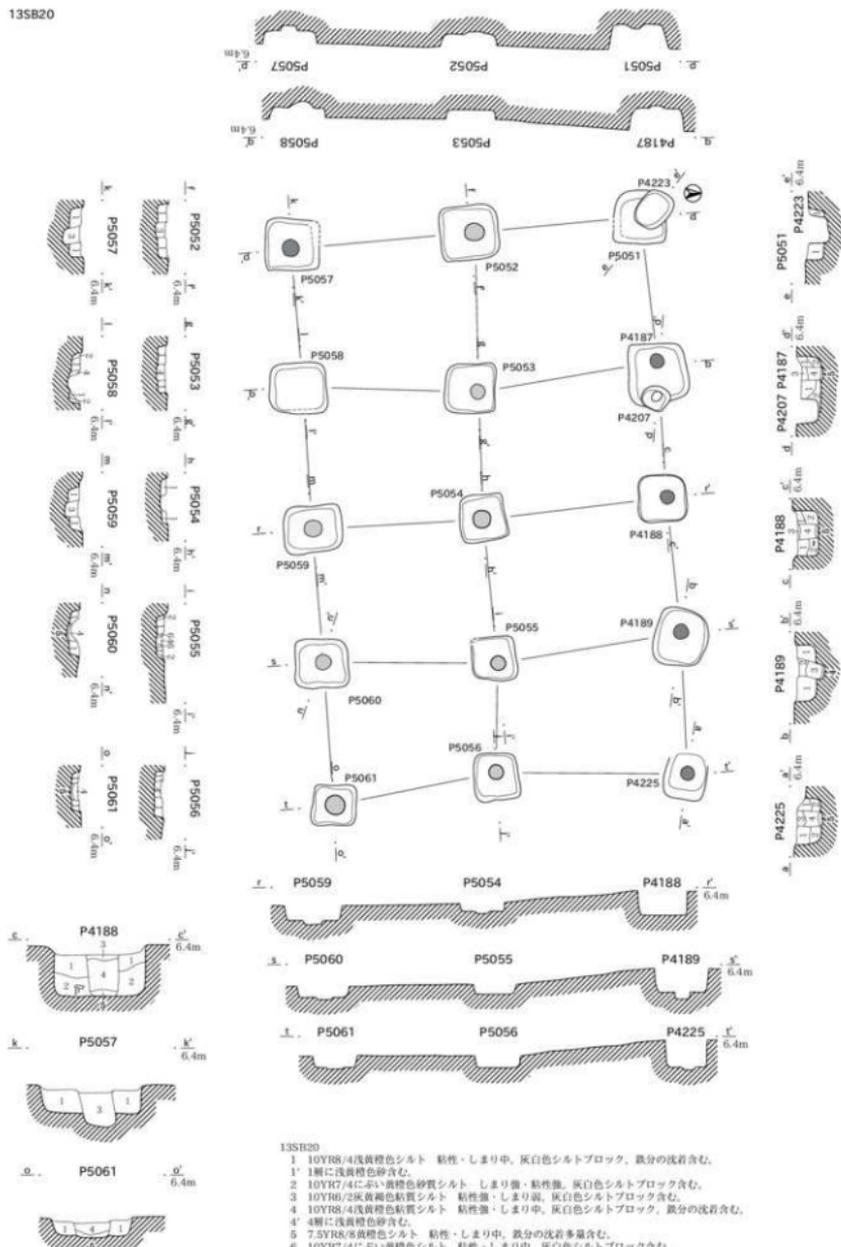
13SB17



13SB18



135B20



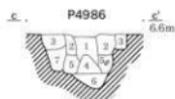
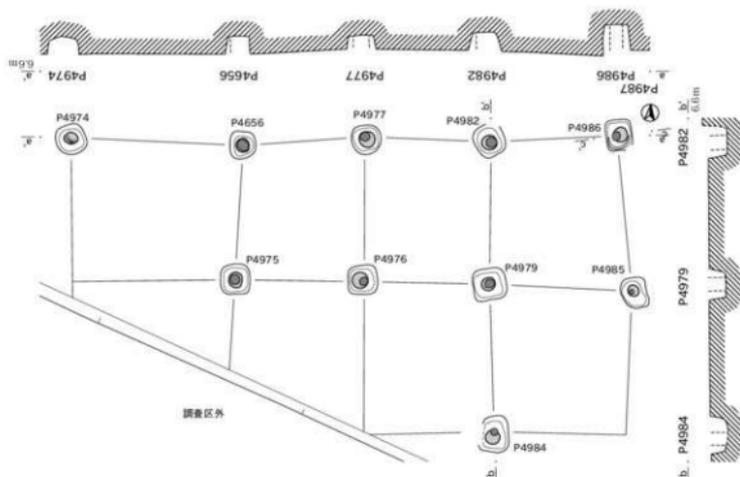
135B20

1. 10YR8/4 灰黄棕色シルト 粘性・しりり中、灰白色シルトブロック、数分の沈着を含む。
- 1' 1層に浅黄棕色砂を含む。
2. 10YR7/4に赤い黄棕色粘質シルト しりり強・粘性強。灰白色シルトブロック含む。
3. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性強・しりり弱。灰白色シルトブロック含む。
4. 10YR8/4 灰黄棕色粘質シルト 粘性強・しりり中、灰白色シルトブロック、数分の沈着を含む。
- 4' 4層に浅黄棕色砂を含む。
5. 7.5YR8 赤黄棕色シルト 粘性・しりり中、数分の沈着多量を含む。
6. 10YR7/4に赤い黄棕色シルト 粘性・しりり中、灰白色シルトブロック含む。

0 P4188・P5057・P5061断面図 (1:40) 2m

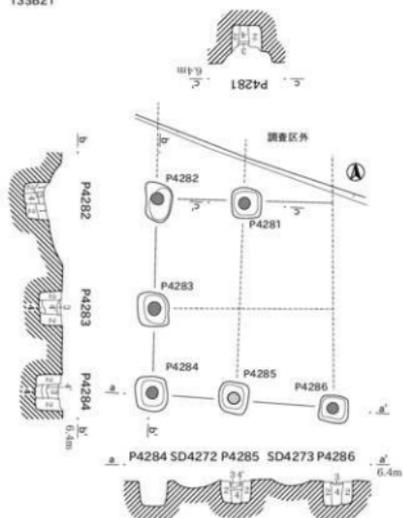
0 その他断面図・平面図・エレベーション図 (1:80) 4m

13SB19



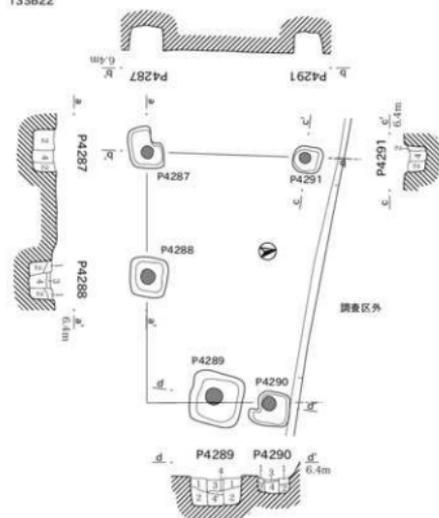
- 13SB19 P4986
- 1 2.5V/4/2層灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 2 2.5V/3/2層灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 3 2.5V/6/2層灰黄色シルト 粘性弱・しまり弱。
 - 4 2.5V/5/2層灰黄色シルト 粘性弱・しまり弱。
 - 5 2.5V/6/2層灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 6 2.5V/6/4に赤い黄色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 7 2.5V/6/3に赤い黄色シルト 粘性強・しまり弱。

13SB21

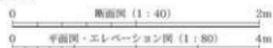


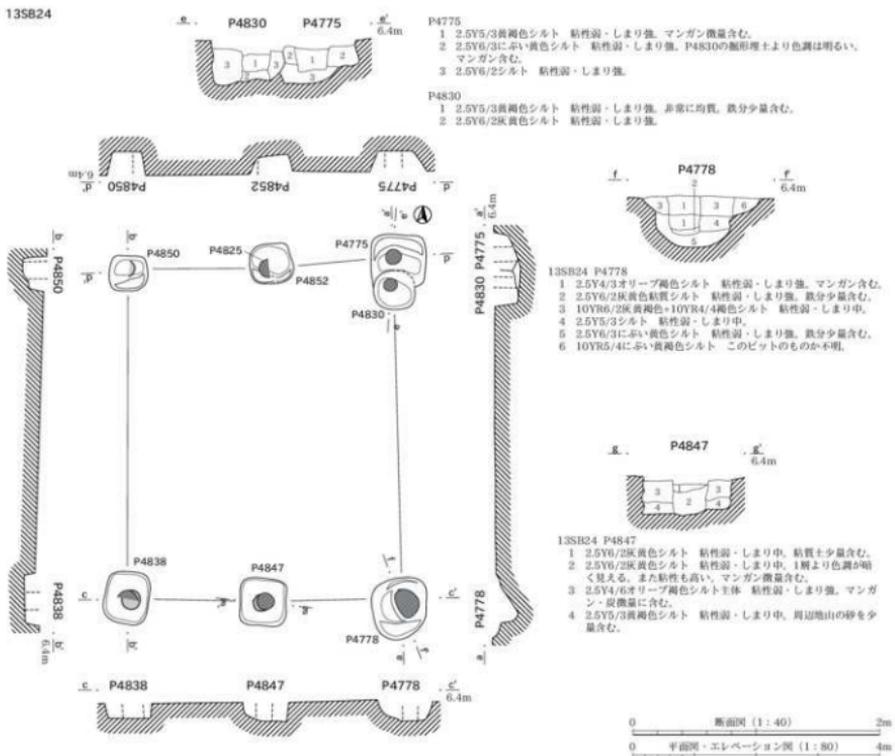
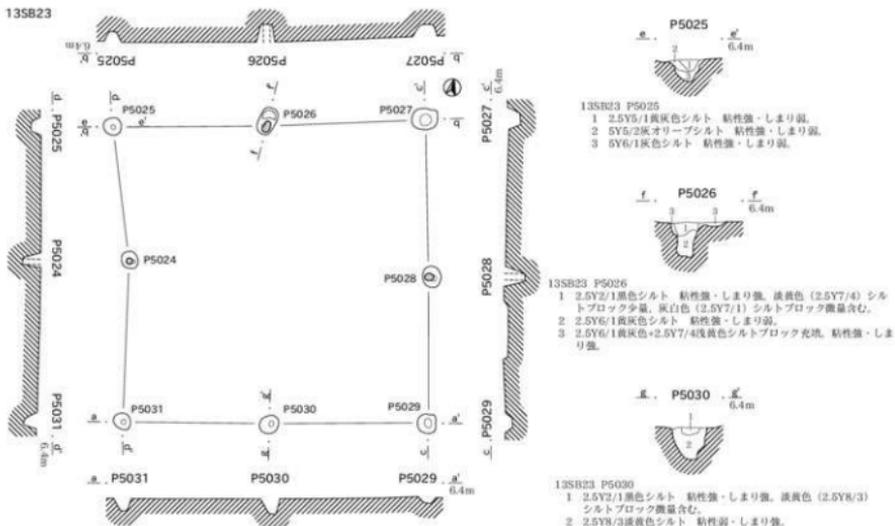
- 13SB21
- 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着を含む。
 - 2 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
 - 3 10YR5/1褐色灰色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着含む。
 - 4 10YR6/1褐色灰色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
 - 4' 4層より鉄分の沈着少ない。

13SB22

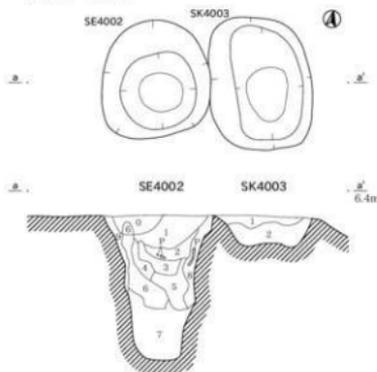


- 13SB22
- 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着含む。
 - 2 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
 - 3 10YR5/1褐色灰色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着含む。
 - 4 10YR6/1褐色灰色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着多量含む。
 - 4' 4層より鉄分の沈着少ない。





SE4002・SK4003



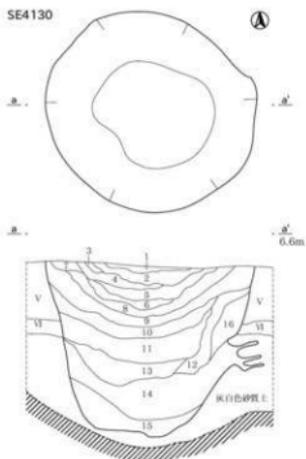
SE4002

- 0 7.5GY4/1暗黒灰粘質シルト 用水の埋土か、6層からの立ち上がり部分は黒褐色(10YR3/1)に着色している。
- 10YR4/4褐色土 粘性強・しまり強、径5mm程の炭化物と焼土塊を少量含む。
 - 10YR5/6黄褐色土 粘性弱・しまり強、基本的には1層と同層だが、炭粒は1層よりも大きく多い、焼土塊の含有は同じ。
 - 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性強・しまり中、径1cm以下の炭粒・焼土塊を含む。
 - 10YR5/2黄褐色土 粘性シルト 粘性弱・しまり中、炭粒・焼土を含む。3層と5層の中間の性質だが、5層に近る。
 - 10YR5/1褐色土 粘性シルト 粘性・しまり中、6層のブロックを少量含む。炭粒・焼土を最大3cmまで含む。
 - 10YR2/1黒色土 粘性シルト 粘性・しまり中、炭粒少量含む。焼土塊を含む。上部は4層のブロック、下部は褐色土(10YR6/1)粘質ブロック含む。
 - 7.5Y6/2灰オレンジ粘質土 粘性・しまり中、炭粒少量含む。地山の黄褐色土とは異なる。
 - 10YR6/4黄褐色土 粘性弱・しまり強、炭粒少量・焼土塊少量含む。下方には5層が少量混入する。
 - 10YR5/4黄褐色土 粘性弱・しまり強、6層と同じ、6層の影響か色調が濃い。

SK4003

- 10YR4/3黄褐色シルト 粘性強・しまり強、径5mm以下の炭粒含む。
- 10YR6/4黄褐色シルト しまり強・粘性強、径10mm以下の炭粒少量、焼土微量含む。

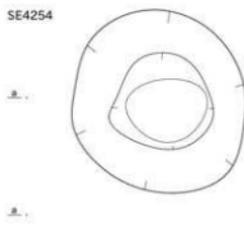
SE4130



SE4130

- 10YR8/2灰白色粘質シルト 粘性弱・しまり中、鉄分の沈着少量含む。
- 10YR8/1灰白色粘質シルト 粘性弱・しまり中、マンガン少量含む。
- 10YR7/2黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中、褐色シルトブロック含む。
- 10YR7/2黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。
- 10YR6/2黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。
- 10YR5/3黄褐色粘質シルト 粘性・しまり中。
- 10YR6/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中。
- 10YR4/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中。
- 10YR4/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中、黄褐色シルトブロック状を含む。
- 10YR4/1褐色粘質シルト 粘性強・しまり強。
- N5/ 灰色粘質土 粘性強・しまり強、炭化物含む。
- N5/ 灰色粘質土 粘性強・しまり中、灰白色シルトブロック多量含む。
- N4/ 灰色粘質土 粘性強・しまり強、炭化物含む。
- N3/ 暗灰色粘質土 粘性強・しまり強、炭化物含む。
- N2/ 褐色粘質土 粘性強・しまり強、炭化物多量含む。
- 10YR7/2黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。

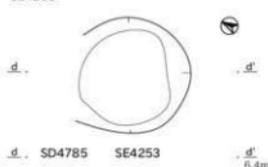
SE4254



SE4275



SE4253



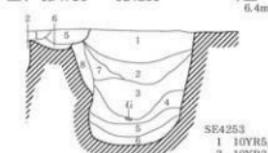
SE4254

- 10YR5/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中、径1mm程の炭粒少量含む。
- 10YR8/1灰白色シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着、マンガン少量含む。
- 10YR5/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中、径3mm程の炭粒含む。
- 10BG6/1青灰色粘土 粘性強・しまり中、径3mm程の炭粒含む。
- 10BG7/1明黄褐色粘質シルト 粘性・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 7.5YR7/2明褐色粘質シルト 粘性・しまり中、径5mm程の炭粒、褐色シルトブロック含む。

SE4275

- 10BG7/1明黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。
- 10YR4/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中、径1mm程の炭粒含む。
- 10YR3/1黒褐色粘質シルト 粘性・しまり中、径3mm程の炭粒含む。

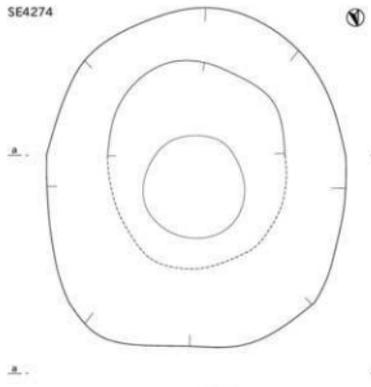
SD4785 SE4253



SE4253

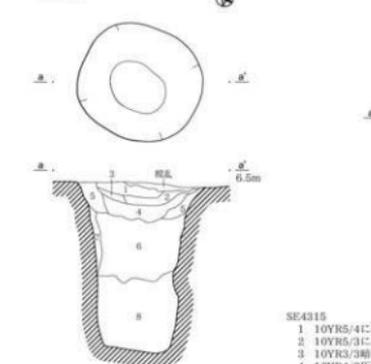
- 10YR5/1褐色粘質シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 10YR3/1黒褐色粘質シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック含む。
- 10YR2/1黒色粘質シルト 粘性・しまり中、灰白色シルトブロック、径3mm程の炭粒含む。
- 10YR8/2灰白色粘質シルト 粘性弱・しまり中、褐色シルトブロック含む。
- 10YR3/1黒褐色粘質シルト 粘性・しまり中。
- N7/1灰白色粘質シルト 粘性弱・しまり中、鉄分の沈着含む。
- 10YR8/2灰白色粘質シルト・10YR6/1褐色粘質シルト 粘性・しまり強、径3mm程の炭粒含む。
- 10YR8/2灰白色粘質シルト 粘性・しまり強、鉄分の沈着含む。

SE4274



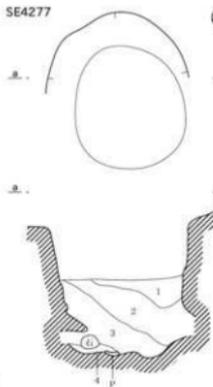
- SE4274
- 1 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中。
 - 2 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。
 - 3 10YR5/1褐灰色シルト 粘性・しまり中。径1mm程の炭化物少量含む。
 - 4 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。褐灰色シルトブロック含む。
 - 5 10YR4/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。径1mm程の炭化物含む。
 - 6 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中。褐灰色シルトブロック含む。
 - 7 10YR7/1灰白色粘質土 粘性強・しまり中。
 - 8 10YR7/1灰白色シルト+10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。径3mm程の炭化物含む。
 - 9 10YR7/1灰白色シルト+10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。径3mm程の炭化物含む。
 - 10 10YR7/1灰白色シルト 粘性・しまり中。径1mm程の炭化物含む。
 - 11 10YR8/6黄褐色シルト 粘性・しまり中。灰白色シルトブロック含む。
 - 12 10YR7/1灰白色粘質土 粘性強・しまり中。径10mm程の炭化物含む。
 - 13 10YR8/1灰白色シルト 粘性・しまり中。炭少量の炭音含む。
 - 14 10YR6/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。径1mm程の炭化物含む。

SE4301



- SE4301
- 1 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 2 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 3 2.5Y4/1黒灰色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 4 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 5 2.5Y6/1黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 6 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 7 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 8 2.5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。

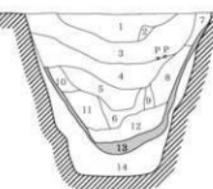
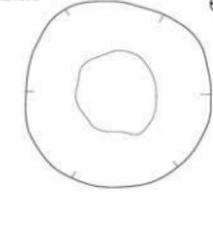
SE4277



SE4279



SE4315



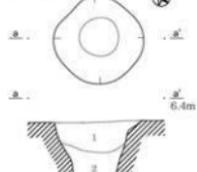
SE4315

- 1 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。1層と同種だが、やや細い。
- 2 10YR5/3に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。1層と同種だが、やや細い。
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱・しまり強。径3cm前後の地山ブロック少量。炭灰微量含む。
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。3層とはほぼ同種だが、地山ブロックがやや多く、マンガン少量含む。
- 5 10YR4/4褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭分・マンガンのためやや赤みがある。炭灰少量・マンガン含む。
- 6 8層と同種だが、両面の1層程のブロックを含む。
- 7 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。
- 8 10YR6/2灰黄褐色+10YR6/8明黄褐色粘質シルトブロック 粘性・しまり中。
- 9 8層と同種だが、9層はやや強い。粘性中・しまり強。
- 10 8層に黒色塊 (10YR5/1) が混じる。粘性・しまり中。
- 11 10YR3/1黒褐色+灰黄褐色+明黄褐色シルト 粘性・しまり中。粘質土ブロック・炭化物含む。
- 12 10YR6/2灰黄褐色+10YR6/8明黄褐色+10YR4/1褐灰色粘質土 粘性強・しまり弱。炭化物を多く含む。
- 13 10YR4/1黒灰色+10YR3/1黒褐色粘質土主体 粘性強・しまり弱。炭灰付着に10YR6/2灰黄褐色粘質土混じる。炭化物を多く含む。
- 14 10YR4/1黒灰色シルト 粘性強・しまり弱。

SE4277

- 1 10YR4/1褐灰色シルト 粘性中・しまり中。浅黄褐色シルトブロック。径3mm程の炭化物含む。
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中。浅黄褐色シルトブロック。径3mm程の炭化物含む。
- 3 10YR2/1黒色シルト 粘性中・しまり中。浅黄褐色シルトブロック。径3mm程の炭化物含む。
- 4 10YR7/1灰白色粘質土 粘性強・しまり中。炭分の炭音含む。

SE4278



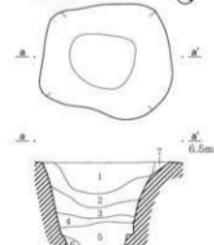
SE4278

- 1 10YR5/1褐灰色シルト 粘性・しまり中。灰白色シルトブロック含む。径10mm程の炭化物多量含む。
- 2 10YR5/1褐灰色シルト 粘性・しまり中。灰白色シルトブロック。径5mm程の炭化物含む。

SE4279

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。灰白色シルトブロック。径5mm程の炭化物含む。
- 2 10YR3/1黒褐色シルト+10YR8/2灰白色シルト 粘性・しまり中。径3mm程の炭化物含む。

SE4450



SE4450

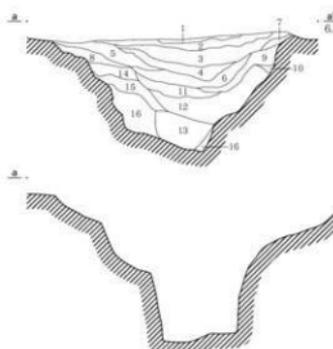
- 1 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。径1~3cmの炭灰微量を含む。マンガン含む。
- 2 10YR6/4褐色シルト 粘性無・しまり中。炭灰微量を含む。マンガン含む。
- 3 10YR5/4に多い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。炭灰微量を含む。
- 4 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。炭灰微量を含む。マンガン含む。
- 5 10YR6/1褐灰色粘質土 粘性中・しまり弱。炭灰微量含む。
- 6 10YR6/4に多い黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり中。炭灰微量を含む。マンガン含む。
- 7 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性無・しまり中。地山に近似。

SE4502

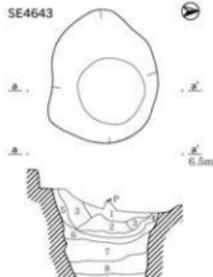


SE4502

- 1 2.5V6/3にぶい黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 2 2.5V7/3浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 3 2.5V7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 4 2.5V7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 5 2.5V7/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 6 2.5V7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。4層より色調やや明るい。
- 7 2.5V5/4浅褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 8 2.5V6/3にぶい黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 9 2.5V4/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 10 2.5V4/6オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 11 2.5V5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 12 2.5V5/4浅褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 13 10BR6/1青灰色粘質土 粘性強・しまり強。
- 14 2.5V7/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 15 2.5V8/2灰白色シルト 粘性強・しまり強。
- 16 2.5V6/4にぶい黄色シルト 粘性強・しまり強。



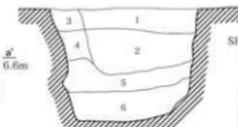
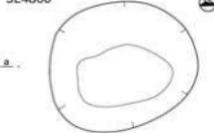
SE4643



SE4643

- 1 2.5V5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 2 2.5V9/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 3 2.5V5/2暗褐色シルト 粘性・しまり強。
- 4 2.5V4/1灰黄色シルト 粘性・しまり強。
- 5 2.5V4/1黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 6 2.5V5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 7 2.5V4/3オリーブ褐色シルト 粘性・しまり強。
- 8 2.5V4/3オリーブ褐色シルト 粘性・しまり強。
- 9 2.5V4/3オリーブ褐色シルト 粘性・しまり強。

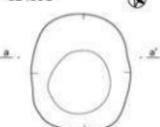
SE4860



SE4860

- 1 2.5V5/3黄褐色・2.5V4/2暗灰黄色シルト 粘性中・しまり強。2.5V6/2灰黄色ブロック含む。炭粒・マンガレン少量含む。
- 2 2.5V5/3黄褐色シルト主体 粘性弱・しまり強。灰黄色ブロック含む。砂質シルト混じる。
- 3 1層と同じが粘性があるが、色調は明るい。
- 4 2.5V6/2灰黄色シルト主体 粘性弱・しまり強。
- 5 10YR4/6褐色・5V6/2灰オリーブ砂質シルト 粘性弱・しまり中。地山の砂が混じった様子。炭粒微量含む。
- 6 2.5V5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり中。

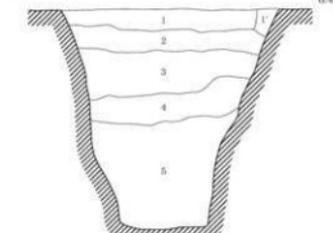
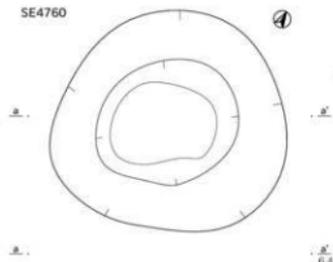
SE4998



SE4998

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性強・しまり強。
- 2 10YR2/1黒色シルト 粘性強・しまり強。1層よりも色調がやや明るい。
- 3 10YR2/1黒色シルト 粘性強・しまり強。
- 4 2層同様。
- 5 10YR2/1黒色シルト 粘性強・しまり強。10YR8/3(洗練褐色)シルトブロック多量含む。
- 6 2層同様だが、10YR8/3(洗練褐色)シルトブロックが5層よりも少ない。
- 7 10YR3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり強。
- 8 10YR2/1黒色シルト 粘性・しまり強。

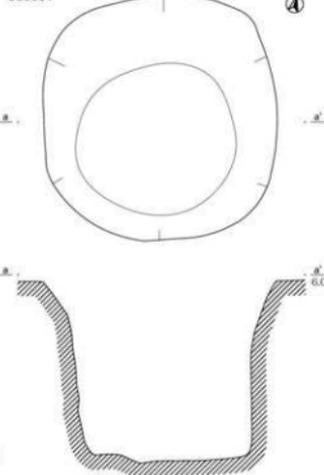
SE4760



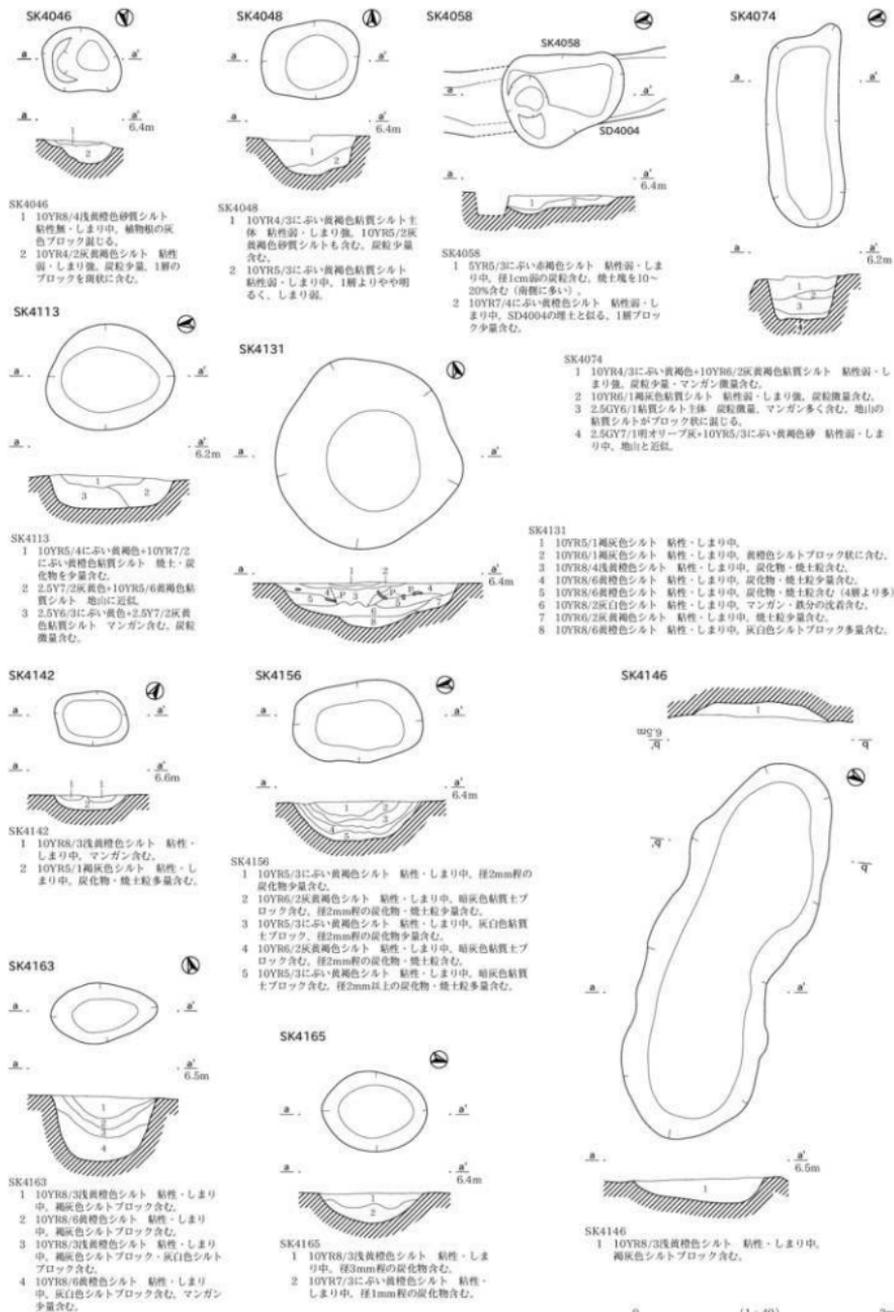
SE4760

- 1 2.5V5/3黄褐色・10YR5/6黄褐色シルト 粘性無・しまり強。径1cm以下の炭粒・焼土を微量含む。マンガレン含む。
- 1層に10YR4/2暗黄褐色シルト混じる。粘性無・しまり強。
- 2.5V5/1暗灰黄色シルト 粘性無・しまり中。炭粒微量を含む。
- 2.5V6/2灰黄色粘質シルト・2.5V4/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり中。暗灰黄色シルトはしまり面となる。ポロポロとした様子。
- 5V4/1灰色粘質シルト 粘性弱・しまり中。砂質シルト含む。マンガレン・炭粒少量含む。
- 5V5/1灰色粘質シルト 粘性中・しまり中。4層と似ているが、色調は薄くなり、シルト質が少なくなっている。しまりも若干弱い。この層とはほぼ平行して地山には細砂あり。

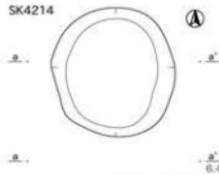
SE5001



0 (1:40) 2m

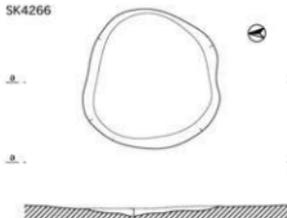


SK4214



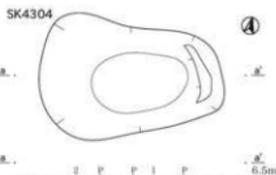
- SK4214
1 10YR8/6黄褐色シルト 粘性・しまり中。
灰白色シルトブロック、径3mm程の炭化物含む。

SK4266



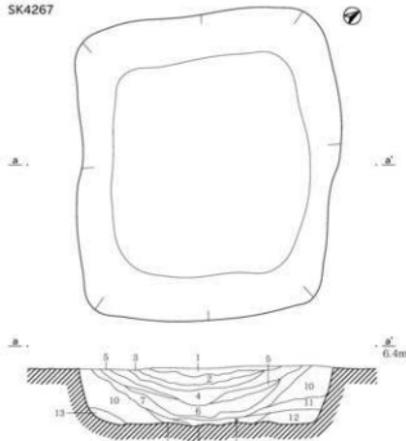
- SK4266
1 10YR5/1褐灰色シルト 粘性・しまり中。灰白色シルトブロック、径3mm程の炭化物含む。

SK4304



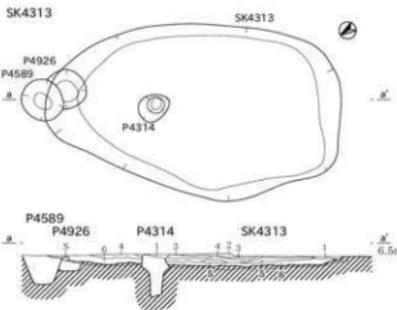
- SK4304
1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性弱・しまり強。
2 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
3 10YR4/1褐灰色シルト 粘性・しまり弱。
4 10YR4/1褐灰色シルト 粘性・しまり弱。3層よりも色調がやや暗く、径6mm以下の炭化物少量含む。
5 2.5Y6/3に多い黄色シルト 粘性弱・しまり強。

SK4267



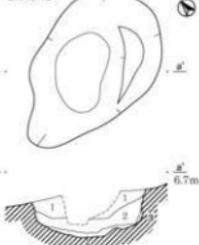
- SK4267
1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中。
2 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中。
3 10YR5/3に多い黄褐色シルト 粘性・しまり中。
4 10YR6/2灰黄褐色シルト 粘性・しまり中。
5 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。
6 10YR6/1褐灰色シルト 粘性・しまり中。
7 10YR8/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物少量含む。
8 10YR8/1灰白色シルト 粘性・しまり中。炭化物少量含む。
9 10YR8/4浅黄褐色シルト 粘性・しまり中。炭化物少量含む。
10 10YR8/2灰白色シルト 粘性・しまり中。褐灰色シルトブロック含む。炭化物少量含む。
11 10YR8/2灰白色シルト 粘性・しまり中。炭化物少量含む。
12 10YR8/1灰白色シルト 粘性・しまり中。マンガン含む。炭化物少量含む。
13 N8/灰白色砂質シルト 粘性弱・しまり中。

SK4313



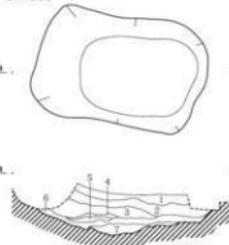
- SK4313
1 10YR4/1褐灰色シルト 粘性弱・しまり極強。1b層(水田耕作土)により、遺構層士の灰、焼土の混入するところがある。
2 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。3mmほどの粒土層を15%ほど含む。2mmほどの炭化物を7%ほど含む。
3 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。全体的に酸化が著しく、細かな赤色顔料が多数見られる。1mmの焼土・炭粒を1%ほど含む。
4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性弱・しまり強。1cm大の炭化物を1%、2mm以下の炭粒を3%ほど含む。
5 10YR3/4黒褐色シルト 粘性弱・しまり強。1cm大の炭化物を1%、2mm以下の炭粒を3%ほど含む。
6 10YR5/2に多い黄褐色シルト 粘性中・しまり強。地面に依るが、若干上層(4層)のブロックが混入する。
※遺構の北東の位置(ピット)が噴出する場所。周辺に特に焼土・炭化物が多く分布している。遺物は1・3・4層で出土するが、特に3・4層が多い。

SK4349



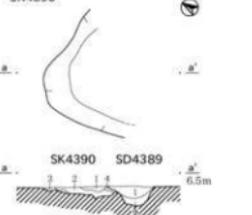
- SK4349
1 2.5Y6/3に多い黄色シルト 粘性・しまり強。
2 2.5Y6/3に多い黄色シルト 粘性強・しまり弱。
3 2.5Y8/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

SK4363

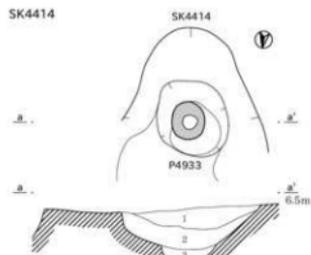


- SK4363
1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
2 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘性・しまり強。
3 2.5Y4/1褐灰色シルト 粘性強・しまり弱。
4 2.5Y2/1黒色シルト 粘性強・しまり弱。
5 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。
6 4.5Y4/3オリーブ褐色 粘性強・しまり弱。
7 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性・しまり強。

SK4390

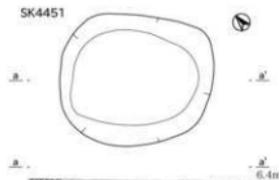


- SK4390
1 5YR17/1黒色シルト 粘性弱・しまり強。被熱土。炭化物・焼土ブロック少量含む。
2 5YR6/8褐色シルト 粘性弱・しまり中。焼土多量含む。
3 5YR6/1褐灰色シルト 粘性強・しまり弱。
4 5YR7/8褐色シルト 粘性弱・しまり強。焼土多量含む。

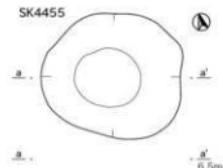


- SK4414
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性無・しまり中、マンガン少量含む。
 - 2 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性無・しまり中、マンガン微量含む。地山に近似。
 - 3 2.5Y7/1灰白色粘質シルト 粘性弱・しまり中、マンガン微量含む。地山に近似。

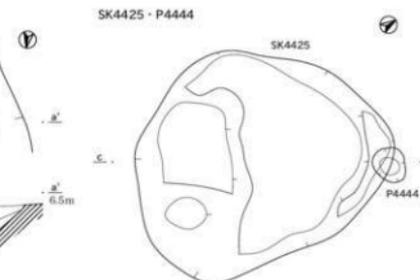
- P4933 (13SR10)
- 1 2.5Y8/1灰白粘質シルト 粘性強・しまり弱、浅黄色ブロック少量含む。酸化が顕著に認められる。



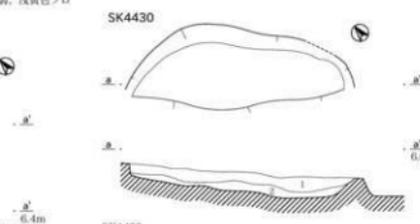
- SK4451
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色+10YR4/6褐色シルト 粘性弱・しまり中、マンガン少量、炭粒微量含む。
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色+10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱・しまり中、炭粒少量含む。色の濃いブロックで、ピットとは認められない。
 - 3 10YR5/4に灰黄色シルト 粘性無・しまり中、地山に近似。



- SK4455
- 1 10YR5/4に灰黄色+10YR6/2灰黄褐色が均一に混じるシルト 粘性無・しまり中。
 - 2 10YR5/3に灰黄色シルト主体 1層と認められ、色調は明るい。炭粒微量、マンガン含む。
 - 3 10YR4/4褐色シルト 粘性無・しまり中、炭粒微量含む。
 - 4 2.5Y7/1明褐色+10YR6/8明黄褐色粘質土 厚1cm前後の炭粒含む。
 - 5 2.5Y6/3に灰黄色シルト 砂粒少量混入。炭粒・マンガン微量含む。地山の可能性あるが、含有物がある。



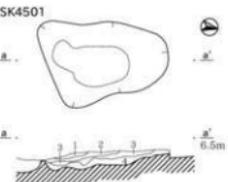
- SK4425
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性無・しまり強、径1cm以下の炭化多量含む。
 - 2 2.5Y6/4に灰黄色シルト 粘性弱・しまり中、炭粒少量含む。



- SK4430
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性無・しまり強、径1cm以下の炭化多量含む。マンガン含む。
 - 2 2.5Y6/4に灰黄色シルト 粘性弱・しまり強、炭化物微量含む。



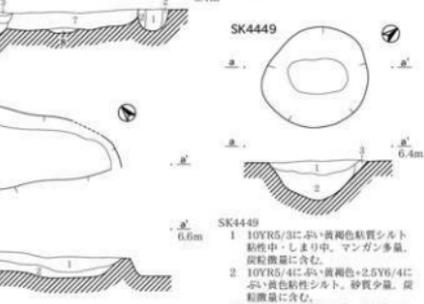
- SK4480
- 1 10YR4/4褐色シルト主体 粘性無・しまり中、2層ブロック少量含む。マンガン多量含む。
 - 2 2.5Y6/3に灰黄色シルト主体 粘性無・しまり強。マンガン含む。



- SK4501
- 1 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性・しまり弱。
 - 2 2.5Y6/4黄褐色シルト 粘性・しまり弱。
 - 3 2.5Y6/4に灰黄色シルト 粘性強・しまり強。
 - 4 2.5Y6/6明黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。



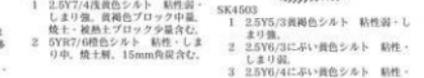
- P4444
- 1 2.5Y3/2黒褐色シルト 粘性無・しまり中、炭粒微量含む。
 - 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性無・しまり中。



- SK4449
- 1 10YR5/3に灰黄色粘質シルト 粘性中・しまり中、マンガン多量、炭粒微量を含む。
 - 2 10YR5/4に灰黄色シルト+2.5Y6/4に灰黄色粘質シルト、砂質少量、炭粒微量を含む。
 - 3 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘性無・しまり中、砂質少量含む。



- SK4511
- 1 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強、黄褐色ブロック中量、焼土・焼土ブロック少量含む。
 - 2 5YR7/0橙色シルト 粘性・しまり中、焼土厚、15mm向混含む。

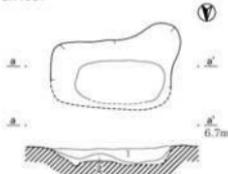


- SK4503
- 1 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 2 2.5Y6/3に灰黄色シルト 粘性・しまり強。
 - 3 2.5Y6/4に灰黄色シルト 粘性・しまり強。



- SK4605
- 1 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 2 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 3 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 4 2.5Y7/3浅黄色シルト 粘性強・しまり強。焼土ブロック微量含む。
 - 5 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり強。
 - 6 7.5YR3/1黄褐色シルト 粘性強・しまり強。
 - 7 7.5Y6/4に灰黄色シルト 粘性・しまり弱。焼土ブロック多量含む。
 - 8 2.5Y6/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。

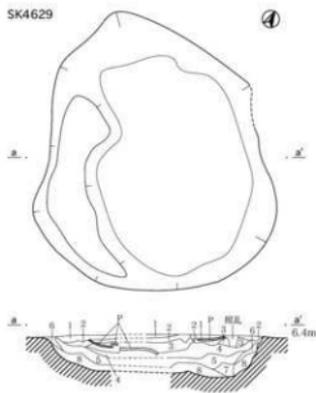
SK4607



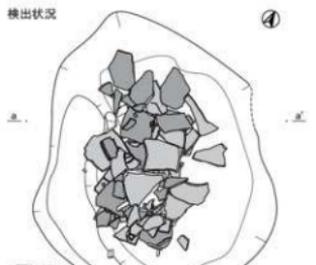
SK4607

- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 2 2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性強・しまり弱。10YR5/3黄褐色シルトブロック多量。径3mm以下の炭化物微量含む。

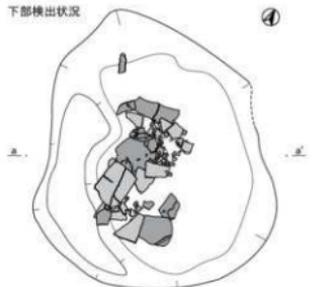
SK4629



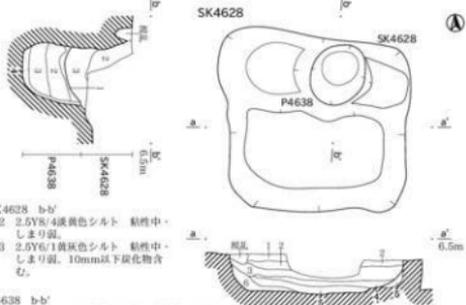
検出状況



■ 表面
■ 裏面
下部検出状況



SK4628



SK4628 b-b'

- 2 2.5Y8/4黄褐色シルト 粘性中・しまり弱。
- 3 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性中・しまり弱。10mm以下の炭化物を含む。

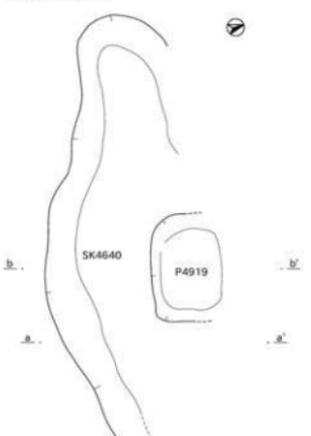
P4638 b-b'

- 1 2.5Y6/4に赤い黄色シルト 粘性強・しまり弱。10mm以下の炭化物を含む。
- 2 2.5Y6/6暗黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。10mm以下の炭化物を含む。
- 3 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性・しまり強。
- 4 2.5Y6/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

SK4628 a-a'

- 1 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性・しまり弱。
- 2 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y6/1黄灰色シルト 粘性強・しまり弱。
- 4 2.5Y6/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 5 2.5Y7/8黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 6 2.5Y6/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。

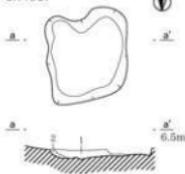
SK4640・P4919



SK4629

- 1 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性・しまり弱。
- 2 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 3 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性・しまり強。
- 4 2.5Y6/4に赤い黄色シルト 粘性強・しまり弱。径3mm以下の炭化物微量を含む。
- 5 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。
- 6 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 7 2.5Y8/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 8 2.5Y6/4に赤い黄色シルト 粘性強・しまり弱。

SK4637

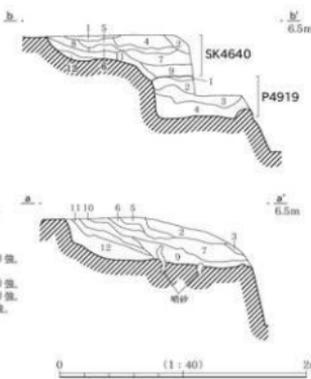


SK4637

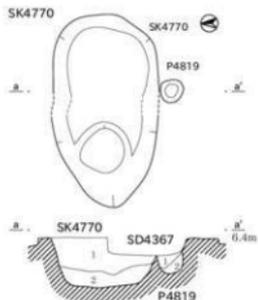
- 1 2.5Y5/6黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 2 黄灰色シルト 層様制が。

SK4640・P4919

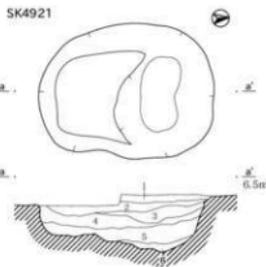
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 2 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性弱・しまり強。
- 3 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性・しまり強。
- 4 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 6 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり強。
- 9 2.5Y6/3に赤い黄色シルト 粘性弱・しまり強。
- 10 2.5Y7/3黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 11 2.5Y7/4黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
- 12 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。



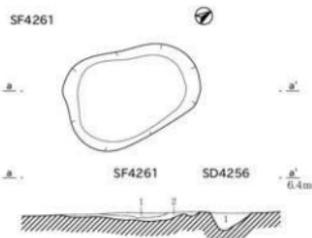
0 (1:40) 2m



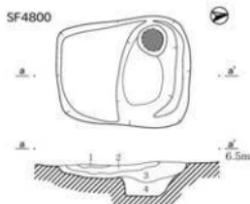
- SK4770
- 1 2.5Y6/3に赤い黄褐色シルト主体 粘性無・しまり強。10YR4/3に赤い黄褐色ブロック少量。径3cm程度の炭粒を散らさむ。
 - 2 2.5Y6/3浅黄色粘質シルト 粘性弱・しまり強。1層が粘土化した様子。



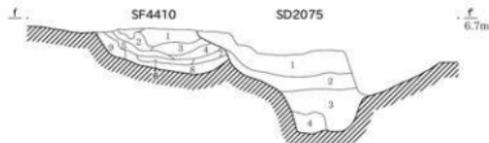
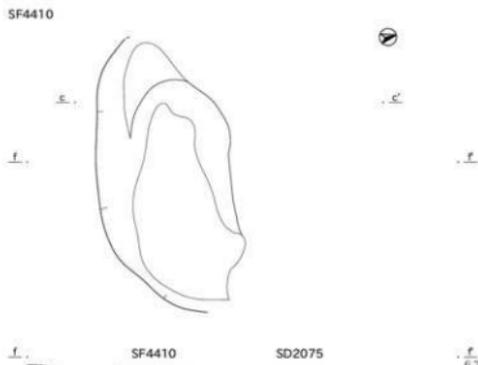
- SK4921
- 1 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 2 2.5Y8/4赤黄色シルト 粘性弱・しまり強。
 - 3 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性・しまり強。
 - 4 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 5 2.5Y6/4に赤い黄褐色シルト 粘性強・しまり弱。
 - 6 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。



- SF4261
- 1 5YR7/6褐色シルト 粘性・しまり中。焼土層。
 - 2 5YR5/2灰褐色シルト 粘性・しまり中。径3-10mm程度の炭化物・焼土粒を含む。



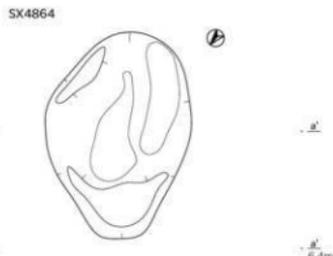
- SF4800
- 1 7.5YR5/6暗褐色焼土 粘性・しまり無。
 - 10YR3/3暗褐色土主体 粘性無・しまり強。黄色炭を含む。径0.5-3cmの焼土塊を多量含む。
 - 2 2.5Y6/4シルト主体 粘性無・しまり強。径1-2cm程度の炭粒を少量含む。
 - 2.5Y5/3黄褐色シルト 粘性無・しまり強。地山に近似。



- SF4410
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性無・しまり強。炭粒少量含む。焼土ブロック少量散らる。
 - 5YR5/8暗赤褐色焼シルト 粘性無・しまり強。
 - 10YR6/3に赤い黄褐色シルト 粘性無・しまり強。焼土ブロック含む。
 - 10YR4/4褐色シルト 粘性無・しまり中。焼土・炭粒ブロック多量含む。
 - 7.5YR4/4褐色シルト 粘性無・しまり中。4層と比べると、炭・焼土は含まない。
 - 2.5Y6/3に赤い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。焼土少量含む。
 - 10YR4/3に赤い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。焼土微量含む。
 - 10YR6/3に赤い黄褐色シルト 粘性無・しまり中。焼土・炭・ブロック多量含む。
 - 10YR5/4に赤い黄褐色+10YR5/6黄褐色シルト 粘性無・しまり強。土は全体的に赤っぽい。

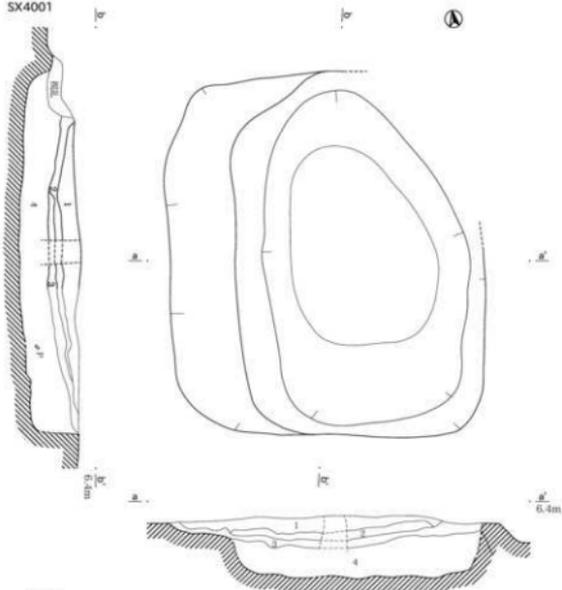


- SX4265
- 1 7.5YR7/明褐色シルト 粘性・しまり中。径10mm程度の炭化物多量含む。
 - 7.5YR6/1灰白色シルト 粘性・しまり中。径10mm程度の炭化物含む。



- SX4864
- 1 2.5Y6/3に赤い褐色+2.5YR4/3オリーブ褐色シルト 粘性弱・しまり中。炭化物・マンガノ散らさむ。
 - 2 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト 粘性・しまり中。
 - 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性弱・しまり中。鉄分沈着。

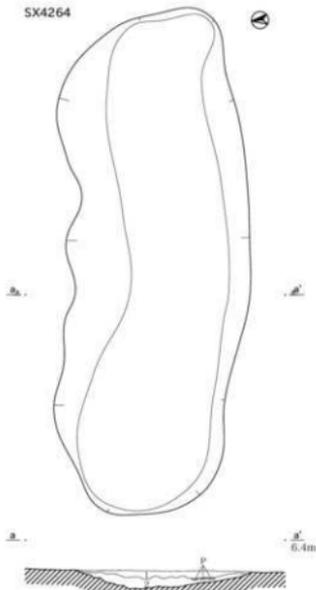
SX4001



SX4001

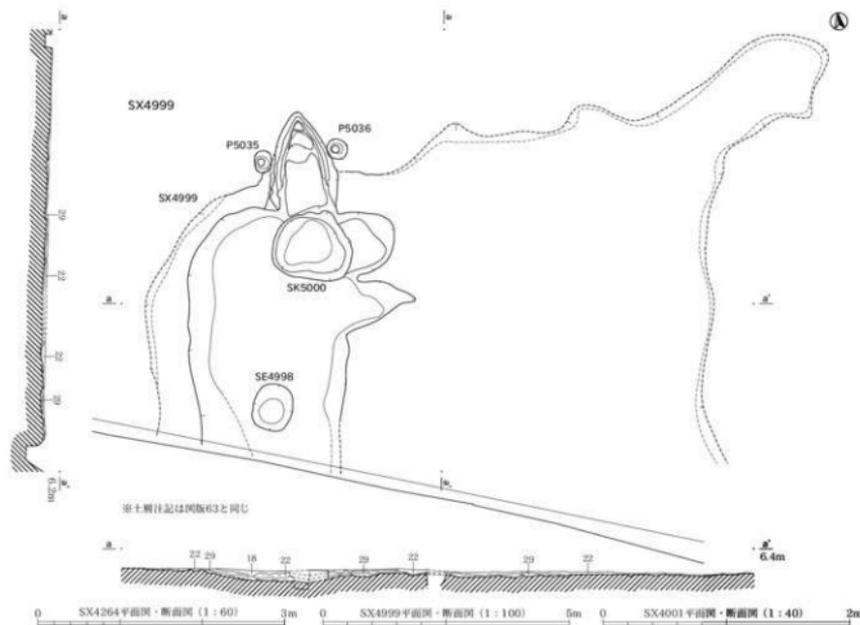
- 1 10YR2/2黒褐色シルト主体 粘性弱・しまり強、植物根が硝土化したものがブロックで覆じる。地山灰・炭粒少量含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 粘性弱・しまり強。
- 3 10YR5/3に多い灰褐色粘質シルト 粘性弱・しまり強。径1~3cmの炭粒少量含む。地山に非常に近似するが、色調が濃い。
- 4 2.6GY6/1粘質シルト主体。炭粒微量。マンガン多量含む。地山の粘質シルトがブロック状に覆じる。

SX4264



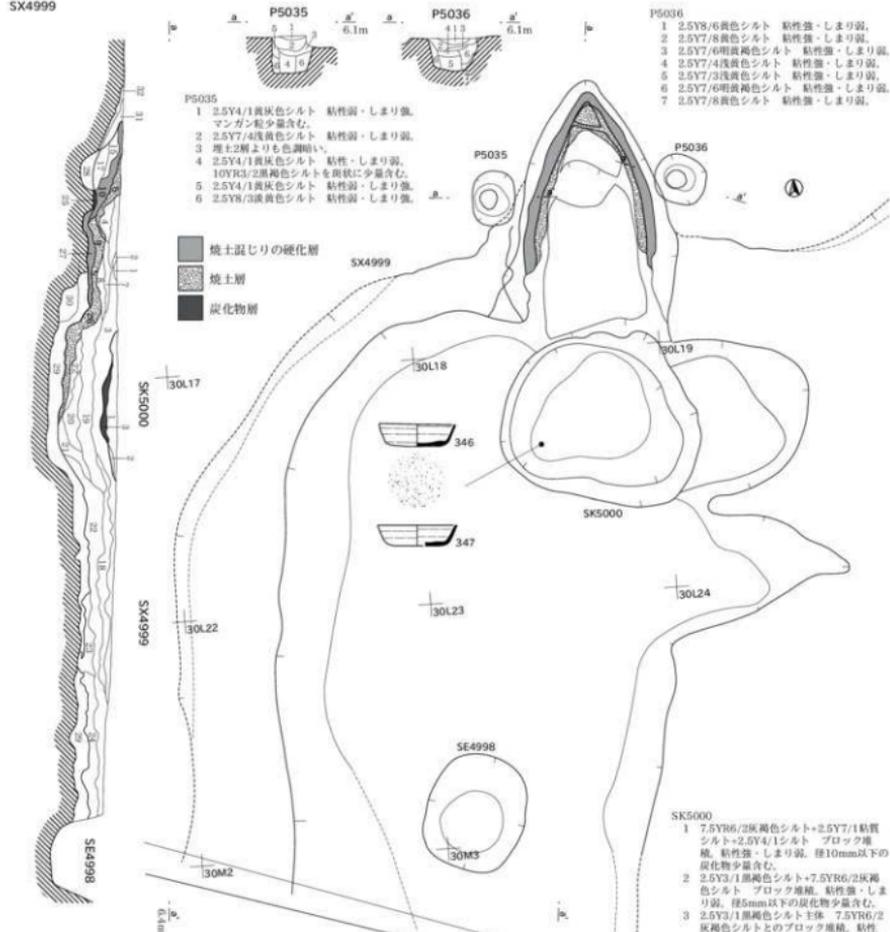
SX4264

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中、に多い黄褐色シルトブロック含む。
- 2 10YR5/3浅黄褐色シルト 粘性・しまり中、褐色シルトブロック含む。



0 SX4264平面図・断面図 (1:60) 3m 0 SX4999平面図・断面図 (1:100) 5m 0 SX4001平面図・断面図 (1:40) 2m

SX4999

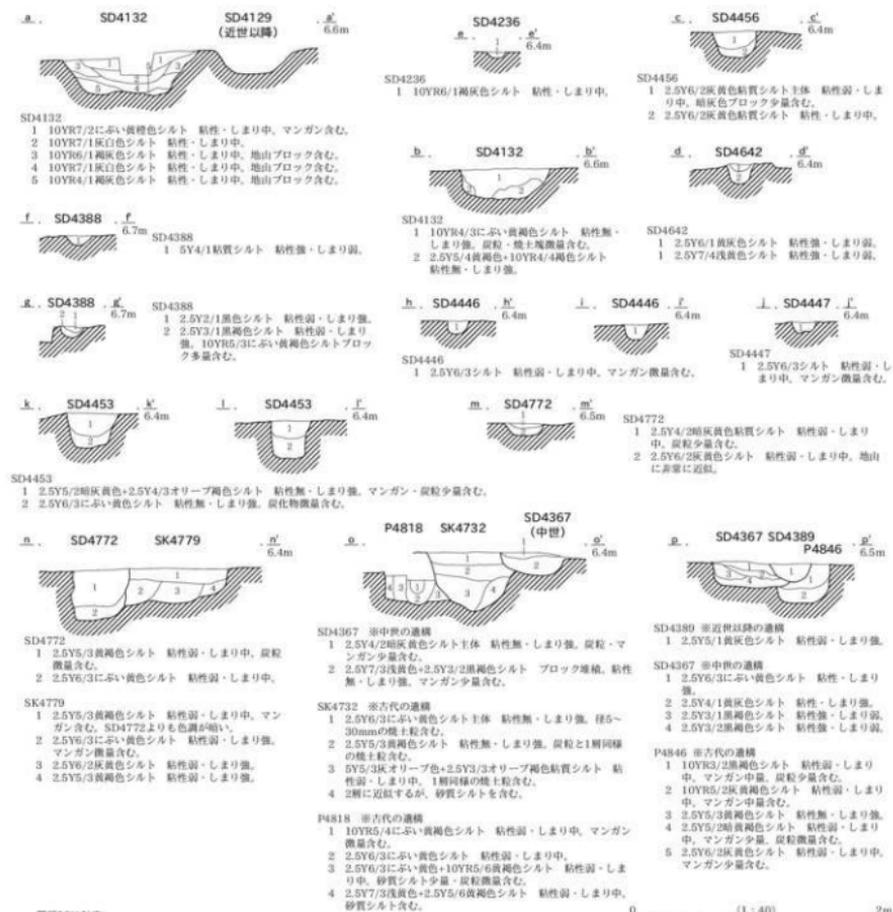
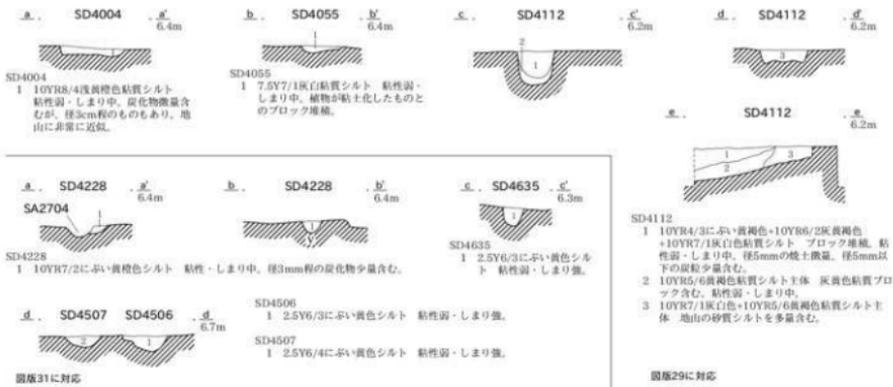


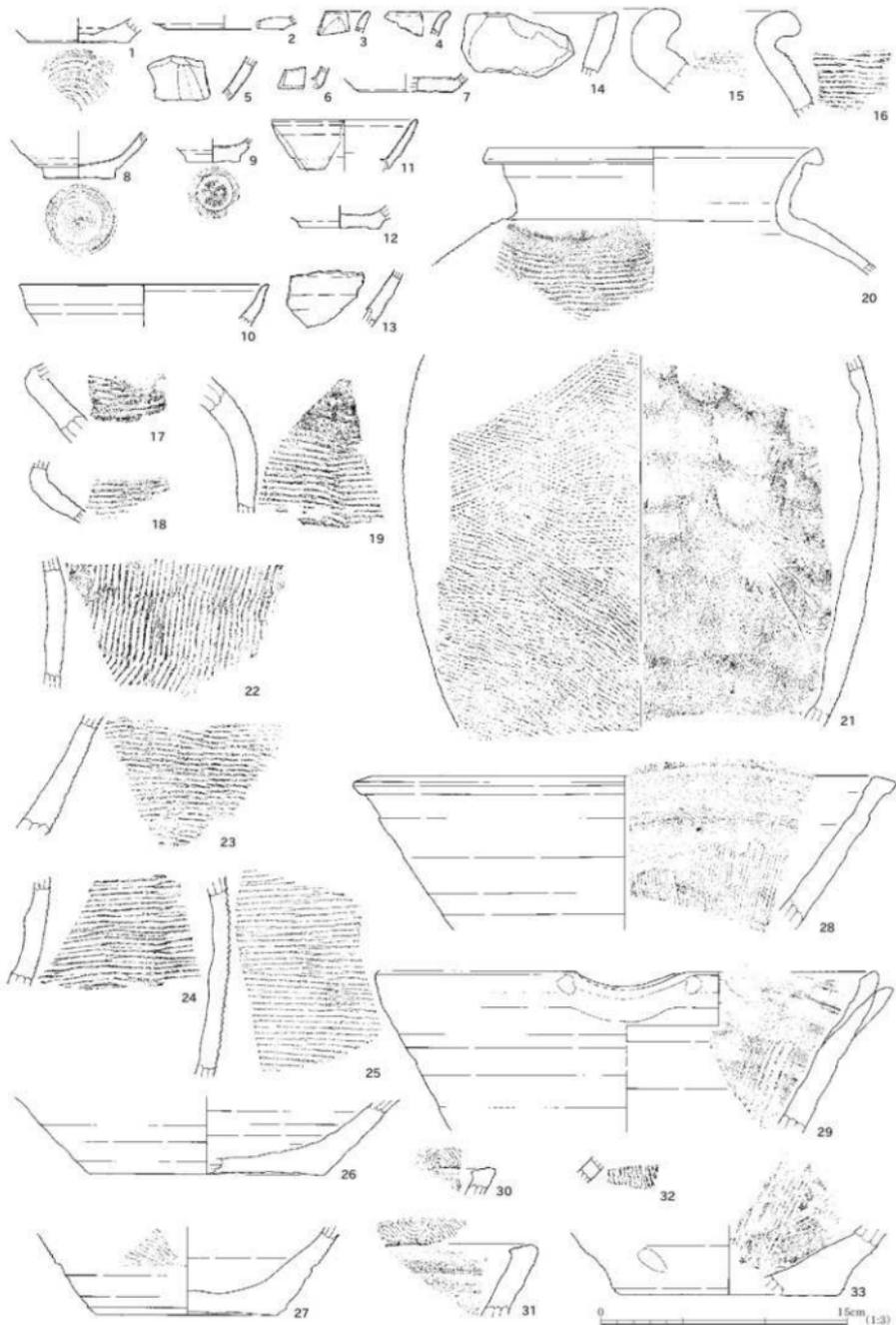
SX4999

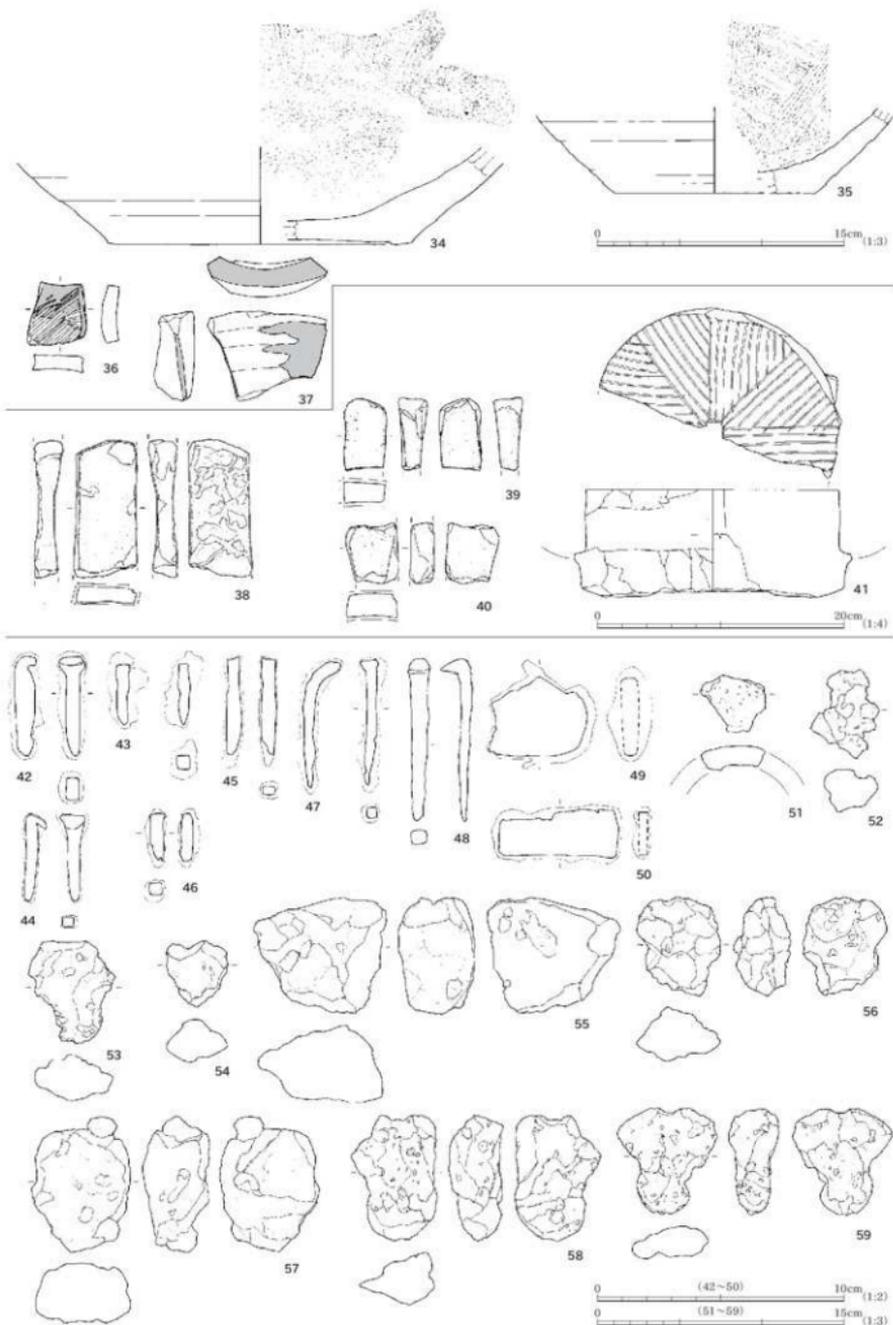
- 1 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。浅黄色 (2.5Y7/4) シルトをブロックで少量含む。径15mm以下の炭化物微量含む。
- 2 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり弱。灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質シルトブロック少量。径20mm以下の角状炭化物微量含む。
- 3 2.5Y7/2灰黄色シルト 粘性強・しまり弱。2層よりも色調明るい。径3mm以下の炭化物微量含む。
- 4 2.5Y7/2灰黄色シルト+2.5Y7/2灰黄色粘質シルト+10YR3/1暗赤灰色シルトブロック堆積。粘性強・しまり弱。焼土・炭化物微量を含む。
- 5 2.5Y7/4浅黄色シルト 粘性強・しまり弱。褐色 (7.5YR7/6) 焼土ブロック少量。灰白色 (2.5Y8/2) 粘質シルトブロック少量。径10mm以下の炭化物微量含む。
- 6 2.5Y7/4浅黄色シルト 焼土ブロック+被熱土ブロック主体。粘性弱・しまり弱。径10mm以下の炭化物微量含む。
- 7 2.5Y7/4浅黄色シルト 焼土ブロック+被熱土ブロック主体。粘性強・しまり弱。炭化物微量含む。
- 8 2.5Y7/4浅黄色シルト多量+焼土ブロック少量+被熱土ブロックの堆積。粘性強・しまり弱。炭化物微量含む。
- 9 焼土ブロック+被熱土ブロック 粘性弱・しまり無。径20mm以下の炭化物微量含む。
- 10 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+浅黄色シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。径20mm以下の炭化物微量含む。
- 11 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト+浅黄色シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。焼土・被熱土ブロック微量含む。被熱土ブロックの割合が高い。
- 12 焼土ブロック主体。粘性弱・しまり強。全体がバラバラしているが、焼土ブロックは硬化している。
- 13 焼土ブロック+2.5Y7/4浅黄色シルト ブロック堆積。粘性弱・しまり弱。被熱土ブロック微量。細砂少量含む。
- 14 焼土ブロック+2.5Y7/4浅黄色シルト ブロック堆積。粘性弱・しまり弱。細砂少量含む。13層とは被熱土ブロックの割合で分かった。

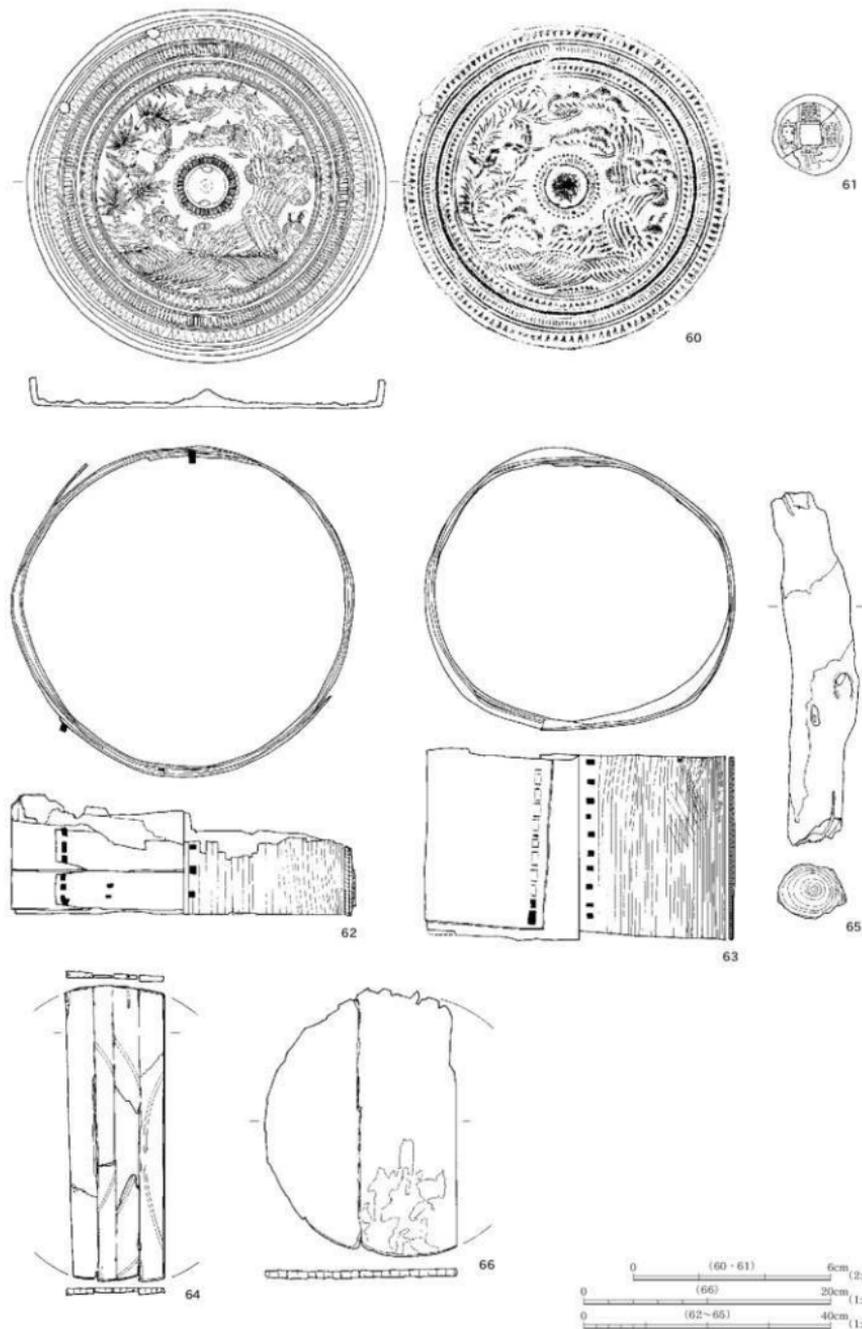
- 15 2.5Y6/1灰黄色シルト+2.5Y4/2暗灰黄色シルト ブロック堆積。粘性弱・しまり無。焼土・被熱土ブロック微量。細砂少量含む。
- 16 焼土ブロック+2.5Y7/4浅黄色シルト ブロック堆積。粘性弱・しまり弱。被熱土ブロック微量。細砂少量。径5mm以下の炭化物微量含む。13層とは被熱土ブロックの有無としまりの差で分かった。
- 17 焼土ブロック+2.5Y7/4浅黄色シルト ブロック堆積。粘性弱・しまり無。灰白色 (2.5Y7/1) シルトブロック微量。径10mm以下の炭化物微量含む。
- 18 2.5Y6/3に近い黄色シルト 粘性強・しまり弱。
- 19 2.5Y7/1灰白色粘質シルト+2.5Y7/3浅黄色粘質シルト ブロック堆積。径10mm以下の炭化物微量含む。
- 20 2.5Y6/1灰白色粘質シルト+2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。径30mm以下の角状炭化物少量含む。20層に比べてしまりが強い。
- 21 2.5Y8/4淡黄色粘質シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルトブロック微量。径5mm以下の炭化物微量含む。
- 22 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ブロック堆積。粘性強・しまり強。径5mm以下の炭化物微量含む。
- 23 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。22層との境で扁平した灰黄色粘質シルトブロック少量含む。径3mm以下の炭化物微量含む。
- 24 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ブロック堆積。粘性強・しまり弱。22層との境で扁平した灰黄色粘質シルトブロック少量含む。径3mm以下の炭化物微量含む。
- 25 焼土
- 26 被熱土
- 27 硬化結面
- 28~32 連続観察層 (上面が観察面)

平面図・断面図 (1:40) 2m

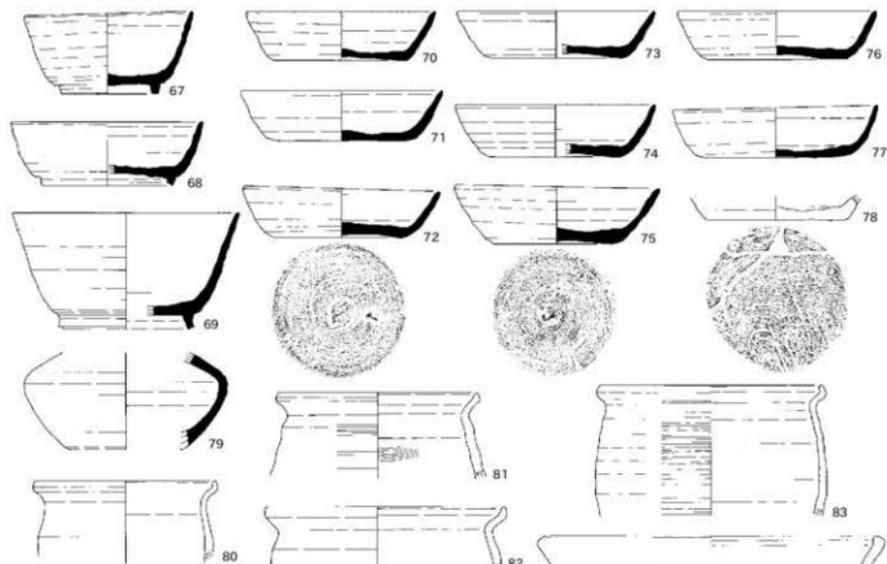




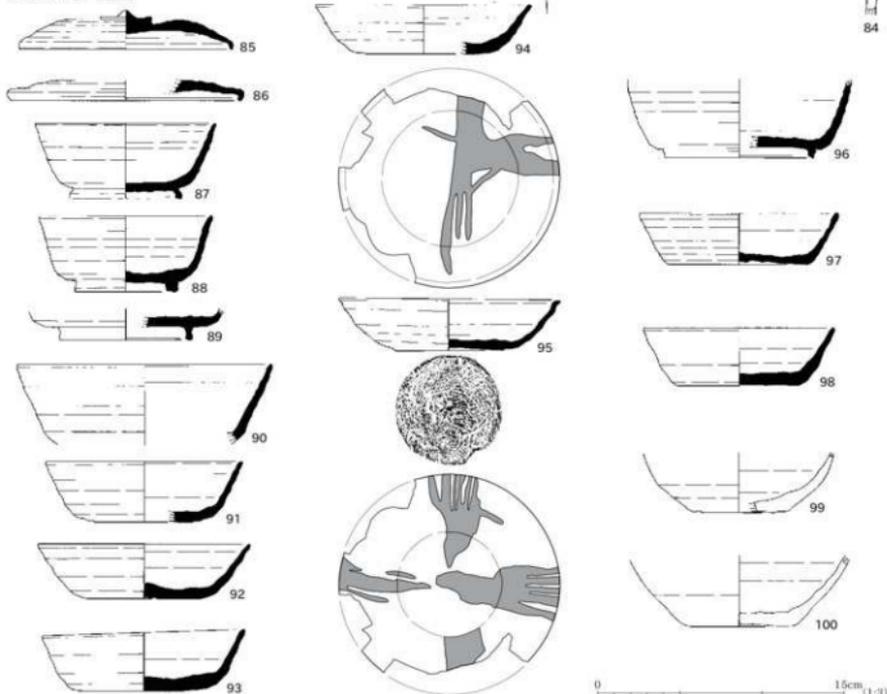




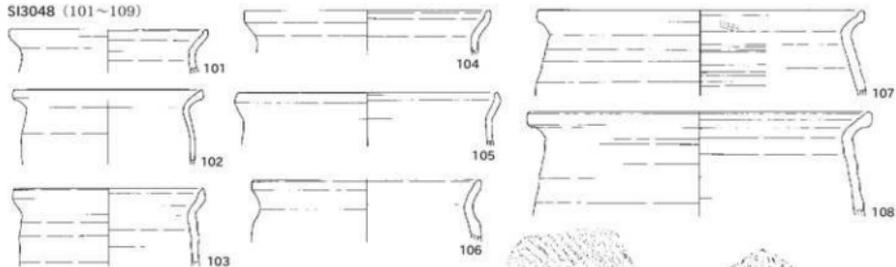
SI2368 (67~84)



SI3048 (85~100)



SI3048 (101~109)



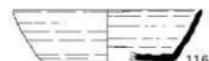
SK2191 (110)



SK2239 (111・113・114)



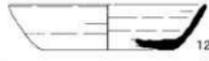
SK2388 (115~118)



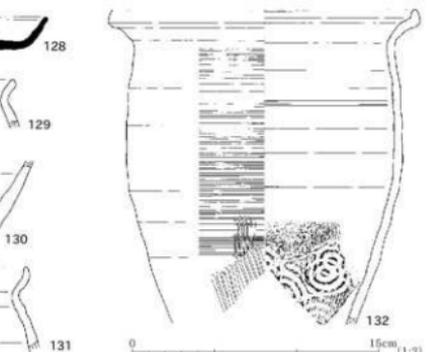
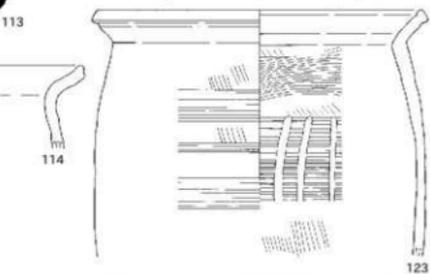
SK2498 (112・119・120)



SK2600 (124~132)



SK2530 (121~123)



0 15cm (1:3)

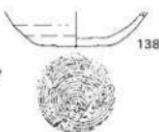
SK2965 (133)



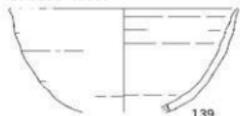
SD2289 (135~138)



SK3083 (134)



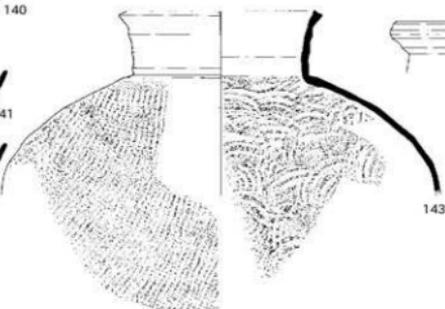
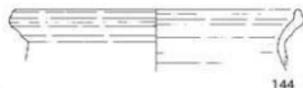
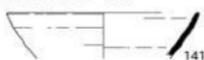
SD2290 (139)



SD2496 (140)



SD2604 (141~144)



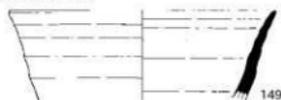
SF2287 (151)



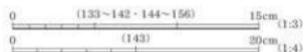
SD2685 (145~148)

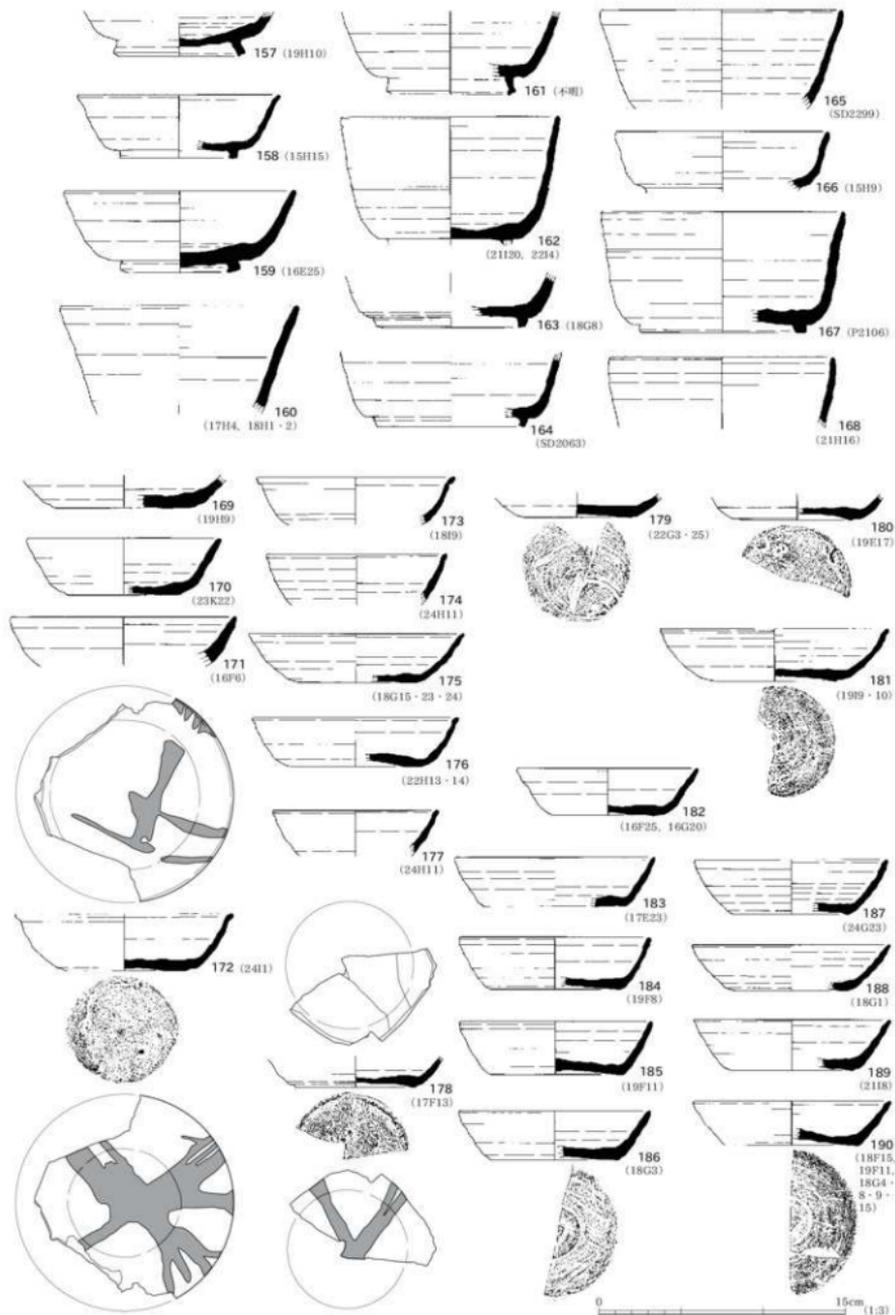


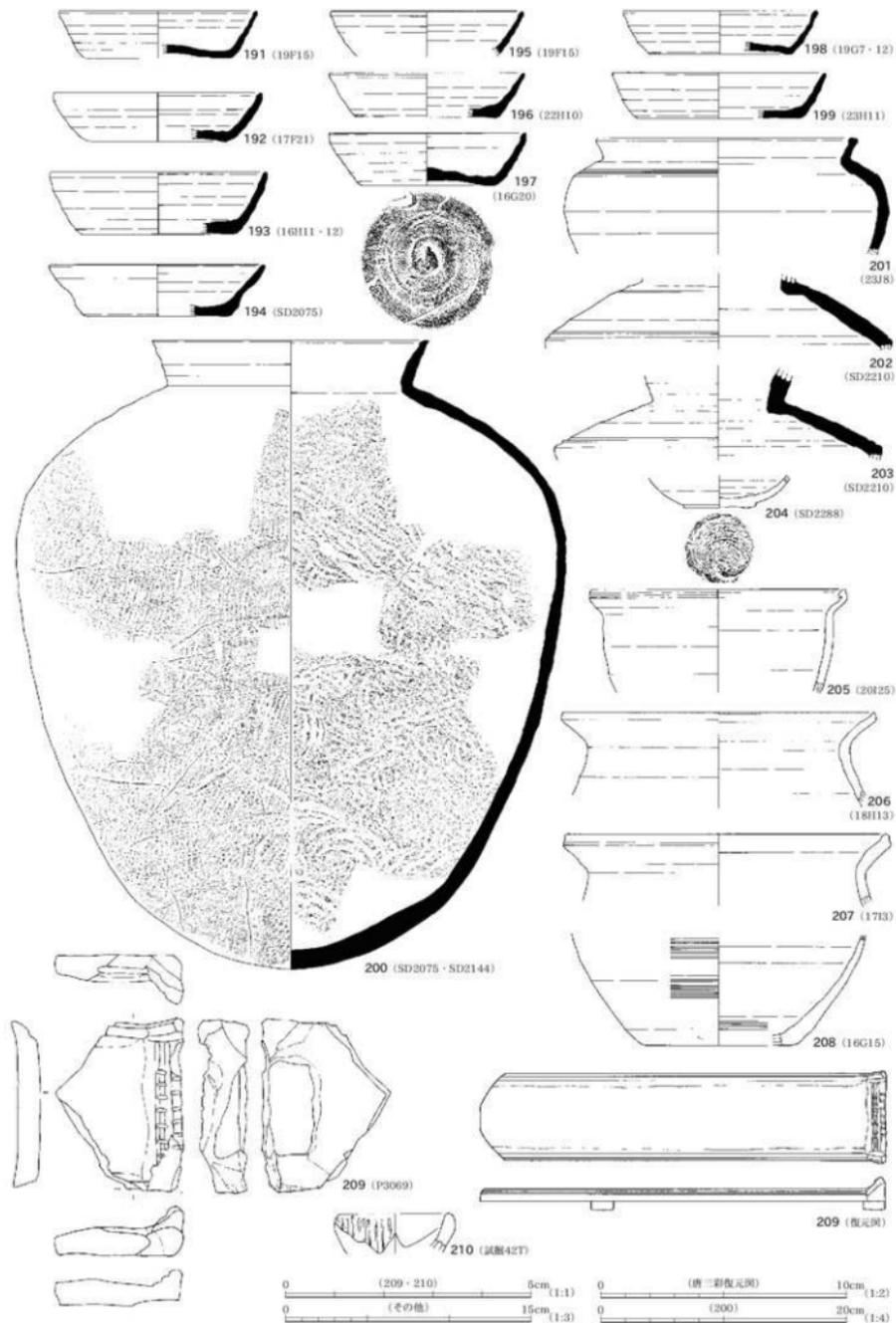
SD2966 (149)

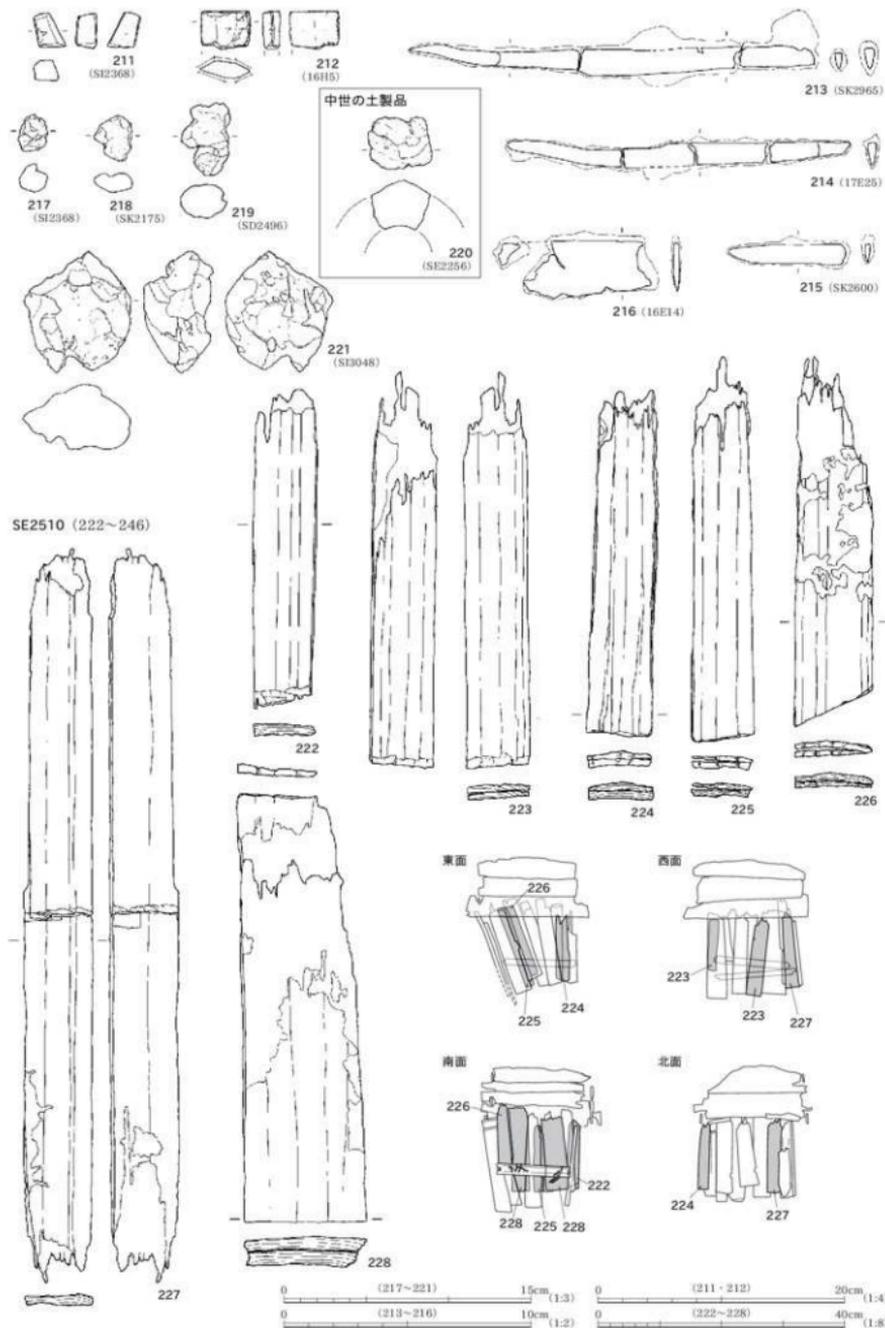


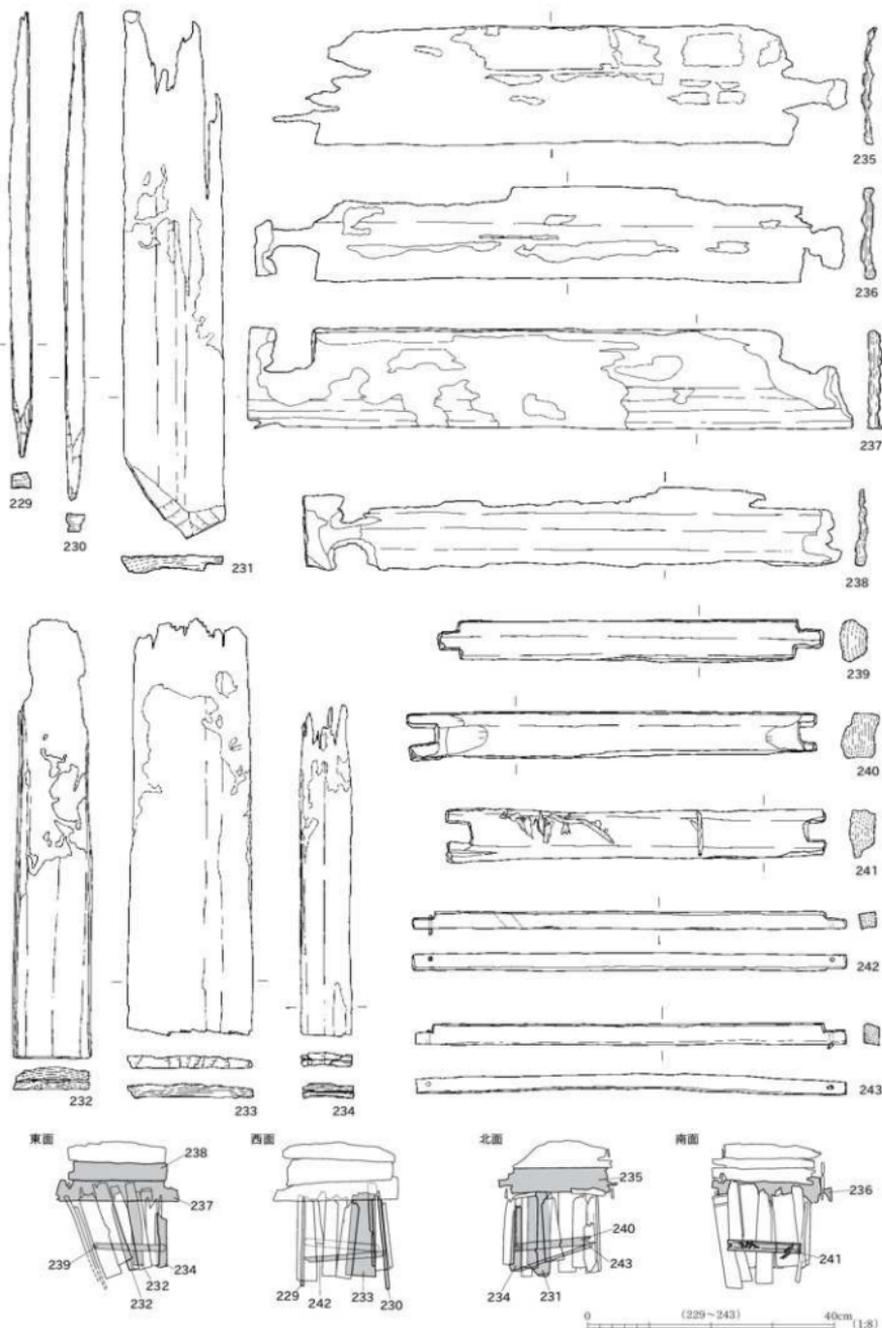
P2908 (150)

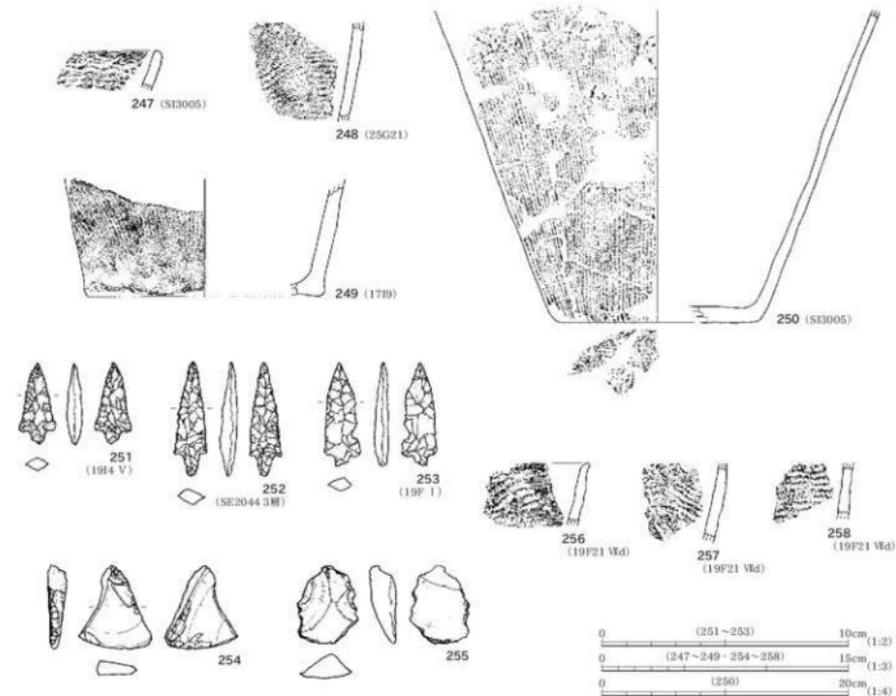
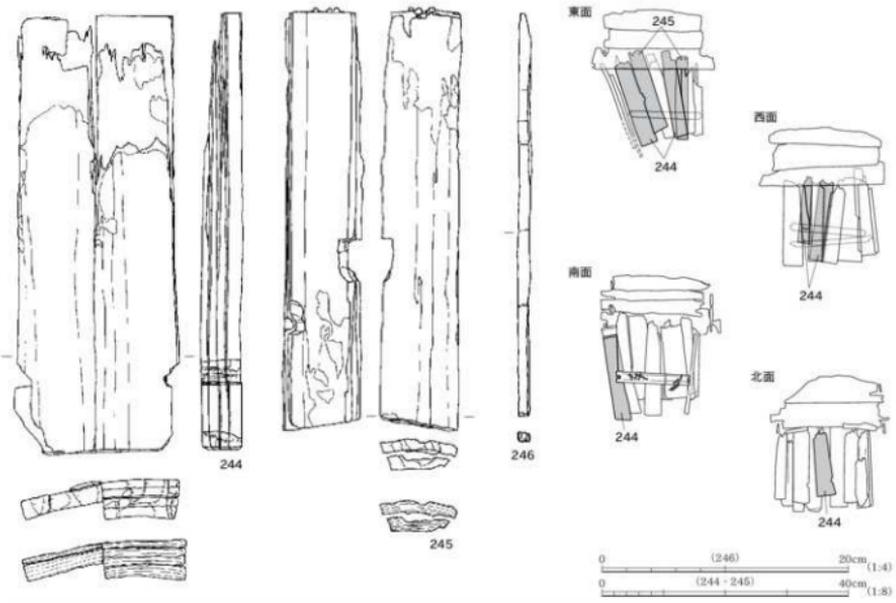




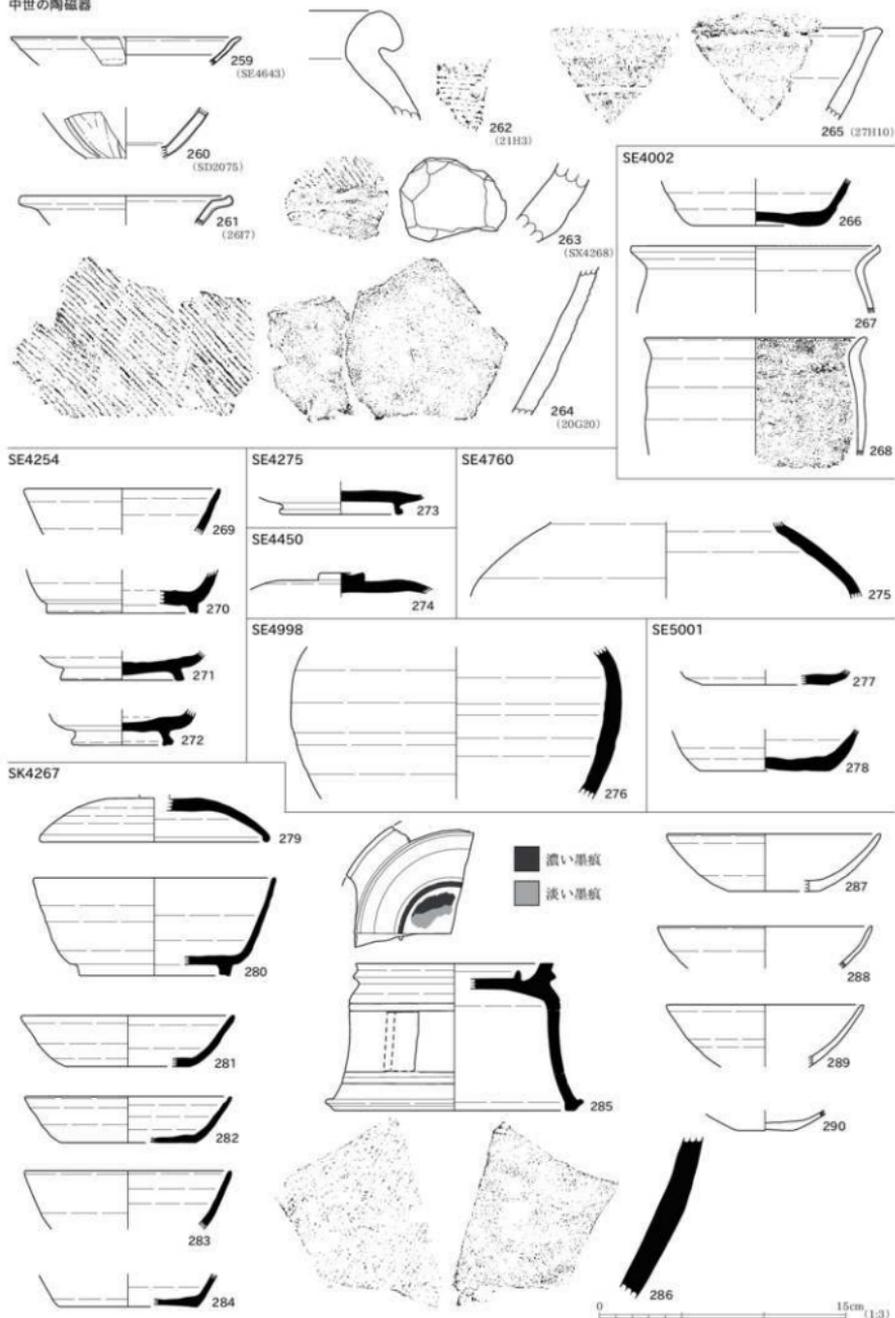








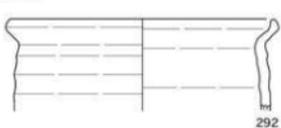
中世の陶磁器



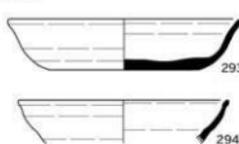
SK4074



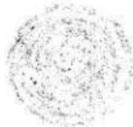
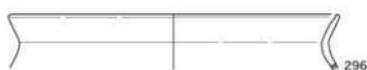
SK4131



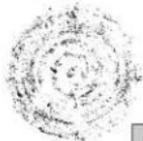
SK4156



SK4304



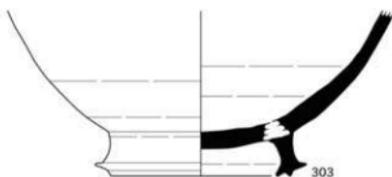
SK4313



■ 黒色付着物



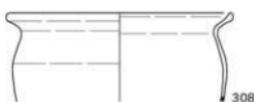
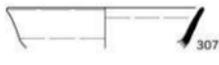
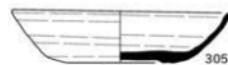
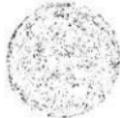
SK4349



SK4420



SK4363



SK4425A



SK4430

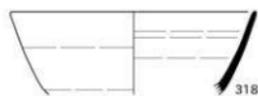


SK4503

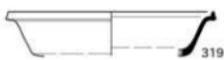


0 1.5cm (1:3)

SK4605



318



319

SK4607



320



321

SK4628



322



323



324



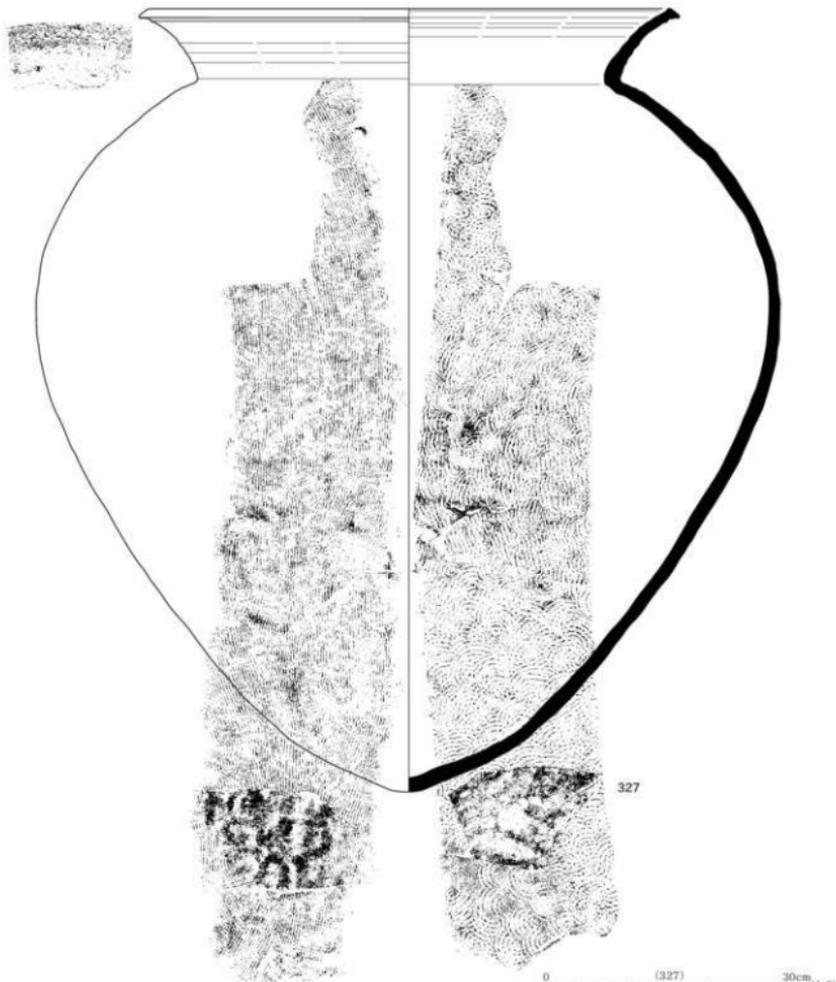
SK4629



325



326



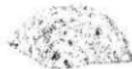
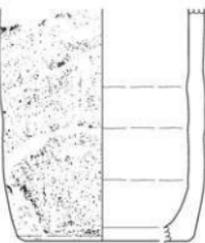
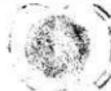
327

0 (327) 30cm (1:6)
0 (その他) 15cm (1:3)

SX4001



SX4264



SX4999



SX4265



2011年度確認調査 SK420



P4544 (SB9)



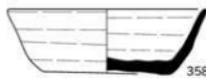
353

P4759 (SB10)



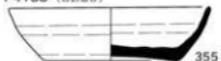
354

P4071



358

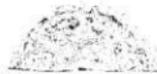
P4188 (SB20)



355



356



357

中世以降の遺構出土の古代土器類
SD2075

359



360



361



362



363



364



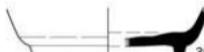
365



366



367



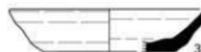
368



369



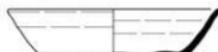
373



370



371



372



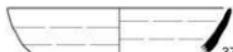
374

SD4049



375

SD4270



376

SD4367



378

SD4302



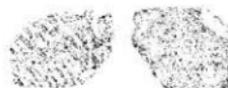
377

SD4788



379

SD4128

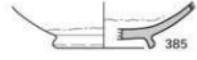


380

SX4268



382



385



383



386

SD4273



381



384



387



388



389

包含層・遺構外出土の古代土器類



392



395



390



391



393



396



399



394



397

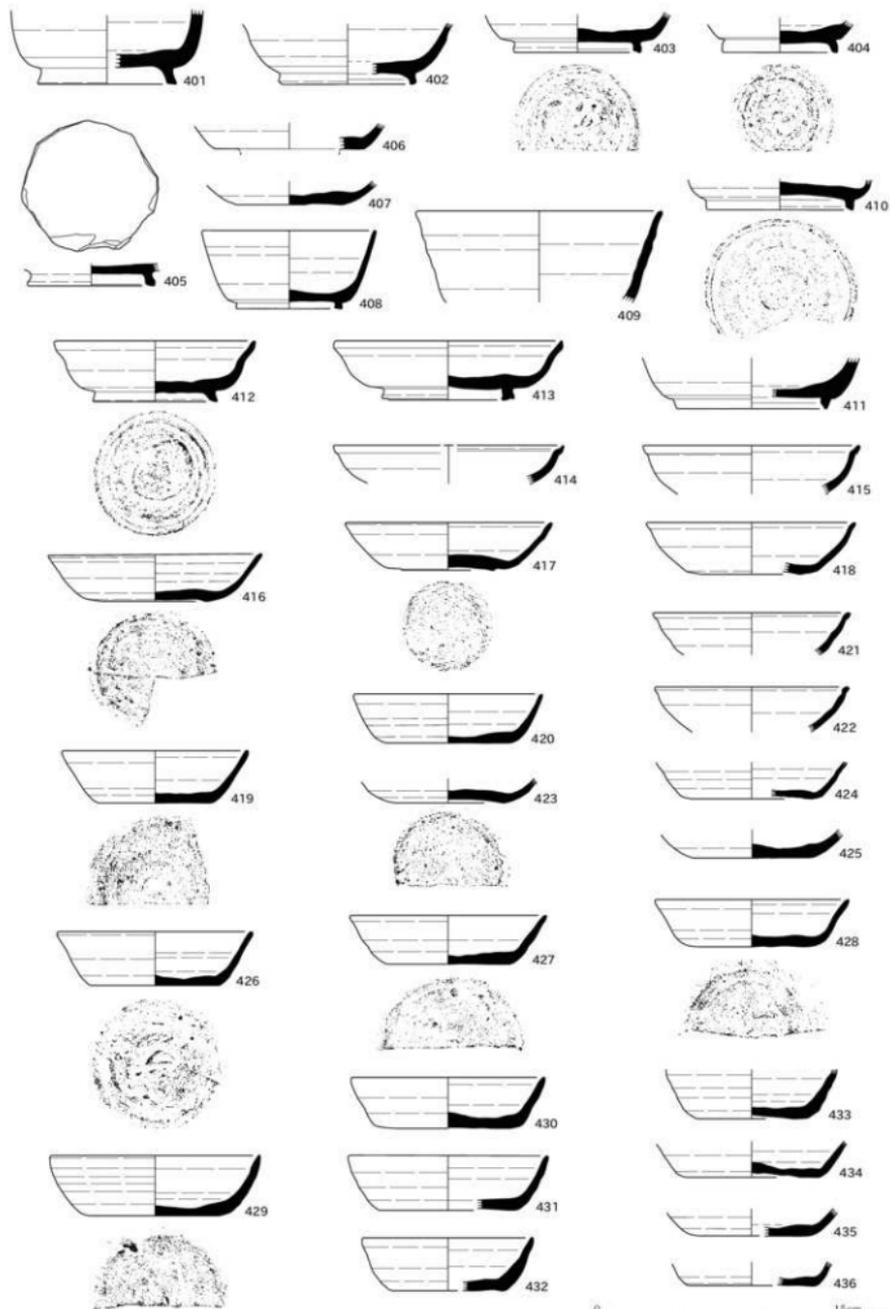


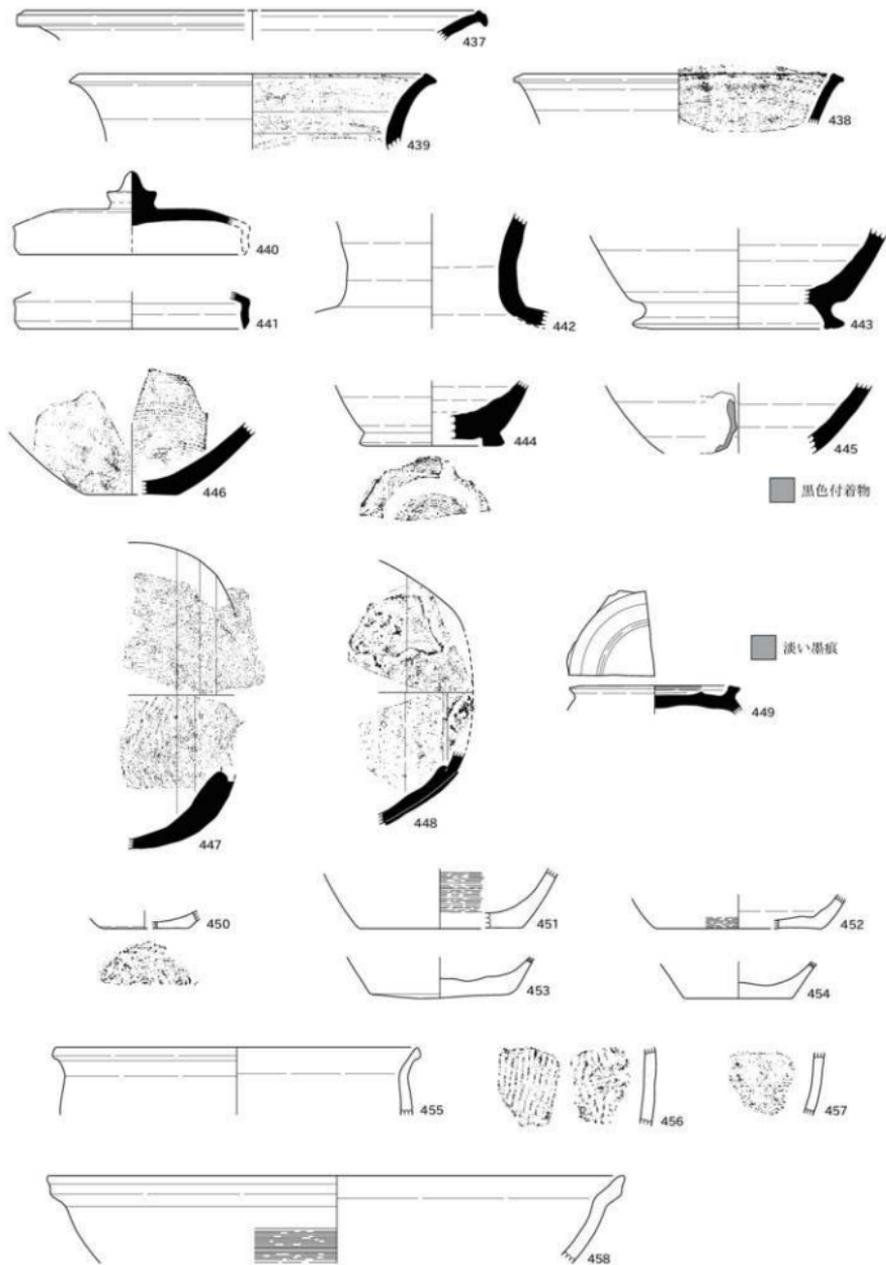
400



398

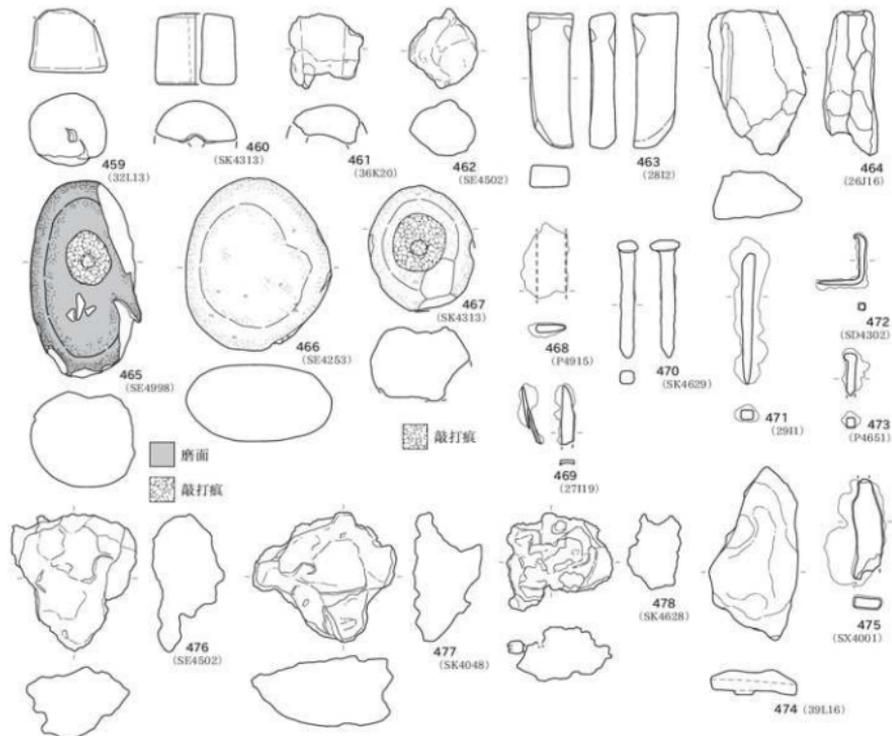
0 15cm (1:3)



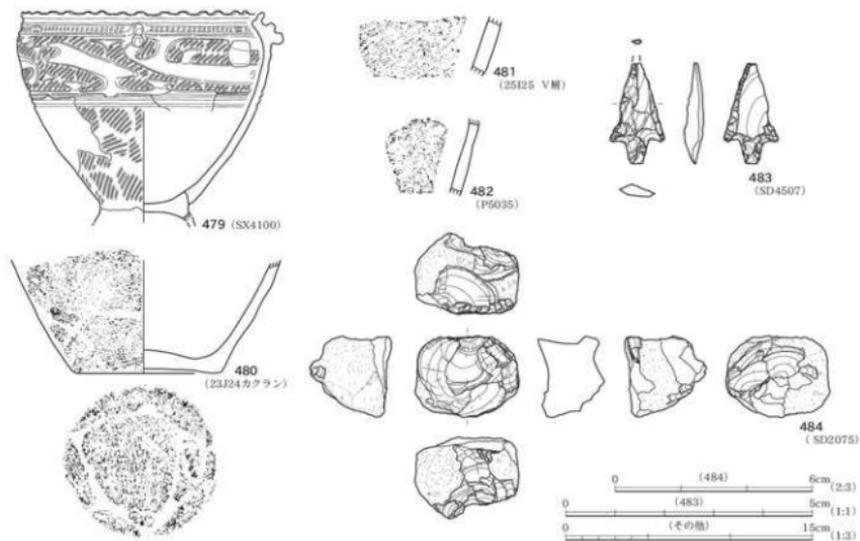


0 (437~439) 20cm (1:4)

0 (440~458) 15cm (1:3)



縄文時代土器・石器







中世の遺構 近景 (北東から)



中世の遺構 完掘 (西から)



中世のSB1・6～10・12 完壁 (北から)



中世のSB3～5・11・14 完壁 (南から)



基本土層 (1916)



中世の SE1701 炭化物出土状況 (16H・I 北から)



中世の SE2174 セクション (18I 東から)



中世の SE2292 上部セクション (18F 東から)



中世の和鏡



中世の茶臼



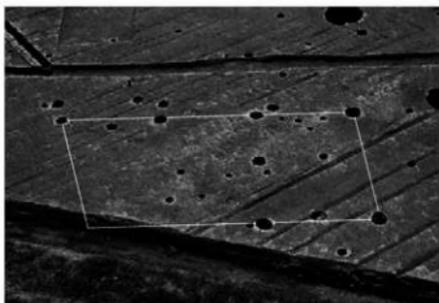
60



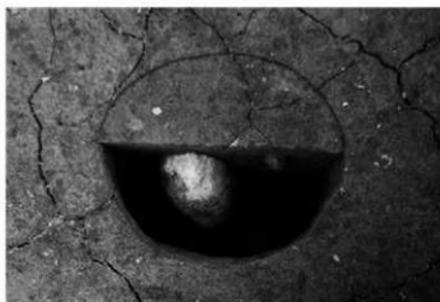
中世の陶磁器



調査区東側 中世の遺構完掘 (北西から)



SB2 完掘 (21・22F 北から)



SB2-P2442 セクション (21F 南から)



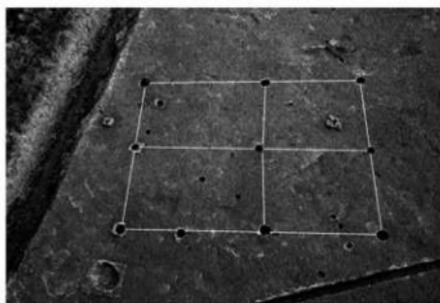
SB2-P2418 セクション (21F 西から)



SB9 完掘 (18・19G・H 南から)



SB13 完掘 (21I・J 東から)



SB15 完掘 (17・18E・F 西から)



SB15-P2114 セクション (17F 南東から)



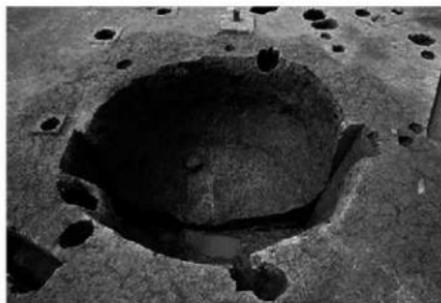
17G~1,18H・Iグリッド 中世の遺構完掘 (南から)



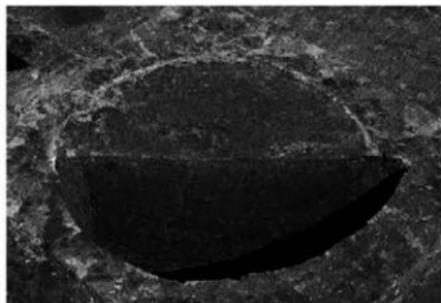
SE1703 セクション (15H 南東から)



SE1704 セクション (15・16H 南から)



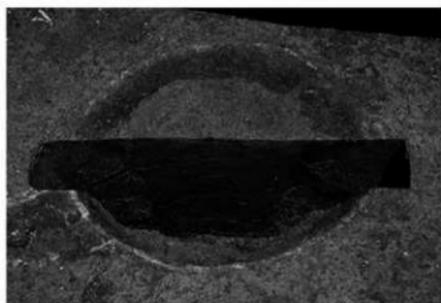
SE1704 完掘 (15・16H 南から)



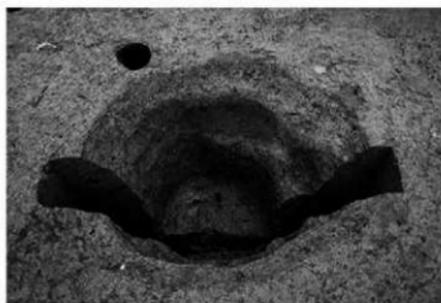
SE1934 上部セクション (17G 東から)



SE1934 下部セクション (17G 東から)



SE1976 セクション (21I 南から)



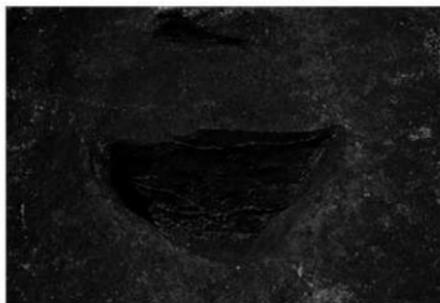
SE1976 完掘 (21I 南から)



SE2044 セクション (19E 南から)



SE2044 完掘 (19E 南から)



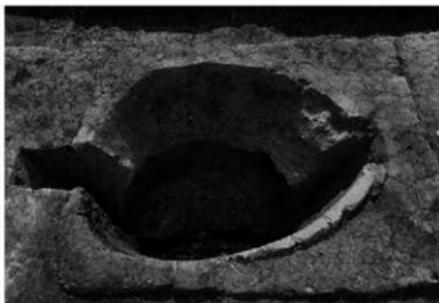
SE2064 上部セクション (17H 東から)



SE2064 下部セクション (17H 東から)



SE2065 セクション (17H 東から)



SE2065 完掘 (17H 東から)



SE2173 上部セクション (17・18I 北から)



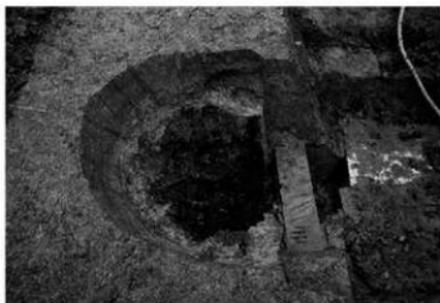
SE2173 下部セクション (17・18I 北から)



SE2176 上部セクション (18G 東から)



SE2176 下部セクション (18G 東から)



SE2176 炭化物検出状況 (18G 南から)



SE2176 完掘 (18G 東から)



SE2256 セクション (22K 南東から)



SE2268 出土状況 (21I 西から)



SE2270 セクション (20H 南東から)



SE2301 上部セクション (19F 南西から)



SE2301 下部セクション (19F 南西から)



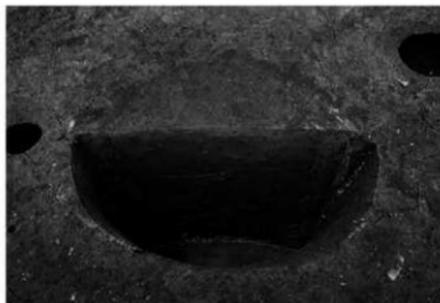
SE2301 完掘 (19F 南西から)



SE2348 セクション (19・20F 南東から)



SE2348 完掘 (19・20F 南東から)



SE2389 上部セクション (21G 東から)



SE2389 下部セクション (21G 北東から)



SE2389 完掘 (21G 東から)



SE2390 セクション (21G 南西から)



SE2391 セクション (21F 南西から)



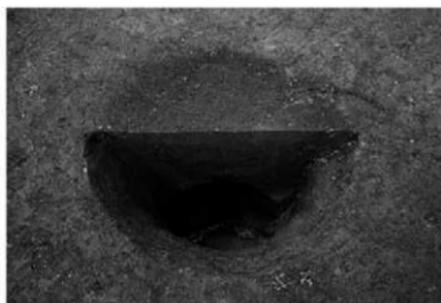
SE2391 完掘 (21F 南西から)



SE2444 セクション (22G 北から)



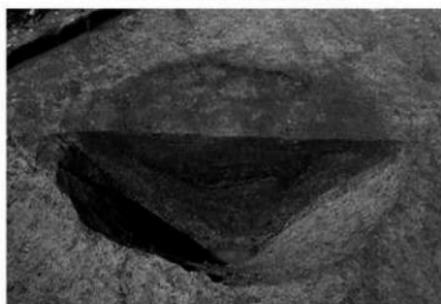
SE2523 セクション (21H 北東から)



SE2535 セクション (23I 南西から)



SE2535 完掘 (23I 南東から)



SE2555 セクション (23・24K 東から)



SE2555 完掘 (23・24K 東から)



SK1700 セクション (16H 東から)



SK1700 完掘 (16H 東から)



SK1717 セクション (15G 南東から)



SK1966 セクション (17H 南西から)



SK2089 セクション (17E 南東から)



SK2254 セクション (18H 北から)



SK2276 (右)・P2286 (左) セクション (19I 南西から)



SK2291 セクション (22K 北東から)



SD1031・1702 完掘 (15・16H 北西から)



SD1031 (左)・1702 (右) セクション (15H 西から)



SD1764 セクション (19H 南から)



SD2066 (右)・2067 (左) セクション (17H 東から)



SD2075 完掘 (南から)



SD2075 セクション (20F 東から)



SD2075 出土状況 (24G 南西から)



SD2075 セクション (17G 南から)



SD2144 (左)・2299 (右) セクション (19F 西から)



SD2210 (左)・2512 (右) セクション (23H 東から)



18I グリッド 完掘 (東から)



SD2242 セクション (18I 南から)



SD2288 セクション (21I 南から)



SD2299 セクション (18F 東から)



SD2679 出土状況 (23・24K 北から)



SD2679 セクション (24K 西から)



調査区 遠景(西から)



調査区 遺構検出状況(南から)



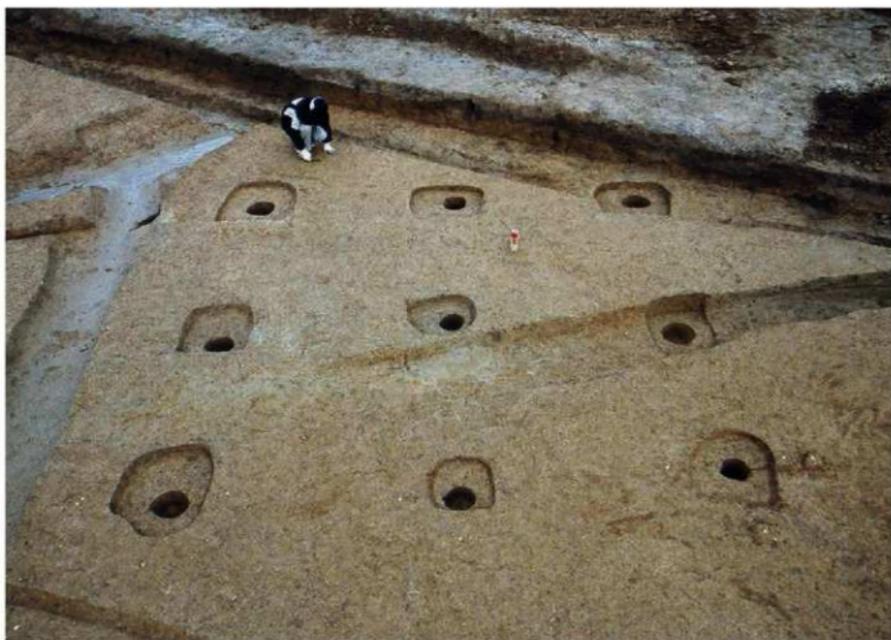
調査区東側 遺構検出状況 (西から)



調査区東側 完掘 (西から)



材木列壁 SA2704、SI3048、SB16・17 完圖(北から)



SB16 横出状況(西から)



SI2368 床面検出状況 (22F・G 南から)



SI3048 セクション (24J 南から)



SA2704 完照 (24H～J 北から)



SA2704 セクション d-d' (25H 西から)



唐三彩 No.209 (左)・No.210 (右)



調査区 完掘(西から)



調査区 完掘(真上から)



調査区東側 完掘 (北から)



調査区東側 完掘 (南西から)



SI2368 完照 (22F・G 南から)



SI2368 セクション (22F・G 南から)



SI2368 セクション (22F・G 西から)



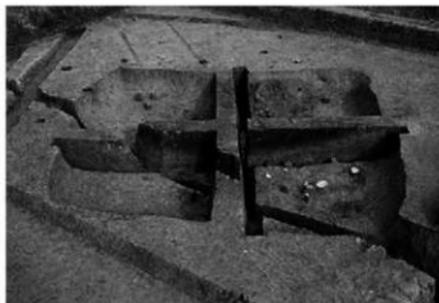
SI2368 炭 2 セクション (22F・G 南から)



SI2368 出土状況 (22F・G 南から)



SI3048 出土状況 (24) 西から



SI3048 セクション (24) 西から



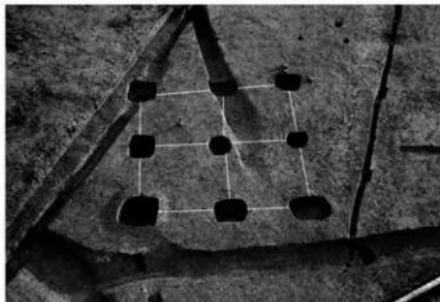
SI3048 焼土 1 セクション (24) 西から



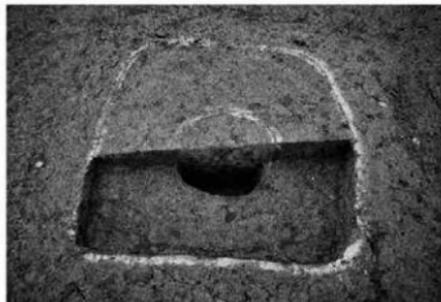
SI3048 焼土 2 セクション (24) 西から



SI3048 出土状況 (24) 西から



SB16 完掘(25H 北から)



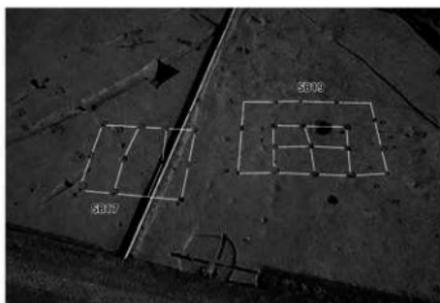
SB16-P3049 セクション(25H 西から)



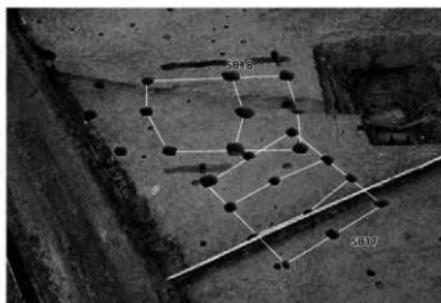
SB16-P3051 検出(25I 西から)



SB16-P3051 セクション(25I 西から)



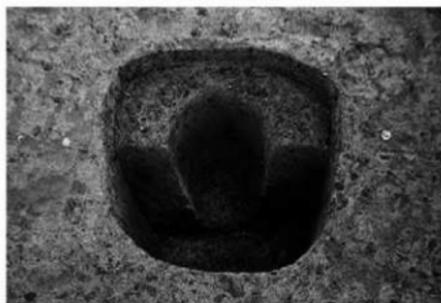
SB17・19 検出状況(西から)



SB17・18 完掘(南から)



SB17-P2738 セクション(22I 西から)



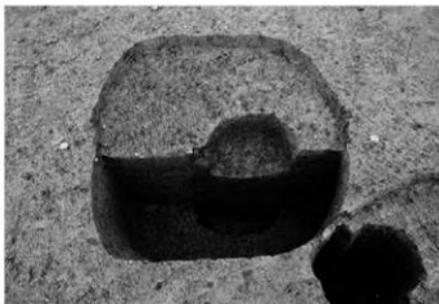
SB17-P3015 セクション(22・23H 西から)



SB18 検出状況(東から)



SB18 検出状況(北から)



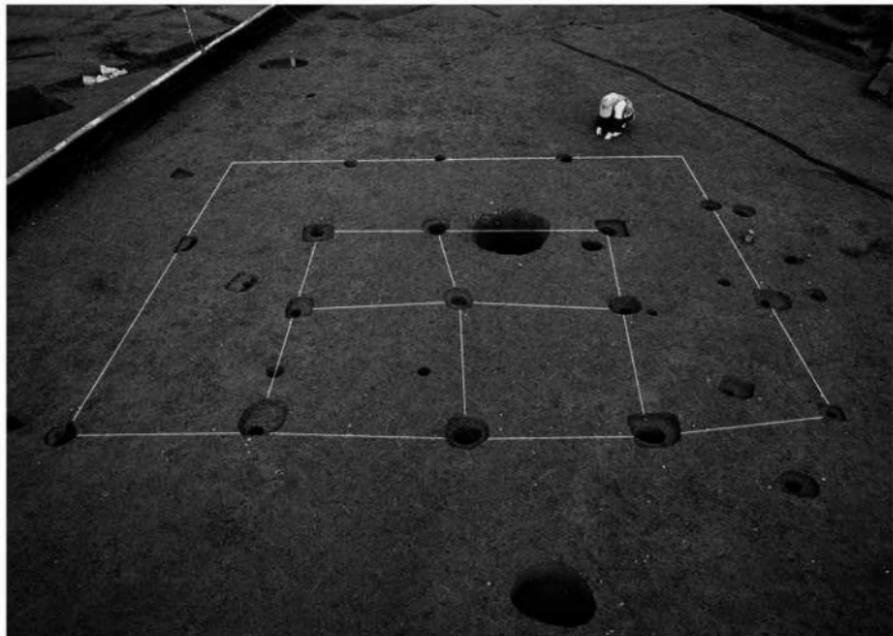
SB18-P2676 セクション(22H 南から)



SB18-P2745 セクション(22・23H 北から)



SD2676 セクション(22I 東から)



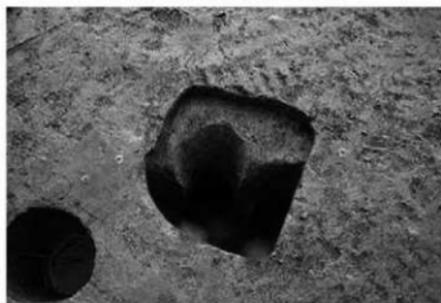
SB19 検出状況(南西から)



SB19-P3060 セクション(231 東から)



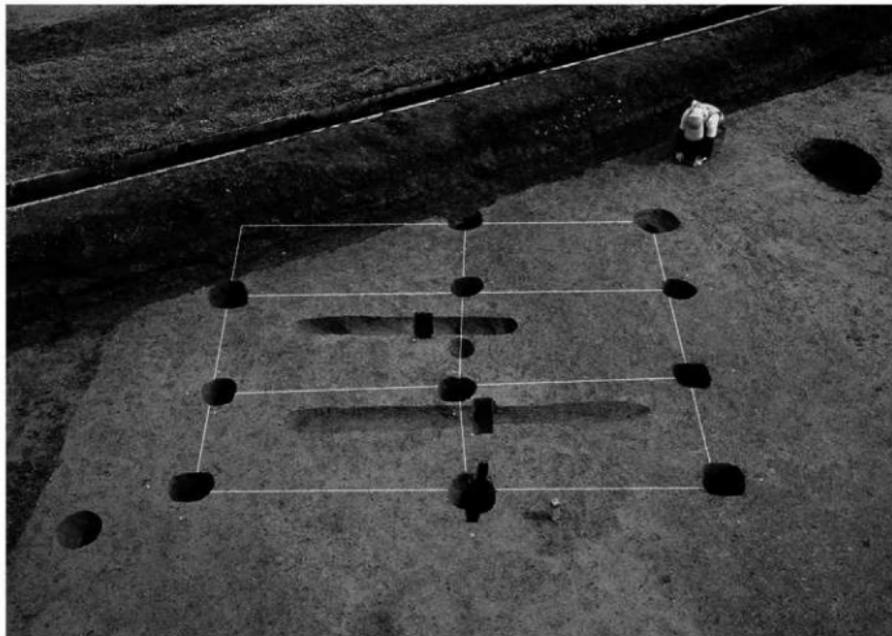
SB19-P3080 セクション(231 南東から)



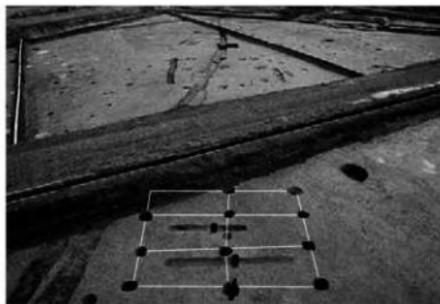
SB19-P3070 セクション(231 西から)



SB19-P3067 セクション(231 南西から)



SB22 完照(西から)



SB22 完照(西から)



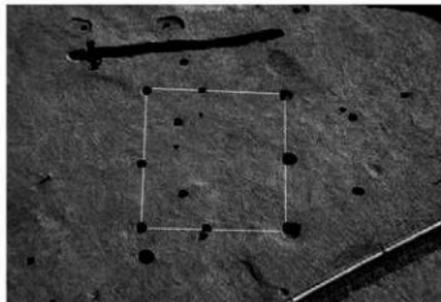
SB22-P2716 セクション(21H 南から)



SB22-P2736 セクション(21H 東から)



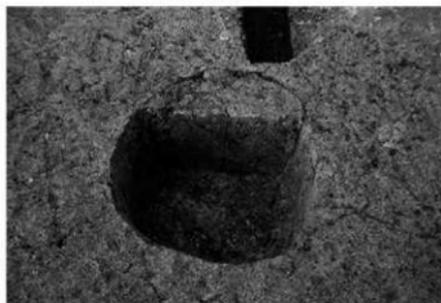
SD2959 セクション(21H 南から)



SB20 完掘(北から)



SB20-P2634 セクション(22H 東から)



SB21-P2774 セクション(22G 南から)



SB23-P2947 セクション(20I 南から)



SE2510 セクション(23H 北から)



SE2510 セクション(23H 北から)



SE2510 セクション(23H 北から)



SE2510 セクション(23H 北から)



SE2510 出土状況(23H 北から)



SE2510 出土状況(23H 南から)



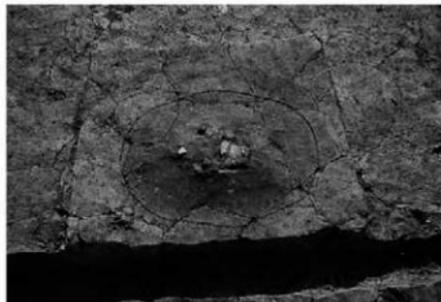
SE2510 出土状況(23H 南から)



SE2510 セクション(23H 南から)



SE2510 出土状況(23H 北から)



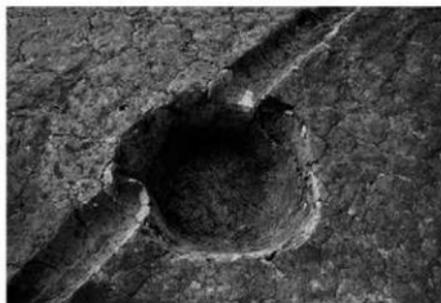
SK1901 横出状況(16G 東から)



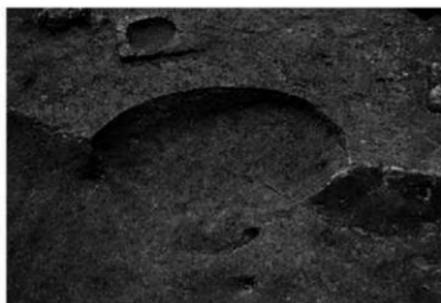
SK1901 セクション(16G 東から)



SK2175 セクション(18H 南から)



SK2175 完照(18H 南東から)



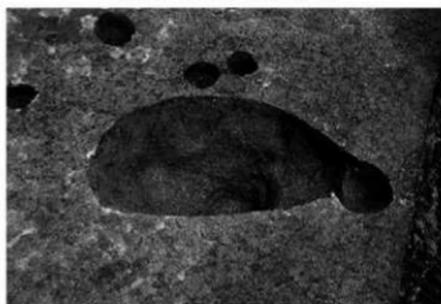
SK2191 完照(18H 南東から)



SK2192 セクション(18I 南から)



SK2239 セクション(19I 南から)



SK2239 完照(19I 南から)



SK2388 セクション (20F 東から)



SK2388 完掘 (20F 東から)



SK2469 セクション (23G 東から)



SK2469 完掘 (23G 東から)



SK2498 セクション (23H 東から)



SK2506 セクション (24H 南東から)



SK2530 セクション (22G 南から)



SK2530 完掘 (22G 南から)



SK2600 セクション (21G 南から)



SK2600 完掘 (21G 南から)



SK2686 セクション (19F 北から)



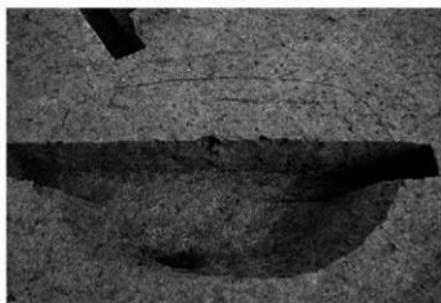
SK2686 完掘 (19F 北から)



SK2765 完掘 (19E・F 東から)



SK2770 セクション (19E 南から)



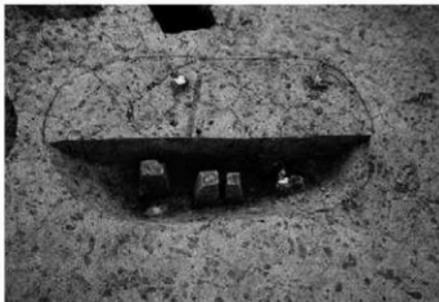
SK2793 セクション (21F 東から)



SK2937 セクション (19・20G 東から)



SK2941 セクション(19F 南から)



SK2965 出土状況(19F 南から)



SK3083 出土状況(24I・J 西から)



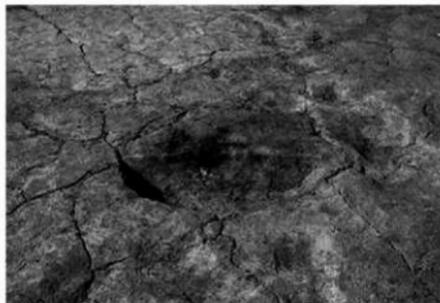
SK3083 セクション(24I・J 北から)



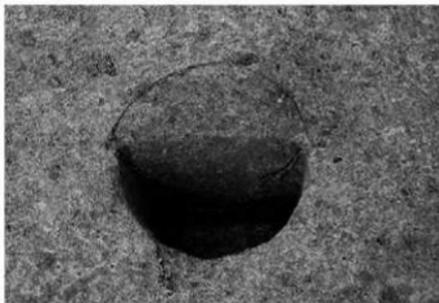
SF2189 セクション(17I 南東から)



SF2287 セクション(17F 東から)



SF2522 セクション(24H 南から)



P3069 セクション(23I 東から)



SD1948・2289・2290 出土状況(20・21J 東から)



SD1948 セクション(21J 南から)



SD2496・2497 完掘(22・23H 北西から)



SD2497 セクション(23H 東から)



SD2604 出土状況(21・22G 東から)



SD2604 セクション(21・22G 東から)



SD2607 セクション(23・24H, 23G 東から)



SD2682 セクション(16D・E 東から)



SD2788 セクション (16・17E 東から)



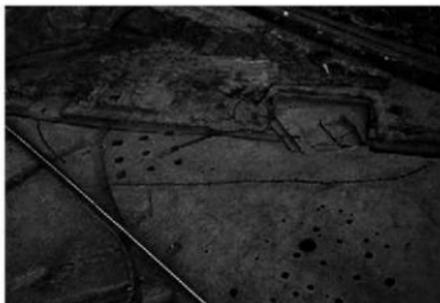
SD2849 セクション (16・17G 東から)



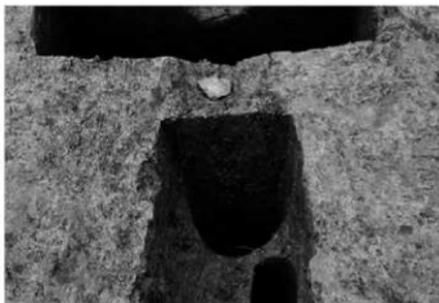
SD2866 セクション (17H・I 東から)



SD2966 セクション (19E 東から)



SA2704 完備 (東から)



SA2704 セクション c-c'・出土状況 (25H 東から)



SA2704 セクション e-e' (25H 西から)



SA2704 セクション m-m' (24I 南から)



SA2704 セクションo-o'・出土状況(24I 南から)



SA2704 完照(24I/16・17 東から)



SI3005 セクション(22I・J 北東から)



SI3005 出土状況(22I・J 北東から)



SI3005 セクション(22I・J 南東から)



2013 年度農道下調査区 発掘（北西から）



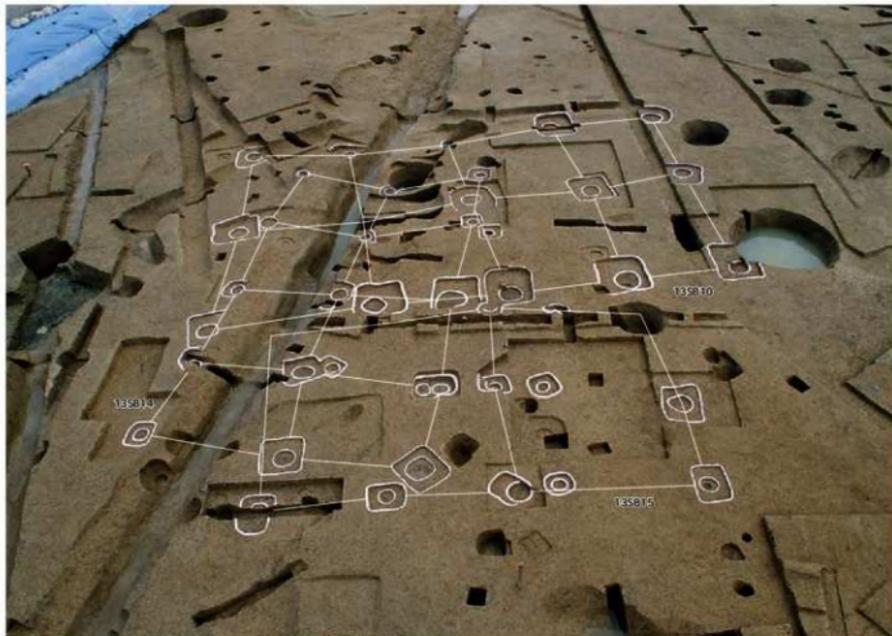
21H 区 遺構検出状況（北東から）



2013 年度調査区 完掘 (上空北東から)



2013 年度調査区 完掘 (上空北東から)



13SB10・13SB14・13SB15 検出状況(西から)



13SB13 検出状況(北から)



13SB20 検出状況(西から)



13SB13-P4750 セクション(南から)



13SB17-P4955 セクション(北から)



SK4629 遺物出土状況(北東から)



SF4800 検出状況(東から)



SF4410 焼土検出状況(東から)



SF4410 セクション(東から)



SX4001 東西セクション上(南から)



SX4001 南北セクション上(西から)



SX4001 東西セクション下(南から)



SX4001 南北セクション下(西から)



SX4999 燃焼部検出状況(南から)



SX4999 燃焼部東西セクション(南から)



SX4999 南北セクション①(西から)



SX4999 南北セクション②(西から)



SX4999 南北セクション③(西から)



SX4999 作業場完掘(南から)



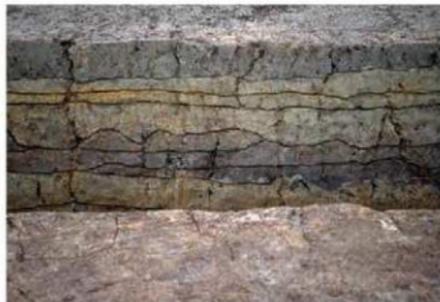
SD4228(手前 SA2704) 検出状況(南西から)



SD4228 セクションC(25H 南西から)



29J3 ~ 28J1 区 基本層序 (南西から)



29L15 区 基本層序 (西から)



35K12・17 区 基本層序 (西から)



35N6・11 区 基本層序 (西から)



39L24、39M4 区 基本層序 (西から)



40P16・21 区 基本層序 (西から)



26H 区 材木列塚検討調査状況 (南東から)



28H21 区 材木列塚検討調査状況 (北東から)



SD2210・2066 セクション (21H12 西から)



SD2066 他 セクション (21H3 西から)



SD2066 他 セクション (21H14・19 東から)



SD2066 他 セクション (21H20 東から)



SD2066 他 完掘 (21H 区 東から)



SD2066 他 完掘 (21H 区 東から)



SD2288 セクション (21H 南から)



SD4027 セクション (21H 北から)



SD2075 完掘(30ライン以西 東から)



SD2075 完掘(30ライン以西 東から)



SD2075・4302 セクション(26f 西から)



SD2075 セクション(27f12・17 西から)



SD2075 セクション(28f16・21 西から)



SD2075 セクション(28f17・22 西から)



SD2075 セクション(29f25・29f5 西から)



SD2075 セクション(30・31f 南西から)



SD2075 セクション (31J 西から)



SD2075 セクション (32J 北西から)



SD2075 セクション (33J 西から)



SD2075 完照 (30 ライン以东 東から)



SD2299 セクション (20F24 西から)



SD2531 セクション (25I 南から)



SD4049 セクション (23K 西から)



SD4137 完照 (25H 西から)



SD4126・4127 セクション(41Q14・20 東から)



SD4126・4127 完掘(41・42Q 東から)



SD4255 セクション(32K 西から)



SD4262 セクション(33J16 西から)



SD4262 セクション(35J17・22 西から)



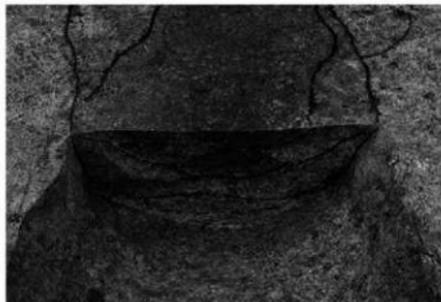
SD4270～4273 完掘(30H・30I 北から)



SD4302 セクション(25I24・25 南から)



SD4302 セクション(25K8 北東から)



SD4367 セクション(26K6 南西から)



SD4367 セクション(27K7 南西から)



SD4785・4788 完照(29K・L 南東から)



SD4785 セクション(29K21 南西から)



SD4785 セクション(29K20 南西から)



SD4785 セクション(30K12 西から)



SD4788 セクション(29L7・8 西から)



SD4788 セクション(30K18・23 西から)



SD4788 セクション(32K7・12 西から)



SD4788 セクション(33K1・6 西から)



SG5080 セクション(30J 西から)



SG5080 完掘(30J 西から)



SX4135 セクション(南西から)



SX4135 完掘(西から)



SX4224 セクション(25・26H 西から)



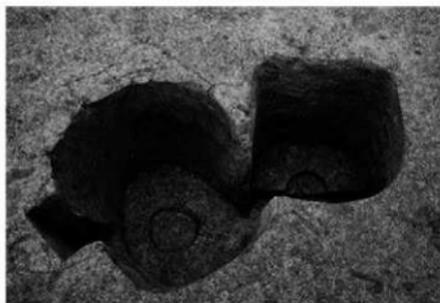
SK4257 セクション(30・31K 南から)



13SB1 検出状況(東から)



13SB1-P4192 セクション(北から)



13SB1-P4192, 13SB8-P4203 完掘(南から)



13SB2 完掘(南から)



13SB2-P4170 セクション(北から)



13SB2-P4180 セクション(北から)



13SB3 検出状況(西から)



13SB3-P4154 セクション(西から)



13SB4 完掘(南から)



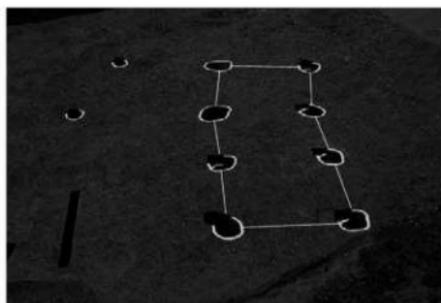
13SB4 検出状況(東から)



13SB4-P4080 セクション(西から)



13SB4-P4093 セクション(西から)



13SB5 完掘(東から)



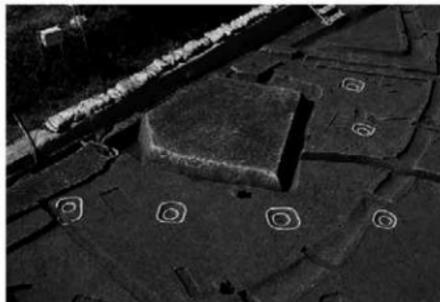
13SB5-P4087 セクション(西から)



13SB6 検出状況(南から)



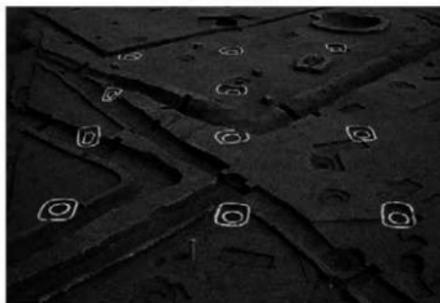
13SB6-P4230 セクション(西から)



13SB7 検出状況(南東から)



13SB7-P4554 セクション(南東から)



13SB8 検出状況(南から)



13SB8-P4205 セクション(西から)



13SB8-P4201、13SB1-P4197 セクション(東から)



13SB9 検出状況(南西から)



13SB9-P4544 セクション(南西から)



13SB10 検出状況(西から)



13SB10-P4759 セクション(南から)



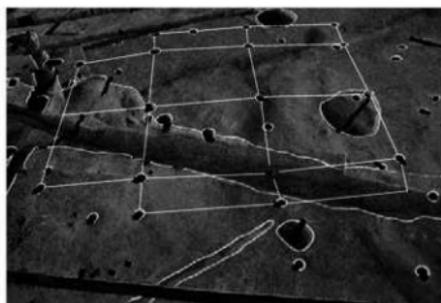
13SB10-P4915 セクション(南から)



13SB11 完掘(南から)



13SB11-P4318 セクション(北西から)



13SB12 完掘(南東から)



13SB12-P4403 セクション(南西から)



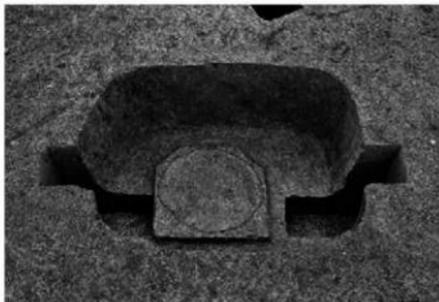
13SB14-P4689 セクション(南から)



13SB15-P4700 セクション(西から)



13SB13 検出状況(北から)



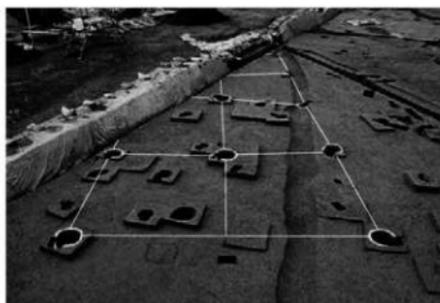
13SB13-P4745 完掘(西から)



13SB13-P4748 セクション(西から)



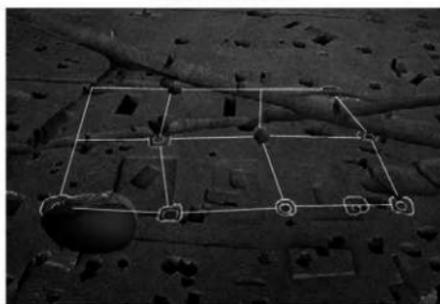
13SB13-P4751 セクション(南から)



13SB16 完掘(東から)



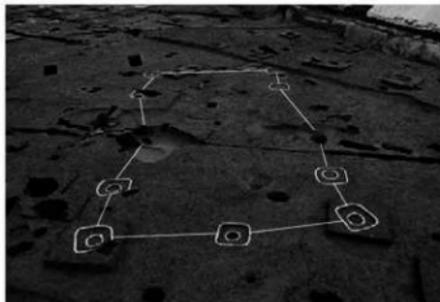
13SB16-P4647 セクション(東から)



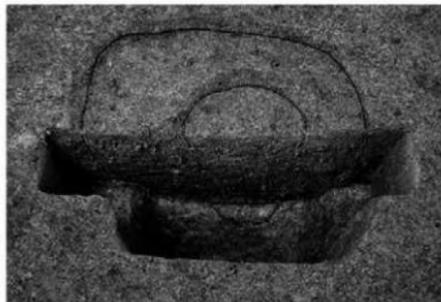
13SB17 検出状況(南から)



13SB17-P4957 セクション(北から)



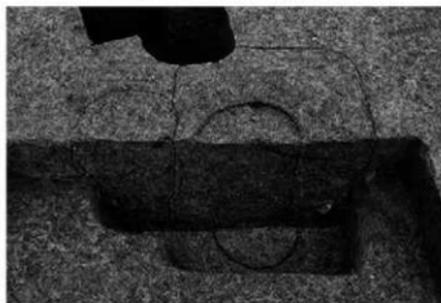
13SB18 検出状況(北西から)



13SB18-P4967 セクション(南西から)



13SB19 検出状況(北から)



13SB19-P4986(右)、P4987 セクション(北から)



13SB20 完壁(西から)



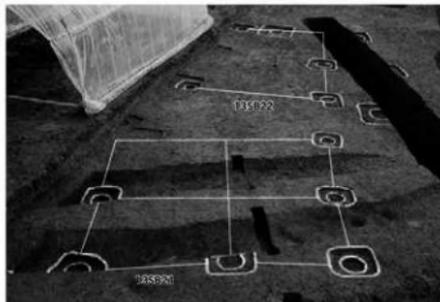
13SB20-P4188 セクション(南から)



13SB20-P5057 セクション(南から)



13SB20-P5061 セクション(南から)



13SB21・22 検出状況(西から)



30・31 I区 完掘(北から)



13SB21-P4282 セクション(東から)



13SB22-P4288 セクション(北から)



13SB23-P5025 セクション(南から)



13SB24-P4847 セクション(北から)



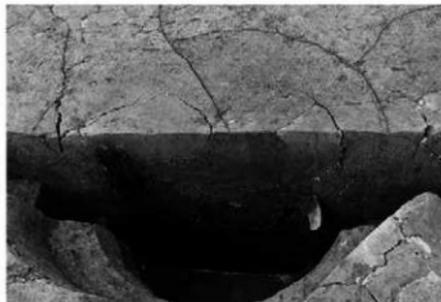
13SB24-P4778、P4830 セクション(東から)



13SB24-P4778 セクション(西から)



SE4002・SK4003 セクション(南東から)



SE4002 セクション(南東から)



SE4002 完掘(南東から)



SK4003 セクション(南東から)



SE4130 セクション(南から)



SE4130 完掘(南から)



SE4253 セクション(西から)



SE4254 セクション上(西から)



SE4274 セクション (北から)



SE4275 セクション (西から)



SE4277 セクション (南から)



SE4278 セクション (南から)



SE4279 セクション (南から)



SE4301 セクション上 (南から)



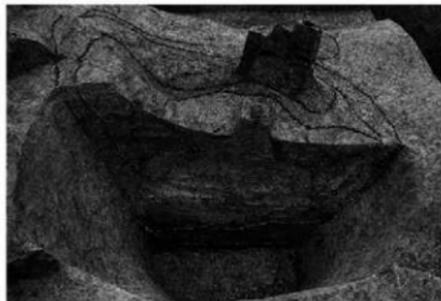
SE4315 セクション (東から)



SE4315 炭層検出状況 (東から)



SE4450 セクション(南から)



SE4643 セクション(西から)



SE4502 セクション(東から)



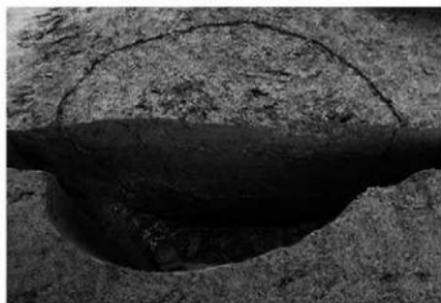
SE4502 出土状況(北から)



SE4760 セクション(南東から)



SE4760 完照(南東から)



SE4860 セクション(東から)



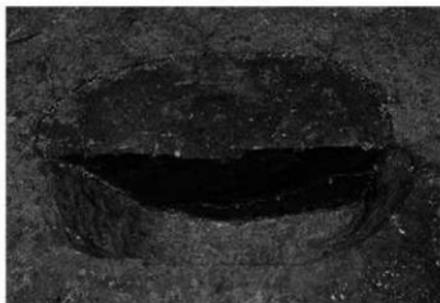
SE4998 セクション(南西から)



SE5001 完掘 (北東から)



SK4046 セクション (北から)



SK4048 セクション (南から)



SK4058 セクション (西から)



SK4074 出土状況 (西から)



SK4074 略完掘 (西から)



SK4131 セクション (南から)



SK4131 出土状況 (南から)



SK4113 セクション(西から)



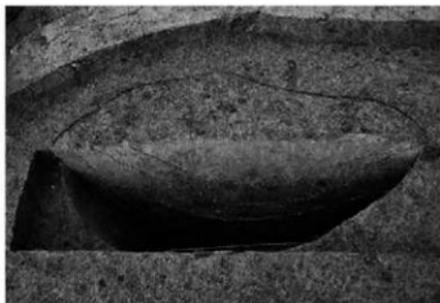
SK4142 セクション(南から)



SK4146 完器(西から)



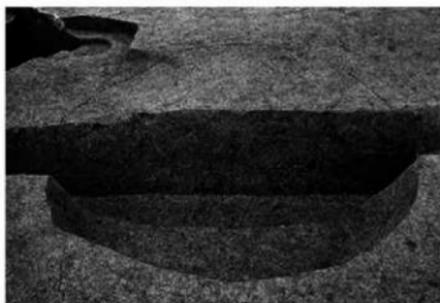
SK4156 セクション(西から)



SK4163 セクション(南から)



SK4165 セクション(北から)



SK4214 セクション(南から)



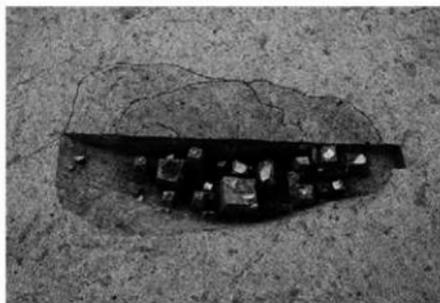
SK4266 セクション(西から)



SK4267 セクション(東から)



SK4267 完掘(西から)



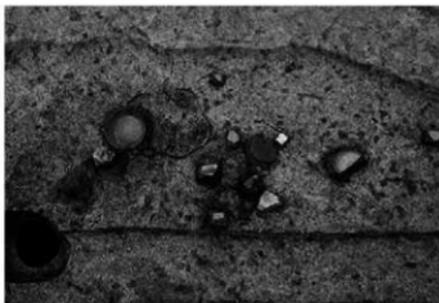
SK4304 南半出土状況(南から)



SK4304 セクション(南から)



SK4313 セクション(北西から)



SK4313 南東半出土状況(北西から)



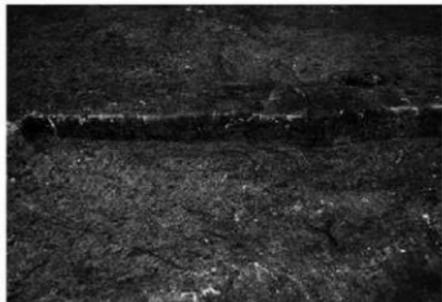
SK4363 セクション(東から)



SK4363 出土状況(東から)



SK4349 セクション(南西から)



SK4430 セクション(南西から)



SK4425 セクション(東から)



SK4425 セクション(東から)



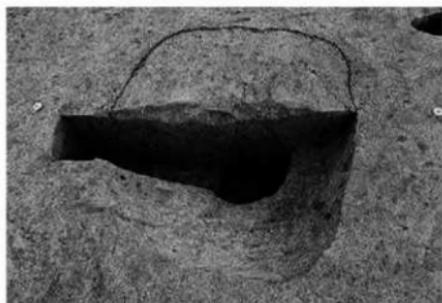
SK4449 セクション(東から)



SK4451 セクション(南西から)



SK4455 セクション(南から)



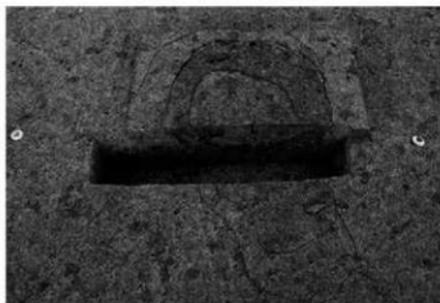
SK4480 セクション(北西から)



SK4501 セクション(東から)



SK4503 セクション(東から)



SK4511 セクション(南から)



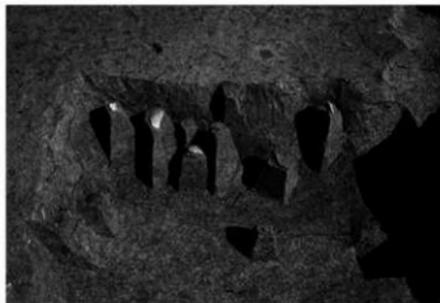
SK4605 セクション(南から)



SK4607 セクション(北から)



SK4628 セクション(南西から)



SK4628 北東半出土状況(南から)



SK4628 完掘(西から)



SK4629 セクション(南東から)



SK4629 出土状況(西から)



SK4629 出土状況(北東から)



SK4629 完掘(南東から)



SK4637 セクション(北から)



SK4640・P4919 セクション(東から)



SK4640 セクション(東から)



SK4640 ほか 完掘(北から)



SK4770 セクション(西から)



SK4921 セクション(東から)



SF4261 セクション(東から)



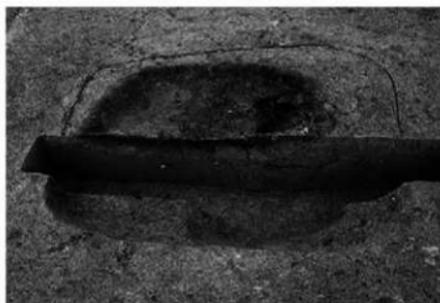
SF4410 掘出状況(東から)



SF4410 焼土掘出状況(南から)



SF4410 完掘(東から)



SF4800 セクション(東から)



SF4800 完掘(東から)



SX4265 セクション(南から)



SX4864 セクション(北西から)



SX4264 セクション(西から)



SX4264 完掘(西から)



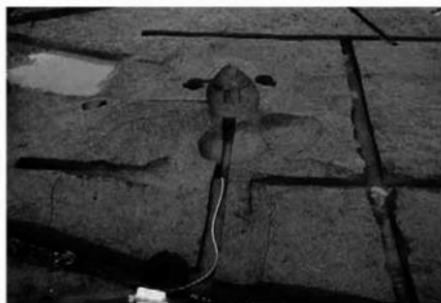
SX4999 燃焼部開口 セクション(南から)



SX4999、P5035(左)、P5036(右) 検出状況(南から)



SX4999 作業場 遺物出土状況(南東から)



SX4999 完掘(南から)



SD4004 セクション (20F 南から)



SD4055 セクション (20F 南から)



SD4112 セクション (21G 西から)



SD4112 完掘 (21G 南から)



SD4635 セクション (24J 南東から)



SD4506 (右)・4507 (左) セクション (26J 南から)



SD4456 セクション (28J 南から)



SD4132 セクション (27I 西から)



SD4132 セクション(28・27I 北西から)



SD4642 セクション(南から)



SD4388 セクション(27J 西から)



SD4446 セクション(28J 西から)



SD4447 セクション(28J 西から)



SD4453 セクション(27K 西から)



SD4772・SK4779 セクション(27K 西から)



SD4772 完掘(27・28K 西から)



SK4732・SD4367 セクション(28K 西から)



135B13 P4818 セクション(28K 西から)



SD4367・SD4389・P4846 セクション(南西から)



P4846 セクション(南西から)



P4071 須恵器無台杯出土状況(西から)



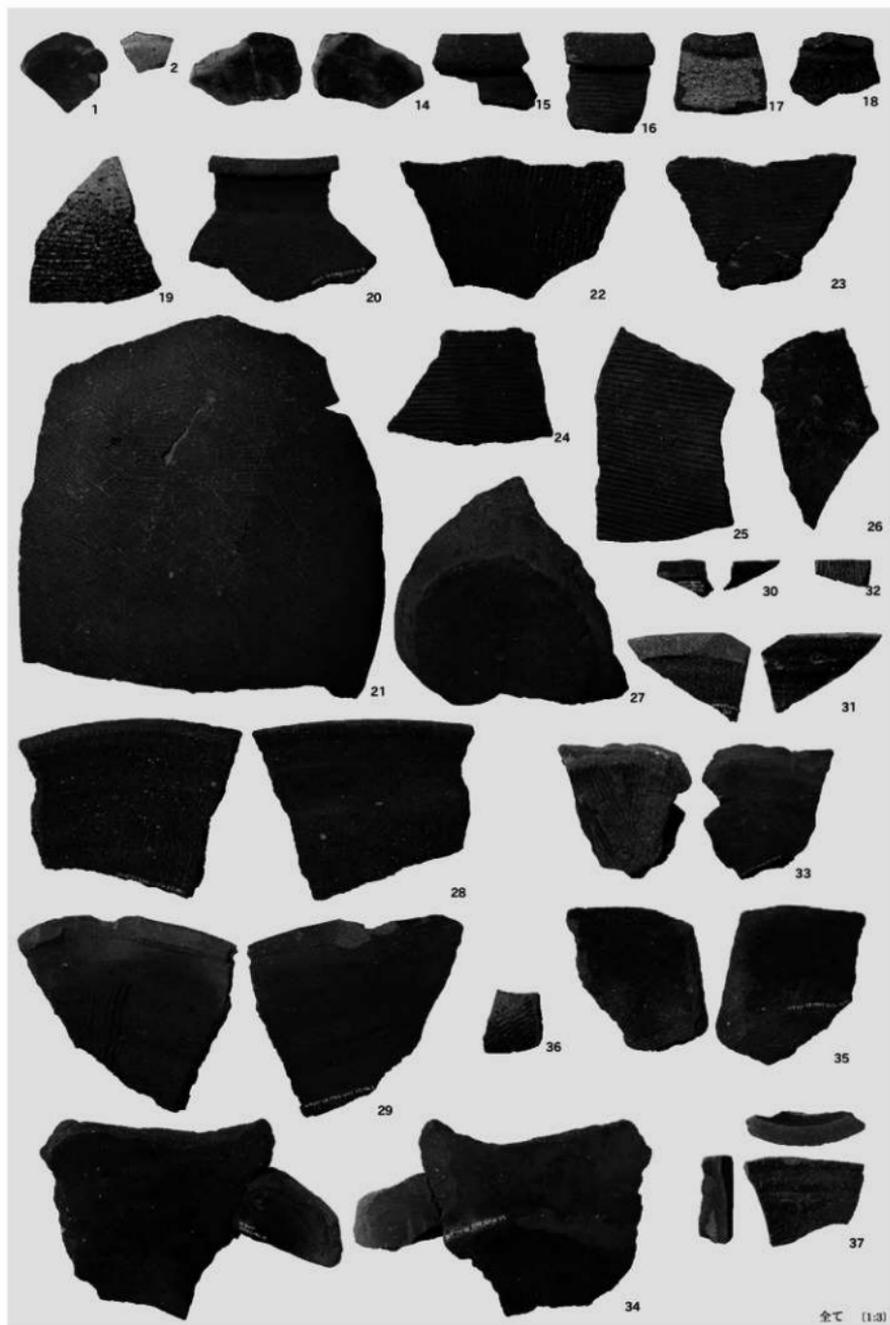
SK4267 円面礫出土状況(東から)

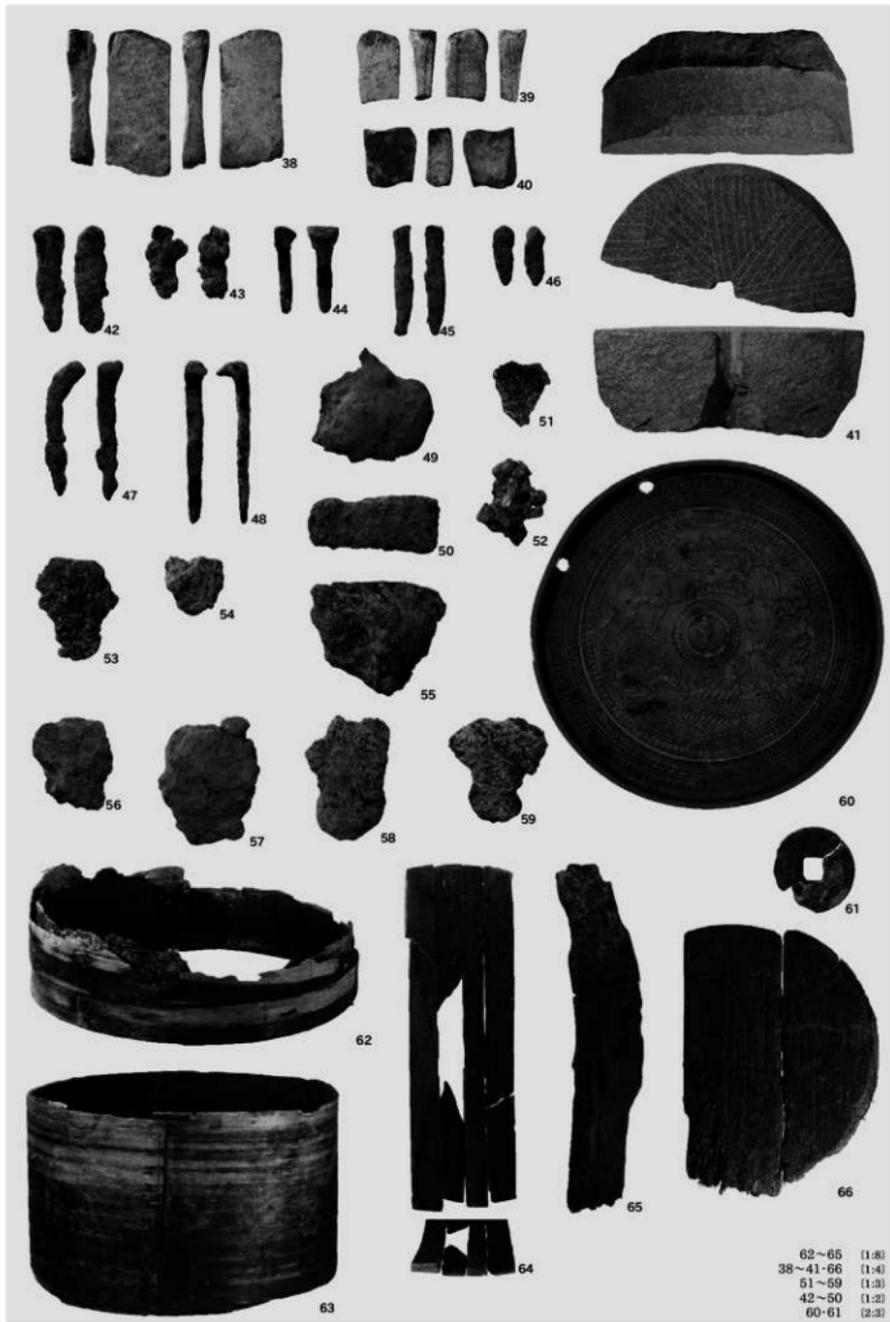


SX4100 縄文土器出土状況(北から)



23J16 区Ⅴ層 縄文土器出土状況(北から)

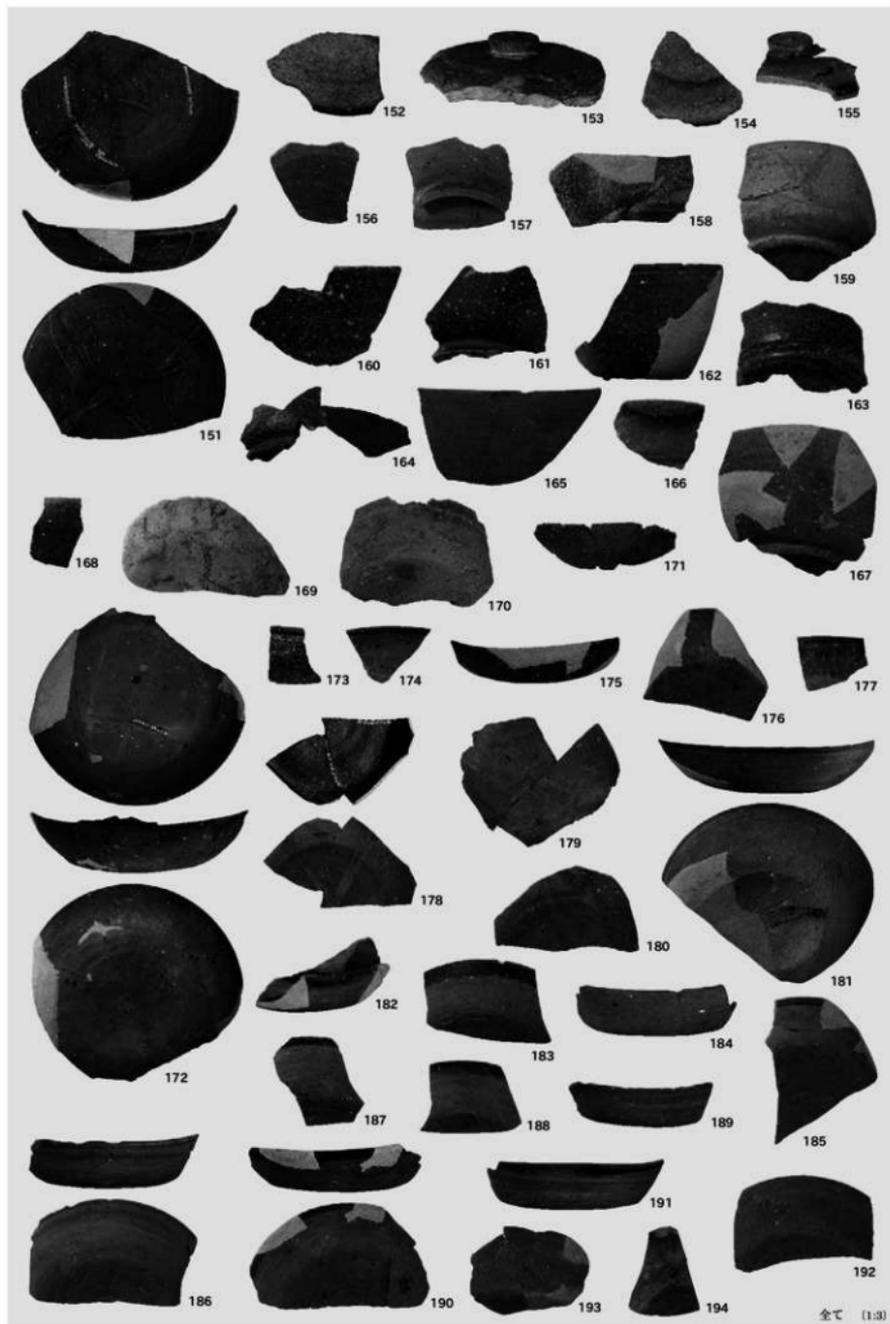


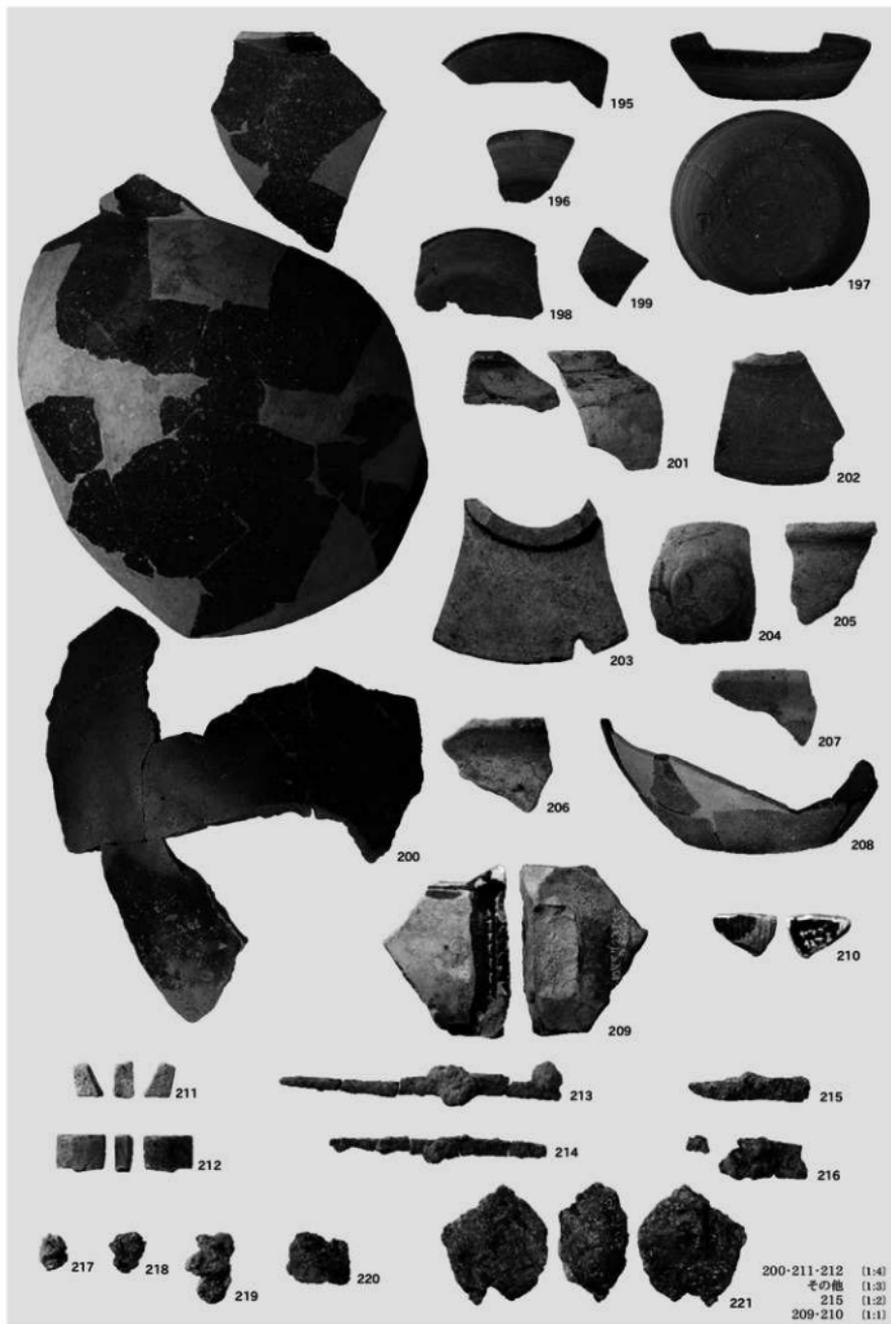


62~65 (1:8)
 38~41-66 (1:4)
 51~59 (1:3)
 42~50 (1:2)
 60-61 (2:3)

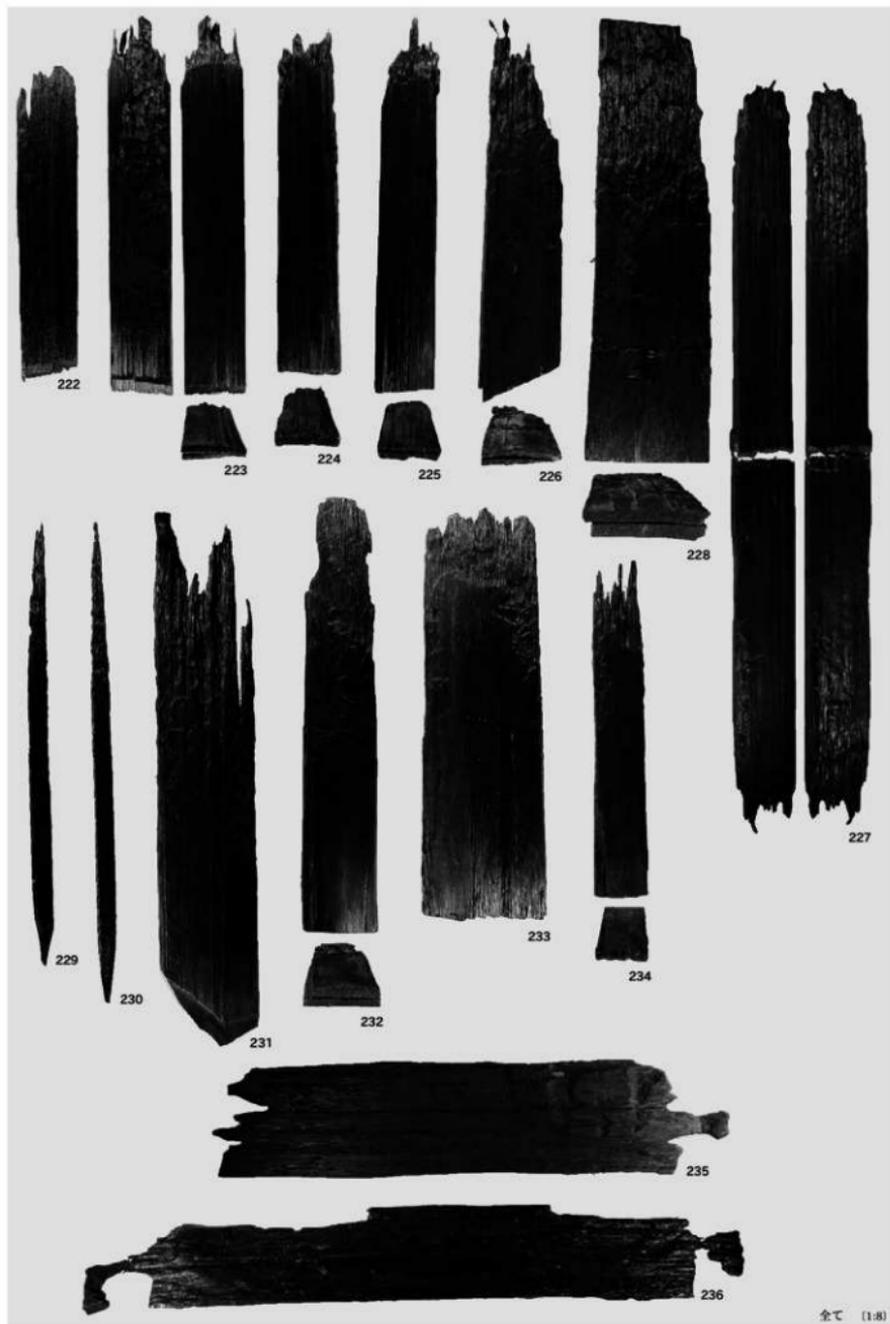


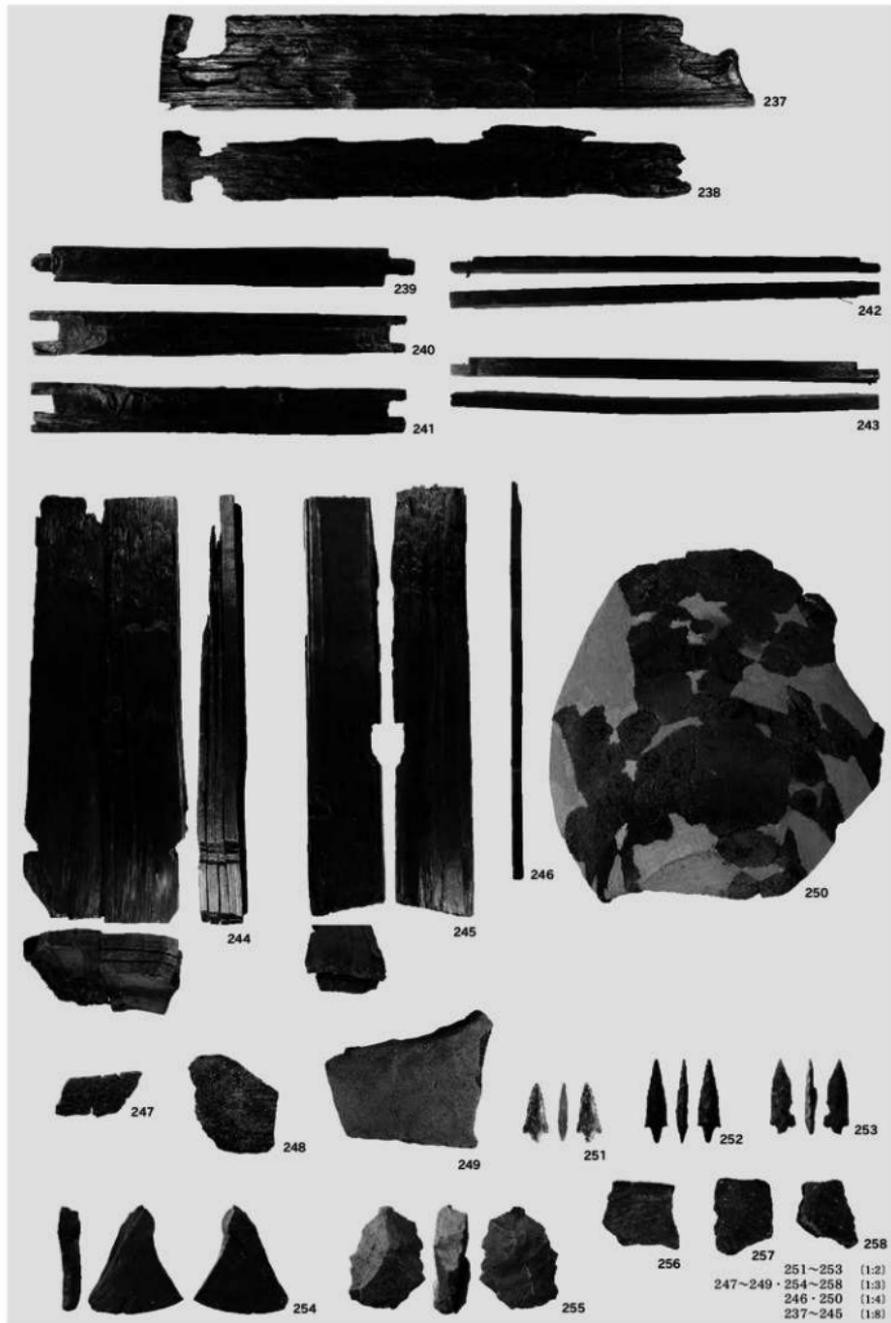


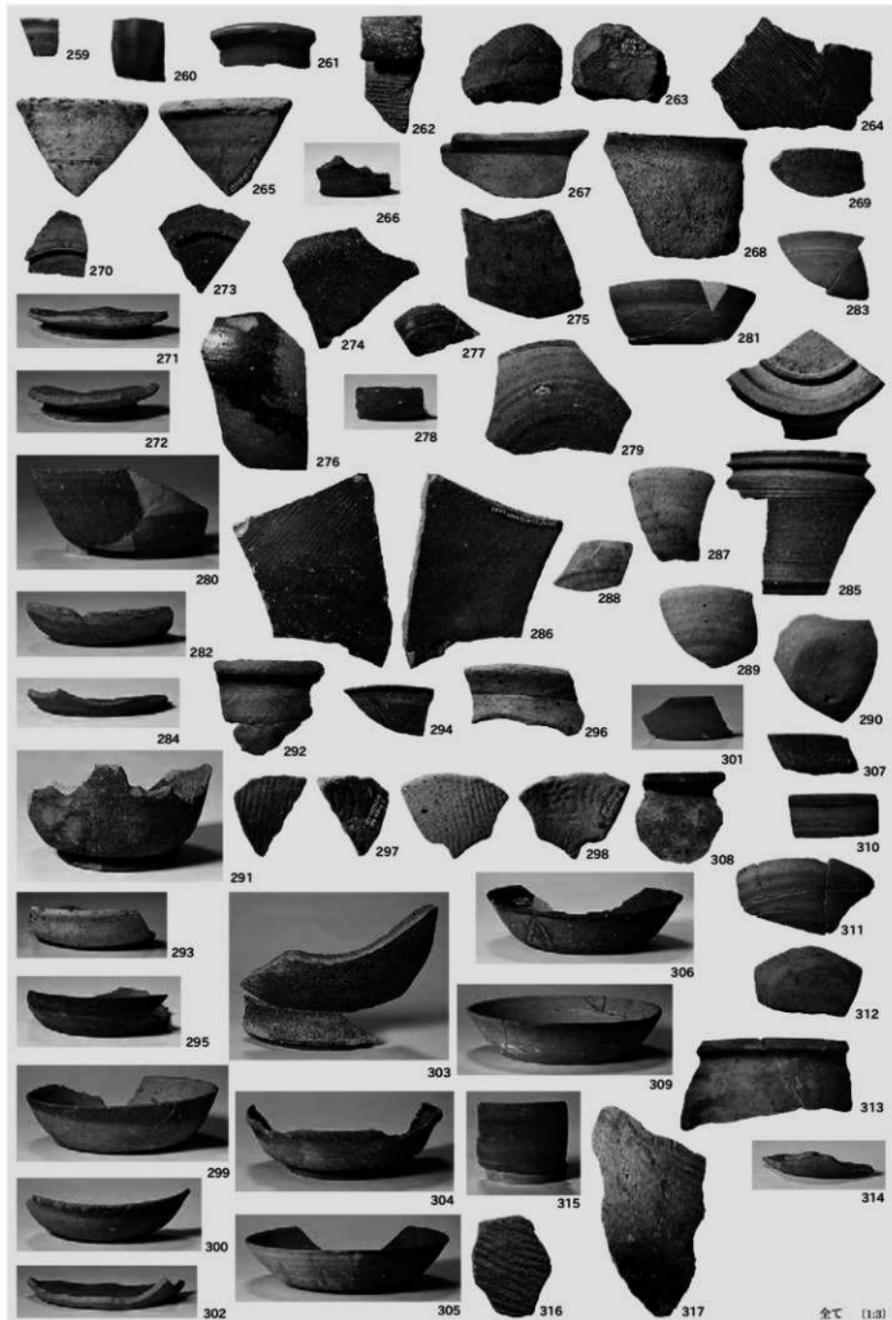


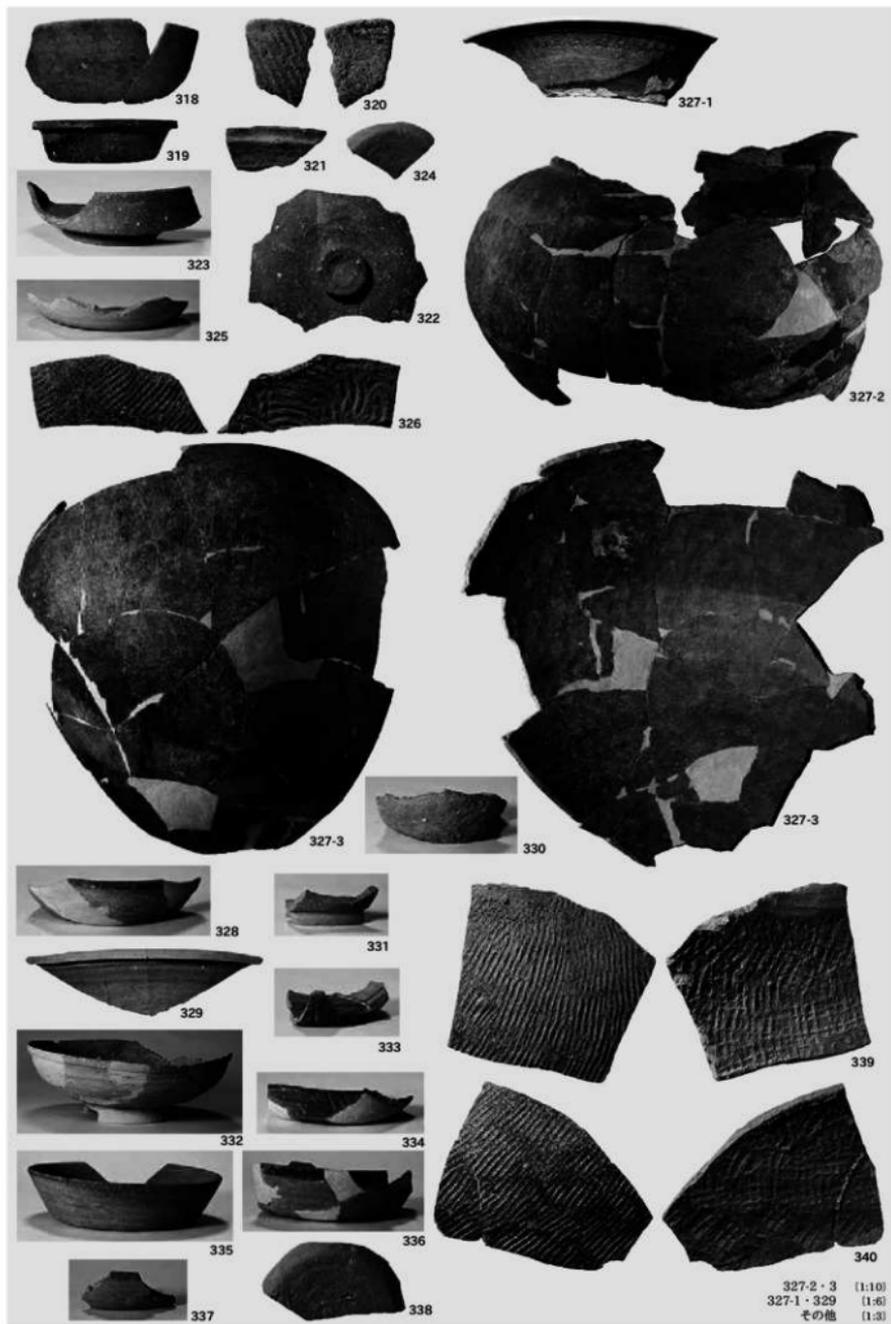


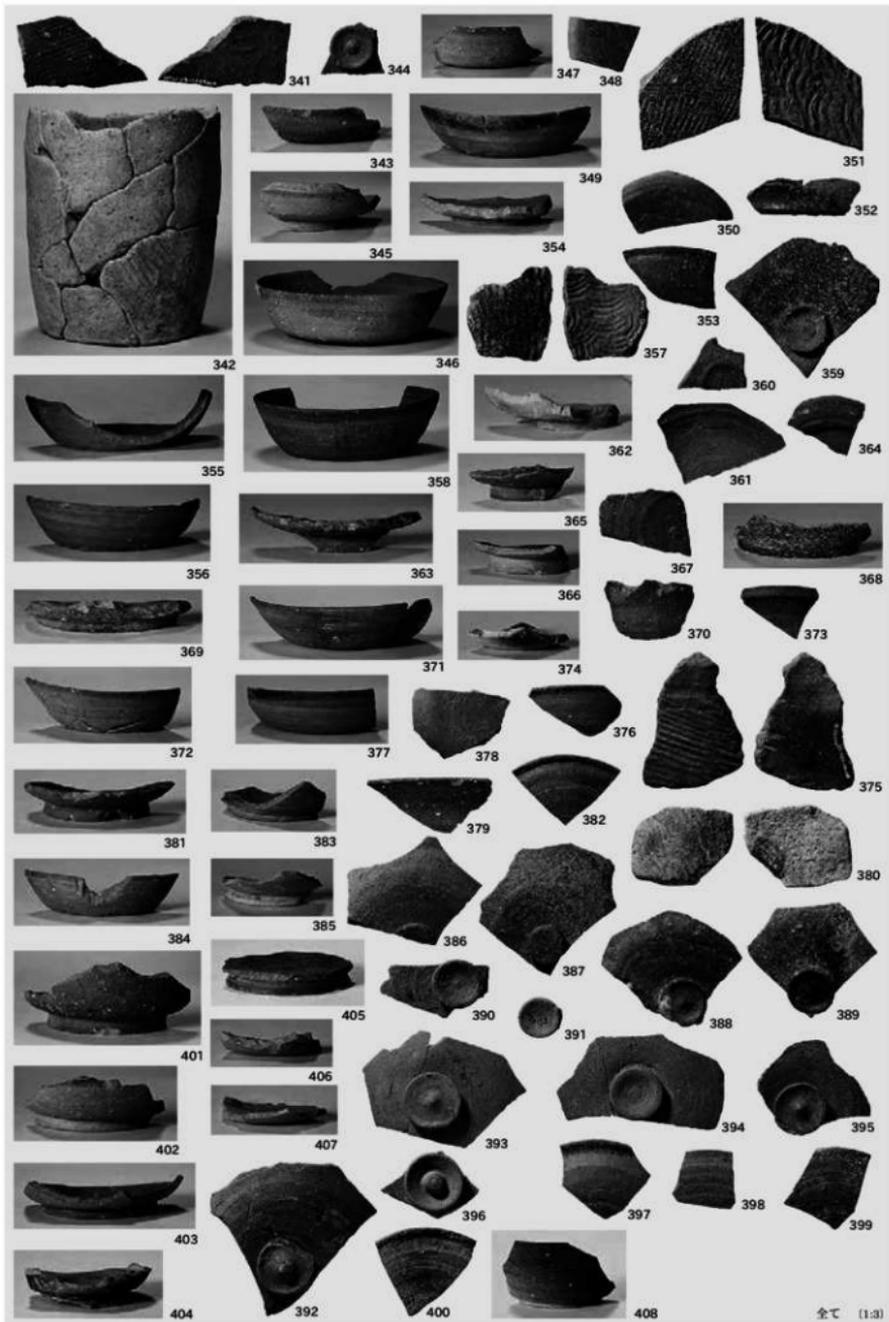
200-211-212 (1:4)
 その他 (1:30)
 215 (1:2)
 209-210 (1:1)



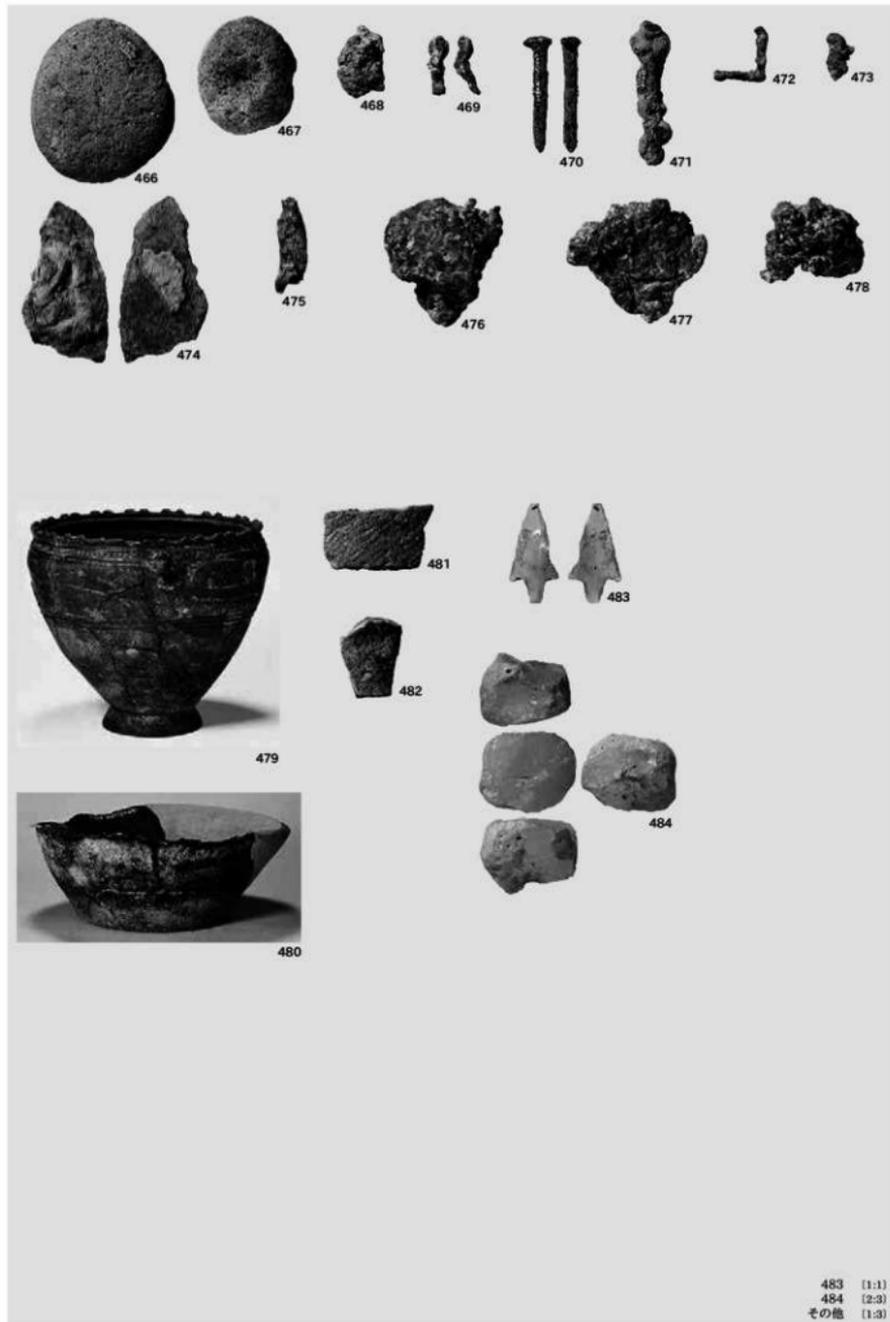












報告書抄録

ふりがな	やまぐちいせきに だいに・さんじちようさ						
書名	山口遺跡Ⅱ 第2・3次調査						
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書						
巻次	XVI						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第286集						
編著者名	石川智紀・荒川隆史(以上、埋蔵事業団)、村上章久(株式会社帆風組)、金内 元・秋山泰利(以上、株式会社ノガミ)、伊藤 茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・藤根 久・小林克也・竹原弘展・森 将志・米田恭子(以上、株式会社パレオ・ラボ)、千葉博俊・斉藤崇人・芝口 恰・高橋 敦(以上、パリオ・サーヴェイ株式会社)						
編集機関	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2020(令和2)年3月19日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
山口遺跡	新潟県阿賀野市 山口字城ヶ窪	15223 399	37° 50′ 02″	139° 12′ 02″	20100413～20101116 20130422～20131227	7,000 9,652	一般国道49号 阿賀野バイパス 建設
ふりがな 所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
山口遺跡	散布地	縄文時代晩期	土器集中1か所		縄文土器、石器(石鏃、石核)		
	散布地	弥生時代前期	竪穴建物1棟		弥生土器		
	集落	古代(9世紀前半)	竪穴建物2棟、掘立柱建物32棟、櫓1列、材木列塚1基、井戸19基、土坑70基、焼土遺構7基、性格不明遺構6基(カマド伏遺構1基含む)、溝35条、ピット944基(掘立柱建物・櫓の柱穴含む)		須恵器、土師器、灰軸陶器、唐三彩、土製品、石製品、金属製品、木製品		県内初例となる材木列塚を検出。また県内初の唐三彩が出土。
	集落	中世(13世紀後半～15世紀)	掘立柱建物15棟、井戸24基、土坑13基、溜池伏遺構1基、性格不明遺構4基、溝41条、ピット906基(掘立柱建物の柱穴含む)		土師質土器、瀬戸・美濃焼、珠洲焼、白磁、青磁、瓦器、石製品、金属製品、木製品		井戸から和鏡(銅鏡式鏡)1点出土。
要約	山口遺跡は、阿賀野川右岸の自然堤防上に立地する。現標高約6～7mである。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の遺構・遺物を検出したが、主体となるのは古代と中世である。古代(平安時代、9世紀前半主体)の頃は、地方の有力者や官人の関与が想定される。総柱建物を中心とした建物群は、穀類の保管に関係した倉庫群の可能性もある。また県内初例となる材木列塚を検出した。遺物では県内初出土となる唐三彩が注目される。遺跡使に関係する人物によってもたらされた可能性が高い。中世(13世紀後半～14世紀前半)の頃は一般の集落と考えられるが、集落の境を把握することができ、居住域を中心とした低地における土地利用のあり方をうかがうことができる。						

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第286集
一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書XVI
山口遺跡Ⅱ 第2・3次調査

2020(令和2)年3月18日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
2020(令和2)年3月19日発行 〒950-8570 新潟県新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986
印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321